
ACE＋リリカルなのはpart 3 the final ～ 3つの欲望と 3人目の鍵～

黒仮面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ACE+リリカルなのはpart3 the final 3つの欲望と3人目の鍵

【Nコード】

N1249J

【作者名】

黒仮面

【あらすじ】

ACE+リリカルなのはシリーズ遂に最終章。フェイト、ベルクト、そして他作品の多くのキャラをも巻き込んだ、かつてないほどの混乱が幕を開ける…※本作登場のキャラ達は、基準がACEという形で扱うので、原作との違いが発生する事をご了承下さい。

第1話（前書き）

というわけで始まりますStrikerS編

第1話からかなりカオスな展開になっているので

少し覚悟してお読み下さい：

※本作登場のACE側の作品一覧

- 機動戦士ガンダム 逆襲のシャア
- 新機動戦記ガンダムW Endless Waltz
- ブレンパワード
- 機甲戦記ドラグナー
- 機動新世紀ガンダムX
- オーバーマン キングゲイナー
- 交響詩篇エウレカセブン
- リーンの翼

※2／8 ACE側の設定をいろいろ間違えていたので修正

第1話

一統一暦61年、セシリア諸島近くに聳え立つ巨大ドームの前にて。

「向こうの世界に行くのも久しぶりだね」

「そうね…なのはさん達は元気かしら…」

「はやてやヴィータも…無事にやってるかな？」

「まあ、シグナム達がいるなら心配は無いでしょ」

そのドームの入り口の前に、バレル、フェイ、タック、マリナ

そしてベルクトがそれぞれの思いの下に集まっていた。

●
ここで、あの後からの事の運びを説明しておく。

ゲートを通過し結界領域内を抜けた後、ベルクト達とリンディ、クロノは

すぐさまUC Eに連絡を入れ、自分達の無事を報告。

此度の事件、所謂バルドナ・ドライブ近辺における失踪事件の初の帰還者であった故に、5人はすぐさまUC E本部に呼び出される。

そして、ベルクト達7人とUC Eのミスマル指令とその他幹部を含めた緊急会議にて

今回の件についての詳しい説明が、リンディとクロノから話される

事になった。

バルドナ・ドライブがもたらした時空の歪みの可能性について：

それによって巻き込まれたとされるバレル以下5人の人間：

魔法と魔導師、時空管理局の存在について：

闇の書がもたらした新たなゲートと、それに対する対策：

初めは半信半疑で話を聞いていたUC E幹部達も、リンディとクロノが

実際に見せる魔法の存在、そこに裏づけされる多数の証拠類

そして、無事に帰還したバレル達が話すこれまでの経緯などを踏まえると。

あまりに荒唐無稽な話とはいえ、信じざるを得ないのであった。

そして次に言及したのが、ベルクトの処遇についてだ。

統一暦世界、つまりバレル達の地球の人間からしてみれば、彼は紛れも無い大犯罪者である。

その会議の際に投げかけられた言葉も、それは酷く悪辣な物であった。

会議の際、バレルとフェイは心配そうにベルクトの様子を伺っていたが。

ベルクトは固い表情を崩すことなく幹部達とやり取りをし

そして、責任は全て自分にあり、罪を償いたいからこそ姿を晒したと、胸の内を明かした。

その後リンディから語られた、PT事件、闇の書事件における彼の活躍ぶり

それに裏づけされる証拠の類、その場にいたバレルやフェイの説得そして何より、本人から垣間見れる猛省の態度を汲み取り

ミスマル司令は、死罪以外の形での処罰を検討するとその場で言い切ったのだ。

当然他の幹部達は反対していたが、司令のゴリ押しによってその意見は遮られる運びになった。

司令は「本当に償いたいという気持ちがあるなら：その後の行動で確かめさせてもらう」

そう一言言って、その会議でのベルクトの話をそこで閉じた。

ベルクトは心から感激し、司令に向かって何度も頭を下げたという。

その他にもいろいろな事がその会議で話し合われたのだが残念だがここでは割愛させていただく。

○

フエイは隣にいるベルクトに向かってニヤニヤ顔で話しかける。

「ベルクト、あなたも久しぶりだからね、興奮してるんじゃないかしら？」

「…別にいつもと変わらんさ…会って、普段どおりに話すだけだ…」
ベルクトはそんな彼女に対して、いたって冷静な態度で答える。



その後幾度もの会議を経て決定したのが、ベルクトのUCEへの監視付きの従軍である。

曰く、生きて一生をかけて罪を償いたいというのなら、実際にそうさせてもらうという事で

ベルクトに監視を付けた上で、無期限の軍への従事を命じたのだ。本当に反省しているかどうかは、その間の行いで判断するということでもある。

これまた彼の罪を考えれば、これはかなり恩情ある話だと言える。実はそれに関してバレルが、高官である父親に必死に説得をし、そういう運びになるようにある程度の根回しをしてもらったなんていう裏事情もあるが…

それにUCE側が注目したのは、ベルクトの機動兵器の操縦センスについてである。

並行世界で独自のチューニングを施していたとはいえ
扱いの難しいアークシリーズを自分の手足のように扱っていた腕を
見込まれて
危険な賭けではあるが、優秀な人材を埋もれさせたくないという
そんな感じの判断もあったのである。

そういうわけでベルクトは、バレルやフェイ達と一緒に
UCEで共に働く日々を送る事になったのである。

○

(フェイト……)

冷静な態度で対応したとはいえ、やはり本心ではベルクトも
自分の大切な……自分の恋人たるフェイトとの再会が待ち遠しかった。

そして5人は扉の前に行き、先頭のベルクトが受付にIDカードを
見せる。

「認証番号……UCE機動兵器部隊及び、特務部隊所属のベルクト
だ……」

「………確かに確認しました、中へどうぞ」
そう言って受付の職員はパネルを操作し、巨大な入り口の扉を開く。
ベルクト達5人はそこを通過して、ドームの中へと入っていった。

●
その後の会議で決定したのが、ゲートを隠蔽する為の巨大ドームの建設である。

リンディはUCEの人間に、魔法は本来このような世界の一般人には関知されると面倒な物であり、それを隠す為の施設の重要性を説いた。

しかし、魔法の事に関する知識が皆無なこっちの世界の人間にしてみれば

そんな事を言われてもちんぷんかんぷんなのである。

そこでリンディは、施設の建設にかかる費用、人材などの負担を全て管理局側で持つのと引き換えに、ある交換条件を持ちかけていた。ベルクト達以下5人の、可能な範囲での管理局での従事である。

実を言うとベルクト達の魔導師としての有用性は管理局側としてみれば非常に貴重な物であった。

第97管理外世界にて猛威を振るったなのは、フェイトらと互角に渡り合える実力

つまり、ランクで言えばAA、もしくはAAAに匹敵するのである。（リリカルなのは本編にて、A's編時点でののはのランクは既にAAA相当であった）

武装局員の不足に悩む管理局としては、とても手放したくない存在故に

リンディはこのような取り引きを持ちかけたのである。

これに関してはUCEは、魔法や管理局に関する話を十分に聞いていたし

何より、他の世界と繋がっているなんて事態を隠蔽する方法も皆無であったので

兵5人で済むのならと、意外とアツサリその条件を聞き入れた。

管理局側としても、限定的とはいえ優秀な人材の確保が出来たしタックとマリナの2人に関しては、闇の書事件の保護観察の事もあったので

それに関する手間が省けて、とてもメリットのある事の運びになったのだ。

そんなこんなで、なのは側とバレル側の地球を行ったり来たりな日々が1年程続いていたのである。

○

ベルクト達は暫く廊下を歩いた後、再び巨大な扉を一枚開ける。その中にあったのは開けた空間と、その上空に浮かぶ黒い渦だ。

因みにこのドームは、魔力資質を持たない人間には入れない仕組みになっており

ドームの至る所にそうなるような結界の発生装置が仕込まれている。表向きには、新エネルギー開発の為の隔離研究施設と称しており中で働いているのは全て、時空管理局の人間である。

そして今日12月24日、闇の書事件終結から1年が経ったのを切欠に

なのは達の世界に皆が集まる事になっていたのだ。

バレル達はここ最近、管理局に呼び出される事は無く、UCEでの軍務をこなしていた為

なのは達と顔を会わせるのは約2ヶ月ぶりの事になる。

ベルクト達5人は、それぞれのデバイスを起動し、バリアジャケットを纏っていく。

「魔法を使うのは2ヶ月振りか：腕がなまってなきやいいけど」

「あら？バレルはこっちでは使っていないの？、私は暇を見て魔法の訓練もしてるわよ？」

「おいおい：フェイ、あの激務の中でよくそんな暇があったな：」
しれっと答えるフェイに対して、バレルが呆れた感じの口調で言った。

実際、UCEでの軍務と管理局への従事で板挟みであったので周りに関知されてはいけないこっちの世界で魔法を使う暇なんて殆

ど無い。

なのに、一体どこにそんな時間があつたやら…と、そんな事を考えていた。

「カートリッジシステムを取り入れてから、戦闘の幅もうんと広がったからな…」

「本当よね…シグナムやヴィータがあれだけ強いものにも領けたもの…」

互いの武装を見やりながら、穏やかな口調でタックとマリナが話合う。

この1年間の管理局の従事のために、ベルクト達のデバイスも時間の許す限りで各々方で改良が施されていた。

その内の1種が、ガンアークとバスターアークに取り入れられたベルカ式カートリッジシステムであつた。

（2ヶ月か…話したい事も…沢山あるからな…）

ベルクトもこの1年間で変わった己のデバイスを見ながら静かに目を閉じ、フェイトへの思いをはせていた。

そんな穏やかな空気が流れていたその時であつた。

『緊急事態発生！緊急事態発生！施設内の人間は直ちに避難してください！！』

突如、施設内に緊急のアラームが鳴り響き、赤いランプが点灯する。

「な、何だ！？何が起きているんだ！」

突然の事態に、バレルは慌てふためき辺りを見渡す。

「緊急事態…この施設でか？」

「何かトラブルでもあったのかしら…」

バレル程ではないにしろ、タックとマリナも驚きを浮かべていた。

と、次の瞬間

「なっ……!!」

「これは……バインド!？」

突如、5人の体は黒い巨大なリングで拘束されてしまう。
あまりの事態に5人は混乱し始める。すると

「ッ……あれは……」

フェイが苦しげに声を漏らす、5人の前に突然、黒いフルフェイスヘルメットを被り

全身黒尽くめのバリアジャケットを纏った魔導師が現れたからだ。

(!!……コイツ……)

突如、ベルクトは背中に何か薄ら寒い物を感じ取る。

自分達にバインドをかけたのは十中八九目の前の男で間違いない。

だが…その男の纏っている空気はあまりにも異質であった。

悪意とはまた違うどこか無邪気な感じ…されど、それはあまりにも膨大な力…

よくわからないが、そんな事を感じ取っていた。

「……BB……」

すると、今まで黙りこくっていたメットの男が一言ポツリと呟く。

「何だ…それはどういう意味だ…お前は…」

「……今はそれだけ覚えてればいい……それが……俺だ」

苦しげに言うベルクトの言葉には答えず、淡々とメットの男は呟いていく。

そして、メットの男は両腕を前に出し、魔力を集中していく。

彼の足下に黒い魔法陣が展開し、両腕の間にどす黒い光が宿っていく。

「ぐうっ……これは……!!」

「私達を吸い込んで……!!?」

身動きの取れぬままバレルとフェイが苦しげに呟く。

メットの男は更に魔力を込め、黒い光を肥大化していく。そして

「ぐうあああああ!!!!」

「きゃあああああ!!!!」

その光の中に、ベルクト達5人を残らず吸い込ませていき、彼等の姿を消滅させた。

ベルクト達の姿が消えた後、メットの男はどこか軽い感じで呟く。

「……ドクター達には叱られるだろうけど……まあ、何とかなるかな俺はやっぱりあっちで遊びたいし……」

そう言っただけで男は両腕を下に降ろし、再び魔力を集中していく。

すると、ドームの上空に黒い巨大な魔法陣が3つ現れた。

「こっちの連中に知られると面倒だしね……ここは、もう閉じてしまおうか……」

そう呟いたと同時に、3つの魔法陣から巨大な閃光がドームに向かって降り注いだ……

……統一暦61年、後に第二次セシリアの悲劇と呼ばれる事件の一部始終である。

尚この事件において、特務部隊所属のバレル・オーランド少尉

フェイ・ロシユナテ中尉

タック・ケプフォード中尉

マリナ・カーソン少尉

ベルクト曹長

以上の5名が行方不明となっている…

＊

「嘘……………」

第97管理外世界の地球、海鳴市海上に建てられたドーム付近にてフェイトは顔面蒼白でガタガタと震えていた。

「すまない…僕が駆けつけた時にはもう…」

側にいたクロノが本当に申し訳無さそうに呟く。

彼が海鳴市側のドームから緊急通信を受け取って現場に駆けつけた時には

ドームは既に、見るも無残な姿に変わっていたのだ。

その時いた職員達も全滅…ドームはただの瓦礫の山と化していた。

そして何よりも重大な事実…それは、ゲートの消失である。

「あのゲートは消そうと思って消せるような物じゃない…
加えて、ドームをここまで破壊した事を加えれば…」

今回の事件に関わっているのは…とてつもなく強大な存在になる…
今回の事件の重大性をクロノが冷静な口調で語っていく。
そんな彼に、フェイトがガタガタと震えながら尋ねる。

「ね、ねえ…ベル…ベルクトは…ベルクトは…どうなって………」

心に思い描く最悪の事態…その所為でフェイトは上手く言葉を発することが出来ない。

そんな彼女の言葉に対するクロノの返答は

「……………」

俯いたままの沈黙であつた。

それが何を意味するかを悟り、フェイトは頭を抱え込んで項垂れる。

それは…ベルクト達と…もう…会えない事…

「そんな…！バレルさん…フェイさん…」

側にいたなのはもその意味を察し、目を見開いて震える声で言う。

「嘘だ…こんな…だって…やくそ…！約束…して…！！」

項垂れたままフェイトは涙を流して、ぽつりぽつりと呟く。

「嘘だあああああ！！！！！！」

遥か上空を見上げて、フェイトは叫ぶ。

その声は思い人に届くことは無く…海鳴市の空に虚しく響くのであった…

＊

そして少し時が流れ…新暦67年、とある次元世界にて。

雪が積もり、辺りには炎と煙が舞い、何かの鉄片が散らばっている。その周辺に赤い液体…血が至る所に散らばっている。

「なのは！なのはあっ！！おい！しっかりしろ！！」

その中心でヴィータが、涙ながらに必死に呼びかけている。

そんな彼女に抱き抱えられていたのは…血塗れになった白い魔導師…高町なのはであった。

「素晴らしい…あの白い魔導師…管理局のエースをいとも簡単に倒せるとは…」

「そうかね…私は当然の結果だと思うが…どんなに優秀な人間であろうと…」

不意をついてしまえば…無力化するのとは容易いものだよ……」

そんなヴィータとなのはを見下ろすようにして、真っ白い仮面を顔につけ

白衣を纏った2人の男が空中に浮かんでいた。

因みに片方の男の後頭部からは、ポニーテールに結い上げた長い髪がこぼれていた。

「いやいや：これで、あの兵器の有用性が示せたじゃないですか：やはり彼は素晴らしい：これだけの兵器が量産出来れば管理局なぞ……」

「まあ：性格に問題はあるんだがね……」

ポニーテールの男は感極まった様に話し、対象的にもう1人の男はどこか冷めた感じで話していた。

ふと、もう1人の方がポニーテールの男に尋ねる。

「そう言えば：君の研究の方ははかどっているのかね？」

「ええ勿論ですとも：ジェイルの技術提供は実に役立っていますよ……後3年もすれば：1人目が稼働させられます」

ポニーテールの男は興奮を隠しきれない様に話していく。

そんな彼の様子を見て、もう1人の男はため息を吐く。

「全く：君もジェイルも悪趣味なんだ：もう少し現実的な研究をしたらどうかね……？」

「いやいや：これ程素晴らしい研究は他に無いのですから……」

やはり……新たな命を生み出せるのは神と人間だけということですよ……」

しかし、ポニーテールの男は興奮が冷める事無くそんな事を口走っていく。

すると、辺りに段々と管理局の人間が集まってくる。

そんな様子を見て、もう1人の方が言った。

「……そろそろ引き上げ時だな……」

「そうですね：これだけの結果が見ればもう十分ですから……」
そう呟いて2人の仮面の男は姿を消した……

＊

新暦70年、ミッドチルダ郊外のとある都市の地下深く
何かの研究施設の様なその部屋で1人の男が一心不乱にパネルを操
作していた。

そんな時に、1人の女性が部屋の中に入ってくる。

「失礼します…博士、新しいデータをお持ちしました」

「……ありがとうマリエル君、そのデスクに置いといてくれたま
え……」

そう言っただけでマリエルは持ってきた紙の束を近くのデスクの上
に置く。

パネルを操作する男—バルクホルツは振り向く事無くマリエルに言
った。

「どうですか…その後彼女達は……」

「はい…なのはちゃんもフェイトちゃんもはやてちゃんも…今は元
気に活動していますよ……」

「そうですか…安心しましたよ…あれだけの不幸が重なりましたか
らね……」

マリエルの言葉を聞いて、安心したようにバルクホルツは呟き
ふと、パネル操作を止めてマリエルの方に振り向く。

「マリエル君…あなたにも本当に申し訳なく思っています…」

こんな…私の自己本位のような研究に何年も付き合ってくれて…」
すると、それを聞いてマリエルは首を横に振り、左手を胸の前に持ってくる。

「大丈夫ですよ…私は、デイル博士の事を尊敬していて…
それで、あなたについていているんですから…これは私自身の思いなんです

だから…博士が気に病む事なんてないですよ…」

「そうですか…そう言ってくれると私も嬉しいですよ……」

マリエルの言葉を聞いて、バルクホルツは表情を和らげた。

「ですから…絶対に、蘇らせてあげましょうね…」

「はい……はやてちゃんの為にも…私は、償わなくてはいけないのですから…」

そう呟く2人の視線の先には、培養液に漬された紅く光る球体があった。

＊

新暦73年、とある次元世界

辺り一面砂漠の世界を1人の男が歩いていた。

「ッ………」

男はパリッとした整った顔立ちで、どこぞの軍服のような格調高い服を纏っていたが

それは至る所がボロボロで、呼吸使いも大分荒くなっていた。

「グッ……………」

男は遂に、うつ伏せに倒れこんでしまう。

その時地中から巨大な蛇が現れ、男に襲いかかろうとしていた。

（こんなこともわからぬ場所です…私は死ぬというのか……）

男は自分の最期を悟っていた。

だが次の瞬間、蛇の体は真つ二つに両断される。

「な…………何が起こった……………」

男は苦しげに顔を上げる。すると、蛇の近くに焦げ茶色のコートを纏い

巨大な槍を持った屈強な男性と、ピンク髪の冷たい雰囲気少女が降り立つ。

男が呆然としながらその2人を見つめていると

「ほう…まさか、君がこんな場所にいるとは思わなかったよ…」

背後からそんな声が響き、男は後ろに居る人物を見上げ、そして目を見開く。

「……………その人…知ってるの…？」

「ああ…………昔一緒に戦った、ちょっとした戦友だよ…」

その様子を見ていたピンク髪の少女が、倒れた男の後ろに立っていたもう1人の仲間――

綺麗に整えられた金髪に倒れている男と同じ整った顔立ちで、赤を基調にした服を着た男に尋ねた。

「何故…何故お前がここに……………」

倒れている男が擦れた声で呟く。それに対して金髪の男が笑みを浮

かべながら言った。

「久しぶりだね……ギガノスの青き鷹よ……」

＊

新暦74年、また違う次元世界にて

うっそうと木々が生い茂るジャングルのある開けた場所に
廃墟と化した研究施設の様な建物があった。

その施設のいたる所から煙が立ち昇っており、辺りには金属片が散らばっていた

（もぬけのからだだったか…）

そんな施設の中央に、青と白を基調にしたバリアジャケットを纏い
巨大な二丁のライフルを備え、背中に4枚の巨大な翼を生やした少年が立っていた。

（だがこの機構…やはりこれは13番目の……）

どこか冷たい感じを漂わせるその少年は、散らばっていた金属片を
手に取り

それをまじまじと観察する。

（……一度戻って、詳しく調べ直したほうがよさそうだな…）

少年は金属片を投げ捨て、通信を入れる。

「プリベントー01よりロンド・ベルへ…目標施設の調査を完了…
途中ガジェットとの戦闘があるもこれを撃墜…施設から詳しい情報は発見出来ず…」

そう言って少年は、背中の翼を広げて飛び立っていった。

＊

同年、時空管理局地上本部のとある一室にて

高級ホテルを思わせる作りのその部屋の窓際で、1人の男が空を見上げてたそがれていた。

そんな時に部屋の扉が開き、男がもう1人現れ、座っていた男性と向き合うように座る。

（スカリエッティから報告があつたよ…検証は上手くいったってさ…）

（そうか…ご苦労だったな……）

互いに薄ら笑いを浮かべながら、念話…いや、それとは似て非なる能力でやり取りをする。

（……あれからもう1年が経つんだね……）

（そうだ……時の流れというのは早いものだ……）

最初に部屋にいた男が、近くの棚からボトルと2つのグラスを取り出す。

（結局……どんな世界でも人間は、力を求めて愚かな事を繰り返すんだね…）

（そう……だから、正しき指導者に導かれなければならないのだ…）

最初にいた男がグラスにワインを注いでいく。そして2人の男はグラスを手取る。

（そしてこの世界を導く者…それはオールドタイプでもニュータイプでもない…）

（ましてやレジアスの様な俗物や…魔法という人外の力を持つ者でもない…）

そう…真にこの世界を導くべきなのは…（…）

そこまで言って2人は互いのグラスをぶつける。

チンツと涼しげな音が響き、2人の男はワインを一気に飲み干し、そして更に言うのであった。

（生まれ変わった新たな…）

（我らの世界に栄光あれ…）

＊

同年、薄暗い洞窟の様な通路を、ピンク髪をツインテールに束ね濃い紫を貴重にした暖かそうな服装をした少女が歩いていた。

「入るよ…」

少女が扉を開け部屋に入る。その部屋の中には入った少女と同じピンク髪で

—こちらは束ねる事無く、金の髪止めで整えている一白を基調にし

所々に赤いラインの入った薄手の服を着た少女が膝を抱えて蹲っていた。

「何の用よ……」

「ドクターが用があるから来てくれってさ……」

「……先に行ってて頂戴……今はそんな気分じゃないわ……」

顔を上げる事無く、髪止めの少女は冷たく言い放つ。

そんな彼女を見て、ツインテールの少女は　ため息を吐いた後にこう言う。

「アンタもさあ……いい加減に割り切りなよ……？　そうやってイジイジしてたってさ……」

それで帰れるのが早くなるわけでもないじゃん？」

すると、それを聞いて髪止めの少女は顔を上げ、ツインテールの少女をキッと睨みつける。

「うるっさいわね……！！　アンタはいいわよ……！！　ただあの趣味悪い女達と遊んでればいいんだから……！！」

こっちは毎日の様にあの変態茶髪メガネに体弄りまわされてんのよ……！！」

涙ながらに髪止めの少女は怒鳴り散らす。それを聞いたツインテールの少女は

再びため息吐き、気だるげな口調で言った。

「そう言ってもさあ……帰れる手段知ってそうなのはアイツら以外いないじゃん？」

アタシだって嫌なんだよ……毎日毎日、退屈な戦いやらされてさ……

キングと遊んでた時の方がよっぽど楽しかったよ……」

そう言って扉の方に歩いていき、出際で更にこう言った。

「けど……こっちで生き残れる術……他にあるの？　だったら……あいつらに従うしかないでしょ……」

そう言ってツインテールの少女は部屋を後にした。

「……………ううっ……………ひぐっ……………」

1人になった後、髪止めの少女は顔を埋めてすすり泣く。

「ねえ…どこなの…あなたは今どこにいるの……………」

本来なら楽しい未来が待ってたはずなのだ、なのにどういうわけかこんなわけのわからぬ場所に飛ばされ、毎日毎日怪しい実験に付き合わされる日々…

少女の精神はかなり磨り減っていた。

「助けてよ……………あの時みたいにな…私を救ってよ……………ドミニク……………」

少女はどうしようもない今の自分の状況を呪い、自分の思い人に救いを求めるのであった…

*

そして新暦75年：

本来は決して交わる事ない：幾多の人間達の思いを巻き込み：
かつてないほどの混乱が幕を開けようとしていたのであった……

第1話（後書き）

え…？カオスすぎてついていけない？そう言わないで下さい…
10年の時をどう超えさせるかを考えた結果がこれなんです…
つい最近ベルクトとフェイトのあんなラブシーンを書いたばかりなので

書いててちょっと自己嫌悪気味だったりします…

ベルクトとフェイトの仲を引き裂いた謎の男BB

なのはの重大故に関わっているとされるとされる2人の謎の仮面の男

そして様々な場面で顔を見せる版權キャラ達

果たしてこれから物語にどのように関わっていくのか？

そして、ベルクト達の行方は？

以前言ったようにこれから忙しくなるので

次の更新には大分時間がかかりそうです

そんな部分にも期待しながら、気長に待っていてくれたら幸いです…

それではまた

第2話（前書き）

物語は新暦75年、ミッドチルダへと移行する。

そこに現れる新たな異邦人とは…？

第2話

「ふう……………」

とある薄暗い部屋の中、その中央に位置する小型の円形装置の上に先程のフルフェイスヘルメットの男が立っていた。

「やっぱ時間跳躍は恐ろしく魔力を喰うなあ…しばらくはカプセルベットで休養かな……………」

左肩をポンポンと叩きながら気だるげな口調でメットの男はそう言い、部屋の扉を空ける。

「おっ、ビーちゃんもう帰ってきたの？」

「ああセデイス姉…ってうわ…どうしたんだよそれ…」

メットの男が廊下に出た時、丁度部屋の扉の近くにいた金髪の女性—セデイスと呼ばれた女性が

彼に対して親しげな感じに声をかけてくる。

そしてセデイスの姿を見たメットの男は驚きを浮かべ声を漏らす。彼女は目と口の周りを除いて、体中の至る所を包帯で覆っていたからだ。

「いやあ…何かパパが私の体をビーちゃんや皆と同じ最新式にチューニングしたから

新しい外皮が定着するまで、この包帯で体を覆っておけって」

朗らかな笑みを浮かべながらセデイスは答える。

それを聞いたメットの男は彼女の様子をまじまじと見ながら言う。
「って言ってもなあ：これじゃまんまミイラ女じゃん：」

その辺の事はお構いなしだからなあ親父は：」

「まあ、パパの変人振りは今に始まった事じゃあないしね」

それにアルさんやジェイルさんみたいな人も近くににいるからね」

「類は友を呼ぶって事なのかな：」

「呼ばれたのはパパとアルさんみたいだけだね」

互いに軽いノリでそんな事をメットの男とセデイスは話していく。

「そういえばさあ：ビーちゃん今日は何しに行ってたの？」

「別に何時もと同じだよ：退屈しのぎの玩具探しさ」

唐突に聞いてきたセデイスに対して、メットの男は何てことないという風に言った。

そしてそれに答えた後、メットの男はスタスタと歩いていく。

（さあて：何処に飛んだかは知らないけど：出来るなら俺と戦うシチュエーションがいいな：

楽しみだなあ：本気で戦^やりあえる日が実に待ち遠しいや：）

メットの男は歩きながらそんな事を考えていた。

＊

一ミッドチルダのとある山岳丘陵地帯、その上空を互いに少し距離を離しながら

機動六課スターズ分隊隊長一高町なのはと、

ライトニング分隊隊長のフェイト・T・ハラオウンが高速で移動していた。

丘陵地帯を移動中の山岳リニアレール

その内部でレリックと思わしき物体が発見され

その影響でレリックを狙う謎の無人兵器一ガジェットドローンによって

リニアレールの制御を奪われるという事件が発生。

その解決の為、なのはとフェイトが現場指揮の為に

機動六課の新人フォワード部隊4人と共に現場に赴いていたのだ。

（同じ空は久しぶりだねフェイトちゃん）

（うん：フォワードの皆には、ちよつとハードな初出動になっちゃったけど…）

なのはの念話に対して、どこか釈然としない声色で返答するフェイト。

それを察してなのか、なのはは今度は心配そうに尋ねる。

（フェイトちゃん：その：大丈夫？）

（何が？）

（いや：その：あの時の事とか…）

明らかに尋ねづらいといった風に聞いてくるのはに対して、フェ

イトは目を閉じ

優しい声色で念話を返す。

（大丈夫だよなのは…私は信じるって決めたから…それにそんな事行ったらなのはの方だって…）

そこまで言ったところで2人の周辺に飛行型ガジェットが数機現れる。

なのはとフェイトはそれを確認して表情を引き締めなおし、迎撃態勢をとった。

（そう…落ち込んでなんかいられない…いつも言ってたから…裏切らないって…）

ガジェットを前にしてフェイトは、心内でそう呟いていた。

＊

ミッドチルダの街中、その路上を一台の車が高スピードで駆け抜けていく。

「隊舎には後数分足らずで到着する。現場にはデュオとカトルも向

かっている

余程の事がない限りは今回の事件は難なく解決できるだろう」

「おおきになトロワ。プリベンターの皆にまで迷惑かけて悪いとは思うんやけど……」

後部座席に座る女性一機動六課部隊長の八神はやてはにこやかな感じで言った。

「気にするな、この1年でカリムやはやてには随分と世話になったからな。

それに……争いの火種が広がるのを未然に防ぐのが俺達プリベンターの仕事でもある。」

車を運転するやたらとボリュームのある前髪の青年一トロワ・バー-tonは淡々とこう語った。

＊

「……………ここは……………」

なのはとフェイトが戦闘を行っている場所から少し離れた岩山の岩壁その上でベルクトが辺りを見渡していた。

（何がどうなっている……）

ベルクトは先程までの事を思い返す。

自分を含めた5人で海鳴市に移動しようと思ったら
突如現れたメットの男に拘束され、怪しげな光に吸収され
そして気を失い、気がついたらこの岩山の上にいたと…

しかし考えれば考えるほどわけがわからなくなってしまふ。
メットの男から感じられた気配は、何とも言えない不気味な物であった。

そんな人間が接点の全く無い自分達の前に現れ、こんなわけのわからぬ場所に一少なくとも

自分の記憶上では、海鳴市にこんな見晴らしのいい森林や岩山は存在しない—

そんな場所に飛ばされ、肝心のメットの男の姿も見当たらない。

ここがどこなのか？そもそも自分達の地球なのか、なのは達の地球なのか？

はたまた全く異なる異世界なのか？そして他の仲間はどうなったのか？

今のベルクトには疑問点が多すぎた。

そんな風にベルクトが顎に手を当て、大量の？マークを浮かべていると

「何だ……？」

ベルクトが顔を上げる。その視線の先には3機程の飛行機械がいた。そして、突如として飛行機械一ガジェットはベルクトに向かってレーザーを放つ。

ベルクトはそれを飛び上がってかわし、そしてデバイスを起動する。

「グレイブアーク、ファントムモード…セットアップ」

ベルクトが呟くと同時に、袖無しの簡易なジャケットと、紫のマントを纏い

小型のライフルとスケイルシールドが装備される。

「いきなり現れて何だかは知らんが…」

そう言いながらライフルの先端に魔力刃を形成させる。

「向かってくるなら…潰す…」

冷たい表情でそう呟くと同時に、ベルクトの姿が消滅する。

そして次の瞬間、ガジェットの周りに強い風が吹いたかと思うと

3機のガジェットは全て真つ二つに分断され爆散した。

「調整は上々だな…体への負担も全く無し…」

更に次の瞬間、爆煙の舞う空中に再びベルクトの姿が現れ、淡々とそんな事を語る。

そして別方向からまた別のガジェット達がベルクトに向かってきていた。

「全く…本当にわけがわからんな…」

ガジェットの姿を確認したベルクトは苦虫を噛み潰したような表情でそう呟く。

そして魔力刃を形成したライフルを構え、ガジェットの大群へ向かっていった。

＊

「……………さて、これはどういう事なんだフェイ？」

「……………私に聞かないでよ…」

ベルクトが飛行型ガジェットと戦闘を行っている真っ只中
バレルとフェイは混乱の真っ只中に居た。その理由は簡単である。

「こいつら……どう考えても味方ではないよな？」

「人が操ってるわけでもない……さしずめ自律型の無人兵器かしら……？」
「」

何だかうんざりしたような口調で2人はそんな事を言う。

……2人は事件現場のど真ん中、リニアレールの車内に飛ばされていた。
た。

で、中には当然大量のガジェットがいるわけであり
突如現れた2人に対応が遅れたものの、今は完全に敵意剥き出しなの
のだ。

カジェットが数機、2人に向かってレーザーを放つ。
2人はそれぞれ逆の方向に飛び退いてそれをかわす。

フェイは飛び退きざまに右手のライフルから魔力弾を放って迎撃を行なう。

しかし、魔力弾はガジェットに当たる直前で消滅してしまう。

「なっ…バリアでも持ってるのかしら？」

フェイは予想外のその光景に驚いて声を上げる。

「こんな有象無象の無人兵器が…いっちょまえに!!」

固い表情でそう怒鳴りながら、バレルは実体剣を現出させる。

「カートリッジロード！」

その言葉と共に実体剣に備え付いていたカートリッジがロードされる。

すると、実体剣は緑色のフレア光に包まれていった。

「うおおおお!!」

バレルはガジェットに向かって飛び上がり、実体剣を振り下ろす。

その攻撃は阻まれる事なくガジェットを貫き、それを破壊する。

その後、バレルはガジェット達から距離を取るべく後ろに高速で飛び下がる。

「2ヶ月のブランクはあったけど…これくらいなら何とか…」

そんな事を呟きつつ、バレルは実体剣を上にも構え、再びカートリッジロードを行なう。

すると剣の切っ先に青白色の光が収束していく。

「ソニックセイバー!!」

バレルが剣を振り下ろす。すると切っ先に収束していた光がカッター状になって放たれ、ガジェットの何体かを分断していった。

直後、別のガジェットがバレルに向かってレーザーを放つ。

それに気づいたバレルはすぐさま回避態勢を取ったが

その攻撃がバレルに当たる前に、フェイがシールドユニットを飛ばしバレルの前に魔力壁を作り、その攻撃を防いだ。

「バレル、大丈夫!？」

「すまないフェイ！」

攻撃を防いでくれたフェイに対してバレルは振り向いて礼を言う。それを確認したフェイは一瞬温和な笑みを浮かべるが、すぐに表情を引き締めなおす。

「上手くコントロールしないとね…」

そう言ってフェイは背部の翼パーツに付いていた残りのシールドユニットと

1年間の改良で新たに作りあげた装備一翼パーツについている4つの白い刃型のユニットを飛ばす。

残ったガジェット達が一斉にフェイに向かって砲撃を放つ。

しかしフェイは自分の周辺に浮かばせている6つのシールドユニットを

巧みに操作し、魔力壁をいくつも作ってその攻撃を完璧に防ぎきっていく。

「甘いわ…ブレードユニット!!」

フェイが叫ぶ。その声と同時に刃型のユニット一ブレードユニット

が行動を開始し
周辺にいたガジェット達を刺し貫いていった。

車両内のガジェットを全て破壊した後、フェイは計10個のユニットを収納していく。

「さて：これからどうしようかフェイ？」

実体剣を右肩に戻し、フェイに近寄りながらバレルが言う。

「わからないわ：とにかく今私達がどうい状況にいるかを把握しないと：」

固い表情を浮かべながらフェイが呟く。

自分達をここに飛ばしたメットの男や、突如襲ってきたガジェット達など

バレルとフェイには理解が追いつかない事が多すぎた。

わかっているのは自分達が今、電車の中らしき場所にいる事。

それも普通じゃない、何か事件的な臭いのする場所にいる事くらいだ。

と、2人がそんな事を考えていたその時。

ズドオオオオオオオン！！！！

凄まじい衝撃音と共に、突如として車両の天井が破壊された。

「な……なあっ……！！！」

あまりに突然の事態にバレルは驚いて尻餅をついてしまう。

フエイもバレル程ではないにしろ、目の前の光景に目を見開く。

すると穴の開いた天井から、青い髪のボーイッシュな少女が降りてきた。

「え、嘘！？人がいるなんて聞いてないのに……」

青髪の少女ースバル・ナカジマはバレル達の姿を見るなりこんな事を言う。

「スバル、どうしたの？」

するとその時、穴の開いた天井からもう1人、オレンジ髪のツインテールの少女が現れる。

「あつ、ティア！それが…車両の中に人が残ってたみたいで…」

「ええっ!？」

困惑気味に話すスバルに対して少女ーティアナ・ランスターも驚いたように声を上げる。

が、すぐに冷静に頭を働かせ、バレル達と周りの情景を見渡す。

(ガジェットが全部破壊されてる…それに…この人達の格好は…)

ティアナは目の前の2人をジッと見つめながら真剣な表情で聞いた。「私達は時空管理局機動六課の者です、あなた達は何者ですか？」

見ての通り今このリニアレールは大変危険な状態にあるんですが」「ティアナに対して、フェイも真剣な表情になって答える。

「…私はフェイ…フェイ・ロシユナンテよ…それでこっちでヘタレてるのが…」

「ヘタレてるとか言うなよ…僕はバレル・オーランドだ」

不満げな表情で立ち上がりながらバレルもまた、己の名を名乗る。

「えっ…バレル・オーランドにフェイ・ロシユナンテって…あの…」
バレル達の名前を聞いた途端、2人の態度が一変して驚いた感じになる。

そんな様子を見たフェイが疑問を感じ、2人に尋ねる。

「私達の事知ってるの？」

「そんな…凄い有名人ですよ!？PT事件や闇の書事件でなのは隊長やフェイト隊長と一緒に戦ってた異世界の戦士……」

魔法が全く存在しない世界から来たにも関わらず、当時AAAランクだった

隊長たちにも全く遅れを取らなかった…」

「スバル、落ち着いて…」

興奮して両腕を大げさに振り、まくし立てていくスバル
そんな彼女を見て、ティアナがそれを宥める。

「管理局：それに今なのは隊長って言ったわね…あなた達はなのはさんの事を知ってるの？」

そんな2人の事などお構いなしに再びフェイが質問する。

「知ってるも何も…なのは隊長は私達機動六課のスターズ分隊の隊長で

管理局内でも知る人ぞ知る、エースオブエース…これまた超有名人ですよ？」

未だに興奮が冷めぬまま、スバルが答える。

それを聞いてフェイは考え込む。

（何か辻褄が合わないわね…なのはさんが隊長？）

目の前の2人の少女、スバルとティアナから聞いた話を総合してみる。

管理局、PT事件、闇の書事件、なのは、フェイトなど聞き覚えのある単語はいくつもある。

が、自分達が最後に管理局で仕事をしていたのは2ヵ月前の事だ。自分の記憶が正しければなのははまだ10歳の少女である。

ましてや機動六課という名前も全く聞いたことが無い。

いくらなんでもたった2ヵ月の間に、新たな部隊を組織し

その隊長の座に10歳のなのはが就いているとはどう考えても不自然極まりない。

つまり…自分達はもしや…

何やら信じ難い事に直面しそうだとフェイが考えている中
今度はバレルが質問をした。

「なあ…さっきから聞いてて思ったんだが…今は一体何時なんだ？
俺達がいなくなってからそんなに経ってないと思うんだけど…」

「今は新暦75年、お2人がいなくなってからもう9年は経つって
隊長達は言っていましたけど…」

その質問を聞いてティアナがどこか不思議そうにそう答えた。

すると、場の空気が止まったかのようにバレルとフェイはポカンと
した表情になる。

「あ…あの…？」

戦っていた。

なのははガジェットから放たれる砲撃を縦横無尽に飛び回って回避し敵の攻撃の間を掻い潜りながら桃色の閃光を放ち、カジエツトを撃墜していく。

すかさず後方に回転して向きを変え、魔法陣を展開し、アクセルシユーターを放つ。

その魔力弾を操作して背後から迫っていたガジエツト達も瞬時に破壊していく。

「はああああ!!」

フェイトはバルディッシュを鎌状に変形、魔力刃を形成して向かってくるガジエツトを何体も切り裂いていく。

そして向きを変え、横から迫ってきたガジエツト達に向けてバルディッシュを構える。

「え……?」

だが、フェイトが次の行動に移る前にガジエツトは全て両断されて爆散する。

突然の事態にフェイトは困惑し、思わず声を上げる。

「つとと…その魔導師、大丈夫か？」

そして次の瞬間、その場にベルクトの姿が現れ、フェイトに向かってそんな事を言う。

「あ……………嘘……………」

「……………?」

フェイトはまるで信じられない物を見るかのように、目の前の男を見つめる。

忘れもしない9年前の事件、それ以来ずっと姿を見せていなかった自身の大切な…

「フェイトちゃん、一体どうし……………って……………嘘!？」

いきなり動きを止めたフェイトになのはが近づいてくる。

そしてなのはも、ベルクトの姿を確認して驚きの声を上げた。

「ベルクトさん!?!……………何で……………ここに……………」

「……………どうして俺の名を?」

思わずなのははベルクトの名を口にする。

ベルクトは見知らぬ女性に己の名を言われポカンとする。だが

(この格好……………どこかで……………)

ベルクトは目の前の2人をまじまじと観察する。

茶髪と金髪、白と黒、レイジングハートとバルディッシュ

そのあまりにも見覚えのある外見に、ベルクトは2人が誰なのか気づく。

「まさか……………なのはとフェイト……………なのか?」

恐る恐る尋ねたベルクトに対して、なのはがコクリと頷いて答える。
すぐ隣にいるフェイトは体をフルフルと震わせていたが

ベルクトが名前を呼んだその瞬間、目を見開き涙を流す。

「ベルクトー！！」

フェイトはこの9年間、ずっと抑えていた感情が爆発しベルクトに飛び掛って、彼の体を思い切り抱きしめた。

「会いたかった……会いたかったよ……ベルクトッ……！！！」

フェイトはベルクトの体に顔を埋めてすすり泣く。

「ちよっ……待て、何がどうなっている……」

だが、ベルクトは目の前の現実を理解が追いつかず呆然としてしまった。

＊

一方その頃

「新型……！！！」

リニアレールの8両目、そこで機動六課ライティング分隊のエリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ、その使役竜フリードリヒが

新型であるガジェット？型と戦闘を行っていた。

「フリード！ブラストフレア！！」

強風吹き荒れるリニアレールの屋根の上で、キャロはフリードに攻撃指令を出す。

フリードはそれに答え、ガジェットに向かって火球を放つ。

だが、ガジェットはそれをベルト状の大型アームで容易く跳ね返した。

「うおりゃあああ！！」

すかさずエリオが自身のデバイスーストラードを構え

ガジェットに向かって突撃し、それを振り下ろした。

「固い……！！」

しかし、ガジェットの堅牢な装甲によってダメージには至らない。

その隙にガジェットがAMFを発動し、エリオとキャロの魔法を封じ込める。

そしてアームを使ってストラードを掴み、エリオの動きを封じ込める。

「くっ……」

自身の武器ごと動きを封じられてしまい、エリオは焦り苦しげな表情を浮かべる。

「あ……あの！！」

「大丈夫、任せて！！」

その光景を上で見っていたキャロが心配そうに声を出す

エリオはガジェットと争いながらもそれに必死な感じで答える。

だが、ガジェットはストラードごとエリオを壁に放り投げ

更にそのアームをエリオに向かって叩きつける。

「うわあああ！！」

その重い一撃によってエリオは気を失ってしまう。

ガジェットはそのままアームでエリオを掴みあげる。

「あっ……！！」

それを見たキャロが目を見開く、そしてエリオはそのまま崖下に向かって放り投げられてしまう。

「エリオくーん!!」
キャラが落下していくエリオを見つめながら涙目で叫んだ。

だが次の瞬間、突如として空間の一部が妖しく歪む。

「おっとお…間一髪ってやつだったかな？」

そしてそこから現れた黒い巨大な翼を携えた三つ編みの青年が落下してきたエリオをキャッチし、抱き抱えながら軽い感じでそう呟く。

「あ……あれって……」

キャラはエリオが助かった事に安堵しつつも、突如として現れた謎の人物を目にして戸惑いを浮かべる。

その隙を突いてガジェットがアームをキャラに向かって飛ばす。
だが、そのアームは突如として飛んできた奇妙な形の刃によって分断される。

「大丈夫かい？」

そして上空から青紫のバリアジャケットとグレーのマントを纏った金髪の青年が
アームを分断し、そのまま車両の天井に突き刺さった刃－ショーテルを引き抜きながら

キャラに向かって優しい表情を向けながらそう言った。

「よお、こっちは無事に救出したぜ！」

すると、崖下の方からエリオを抱えた先程の三つ編みの青年がやって来て

金髪の青年に向かって言った。

「ありがとうございます、何とか間に合って良かったよ
デュオとデスサイズのおかげです」

「当たたり前よ！デバイスになっても相棒は相棒だからな！」

金髪の青年の言葉に、三つ編みの青年は胸を張って得意げに答えた。

「エリオ君、大丈夫！？」

「……あ、キャラ……僕は……」

キャラに抱き抱えられた状態でエリオは意識を取り戻す。

「目は覚めたかい？けど今は甘い空気に浸ってる余裕なんか無いぜ？」

三つ編みの青年がエリオとキャラに真剣な表情ながらも
やはりどこか軽い感じで言った。

「あの…あなた達は一体…」

「僕達はプリベンターのメンバーです」

「！！……プリベンター！？聖王教会直轄の諜報機関の…」

金髪の青年の答えに対して、エリオは驚きを浮かべてそう言う。

「というかよお…助けてやったんだから礼の1つくらい言ったらどうだ？」

「あ、すみません…ありがとうございます！」

腕を組みながら不満げに言った三つ編みの青年に対して、エリオは

慌ててそう答えた。

するとその時4人の背後から物音がし、ガジェットが外に出てくる。4人は一斉にそちらに向かって振り向き、表情を引き締めなおす。

「さてと…その2人、今から援護するぜ！」

三つ編みの青年が得意げにそう言っ、巨大な鎌一ビームシザースを現出させる

そして先端に魔力刃を形成し、それを構えた。

金髪の青年も先程の物に加えてもう一本ショーテルを取り出し、それを構えた。

「プリベントー02、デュオ・マックスウエル！」

「プリベントー04、カトル・ラバーバ・ウイナー…これより戦闘行動を開始します！！」

第2話（後書き）

えゝ遅れながらも明けましておめでとうございます。作者の黒仮面です。

というわけで版權キャラ第1号はガンダムWより
デュオ、トロワ、カトルの3人です。

（トロワはチョイ役だったけど…）

にしても版權キャラはACEキャラよりも基盤がしっかりしてるので
書くのに本当に気を使う…

何回読み直してもデュオやカトルが原作の雰囲気が出てるか不安になります…

キャラの一番の見せ場をデュオがかつさらってしまい

今更ながらちよつと後悔気味…

次回で埋め合わせる予定ではあるんですが…それも上手く書く余裕があるかどうか…

ってさつきからネガティブ全開だな。申し訳ない

再会したフェイトとベルクト

謎のオリキャラ、メットの男ことBBとセデイス

ベルクトやバレル達の新たな武装

六課に協力するプリベントー

まだ見ぬ版權キャラ達

そんな部分にも期待しながら読んで下さると嬉しいです。

初心者ながら今年も全力で書いていくので
読者の皆さん、今後もしよろしくお願いします。

第3話（前書き）

ベルクト「また随分と更新が遅れたみたいだが…何かあったのか？」
フェイト「えっとね…作者が愛用していたP S 2のメモリーカード
が故障して

極めに極めたA C E 2と3のデータがパーになって凹んじやったら
しくて…」

ベ「とても小説を書く心境ではなかったと…」
フ「うん…みたいだよ…」

リニアレールでの激しい戦い
そこに現れる意外な敵とは…？

第3話

「スターズF、5両目で、えーと…例の2名と接触！」

「スターズ01、ライトニング01、上空で同じく1名と接触！」

「ライトニングF並びにプリンター、8両目にて新型と交戦中！」
機動六課本部のモニタールーム、画面には現場の状況が事細かに映し出され

多数の局員達が慌しくパネルを操作しながら報告を続けていく。

「……全く、どうしたものかなこれは…」

そんな中、管理局の制服とは違う、ブルーを基調にした制服を纏ったクセっ毛の男が

空になっている部隊長の椅子の傍らで、腕を組みながら固い表情でこう呟く

（ヒイロから新しい報告があったばかりだというのに…）

やはり、俺達の世界と何らかの関係が生まれ始めているのか…？）

「アムロ一尉：一体どうすれば…？」

部隊長補佐のグリフィス・ロウランがクセっ毛の男一機動六課特別分隊

ロンド・ベル隊長、アムロ・レイ一等空尉に困惑気味に尋ねる。

部隊長たる八神はやて不在時には的確な指揮能力を発揮するこの男も

自分もよく知るかつての仲間3名の出現と、その仲間1名とライトニング01の現在の状況を目の当たりにして、どうすればいいかわからなくなっていたのだった。

しかし、そんなグリフィスとは対称的に、アムロは至って冷静に答える。

「…ライトニングFはプリベンターと共にカジェットの破壊を継続スターズFにはバレルとフェイに協力を持ちかけるように通達してくれ」

「…了解しました！」
グリフィスはそう言って真剣な表情に戻り、局員に指示を出し始める。

「さて…こういう場面に水を差すのはあまり気乗りしないんだが…」
そう言いながら近くにあった通信用パネルを操作し始めたその時

「ごめんなー！今、到着したよー！！」
はやてがその場に現れる。そして自分の椅子近くにいたアムロとグリフィスに尋ねる。

「アムロさん、グリフィス君、状況はどないなってる？」

「八神部隊長：それが…その…」

なんだか説明しづらいと言った風に口ごもるグリフィス、そんな彼を見て

はやては首を傾げる、そしてそれを見たアムロが冷静な口調で呟く。

「状況は今の所順調だ：一部でちょっと予想外の展開が起きているが…」

「予想外の展開…？」

「まあ見ればわかるさ」

そこまで言ってアムロは微笑を浮かべて視線で促す。

はやてはアムロが促した方向に振り向き、そして驚愕で目を見開くのであった。

＊

「信じてた…私、ずっと信じてたっ…！！！」

「あ…ああ…その…ぬう……………」

リニアレール付近の上空、フェイトはベルクトの胸に顔を埋め彼を抱きしめたまま、涙声で自分の思いを語っていく。

フェイトに対してベルクトはしどろもどろになっていた。

自分で先程確認してはみたものの、目の前の女性がフェイトであるといきなり信じると言うのは無理がある。

自分の記憶が正しければフェイトはまだ10歳近くの子供であった。だが目の前にいる女性はどう見ても10代後半の、それも魅力的な女性である。

とはいえ特徴的な金髪や、手に持っているバルディッシュ何より今自分に対して行なっている行為等を考えれば目の前の女性はフェイト以外に考えられない。

（ということはつまり……ここは未来の世界……か……？）

ベルクトが正解に達したが、そんな中でもフェイトの言葉は続く。

「ベルクトはいつも言ってくれたもの……裏切らないって……」

「あー……まあ……その……」

「だから……こうやって会いに来てくれたんだよね……戻ってきてくれたんだよね……」

「いや……フェイト……俺は……」

「いいんだよ……ベルクトがちゃんと私の側に居る……それだけでも私は……」

「……………」

フェイトの言葉を聞いている内に、ベルクトも段々と頭の整理がついてくる。

ここは未来の世界、そして今日の前に居るフェイトの口振りからすると

あのバルドナ・ドライブでの事件からここに飛ばされてから今日まで行方知れずになった自分の事を、ずっと思っていてくれたのだろう。

ベルクトはフェイトの事をそっと抱き返し、目を閉じて静かに囁いた。

「……………すまなかった……………」

「ううっ……………えう……………うぐっ……………」

ベルクトの言葉を聞いて、フェイトは涙を流し続ける。

「あのー…フェイトちゃん…悪いけど今、任務中だからその辺で…」（なんて、とてもじゃないけど言えないよー！！）

ベルクトとフェイトの感動的な再開シーンを目の前にして
なのはこんな事を考えつつ内心で頭を抱えてしまう。

今は機動六課の初任務中、あまり余計な事に時間は割けられない。
とはいえ目の前のこの光景に水を差すというのはとてもじゃないが
自分には出来ない。

9年前から行方知れずになっていた自分と、親友たるフェイトの大
切な仲間

まして、目の前に居る男はフェイトにとって掛け替えのない大切な
人間

ベルクトがいなくなつてからのフェイトの有様を最も近くで見えてい
たなのはには

この感動的すぎる再開シーンを邪魔する事など出来なかった。

(というかなのは自身、先程までちよつと涙ぐんでいた)

しかし、横槍は意外な場所から投入される。

『フェイト、気持ちはわからなくても今は任務中だ、その辺に
しておけ』

ベルクト達3名の付近にモニターが映し出される。

そしてそこに映っていた人物を目にして、ベルクトは驚いて声を上げる。

「!?!…アムロ・レイ…大尉…!?!」

『久しぶりだな…君もこっちに来ていたとは思わなかった』

ベルクトはフェイトとの抱擁を解き、空中に浮かぶモニターに目を向ける。

ベルクトに対して、アムロも再会を喜んでいるのか

微笑を浮かべた表情でベルクトに対して語りかける。

「……………」

そんな2人に対してフェイトが憎々しげな表情を向ける。

なんか背後にどんよりとした黒いオーラの様な物すら見える。

ベルクトとの再会シーンを邪魔されてよほど立腹らしい。

(にやはは……………く、空気が重い……………)

フェイトの黒オーラにあてられて、なのはは苦笑する。

しかし、そんなフェイトの事はおかまいなしにアムロは会話を続ける。

『管理局での君の活躍は知っていたが……………まさかあのような事故が起これとは思わなかったからな』

その後すぐに、俺が飛ばされるとは思わなかったが』

「大尉も管理局の事はご存知なので…?」

『大まかな話はミスマル司令やブライトから伺っていた。君達5人の事もなはやフェイトから』

聞いている。現在、別の場所でバレルとフェイの姿は確認された。』

「そうですか……」

バレルとフェイがこちらに来ているのを確認してベルクトは安堵する。

が、残りの2人の名前が出なかったに不安を感じ、更に尋ねる。

「アムロ大尉、タックとマリナは確認されていないのですか?」

『その2人についてはまだ…』

と、ここまで言いかけたその時

『!?!?ガジェットの援軍を確認!……それに、この反応は……』
別の管理局員の声が響く、どうやら敵の増援がやってきたらしい。
それを確認したアムロは真剣な表情でこう言った。

『ベルクト、一先ず詳しい話は後だ、いきなりですまないんだが
なのはとフェイトと一緒に敵の迎撃に向かってはくれないか?
バレルとフェイには他の管理局員と共に協力を頼んである』

「了解しました」

一寸の躊躇いもなくベルクトは了承する。自身の大切な仲間である
なのはとフェイトを助けるのなら、言われなくてもやるつもりであ
る。

『そう言ってくれて助かる、じゃあ……頼んだぞ』
そこまで言ってアムロからの通信は途絶えた。

「さて、話の通りだな……俺も最初はどうなることやらと思ってい
たが……

よろしく頼む、なのは、フェイト………」

「うん………」

持っていた武器を構え、真剣な表情で語るベルクトに対して
フェイトが顔を赤らめながら頷いて返答する。、

「2人とも、来たみたいだよ!!」

なのはの言葉に反応して、2人は敵が来たと思わしき方向に顔を向ける。

その視線の先には飛行型ガジェットが数十機

が、何体かはなのはとフェイトも今まで見たこと無い、奇妙な丸い装置をワイヤーで吊り下げていた。

ガジェットが吊り下げた丸い装置から怪しげな紫の靄の様な物を噴出する。

直後、更に起こった出来事にベルクトは更に驚愕する事になる。

*

ガジェット？型と相対するデュオ、カトル

「AMF：話は聞いていたけど厄介だね…デュオ、頼めますか？」

「はいよ、そういう事なら先に行かせて貰うとするぜ！」

固い表情で言うカトルに対して、デュオが後ろに振り向き、得意げに親指を立ててみせる。

そして再びガジェットの方に向き直り、ビームシザーを構える。

「行くぜえ相棒！！」

そう言った直後、デュオの姿が消滅する。

そして更に次の瞬間、所々で鈍い光が生じ、ガジェットの小型アームが全て切断された。

「なっ…速い…！！！」

後ろでその様子を見ていたエリオが驚いて声を上げる。

「どうして…AMFが効いてないなんて…」

あまりにも圧倒的なその様子にキャロは驚きつつも、疑問を口にする。

？型ガジェットのAMFの範囲は非常に広域に渡る。

なのに目の前の男―デュオは魔力刃で出来た鎌で至って自然に攻撃しているのだ。

そうこうしている間に、今度はガジェットの3つのカメラアイに切傷が刻まれる。

「死ぬぜえ…オレの姿を見たヤツは…みんな死んじゃうぜえ！」

その声と同時にガジェットの目の前にビームシザーを振り上げたデュオが現れる。

そしてそのままビームシザーを振り下ろし、ガジェットに巨大な縦傷を刻む。

すると、ガジェットが発生させていたAMFの効力が弱まっていく。それを確認したカトルはショーターを構え、そして呟く。

「行くよ……サンドロック……!!」

カトルの足下に魔法陣が展開する、すると、両手のショーターが高熱を発し始める。

ガジェットが残った方のベルトアームをカトルに向かって叩きつけようとする。

カトルはガジェットに突っ込みながら、向かってきたそれをショーターで容易く切断する。

「はあああああ!!」

咆哮と同時に2本のショーターを大きく振り下ろし、ショーターの硬度と魔力変換によって生み出された熱エネルギーによって

ガジェットに巨大なX字型の傷を刻み込んだ。

しかしそれでも尚、ガジェットは動きを止める事無く抵抗しようとする。

「チッ……じふとい野郎だぜ……」

「装甲形状の所為でしょうか……致命傷にはなっていないみたいです
ね……」

一旦敵から距離を取り、デュオが舌打ちをし、カトルが冷静に分析をする。

（あの形状、僕のストラーダなら……それにAMFも殆ど無い……
なら……）

デュオ、カトルの後方で様子を伺っていたエリオが、ストラーダを強く握り締める。

「プリベンターの皆さん！！後は僕達が何とかします！！一旦下がってください！」

そう言った後、エリオはキャロの方を向く。

「キャロ……僕が一撃で決める……強化魔法を僕に……！」

「……でも……」

しかし、どういうわけかキャロは困惑気味にそう呟く。

プリベンターの凄まじい戦いぶりにあてられて気後れしてしまっていた。

そんなキャロに対し、エリオは真剣な表情で彼女の肩に手を置き言った。

「大丈夫……僕を信じて……絶対に何とかして見せるから……」

「……うん！」

エリオの真剣さを見て、キャロはすぐに戦意を取り戻し、彼と同様に真剣な表情で頷いて答えた。

エリオはストラーダを構えて身構える、その後方でキャロが己のデバイス

一ケリユケイオンを構え、呪文を唱えていく。

「我が乞うは、疾風の翼……若き槍騎士に、駆け抜ける力を……」

左腕に装着したケリユケイオンが光を放つ。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を…」

右腕に装着したケリユケイオンからも光が放たれる。

そして、キャロは両腕を広げ、ケリユケイオンの光をエリオのストラーダに向かって放つ。

ストラーダの先端に桃色の魔力光、後部に黄色の魔力光が形成される。

「一転必中……………!!」

打撃強化と機動力強化を同時にかけてストラーダを構え

エリオはガジェットに向かって凄まじいスピードで突っ込んでいく。

ガジェットはなす術も無くその一撃を喰らい、貫通される。

「でりゃああああああ!!」

エリオはガジェットに突き刺さったストラーダを上には振り上げる。

カジェットはそのまま縦に真っ二つに両断され、そして爆発した。

「やるねえーおいしい所を持っていかれちゃったぜ」

「お2人とも流石ですね、フェイトが見込んだだけのことはあります」

ガジェットの破壊後、デュオとカトルが2人に対して率直に賛辞を述べていく。

エリオとキャロはそれを聞いて照れ臭そうに顔を赤らめた。

その時、リニアレールが急速に速度を落とし停止する。
どうやらスバル達がコントロールを無事に取り戻したみたいだ。
「さあて…無事に任務終了かな？」
車両の上でデュオが両手を頭の後ろに置いてそう言う。

が、その時ロングアーチから通信が入る。

『！？ガジェットの援軍を確認！……それに、この反応は………』
それを聞いて4人は瞬時に表情を引き締めなおす。
そして直後遠方から飛行型ガジェットの大群がやって来る。

「まだ、あんなにたくさん……」

「敵さんも随分必死なんだね……」

キャラが不安げにそう呟き、デュオはどこか軽い感じで言う。

するとガジェットの何体かが、自身の下部に吊り下げていた丸い装置から

怪しげな紫色の靄を噴出し始める。

「気をつけて下さい、また何かフィールド的な物かもしれません…
…」

それを見たカトルが他の3人に注意を促す。

そして紫色の靄の中の所々で赤い粒子の様な物が舞う
直後、粒子の1つ1つが怪しげに蠢き、その姿を変異させていく。

「なっ……！！オイオイあれはまさか……」

それを見たデュオが驚いたように声を上げる。

姿を変異させたそれは、赤や水色、黄色などの様々な形の異形へと姿を変えた。

「どうして……こんな場所に現れるなんて……」

「2人共……知ってるんですか？」

カトルもまたデュオと同じように驚いており、それを見たエリオが困惑気味に尋ねる。

「お喋りは後だ……とにかく片っ端から落とすんだ……！」

珍しくデュオが真剣な表情で怒鳴り、そしてビームシザーを構え、異形と飛行型ガジェットの大群に突っ込んでいく。

「2人共……敵の数に飲まれないように気をつけて！」

そう言っただけカトルもショーテルを構え、エリオとキャロもそれぞれのデバイスを構えた。

＊

一方別の車両の上でも、ガジェットと異形の大群が現れていた。

「どうなってるんのよー!!」

「スバル!!! 泣き言言ってる暇は無いわよ!!!」

突如現れた増援に対し、スバルはわけがわからないといったような感じで

ウイングロードの上を駆け巡りながらガジェットと異形を叩き落していく。

対して、ティアナは車両の上でクロスミラーージュを構え襲ってくる敵の大群を冷静に打ち落としていく。

「どうなってるんだ……こいつらは……」

そんな中バレルは、スバルとティアナの付近の上空を舞い、イオンブリッドライフルの魔力弾と

周辺に浮かばせたデイスパーション8機の攻撃で敵を倒しつつ、困惑気味にそう呟く。

「どうして……抗体コーラリアンが何故……」

バレルの近くで異形ー抗体コーラリアンの群れを相手にフェイがそう呟いた。

ウイングロードを走るスバルの背後にコーラリアンが数体迫る。

「!!!!」

反応が遅れたスバルが振り向いたその時には、コーラリアンは砲撃を放とうとする。

が、その前にティアナがクロスミラーージュでそれを撃墜する。

「スバル、ボサっとしない!!!」

「ご、ごめん! ありがとティア!!!」

ティアはスバルに向かって注意し、スバルは礼を言う。

が、更に直後今度はティアナの背後からコーリアンが発生し、彼女に襲い掛かる。

それをフェイがブレードユニットを操作し、すぐさま破壊する。

「あなたもよ、ティアナさん」

「あ、ありがとうございます!!」

フェイが微笑を浮かべながら言い、ティアナが慌てて返答する。

そんな中でも、コーリアンはどんどん増え続け、4人に疲労が蓄積されていく。

「くそっ……数が多すぎる……このままじゃ……」

増え続ける敵に対して、焦りを見せながらバレルが呟く。

だが、その時上空から大量の魔力弾が豪雨の如く降り注ぎガジェットとコーリアンの大群を破壊していく。

思いもせぬ展開に4人は驚き、魔力弾が放たれた方に顔を向ける。

すると直後、上空から深緑のバリアジャケットを纏い

両腕に巨大なガトリングガンを装着し、顔の右半分をピエロの仮面で覆った青年が

アクロバティックな回転をしながら、4人のいた車両の上に降り立った。

「目標補足、破壊する」

現れた青年はそう呟き、ガジェットとコーリアンの大群に向かってガトリングガンを構え、そこから打ち出される魔力弾によってそれ

らを撃墜していく。

「あ…あなたは……？」

ティアナが青年に対して声をかける。青年は振り向く事無く淡々とこう言った。

「プリベンター03トロワ・バートンだ、これよりお前達を援護する」

＊

デュオ達もコーリアンとガジェットの群れを相手に苦戦を強いられていた。

「くそっ…キリが無え!!」

ビームシザーで片っ端から敵を斬り落しながらデュオが苦々しげに言う。

「まさか……どうしてこんな事に……」

ショーターを投擲しながら、カトルは未だに信じられないという風に呟く。

車両の上ではエリオとキャロも敵の大群と交戦していた。

「フリード!!」

キャロの指示によって、フリードから口から火炎を放ち、敵を落としていく。

エリオは車両の上を移動しつつ、向かってくる敵を落としていく。
が、やはり敵の数は尋常ではなく、徐々に追い込まれていってしまう。

ガジェットが数体、フリードの火炎を掻い潜りながらキャロに向かってくる。

「あっ…!!」

反応の遅れたキャロが防御姿勢を取る前に、ガジェットがレーザーを放つ。

「キャロ! 危ない!!」

それを見たエリオがキャロを跳ね飛ばし、ガジェットの攻撃を喰らってしまう。

「エリオ君!!」

「だ、大丈夫……このくらい……」

心配そうに言うキャロに対して、エリオは無理に微笑んでみせる。
しかし、先程からの長期戦に加え、攻撃をまともに受けてしまった影響により

誰が見ても無理をしているのが明白である。

（このままじゃ……エリオ君が……みんなが……）

そんなエリオを前にして、キャロの気持ち揺れ動く。

（護りたい……優しい人達を……私に笑いかけてくれる人達を……自分の力で……護りたい!!）

心の中で強くそう願うキャロに呼応するかのように

足下に魔法陣が展開し、彼女とフリードの周辺が魔力光で包まれる。

「蒼穹を走る白き閃光……我が翼となり、天を駆けよ……来よ、我が竜フリードリヒ……竜魂召喚！」

キャロが強い表情で魔法を唱えていく。するとケリュケイオンが強く輝き

そして、足下の魔法陣から白い巨大な竜——フリードリヒが真の姿で現れる。

「こ、これがフリードの……」

至近距離でその光景を見ていたエリオはフリードの姿に見惚れる。

「エリオ君……さっきはごめん……今度は私が何とかするから!!」

エリオに対して固い表情でキャロがそう言う。

そして、エリオを伴ってフリードの背に乗った。

「フリード！ブラストレイ!!」

キャロの指示によって、フリードが口から火炎放射を放ちガジェットとコーリアンの大半を焼き払っていく。

「うわあすげえ……魔法ってのはあんな事も出来んのか……」

周辺で戦っていたデュオが感心したようにそう呟く。

「けど……これだけ広範囲の攻撃なら……」

フリードの力を目の当たりにしたカトルがそう呟く。

更に直後、崖の上から桃色、黄色、紫の3つの閃光が放たれ、敵を多数撃ち落していく。

「みんな大丈夫!？」

そして崖上からなのは、フェイト、ベルクトの3人が現れる。隊長達の姿を確認したフォワード陣は安堵の表情を浮かべた。

「デュオ、カトル……大丈夫だった？」

「ええ……何とか持ちこたえましたよ」

「お前の育てた新人達が優秀だったおかげだな!!」

フェイトに対して、デュオとカトルが笑みを浮かべながら答える。それを聞いたフェイトがエリオ、キャロの方に振り向く。

「2人共……よく頑張ったね」

優しい表情でフェイトは2人を褒める、エリオとキャロはそれを聞いて

表情をぱあっと明るくさせた。

「フェイト……こいつらがお前の部下か？」

「あ、うん……私の大切な仲間達だよ」

側に居たベルクトが尋ね、フェイトが少し顔を赤らめながら答える。その光景を（特に顔を赤らめたフェイト）不思議に感じた2人が首

を傾げる。

「2人には確か話したよね？彼はベルクト、私にとっての大切な人だよ」

フェイトが2人に対してベルクトを紹介する、それを聞いて2人は特にエリオが強い驚きを浮かべた

（！！じゃあ……この人が……フェイトさんの……）

「バレルさん！！フェイさん！！お久しぶりです！！」

「………本当になのはなんだよな？」

「立派になったわね……なのはさん……」

満面の笑みでバレルとフェイに近寄ってきたなのはに対してバレルは困惑気味に言い、フェイは再会を噛み締めるように穏やかな顔で言った。

「懐かしんでる暇は無いぞ……まだ敵がいる」

「つとと、そうだったね……」

近くにいたトロワのその一言によって、なのははすぐに真剣な表情になり、武器を構える。

「じゃあ……いくよ！みんな！！」

なのはが高らかにそう言い、周辺の者全てがそれに答えた。

後はもう完全に一方的であった。隊長2人にフォワード4人
プリベンターにベルクト達まで加えた計12人の力によって
残った敵は瞬く間に消滅していくのであった。

＊

「車両近辺のガジェット並びにアンノウンの反応、全て消滅!!」
「スターズF、レリックを無事確保!!」

数分後、機動六課のモニタールームで局員がそう報告する。

「一時はどうなるかと思ったが……何とかなつたみたいだな」
アムロが安心したようにそう呟く。

「うん。ほんならスターズの3人はヘリで回収してもらって
そのままレリックの護送を……」

はやてが今後の指示を言いかけていたその時

はやての椅子の近く、というかグリフィスの目の前に突如黒い光が現れる。

「な、なんやいきなり……!!」

「これは一体……」

あまりに突然の事態にはやてとグリフィスが驚いて声を上げる。そして

「うわああああ!!」

光の中からタック、マリナの2人が現れ、床に墜落する。その場にいた全員が驚いて2人の方に視線を向ける。

「いたた……一体何が起こったんだ？」

「あの男は何が目的で……」

タックとマリナが立ち上がりながら、そんな事を呟く。

「あ……ああ……」

すると、目を見開いて驚いているはやてと視線が合った。

「ん……誰だ、君は？」

タックは目の前の人物が特定できず、ポカンとした感じでそう呟く。だが、対象的にマリナは見た目や雰囲気で大方向の察しをつけていた。

「マリナ……？」

「もしかしてあなた……」

マリナは目の前の人物一はやてに向かって呟く。そして次の瞬間

「久しぶりやぁー！！！！2人共ー！！！！」

はやては満面の笑みで涙を浮かべながら、腕を大きく広げて2人に

抱きつく。

「ちよっ！……何だ何だ！？」

（やっぱり……あなたなのね……はやて……）

状況が理解できていないタックが慌てた感じに言い

マリナは穏やかな表情ではやてにされるがままにしていた。

周りでその光景を見ていた局員たちはわけがわからずポカンとする。

（やはり来たか……レリックの事といい……俺や彼らといい……

どうやら……本格的に何かが始まりそうだな……）

そんな中、アムロはタックとマリナを見て笑みを浮かべながらも

今後の事を考え、心内で不安を抱えるのであった。

＊

一薄暗い研究所のような場所で、白衣を纏った3人の男が

目の前のモニターに映る映像をまじまじと観察していた。

「：コーリアンもガジェットも落ちたか：やはり並大抵の力では
歯がたたぬか：」

左側にいたスキンヘッドの男が静かにそう呟く。

『追撃戦力を送りますか？』

「いや、やめておくよ：彼女達のデータが取れただけでも十分さ：」
別のモニターに映った女性に対し、真ん中にいた紫髪の男が不気味
な笑みを浮かべて答える。

「それにしても……この案件はやはり素晴らしい……

私の研究にとって……興味深い素材が揃っているではないか……クク……」

「……また何か企んでるのかジェイル？」

「企んでるだなんて人聞きの悪い……嬉しいのさ……優秀な魔導師に生きたプロジェクトFの残滓……それに君の同郷者達……

私の研究を進めるいい材料になりそうだからね……」

「やれやれ……相変わらずだな」

楽しそうに話す紫髪の男—ジェイル・スカリエッティに対しスキンヘッドの男は呆れたように答える。

「……………」

そんな中、右側にいた茶髪のポニーテールの眼鏡の男はある1つのモニターを凝視していた。

「どうしたね？折角作った人工コーラリアンが壊されて悔しいのかい？」

「いや……そういうわけではないですよ……ただちょっとね……」スカリエッティに対して、右手の人差し指と中指で眼鏡をクイッと上げながら

ポニーテールの男は答える。

（……またBBの気まぐれですかね……本当にあの子には困ったものだ……にしても……）

そしてネットリとした妖しげな笑みを浮かべ、心内で更にこう呟くのであった。

（まさか彼らが来るとは予想外でしたよ……バレル……フェイさん……そして出来損ないめ……！！！）

第3話（後書き）

とまあ、更新遅れたのは前書きのとおりです。

正直すいませんでした…

けどフル改造したアークシリーズやらその他がみんな消え失せて本当に凹みに凹んでたんですハイ…

極めて個人的な事情なのに申し訳ないです…

A M Fを物ともしないデュオの攻撃

この辺はまた後々説明します。

そして登場、ガンダムと言えばこの人なアムロ

彼もまた違う意味で白い悪魔と呼ばれてましたからね。

W悪魔…

何かこのままだと機動六課が化け物の巣窟になりそうだ…

（まあアムロには第1話で存在を仄めかした『彼』がいますけど）

タツクとマリナが今回、とってつけたような扱いになってしまった
ちよっと後悔気味です…

彼らには後々で大暴れさせよう…

それではまた

第4話（前書き）

アムロ、プリベンターによる経緯説明
そして明らかになるレリックの意外すぎる実体

第4話

リニアレールの事件から数時間後

機動六課オフィスのとある一室

広い空間にいくつもの机と椅子が並び、さながら会議室を思わせる
雰囲気その部屋に、なのは、フェイト、はやて達3人や守護騎士
4人

プリベンターのメンバーやアムロなど、たくさんの人物が集まっ
ていた。

その内何人かは、妙にそわそわして落ち着きが無い。

しばらくして部屋の扉が開き、ベルクト、バレル、フェイ、タツク、
マリナの5人が入ってくる。

バレルとフェイがまず最初に、アムロの方に向かっていく。

「お久しぶりです、アムロ大尉」

「まさか、こんな場所で大尉にお会いするなんて…」

「ああ……君達が無事で良かったよバレル、フェイ」

バレルとフェイはかつての戦いで最もお世話になり

最も長く共に戦ってきた偉大な先輩たる、アムロに挨拶をする。

アムロも笑顔で返答し、そしてバレルの顔をまじまじと覗きこむ。

「ん……いい戦士の顔になったなバレル」

「あ……ありがとうございます！」

アムロのその言葉に舞い上がったバレルは、緊張して敬礼をする。その光景を見てフェイはクスクスと笑いを浮かべる。

「いやいや……こっちの世界での経験がいい刺激になったんだろう
雰囲気でわかるさ、2人とも見違えたよ」

「い、いやあそんな……」

「ええ……バレルは本当に成長してくれました……今では私が守られる側なくらいです……」

再びのアムロの賛辞の言葉に、バレルとフェイは顔を赤らめて照れる。

「タック!!」

落ち着きが無かった人物の1人ーヴィータがタックに駆け寄っている。

「ヴィータ……」

「バカ野郎!! あれから一体何年経ったと思ってんだ!!」

ヴィータはタックの前に立つなり、いきなり怒りをあらわにする。

「ヴィ、ヴィータちゃん落ち着いて! タックさん達だっけきつと……」

「うるせえ!!」

その光景を見たシャマルが慌ててヴィータの方に近づいてそれを止

めようとする。

だが、ヴィータはシャルムの方に振り向きそれを遮る。

「9年だぞ……あれから9年も経ってるんだぞ!!……なのに……
今になっ……て……!!」

だが、怒鳴っている途中で段々とトーンが下がっていき、顔を俯かせる。

それを見たタックは険しい表情になり……

「ふにゅ!?」

何故かヴィータの頬をつねる。

「な……な……いきなり何すんだテメェ!!」

ヴィータは涙目でタックの手を引き剥がす。

「いやすまない……やっぱ夢じゃないんだよな……」

「!!……この野郎……散々待たせた挙げ句それかよ……」

ヴィータはアイゼンを構える。それもギガントフォームで。

「わぁー!! ちよっ待て待て!! ヴィータ、落ち着け! 無茶するな
っ!!」

「うるせえええ!! お前なんか!! お前なんかああ!!!!」

流石に場の空気を読み間違えたかと後悔するタックだが、時既に遅し。

マジギレ状態のヴィータが振り回すアイゼンから必死に逃げ回る。

「再会早々に何やってんのよ………」

「全くだな……」

そんな2人の光景を見ていたマリナとシグナムが呆れた口調でそう言う。

そして2人は互いに向き合い笑みを浮かべる。

「久しぶりねシグナム……何だか、随分待たせちゃったみたいだけど……」

「ああ、その通りだ……心配したぞ、だが……こうしてまた無事に会えて何よりだ」

マリナとシグナムは固く手を取り合った。

「そのくらいにしておけ」

「タックもヴィータも折角再会したのに何しとるん……」
暴れまわっていたヴィータをはやてと人間形態のザフィーラが抑える。

「ああすまない……はやて、ザフィーラ……」

「タックも、もうちょい考えなアカンよ？ヴィータ本当に寂しがってたんよ？」

後頭部を掻きながら苦笑を浮かべて言うタックに対してはやてが少し怒った感じに返答する。

ふとタックは、はやての横に浮遊していたとある人物が目に入る。

「わあゝあなだかあのタックさんですかゝ!!」

その人物が嬉しそうにタックに向かって言った。

その声を聞いたマリナも近づいてきて、そして驚きを浮かべる。

「リインフォース!?……にしては……小さい……」

浮かんでいた人物は30センチほどの水色の髪をした、リインフォースそっくりの人物だった。

「初めまして! タックさん! マリナさん!」

リインフォースそっくりのその少女は、笑顔で2人に向かってペコリとお辞儀をする。

「ねえはやて…この子は…」

「ウフフ……この子はリインフォース? (ツヴァイ) ……新たな祝福の風や」

困惑したまま尋ねるマリナに対して、はやては笑顔で答える。

「まあ…先代リインフォースの妹みたいなもんやな、この子の事はリインって呼んであげてな?」

「皆さん、よろしくです!」

はやてとリインが満面の笑みでそう言う。

(何か……性格が違いすぎるような……)

(リインフォースの妹……か……)

タックとマリナは新たなリインフォースの対面に喜ぶ一方

先代の彼女と性格が真反対で元気一杯なリインをまじまじと見て多少の戸惑いを見せていた。

しばらくの間、再会までの間の積もる話が続いた後、アムロが切り出す。

「じゃあ、そろそろ本題に入ろう…はやて？」

「了解や、アムロさん」

アムロのその言葉にはやてが反応し、近くのパネルを操作する。他のメンバーはそれぞれ自分の近くにあった席についた。

全員が席についた後、アムロが話を始める。

「まず最初に確認しておきたい…ベルクト、ここは俺達の世界の時間軸から合わせて

本当に9年後の未来の世界なのか？」

「…はい…状況から考えて多分間違い無いと思います」

アムロの問いに対して、ベルクトがやや表情を曇らせながら答える。その後、アムロがモニターを操作して映像を映し出す。

「これは……！」

「嘘……ドームが……！」

その光景を見たベルクト達5人のメンバーが驚きを浮かべる。

映し出されていたのは跡形も無く破壊された、なのは達側との地球と繋がる

ゲートを隠匿する為の巨大ドームであった。

「俺達の世界で言う第二次セシリアの悲劇…はやて達の世界で言う海鳴海上研究所爆発事故…この事件を境に両地球のゲートの消失に加え

君達5人の行方がわからなくなった」

腕を組みながら真剣な表情でアムロは語っていく。

「当時の事件の担当であったクロノ・ハラウン現提督の話によればゲートは極めて巨大な魔力の塊の様な物で、そう易々と破壊出来る物ではない…

ましてや厳重な管理局のセキュリティを破ってそれを実行するのは不可能に近いとの事だ…」

真剣な表情を更に固くし、アムロはそう語る。

「じゃあ……やっぱりあのメットの男が？」

それを聞いたフェイが顎に手を置いてポツリと呟く。

「そう……君達が遭遇したとされる黒いメットの男……

ドームの破壊もゲートの消失も…君達が時を越えてここにいる理由も全て

その男1人の仕業だとするならば……そいつは常識を遥かに超えた存在という事になる」

アムロのその言葉にその場にいたほぼ全員が冷や汗を垂らす。

（そいつが……その男が、ベルクト達の事を……）

フェイトは膝の上に置いていた両拳を固く握り締めて表情を歪める。

（あの男がか……）

ベルクトは至って冷静に話を聞き、自身の疑問点を解消すべく頭を回していた。

少しの間を置いた後、アムロは続ける。

「だが混乱はそれだけに留まらなかった……君達の行方不明後から収まっていた俺達の世界での行方不明事件が再発し始めたんだ」その言葉を聞いてベルクト達5人が再び驚き、顔を上げる。

「俺が飛ばされたのが1年と半年程前……出会った人物がなのはだった」

「はい、あの時は私も驚きました……話を聞いていく内にバレルさん達と」

同じ世界の出身だなんて言うんですから……」

当時の事を思い出すかのようになのはは語る。

「リンカーコアの反応もあったし……丁度バレルさん達と同じようにデバイスも持ってたみたいだから事情を話して魔導師として協力してみませんか？って持ちかけたんです」

なのははそこまで言って一度溜息を吐いた後、何やら疲れた感じに言う。

「そしたらもう本当に凄くて……魔法の練習から3日程で恐ろしい速さでコツを掴んで……」

リミッター付きだったとはいえ私やフェイトちゃんが苦戦するんだもの……」

「うん……本当にアムロ一尉は凄いを通り越して怖かったよ……こっちの攻撃は殆ど当たらないのに……アムロ一尉の攻撃は的確にこっちを狙ってくるし」

「何やつけあの……ふいん・ふぁんねるとか言う浮遊砲台やったか？アレを使われたら避けるのにエライ苦労したなあ……」

言うたらちよつと失礼やけど……マリナのトランス・ユニットとは桁違いやったもん」

なのは達3人はその時の事を噛み締めるかのようにまじまじと語っていく。

「よしてくれ……俺はそんな大層なもんじゃない……」

「謙遜はよそうやアムロさん？ 今じゃなのはちゃんと並んで管理局の2つの白い流星とか呼ばれとんのに」

穏やかな表情でやんわりと否定の態度を見せるアムロに対してはやてが更に付け加える。

（3日って……俺でも2週間はクロノと戦い詰めだったのに……）

（ニュータイプの血は戦いにおいて恐ろしく発揮されるか……）

（流石は1年戦争の英雄だわ……）

アムロの功績を聞いてバレルやタック達も心の中で尊敬の意を示していた。

その後、マリナがプリベンターの方に振り向いて尋ねる。

「じゃあ……あなた達は一体どういう経緯で？」

その質問にカトルが答える。

「僕とデュオとトロワが飛ばされたのは1年程前……会ったのはフェイトでしたね」

「あん時はホントにビビったよな……鎌を持った女の子が空を飛んでんだもんよ」

まさか本物の死神かぁ！？とか思っちゃったよ……」

「デュオも今となっては人の事言えないでしょ……」

当時の出来事を楽しそうに語るデュオに対して、フェイトが少し恥

ずかしげに言う。

その後トロワが冷静な口調で淡々と続ける。

「それで俺達はそのままフェイトの計らいによって管理局に保護された

その後、俺達より先に来ていたヒイロと五飛の下に合流した」

「ヒイロさんですか!？」

聞き覚えのある人物の名前を耳にしてバレルが反応する。

「ああ、ヒイロと五飛が来たのは俺達より更に半年前だったらしい遭遇した人物が聖王教会のカリム・グラシアという人物だ」

そう言いつつトロワは自分の目の前のパネルを操作し、モニターに該当の人物を映し出す。

「彼女と遭遇したヒイロと五飛はこの世界の事、魔法の事などを教えられ

彼女の下で行動していた、その後俺達と合流し、元の世界に戻る手掛かりを探すため

聖王教会直属の諜報機関という名目でプリベンターを再結成したんだ」

「そして、カリムと交友の深かったはやてが機動六課を設立すると聞いて

そこにフェイトやアムロ大尉もいるという事なので、僕達プリベンターは

機動六課との全面協力を取り付けて今に至るというわけです」

トロワとカトルが今日に至るまでの経緯を一通り説明する。

「にしてもホント驚いたよなく俺達のガンダムが魔法使いの杖みたいな

扱いになってたんだからよお…いい歳こいてコスプレマニアになっちゃまったぜ…」

「ハハハ…そう言うデュオだって今では結構ノリノリじゃないですか…」

やれやれといった感じに話すデュオに対して、カトルが苦笑しながら

ら言う。

「でもホント……ベルクトの世界の人達は皆飲み込みが早くてびっくりしたよ

デュオもカトルもトロワも……みんな短期間で凄腕になっちゃうんだから」

フェイトが感心したように言う。

「本当だぜ……俺自身が死神様になっちゃうんだからよ……」

その癖、フェイトの奴は半端なく強いんだからなあ……死神の名折れだぜ……」

「しょうがないよ……寧ろデュオみたいにすぐに強くなる人の方が珍しいんだから」

気だるげな感じで言うデュオにフェイトがフォローを入れる。

「まあ仕方あるまい、フェイトは強いからな……そう簡単には敵わんだろう……」

「もう……ベルクト………／／／」

ストレートなベルクトの言葉に、フェイトは頬を赤く染めて喜びを見せる。

その光景をポカンと口を開けてデュオは眺め、そしてカトルにヒソヒソ声で尋ねる。

（オイオイオイ……話は何回か聞いてたけどよ……完全にベタ惚れじゃねえか？）

（仕方ないですよ……9年前から離れ離れだったそうですし……）
（ふ……9年前から相思相愛ね……）

カトルの言葉を聞いた後に、デュオは楽しそうに談話しているベルクトとフェイトを見る。

（9年前……9年前つったら……）

「ちよっ……それって何か犯Z「何か言ったか？」うおう！……な、何でもねえよ……」

言葉の途中でベルクトにギロリと睨まれてしまい、デュオは驚いて飛び上がる。

（やれやれ……ヒロの奴もあれくらい純情さがありやあなあ……）
心の中で更にこんな事を付け加えていた。

その後、ふと疑問に思ったことをバレルが尋ねる。

「それはそうと……ヒロさん達はどうしてるんですか？」

「ヒロと五飛は別件の任務中だ、調査する事があるのでな、2人共近いうちに戻ってくると言っていたが」

その問いにトロワが答える。

「そう、その事も含めてもう1つ重大な話があるんだ……」

そう言ってアムロが目の前パネルを操作し始める。

「現在、俺達が所属しているのは古代遺物管理部 『機動六課』

ロストロギア関連の危険な任務を請け負う部隊だ」

「うちが立ち上げたんよ」

アムロの説明にはやてが割り込んでくる。

「へえ……凄じくないかはやて」

「9年間でそんな事を成し遂げるなんて立派だわ」
タックとマリナが感心したように賛辞を述べる。

「ありがとうな……タック、マリナ……／／／」

はやては顔を赤くしながら嬉しそうに答える。

その後、パネルを操作しながらアムロが続ける。

「ロスト・ロギアを扱うという名目で立ち上げた機動六課だが…
そのロスト・ロギアの内1つに…これが紛れていたんだ…」

そう言ってアムロがモニターに映し出したのは、緑色に光る結晶の様な物。

「タック、マリナ、君達は特にこれの事を知っていると思うが…」
そう言うアムロの視線の先で、タックとマリナは目を見開いてモニターを凝視していた。

「これは……E2？」
タックが呟く。

ガンアーク、バスターアークを始めとするアークシリーズの動力源
ガーディアン of 莫大なエネルギーの源

出所不明のエネルギーの塊、半永久エネルギー機関…

その映像は確かにE2物質そのものであった。

「けどな……これは元々、管理局の方で発見されてたロスト・ロギアなんや……」

固い表情ではやてがそう言い、更にフェイトが続ける。

「私たちの方での呼び名は通称レリック、第一種搜索指定ロスト・ロギア……」

アムロさん達の世界で呼ばれていたE2と同じ、超高エネルギーの結晶体……」

目の前のパネルを操作し、モニター多数の映像を浮かばせてフェイトは続ける。

「レリックは過去に4度発見されて、内3度は周辺を巻き込む大規模災害を起こしているんだ……」

「確かに……これが俺達の世界と同じそれだというなら……」

これだけの規模の災害が起きてもおかしくないだろう……」

モニターに映る災害の映像を見つめ、ベルクトが固い表情でそう言う。

その時、何かに気づいたかのようにバレルが顔を上げて言う

「でもちょっと待って……もしこれがそのE2物質だって言うなら……俺達の世界にはつまり……ロスト・ロギアが大量に……」

その言葉に気づいたかのようにタック、マリナ、フェイが顔を上げる。

ガーディアンに使用されている半永久機関E2コア……

そして破棄が決定されていたとはいえ、地球上の宙域にはまだ

100近いガーディアンコロニーが存在していたのだ

それはつまり……バレル達の世界に100近いロスト・ロギアがあった事に等しい。

「いや、その点については大丈夫だ」

だが、その疑問点を否定するかのようにアムロが口を開く。

「UCEの頃のデータと比較して計測してみたんだが……

こっちの世界で見つかったE2は、俺達の世界のそれと微妙に性質が異なっている

向こうのE2はこっちのそれよりエネルギー量は上回っているが……こっちの世界の物とは違ってそこまで不安定ではない……

今映した映像のように、取り扱いの間違いで災害を起こす危険性は遥かに少ない……」

「そう……ですか……」

安心したかのようにバレルはぐったりと座り込む。

「だが……とはいえ安心は出来ない……世界を違いにして微妙に性質が

変化したとはいえ……俺達の世界の物質が極めて危険な物である事がわかったんだ……

何よりの問題は……俺達の世界にもこちらとの関わりがずっと前からあったという事……

だから俺も、その件の調査も含め機動六課に参加する事にしたんだ……」

腕を組みながら真剣な表情でアムロはそう言った。

その後パネルを操作しながらフェイトが続ける。

「そして…後者2件では、こういう拠点が発見されている…」

モニターに怪しげな研究施設の様な物が映し出される。

「極めて強力な魔力エネルギー研究施設…発見されたのがいずれも未開の世界…」

こういう施設の建造が許可されていない地区で、災害発生直後にまるで足跡を消すかのように破棄されている…」

「1年前、施設の1つをヒイロに調査させたんだが…既にもぬけの殻だったらしい…」

フェイトの説明にアムロが付け加える。

「そしてその裏で糸を引いているとされるのが彼…」

再びフェイトがパネルを操作し、モニターに今日倒した？型ガジェットの分解図と

白衣を纏った1人の紫髪の男が映し出される。

「ジェイル・スカリエッティ…ロスト・ロギア関連事件を初めとして数えきれないくらいの罪状で超広域指名手配されている一級搜索指定の次元犯罪者…」

極めて真剣な表情でフェイトが説明する。

「だがよフェイト…その断面図に映ってんのがそいつの名前だってんなら…」

なんで指名手配されてる癖にそんなわかりやすく自分の名前を誇示してんだ？」

ガジェットの断面図を指差しながらデュオが尋ねる。

「本人だとしたら挑発…他人だとしたらミスリード狙い…」

どっちにしても私達がこの事件に関わっているのを向こうは知っているって事…」

「うわ悪趣味だなオイ…あのジーサン達じゃあるまいし…」

フェイトの答えを聞いて、デュオは自分達のガンダムの開発者である

5人のマッドサイエンティストの事を思い出して表情を引き攣らせる。

「もし本当にスカリエッティだとしたら…ロスト・ロギア技術を用いて

ガジェットドローンを作るのも納得がいくし…レリックを集めてる理由も想像がつく…」

「そして何より重要なのは……………」

今度はアムロがパネルを操作する。すると、モニターに今日戦った抗体コーリアンが映し出される。

「そのスカリエッティという男が、何らかの方法で俺達の世界について

知っているという事だ…俺達の事といい…互いの世界の時間のズレ

……コーリアンの出現

そしてレリック……E2を付け狙う事……それらの解決の為に俺やプリベンター

そしてはやて達機動六課は活動しているというわけだ…」

アムロの言葉をその場にいた全員が真剣な眼差しで聞いていた。

＊

機動六課隊舎の一室、アムロによる状況説明の後、

ベルクトはフェイトによって自分の部屋に案内されていた。

「しかしまあ……またとんでもない事になったものだ……」

「うん……あのコーリアンっていうのまでベルクトの世界にいた生物だったとは思わなかったし……」

会議の緊張から解放された2人はリラックスした面持ちで話し合っている。

「それに……まさかお前の事を9年間も放っておく事になると「ベルクト……」って……んなっ……!」

急に申し訳無さそうな感じに言うベルクトの言葉を遮るように

フェイトはベルクトに近寄って彼を背中から強く抱く。

「フェ……フェイト？」

「……言っただでしょ、私はベルクトがちゃんと会いに来てくれただけ……」

それだけで十分だって……それに、ベルクトが悪いわけじゃないんだから……

ベルクトが謝る必要なんて無いよ……」

ベルクトがフェイトの抱擁から離れ、彼女の方に向き直る。

フェイトはさながら天使の様な、本当に優しい微笑を浮かべていた。

「……受け入れてくれるのか？まだ、自分の罪も償いきれてないこ

の俺を？」

「うん……例えどんな状態でも、ベルクトはベルクトだよ………
私はベルクトと一緒にいてほしい……ベルクトに力を貸して欲しい
から……」

（9年も待っていたというのか……なら、その思いを無碍にするわけにはいくまい……それに……）

心内でそんな事を思いながら、今度はベルクトの方がフェイトに抱きつく。

（俺もやはり……フェイトの側にいるのが一番心が安らぐ）

9年という時の流れで姿が大きく変わったとはいえ、目の前に居る女性

自分の運命を変えた大切な人間、自分の愛する人間、フェイトそのものである。

だったらそんな彼女の思いを受け入れるべきである、というより自分の思いに嘘がつかない。

フェイトを抱きしめたまま、ベルクトは彼女の顔を真っ直ぐ見据えて言う。

「……………綺麗になったな、フェイト……」

「ツツツ……………／／／」

またしても直球ど真ん中なベルクトの発言に、フェイトは顔を真っ赤にする。

そして、互いの顔を近づけていき……

「……………」

「んっ……」

互いに目を閉じ穏やかな表情のまま、2人は唇を重ねた。

＊

そんな甘々な空気をもし出す、2人の部屋の扉の前に3つの人影があった。

「うわあ……………」

「だ、大胆になったわねベルクト……………」

「フェイトちゃん……………／／／」

「はぁ…その3人、何やってるんだ？」

「「「!!!!!!」」」

近くを通りかかったアムロに突然声をかけられ、3つの人影
ーバレル、フェイ、なのはの3人は驚いて飛び上がる。

「ア、アムロ大尉……………これは、その……………」

「にやはははは……………」

バレルは両手をバタバタして慌てて弁明し、なのは引き攣った笑いを浮かべている。

そんな様子を見て、アムロは再び溜息を吐いた後こう言った。

「全く：男女の仲を盗み見るなんてあまり良い事じゃないぞ？もう少し空気を読め」

呆れた感じでそう言った後、アムロは歩いていってしまった。

（空気を読めって…………アムロさんもそんなに人の事言えないでしょ…………）

仕事上であつたとはいえ、今日の事を思い出したなのはは内心でそんな事を呟いていた。

第4話（後書き）

というわけでやってみましたオリジナル、レリックⅡE2物質

前作の感想で書いてくれた塗り絵さんの案を使ってみました。
今後更にこの設定を活かしていけたらと思います

着々と仲を深めていくベルクトとフェイト。

まあ、9年も会ってなきや寂しくなると思いますしね…

後思った事

版權キャラでは今のところデュオが一番扱いやすいですね。

それではまた

アナザーA（前書き）

長くなったので分けてみました、他キャラ達の現状です。

※読む前に一言

私は決して狙ってません

アナザーA

—Another Side ?

スカリエッティのアジト、その一室でスキンヘッドの男がとてつもない速さでパネルを操作していた。

「シエルコート、ステインガーの調整は完了……ペリスコープ・アイの調整は現状維持……」

ブーメランブレード、ステルスジャケット、ツインブレイズの素体は完成……

ガンナツクル、ジェットエッジは現在最終テスト中……

ライディングボードに対するタイプthe・ENDのデータ応用実験は概ね成功済み……」

一心不乱にパネルを操作する男の周りには、様々な形状の武器やコード類があった。

「シルバーケープ、ミラージュブレードの改良は未定……」

えーと……ハルバートの調整も完了済み……次にゲシュ……」

「アルさん、失礼しますよー」

男の部屋の扉が開かれる、そして中に金髪の女性——セデイスが入ってくる。

「おや、何か用かなセデイス君……私は今忙しいのだが……」

セデイスの方に振り向き、スキンヘッドの男はイライラした感じにそう言う。

それに対してセデイスは特に反応する事も無く普通にこう言う。

「ジェイルさんに呼んで欲しいって頼まれました、何でも

ガジェットドローンの改良についていくつか聞きたい事があるって……」

「全く……私にこれだけ激務をさせておいて……」

頭を掻きながらスキンヘッドの男はまたパネルの方に向き直り、こう言った。

「データの整理がもう少しかかるから、しばらくしたら行くと行っておいてくれたまえ」

「了解♪」

スキンヘッドの男に対して、セデイスは軽い感じで答え、部屋を後にした。

＊

訓練場の様なだっ広い場所で、紫のショートカットの長身の女性とピンク髪のツインテールの少女が対峙していた。

「このコンボ……避けてごらんよ!!」

ピンク髪の少女は全身に纏った赤と黄色のボディスーツの様な物に包まれた

両腕を異常な長さに伸ばし、体ごと両腕をプロペラの様に回転させながら

紫髪の女性に向かって突撃していく。

「くっ…ライドインパルス!!」

紫髪の女性は歯噛みしながら、突撃してくるピンク髪の少女の両腕を掻き潜り

瞬時に少女の目の前に高速で移動する。

「うはっ！速い！！」

相手が目の前にいるにも関わらず、少女は楽しそうな素振りを見せる。

と、次の瞬間伸ばしていた腕を瞬時に元の長さに縮小し

左腕を盾に変形させて、紫髪の女性のエネルギー刃の攻撃を防ぐ。

「なっ…！」

「ふふふ…：これはどうだっ！！」

更に少女は右腕を巨大な槍状に変形させ、紫髪の女性を突き刺そうとする。

「そこまでだよ」

だが、その前に部屋の外でその戦いをモニタリングしていたスカリエッティによって戦いは中断された。

「トーレ、シンシア、ご苦労だったね。おかげで素晴らしいデータが取れたよ」

スカリエッティは満足げに笑みを浮かべながら言う。

「あーあ…：せっかくなにかいい所だったのに…：」

「仕方あるまい、これは悪魔で戦闘テストだからな」

ピンク髪の少女ーシンシア・レーン是不満げにそう言い

紫髪の女性ートーレが固い表情で答える。

「そう言ってもさあ、まともに遊んで楽しいのはアンタくらいしかないんだもん…：」

「私はごめんだな、お前のドミネーターというデバイスは攻撃が読めなさすぎる」

落ち込んだ感じのシンシアにトーレはやはり固い表情のまま答えた。

「そうだシンシア、少し頼みがあるんだが」

スカリエッティがシンシアを呼び止め、そしてモニターを表示する。そこには立派なホテルの様な物が映し出されていた。

「何コレ？」

「ここはホテル・アグスタと言ってね、近々ここでオークションが開催されるんだ…」

実はこのホテルに興味深い骨董が1つあってね…」

薄ら笑いを浮かべたまま、スカリエッティは説明を続けていく。

「その奪取をルーテシア達に頼みたかったんだが…」

どうも嫌われてしまったらしくてね…断られてしまったんだよ」

「アンタの事を気に入る奴がいるなら逆に見てみたいわ…」

呆れた感じの口調でシンシアは言った。

「代わりと言っては難だが…君とアネモネにその奪取をお願いしたいんだ

オークション当日には機動六課と呼ばれる、凄腕の魔導師達が警備に就く

君やアネモネのストレス発散にも丁度良いと思うんだが」

その言葉にシンシアはピクリと反応する

「凄腕…強いのかい？」

「ああ…トーレに匹敵するクラスの魔導師も何人かいるからね君にとっても面白いゲームを楽しめると思うよ…」

「オッケー…アンタがそう言うならやってやろうじゃん…」

「ありがとうシンシア…」

怪しげに笑うシンシアに対して、スカリエッティもまた薄ら笑いで答えた。

— Another Side ?

バルクホルツの研究室、そこでバルクホルツとマリエルが会話していた。

「それは確かなのですかマリエル君…！」

「はい…タックさん達が機動六課と一緒にいるって連絡が」

「おお…そうですか…」

マリエルの言葉を聞いて、バルクホルツは落ち着きを取り戻す。

「しかし…彼らもこっちに来たとすると、これから彼女達も忙しくなるでしょうね…」

「はい、はやてちゃん達も今日、アムロ一尉といろいろ話し合ってたみたいです…」

互いに真剣な表情を浮かべて2人はそうやり取りする。

若干の間を置いた後、マリエルが口を開く。

「あ、そうだユーノ君から連絡がありましたよ」

「ほう…彼は何と言っていましたか？」

「『魔力制御は上手くいっていて、もうほとんど実用段階』だそうです」

「そうですか…やはり彼にアレを渡して正解でしたね…結界魔導師は魔力制御・コントロール系の類に秀でている者が多いですから」
笑みを浮かべて満足げにバルクホルツが言う。

「ユーノ君…あの事故の事ずっとひきずつてるみたいですし…」
「その為に力がいると言って…私を探し出してきたのには驚きましたからね」

やや表情を曇らせながら言うマリエルに対して、バルクホルツがしみじみと語る。

（私も…：うかうかしてられませんね）

自分のデスクに向き直るバルクホルツの傍らには
培養液に満たされた試験管の中に浮かぶ、銀髪の美しい女性が浮かんでいた。

— Another Side ?

薄暗い街中の路地裏、スカリエッティとの通信を終え

白いフードを被ったピンク髪の少女と金髪の男性が再び歩き始める。
「断って良かったのか？あのホテルに君の探し物もあったかもしれないし…」

「……探してもどうにもならない…ドクターは私に嘘を吐いてるから……」

金髪の男性とピンク髪の少女—ルーテシア・アルピーノは互いに静かな口調でそう話す。

「それをわかっていて…何故君はスカリエッティと共に行動するのだね？」

「……ゼストやアギト、マイヨもドクターの事を嫌う……私はそんなに嫌いじゃなかったけど……今は違うから……」

「けど……ドクターがお母さんを持つてるなら……私はあの人達からお母さんを取り戻さないといけない……」

意外そうに尋ねる男性に対して、淡々とルーテシアは答えていく。

「けど……それよりも大切な事がある……」

「ん……それは何だい？」

ルーテシアは金髪の男に振り向き、そして微笑みを浮かべた。

「あなたが……シャアがドクターの所にいるから……」

シヤアが私に会って心を教えてくれたから…私にも心があるって…
念話とかそういうのじゃなくて…シヤアと同じ、私も本当の心でお
話出来る人だって

シヤアが教えてくれたから…だから、私はシヤアと一緒にいたい
から……」

「そうか……優しいなルーテシアは……」

そう言って金髪の男性ーシヤア・アズナブルはルーテシアの頭を撫
でてやる。

ルーテシアは目を細めて笑みを浮かべ、心地良さそうにしていた。

アナザーA（後書き）

いかがでしたでしょうか？

所々に今後の伏線を散りばめてみました。

スキンヘッドの男の開発品なんか特に今後の設定に関わりますし…

シンシアがアグスタ戦に参戦決定

果たしてどんな大暴れをするのやら…

ユーノと繋がっているバルクホルツ。

バレバレだからぶっちゃけますけど

この辺の描写は虚空さんのアイデアが元です。

（本当に参考になりました…）

最後にもう一回

大佐については私は断じて狙ってない！！

（いや本当に…気づいたのがプロット制作後だったんです…
本作のルーテシアは原作から大分逸脱していきます）

それではまた

第5話（前書き）

フォワード陣の訓練模様
そして更に現れる異邦人
ベルクトに自身の秘密を打ち明けるあの人物……

※今回は後書きは無しです

第5話

翌日、機動六課隊舎の周辺

「ここだな……」

まだ朝日が昇り始めて間もない時間帯に2人組みの青年が歩いていた。

青年の内の1人が、近くに居た局員に声をかける。

「おい、そこのお前」

「はい？何で……ってヒイ！」

声をかけられた局員はその2人組みを見て、一瞬ドキッとしてしまった。

何せこんな場所でノースリーブの美青年、されど強面の2人組などに遭遇すれば

大抵の人間は驚く。

「機動六課の隊舎とやらはここでいいのか？」

「は、はい……そうですね……あなた達は？」

青年の質問に緊張しながら答えた局員は、更に質問をする。

「おっ、来たのかヒイロ、五飛」

だが青年が答える前に、たまたまその近くを通りかかったデュオが親しげにその人物達の名を呼んだ。

「どうだったよ、調査の方は？」

「残念ながらこれといった収穫は無かった……」

「ガジェットととやらが何回か襲ってきたな…まあ、造作も無く破壊したが」

デュオの問いに、青年2人ーヒロ・ユイと張・チャン・ウーフエイ五飛は簡単に今までの経過を報告する。

「ちょうどいいや、これから六課の連中に俺達の事を紹介をするんだ仕事終わりで悪いんだけど来てくれるか？」

「フン…いいだろう」

「……………」

五飛は少し不満げに、ヒロは無言のままデュオに従ってついて行く。

その光景を先程の局員はポカンとしたまま見つめていた。

＊

食堂、フォワード4人は訓練着に着替えて朝食を取っていた。

「しかし、うちの部隊って関係者繋がり多いですね

隊長達も幼馴染同士なんでしたっけ？」

ティアナが同席していた眼鏡の女性ー通信主任兼メカニックの

シャリオ・フィニーノ、愛称シャーリーに尋ねる。

「そうだよ、なのさんと八神部隊長は同じ世界出身で、フェイトさんも」

子供の頃はその世界で暮らしてたとか」

「えっと…確か管理外世界の97番でしたっけ？」

途中でエリオも会話に加わる。

「97番って、家のお父さんのご先祖様がいた世界なんだよね。」

自分の皿にパスタを山盛りにしながらスバルが言う。

「その97番に極めて近い構造をしていたのがアムロ隊長やプリベンターの皆さんがいた世界なんですよね？」

「そう…通称97-2番、今となっては外面的には

記録上にしか存在しない幻の世界なんて言われてるけど…」

キャロの質問に、シャーリーがやや表情を曇らせながら答える。

「どういうことですか？」

「10年前の闇の書事件で97番と97-2番が一時的に繋がっていたから

調査を怠っていた所為ってのもあるんだけど、あの世界の次元座標の周辺は

管理局から遥かに遠くの、それも次元がとても不安定な一種の隔離空間なの。

だから、正攻法で行こうにもとてもじゃないけど行けないような場所ってわけ…

正直97番にあったゲートは奇跡に近い存在だったらしいわ」

一通りの説明をシャーリーがしていく。

「そんな遠い所からこんな場所まで…アムロ隊長達も大変な思いをしてるんですね…」

「まあ、帰る手段は管理局のバックアップ付きで必死に探してるみたいだし

管理局の方でも97-2の世界へ行く方法を必死に模索してるから一生こっちの世界で…なんて結末にはならないと思うわ」

少し暗い感じで話すスバルに、シャーリーがやんわりとフォローを入れる。

「でも凄いですよね、97—2番世界は魔法が全く存在しないらしいのに」

こっちに來た皆さんは、全員が凄腕なんですから」

「あ、それは私も思ったな。アムロ隊長なんかのはさんや、八神部隊長にも

遅れをとらない実力らしいもん」

「案外みんな気づいてないだけで、向こうの世界は優れた魔導師の宝庫なのかもしれないわね」

「あゝありますねそれ!!」

キャロの切り出した話に、スバルとシャーリーがすぐにまた表情を明るくして参加する。

「……………」

その話題をティアナはただ1人、複雑そうな面持ちで聞いていた。

「はーい、皆注目や!!」

食堂の中にはやと隊長陣、そしてプリベントアのメンバーとベルクト達5人が入ってくる。

「今後、私たちに協力してくれる皆さんを紹介するな。」

まずはプリベントーの皆さんや、知っての通り聖王教会直属の諜報機関で、5人とも凄腕の魔導師や」

言われてプリベントーのメンバーが左から順に自己紹介をしていく。

「……プリベントー01、ヒイロ・ユイ……」

「プリベントー02、デュオ・マックスウェルだ！みんなよろしくな！！」

「プリベントー03、トロワ・バートンだ、よろしく頼む」

「プリベントー04、カトル・ラバーバ・ウィナーです。至らない点もあると思いますが……

皆さん、これからよろしくお願いしますね」

「フッ……プリベントー05、張・五飛だ」

全員が紹介を終えると同時に拍手が巻き起こる

所々からどういわけか女性局員の黄色い声まで聞こえてくる。

はやてが一旦それを抑えた後、今度はベルクト達の紹介に入る。

「ほんで、こっちの皆さんが個人的な民間化協力者……」

知ってる人もおると思うけど、PT事件や闇の書事件で私たちと一緒に戦ってくれたあの英雄さん達や」

その言葉に局員達がざわつく。

「あ、あの……バレル・オーランドです！！」

場の空気にいまいち馴染めず、緊張気味にバレルは自己紹介する。

「何あがってんのよバレル……フェイ・ロシユナンテです、皆さんよろしくお願いします」

パートナーにやや呆れを見せつつ、フェイは対象的に落ち着いた物腰で言う。

「タック・ケプフォードだ、よろしく頼む」

「マリナ・カーソンです、以後よろしく」

タックとマリナはお堅い感じに自己紹介をしていく。

「……………ベルクトだ」

ベルクトはいつものすまし顔で、とても簡潔に自己紹介を済ませる。
そんな彼の様子を見てバレルが念話を飛ばした。

（ベルクト……もう少しフレンドリーにしてもいいんじゃないのか
？）

（……………こういうのは性に合わん……）

ベルクトはちよつとイラついた感じに念話を返した。

「はい、じゃあみんな、今日もお仕事頑張ってな!!」
ベルクト達の紹介が終わり、その後のはやてのその一言でその場は
終了となった。

*

訓練場、今日からフォワード陣は個別スキルの訓練に入っていた。

「どおりやああああ！！！」

「うわああああああ！！！」

ヴィータがグラーファイゼンを振るい、スバルをバリアごと後ろの木に叩きつけた。

「いたたた……………」

「成る程……やっぱバリアの強度自体はそんなに悪くねーな」

破られていないスバルのバリアを見て、ヴィータが感心したように言う。

「あたしやお前のポジション、フロントアタッカーはな

敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事だ

防御スキルや生存スキルが高いほど、攻撃時間を長く取れるしサポート陣にも頼らねえで済む：これはなのはに教わったな？」

「はい！ヴィータ副隊長！！！」

ヴィータの指南に、スバルは真剣な表情で力強く答える。

「用途に応じて防御スキルを使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされねえように

下半身のふんばりと、マッハキャリバーの使いこなしを身に付けろ！！」

「頑張ります！！！」

「防御ごと潰すのはあたしの専門分野だ：ぶっ叩かれたくなかったらしっかり守れよ：」

「はい！」

アイゼンを向けて言い放つヴィータの言葉に、やはりスバルは真剣な表情で答えた。

そんな2人のやり取りを、離れた位置でタックがポカンと見つめていた。

「ん……どうしたんだタック？」

タックの視線に気づき、ヴィータが振り向きながら言った。

「いや……大したものだなんて思ってたな……」

「？……そりゃどういう意味だよ？」

ヴィータが目を細める

「お前がまさか……そこまで人に物を詳しく教えられるようなそんな性格になっているのが意外だったって事さ」

「なっ……失礼だぞテメェ!!」

「いやあ……そういうわけじゃ……10年前と比べて立派になったなと……」

「う、うるせえよ!! 邪魔になるから向こう行つてろ!」

ヴィータは顔を赤らめながら怒鳴り散らす。

タックはヴィータを微笑ましげな表情で見た後に、その場から退散していった。

（副隊長……あんな顔もするんだ……）

普段は滅多に見せないヴィータの一面を見て、スバルはそんな事を考えていた。

「…………おっしスバル、続き始めっぞ……」

「!……はい……」

先程よりも更に厳しそうな雰囲気を持ちながらヴィータは呟く。
スバルはヴィータのその剣幕に冷や汗を垂らしつつ答えた。

＊

別の場所では、エリオとキャロがフェイトの指導を受けていた。因みにその場所にはベルクトも一緒にいる。

「エリオとキャロは、スバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから…反応と回避がまず最重要、例えば……」

フェイトの周辺に浮かぶ擬似ターゲットが攻撃を放つ。

「こんな風に…動き回って狙わせない……攻撃が当たる位置に長居しない……」

放たれる攻撃を難なくヒラリヒラリとかわしながらフェイトが説明していく。

「これを低速で確実に出来る様になったら…速度を上げていく」

擬似ターゲットが先程とは比較にならない量の攻撃を放っていく。フェイトは除々に追い込まれ、そして一斉射撃を受ける。

「「あっ……」」

エリオとキャロが爆煙を見つめる。

「……大したものだ」

が、ベルクトはフツと笑った後に背後に素早く振り向く。

エリオとキャロもそれにつられて後ろに振り向いた。

「こんな感じにね」

そこには全く無傷のフェイトが笑って立っていた。

よく見ると攻撃点からフェイトのいる場所にかけて、地面が挟れていた。

「今のも誰でも出来る基礎アクションを早回しにしてるだけなんだよそれをとことん極めていけば……………ベルクト？」

「……………その為に俺を呼んだというわけか？」

互いに微笑を浮かべながら、最低限の言葉で2人は意思疎通する。

ベルクトはフアントムモードでバリアジャケットを展開し、

擬似ターゲットの浮かぶシュミレーターを中心に立つ。

その瞬間、擬似ターゲットがフェイトの時よりも更に激しい勢いで攻撃を放っていく。

「……………」

だが、ベルクトは縦横無尽に高速移動し、時には屈み、時には横に飛び退き

また、時にはライフルから形成した魔力刃で攻撃を切り払い敵の攻撃全てを完璧に回避して見せた。

「す、凄い……………」

「目で追いきれない……………」

フェイト以上の高速回避を見せるベルクトに2人一特にエリオが強く驚く。

「まあ……………ベルクトの場合は少し独特の動きが加わっているけど……………大体は私と同じ……………基礎のアクションを超高速で回していくとこんな感じになるの」

「高速であればあるほど……………勘やセンスよりも、体に刻み込んだ経験で動くべき……………という事だな？」

「うん……………その通り」

シュミレーターを終えたベルクトが付け加え、フェイトがそれを肯

定する。

（凄い……やっぱり、フェイトさんがいつも言ってた通りだ……）
エリオはベルクトの事を強い義望の眼差しで見つめていた。

＊

ティアナはなのはと、協力で更にバレル、トロワの計3人と共に訓練していた。

「うん、いいよティアナ、その調子！」

「はい！！」

なのはが魔力弾を操作しながら言い、それを撃ち落しながらティアナが答える。

「ティアナみたいな精密射撃型は、一々避けたり受けたりしてたんじゃない」

仕事が出来ないからね」

「……コントロール」

なのはのその言葉に続いて、右隣にいたトロワが浮かばせていた魔力弾をティアナに向かって放つ。

「!!!!!!」

ティアナは反応が遅れ、横に飛び退いてそれをかわす

「ほら！そうやって動いちゃうと後が続かない！！」

なのはが新たな、それぞれ軌道の違う魔力弾を2つ放つ。

ティアナは素早く立ち上がり、それぞれの軌道に対応した魔力弾でそれを撃ち落す。

「そうそれ！足は止めて、視野を広く！！」

「……デイスパーション！！」

今度は左隣にいたバレルが、デイスパーションダガーをティアナに向かって飛ばす。

「射撃型の真髄は……！」

「あらゆる相手に、正確な弾丸をセレクトして、命中させる……判断速度と命中精度……！」

ティアナはデイスパーションから放たれる魔力弾を撃墜し、その後素早くリロードを行い、デイスパーション本体も撃墜していく。

「見事だな……少々焦りのような物も感じられるが」

魔力弾を操作しながら、冷静な口調でトロワが賛辞を述べる。

「けどなのは、本当に僕なんかが教える側に立って良かったのかい？」

「うん、バレルさんのデイスパーションはこの訓練にあってたし……ティアナにもより良い経験を積みませられるかなって思ったから……」
バレルの問いに、なのはが穏やかな表情で答える。

（何と言うか……完全に教官って雰囲気だよなあ……時の流れってのは凄いや）
バレルはつい最近まで会っていた9年前と今のなのはを比較しその成長振りをしみじみと感ずるのであった。

＊

「いやあーやってますなあ」
離れた位置で新人達の訓練をモニターに眺めながら
ヘリパイロットのヴァイス・グランセニック陸曹が軽い感じに言った。

「初出勤がいい刺激になったようだな」

「いいっすねー、若い連中は……」

隣に居たシグナムが腕を組みながら言い、ヴァイスがそれに答える。
「まあ、若いというのはそれだけ成長の見込みがあるという事だからな」

みんな荒削りながらも良い動きをしている……って

元々魔法との関わりが薄い俺が言っても仕方ないかな……」

シグナムの近くに居たアムロが笑みを浮かべながらそう言う。

「シグナム姉さんやアムロさんは参加しないんで？」

「私は古い騎士だからな…皆とはデバイスの勝手も違うし…剣を振るうしかない私が、バックス型のメンバーに教えられるような事もないしな…」

「俺もシグナムと同じだな…俺のデバイスもこっちの常識で考えれば大分異質だし…そもそも俺もシグナムも物を教えるのはあまり得意じゃないしな」

ヴァイスの問いに、シグナムとアムロがそう答える。

「第一、アムロが訓練に参加したら訓練にならなくなるのがオチだろう？」

「そっすね…何せなのは隊長と並ぶ伝説級のエースなんすから…」

「おいおい、茶化すのはやめてくれ…」

からかい気味に言うシグナムとヴァイスに、アムロは苦笑を浮かべるのであった。

＊

午前の訓練が終わった後、タックとマリナの2人ははやて、リインと共にある人物の元を尋ねに来ていた。

「新部隊、なかなか調子いいみたいじゃないか」

「そうですね…今のところは」

ソファの中央に座りはやては反対側に座る壮年の男性―

陸上警備隊第108部隊隊長―ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐にそう答える。

「そちらのお2人さんが例の白い流星さんと同じ……?」

「はい、私の命の恩人です♪」

次いでゲンヤは、はやての両隣にいるタックとマリナに目を向ける。

「タック・ケプフォードです」

「マリナ・カーソンと言います」

固い表情でタックとマリナは自己紹介し、ゲンヤと握手を交わす。

「……成る程、確かに場数を踏んだ雰囲気を持ってやがるな……」

あいつらの噂どおりってわけか……」

ゲンヤが朗らかな笑みを浮かべながら2人にそんな事を言う。

「そういえばはやて、私達に会わせたい人がいるって言ってたけど……」

ふとマリナがはやてに対して尋ねる。と、その時部屋の扉が開いた。

「お、噂をすれば何とやらだな……」

扉の方に顔を向けてゲンヤが言う。

「ギンガ!!!」

「八神二佐! お久しぶりです!!!」

リインと共に入ってきた人物―ギンガ・ナカジマ捜査官を見て

はやては嬉しそうに声を上げる。そして

「やっぱり! あなた達だったんですね!!!」

「アムロ大尉から話は聞いてたけど……まさか本当にこっちで会うとは……」

ギンガの後ろに居たオレンジ髪の少女と青いジャケットを羽織った少年が驚いたように言った。

「!!!!……君達は確か……」

「ノヴィス・ノアにいたブレンのパイロットの……」

「はい!!! 覚えていてくれたんですね!」

「あの時の戦いでは本当に世話になりました」

同様に驚いていたタックとマリナに対して、少年と少女―伊佐未勇

と宇都宮比瑪はそう答えた。

＊

その後、はやてとゲンヤが今後の捜査に関して大事な話があるので、それ以外のメンバーは

場所を移して会話をしていた。

「しかし驚いたなあ…まさか君達までこっちに来ているとは」

「俺もですよ…あなたとはずっと一緒に戦ってきましたからね」

タツクと勇が親しげな感じでやり取りする。

「じゃあひょっとして…あなた達も魔法を？」

「はい！私も驚いちゃいました！ブレンが文字通り私とほとんど一体になっちゃうんですから…」

「この2人のデバイスって凄いですよ…インテリジェント系とはまた

違った作りなのに…まるで生きてるかのごとく感情豊かで」
マリナの質問に比瑪がにこやかに答え、ギンガが付け加える。

「俺と比瑪がこっちに来たのが丁度一年前…拾ってくれたのがゲンヤさんだったんです」

「それで、ギンガさんにこっちの世界の事や魔法の事とか教わって…その途中でアムロさんとかと再会…そんな感じで今日まで過ごしてきました」

勇と比瑪がこれまでの経緯を説明する。

「それでアムロ一尉のお考えで、六課意外にも自分達の世界の人間がいた方が

元の世界の手掛かりを探しやすくなるって話で、私達と一緒に活動しているんですよ」

2人の説明に更にギンガが付け加える。

「まあそういうわけで…俺達もナカジマ三佐達と一緒にレリック…E2に関する調査を行なう事になったんです…」

勇がそう言うと、彼の近くにリインが飛んでくる。

「勇さんと比瑪ちゃんもとーっても強いですからね!!」

それにギンガも加わって一緒に捜査してくれるから、とーっても心強いですよ!!」

「ふふ……ありがとねリイン」

「はい!!」

穏やかな表情で言う比瑪の言葉を聞いて、リインは嬉しそうに彼女の周りを飛び回った。

＊

その日の訓練も無事終了し、日も完全に落ちて辺りが暗い時間帯

「開いているぞ」

扉のノック音を聞いて、ベルクトはそう答える。

「失礼します……」

ベルクトの部屋に入ってきたのはエリオであった。

「何か用があったのか？」

「いえ：用ってわけじゃないんですが：一度お話してみたかったんです：ベルクトさんと」

いつもの冷静な口調で言うベルクトに対して、やや戸惑いを見せながら、エリオは答える。

「ずっと管理局で噂になってましたから……」

P T事件と闇の書の事件の影の英雄の1人：『紫紺の魔導師』ベルクト……」

「ほう：俺も随分と誇張表現されるものだな……」

エリオが話す管理局での自分の評価を聞いて、ベルクトは笑みを浮かべながら言う。

「いえ！！今日の訓練での姿を見てその通りなんだなって思いました！

フェイトさんがあんなに良く話してくれたのも納得できます……」

「そうか……………」

エリオは尊敬の眼差しを向けて興奮気味にベルクトに話していった。

すると、エリオは突然表情を暗くさせて呟く。

「お話したかったのもそうなんですが……僕、ベルクトさんにお伝えしたい事があって来たんです……」

「何だ…?」

雰囲気の一変したエリオに、それを察したベルクトが真剣な面持ちで尋ねる。

「……………僕も、同じなんです」

「同じ……同じとはどうい……!!まさか……………」

その言葉の意味する物を瞬時に理解し、ベルクトは目を見開く。

「はい……僕もフェイトさんと同じ……クローンなんです」

エリオが語った自身の過去……

自分ーエリオ・モンディアルは病死したモンディアル家の

1人息子のクローンとして、フェイトと同じプロジェクトで生まれ

た事

その事実を突き止めた研究機関の人間が自分を引き取りに来た事実を突きつけられた両親はその瞬間に抵抗をやめてしまいそれを肯定と見た自分の心に深い絶望が生まれた事
絶望のまま研究機関でまるで実験動物の様に扱われた事

「研究機関での生活は本当に酷い物でした：何せその施設では星すら見た事無かったんですから：僕の心は段々とやさぐれていったんです」

暗い表情のままエリオは、ひしひしと己の過去を語っていく。

研究機関での影響で重度の人間不信に陥ってしまったエリオは誰も、何かもかも、それこそ自分自身の事すら信じられなくなってしまったのだ。

フェイトの手によって管理局に保護された後もその思いは消えず寧ろ日に日に増大していったのだ。

どうして自分はこの世に生を受けたのだろうか？

どうして自分はこんな酷い目に会わなければいけないのだろうか？

どうして自分は人形だの偽者だの……イワレナケレバイケナイ？

イヤ……イツソノコトコンナ……コンナセカイナド……ナケレバ……

そして、エリオはある日暴走した。

魔法を使って自分が考え付く限りの暴挙を繰り返した。

自分には何も無い、自分という存在に価値すらない。

なら、自分の居る意味など無いこの世界など、壊れてしまえばいい。
そのような狂気と共に……

しかし、そんな彼を救ったのがフェイトだったのだ。

魔法を使って暴走するエリオをフェイトは体を張ってそれを止めて
そして、エリオに真っ直ぐ向き合い、真摯な説得を何度も何度も行
なったのだ。

「フェイトさんは言ってたんです……自分も同じだったって

誰かの紛い物だと教えられて生きる目的を見失いかけたと……でも、そんな自分を救ってくれたのがベルクトさんだって言っていました

世界に同じ人間なんて誰一人として存在しないって……

死んだモンディアル家の人間とあなたは生まれは同じかもしれないけど

歩んできた道は違う……あなたはあなただけの道を歩いてきた

エリオ・モンディアルという、ちゃんと生まれた意味のある1人の立派な人間だって……」

エリオの話を、ベルクトは悲痛な思いで聞いていた。

目の前の少年は、昔の自分と同じ過ちを犯そうとしたのだ。

生きる目的を見失いかけ、世界に絶望し、狂気にまみれ……

そんな自分の写し身のような少年を、かつて自分自身が救った大切な人間である

フェイトが救った事に感謝し、同時に自分やフェイトと同じような悲劇を歩んできた人間がまだ存在した事に深い怒りも感じていた。

暫しの沈黙を挟んだ後、真剣な表情でベルクトは尋ねる。

「……エリオ、お前は今何を目的にしている？お前はどんな道を歩むつもりなんだ？」

「僕は……」

俯いたままエリオは少し考え、やがて顔を上げて答える。

「僕は……僕の事を救ってくれたフェイトさんや、そのフェイトさんが大切だと思っている

機動六課の皆さんの為に、自分の力を使って精一杯戦いたいんです……それがフェイトさんへの恩返し……僕が歩むべき道だと思っています……」

「そうか……」

エリオの答えを聞いて、ベルクトは屈み、笑みを浮かべて彼の右肩に手を置く。

「それが自分の道だというなら……お前はそれで十分立派な人間だエリオ……お前はエリオ・モンディアルというれっきとした1人の人間だ……」

「ベルクトさん……！」

ずっと憧れを抱いていた人物にそう言われ、エリオはぱあっと表情を明るくさせる。

「そして俺の道も同じだ……俺の人生を変えてくれたフェイトを……そしてそのフェイトの仲間達を守る為に戦う……それが俺の道だ……歩むべき道が同じだというなら……手を取り合って共に歩もうじゃないか……」

「はい……」

「エリオ、お前が俺に自身の事を話してくれて感謝する。

今後も、全力で自分の道を歩んでいけ……フエイトの為にもな……」
「はい!!」

ベルクトの言葉にエリオは、力強く頷いて答えるのであった…

アナザーB（前書き）

他勢力の現状その2です

※読む前に一言

ラストに関してのツツコミは受け付けません。

アナザーB

— Another Side ?

男は夢を見ていた。自分が生まれるまでに至った事に関する夢を

男は無数の屍の上に立っていた。自分と全く同じ姿形をした屍の上に

別の場所にはまた違った屍の山が見える。

金髪の少女と赤髪の少年の屍の山。

そして、自分が今踏みしめているのは：

＊

「……B、起きて下さいBB」

外から自分を呼ぶ声が聞こえて、男の意識はそこで覚醒する。

「むう……何の用だよ親父？」

自分が眠っていたカプセルの蓋を開放し、メットの男—BBは

生まれたての姿であるその身体を起こし、だるそうな感じに尋ねる。

「あなたに1つ聞きたい事がありましたね……」

BBを尋ねに来た人物、ポニーテールの男は柔らかい口調で言う。

「出来損ない達をこの世界に連れてきたのはあなたですか？」

「そうだよー、親父があんだだけ憎々しげに話してたもんだからさあチャンスがあったら連れてこようって前々から考えてたわけ」

あっけらかんとした感じにBBは質問に答える。

それを聞いてポニーテールの男はため息を1つ吐いた後に言った。

「全く…玩具を連れてくるのもいいですけど…きちんと管理するのですよ？」

あなたの気まぐれで私の計画に支障が出たら元も子もないのですから…」

「わかってるって、自分が持ってきたんだから自分で何とかするさ今までそれで親父に支障が出る範囲の大きな迷惑はかけなかったろ？」

軽い感じでBBは答える。

「それならばいいんです…」

ポニーテールの男はそう言って部屋の扉の方へと歩いていく。

ふと、扉の前で足を止めた。

「BB…わかっているとは思いますが……」

先程までとは打って変わった冷たい口調でポニーテールの男は呟く。

「あなたとセデイスは確かに…私が生み出した子供達の中でも最高に近い…」

あなたが私を満足させる限り、私はあなたを息子と呼び

あなたに好きなように遊ばせてあげます…けど

もしそうでないなら…あなたもあのガラクタどもと同じ運命になる事を忘れないことです…」

そう言ってポニーテールの男は部屋から立ち去った。

「……はあ、相変わらずだねえ親父も……」

気だるげに一言そう呟いた後、BBはカプセルを閉じて横になり、再び眠りについた。

— Another Side ?

「……そうか、気をつけてな……」

「うん……ゼストも頑張ってるね」

通信モニターの向こう側で、ルーテシアは微笑みを浮かべた。

通信を終えた後、2人の男は再び歩み始める。

「……ルーテシアも以前に比べて随分明るくなったな」

焦げ茶色のコートを纏った男性—ゼスト・グランカイツがそう呟く。

「あの男が側にいるというのが納得いかな……」

「そんな事言うなよマイヨの旦那、ルールーがあんなに明るくなつたのも

シアアのおかげなんだぜ？」

「フン！どうだかな……」

2人の男の周りを飛び交う赤髪の少女―アギトの言葉に
もう1人の男―マイヨ・プラートはつっけんどんに言い返す。

「シャアの奴が言っていた…ニュータイプとか言う力……」

それでルーテシアも心を知る事が出来たのだからな…間違いいではない…」

ゼストが固い表情のままそう言い、マイヨの方に顔を向ける。

「マイヨ、お前も成すべき事があるなら、俺のワガママに付き合う必要は無いんだぞ？」

俺達よりも管理局の方が、元の世界に帰る手段も探しやすいしな…」
それを聞いて、マイヨもゼストの方を向く。

「確かに…私はギガノスの同朋の為に一刻も早く帰らねばならない…だが」

マイヨは首に下がった鷹を模したオブジェを握る

「お前は文字通りの私の命の恩人だ、受けた恩も返さぬまま帰るなど
ギガノスの戦士としての名が泣くというもの…だから私がここを離れるのは

ゼスト…お前の目的を果たした時だ……」

「……フツ」

「かぁー！！カッコいいねえ！！マイヨの旦那アー！！」

マイヨの決意を聞いて、ゼストはフツと笑い、アギトは感動して辺りを飛び回る。

そして3人の姿は、そのまま夜の闇へと消え行くのであった。

— Another Side ?

「隊長……これは一体……」

「……………」

とある魔導師隊の隊員が隊長に尋ねる。

その日、その魔導師隊はとある犯罪グループのアジトを突き止め
そのアジトに突入する手筈になっていた。

彼らは地上務めのベテラン部隊、隊員のほぼ全てがAランクで
隊長を務める男もA Aランク、何十年もの実績がある優秀な部隊だ。

だが、アジトで彼らが見た物はわけがわからない物であった。

「離せコラァ！チクショウ！あのガキ共…俺らの物みんなかっぱら
いやがって！」

「親分！やめましょうよ！あんな化け物みたいなガキどもとはもう
戦いたくないっすよ」

「ウルセエエエ！俺らがたったの3人のガキ共に負けたんだぞ！こ
のままで済むかアアアア！！」

犯罪グループである盗賊団の全員が強力なバインドで縛り付けられているし

アジトにあった金目の物がほとんど無くなっていた。

しかも後で調べてわかった事なのだが

どういうわけか民間人から盗んだ品は全部手付かずなのである。

だが、隊長と副隊長はさして驚いた様子はなく、あたりを見渡す。そして隊長はアジトの隅っこに落ちているある物を見つけた。

「……また彼らですか？」

「ああ……どうもそうらしいな……」

副隊長の言葉に、隊長は疲れた感じで答えた。

「クソオオオ!!あの濁声のガキイイ!!何がホールドアップだ
アアア!!」

「親分ゝ落ち着いてえ!!」

「じゃきゃあしイイ!!今度会ったらあのメガネとボードの野郎
諸とも…」

盗賊団はまだ喚き散らしている。よほど悔しかったらしい。

(全く……どこの義賊気取りなのだろうな……)

隊長がアジトの隅で拾った1枚のカード、それにはこう書かれていた。

炎の魔導師団、GGL参上!!

アナザーB（後書き）

いかがでしたでしょうか？

怪しさ満載のポニーテールの男とBB

果たした今後どのように関わってくるのか？

そして登場、ギガノスの青き鷹

戦う動機をどうするか悩んだんですが最終的にこんな感じに
これならマイヨっばいかな…

ラストに関しては本当にツッコまないで下さい…

アイツらならこういうノリもありかなって思ったんです…

次回、ホテル・アグスタ戦になります

今更なんだけど前話のエリオとベルクトのやり取り、ちょっとオーバーにしすぎたかなとか思ってた：

それではまた

第6話（前書き）

ホテルアグスタでの戦い
そこに現れる敵とは…？

※2／1 アムロの戦闘描写を修正

第6話

機動六課のメンバーはヘリに乗ってホテル・アグスタへと向かって
いた。

今日ホテルでは骨董品オークションが開催されるのだが

その中には取り引き許可の出たロスト・ロギアも混じっている。

その反応をレリック、つまりE2と誤認したガジェットが現れる可能性があるとの事。

それで、会場警備と人員警護の為に機動六課にお呼びがかかったのだ。

といっても昨日からアムロ、シグナム、ヴィータの3人に加えたまたま仕事の手が空いているプリベンターがフルメンバーで警備に当たっていたりするので、よっぽどの事が無い限りは問題ないような

そんな雰囲気もあったりするのだが……

なのは達隊長陣とベルクト、バレル、フェイの3人が建物内の警備
フォワードメンバーとタック、マリナの2人が追加で外側の警備に
当たる。

「でも……僕達に加えてプリベンターの人たちまで来てるとなると……ちよつと人員を割きすぎな気もするんだけどなあ……」

バレルが顎に手を置きながら疑問を漏らす。

「いや……ガジェット共がまたコーリアンを出してくる可能性もある……」

それに今回の任務は防衛目的だ、敵の数がはっきり把握できない以上人員は多いに越した事は無い」

それに対してベルクトが冷静な口調で返答した。

「そういえば聞いた？昨日またGGLが現れたんだって！」

スバルが興奮気味にそんな事を言う。

「何ですか？そのGGLって？」

エリオが首を傾げながら尋ねる。それにティアナが答えた。

「最近現れるようになった犯罪行為を犯した魔導師のみをターゲットにした」

謎の魔導師団……何でも、管理局の魔導師より先に犯罪者集団を無力化して

それを自分達の仕業だと誇示していく……素性も目的もはっきりしない謎の3人組の魔導師達らしいわ」

ティアナの説明を聞いて、フェイが少し呆れた感じに呟く。

「犯罪者のみって……こっちの世界でも今時そういうのがいるのね……」

「本局の方では自分達の面子を潰されてるって、あまりいい評判ではないみたんですけど」

「でもさ、私はそういうの少し懂れちゃうな、何かカッコよくて」
フェイの言葉を聞いてティアナが更に説明を加え、その横ではスバ

ルが

目を輝かせながらGGLへの率直な感想を口にする。

(GGL……何故だろう……何かどうもひっかかる響きだ……)

皆の話を聞きながら、バレルは内心でそんな風に考えていた。

ふと、キャロがシャマルの方を向いてこう言った。

「あの…シャマル先生。さっきから気になってたんですけど…その箱って…？」

「ん？ああこれはね…」

シャマルは横においてある箱に目を向けた後、にこやかに言った。

「隊長達とベルクトさん達のお仕事着♪」

＊

ホテル・アグスタ

オークションの入り口で、受付の男が次々と来た人物達を案内していく。

「あっ！…」

チケットではなく身分証を見せてきた女性達を見て、男は驚く。

「こんにちは、機動六課です」

そこにはドレス姿のなのは、フェイト、はやての3名が立っていた。

「……何で俺までこんな格好をしているんだ」

その少し離れた位置では黒いスーツ姿のベルクトとバレル
そしてなのは達と同じ、ドレス姿のフェイが立っていた。

「この場の雰囲気に合わせてる以上仕方なからう」

愚痴をこぼすバレルに対して、ベルクトがそう言う。

「と言うより：何かお前そういうの着慣れてる感があるな？」

「昔の立场上、こういう場所にはよく足を運んだからな」

嘗ての軍人時代、新連邦の幹部であったベルクトは

新連邦の高官が主催するパーティなどによく招かれていたので

この手の服装をするのは慣れていたので。

「まあまあいいじゃない、こんな服滅多に着れるもんじゃないわよ」

「そりゃそうだけどさあ……」

バレルとは対象的に、フェイはこの状況を楽しんでいるみたいだ。

「それとも：こういう格好の私は嫌？」

「なっ……！！」

上目遣いでいきなりそんな事を言われ、慌てふためくバレル。

「いや……その、別に……というか……いつもより綺麗だし……」

「ふふふ……ありがとバレル」

そして改めてドレス姿のフェイをまじまじと見つめて、バレルは照
れながら顔をそらす。

そんな彼を見て、フェイは満足げに笑いながらも、顔を赤らめる。

「お前ら……こんな状況でまで惚気るな……」

目を瞑り、呆れた感じでベルクトは呟く。

「うん、3人ともよう似合うてるで」

とそこに、受付を終えたはやて達がベルクト達に近寄ってくる。

「ベルクト……よ、よく似合ってるよ……」

フェイトはスーツを纏い、いつも以上に大人の魅力を感じさせるベルクトを見て

顔を赤らめながらもじもじとそう呟く。

それに対してベルクトも、ドレス姿のフェイトを改めて見つめ、笑みを浮かべながらこう言った。

「ああ……お前もそのドレス、実に魅力的で綺麗だな」

「……………／／／」

フェイトは無言のまま顔を真っ赤にしてしまう。

(にやははは……ベルクトさんも惚気てるじゃん……)

その光景を見ていたなのはが苦笑いしながら内心でそう呟いていた。

＊

その後、ベルクトとフェイトがホテルの廊下を歩いていた
「オークション開始まで後3時間か……」

「うん……でも、会場内の警備は流石に厳重みたいだし……
一般的なトラブルには十分対処できると思うよ」

「まあ……外は他のメンバーとプリベンターも警備にあたっている……
よほどの事が無い限り、ここにガジェットが入ってくる事はないだ
ろう……」

「私達の出番はよっぽどの非常事態だけだね」
そんな感じにやり取りしながら2人は廊下を歩いて行く。

「あれ……今の？」
そんな2人の姿をすれ違い様に見て、首を傾げる黄土色の髪の男が
居た。

＊

ホテルの外部、周辺を警戒していたティアナはスバルと念話を行な

っていた。

（でも今日は、八神部隊長の守護騎士団全員集合かあ…）

（そうね…あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長達のこと…）

（うーん…父さんやギン姉から聞いたことぐらいだけど…八神部隊長の使ってるデバイスが魔導書型で、

その名前が夜天の書っていう事。副隊長達とシャル先生、ザフイーラは

八神部隊長個人が保有してる特別戦力だって事。で、それにリイン曹長合わせて6人揃えば、

無敵の戦力って事。まあ、八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから

あたしも詳しくは知らないんだけどね……）

スバルが一通りの説明をする。

（ティア、何か気になるの？）

（別に…）

（そ。じゃあまた後でね）

スバルはティアナとの念話を終える。

念話を終えた後、ティアナは考える。

六課の戦力は無敵を通り越して異常と言える。隊長格全員がオーバ

ⅠS、副隊長でもニアSランク。

他の隊員達も、前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。

10歳という年齢ながらもBランクを取っているエリオ

竜召喚のレアスキルを保有しているキャロ

危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

そして魔法が全く存在しない世界からやって来たにも関わらず

なのは達隊長陣と同格と言える力を保有し、機動六課の特別分隊の隊長であるアムロ

聖王教会のバックアップの下、数多の世界を駆け巡っている実績もあり

六課の正式な戦力ではないにしろ、全面協力体勢にあるプリベンタⅠの5人

10年前からなのは達と親交が深く、PT事件、闇の書事件でも大活躍したというバレルとフェイ

はやての守護騎士団と肩を並べ、その無敵の戦力を更に揺るぎ無い物にしているタツクとマリナ

そして：詳細は不明だがフェイトと強い繋がりがあり、実力も彼女に遅れを取らないベルクト

（やっぱり：うちの部隊で凡人は私だけか……）

ティアナは静かに目を閉じる。

「どうかしたんですか？」

と、その場にカトルが現れる。

「ああ、いえ！その……な、何か御用でしょうか？」

突然声をかけられてティアナは慌てるも、すぐに持ち直してカトルに尋ねる。

「いや、何か思いつめた様な顔をしてたから、ちょっと気になってね…」

「……いえ、大丈夫です……」

少し暗い感じにティアナは受け答える。

すると、カトルは穏やかな表情でこう言った。

「そうですか……ならいいんです、こういう時こそ平常心が大切だからね

魔法の使用経験は皆さんの方がずっと多いですから、僕らも頼りにしています。

後ろはよろしくお願いしますね」

そう言ってカトルはその場を離れていった。

「……………」

再び1人になったティアナは、カトルに「頼りにしている」と言われ焦っている気持ちが少し和らいだのだった。

＊

ホテルを取り囲む森林地帯、その一角に3人の人影が現れる。

「あそこみたいだね…」

ニヤけた顔で遠くを見つめながらシンシアがそう呟く。

「……………」

その隣に居る少女は仏頂面のまま黙り込んでいる。

そんな彼女の様子を見て、セデイスがやれやれといった感じで話しかける。

「モネちゃんどうしたの？、せっかく気晴らしに来たんだからさあ…」

「うるっさいわね…楽しんでんのはアンタとシンシアだけでしょ……」

明らかにイラついた様子で少女―アネモネは全身包帯塗れの女性、セデイスに向かってそう吐きすてる。

「というより…何でアンタがついてきてんのよ？」

「いやあ…ジェイルさんに頼まれちゃってさあ…ほら」

そう言っただけでセデイスは右の方を指差し、シンシアとアネモネもつられてそちらに振り向く。

すると、茂みの奥からガジェットの大群が現れた。

「この玩具共を上手い具合に動かしてくれて言われちゃって」

「ちよつとちよつと、それじゃあアタシ達の取り分は？」

軽い感じに言うセデイスに、シンシアが不満げに話しかける。

「ダイジョブダイジョブ♪ガジェットは所詮捨て駒だから」

適当にいじって破壊させて、データが取れたらアタシは帰るからさシアちゃんとモネちゃんはその間に先にジェイルさんが言っただけの物を盗ってきなよ

その後ガジェットがいなくなったら後は適当に遊んで来ればいいからさ」

そう言っただけでセデイスは朗らかに笑う。

「ふーん…そういう事なら全然OKだね！」

シンシアは再びニヤケ顔になり、そして後ろに振り向く。

「ジャミングコート展開：行くよ、ドミネーター!!」

シンシアがそう呟くと同時に、彼女の体が光に包まれる。

そして、彼女の体に赤と黄色のボディスーツの様な物が装着された。

「じゃ、いつてきまゝす」

シンシアは軽い感じにそう言って手を振ると、一直線にホテルに向かって飛んでいった。

「……いいわ、こうなったらやけくそよ！何だってやってやろうじやない！！」

先程までの仏頂面とは打って変わり、アネモネは獰猛な笑みを浮かべる。

「ジャミングコート展開…行くわよ！ジエンド！！」

アネモネがそう言うと、シンシアと同様に光に包まれ

黒基調のバリアジャケットと、両腕に鍵爪の有線クローと背後に特殊な形状のボードが装備された。

アネモネはボードを外し、その上に乗って飛行しシンシアの後を追っていった。

＊

屋上でクラールヴィントを構えていたシャマルが、敵の反応を察知する。

「！！…シャーリー！！」

『はい…来た来た、来ましたよ！』

管制室のシャーリーが叫ぶ。

『カジェットドローン陸戦？型、機影60、65……』

『空戦？型、機影、45、50……』

『陸戦？型、7、8、9……』

管制室の職員が敵の大群を確認していく。

それを聞いてシャルマルは、周囲で警備にあたっている魔導師達に通信を入れる。

『前線各員へ、状況は広域防御戦です。ロングアーチ01の総合管制と合わせて、

私、シャルマルが現場指揮を行います！』

それを聞いて、各々が配置についていった。

＊

ガジェットのいる方向へ、ヴィータ、シグナム、タック、マリナの4人が

飛行して向かっていた。

「新人どもの防衛ラインには…1機たりとも通さねえ…！！」

「頼もしいじゃないかヴィータ」

強い口調で言うヴィータに対し、タックが笑みを浮かべてそんな事を言う。

「へっ：お前の方こそ足引っ張んなよ？」

ヴィータはそれに怒る事なく、笑みを浮かべながらそう返す。

そんなこんなでしばらく飛んでいくと、眼下にガジェットの大群が見えてきた。

「私とマリナで大型を潰す、お前とタックで細かいのを頼む」

「おうよ！」

「わかった」

シグナムの提案を、ヴィータとタックは了承する。

「行くぞアイゼン！！」

ヴィータは周辺に8つの魔力弾を生み出す。

「まとめて……ぶっ潰せええええ！！」

それをハンマーで打ち放ち、ガジェットにぶつけて破壊していく。

「ガンアーク、カートリッジロード！！」

タックは己のデバイスに新たに備えたカートリッジシステムを使用し、アークライフルの魔力を増強させ、銃口に光を収束させていく。

「チャージモード……照射開始！！」

ライフルから巨大な光が止め処なく放出されていく。

タックはそれを徐々にずらしていき、向かってくる空戦型ガジェットを

その光の放流によってまとめて消滅させていく。

地上ではシグナムとマリナが？型と相対していた。

シグナムはカートリッジロードを行い、剣に炎を纏わせていく。

「紫電……一閃！！」

その状態で飛び上がり、？型ガジェットを縦に一刀両断する。

「バスターアーク：カートリッジロード……」

その隣ではマリナが目を閉じ、魔法陣を展開させ、ライフルに魔力を集中していく。

「アークライフル……収束、行けっ！！」

ライフルの先端に巨大な球状のエネルギー弾が発生し、ガジェットに向けて発射される。

その弾丸は？型ガジェットに直撃し、少し拮抗した後に、？型ガジェットに巨大な穴を空けながら貫通していった。

「フッ……腕を上げたなマリナ」

「あなたもね：シグナム」

2人は互いの戦いぶりに賛辞を述べる。

別の場所ではザフィーラと五飛がガジェット達と相対する。

「ここは通さん！！」

ザフィーラが咆哮し、地面から白い光の柱を発生させ、ガジェットを刺し貫いていく。

「……行くぞ、ナタク……」

五飛はデバイスを起動、緑と白の拳法服のようなバリアジャケットを纏い

両腕に竜の頭を模したクローが装備される。

「キサマ達は悪……倒すべき敵だ！」

五飛は背部にあったビームトライデントを構え魔力刃を形成、

高速で飛行しながら連続で突きを放っていき
向かってくるガジェット達を片っ端から潰していった。

更に別の場所ではヒロ、デュオ、トロワ、カトルの4人が戦っていた。

「ツインバスターライフルやヘビーアームズのガトリングだと森林に影響が出ますね…」

ヒロとトロワで上を頼めますか？僕とデュオで地上の敵を殲滅します」

「わかった…」

カトルの提案に対して、ヒロが静かに頷いて答える。

「行くぞ、ゼロ……」

ヒロが首に下がった緑色のスフィアのような物を握る。

すると、青と白を基調にしたバリアジャケットが装着され

背中に美しい白色の巨大な翼が4つと

背部に大型のライフルが二丁装備される。

他の3人もそれぞれのデバイスを起動し、戦闘体勢を取る。

空中に飛び上がり、ヒロはライフルを両腕で構えて左右に広げる。

「戦術レベル：最大効果確認……」

静かに呟かれるその言葉と同時に、ライフルの先に光がたまっている。

「ターゲット捕捉：破壊する」

ライフルから閃光が迸る、その状態でヒイロは回転する、同時にライフルの閃光も回転していき、周りのガジェットをなぎ払っていく。

「……全てを消滅させる」

少し離れた位置でトロワがそう呟き、両腕のガトリングから魔力弾を連射し

向かってくるガジェットの大軍をまとめて撃ち落していく。

「斬って、斬って……斬りまくるぜえ!!」

「倒すしかないというなら……一撃で決める!」

地上ではデュオがハイテンションで、カトルは冷静な状態でそれぞれビームシザーズとヒートショーテルで向かってくる敵をバッサバッサと斬り捨てていった。

＊

「副隊長達とザフィーラ：それにプリベンターの人達もスゴイ!」
離れた位置で、ティアナが貰ってきたモニターで前線の戦いを見て

スバルは感嘆の声を上げる。

「これで：能力リミッター付き：プリベンターの人達も全然本気じゃない：」

ティアナがそう呟きながら、拳を強く握り締める。

「あ、アムロ隊長だ！」

モニターにアムロの戦いが映し出される。そしてそれを見た2人は驚愕で目を見開いた。

＊

また違う森林の中、アムロは軽く30はいるであろうガジェットの
大群と遭遇していた。

アムロは白いバリアジャケットを纏い、右手にライフル

左手に自身のパーソナルマークが刻まれたシールドを装備している。

「やはり現れたか：事前に張っておいて正解だったな：」

固い表情でアムロは呟く。

ガジェットがレーザーを放つ。が、それよりも先にアムロは移動し
「迂闊な！墜ちろッ！！」

回避運動を取ったままライフルから閃光を2発放つ。

その2発は的確に攻撃を放ってきた2体のガジェットに命中し爆発する。

直後、アムロは敵から距離を取った後魔法陣を展開し、左手に出現した光るワイヤーを引っ張る。

その先には、戦闘開始の少し前に仕込んでおいたバズーカが配置してあり

そこから放たれた大きめの魔力弾がアムロから離れた位置にいたガジェットの一群の前に着弾し

巨大な爆発を起こしてそれらを巻き込み破壊していく。

「遅いッ！」

アムロが再び後方に飛び退き、そのまま空中へと飛び上がる。

すると、空戦型ガジェットが数機、アムロに向かって接近してくる。

アムロは左手にダミーの射出用ポッドを出現させ

空戦型ガジェットに向けて3体のダミールールを発射していく。

ガジェットはバールンに錯乱させられ、動きが止まってしまう。

「うおおおお！！」

その隙を狙ってアムロが背部に装備されたビームサーベルを抜き形成されたピンクの魔力刃で敵を全て斬り裂いていく。

その後アムロは地上に降り立つと、今度は？型ガジェットが攻撃してくる。

アムロはシールドを構えて攻撃を防ぎつつ移動し

途中でシールドを投げ捨てて凹にする。

投げ捨てたシールドに反応の遅れた敵のレーザーが命中し

アムロはその隙を突いて敵の死角に移動

的確にビームライフルを撃ち込んで敵を破壊していった。

＊

スバルとティアナはモニターを凝視したまま固まっていた。

アムロの戦闘は、なのはやはやてのように、膨大な魔力の砲撃や広範囲攻撃で

まとめて敵をなぎ払っていくわけでもなく

フェイトのように超高速で接近し、敵を打ち倒すわけでもない。

では何が凄いのかというと、判断速度と動きの無駄の少なさ、それに加えたトリッキーな戦術だった。

放たれる前から、まるで先読みしているかの如く敵の攻撃を回避している。

また、遠隔操作のバズーカやダミールン、シールドを用いた幅の広い戦術に加え
放たれるライフルの閃光は、一発一発が全て敵の急所に直撃し、無駄な弾を撃つ事は一切無い。

その他にも細かい移動やらライフルの構え方やらの些細な動作
敵の隙を作ってからサールベルによる接近戦での動きにも
余分なスキが一切無い、正に幾多の戦闘経験を積んだベテランの動
きの様なのだ。

「これが……なのは隊長に並ぶ……白い流星の実力……」
ティアナの心の中に、先程和らいだ焦りが再び生まれていた。

＊

「おっやってるねっ凄い凄い」
離れた位置で戦闘を眺めながら、セデイスは軽い感じにそう言う。
「ほんじゃそろそろ……フォワードさん達の実力も見せてもらいま
すか」

そう言ってセデイスは目を閉じ、黄色い魔法陣を展開する。
「えーっと…呪文何だっけ…？まあいいや、オブジェクト、転送移動開始ッ！」

＊

「！！！！」

ホテルの近くで防衛に当たっていた、キャロのケリュケイオンが反応を示す。

「キャロ、どうしたの？」

「近くで誰かが召喚を使っている！」

キャロの答えに、その場にいたフォワード陣全員が驚きを示す。

「遠隔召喚……来ます！」

続くキャロの言葉と同時に、4人の前に4つの黄色い魔法陣が現れそこからガジェットの大群が姿を現す。

「あれって、召喚魔方陣！？」

「召喚ってこんなこともできるの！？」

現れたガジェットの大群を見て、エリオとスバルが驚きの声を上げる。

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです…」

固い表情で身構えながらキャロが呟く。

「何でもいいわ、迎撃いくわよ!」

「「「おうっ!」」」

クロスミラージュを構えながら言うティアナに対して、他の3人が答える。

（今までと同じだ、証明すればいい…自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいっだってやってきた…!!）
魔法陣を展開しつつ、真剣な表情でティアナは心の中で呟いた。

＊

「……ん?」

ホテル地下の倉庫

奥の方で何かの物音がした気がした警備員は、その方向へと進んでいく。

「誰かいるんですか？ここは危険ですよ」

そう言いつつ奥に進み、そしてある場所をライトで照らす。

よく見ると荒らされた形跡があり、空の木箱が1つひっくり返っている。

「！……何だ、コ……」

ズブリ…

警備員は最後まで言いきる事が出来なかった。

焼ける様な痛みを腹部に感じたと思ったのは一瞬で、すぐに意識を手放してしまった。

「フウ……ちよつとスツキリしたわ……」

警備員の背後でアネモネが、血塗られたクローを引き抜きながらそう言う。

そしてシンシアに向かって念話を飛ばす。

（シンシア、そっちの様子は？）

（ほとんど壊滅的だね、やっぱあんなガラクタじゃ相手にならな
いみたい）

地下の入口で周囲を見渡していたシンシアはそう答える。

（そう…目的の品は回収したわ、本当はさっさと帰りたいんだけど
……

アンタはそんなつもりはさらさら無いんでしょ？)

(当たり前じゃん！寧ろアタシ的にはそっちのがおまけなんだよ)
シンシアが口調を強めながら念話を返す。

(まあいいわ：今からそっち戻るから、2人で適当に遊び相手探しましょ？)

(別にアタシは1人で遊んでもいいんだけど：)

(うっさいわね！！アタシもこのムシヤクシャを誰かにぶつきたい気分なのよ！)

テンションの低いシンシアの口調にイラつき、アネモネは念話で怒鳴り散らした。

＊

ガジェット？型が追加装備のミサイルランチャーを放つ。

ティアナが発射されたそれをクロスミラージュの弾丸で撃墜していく。

「ティアさん！！」

キャロの声を聞いて、ティアナは後ろに振り向く。

ティアナの背後に居たガジェットがレーザーを放ち

ティアナはそれを飛び退いて回避しつつ、相手に向かって魔力弾を放つも

その攻撃はAMFによって弾かれてしまう。

「くっ……」

思ったように戦闘が上手く行かず、ティアナは焦りを見せる。

『防衛ライン！もう少し持ちこたえてね！ヴィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから！』

シヤマルが通信でフォワード陣にそう伝える。

それを聞いてティアナがどこか落ち着かない感じで反論する。

「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全機撃墜します！」

『ちよっ…ティアナ大丈夫？無茶はしないで！』

「大丈夫です！毎日朝晩練習してきてんですから！」

通信に対して、やっぱりどこか焦りを感じるような口調でティアナは返答する。

「エリオ、センターに下がって！私とスバルのツートップでいく！」

「は、はい！」

何時もとどこか雰囲気の違いティアナに困惑しつつも

エリオはそれを了承し、後方に下がっていく。

「スバル！クロスシフトA、いくわよ！」

「おお！」

ティアナの言葉にスバルはグッと拳を握って得意げに答える。

そしてウインググロードの上を駆け巡り、敵の注意を引き付けていく。

（証明するんだ：特別な才能や凄い魔力がなくなつて：

一流の隊長達のいる部隊でだって：どんなに危険な戦いだって：）

ティアナが魔法陣を展開、その周辺にいくつものオレンジの魔力弾が現れる。

「私は：ランスターの弾丸は：ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！
そう言いながらティアナは両手のクロスミラージュを前方に構える。

『ティアナ！？4発ロードなんて無茶だよ！それじゃティアナもクロスミラージュも……』

通信でシャルマルが心配そうにティアナに言う。

クロスミラージュからティアナの肉体にかけて魔力が電流のように
迸る。

「撃てます！！」

力強くティアナは答える。

「クロスファイヤー！」

そして両手を左右に広げて

「シュートツツ！！」

それをクロスさせると同時に、周囲に浮かばせていた魔力弾を敵に
放つ。

その弾丸はガジェットに命中し、次々に爆発していく。

しかしやはり無理があったのか、魔力弾の一発が起動を反れ

上空のウイングロードを走っていたスバルに向かって飛んでいく。

「あっ！！」

スバルがそれに気づいて振り返るが、もうすでに魔力弾は眼前に迫
っていた。

が、スバルに当たる直前で、現れた何者かによって魔力弾は切り払われる。

「ほう……驚いたものだ」

魔力弾をビームトライデントで切り払った張本人―五飛はティアナの方を向いて呟く。

「味方を犠牲にしてまで勝利を掴もうと考える…

そんな気骨のある奴がこの部隊にいるのだな……」

笑みを浮かべて皮肉を込めて五飛はティアナに向かって言い放つ。
ティアナは何も言えず、口を開けたままガタガタと震えている。

「あ、あの…違うんです！今のは、その……」

五飛の後ろにいたスバルが慌てて弁明しようとするが

五飛は後ろに振り向いてスバルに向かって怒鳴り散らす。

「力の無い者がでしゃばるからこういう事になる！！

自分の力量もわからぬ奴が、戦場をウロチョロするな！！」

その言葉を聞いて、ティアナは目を見開く。

「オイお前ら！！」

嫌悪のムードが漂う中、その場にヴィータが現れる。

「キサマがこいつらの上官か？」

「ああ…すまなかった、余計な手間かけさせて…」

「フン…上官なら部下の手綱はしつかりと引いておくんだな…」
イラついた感じに五飛はヴィータに対してそう言い放った後、その
場を離れていった。

五飛がいなくなった後、ヴィータはティアナに対して怒鳴る。

「ティアナ！この馬鹿！！無茶やった上に味方を撃ってどうすんだ
！！」

続けさまに投げかける叱責に、ティアナは何も答えられない。

「あの…ヴィータ副隊長…違うんです！、今のは私が避けなかった
のが……」

「ふざけるタコツ！直撃コースだよ今のは！！」

スバルが咄嗟にティアナを庇うも、ヴィータは容赦なく切り捨てる。
そして2人に対して今までに無い以上の怒りを見せる。

「もういい…後はあたしがやる…2人まとめてすっこんでろ！！」

＊

「うーん…やっぱ新人と言えどなかなかの実力持ちか……」

流星はエリート部隊の機動六課だね…一発ミスッたみたいだけど

…」

セデイスがフォワード陣の戦いを見て、感心したように呟く。

「これでアタシの出番はもう無いんだけど……まあせっかくこれだけ人員が集まってるんだし……」

どこか不満げに、されどニヤつきながらセデイスは呟き

そして、魔法陣を展開してある物呼び込む。

「アルさんが作った玩具の試作品……ここでちょっと試してみよっかな」

とても軽い感じのノリでセデイスはそう言い、呼び出したある物を先程と同じように転送移動させるるのであった。

＊

「フウ……あらかた片付けましたかね……」

ガジェットの残骸を見つめつつ、カトルが落ち着いた感じに呟く。

「こっちも終わった……」

上空から空戦型ガジェットを片付けたヒロとトロワが降りてくる。

「これで今回の任務はほぼ終了ですかね？」

カトルが3人の方を向いて、そう言う。

「いやわかんねーぞ？ 安心してる所に敵さんの隠し玉がドヒャーっ

て……」

なんて感じにデュオが言っていると、彼の背後に召喚魔法陣が現れる。

「……アラ？本当に来ちゃったの？」

「……余計な事を口走るからだ……」

魔法陣を見つめ、ポカンとするデュオに対して、ヒイロが冷たく言い放つ。

「とにかく、敵だと言うなら迎撃するぞ」

トロワの言葉に他の3人も気を引き締めなおす。

そして魔法陣から敵の姿が数体現れる。

「なっ……オイオイ！コイツまで出てくんのかよっ!？」

「これは……!!」

その敵の姿を見て4人は一普段感情あまり露にしないヒイロやトロワさえ一

驚きの表情を浮かべるのであった。

＊

ヴィータに怒られた後、スバルとティアナはホテルの裏手を警備していた。

「ティア…向こう…：…終わったみたいだよ？」

「あたしはここを警備している…アンタはあっちへ行きなさいよ…：」

スバルはティアナを気遣うように声をかけるが
そんなスバルをティアナは冷たく突き放す。

「…あのね、ティア」

「いいから行って…」

「ティア、全然悪くないよ！あたしが、もっとちゃんと…」

「行けつつってんでしょ！！」

なおもスバルは声をかけるが、ティアナは耐え切れなくなり、スバルに怒鳴り散らす。

それを聞いてスバルは表情を曇らせるが

「ご、ごめんね…また後でね？ティア…」

無理に笑顔を作ってそう呟き、スバルはその場を離れていった。

「くうっ…：…！！」

1人になった後、ティアナは壁に手を置いてうな垂れる。

自分の力を証明するどころか、仲間を危機に追い込んでしまい
挙げ句その仲間が自分を気遣っているのに八つ当たりをしてしまう…
自分の不甲斐なさをあまりにも惨めに感じていた。

「あたしは…：…あたしはっ…：…！！」

涙を流しながら、悔しげな声でティアナは言った。

＊

「ねえ…そのアンタ？」

突如後ろから声をかけられティアナはハッとして後ろに振り向く。そこにはピンク髪の奇妙な格好をした2人組の少女が立っていた。

「アンタ…この男に見覚えがある？」

少女の片方—アネモネは首に下げていたロケットを開き

そこに写っている男の写真を見せながらティアナに尋ねる。

「な、何を…」

「知ってんのかって聞いてるでしょ!!」

突如物凄い剣幕になってアネモネは怒鳴る。

意気消沈していたティアナはその突然の変わりようにたじろぎながらも答える。

「し、知らないわよ…」

それを聞いて、アネモネは明らかに落胆する。

「はぁ…アネモネ、アンタもいい加減それはやめようよ…」

「うっさい!もしかしたら知ってるかもしれないじゃない!!」

隣に居たシンシアに呆れた感じで言われ、アネモネはヒステリックに叫ぶ。

「まあいいわ……ねえアンタ? ひょっとして機動六課の魔導師?」

シンシアがティアナの方に向き直り、笑みを浮かべてそう尋ねる。
「そうだけど…？それがどうかしたの？というよりあなた達…」
「へえ…じゃあさあ…」

突如ティアナは背筋に薄ら寒い物を感じる。

先程とは雰囲気の一変した目の前の2人の少女を見つめる。

そんな間にシンシアは右腕を銃口の形に変形させそこから赤いレーザーを放つ。

「!!!!」

ティアナは突然の相手の行動に驚きながらも横に飛び退いてそれかわす。

「アタシ達と…ちょっと遊んでよ？」

驚きを隠せないティアナに向かって、シンシアは笑みを浮かべながら向かっていった。

第6話（後書き）

私は別にティアナが嫌いなわけではないですよ？
そこ勘違いしないで下さいね？

アムロの初戦闘描写

彼の持つ強さってやっぱりヒーロやガロードみたいな派手な物じゃなく

地味ながらも熟練された動きとNT効果による判断速度

＋ご指摘のあったトリッキーな戦術：これが売りなのだと考えます。

（急いでCCA見直してみたら、本当においしい描写を

たくさん見逃していた事に気づきました：

これで少しはアムロっぽくなっていたら幸いです…）

ヒーロ達の前に現れた意外な増援とは何なのか？

そしてシンシア、アネモネの襲撃を受けたティアナの行方は？

アグスタ戦は次回に続きます。

それではまた

第7話（前書き）

ティアナ対シンシア、アネモネ
そしてプリベントーが対峙した敵とは？

※今回は後書きは無しです

第7話

「おっし…全機撃墜…」

「こっちもだ、召喚を使った魔導師は追いきれなかったがな……」
周辺のガジェットを掃討したヴィータとシグナムが固い表情で呟き、
辺りを見渡す。

「そういや、ティアナは？」

「はい、裏手の警備に…」

「スバルさんも一緒です」

ヴィータの問いにエリオとキャロがそう答える。それを聞いてヴィータは少し顔を顰める。

『こちらシャマル、シグナム、ヴィータちゃん、他の皆も聞こえてる？』

するとその時、シャマルから通信が入る。

「何かあったのか？」

『プリンターの皆さんがいる方にガジェットとは異なるタイプの魔力反応を確認…』

それから、ホテルの裏手の方が確認できなくなってるの』

「何？」

シャマルの話した内容に、シグナムが少し驚きを見せる。

『こちらでも必死に確認しようとしてるんですが…裏手の周辺だけというわけかジャミングが酷くて…もしかしたら通信妨害を張ってる敵がいるのかも……』

シャマルの内容にシャーリーが落ち着かない感じで付け加える。

「裏手って：ティアナさん達の……！！」

先程自分で言ったことを思い出し、エリオは心配そうな表情を浮かべる。

「マズイな……シグナム！」

「ああ：わかった」

ヴィータがシグナムの方に振り向き、シグナムはそれに頷いて答える。

その後ヴィータはエリオとキャロの方を向いて言う。

「2人はここで待機しとけ、あたしとシグナムで裏手の方を見てくる」

「はい！！」

エリオが頷いて答える、そしてヴィータとシグナムはティアナのいる場所へと飛んでいった。

「エリオ！キャロ！」

と、そこへ入れ替わるようにしてスバルがやってくる。

「スバルさん！」

「ティアナさんと一緒じゃなかったんですか？」

エリオとキャロが意外そうな顔をしてそう言う。

「あー：ティア、何か1人にしてほしかったみたいでさ……」

スバルが顔をそらしながら気まずそうな雰囲気で答える。

それを聞いてエリオとキャロがまた心配そうな表情へと変わる。それを疑問に思ったスバルが2人に尋ねる。

「何かあったの？」
「はい、それが……」

＊

ホテルの裏手、シンシア、アネモネと対峙するティアナ

「さくてと……これはどうだ!!」

シンシアが右腕を伸ばし、ティアナに向かってそれを飛ばす。

「くっ……!」

正体不明の敵に困惑しながらも、ティアナは横に飛び退いてそれかわし

そのままクロスミラージュから魔力弾を2人に向かって放つ。

シンシアとアネモネはそれを難なくかわす。

「甘い…甘いよ! チョコレートより!!」

攻撃を避けた後シンシアは上空に高く飛び上がり

両腕を異様な長さに伸ばしていく。そして伸ばした右腕を途中で直角に折り曲げ

それを高速回転させて、地上に居るティアナを捕らえようとする。

（な、何なの！こんな魔法見たことが……）

敵の攻撃方法に心底驚きつつも、ティアナはシンシアの高速回転する腕から逃れるべく

近くにあった森林の中へと姿を隠す。

「逃がしやしないわ!!」

今度はアネモネが行動を起こす、分離した2枚のボードの上に乗り高速飛行しながら不規則な軌道でティアナの駆け込んでいった森林へと潜っていく。

「見つけた……!」

そして入ってすぐに、立ち止まっているティアナの姿を発見する。

アネモネは目が見開かれた獰猛な表情を浮かべ、右腕のクローをティアナに向けて射出する。

が、クローがティアナに当たると思ったその瞬間、ティアナの姿がかき消す様に消えてしまった。

「な……幻影!？」

アネモネが驚いたようにそう呟いたその時

「クロスファイヤー……シュートッ!!」

やや離れた位置でティアナが周辺に魔力弾を浮かばせ、それをアネモネに向かって放っていく。

「舐めるんじゃ……ないわよ!!」

それを見てアネモネは、見開いていた目を更にカッと見開きバリアジャケットの肩部に装着された赤い円形の装甲を展開。開かれた砲門から細長いピンクのレーザーを大量に発射し

不規則な軌道を描きながらティアナの放った魔力弾を全て撃ち落す。
「嘘……!!」

自分の放った魔力弾を全て撃ち落され、ティアナは驚きを浮かべる。
「そんな程度で驚いてちゃ、すぐにゲームオーバーになっちゃうよ
!!」

直後、背後から赤い円盤の様な物体が周辺に暴風を巻き起こしながら
高速回転でティアナの背後から突撃してくる。

「え……きゃああああ!!」

ティアナ気づいて背後に振り向いた時には既に遅く、その物体に吹
き飛ばされてしまう。

「なーんだ、これも避けらんないの……機動六課は強い魔導師が一杯
だって聞いたのになあ……」

円形の物体がシンシアへと姿を変える、シンシアは不満げな表情で
呟きながら右腕を伸ばし

吹き飛ばされたティアナを掴み、上空高くへと放り投げ、そして更
に言った。

「アンタは……ハズレみたいだね」

「!!!!!!」

その言葉を聞いて、ティアナは落下しながら目を見開く。

「もういいわ……死んでちょうだい……」

アネモネがシンシアの反対側に移動し、落下してくるティアナの方
を見る。

「バスクードオ………」

そして胸部の白いコーン型の発射口に光を収束していき

「クライシスッ!!」

そこから禍々しい紅色の閃光をティアナに向かって発射した。

「ティアナ!!!」

が、ちょうどその時ヴィータとシグナムがその場に到着する。

ヴィータはティアナとアネモネの間に入り防御壁を展開
バスクード・クライシスの閃光を防いだ。

「大丈夫か、ティアナ？」

「シグナム……副隊長？それに、ヴィータ副隊長も……」

シグナムが落下してきたティアナを受け止め、地上に降り立つ。

「ここは私とヴィータで何とかする、お前は下がっている」

「け、けど私は!!!」

ティアナは食い下がろうとするが、シグナムが背後に振り向き、固
い表情で言った。

「無茶な魔法の使い方をして消耗した今のお前では無理だ、逆に足
手まといになる。下がっている」

「!!!!……わかりました……」

俯きながら悔しげな表情で呟き、ティアナはその場を離れていった。

「ふふーん……ステージ2開始ってやつね……!」

シグナム達の姿を見たシンシアが満足げな笑みを浮かべてそう言う。

「機動六課スターズ分隊副隊長、ヴィータだ。民間施設での危険魔
法の無断使用……」

その他諸々の罪状がお前らにはある。投降して武装を解除しろ!」
グラーフアイゼンをアネモネに向けながらヴィータが強い口調で言

う。

それを聞いたアネモネは眉間にシワを寄せ、心底イラついた感じで怒鳴る。

「アンタみいたなカギんちよが……生意気言ってんじゃないわよ！」

アネモネは両腕の装甲部分からブレードを展開しそれを構えてヴィータに向かって突っ込んでいった。

「あはっ！アイツも結構ノリ気じゃん、面白くなってきたあ！」
笑みを浮かべながらシンシアはそう言い、シグナムの方へと向かっていった。

＊

一方その頃、プリベンターは新手の敵と遭遇していた。

「コイツって……やっぱりそうだな？」

険しい表情をしながらデュオがヒイロに尋ねる。

「間違いないな……コイツらは……サーペントだ……」

ヒイロが召喚魔法陣から現れた2体の人型機械兵―サーペントを見

てそう呟く。

「1年前のヒイロの報告は間違いじゃなかったって事ですな……」
カトルが冷静な口調で呟く。

「何にせよ、敵だってんならぶっ倒すだけだ!!」

デュオがそう言いながら、ビームシザースを構えて突っ込んでいく。
2体のサーペントはそれぞれ反対方向に横に飛び退いてそれをかわす。

「だありゃああ!!」

デュオが片方のサーペントに狙いを定めてビームシザースを振り下ろす。

が、サーペントはその動きに対応し、ビームシザースの魔力刃の攻撃は

サーペントの端っこを少し掠める程度で終わる。

「な……コイツ……」

予想外に敵の動きが素早く、デュオは焦りを浮かべる。

「先程のガジェットの大群より遥かに動きがいいな、一筋縄ではいかなそうだ……」

トロワが敵の動きを見て冷静にそう呟く。

と、その時2体のサーペントがガトリングから魔力弾を4人に向けて連射する。

ヒイロは右に、残りの3人は左に飛び退いてそれをかわす。

攻撃を避けて一旦距離を取り、ヒイロは念話を飛ばす。

(……俺がゼロシステムを使って一体潰す、お前達でもう片方を頼む)

(ちょ……大丈夫かヒイロ？普通ここは2…2で行くべきじゃね?)
ヒイロの提案にデュオは難色を示すが、ヒイロは構わずに続けて言

う。

(……俺は1人の方が戦いやすい)

(ハイハイ……わかりましたよ)

長年の付き合い故か、言っても無駄だということは何となく悟りデュオは少し呆れた感じながらもヒイロに対してそう答える。

(ほんじゃ……どうする?)

デュオが片方のサーペントと相対し、残りの2人に念話で尋ねる。

(……先頭がデュオ、僕が牽制でトドメはトロワの一斉射撃……これで行きましょう)

(わーかった!!)

(了解だ)

カトルの提案にデュオが得意げに、トロワが冷静に頷いて答える。

「さーて……行くぜえ!」

デュオはデバイスのハイパージャマーを発動させ、その姿を消滅させる。

敵の姿を見失ったサーペントは行動の選択を迷い、隙を作ってしまう。

その間にデュオが背後に回りこみ、ビームシザースを叩きつける。

「なっ……固えなオイ!」

ビームシザースを思い切り叩き込んだものの、サーペントは外部の装甲を少し焼かれただけで

大したダメージには至っていないようであった。

サーペントは自分の背後に現れたデュオの方に素早く振り向く。

「僕達の敵なら容赦はしないからね!!」

が、その間にカトルが後ろを見せたサーペントに向かって

ヒートショーターで両サイドから振るい、敵を挟みこんで攻撃する。が、その攻撃も敵の装甲の固さに阻まれ、内部までは達しなかった。しかし、その間にトロワがアクロバティックな回転をしながら上空に飛び上がり

その途中で止まった後、両腕のガトリングとバリアジャケットに備えてある全ての砲門を開く。

それを確認したデュオとカトルがその場から離れていく。

「消滅させる……」

上空から夥しい量の魔力弾がサーペントに向かって降り注ぐ。

サーペントはその猛攻に耐えられず、外部装甲がベコベコになってしまい

そして内部に異常をきたしたのか、その動きを停止させた。

「おーっし! いっちゃあがり!!」

動かなくなったサーペントを見て、デュオが得意げにガッツポーズをする。

「新型を投入するタイミングはいいが…俺達の戦力を見誤ったな…」

目を閉じ、冷静な表情でトロワがそう呟いた。

もう片方のサーペントがガトリングをヒロに向けて発射する。ヒロはそれを上空に飛び上がってかわし、そして目を閉じる。

「ゼロ……奴の動きを追え……」

ヒロがそう呟くと同時に、デバイスに備わったゼロシステムが発動様々な己と敵の未来の映像が怒濤の如く脳内に流れ込んでくる。

ヒロはその数多の未来から1つを選び取り、そして目を開く。

「行くぞ……」

ヒロは背部の翼に備えたビームサーベルを抜き、薄緑色の魔力刃を形成

それを構えてサーペントに向かって斬りかかって行く。

サーペントは背後に思い切り飛び退いてそれをかわす。

が、ヒロが敵の先を読み、先程までとは比べ物にならない格段にスキの無い動きで

サーペントの背後に回りこみ、ビームサーベルを突き刺す。

「……………」

が、やはり敵の装甲は並ではなく、サーベルは途中で止まってしま

う。ヒロは表情を少し歪めつつも、サーベルを抜き取り、サーペントに蹴りをかます。

サーペントはそのままうつ伏せに倒れこんでしまう。

ヒロはすかさずサーペントの上に乗る、先程サーベルを突き刺した部分に

バスターライフルの片方を突っ込む。

「出力50%……発射」

その状態でバスターライフルから閃光を放ち、サーペントを爆散させるのであった。

「任務完了……!!」
サーペントの爆発によって発生した爆炎をバックに、ヒロは静かにそう呟いた。

＊

「アイゼン!!」
ヴィータが周辺に魔力弾を形成、それをハンマーでアネモネに向かって打ち出す。

「無駄無駄!!」
が、アネモネはさして慌てる様子もなく、ホーミングレーザーを射出してそれを撃ち落す。
その隙を突いたヴィータが爆煙の中から現れ、アネモネに向かってハンマーを振り下ろす。
アネモネはボードに乗ったまま器用に後方へ一回転し、それをかわす。

「チイツ!!」

アネモネは舌打ちをし、ヴィータの周りを不規則な軌道で飛び回りながら両腕のクローを射出する。

ヴィータは敵の不規則な攻撃にやや戸惑いつつも、クローと繋がれたワイヤーを掻い潜りつつ

アネモネに接近していく。

「何よ……そういうのイラつくんだってばあ!!」

獰猛な表情でアネモネは怒鳴りつつ、アネモネは両肩からホーミングレーザーを連射する。

「な……何っー攻撃量だよコイツッ!!」

ヴィータは急停止、後急速旋回して自分に向かってくるレーザーの大群を振り切ろうとする。

が、そのあまりの量と不規則な軌道によりヴィータは徐々に追い込まれていってしまう。

それを見たアネモネが更に追加でレーザーを発射する。

そしてレーザーの大群がヴィータに迫いつき、爆発を起こした。

＊

「レヴァンティン!!」

シグナムはカートリッジロードを行い、剣に炎を纏わせる。

そして向かってきたシンシアに向かってそれを振り下ろした。

「あはっ! 燃える剣なんて面白いじゃん!」

シンシアはレヴァンティンを見て興奮気味に呟き、その斬撃を横に

一回転して回避する。

「じゃあ……アタシも剣で戦おっかな〜…」

シンシアがそう呟くと、赤いボディスーツに包まれた彼女の右腕が剣の形へと変形する。

「ほう……奇妙な魔法を使うのだな」

「アタシのデバイス、ドミネーターの真骨頂……それは変幻自在の変化能力!!」

固い表情で呟くシグナムに対し、シンシアが楽しそうな感じで右腕の剣を振り下ろす。

シグナムはそれを後方に飛び退いてかわし、シンシアに向かって剣を横に振るう。

シンシアはそれを右腕の剣で受け止め、そして斬り払った。

「凄い凄い!! さっきの奴より全然楽しいじゃん!!」

シグナムとの剣同士の戦いをしながら、シンシアは心底楽しそうに言う。

対するシグナムはシンシアに対して賞賛の入り混じった脅威を感じていた。

(コイツ……リミッター付きとはいえ私と剣で渡り合うとは……)

そんな事を考えつつ、シグナムはシンシアに剣を振り下ろしながら叫ぶ。

「何の目的でこんな事をしている!」

シンシアはシグナムの斬撃を下に回避した後、笑みを浮かべて叫ぶ。

「決まってるじゃん! ゲームを楽しむためだよ!」

「何ッ!」

予想だにしないシンシアの答えにシグナムは驚きを見せる。

「オーバーマンと一体になって戦うなんて……こんな楽しいゲームはないよ!!」

「戦いをゲームと捉えているのか!!」

シンシアとは対象的に険しい表情でシグナムは叫び、シンシアと剣を交わらっていく。

「アンタだって…こんな時は体中の血が騒ぐだろう!？」

「……………」

「血が騒ぐんだよ!!」

両手を胸の前に置き、心底楽しそうに叫ぶ。シグナムはそれを黙ったまま聞いている。

「相手が強ければ強いほど…燃えるんだよね!!」

シンシアは右手の剣を高く掲げ、それを巨大化させていく。

「どおりゃあっ!」

そしてその巨大化した剣をシグナムに向かって振り下ろした。

「……全く、子供のワガママに付き合うのは骨が折れるな……」

シグナムは冷静な表情でそう呟いた後、高速で横に移動し、巨大化した剣を回避する。

そのままシンシアに急接近し、レヴァンティンを振るう。

「おっと、させないよ!!」

シンシアは空いていた左腕を盾に変形させ、シグナムの攻撃を防ぐ。そして巨大化した剣を元のサイズに戻し、後方に素早く飛び退いていく。

「逃すか…レヴァンティン!!」

シグナムはすかさずカートリッジロードを行い、レヴァンティンをシュランゲフォームに変形させる。

そしてその連結刃をシンシアに向かって振るった。

「嘘お!?! そんなのあり!?!」

向かってくる連結刃を見て、シンシアは驚きを浮かべる。

「うわ! うわわわわ!!」

シンシアは急いで回避しようとするも、何回か刃に掠ってしまう。

「くっ……痛いよ、ホントに痛いよアイツ!!」

体の何箇所かに切傷を作りつつも、シンシアは楽しそうにそう言った。

＊

爆煙を見つめながらアネモネは歪んだ笑みを浮かべる。

「なっ……！！」

だが煙が晴れて、その先にいるヴィータを見つめて表情を歪める。

ヴィータはレーザーが当たる直前にパンツァーヒンダネスー全方位
防御魔法を展開し

アネモネのホーミングレーザーを全弾防御したのだ。

「危ねえ危ねえ……」

右手に持ったハンマーを肩にかけ、ヴィータが眩く。

「こんのお……」

ヴィータの姿を見て、アネモネは表情を酷く歪ませる。

「アンタみたいなガキに……アタシ達が負ける筈ないんだからああ
あ！！」

そして両腕のブレードを構えて、ヴィータに向かって突撃していく。

「死んじゃえ！死んじゃえ！死んじゃえ！死んじゃえ！死んじゃえ
ええええ！！！！」

狂鷹の如くアネモネは叫ぶ。

「冷静さを見失ったな……」

ヴィータはこれを好機と見てカートリッジロードを行い

アイゼンをラケーテンフォームに変形させ、背部のブースターに火
を灯す。

「ラケーテン…………ハンマアアア!!!!!!」

そして一直線に突っ込んでくるアネモネに真っ向から突撃し、彼女を叩き落す。

「グウッ!!……………何よッ!何よッ!何よッッッ!」

攻撃をまともに喰らい、ボードを足につけたままアネモネは落下していく。

が、アネモネは地面に叩きつけられる事無く、何者かによって受け止められる。

「……………」

「!!!!……………何でアンタがここにいのよ!!」

受け止めた人物ー白い仮面をつけた白衣の男を睨みながらアネモネは言う。

しかし仮面の男はアネモネを無視し、シンシアに向かって言った。

「シンシア!遊びも大概にしなさい!撤退しますよ!!」

「ちょっと…………折角いい所なのに邪魔する気!??」

シンシアは不満げに仮面の男に向かって怒鳴る。

シグナムとヴィータは突然現れた仮面の男を困惑した表情で見つめている。

「ジャミングコートももうすぐ時間切れです…………いくらあなた達の実力でも

機動六課の全軍を相手にしてはひとたまりもありませんよ…………

こんな場所であなた方を失っては計画に支障が出ます…いいから素直に従うのです…」

「チェツ…………仕方ないなあ…………」

シンシアは不満げな表情のままそう言い、そしてシグナムに向き直って笑みを浮かべて言う。

「楽しかったよピンクの女剣士さん！また遊んでね！」

そう言ってシンシアは仮面の男とアネモネの方へと飛んでいく。

「逃がすか！！」

シグナムとヴィータが3人の方へと接近していく。

「…………いずれまた、会いましょう…………あの出来損ないによろしく…………」

しかし、2人が近づく前に仮面の男は水色の魔法陣を展開する。

そして多重転送を行い、シンシア、アネモネと一緒にその姿を消滅させた。

＊

『…………あ！ジャミング消滅しました！！』

直後、シャーリーの通信音声の流れ込んでくる。

『シグナム、ヴィータちゃん!! 大丈夫!!』

「ああ……………」

シヤマルの通信に、シグナムは浮かない表情で答えた。

(アイツ……………何か違和感があったな……………まるで誰かに無理矢理従わされてる……………)

昔のあたし達みたいなさな感じがした……………)

ヴィータは暗い表情で、戦った相手ーアネモネの事を考えるのであった。

第8話（前書き）

アグスタでの事後処理

機動六課に加わる新たな人物

そして：すれ違いの末に巻き起こる悲劇：

第8話

ホテル前、辺りに管理局の調査班が散らばる中、なのはがフォワード陣を集めて連絡をしていた。

「えっと…報告は以上かな？現場検証は調査班がやってくれるけどみんなも協力してあげてね

しばらく待機して何もなければなら、撤退だから」

「「はい！」」

「……………」

ティアナ以外の3人が頷いて答える。

ティアナは暗い表情で顔を俯かせていた。

「で、ティアナは…ちよつと私とお散歩しようか？」

「……はい」

そんなティアナを見て、なのはが優しい声色で言う。
ティアナは一瞬戸惑いを見せるも、それを了承した。

＊

近くの林道をなのはとティアナが歩く。

「失敗しちゃったみたいだね……」

「すみません：一発、逸れちゃって：それに、正体不明の敵にもやられちゃって……」

前を歩くのはに向かって沈んだ気持ちでティアナは語る。

「アンノウンの方は予想外だったし：副隊長達ともやりあえる実力者だったんだから

そこは気にしなくて大丈夫。それに、ミスショットの方も私が現場を直接見たわけじゃないし

ヴィータ副隊長に叱られて、ちゃんと反省してると思うから、改めて叱ったりはしないけど：

ティアナは時々、少し一生懸命すぎるんだよね。それでちょっとやんちゃしちゃうんだ」

ティアナの方に振り向いてなのはそう言い、彼女の肩に手を置いて真剣な表情になる。

「でもね：ティアナは1人で戦ってる訳じゃないんだよ？

集団戦での私やティアナのポジションは前後左右、全部が味方なんだから

その意味と今回のミスの理由：ちゃんと考えて同じ事を二度と繰り返さないって約束できる？」

「……はい！」

なのはの問いに対し、ティアナは何かを決意したような表情で頷いて答えた。

*

別の場所では、アムロを筆頭にプリベンターやシグナム達が
各々方が遭遇した敵について報告を行っていた。

「それで、ヒイロ達が遭遇したのは間違いないサーペントだったんだな？」

「ああ……」

アムロの問いに、ヒイロが冷静に頷いて答える。
それを聞いてアムロは腕を組んで考え込む。

「人間サイズまで縮小された自律制御のMS：そんな物までこの世界にあるとはな」

「自律制御自体はMDの様な前例があるし……」

ガジェットみたいなのが存在する以上は珍しくは無いと思います」

「問題は、どうして俺達の世界の兵器であるサーペントが
それも、俺達を狙う敵として現れたかだな」

アムロの言葉に、カトルとトロワが固い表情でそう言う。

「全く……前の抗体コーリアンといい、こっちとあっちに見えない
穴でも開いてんじゃないの？」

「いえ……それは無いと思います……向こうとの繋がりは9年以上調べ
ても皆無でしたし……」

「何より状況的に考えて、人型サイズのMSなど、人為的でないと
発生しないだろう……」

デュオが後頭部を掻きながら言い、それに対してシャマルが心配そ
うな声色で答え、トロワが付け加える。

「何にせよ、これで私達の敵の中にお前達の世界を知る者がいると
いう疑惑が

更に濃厚になったという事だな？」

「ああ…というよりほぼ確定だろう…それに」

シグナムの問いにアムロが答え、彼女の方を向いて更に言う。

「君とヴィータが遭遇したという2人組のピンク髪の魔導師……

そいつらの特徴を聞く限りでは、俺達の世界の仲間としか思えない

……」

「やはりそうか……」

「あたしも何となく感じてたんだよ…どちらかというところとタック達と同じ感じの魔法じゃないかって…」

それを聞いて今度は、バレルとフェイが口を開く。

「赤と黄色のボディスーツで変幻自在の体を持つ魔導師と

黒いバリアジャケットで、ボードに乗って飛行する魔導師…」

「……話を聞く限りではシンシアさんとアネモネさんでしょうね…
…」

特徴から、もう1つの世界で戦った2人の仲間の姿を導き出す。

「いやしかし……俺は会った事ないからよくは知らないけど…

何だって俺達と敵対する必要があるんだ？」

タックが疑問を漏らす。

「私達と会っていれば事情を聞き出せたかもしれないんだけどね…

ひょっとしたら、昔の私達と同じで何か言えない事情があるのかも

しれないわね…」

マリナが顎に手を置き、固い表情で答える。

「だが…アネモネという少女はともかく、私と戦っていたシンシア
という奴は

どちらかというところと戦うのを楽しんでいる感じであったが？」

「ああ……シンシアはそういう性格ですから……」

シグナムの疑問に、バレルが苦笑しながら答える。

「彼女達と思われる人物と一緒にいた仮面の男……そいつがもしか
したら黒幕かもしれない……」

「ひょっとして…そいつがスカリエッティだったとか？」 「いや…

あいつの背部から茶髪のポニーテールがこぼれていた
スカリエッティの外見的特徴と一致していない」

「変身魔法を使っているっていうのは考えられないかしら？」

「いや、仮面を被っているのにそれは二度手間じゃ……」

その他にも多数の意見が、その集まりで飛び交うのであった……

＊

「えっと…シャーリーさん？」

『はいはい』

別の場所で作業を行っていたキャロがフェイトと一緒に居る人物
を見て

通信でシャーリーに尋ねた。

「フェイトさんと一緒にいらっしゃる方、考古学者のユーノ先生っ
て伺ったんですが…」

『そう、ユーノ・スクライア先生。時空管理局のデータベース「無
限書庫」の司書長にして

古代遺跡の発掘、研究で業績を上げてる考古学者。後最近では新型
デバイスの開発とかでも

名が広がっている：局員待遇の民間学者さんっていのうが一番しくり来るかな』

「へー…」

一通りの説明をシャーリーが行なう。

フェイトとユーノが並んで歩いている。

「えっ…それ、本当なのユーノ？」

「うん…バレルやベルクト達も戻ってきたって聞いたし……」

僕だけ置いてけぼりっていうのも何か寂しかったしね……リンディ統括官や無限書庫に無理言って来たんだ……」

ユーノの言った言葉にフェイトが驚いて尋ねなおし、ユーノが静かに答える。

「何より…その為に手に入れた力だからこれは……」

そう言ってユーノは、自身の腰についている1つの青い小箱に目を向ける。

そんな彼を見て、フェイトは心配そうな表情でユーノに言う。

「……ねえユーノ、8年前の事なら気にしないで。なのはも、もう大丈夫だから……」

「確かにそうかもしれないけど…でも、やっぱり僕は納得しきれないから…あの時の事…」

それに、君とベルクトがそういう関係になったように、僕も…なのはの事……」

言っている間に段々とトーンダウンしていき、ユーノは顔を赤らめる。

＊

「ユーノ君！フェイトちゃん！！」

するとその時、2人の下になのはが駆け寄ってくる。

「なのは：ちょうど良かった、アコース査察官が戻られるまで、ユーノ先生の護衛を頼まれてるんだ。交代、お願いできる？」

「うん、了解！！」

フェイトの言葉に、なのははピシッと敬礼して答える。

「エリオ、キャロ、現場見分手伝ってくれるかな？」

「は、はい！」

「今行きます！」

そしてフェイトはエリオとキャロを伴って、その場を離れていった。

＊

フェイトはなのは達とは離れた位置でエリオ、キャロ、そして途中で合流した

ベルクトと一緒に現場見分を行なう。

「しかし…ユーノの顔を見るのも久しぶりだな…」

「うん、ユーノもベルクト達が戻ってきたって聞いた時、とても会いたがってたよ」

「そうか、後で挨拶をしておくべきだな……」

互いににやかな感じでフェイトとベルクトがそうやり取りする。

「ベルクトさんは、ユーノ先生とも親しかったんですね？」

「ああ…一緒に戦った仲間だからな、結界魔法や転送魔法の実力には目を見張る物があったな…」

エリオに尋ねられ、ベルクトがそんな感じで答えていく。

「?…キャロ、どうかしたの？」

フェイトは先程からどこか浮かない顔をしていたキャロに尋ねる。

「いえ…ティアさん、大丈夫かなって思っちゃって……」

「そういえば、あいつがむこうの世界の人間と戦ったと聞いたが…」
沈んだ表情でキャロは答え、そこにベルクトが加わる。

「同じ世界…その人達の事もベルクトさんは知っているんですか？」

「直接会ったわけじゃないから何とも言えないが…俺の想像通りの人物なら」

2人共かなりの戦闘センスを有していたからな……」

他のメンバー以上に、シベ鉄や新連邦の情報部と付き合いが長かったベルクトは

シンシアとアネモネの姿を思い浮かべてそう言う。

「その人達も……敵なんですよね？」

「現段階ではな……いずれ戦う時も来るだろう……」
エリオの問いにベルクトは真剣な表情で答えた。

（あの冷静で的確な戦いが出来るティアナさんが負けたんだ……このままだと……）

暫しの沈黙を挟み、エリオは決意めいた表情でベルクトに言った。

「あの、ベルクトさん！お願いがあるんですけど……」

「ん……何だ？」

＊

「今日は……偶然なのかな？」

「うーん……アコース査察官は今回のオークションに機動六課が護衛に派遣されるのは知ってたみたいだからね……」

互いの顔を見つめあい、顔を赤らめながら2人はやり取りする。

「それで、オークションの見物がてらって同行してくださいさっただ」

「そうなんだ……」

ユーノの言葉に、なのはが優しい表情で答える。

「それよりなのは……その後どうだい？ 体の事とか……」

急に心配そうな表情になってユーノはそんな事を尋ねる。

「え？大丈夫だよ、もうすっかり完治したから…」

「そう……なら、いいんだけど……」

右手を振ってやんわり答えるのはに、どこか釈然としない感じに
ユーノは答える。

「それともう1つ……なのはに伝えておく事があってね……」

そうやってユーノは懷から1枚の書類を取り出し、それをなのはに手渡す。

「えっ……これって……」

その内容を見て、
なのはは驚きを浮かべる。

簡単に言つてしまえば、ユーノ・スクライアの機動六課への配属の
手続き書類であつた。

「正式には明日からなんだけど…僕もなのは達と同じ職場になるんだよ」

「ふええええええええええ！？？？」

続けられたユーノの言葉に、なのはは心底驚いて叫びを上げた。

*

結局なのは強い勧めにより、

隊舎に帰ってきてすぐに、六課の皆にユーノの事を紹介する事となった。

一般局員達は無限書庫の司書長が何故自分達の下に来たのかを疑問に考えつつも、歓迎の態度を見せ

隊長陣やベルクト達5人は、久方ぶりの仲間との再会を喜んでいた。

そしてその日の夕刻

「あのさ…2人共ちよっといいか？」

ヴィータは隊舎の廊下を歩いていたなのはとフェイトを呼び止める。

ヴィータが入った部屋には、既にシグナム、シャーリー、ユーノバレル、フェイ、ベルクトがいる。

それぞれが近くにある席に着き、そしてヴィータが切り出した。

「訓練中からときどき気になってんだよ…ティアナの事…」

話題はティアナの事であった。

「強くなりたいなんてのは、若い魔導師ならみんなそうだし無茶も多少はするもんだけど…時々ちよっと度を越えてる……」

「そういえば…トロワもティアナの訓練中に何度か僕に言ってたんだ何か…どうも焦ってるような感じがあるって……」

ヴィータがティアナへの疑問を語り、バレルが付け加える。

それを聞いてなのはが、ティアナの事に関して詳しく話し始める。

ティアナにはティードという名の、首都航空隊に所属する1人の兄がいた事

違法魔導師の追跡任務中に21歳という若さで殉職した事。

その任務で違法魔導師を取り逃がしてしまい、ティード自身がエリートという事も重なり

その件について心無い上司が、「首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態」だの

「死んでも取り押さえるべきだった」だの「役立たず」だのコメントした事

「ティアナはその時まで10歳…たった1人の肉親を亡くして…しかもその最後の仕事が

無意味で役に立たなかったって言われて…きつと物凄く傷付いたんだと思う…」

「酷い……」

なのはから語られるティアナの過去を聞いて、バレルは拳を握り怒りを露にする。

「このような組織の上層部には決まってそういう人間がいるものだから…全く…」

バレルが腕を組みながら、冷静な表情で呟く。

「でも…今日来たばかりの僕が言うのも難だけど…それでも、何てたってそんなに焦ってるんだい？」

お兄さんが上層部に酷い事を言われたのはわかったけど…」

ユーノが固い表情でそう言う。

＊

同じ頃、スバル、エリオ、キャロ、そしてタックとマリナがなのは達と同様にティアナの話を話していた。

「ティアはね：証明するんだって言ってた：お兄さんが教えてくれた魔法は

役立たずじゃない：どんな場所でもどんな任務でもこなせるって：それで：お兄さんが叶えられないで終わっちゃった、執務官になるって夢を

叶えるんだって：」

暗い表情でスバルは、周りの者にティアナの事について語っていく。

「ティアが、あんな一生懸命で必死なのは、その所為なんだよ……」その話をエリオとキャロも、スバルと同様に暗い表情で聞いていたがタックとマリナはどこか厳しい感じの表情を浮かべていた。

「けど：それを踏まえても今日のミスショットの話は納得出来ないわね」

マリナがそんな事を言い、タック以外の者が一斉にマリナの方を向く。

「どういうことですか？」

「何かの目的の為に、自分自身で一生懸命に努力をして無茶をする

……

その事自体をとにかく言うつもりは無いわ、寧ろ若いのに立派だっ
て言える位……」

少し声色を強めて尋ねてきたスバルにマリナは答えていく。

「けど……その無茶が自分の体が壊れる……ましてや仲間の命が危機に
瀕するレベルまで達するなんて

それは絶対にあってはいけない事だわ……無茶をして自分が壊れてし
まえば本末転倒だし……

自分の夢の為に仲間を犠牲にするなんてのは……自覚が有る無いにし
る個人のエゴにすぎないわ……」

厳しい表情で言うマリナに、スバルは口調を強めて言う。

「けどティアアは！」

「実際の現場を見てない俺達が言っても仕方ないかもしれないが……
ティアアナは自分の無茶で

君を危うく大変な目にあわせるところだったんだ、それは変わらな
い……」

「それは……でも私が避けられなかったから……」

突然口を開いたタックに対し、スバルは弱々しい声で答える。

「夢や希望、目標なんてのは生きていさえするならば

いくらでも作れて、そして追いかけることが出来る。けど命は一度
きりだ、

失えば二度と元には戻らない……仲間の命と自分の夢、秤にかけてど
ちらが重いかはわかるだろう？」

「スバル、あなたはティアアナと親しかったからそうやって庇いたく
なるのだろうけど……

間違っている事はちゃんと間違っていると言わないといけないわ……
甘やかしてたらティアアナの為にならない……それが仲間ってものだと思
うわ……」

タックとマリナはそう言った後、部屋を後にしていった。

＊

その日の夜、ティアナは他のフォワード陣と別れた後

夕方から4時間もぶっ通しで訓練を続けていた。

息遣いも大分荒くなっており、途中で膝をついてしまう。

ティアナは額の汗を拭い、呼吸を整え訓練を再開しようとする。

「大丈夫かい？」

するとその場にユーノが現れる。

「ユーノ…先生……」

「先生だなんてそんなくすぐったい…普通にユーノさんとか、難なら呼び捨てでもいいよ？」

ティアナがユーノの方を向いて言い、ユーノは苦笑を浮かべて答える。

「夕方からずっと続けてるんだよね？そろそろ止めないと体に響くよ？」

「……それでも、詰め込んで練習しないと上手にならないんです…凡人なもの……」

その言葉を聞いて、ユーノはピクリと反応する。

「凡人か……」

「……？」

急に雰囲気が変わったユーノを見て、ティアナは首を傾げる。

「ティアナ……1つ聞いておいて欲しいことがある」

「何でしょう……？」

真剣な表情をするユーノのメガネがキラリと光を放つ。

「周りが力のある人ばかりで……自分が劣っているって考えてしま
って……」

それで追いつきたくて無理をするのはわかるよ……けど、大きすぎる
力ってのは

時に人の感覚を狂わせて、時に取り返しの付かない事態を巻き起こ
す事があるんだ……」

「……………」

ティアナはユーノの話を真剣に聞いているが、言っている意味がよ
くわからない。

「君……なのは過去の件については知ってるかい？」

「なのはさんの……何の事ですか？」

「ッ！……………話してないのか……………！！！」

また急に表情を一変させたユーノを見て、ティアナは困惑気味に尋
ねる。

「何かあったんですか？」

「ああいや……何でもないよ……」

ユーノはまた穏やかな表情に戻ってそう言う。

「とにかく僕が言いたいのは……あんまり無茶はしない方がいいって
事だよ……」

君達はまだ先が長いんだ……体を壊したら大変だからね……」

「……ありがとうございます、けど大丈夫です……」

そう言ってティアナはまた訓練に戻る。それを見てユーノはその場
を離れていく。

（なのは……一番話すべき事なんじゃないかそれは？……でないと、
また君みたいなのが……）

歩いている最中、ユーノは少しイラついた感じに内心でそう呟いていた。

＊

そんなこんなで数日間の時間が流れていく。

プリベントアのメンバーは聖王教会での仕事があると言い、六課の隊舎を離れていった。

その間は特に事件もなく、黙々とフォワード陣の個別訓練が続いた。変わった事と言えば、ベルクトがエリオの訓練に個人的に付き合っている事

最初言い出した時フェイトは反対していたが、エリオの強い申し出と、ベルクトの了承により

本来の訓練に支障が出ない範囲で行なう事を許可したのである。

「そっか……話したんだ、エリオが自分の事を」

「ああ……お前の為に恩返しをしたいと強く願っていたぞ……」

訓練の休憩時間の間に2人がエリオの事を話す。

「俺も、お前がエリオを助けた事には感謝しているがな……」

「うん……もう、私やベルクトみたいな人を放っておく事は出来な
いって思ったから……」

そう言って2人は互いに微笑を浮かべていた。

そしてもう1つ変わった事、スバルとティアナが本来の訓練とは別に
早朝訓練を行なっているという事である。

最近ではその疲労によるものなのか、本来の訓練に支障が出るよう
になってきているらしい。

それに関して、ユーノがなのはと話をしていた。

「なのは……どうなんだい？最近のスバルとティアナの様子は……」

「うん……最近ちょっと訓練に身が入ってなくて……早朝の訓練を控
えて欲しいんだけど……」

暗い表情でなのはは、ユーノにそう答える。

「なのは……やっぱり、ちゃんとティアナと話をするべきだと思う
よ？」

君の昔の事とかも含めて、でないとまた……」

「ユーノ君ありがとう……でも大丈夫、これは私とティアナの問題
ティアナの上官は私なんだから、ちゃんと自分で何とかするから……」
少し寂しげな感じの笑みを浮かべてそう言い、なのははその場を離
れてしまう。

（なのは………どうして………）

ユーノはなのはの背中を見つめて内心でそう呟く。

「どうした？随分と浮かない顔をしているが？」

と、その場にベルクトの姿が現れる。

「ベルクト……いや、その……」

「……なのはに嫌われたか？」

「えっ！！ちょっと待て！そんなんじゃ……」

「フッ……冗談だ……」

慌てふためくユーノを見て、ベルクトはフッと笑みを浮かべる。

「……君も随分変わったんだね」

「まあな……こちらに来てから随分といろいろあった……」

互いに穏やかな表情でそうやり取りする。

「実は……ティアナの事なのはと話して……」

「ああ……俺も話は聞いている、兄の夢の為に必死なのだ」と

表情を曇らせて言うユーノに対して、固い表情でベルクトは答える。

「けどまあ……何とかなるだろう、あいつの上官はなのはなのだからな……」

外野の俺達が言うより、なのはに任せた方がいい……」

「……なのはと同じ事を言うんだね？」

「実際問題そうなのだから仕方あるまい……」

少し不満げに言うユーノに対して、固い表情を崩さずにベルクトは答える。

「それに……アイツ自身いつも言ってたじゃないか？」

言葉にしないと伝わらない事もあると……話をするためなら真っ直

ぐにぶつかると」

「うん………」

「それで…俺もフェイトも救われたんだからな……だから大丈夫だろう」

そう言ってベルクトもその場を後にしていく。

だが、ユーノはやはり安心できず、何か引かかる物を感じているのであった…

＊

そして更に数日後、スバルとティアナの模擬戦の時にユーノが感じていた嫌な予感的中する事になる。

「さーて、じゃあ午前中のまとめ、2on1で模擬戦やるよ！まずはスターズからやろうか？バリアジャケットを準備して」

「はい！！」

空間シュミレーターのビル街の一角、その空中に浮かぶなのはに、スバルとティアナは元気よく返事をし、バリアジャケットを展開する。

「エリオとキャロはあたしと見学だ」

「はい」

ヴィータの指示に従い、エリオとキャロがビルの屋上へとあがっていく。

ビルの屋上にはヴィータ、エリオ、キャロに加え
アムロ、ユーノ、ベルクト、バレル、フェイ、タック、マリナがいた。

「ああ…もう模擬戦始まっちゃってる？」

と、そこに慌ててフェイトが息を切らしながら現れる。

「フェイトさん！」

エリオが気づいて声をかける。

「私も手伝おうと思ってたんだけど……」

「今はスターズの番」

フェイトに対してヴィータが答える。

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね…」

「ああ…なのはもここんとこ訓練密度濃いからな…少し休ませねーと…」

フェイトとヴィータがなのはの方を見つめながら言う。

「なのは、部屋に戻ってからでもずっとモニタに向かいっぱなしなんだよ。」

訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり…

…」

「なのはさん……訓練中も、いつも僕達のこと見ててくれるんですよね……」

「ほんとに……ずっと……」

エリオとキャロもなのはを見上げてそう言う。

（やっぱり凄いな……時の流れは……）

そんなみんなの話を聞いて、バレルはなのはの変わり振りを心内で考える。

「……………」

そんな中、ユーノはただ1人複雑そうな表情で模擬戦の様子を伺っていた。

「おっクロスシフトだな…」

ヴィータがティアナの方を見てそう呟く。ティアナは周辺に魔力弾を浮かばせている。

「クロスファイヤー……シュート!!」

ティアナが魔力弾をなのはにむかって放つ。それを見てベルクトが呟いた。

「?……心なしか何時もよりキレが悪くは無いか…?」

「コントロールはいいみたいだけど?」

ベルクトの言葉にフェイトが彼の方を見てそう言う。

「いや…それにしたって…」

ヴィータがどこか釈然としないものを感じ呟く。

ティアナの魔力弾を回避しつつ移動するなのはの前に、ウイングロードが現れる。

なのはは近づいてくるスバルを見て驚いて言った。

「フェイクじゃない…本物!？」

なのははスバルに向かって魔力弾を放つ。

スバルは魔力弾を防御しつつ無理矢理突撃する。何発かは防御しきれず体を掠めていく。

「うおおおおお!!!」

スバルはなのはに接近し、リボルバーナックルの拳を叩きつける。なのははシールドを展開してそれを防御し、そのままスバルを吹き飛ばす。

「きゃああああ!!!」

吹き飛ばされたスバルは展開していたウイングロードの上に着地する。

「こらスバル!ダメだよそんな危ない軌道!」

「すいません!でも、ちゃんと防ぎますから!!!」

なのははスバルを叱り、それに対するスバルの返答を聞いて更に怪訝な顔をする。

「…ティアナは?」

なのははティアナの姿が見えないのを確認し、辺りを見渡す。

すると、近くのビルの屋上で、ティアナが砲撃の構えを取っていた。

「砲撃…ティアナが!？」

フェイトが驚いて声を上げる。ティアナは今まで砲撃魔法なんて使ったことが無いからだ。

（特訓成果、クロスシフトC！行くわよスバル！！）

（おう！！）

ティアナの念話にスバルは力強く答える。

スバルはリボルバーナックルのカートリッジロードを行い
マツハキヤリバーを唸らせ、再びなのはに向かって突進していく。
それを見てなのはは魔力弾を放つが、スバルはそれらを回避してい
く。

スバルは再びなのはに拳を叩きつけ、なのははそれをシールドで防
ぐ。

（ティアー！！）

防御するなのはに向かって必死に攻撃しながらスバルは念話を飛ば
す。

すると、砲撃体勢を取っていたティアナの姿が消滅する。

「あっちのティアさんは幻影！？」

「本物は！？」

キャロとエリオが驚いて声を上げる。

ティアナはなのはの頭上に展開されたスバルのウイングロードを走
っていた。

「…あえて接近戦を挑もうというわけか……しかし……」

ティアナの行動を見て、アムロが固い表情でそう呟く。

（バリアを切り裂いて…フィールドを突き抜ける！）

ティアナはクロスミラージュの先端にダガー型の魔力刃を形成する。
そしてそれを構えてなのはに向かって飛び込んだ。

「一撃必殺！でええええいっ！！」

そんなスバルとティアナの無茶を見て、遂になのはの限界が訪れる。
「レイジングハート：モードリリース…」
なのはがそう呟いた瞬間に、ティアナがなのはにぶつかり爆発が巻き起こる。

「おかしいな……2人共……どうしちゃったのかな……？」

爆煙が晴れた先には、左手でスバルのリボルバーナックルと右手でティアナのクロスミラージュの魔力刃を直接掴んだのが立っていた。

スバルとティアナはそれに驚いて目を見開く。

「頑張ってるのはわかるけど……模擬戦は……喧嘩じゃないんだよ？」

冷たい表情でなのはは淡々と呟いていく。

「練習の時だけ言うこと聞いている振りで…本番でこんな危険な無茶するんじゃない？」

練習の意味……ないじゃない？」

クロスミラージュを掴むなのはの手が血で赤く染まっている。

「ちゃんとさ……練習どおりやろうよ…ね…？」

「あ…あの…」

本当に冷たい雰囲気纏い、静かな、されど膨大な怒りを見せてなのはは呟く。

スバルはなのはの怒りに震え、ガタガタ震えている。

「私の言ってること……私の訓練……そんなに間違ってる……？」

なのはがそこまで言った時ティアナはクロスミラーージュの魔力刃を消滅させ、なのはと距離を取る。

そして、クロスミラーージュを両手で構え、なのはの方に向ける。

「私はっ！もう……誰も傷つけないから！！無くしたくないから！！」

だから……強くなりたいです！！」

涙ながらにティアナは自分の思いをさらけ出す。

「ティア……」

スバルは目を見開いてティアナの方を見つめている。

その独白はビルの上にいる他のメンバーにも響いていた。

エリオ、キャロ、フェイト、バレル、フェイは心配そうな表情を浮かべる

ヴィータ、タツク、マリナ、ベルクト、アムロは固い表情で見守っている。

が、他の誰とも違う表情を浮かべる人間が1人いた。

「ユーノ君……？」

フェイがユーノの方を見て呟く。そこに浮かんでいたのは……怒りの表情であった。

しかもその対象はティアナに向けてではなかった

「少し……頭冷やそうか……？」

なのは右手の人差し指をティアナに向ける。

「クロスファイア……」

そして指先に数個の魔力弾を形成する。

「うわああああ！！ファントムブレ……」

ティアナが砲撃魔法をなのはに向けて放とうとするが

「シュート……」

その前になのはがクロスファイアを発射する。

クロスファイアはティアナに直撃し、爆発を起こした。

「ティア！！……バインド！？」

スバルはティアナの所に向かおうとしたが、その前になのはのバインドで拘束されてしまう。

やがて爆煙が晴れ、ティアナの姿が見えてくる。

ティアナは既にボロボロで目は虚ろになり、立っているのがやっとの状態だ。

そんなティアナを見た後、なのはがスバルに無情の一言を言う。

「じつとして……よく見てなさい……」

なのは再び指先に魔力を集中していく

「！！……なのはさんツツ！！」

スバルがなのはに向かって叫ぶが、なのはは聞く耳持たずだ。

「！！……これ以上は……」

「……………馬鹿が……」

「なのはっ……………！！」

だからこそ、なのはは気づかなかった。
ビルの屋上にいた数人がクロスファイアの二発目を撃とうとした時に動いたのを。

二発目のクロスファイアがティアナに向かって放たれ、爆発を起こした。

「ティアーーーーーッッッ！！！！！」

それを見たスバルが叫んだ。そして徐々に煙が晴れていく。

だが煙の晴れた先には、ピラミッド型の防御フィールドに包まれたティアナがいた。

「なのは……もうよせ……これ以上やっても彼女の為にならない……」

フィールドを張った人物―アムロがなのはに向かって険しい表情でそう言う。

アムロは防御フィールドを解除し、フィンファンネルを背部に戻す。その時、タックとマリナの2人がティアナの側に降り立った。

（医務室に頼む……）

（了解です……）

アムロの念話を固い表情でタックとマリナは受け取る。

「アムロさん……………」

そんなアムロになのはは冷たい表情を向け

「邪魔……………しないで下さい……………」

なんとアムロに向けて三発目のクロスファイアを放とうとする。

「なのは!!」

なのはに向かってアムロは叫ぶ。

パン!!

だが、突如響いた乾いた音と共に、発射が中断される。

「ユーノ……………君…?」

ようやくなのはがまともな表情に戻り

目を見開いて自分の頬を叩いた目の前の人物ーユーノを見つめる。

ユーノもまた、先程までのなのはと同じように冷たい表情を浮かべ

ていた。

「何でだ……何でこんなになるまで放っておいたんだ……」
ポツリポツリとユーノは呟く。そして声を荒げた。

「何が私が何とかするからだなのは……! あんなズタボロになってもまだ

自分の圧倒的な力でねじ伏せるのが君のやり方だって言うのか……!
8年前自分があんな目に会ったというのに、自分で仲間を痛めつけてどうするんだ……!

何故彼女に話さなかったんだ……! 何故先に言葉で彼女に自分の考えを伝えなかったんだ……!

それとも、言わなくても伝わるとでも思ったのか……!

まるで今まで我慢していた物をいっぺんに吐き出すかの如くまくし立てていく。

それを聞いてなのはは涙を浮かべて、ユーノに感情的な声で叫ぶ。

「けど……私は……! ……! ……! 私はッ……!」

ドッ……

そこでなのは意識は途切れる。

「……………10年前…俺とフェイトに言った事を忘れたのか…………？」
彼女の背後にノーマルモードでデバイスを起動し、長身砲を構えたベルクトが立っていた。

「今のお前は…………何の思いもなかった力を振るうだけの存在でしかないだろう…………なのは…」

倒れたなのはを抱え、哀れむような表情でベルクトは呟いた。

ビルの屋上では残ったメンバーがその一部始終を見ていた。

特にエリオとキャロにはショックが大きかったらしく…青ざめた顔をしている

フェイトは自分の親友達が争う様を見て、うっすら涙を浮かべている。

至近距離で見ていたスバルは啞然としている。

そしてバレルは気を失う間際のなのはの表情を見て、寂しげな表情を浮かべていた。

（確かになのはのやり方は強引だった…………けど…………彼女は変わってなんかいなかったんだ…）

今まで自分が見てきた教官らしい、大人びた態度のなのははフォワード陣の為を思っであえて徹していた態度であり

先程見せた感情的な表情が本心だったのではないかと、そんな風に考えていた。

自分とほぼ同年代なのに、部下というものを持ち

彼らの為に必死で一生懸命だった彼女のプレッシャーはかなりの物だったのでは？と思い

目の前で起きた事と合わせて、複雑な心境になるのであった。

「……模擬戦はこれで一旦終了だ！！一先ず皆隊舎に戻れ！！」
そしてアムロが皆に聞こえるように叫んだ。

……
こうして……多数の亀裂を生んだまま、模擬戦は終了するのであった

第8話（後書き）

あはは〜何だコレ…

書いてて自分でもノリノリになってしまっってこんな内容になりました。

ユーノの機動六課入りはプロット時点で決まっていたんですが
まさかアグスタ↓魔王降臨までこんなにサクサク進むとはちよつと
予想外でした。

いろいろ思うところはありますが

やはり私はあの時のなのはのやり方には×を掲げますね。

確かにティアナにも十分落ち度はあるんですが

作中で言った通り、あれじゃただ力でねじ伏せてるだけですからね…

にしても本当にユーノ君が（作者的には）カッコいいキャラになっ
てくれます。

本編で影薄かったけど、そもその始まりは彼なのですからね
気づかせてくれた虚空さん、本当にありがとう。

原作以上に亀裂まみれのこの状況をどう乗り越えさせるか：
次回をお楽しみに

それではまた

第9話（前書き）

今回の話、一言で言うなら「スーパーユーノタイム」です。

嫌悪なムードが漂う六課のメンバー達
そんな中、ユーノがなのはの全てを語るのであった…

第9話

その後、ティアナとなのははすぐに医務室へと運ばれた。訓練後はフォワード陣や隊長陣の間で嫌悪なムードが漂っておりほとんどの者が口を開く事が無かった。

＊

「ん……うう……」

医務室の一室、ベッドので眠っていたのはが目覚める。

ティアナに比べれば被害は少なかったので、それほど時間は経っていなかった。

（と言ってもベルクトの長身砲で気絶するほどの衝撃で叩かれたわけだが）

「目は覚めたか？」

と、最初に視界に入っただのはその張本人であるベルクトであった。

「ベルクトさん……」

暗い表情でなのはは呟く。何を言えいいのか思い浮かばないのだ。そんな彼女の様子を見て、ベルクトが固い表情で言う。

「……確かに、ティアナ・ランスターが模擬戦で行なった事は模擬戦自体の内容や奴のポジションから考えても、非常に悪い物だろう……」

その程度は俺でもわかる……だがな」

そこまで言ってベルクトは更に表情を固くし、そして続ける。

「奴が早朝訓練を行なったり……模擬戦であんな無茶をやった理由を……お前は一度でもあいつに聞いたか？ 普通なら疑問に思うはずだろう？ 何故こんな事をするのか……とな」

「でも……私はず……皆に私と同じ……あんな思いをさせたくなくて」

何やら意味ありげな事をなのはは呟く。

それに何か引かかる物を感じるベルクトであつたが、構わずに続ける。

「まあ、あいつの上官がお前だから……お前が何とかしてくれると楽観視していた

俺達にも責任はあるだろう……だがな、お前にはお前の考えがあるように

奴にも奴なりの考えがあるということだ……それを考えずにあんな風にただ力で捻じ伏せたのでは、余計に溝が深まるだけだろう……」

「ベルクトさん……」

「言葉にしないと伝わらない事もある……10年前、お前は俺とフエイトにそう言った……」

一度じっくりティアナと話し合うべきだろう……ちゃんとお互いの気持ちを確認し合うんだな……」

「………はい」

暗い表情で俯きながらなのはは頷いて答える。

それを見たベルクトが部屋の扉の前に行き、出際に更に言う。

「……今の俺にはフエイトやバレル達だけじゃない……なのは、お前や

お前達の仲間……それこそ機動六課の奴らも……俺にとっては守るべき大切な仲間だ……」

その仲間達が争っていれば心配するのが普通だ……それを覚えてお

くんだな…」

そう言ってベルクトは医務室を後にする。

(……………全く…こういう役目は俺にはあってないだろう……………)
そして先程まで自分が言っていた事に今更妙な違和感を感じ
ベルクトは思い悩むのであった。

＊

「ん……………？あれ……………？」

数時間後、別の医務室でティアナが目を覚まして、起き上がる。

「あらティアナ？起きた？」

「シャル先生……………それに……………ユーノ……………さんも……………」

ちょうどその時、医務室にシャルとユーノが入ってくる。

「昼間の模擬戦で…撃墜されかけたのは覚えてる？」

「……………はい……………」

シャルの言葉に、ティアナが俯いて答える。

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、体にダメージは無いと思うんだけど…」

そう言われてティアナは自分の体を見つめる、確かに外傷は1つも無いようだ。

と、ティアナは側においてあった時計が視界に入り、そして驚きを浮かべる

「えっ……………！9時過ぎ！？夜！？」

模擬戦を行っていたのは午前中だったのだ、それまでずっと眠っていた事になる。

「凄く熟睡してたわよ、死んでるんじゃないかって思うくらい…」

「今までの無理がどつと来たんだろうね……………」

シャルが優しく言い、ユーノが厳しい表情で言う。

そしてユーノはティアナの前に移動し、彼女の顔を見上げるように屈み込む。

「ティアナ、確かになのはのした事は正しかったとは僕は到底思えない…」

けど君も君だ、無理な訓練で疲労を溜め込んで、模擬戦でも自分に合わない戦法で無茶やって…

これが本番だったらどうなってたか…君にはわかるだろう？」

「……………」

言われてティアナは目を見開く。

「……………何かを守る為、何かを果たすために力を追い求めるのを僕は否定するつもりは無い…」

けど、その為に自分自身の事、そして仲間の事を無駄に傷つける事だけは

僕は絶対にしちゃいけないと思ってる…って最近来ただけの僕が言っても

あんまり説得力無いかもしれないけどね……」
そう言ってユーノは苦笑を浮かべて立ち上がり、扉の前に行く。
「明日ちゃんとなのはと話し合ってみるといいよ……そして伝えればいい、自分の思いをちゃんと伝えれば……なのはもきつと、君と真剣に話し合ってくれるさ」
そう言ってユーノは部屋を後にした。

＊

と、ちょうどその時廊下を歩いていたベルクトと鉢合わせる。
「……なのはには、ちゃんとやってくれた？」
「……ああ、きちんと伝わったかはわからんがな……」
互いに固い表情で言い合い、そしてベルクトが尋ねる。
「しかし……模擬戦では随分とお前らしくない行動をしたものだな？
あんな風に感情的に怒鳴り散らす姿は初めて見たぞ？」
それを聞いてユーノはどこか寂しげな表情になって呟く。
「……見ていられなかったんだ…僕、もう仲間が大変な目に会うの

は……

あんな事が繰り返されるのは嫌だったからね……まして、なのは自身あんな事があったというのに……ただ自分の力で捻じ伏せるだけの行為なんて……」

「あんな事……？」

ユーノが話す内容に疑問を浮かべた、ベルクトが尋ねる。

「ユーノ……前々から思っていたが、俺達のいない間になのはに何かあった？」

お前もなのはもただ事ではないような事態でもあったのか？」

「……………」

しかしユーノはそれに答える事無く、寂しげな表情を浮かべたまま行ってしまった。

「ベルクト、ここにいたの？」

「フェイか……」

ユーノの姿が見えなくなって、入れ替わるようにフェイがその場に現れる。

「何かあったの？」

「いや、大丈夫だ……ユーノと話をしていただけだ……」

「そう……」

フェイもユーノについて何か思うことがあるのか、暗い声で答える。

「ねえ……最近のなのはさん……それにユーノ君も何かおかしくない

…?」

「…9年も会ってなければ人が変わるといふ事もあるだろう…

とは言え、俺もあの2人の行動に些か疑問を感じざるをえないがな

……

俺から見れば…ユーノの奴はなのはに怒っているという風には見えない…」

「私も思ってたわ…あの時のユーノ君は怒ってるというより…」
そこまで言って2人はそのまま黙り込む。

ベルクトは2人の違和感について、その原因がとんと検討がつかなかった。

しかし、フェイはどういうわけか自分でも不思議に思うくらい
2人が、特にユーノの方があんな行動に出た原因が、非常に漠然と
していて

言葉には出来ないレベルだが、自分の中である1つの考えが浮かんでいた。

そしてベルクトとフェイが共通して思っていた事

それは、自分達のいない9年間の間に、少なくともなのはやユーノ
に関わる

何かとても大きな事件があったのではないか?という事である。

とその時、隊舎内に警報が鳴り響くのであった。

＊

管制室、現れた敵の情報を局員が報告していく。

「東部海上にガジェットドローン？型が出現！！」

「機体数現在24機、旋回飛行を続けています！」

「それに：機体速度が今までよりも：かなり速くなってます！」
それを聞いて真剣な表情ではやてが呟く。

「場所は何も無い海上：レリックの反応も無ければ：付近には
海上施設も船も無い……どう見ます？アムロさん？」
傍らに立っていたアムロに尋ねる。

「今までの経緯で考えれば：完全に捨て駒、囹の類だろうな……
こちらの戦力を測るためか……あの程度でどこまで戦えるかといっ
た感じの……」

それを聞いてはやては顎に手を当て考える

「この状況なら：こっちは超長距離攻撃を放り込めば済むわけやし
……」

「一撃でクリアですよー！！」

はやての側にいたリインが元氣よく答える。

「ああ：だが、だからこそ新しい情報は見せずに、今までと同じよ
うにに対処すべきだろう……」

さっきも言ったが、敵が調査や情報収集目的なのは見え見えなんだ

からな」

「うん……それで行こう！」

アムロの提案をはやては採用するのであった。

＊

ヘリポート前、

今回は空戦という事で、尚且つ敵の目的が調査という線が強い為
出撃はなのは、フェイト、ヴィータの3人という事になり
シグナムとフォワード陣、その他のメンバーが待機ということにな
った。

ふと、なのはがティアナの方に顔を向けて優しく言った。

「ティアナは……出動待機から外れておこうか？」

「その方がいいな……そうしとけ」

なのはの言葉にヴィータも同意しそう言う。

だが、ティアナはそれを聞いて暗い声でこう言う。

「言う事を聞かない奴は……使えないって事ですか……」
それを聞いてなのは顔を顰める。

「自分で言ってるわからない？ 当たり前的事だよ？ それ」

周りのムードが再び嫌悪な物になっていく。

そんな中、その場にいたユーノは再び怒りの表情を浮かべていた。

「ユーノ君……？ どうしたの？」

それを見たフェイがユーノに尋ねるが、ユーノは答えない。

「現場での命令や指示は聞いてます……教導だってちゃんとサボらずやっています！

それ以外の場所での努力まで、教えられた通りじゃないとダメなんですか……！」

段々と声を荒げながらティアナは反論する。

それを見たヴィータが前に出ようとしたが、なのはに止められてしまう。

「私は！なのはさんや97ー2番世界の人達みたいにエリートじゃないし、

スバルやエリオみたいな才能も、キャラみたいなレアスキルもない！
少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんなれないじゃないですか……！」

声を荒げてティアナは自分の思いを訴える。
それを見て、シグナムがティアナに掴みかかろうと前に出た。

ドゴッ！

ティアナは殴り飛ばされ、その場に倒れこむ。

だが、ティアナを殴り飛ばしたのはシグナムではなかった。

「……その為に……実戦で自分や仲間被害が出るのは間違っている
と言ってるんだッ……！」

ティアナの前に立っていたのはユーノであった、顔には凄まじいまでの怒りが浮かんでいる。

周りの者は呆然としていた。昔からユーノの事を良く知るなのは達でさえ

こんなにも怒っているユーノを見た事がないからだ。

「……行って、なのは……」

「えっ……でも……?」

ユーノはなのはに背を向けたままポツリと呟く。

「君が話すつもりが無いなら……僕が話す……今の君の言葉じゃ恐らく彼女には伝わらない……」

「で、でも……ユーノ君……」

「行けって言っているんだ!!」

突然声を張り上げユーノは怒鳴る。その突然の行動になのは目を見開いて驚く。

他の者達も同様に驚きを浮かべていた。

＊

ヘリが飛び立って行き、残された者達は複雑そうな表情を浮かべる。

「……殴ったのは謝るよ……男として最低だ……でもね、君が言っている事は

悪いけど唯の子供のワガママなんだよ……」

冷たい表情でティアナを見下ろし、ユーノは呟く。

「ユーノ！もうよせて！！」

その行動を見かねたバレルがユーノに詰め寄る。

「ユーノさん！！」

スバルがユーノ前に立ち、彼の顔を真っ直ぐ見据えて反論する。

「命令違反は絶対ダメだし……さっきのティアナの物言いとか……

それを止められなかった私は確かにダメだったと思います……」

スバルは涙声になってくる。

「けど！自分なりに強くなろうとするのとか！

キツイ状況でもなんとかしよう頑張るのって、そんなにいけないことなんでしょうか！！

自分なりの努力とか……そういうことも……やっちゃいけないんでしょうか！？」

ユーノは黙ったまま話を聞いていたが

スバルの顔を真っ直ぐ見据えて、やがて口を開く。

「……なのはには、なのはなりの考えがある……自分が会った悲劇を二度と繰り返さないために……だけど、君もなのはもただ罵り合っているだけで

お互いの事を何も知らうとしちゃいけない……ティアナがお兄さんの夢の為に頑張っていると

自分で伝えないのと同じで……なのはもまた……」

そう言ってユーノは、着ていたスーツの懷から1枚のディスクを取り出す。

「だから……僕が全てを話させてもらおう事にする、8年前の悲劇と、

なのはの考えを…」

そこまで言ってユーノはバレルの方に顔を向ける。

「バレル……君とフェイとベルクト……それに、ここにいない
タツクとマリナも呼んでくれるかい……？」

「あ、ああ………」

困惑したままバレルは答えた。

＊

六課隊舎のロビー

フォワード陣とシグナム、後からやってきたシャマルとシャーリー
がソファに座る。

ベルクト、バレル、フェイの3人がフォワード陣の座るソファの後
ろに立ち

タツク、マリナの2人がシグナム達の座るソファの後ろに立つ。

そして、皆の前に立ってユーノがモニターを操作し、全てを語り始
める。

「昔……1人の女の子がいた……本当に普通の女の子で……魔法なんて物

は当然知らない…
友達と一緒に学校へ行き…家族と一緒に幸せに暮らす…そういう一生を送る筈だった…」

そして、次々と場面が切り替わっていき、なのはのこれまでの戦いが映し出される。

魔法と出会って、たった数ヶ月で命がけの実戦を繰り返す様子を…己を省みない無茶な魔法の使い方をし、刻々と体に疲労を溜め込んでいく様子を…

自身の限界を超える力を無理に引き出すカートリッジシステム、並びに

フルドライブを搭載し、それに更に加速をかけていった事…

フォワード陣は過去のなのはの戦いの映像に目が釘付けになっている。

特にエリオは、嘗てなのはとフェイト、ベルクトが戦っていた事に驚きを隠せない。

「こんな無茶を続けて……体に異常が出ないはずが無い……」

そして、8年前の冬……悲劇は訪れた……」

場面が切り替わり、8年前の映像が映し出される。

雪の降りしきる異世界で、なのはが不意に現れた未確認体に撃墜された映像だ。

「普段のなのはなら何ら問題は無い相手だった……けど

溜まっていた疲労と続けてきた無茶の所為で……こんな事になってしまった……

そして……その果ての結果がこれだ……」

場面が切り替わる。そこに映し出されたものを見て、フォワード陣とベルクト達5人は驚きを浮かべる。

「嘘だろ……!!?」

「なのはさん……!!!」

バレルが目を見開いて呟く。フェイは両手で口を押さえて震えている。そこに映っていたのは全身ボロボロになったなのはの姿だ。

「撃墜されて宣告されたんだ……なのははもう飛ぶことは愚か……立って歩くことすら出来ない可能性があるってね……」

暗い表情でユーノがそう言う。それを聞いてフォワード陣が特にティアナが強く驚きを浮かべる。

「無茶をしても、命を賭けても譲れぬ戦いの場は確かにある……

だがお前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を賭けてでも、どうしても撃たねばならない状況だったか?

訓練中のあの技は……誰の為の、何の為の技だ?」

今まで黙っていたシグナムが、腕を組みながら厳しい表情でティアナに言う。

ティアナはそれを聞いてショックを隠せない。

「大きすぎる力は……時に人の感覚を狂わせて、取り返しが付かない事態を巻き起こす……

なのは自身が己を省みずに無茶をして、そしてこうなったんだ……だからなのはは、自分や仲間を省みない行動をする人間には厳しいんだ……

もう二度と……自分と同じような悲劇を繰り返させない為に……」
そう言ってユーノは映像を切り、ディスクを取り出して付け加える。
「……あんな強引な手段に出る前に、自分で伝えてほしかったんだ
けど……」

その場にいたほとんどの者はショックを浮かべたまま黙り込んでい
る。

まさかなのは自身にここまでの悲劇が降りかかっていたとは思わな
かったからだ。

(……………あんな無茶をしたというのにそれでも……………)

(……………なのは……………あなたって本当に……………)

タツクとマリナは、過去のなのはの悲劇を聞いて、周りと同様にシ
ョックを受けている。

(なのは……………それで君はああやって無理に取り繕って……………)

バレルは以前自分が考えた事を更に確信する。

(……………成る程な、それでコイツは……………)

ベルクトは固い表情を浮かべながらも、全て納得いったような思
いになる。

(……………ユーノ君……………)

フェイはまだ何かもやもやした感じが残っていて、複雑そうな表情
を浮かべる。

そしてユーノがこれで終わりと云わんばかりに大きく息を吐き出しその場を離れようとする。

「……最も……そもその原因は僕かもしれないんだけどね……」

ロビーから出る出際に、ユーノはポツリとそんな事を呟く。

「……………」

それを聞き取った者が1人おり、そして慌ててユーノの後を追う。

「フエイ……………」

突然表情を一変させ、ユーノの後を追っていったフエイを見て、バレルは呟いた。

＊

「スターズ02、24機目を撃墜！これで全滅です！」

管制室、局員の報告を聞いてグリフィスが言う。

「付近の海上観測隊に連絡して、残骸の回収を」

「了解！」

その後、席に座ったはやてがアムロの方に顔を向けて言う。

「待機する必要は無さそうやから……3人は戻ってもらってええかな？」

「そうだな……フォワード部隊も、もう解散で……………ツツツ！！？」

突如、アムロは目を見開いて頭を抱え込む。

「ちょっ！アムロさん、大丈夫か！？」

突然のアムロの行動にはやてが慌てて立ち上がり、心配そうに言う。

「グッ……だ、大丈夫だ……」

アムロははやての方を向いて言うが、顔色がよろしくない。

「ホンマか？何かあっても事やし…一度医務室に……」

「すまない……けど本当に大丈夫だ、少しクラッとしただけで……」
尚も心配するはやてに対して、アムロは笑みを浮かべて答え、元の体勢に戻った。

（さっきのプレッシャー……まさか……）

モニターを見つめつつ、アムロは内心でそう呟いていた。

*

ヘリポート、任務から戻ってきたのはは驚きを浮かべていた。

「ええっ！は、話しちゃったんですか……！」

「ああ……ユーノの奴が全てを話してたよ、8年前の悲劇の事も……」

バレルが暗い表情でそう呟く。

「人の過去勝手にバラすなんて、口の軽い男だなあ……」
後ろに居たヴァイスが呆れた感じでそう言う。

「ッ……ユーノ君………！！！」

「あ……おい……なのはっ！」

なのはは慌てて駆け出し、その場を離れていく。その後をバレルが追っていく。

そんな中、フェイトがベルクトに近づいてくる。

「ベルクト……その……」

「……今俺達があいつらの所に行っても仕方なからう……」

心配そうな表情を浮かべるフェイトに、少し沈んだ表情でベルクトは答えた。

＊

六課隊舎外、その近くにあるベンチに座り、ユーノは沈んだ表情を浮かべていた。

「……ここにいたのね？」

「……フェイ……」

ユーノが顔を上げる。彼の目の前には優しい表情を浮かべたフェイが立っていた。

フェイはユーノの隣に座り、そして話しかける。

「あなたの気持ち……出際の言葉を聞いて何となくだけど……わかった気がするわ……」

「……………」

「……後悔……してるのね？」

ユーノは顔を俯かせてフェイの言葉を黙って聞いていたが

「……………バカですよ……僕って……」

やがて静かな声で自分の胸の内を語り始める。

「8年前のあの事故の時……現場にいなかったとはいえ、僕は何もできなかった……」

体中ボロボロになって……もう歩く事さえ出来ないって言われたなのは……

僕は何もしてあげられなかったんです……………」

ユーノの目からポロポロと涙が零れ落ちる。

「それで今でも……後悔してるんです……なのはにこの道を選択させたのは

僕だったって事……あの時、ジュエルシードに関わらせて……

彼女に力を与えたのは僕だった……本来なら……あんな目に会ってるのは

僕であった筈じゃないかって……………!!」

段々と口調を強めていく。

「だから……!! 本当なら僕がなのは守ってやるべきだったんだ……!」

なのに…力を与えた筈の僕は何も出来なくて……なのは1人で
どんどん強くなって無茶をして……!! その結果があれだったんで
す……!!

正直呪い殺してやりたくまりましたよ……!! 無力な自分の事を…
…!!」

涙ながらにユーノは自分の思いを語っていく、フェイはそれを黙っ
て聞き入れている。

「六課に来たのもそれが理由だった……! 今度こそ自分の手で
なのはを…その仲間達を守りたいって思ってたから……!!」

なのに……なのはは、自分の部下にあんな事をしたんです…

自分が無茶をしておきながら……無茶をする部下に何も聞かず
ただ自分の力で捻じ伏せて…傷つけて……そんな事許せなかったん
です…

もう……仲間が傷つくのは見たくないって思ってたから……

自分の手で、また悲劇を繰り返すつもりなのかって……そんな風に
考えちゃって…」

話しているうちに逆に段々と口調が落ち着いてくる。

「けど……そんな筈は無かったんですよね……ただ、皆不器用だっ
ただけで…

すれ違いの末に…あんな悲劇が起きてしまった……今更考えれば僕
も同じです…

ちゃんとこの事をなのはに僕自身の言葉で伝えるべきだったのに…
…」

自嘲気味に笑いながらユーノが言う。

そこまで聞いてフェイは、穏やかな声で語り始める。

「……あなたの気持ち、私にも少しはわかるわ……私も同じだった
から…」

自身も同じ……バレルを戦いに巻き込んだ自分だからこそユーノの気持ちかわかる……

自分もただの学生であつたバレルを意図的に戦いに巻き込んだ当初はベルクトの野望を止める為に利用する、その程度にし考えていなかったのだ。

死にかけて場面も何度か会つたし、彼が戦うのを躊躇う所も見てきた。

けど、バレルは幾多の戦いを乗り越えて強くなっていった。

自分も、強くなっていくバレルを見て希望を見出していった。

そしていつしか、バレルは自分にとって掛け替えの無いパートナーとなっていた。

こちらに来てからも、最初はバレルだけが戦うのが心苦しく

自身もデバイスを用いて魔導師として戦う事にしたのだ。

バレルが自分の為に戦ってくれるように

自分もまた、バレルを守る為に戦うために。

「……確かに、なのはさんが魔法と出会ったきっかけも

バレルが機動兵器のパイロットになったきっかけも第三者によるものだわ……

けど……そこから先は自分が選びぬいた道だって私は信じていの……」

今度は逆にフェイの話を、ユーノが黙って聞く形になっている。

「私も全く後悔してないわけじゃない……戦うのが嫌なら

止めてもいいと、何度か言った事もある……だけどバレルは言ってくれた

自分の力で出来ることがあるなら、その為に戦いたいってね……

だから私も、バレルの側に居て、そして共に戦う道を選んだの……」

「フェイ……」

「それはなのはさんも同じだと思うわ……自分の魔法をちゃんと使って自分の力で出来る事をしたい……そんな風に考えてる筈だわ……」

「けど……やっぱり僕は……」

「事故の事は確かに私も驚いたわ……けど幸い、なのはさんはあんなに元気になっている……

そしてあなたと同じで、悲劇を繰り返させない為に必死で頑張っているわ……

それは自分で選んだ道……何もかもがあなたの所為な筈は無いわ……」

「それはそうだけ……」

やはりどこか納得が出来ないといった感じにユーノが呟く。

すると、フェイが急に立ちあがる。

「まあ……後は本人同士で話し合う事だと思うわ……私はお邪魔みたいだしね……」

「は……？ ちょっとフェイ……どういう……」

そう言っただけフェイはその場を急ぎ足で離れていく。

ユーノが慌ててフェイが走っていった方に振り向くと

「……なの……は……？」

「ユーノ君……」

沈んだ表情を浮かべたなのはが立っていた。

＊

なのはとユーノから見えない位置にフェイは移動する。

「……あなたが連れて来たんでしょ？」

「あはは……途中でユーノを見てね……それで更になのはと鉢合わせになったもんだから……」

「まったく……」

そしてその場所にいたバレルに対し、フェイはすこし呆れた感じで言う。

「けどまあ……後は本人達の問題だわ……私の出番は終わり……」

「ああ……でも、嬉しかったよフェイ……」

「何が？」

フェイはバレルの方を向いて首を傾げる。

バレルは顔を赤らめながら言った。

「その……俺の事、あんな風に考えてくれて……」

「何言ってるのよ……もう、ずっと一緒に戦ってきたんだから……」

「フェイ……」

フェイも顔を赤らめる。そして2人は互いに肩を寄せ合い、その場を後にした。

＊

互いに無言のまま、なのはとユーノの間に重い空気が漂う。

「……………聞いてたの…?」

「うん……………最初から……………」

やがてユーノが口を開き、なのはが俯いたまま答える。

ユーノは暗い表情を浮かべてこう言う。

「……………ごめん、なのは……………僕はここに来たばかりなのに…」

僕の勝手で皆に辛い思い…「ユーノ君ッ…!」ってうわあ!」

ユーノが言い切る前に、なのはがユーノに抱きつく。その目には涙が浮かんでいる。

「バカッ……………! ユーノ君が思いつめる必要なんて無いのに……………!」

自分で勝手に抱え込んで苦しまなくてよかったのに……………!!

私に……………私に言ってくれたら……………!!」

「なのは……………」

「謝るのは私もだよ……………ティアナの事何も聞かずに……………」

わかってくれる筈だって勝手に思い込んだ……………なのに、私は…

ティアナの事無理矢理捻じ伏せちゃって……………うん、ユーノ君に怒られても

仕方なかった……………自分で言った事なのに…言葉でしか伝わらない事があるって…」

なのははユーノの体に顔を埋めて涙を流し続ける。

「けどねユーノ君…私は大丈夫だから…ユーノ君が謝る必要なんて無いから……………」

確かに事故に遭った時は、いっぱい悲しんだけど…けど…」

そこまで言っただけなのはは埋めていた顔を上げて、ユーノを見つめる。

「私が魔法を手に入れたから、ユーノ君やフェイトちゃん…」

バレルさんやベルクトさん…沢山の仲間…友達を作る事が出来た…

それにこの力があつたからフェイトちゃんやはやてちゃんを救えた……

寧ろ、ユーノ君には感謝してるんだよ？ 私にこの道を進むきっかけをくれた事に」

「！……！」

その言葉を聞いてユーノは目を見開く。

そして、この8年間で抱えていた後悔が崩れていくのを感じる。

「だからね……ユーノ君が悩む必要なんてない……これは私が私の為に自分で選んだ道なんだから……」

そうやってなのはは微笑む。

そんな彼女の顔を見て、ユーノは再び涙を流し始める。

「なのは……ありがとう……！！！」

「お礼を言う必要も無いよ……ユーノ君……」

涙を流し、震える声で言うユーノに、笑顔でなのはは答える。

ユーノはベンチから立ち上がり、今度は互いに抱き合う形になる。

「なのは……僕も君の隣で戦いたい……もう、二度とあんな悲劇を繰り返さない為に……」

君や君の仲間を守る為に戦っていきたい……」

「うん……私も、ユーノ君やみんなの為に戦いたい……でも……」

そこまで言っただのはは抱擁を解き、笑顔のまま言う。

「まずは……ティアナに謝らなきゃだね……」

「そうだね……じゃあ……」

そう言っただのはは笑顔浮かべる。そしてなのははその場を離れていくが

「なのはっ！！！」

その途中でユーノがなのはを呼び止める。

「嬉しかったよ！！君の気持ち聞いて！！」

「うん……！！私も、ユーノ君の本心が聞けて良かった！！」

なのはが振り向き、互いに大きな声でそう言い合う。

そしてなのははティアナの下へと向かう。

そんな彼女の後ろを見つめるユーノには満面の笑みが浮かんでいた。

＊

「なのは……ユーノ……本当に良かった……」

「……雨降って地固まるってこういう事なのかしらね……」

「何にせよ良かったじゃないか、仲直り出来たみたいで……」

そんな2人の事を近くの茂みで微笑ましげに覗き見る3つの人影があった。

（……全く、覗き見なんてするような年でもないだろうに……）

茂みの中に居る3人ーフェイト、タツク、マリナの3名を見つけてアムロは呆れた表情を浮かべるのであった。

＊

ユーノの話を聞き終えた後、ティアナは海岸で1人たそがれていた。
「ティアナ……」

するとその場に、少し寂しげな感じの笑みを浮かべたのはが現れ、ティアナの隣に座る。

「ユーノさんに……全部聞きました……」

「……無茶すると大変だよって言う話だね？」

「すみませんでした……」

顔をあわせず、俯いたままティアナが謝る。

「ううん……謝らなきゃいけないのは私も同じ……」

本当は私自身の口で伝えなきゃいけなかったのに……

ティアナの気持ちを考えないで……あんな強引な事しちゃって……」

そうやってなのは、寂しげな笑みのままティアナを見つめる。

「ティアナは自分の事……凡人で射撃と幻術しか出来ないって言うけど……」

私はそれは間違ってると思う。ティアナもみんなもまだ原石の状態……
本当の自分がわかりづらくて焦る気持ちはわかる……」

途中からティアナも顔を上げて、互いに見つめ合う形で話は進む。

「だけど、磨いていくうちにどんどん光る部分が見えてくる」

3人を指揮するティアナは、射撃と幻術で仲間を守って

知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける……そういうのが理想的かなって考えてた……」

なのは右手の拳を顔の前でグッと握る。

「一番魅力的な所を蔑ろにして、慌てて他の事をやろうとするから危なっかしくなっちゃう……」

それで本番で無茶をして……取り返しのつかない事になったら大変だから……」

そうやって教えようと思ってたんだけどね……」

なのは顔を俯かせる。

「けど：みんなならわかってくれるって勝手に思い込んでたから：それでティアナにあんな事しちゃって：悪かったと思ってる：ティアナにはティアナの悩みがあったのに：それを聞こうともしないで：」

「そんな……！わ、私がいけなかったんです：

自分の事も伝えずに：なのはさんの事も知ろうともしないで……」
たまらずティアナはなのはの方を見てそう言う。

それを聞いたなのはが、ティアナの膝の上にあったクロスミラージュを手取る。

「でも：ティアナの考えた事：間違っではないんだよね……」

なのははクロスミラージュに向かって言った。

「システムリミッター、テストモードリリース：命令してみて、モード？って……」

そう言ってティアナにクロスミラージュを渡す。

ティアナはクロスミラージュを前に構えて言われた通り呟く。

「モード？……」

すると、クロスミラージュが変形し、チャクラムの様な形の魔力刃が形成される。

「これって……！」

驚くティアナになのはが微笑みながら説明する。

「ティアナは執務官志望だから：ここを出たら個人戦も多くなる：だから、将来を考えて用意はしていたんだ……」

「……！」

それを聞いてティアナは、自分の先の事まで考えてくれていたなのはの気持ちを知り、またそれを知ろうとしなかった自分を不甲斐なく思い

両手で顔を押さえてすすり泣き始める。

なのはは、そんな彼女の右肩に手を置いてこう言った。

「クロスもロングももう少ししたら教えようと思ってた……」

だけど、出勤は今すぐにもあるかもしれない
だからもう使いこなしている武器をもっともつと
確実な物にしてあげたかった…」

なのはまた寂しげな笑みを浮かべる。

「だけど…私の教導って地味だから…なかなか成果挙がらなくて…
その意味を私が伝えてもいなかったから…それでティアナは苦し
くなって…」

だから、ああやって無茶して焦っちゃったんだよね…」

なのは顔を俯かせ、そして呟いた。

「ごめんね……………」

「! ! ! ……うわあああん! ! ! ……」

ティアナはなのはの謝罪の言葉を聞き一瞬驚愕の表情を浮かべ
そして彼女の体に顔を埋めて再び泣き始める。

「ごめんなさい……………! ! ! ごめんなさい……………」

「うん…………私もごめんね…ティアナがこんな思い詰める事になっ
ちやって…」

なのはの胸の中で、ティアナは涙声でひたすら謝り続ける。

なのはは静かに目を閉じ、ティアナの事を優しく抱いてやるのだっ
た。

＊

「ティア……………」

「良かったティアさん……………」

「うん……本当に……」

「なのはさんも……」

そんな彼女達を物陰から見つめる4つの人影があった。

「……………またか……………」

「気持ちはわからんわけやないけどなあ……でもなあ……」

六課のみんなは覗き見が好きなんかなあ……？」

そんな4人―スバル、エリオ、キャロ、シャーリーを離れた位置で見つけ

アムロは心底呆れたように、はやては苦笑を浮かべながら言った。

こうして、六課の皆に亀裂が生まれ、それがより強い形で再び繋がった

怒涛の1日が終了するのであった……

第9話（後書き）

もうね、ユーノが主役？って言わんばかりですね

プロット時点で結構大立ち回りさせるつもりだったんですが
またしてもこんなに話が膨らむとは予想外でした

これでユーノの出番終了ってわけではないですからね？
今後もなのは達と一緒に戦っていきますから。

次回はまたアナザーパートになります。

そう遠くない内にまた投下出来ると思います。

（大抵の人は予想がついてると思いますが

今回アムロが感じた違和感も次回でわかります）

それではまた

アナザーC（前書き）

他勢力の現状その3です

※読む前に一言

偽名にはちゃんと意味があります

アナザーC

— Another Side ?

スカリエッティのアジト、自室に置いてあるベッドの端に座り
アネモネは沈んだ表情を浮かべていた。

「はぁ……」

大きなため息を1つ吐き、立ち上がって近くの冷蔵庫から
苺ジャムの瓶を取り出し、その中身を指ですくって舐める。

「これじゃ……何も変わってないじゃない……あの時とおんなじ……」
瓶を近くの机の上に置いて、今度はベッドの上に膝を抱えて座り込
む。

アネモネは悩んでいた、本当にこのまま彼等の言いなりの立場のま
までいいのかと。

前回のホテル・アグスタでの戦いだって、ムシヤクシヤした気持ち
から

昔と同じ一デュイー・ノヴァクを妄信し、彼の言うがままに戦って
いた

ただの道具であった自分と同じになっていたのではと考えていた。

自分は…自分がいた世界のあの戦いを通して、新たな人生を歩む筈だった。

だが、そのきっかけを与えてくれた思い人と離れ離れになり今では怪しげな研究や戦闘テストに付き合わされる毎日。

それでもアネモネは、元の世界に帰りたい、彼ともう一度会いたいその一心でそれらの事に耐えてきた。
でも…このままだとまた昔と同じになってしまうのではと考える。
その時…自分は面と向かって彼と顔を会わせる事が出来るのだろうか？

「……ううっ……」

そんな事を考える彼女の目に涙が浮かぶ。

「アネモネ……どうしたっスか？」

その時、彼女の部屋に1人の少女が心配そうな顔をして入ってくる。
アネモネはその少女をつり目でキッと睨みつける。

「何の用よ……勝手に人の部屋に入ってこないで……！」

「そんな……アネモネが泣いてたみたいっスから心配で……」

静かな怒りを込めてアネモネは目の前の赤髪の少女—ウェンディに言い放つ。

ウェンディはお構いなしに彼女の方へと近づいてゆく。

「アンタらに心配される筋合いは無いわよ!! そもそもこんな事になってるのも

あの紫マッドとハゲと変態茶髪メガネの所為でしょ!!

そいつらの言いなりで動くだけのアンタになんか同情されたくないわ!!」

涙ながらに怒鳴り散らすアネモネの言葉を

ウェンディはさして驚く事もなく、普通に聞いている。

「確かにドクター達はちよつと変なところあるっスけど……でも、私はアネモネの事好きっスよ? 戦ってても面白いし……私の武装が強くなったのもアネモネのおかげっス。

何より……シンシアもアネモネもかわいいじゃないっスか?」

「ああそう!! 私は大嫌いよアンタら全員の事!!

いいからとつと出て行きなさいよ赤髪ブサイク!!」

笑顔で言うウェンディの言葉も、アネモネは拒絶する。

ウェンディはそれを聞いて左手の人差し指で頬を掻きながら苦笑を浮かべる。

そして言われたとおりに部屋の扉の前に移動する。

「アネモネ! 他の皆が何と言おうと、私はアネモネの事好きっスからね!」

ウェンディは出際に笑顔でこう言うのであった。

「…………ああもう! 何だって言うのよ…………!!」

1人残されたアネモネは言い様の無い苛立ちを感じるのであった。

— Another Side ?

時間は少し遡る、ガジェット？型が飛び交う海上の近く。

ルーテシアを伴ったシャアはスカリエッティに連絡を入れていた。

「久しぶりだねスカリエッティ……」

「おや？君の方から連絡をくれるなんて珍しいね？

ゼストとアギトとマイヨはどうしてるのかね？」

「今別行動……」

相変わらずの薄ら笑いを浮かべたスカリエッティの質問に

ルーテシアが無表情で答え、その後シャアが笑みを浮かべて言う。

「君の作った玩具が…この近くを飛んでいるみたいなんだが…」

「直に綺麗な花火が見れると思うよ……？」

「E2か？」

「だったら……君とルーテシアに真っ先に報告しているだろう？」

互いに笑みを浮かべながら2人はそうやり取りしていく。

その最中、ルーテシアはずっと無表情だ。

「私の玩具の動作テストなんだよ…破壊されるまでのデータが欲しくてね…」

まあ…私の作品達がより輝く為の、デコイとして使うガラクタミたいな物さ……」

「……相変わらず悪趣味な男だな……」

「フフッ……私にとってそれは褒め言葉だよ」

呆れ気味に言うシャアに、ニヤケた笑いを浮かべてスカリエッティは答える。

そして、ルーテシアが無表情のまま口を開く。

「レリックじゃないなら…私には関係ないけど…頑張っ
てねドクタ
ー…」

「ああ…ありがとう…優しいルーテシア…」

「じゃあ…御機嫌よう…」

そう言っ
てルーテシアはスカリエッティとの通信を切った。

「大丈夫かい…ルーテシア…？」

「大丈夫……
シアが側に居てくれるから……それにドクターには…
今の私の事……
教えるわけにはいかないから……」

「相変わらずだね…嬉しいよルーテシア」

ルーテシアは無表情をやめ、笑顔を向けてシアに言う。

それを聞いてシアも同様に笑みを浮かべて、ルーテシアの頭を撫でやる。

「これから何処行くの？シア…」

「そうだな……
とりあえずは……
…ツツ！？」

突如シアは目を見開いて、頭を抱え込む。

「シアア！！……
どうし……
…ツ！？」

シアの突然の行動に、ルーテシアは不安げな表情を向けたが

その直後に彼女も目を見開いて呆然とする。

「……………ルーテシア、君も感じたのか？」

「うん……………とっても大きな力が……………遠くの方に……………」

暫くして落ち着いた後、互いの顔を見ながら2人はそう言う。

「シャア……………今のは何だったの……………」

「わからんな……………だがこんな感覚はこっちに來てから初めてだ……………」

「私達と……………おんなじ人？」

「かもしれんな……………」

不安げな表情でに尋ねるルーテシアに、固い表情でシャアは答える。

「シャア……………」

「……………大丈夫さルーテシア……………君の側には私がいる……………」

「うん……………」

「さあ……………行こうか……………」

心配そうに尋ねてくるルーテシアに、笑顔でシャアは答え、彼女の手を握ってやる。

ルーテシアそれでまた笑顔に戻る。そしてシャアと共に夜の闇へと消えていった。

— Another Side ?

管理局地上本局の地下奥深く

「……計画は順調に進んでいるようだな……」

「さよう……今はジェイルの他にも優秀な頭脳がいる……」

「あの2人のおかげで……我らの計画も早まるというものの……」
薄暗い空間の中、怪しげな3つの声が響き渡る。

「人造魔導師計画はゼストは失敗……ルーテシアも成功には至らなかった……」

「だが……そんな物に頼らずとも……ジェイルには優秀な12個の駒がある……」

「それに加え……今の我らには異世界の知識と力がある」

「ああ……計画に支障は無い……とても順調と言える」

そこにあつたのは3つの生体ポッドに浮かぶ、3つの脳味噌……
何ともグロテスクなそれから直接声が発せられていた。

「我らが求むるは……優れた指導者によって統べられる世界……」

「我らがその指導者を選び……その影で我らが世界を導かねばならん……」

「その為の生命操作技術なのだから……」

3つの脳味噌から不気味な声が発せられ続ける。

「失礼します」

するとそこに、左目と口以外の部分を紫色の不気味な悪魔の様な仮面で覆った

1人の若い男性が、その薄暗い空間に入ってくる。

「ああお前か……クリーノ……」

「ポッドメンテナンスの時間ですので……参りました……」

「手早く頼むよ……」

「かしこまりました……」

仮面の男……クリーノ・フラテッロは静かに答え、ポッドの前でパネルを操作する。

「どうかね……ヴェンデイスやドゥーエは元気かね……？」

「はい……今も一緒に楽しく働かせてもらってますよ……」

「それは何よりだ……」

脳味噌の質問にクリーノは淡々と答える。

「お三方共……随分機嫌がよろしいようですが……」

「なに……計画が思いの他順調なのでな……」

「だが油断は禁物……些細な綻びでもあってはならないのだ」

「それを始末する為に……君達フラテッロがいるのだから……」

「わかっております……この世界を統べるのは……あなた方最高評議会なので……」

クリーノは笑みを浮かべる。

「旧暦の時代より……世界を見守る為に、我が身を棄てて永らえた……」

「次元の海と管理局は……未だ我らが見守って行かねばならぬ……」

「おっしゃるとおりで……」

クリーノはポッドの前で深々とお辞儀をした。

＊

ポッドメンテナンスを終えて、クリーノは部屋を後にする。

「ご苦労でしたね……」

すると出てすぐの場所に、青髪ロングの女性とクリーノと似たような赤色の悪魔の様な仮面で右目と口以外の部分を覆った男性が姿を現す。

「これはこれは……ヴェンデイス・フラテッロ殿にドゥーエ・フラテッロ殿」

クリーノはその2人を見て敬礼をする。

すると男性ーヴェンデイスと女性ードゥーエはクスクスと笑い出す。

「ここには私達しかいませんわ…そんな堅苦しいのはやめましょう？」

「フフ…それもそうだね…ドゥーエ…兄さん…」

クリーノは怪しげな笑みを浮かべてそう答える。

「どうだった…最高評議会の連中は？」

「相変わらずのボケ老人どもだよ…あんな奴らが世界を統べるなんてお笑いだね」

ヴェンデイスの問いに、クリーノは両手を広げてやれやれといった感じに答える。

「そう…奴らとて我ら兄弟の為の踏み台にすぎない…」

「いずれは華々しく退場してもらうんだね…？」

「その通りだ…我らの理想の為にな…」

ヴェンデイスとクリーノがクククと怪しげに笑いながら話す。

「おお…怖いですわ…何を企んでるんでしょうかね…？」

そんな2人を見てドゥーエは体をクネクネさせながら楽しげに言う。

「勘違いしないでほしいねドゥーエ…確かに僕ら兄弟は

自分の身内以外の何者をも信じていない…」

「だが…『君だけは』例外だと思っているよ…」

ヴェンデイスとクリーノはそう言っつけている仮面を外す。

それを見てドゥーエが笑みを浮かべてこう言った。

「その言葉…今は本心だと思っておきますわ…フロスト兄弟？」

「勿論だとも…」

「信じてくれて構わないさ…」

仮面の下の真の姿ーシャギア・フロストとオルバ・フロストはそこに獰猛とも言える笑みを浮かべてドゥーエに言うのであった。

— Another Side ?

ミッドチルダ南部の森林、その奥深くにある廃れた洋館
その地下奥深くに包帯塗れの金髪女性—セデイスがいた。

「えーっと…セット終わりましたよアルさん？」

「ご苦労だったね……帰還するんだ」

セデイスは通信でスキンヘッドの男にそう言った。

「でもいいんですか？ 貴重なE2を1個使っちゃって…」

「……ジェイルの奴が言い出したんだ、仕方なからう…」

全く……彼の考えにはついていけないよ……」

首を傾げて可愛らしく尋ねるセデイスに、スキンヘッドの男は
モニターの向こう側で疲れた感じに言った。

「でも…本当に大丈夫ですかね？ アルさんの玩具の試作品2号で
機動六課の連中相手に出来ます？」

「どうせそいつは試作品だ……壊されてもまた改良して作り直せば
いい」

再び尋ねてきたセデイスに対して、スキンヘッドの男が答える。

（……なーんだ、アルさんも結構悪趣味じゃん……）

セデイスは内心でこんな事を呟いていた。

その後スキンヘッドの男と通信を切り、セデイスは目の前の玩具
—白銀のボディに両肩に黄緑の大量のひれの様なものを携えた鉄の
巨人を見上げる。

「まっ♪私にはどうでもいいっか♪」

巨人の近くに置いてあるレリックケースにも目を向けた後
セデイスはとても軽い感じでそう言い、部屋の高位置にある
出口への扉へと飛んで行き、そのまま屋敷の外へと出た。

「あーあ…私も早く戦いたいんだけどなあ…私の『オリジナル』と…
早く外皮が定着しないかなあ…」

帰りの飛行中、セデイスは自分の体についた包帯を見て
不満げにそう言うのであった。

アナザーC（後書き）

いかがでしたでしょうか？

アネモネとウエンディの組み合わせってのはなかなか新鮮だったと思います。

7割くらい同じボード使いという単純な理由からですが：

ルーテシアがまさかの…です。

これに関しては結構賛否両論だろうなあ：

そして登場フロスト兄弟

彼らの偽名はナンバーズの名前にあやかっ
てイタリア語の単語からとっています。

非常に単純明快な元ネタなんすけどね：

次回、休日編の前にちょっと別のオリジナル話を挟みたいと思います。

前回スーパーユーノタイムを書いてる途中に思い出した。
彼同様、無印で目立ってたのにStrikerS編では
すっかり影の薄かった『彼女』を出す予定です。

それではまた

第10話（前書き）

今回からちょっとオリジナル話

六課に押しかけてくるあの人物と
新たに見つかるE2の反応…

注…本小説では彼女の大きさと力は無印、A、S時と同様という設定となっています

※今回は後書きは無しです。

第10話

それから数日、フォワード陣は各々の訓練に明け暮れていた。ユーノが話したなのはの教導の真意を知った事により。今まで以上に熱心に訓練に取り組む姿勢が感じられた。

＊

「ストラーダ!!」

「……………」

ベルクトはエリオと模擬戦を行っていた。

エリオがストラーダ先端のブーストを吹かし、ベルクトに向かって突撃する。

ファントムモードを使うベルクトは、無言のままライフルの先端に魔力刃を形成する。

そして向かってくるエリオに自身も同様に突撃し、魔力刃を振るった。

「はあああああ!!!!」

「……………!!」

互いの武器が交わりあい、激しい衝撃音と共に火花が散る。

2人は一旦後方に下がり、互いの武器を下におろす。

「……………見事だな、ファントムの速度にここまでついてこれるとは…着実に腕が上がってきているな、エリオ」

「は、はい！ありがとうございます！！」

ベルクトに褒められて、エリオは嬉しそうに返事をする。

「お前の役目はその取り柄の機動力による突撃と殲滅だと聞いている。

今時点での最高速度でも、十分に敵に対しては脅威と言えるレベルだろうな」

ベルクトがエリオの方に近寄っていき、そんな事を話していく。

「後は…速度の持続とゼロからの加速力…：と言ったところか？」

「ゼロからの加速…：ですか？」

エリオが首を傾げる。

「速度というものは極めていけばそれ自体が武器になる

しかしそこに至るまでのタイムラグが長いと敵にやられるのがオチだ
お前のトップスピードに至るまでの加速は現段階でも高水準だ…

が、フェイト達隊長陣のような極めて強い相手となるとそれが致命的な隙となる」

「はい！」

ベルクトの話をエリオは真剣な表情で聞いている。

「そしてその加速がゼロから一瞬で最大速度に達するレベルに至れば…

それは凄まじい破壊力を持った攻撃にもなる…」

言いながらベルクトは擬似ターゲットを1体、自分の目の前に出現させる。

そしてライフルの先端に魔力刃を形成させ、身構える。

瞬間、ベルクトの姿が消滅し、擬似ターゲットの近くで強い風が舞ったと思うと

更に次の瞬間、擬似ターゲットは真っ二つに分断され爆発する。それからすぐに、ターゲットの反対側にベルクトの姿が現れる。

「す、すごい……………」

エリオはベルクトの目にも映らぬスピードに驚きを隠せない。

「…まあ、俺の場合はファントムの速度強化と、それによる膨大な魔力の

的確なコントロールなども絡んできているが…根本は今の物と同じだ。

一瞬で自分が保てる速度の限界まで上げる事が可能になれば

高速戦闘への切り替えや、加速を利用した強力な一撃も思うがままだ。

エリオもこの調子で成長していけば、いずれは今の俺に匹敵するものと考えてる」

「は、はい！」

先程のベルクトのスピードの凄さに興奮が収まらないままエリオは答える。

「まあ、なのはが言った様に今は基礎の確立と自分の長所の発展が最優先だ

俺の今言った事も、いずれは必要になる時が来ると、心に留めておいてくれればいい…

……今回はこのくらいにしておこう」

「はい！ありがとうございます！！！」

エリオが力強く返事をし、ベルクトとの個人訓練は終わりとなった。

*

早朝の訓練が終わり、皆は食堂で朝食を採っていた。

因みに、なのはとユーノ、フェイトとベルクトがそれぞれ隣り合って仲良く朝食を採っている。フェイトとベルクトは前からそうなのだがなのはとユーノはあの一件から食事中はずっとこうなのだ。

なのは、フェイトはニコニコ顔で、ベルクトもやんわりと微笑を浮かべているが

ユーノだけは苦笑いであった。

「相変わらずアツアツね〜ベルクト？」

近くに居たフェイがニヤけた顔で、完全なからかい口調でベルクトに言う。

「フェ、フェイ！？アツアツだなんてそんな……」

それを聞いたフェイトが初々しい感じで顔を赤らめる。

「俺とフェイトの関係は知っているだろう？何か不自然なのか？」
が、ベルクトにはそんなからかいも通用せず、サラッとこんな発言をする。

一瞬周りの空気が固まり、ほとんどの者が複雑そうな表情になる。

「朝っぱらから相変わらずだなあいつは……」

遠くの方で様子を伺っていたアムロは呆れ口調だ。

「ふふ〜ん、私はこういうの結構好きやけど？」

アムロの隣に座るはやてはこの状況を明らかに楽しんでいる。

（い、言うようになったじゃない……）

フェイはまさかのベルクトの反撃に表情を引き攣らせる。

「フェイトさんとベルクトさん……やっぱり仲良いんですね」

エリオだけは2人に向けて純粋な微笑を浮かべている。

「……………／／／」

そして当の本人であるフェイトは顔を真っ赤にして俯いている。

「うらやましいなくフェイトちゃん……」

「ちょ、ちよつとなのは？」

なのはが何やら妖しげな表情を浮かべてフェイトの方を見つめている。

隣に座っているユーノは嫌な予感を浮かべる。

「……ねえ、ユーノ君？」

そしてその妖しげな表情のままユーノの方に顔を向ける。

「……続いて政治経済。昨日ミッドチルダ管理局地上中央本部において、

来年度の予算会議が行われました。三度目となる再申請の税政問題に基づいて、

各世界の注目が集まっています。当日は、首都防衛隊の代表
レジアス・ゲイズ中將による管理局の防衛思想に関しての表明も行
われました」

モニターのニュースから聞こえたその声を聞いて
皆が表情を一変して、モニターの方に顔を向ける。

「魔法と技術の進歩と進化：素晴らしいものではあるがしかし！
それがゆえに我々を襲う危機や災害も
10年前とは比べ物にならないほどに危険度を増している！
兵器運用の強化は、進化する世界を守るためのものである！」

議会の壇上で髭を生やした強面の男性ーレジアス・ゲイズが高らかに言う。

その両サイドには怪しい仮面をつけた2人の男が立っている。
議会に集まっていた人々の方から歓声上がる。

「：このオッサンはまだこんな事言ってるのな」

朝食を食べながらヴィータが呆れ気味にそう言う。

「レジアス中將は古くから武闘派だからな」

固い表情でシグナムが呟く。

「だがまあ：彼の言っている事もある意味では間違いではないだろう…」

防衛の為に力が必要というのは正にその通りだ…

何よりの問題はそれを使う側の人間の思想という事だ…」
アムロが複雑そうな表情でそんな事を呟く。

そんなレジアス中将よりも人目につく人物がおり、バレルが口を開く。

「ねえ…そのレジアス中将の両隣に居る人は何なのさ…？」
その質問になのはが答える。

「ああ…左に居る赤い仮面の人がヴェンデイス・フラテッロ一佐で右側にいる紫の仮面の人がクリーノ・フラテッロ三佐だよ」

「2人共、レジアス中将の片腕として1年前くらいから有名なんだ」
なのはの答えにフェイトが付け加える。

「とはいえ…あの仮面は趣味が悪いつてレベルじゃないだろう？」
「それもあるんだよね…あのオッサンが胡散臭いとか言われてんのは…」

「何か顔を晒せない事情があるのか…はたまた昔に大怪我でもしたのか…」

バレルの言葉を聞いてヴィータが呆れ口調のまま言い
その後タツクが2人の仮面の男を見て、冷静な口調で呟く。

「…どこことなくだがブラッドマンと同じ感じがするな…」

「ええ…私も同感だわ…」

「目的と手段を履き違えなければいいがな…」
元新連邦軍所属のベルクトとフェイが、レジアスの姿を見て
かつての自分の総大将との姿に重ね合わせる。

[illegible]

と、その時遠くの方で何やら物音がしてくる。

「何、この音？」

「というより……こっちに近づいてきてない？」

スバルとティアナが互いの顔を見ながらそんな事を言った時

「ベールークーティーティーティーツツツ!!!」

凄まじい衝撃音と暴風を撒き散らしながら、1人の女性が食堂に入ってくる。

そしてその女性はすぐさまバルクトに向かって突撃し彼を押し倒す。

「ちよつ！ちよつと何！？何事よ！？」

ティアナがわけがわからないという風に喚き散らす。

周りの人物も大体は同様のリアクションだ。

「アルフ……？」

「どうしてここに……？」

「ちょっとアルフ：何で？」

が、フェイト、エリオ、キャロの3名は目の前の人物に向かってキョトンとした感じにそんな事を言う。

「……いきなり現れて何だ、アルフ？」

そして押し倒された本人であるベルクトは至って冷静な口調で目の前の赤毛の女性―アルフに向かって言った。

「何だもクソもあるかい！！」

アルフはベルクトの両肩をガツと掴み、一気にまくし立てる。

「アンタホントにベルクトなんだよね！？」

幽霊でもクローンでも限りなく似ているそっくりさんでもないんだよねえ！？」

「……落ち着けアルフ、正真正銘本物だ」

「ああ……！！」

アルフはベルクトを押し倒したまま、彼の体に顔を埋めて涙を流す。

「良かったあ……！戻ってきたんだね……やっ……！！」

「……とりあえず一旦落ち着け、アルフ……」

アルフの気持ちを察しつつも、とりあえずベルクトは彼女を落ち着かせようとしていた。

＊

とりあえず一旦アルフを落ち着かせ、ベルクトは自分の隣に座らせた。

「しかし…本当に急にだな？今は海鳴市の方で暮らしていると聞いたが…そっちはいいのか？」

「アンタ冷たいねえ…折角こっちに戻ってきたのに何時まで経っても会えないからこっちから押しかけたんだよ！」

久方振りの再会だというのに、どこか冷めた反応のベルクトに対してアルフが不満げに言う。

「…：…：…：そうか、すまなかったな。わざわざありがとうアルフ…」

「？…：…：あ、ああ…アタシも皆と会えるのは久しぶりだったからね…」

急に申し訳無さそうな表情になり、ベルクトが言う。

その急変振りにアルフが戸惑いながらも答える。

「ごめんねアルフ…本当はアルフにもすぐに会わせてあげたかったんだけど…」

「…：…：いいんだよ…本当はアタシ、フェイトがベルクトにまた会えてそれで幸せだっていうんならそれで満足だったから…」

フェイトとアルフが互いに微笑みを向け合う。

「なのはさん…あの人ってもしかして…」
スバルがなのはの方に近寄って尋ねる。

「うん、あの人はアルフさん。フェイト隊長の使い魔で大切な仲間だよ」

なのはがその質問に答える。

「あの人がザフィーラに匹敵する近接格闘とサポート系魔法の使い手……」

真剣な表情でアルフの方に目を向けながらティアナが呟く。

「ちょっと？それどういう意味だい？」

が、ベルクト達と和気藹々と話していたアルフが突如、ティアナの方に近づいてくる。

「匹敵するんじゃないくて、魔法の腕前はアタシの方が断然上だよ！」

「え、あの、ちょっと……」

そしてティアナに向かってずいっと顔を近づける。

ティアナは突然のアルフの行動に戸惑いを隠せない。

「……なあなあ、あんな事言ってるけどいいのかザフィーラ？」

「放っておけ……ここで我が絡んでいたら余計ややこしくなるだけだ……」

ひそひそ声でヴィータは引き合いに出されたザフィーラに話しかけるが

ザフィーラは至って冷静に答え、黙々と食事続ける。

「ちょっとアルフ…よしなよ、せっかくの再会の時に何もそんな…」
「フェイト…けどさあ…」

フェイトは呆れた感じにアルフの方に近寄り、彼女をティアナから引き離す。

アルフはフェイトの方に振り向きながら不満げな声で言う。

「腕前は知らんが…少なくとも威厳はザフィーラの方が上だな」
フェイト同様に近くに來たベルクトが冷ややかな声で言う。

「どういう事だいそれは!？」
それにアルフが食ってかかる。

「……貴様の持ってきたそれは何だ？」
ベルクトは頭を抱えながら、アルフの左腰についていた箱を指差し尋ねる。

「ドッグフードだけど？」
箱を片手にしれっとアルフは答える。

「……だからだ、威厳も何も無いだろうがこの犬め…」
「また犬って言ったねえ!! アタシは狼の使い魔だって何回言わせんだい!!」

「ドックフード片手に言っても説得力が無いと言っている…
せめて子犬フォームの時だけにしたらどうなんだ……」

「どんな姿でも別に変わらないだろう!? 何かアンタの判断基準おかしくないかい!？」

「…そうだな、スナック感覚でドッグフードを食べる人間はいいな…」

つまりお前は犬以下のもつと別の……」

「さっきから何言ってるんだいアンタはああ!!」
ギャーギャー喚き散らすアルフに対して、ベルクトは至って冷静に受け答えしていく。

「……2人とも…こんな所でまでやめてよ……」

それを見ていたフェイトは9年後の未来でも、何やらデジャヴを感じる

言い争いを見て、激しい頭痛を感じるのであった。

「な、何か賑やかな人ですね…？」

「ははは…昔っからアルフはあんな感じだったから…」

スバルの言葉に対して、ユーノが苦笑を浮かべながら答えた。

＊

朝食が終わり、再びフォワード陣の訓練が始まる。

ベルクトとアルフは離れた位置で、エリオとキャロの様子をモニターで見ている。

「…いやゝ2人とも凄いなあ…見違えたよ」

「フェイトやなのは達の教えがいいからだろうな」

感心したように言うアルフにベルクトが答える。

「そういえば、お前はエリオやキャロと面識があったみたいだが？」

「ああ、あの2人はフェイトが面倒見てたからね、アタシもよく悩みの相談とか受けてたんだ」

「お前が悩み相談？ほう……」

ベルクトが意外という風にアルフの顔を見る。

「…………何かさっきから一々失礼じゃないかい？」

「9年振りの再会だ、それくらいは目を瞑れ……」

「…やっぱり何かはぐらかされてる気がする……」

ムツとした態度を見せるアルフに対して、ベルクトは冷静な態度を崩さない。

ふと、アルフが穏やかな表情になって言う。

「でも…ホントに良かったよ、アンタが戻ってきてくれてさ……」

「ああ…俺もまさか、お前らを9年も待たせるとは思わなかったからな……」

「それでも大丈夫さ…アンタが原因じゃないのは知ってるし……」

今のフェイトは本当に幸せそうだからね…それだけで十分だよ」

「そうか…そう言ってくれるとありがたい」

ベルクトも穏やかな表情を浮かべて答えた。

＊

アルフが機動六課の隊舎に来てから3日目

（因みに彼女はその間、フェイトの部屋で寝泊りしている）

プリンターの方からE2に関する情報が送られてきていた。

管制室でアムロ、はやて等がモニター越しにそれに関する会話を行っている。

「…つまり、この屋敷にE2があると見ていいんだな？」

「はい、反応を見る限りでは確かにこの屋敷のどこかにあると考えられます」

モニターを通してアムロとカトルが固い表情でそうやり取りする。

「場所はミッドチルダの最南端…もう何十年も前に破棄された

とある富豪の別荘か…その富豪の置き忘れとは考えにくいなあ…」
顎に手を当ててはやては考える。場所が場所だけに

もしこの屋敷に人が住んでいる頃からE2があったと言うのなら
何十年間もこの場所に誰にも気づかれぬまま放置されていた事になる。

「それについてもう1つ報告があんだけどよ…」

別のモニターに映し出されているデュオが口を開く。

「あの屋敷を中心にするように強力な妨害電波が発生してんだ

つつても音声通信とかに関するやつだけで、魔力反応とかの方は大
丈夫なんだが…」

まあでも、そっちからのリアルタイムでの通信は無理っぽいな

今送ってる屋敷の写真も撮影したもんだし、誰かしら派遣するにしても

そっちの指示を仰ぐのは不可能って事になる」

「それに、屋敷内部から少なくともAランクを超える魔力反応が
数個確認されています…どうも蛻の殻ってわけでもなさそうなんです…」

デュオとカトルの報告を聞いて、はやては再び考え込む

「何ともきな臭い話やな…その富豪が意図的に仕掛けたもんなのか
あるいは…スカリエッティが絡んでいるのか…どのみちその屋敷を
調査するに当たって、戦闘は免れないって事やな…」

それを聞いてアムロが固い表情で言う。

「何にせよ、E2が絡んでいるというのなら俺達が出ないわけには
いかない

すぐにその屋敷に何人か人員を派遣するでしょう」

＊

翌日、薄暗い森林の中をフェイト、ベルクト、エリオ、キャロデュオ、カトル、そして狼形態のアルフとザフィーラが歩いていった。今回の事件の調査をアムロとはやては、ライトニング分隊に割り当てた。

が、シグナムは聖王教会に出向く用事が会ったので彼女の代わりにザフィーラがついていく事になりまた、フェイトが出るとい事なので、アムロがベルクトを同行させ報告した本人であるデュオとカトルも調査にまわされそして何故かこの一行に、アルフが勝手についてきたという形になり、今に至る。

屋敷が森林の奥深くという事もあり、ヘリが着陸出来ず、見通しの悪い未舗装の道だったので途中から徒歩で移動する事になったのだ。

「……何故お前がここにいるんだアルフ？」

「つれない事言うなよベルクト」

「…遊びではないのだぞ全く……」

どこかノリが軽いアルフを見て、ベルクトは呆れて溜息を吐く。

「でも懐かしいよね、こうやって3人揃ってるのも」

「そうだよねえ…最初はずっと3人一緒に戦ってたんだもんね…」

「……ああ、それもそうだな」

先程まで呆れていたベルクトも、フェイトの話を聞いて昔を思い出し彼女らと同じように懐かしむように穏やかな表情を浮かべる。

「ねえ、アルフはザフィーラと同等って聞いたけど…実際はどうなの？」

後ろを歩いていたエリオが、隣に居るザフィーラに尋ねる。

「今はわからんが…10年前、我と戦った時には実力はほぼ互角であつたな…」

「へー…僕もアルフが戦ってるのは実際見た事ないからなあ…」

ザフィーラの答えを聞いて、エリオはアルフの方に視線を向ける。

「戦力としては大いに期待できるのは間違いない」

冷静な口調でザフィーラは言った。

「あの…1つお聞きしたかったんですが…」
エリオ、ザフィーラのすぐ後ろを歩くキャラがデュオに尋ねる。

「デュオさんって、どうしてAMF影響下でも、魔力刃の鎌で攻撃が出来てたんですか？」

「ああ…簡単に言うとな…」

デュオはデバイスを起動させ、鎌と翼を携える。そして直後、彼の姿が消滅する。

間近で見えていたキャラは驚きを浮かべる。

「デュオのデバイス、『デスサイズ』の能力の1つなんだよ

この能力…ハイパージャマーを発動している時は敵の視覚から逃れられる上に

あらゆる通信網やフィールド系魔法を無視して攻撃を行なう事が出来るんだ」

キャラの側に居たカトルが説明をする。

「つつても、魔力消費も結構激しいし、そう長くは使える能力じゃないんだけどな」

そう言いながらキャラの側にデュオが現れる。

「す、凄い能力なんですね……」

未だに驚きを隠せないままキャラは言った。

*

そして、そうこうしている間に8人は屋敷のすぐ近くまでやって来た。

「あれだな……随分と寂れているな……」

「うん……何十年も放置されてたみたいだから……」

ベルクトとフェイトが屋敷を見て固い表情を浮かべる。

「エリオ君……」

「大丈夫だよキャロ……」

幽霊でも出てきそうな廃れた屋敷の雰囲気にあてられ

キャロは不安げな声を出しながらエリオに近寄る。

エリオはそんな彼女を安心させるように強い表情で彼女の手を握ってやる。

その直後、屋敷近辺の茂みからガサガサと物音が鳴り響き始める。
そして

「ってオイオイオイ！」

「E2がある以上予想はしてたが……やはり現れたというわけか」
茂みから現れたガジェット？型の大群を見てデュオが驚き、ベルクトが冷静な口調で呟く。

「とにかく迎撃しないと……行くよ、エリオ！キャロ！」

「「はい！！」」

フェイトの言葉にエリオとキャロが力強く答える。

そして他のメンバーもそれぞれデバイスを起動しようとする。

だが、その前にアルフとザフィーラが皆の先頭に立つ。

「アルフ…？」

「この程度の雑魚連中相手に…フェイト達が魔力を消費する必要は無いよ」

キョトンとするフェイトにアルフがそう言う。

「はあああああ！！！！！」

そして、咆哮を上げて近くに居たガジェットに向かって飛び掛りそのまま体重を利用して押し掛かり、ガジェットをペシャンコに潰して破壊した。

「チェーンバインド！！！」

アルフは魔法陣を展開し、近くにいた数体のガジェットを光る鎖で縛り上げる。

その後魔力弾を数発形成した後、縛り上げたガジェットにそれらを放って破壊していった。

「フンッ！！！」

アルフの隣に居たザフィーラは、すぐ近くに居たガジェットに体当たりをかまして吹き飛ばす。

「鋼の軛！！！」

そして地面から白い魔力刃を発生させ、アルフが相手をしているのとは

反対側にいたガジェットの大群をまとめて刺し貫いていった。

ガジェットの大群を一瞬で破壊し終え、アルフとザフィーラが6人の方に戻ってくる。

「ふ、2人共凄い……」

「あんなにいっぱいいたのに……」

エリオとキャロはザフィーラと、そして初めて見るアルフの実力を目の当たりにして

ポカンと口を開けて驚いている。

「……どうやら実力は衰えていないようだね？」

「アンタの方こそ……腕上げたみたいだね？」

アルフとザフィーラが互いの実力の程を見てそう言い合う。

「アルフ大丈夫？」

「大丈夫だって！！久しぶりの戦いでもあんな奴らには遅れを取らないさ！」

心配してくるフェイトに対してアルフは元気よく答える。

「いやあ……すげえやこりゃ……」

「強力な魔導師は、僕ら意外にもまだまだいるんだね……」

デュオとカトルも、アルフ、ザフィーラの力に驚いているようだった。

「何にせよ…ガジェットも出てきたという事は…ここで間違いないというわけだな…」

「うん…でも油断は禁物…中にはまだ何があるからわからないから…」

ベルクトが固い表情で言い、フェイトが答える。

「では改めて…行くのでしょうか…？」

皆の方に振り向いてベルクトが言い、他の者達は真剣な表情で頷いて答える。

そして各々方のデバイスを起動し、屋敷の扉を開けて、中へと入っていくのであった。

第11話（前書き）

というわけで復活しました黒仮面です。
大変お騒がせいたしました。

熱にうなされて何やら色々変な電波を受信しちゃいました…
それがお気に召さなかったら本当にごめんなさい…

それではどうぞ。

第11話

玄関の巨大な扉を開き、一行は屋敷の中へと入っていく。

扉の先は大広間になっていた。

天井には見事なシャンデリアが吊り下げられており

床には見ただけで豪華な作りだとわかる赤い絨毯が敷かれ

壁には様々な風景画や人物画が飾ってある。

が、やはり時が経っている影響ゆえにどれも埃を被ってはいるが。

正面には二階に通じる階段があり、両階の壁の至る所に扉がある。

「やれやれ…これ全部探さなきゃいけないって事か？」

そのあまりの多さに、デュオが後頭部を掻きながら気だるげに言う。

「通信妨害も屋敷に入って強まっている…念話が使えないのは厄介だな…」

固い表情でザフィーラが呟く。

「ん…ちよつと見てください、ほら…」

エリオはある物に気づきその方向に近づいていく。他の者達もそれに続く。

「この扉だけ…何か不自然ですよね？」

エリオが気づいたのは1階の部屋の片隅にあった小さな青い扉だ。

「……この扉の先からE2の反応がしますね」

「おっ！つまりここで当たりって事か！？」

カトルが扉にペタペタ触れながら言い、それを聞いたデュオがテンションを上げて言う。

「でも…やっぱり鍵がかかってるみたいです」

今度はキャロが扉に近づいて取っ手を引くが、やはりそう簡単に開いたりはしない。

「あ…こっちに何か書いてあるよ？」

すると、フェイトが扉の近くにある黒い石壁に刻まれた一文を見つける。

その文字が刻まれた石壁のすぐ下には黒い台座も置いてある。

「えーっと…『この扉を開きたくば、屋敷に眠る3つの宝を集めそれら全てをこの台座に供えよ』…だって」

「…この屋敷の主人はどういう感覚の持ち主なんだ？」

フェイトが読み上げた説明を聞いて、ベルクトが呆れ気味に言う。

「でも…この扉、無茶苦茶強力な封印系の魔法がかけてあるんだから、無理矢理開けるってのは能率が悪そうだよ…」

扉の前に立つアルフが少し沈んだ声で言う。

「だが…このあまりにも胡散臭い説明文を信じてもいいのか？」

「…確証は持てないけど、とにかく今は屋敷の中を調べた方がよさそうだよ」

レリック…E2がこの先にあるのは間違い無さそうだから」

フェイトの言葉を聞いて、ベルクトも一応納得した。

＊

台座に書かれていた文章を参考にして

一行は何人かに別れて探索をする事にした。

「広い屋敷で宝探しねえ…ガキの遊びじゃねえんだぞ…ったく…」

「でも、手掛かり無く動くよりはまだマシですよ」

不満げに言うデュオを、隣を歩くカトルが宥める。

2人は宝の1つがあると書かれている屋敷の武器庫を目指していた。

「にしてもデケえよなココ…お前んとこの屋敷よりデカいんじゃない？」

「うーん…ウイナー財閥の僕の実家はもっと大きいと思うけど？」

「はは…やっぱ違うねえ金持ちの家は…」

「まあ…僕もこんな身の上だけど、活動のバックアップがあるって
いうのは武器だったからね」

そんな風に他愛も無い会話をしている間に目的の武器庫へと到着する。

部屋の全体が白いレンガ造りになっており、壁のいたる所に
剣やら槍やら甲冑やらが立てかけて置いてある。

2人はその武器庫の中を隅々まで探して行き

「あ、もしかしてこれじゃないですか？」

奥の方でカトルがそれと思わしき物をアッサリと発見する。

大きな黒い台座に横にして置いてある、刃の部分のみが漆黒に塗られた

白色の大剣であった。立てかけると2人の全長と同じくらい大きい。

「こんなデカイ剣で戦ってたっつーのかねえ……」

少し驚き気味にデュオが言う。するとある物を発見する。

「これは……？　どういう意味だ？」

その剣の柄の部分の赤く塗られている所に、デカデカと
ローマ数字で？と刻まれていたのだ。

「この剣が2本目……という事でしょうか？」

「するってーと他のお宝ってのもみんな剣なのか？」

「いや……台座のヒントを読む限りではそんな事は無かったと思いま
すけど……」

？の意味がよくわからず悩むも、2人はとりあえず大剣を抱えて
先程の青い扉の前に戻る事にした。

＊

一方こちらはフェイト、アルフ、ザフィーラの3人
一行は1階の奥の方にあるという牢獄を目指していた。

「しかし自分の屋敷に牢獄を作るだなんて…この主人はなんて趣味してんだい…」

「もとより屋敷にこのような仕掛けをつくるような人間だ…
常人と趣味がかけ離れているのは確かだろう」

少しイラつきぎみに話すアルフに対して、ザフィーラが固い表情で
答える。

そうこうしている間に牢獄への入り口の前に到着する。

その段になって前を歩いていたフェイトが2人に振り向き、真剣な
表情で言う。

「2人共油断しないで…デュオ達が言ってたように
この屋敷には何かが居るのは間違いない…宝があるって事は
何か出てくる可能性もあるから…」

フェイトのその言葉に、2人も真剣な表情で頷いて返答する。

そして3人は牢獄の中へと入っていく。

中は一直線の廊下になっており、両サイドにいくつもの囚人部屋がある。

3人は周囲を警戒しながら廊下を歩いていく。

「ああ：全く不気味な所だねえ：」

囚人部屋に転がる白骨死体が目に入り、アルフはたまらず声を上げる

だが、結局フェイトの心配は空振りし、何事も起こらずに廊下の突き当りに置いてある宝の前に到達した。

宝は専用の台に立てかけてある、薄緑色の拵えの一本の刀であった。

「これは：我らの世界にあった武器だな……それにしても見事な物だ：」

人間形態になったザファイラが刀を手に取り、まじまじと観察する。

「でもちよっと待っておくれよ、なんで地球の道具がここにあるんだい？」

「それはわかんないよ……この主人が知っていたとしか……ん？」
アルフの質問にフェイトが困ったように答えていると、フェイトはある物が目に入る。

それは刀の置いてあった台の後ろに大きく刻まれていた4つの文字

だ。

「これは：アタシらの住んでる街の文字じゃないか!？」

アルフが驚く。刻まれているのは確かに地球で使われている漢字なのだ。

因みにその4つの文字とは

『黒翼大魔』

そう刻まれていた。

「これってどういう意味なんだいフェイト？」

「私には全然…」

再びのアルフの質問にフェイトは今度はさっぱりわからずこう答える。

そして3人は牢獄を後にして再び青い扉に戻る。

「エリオとキャロ…大丈夫かな？」

戻る途中でフェイトが急に心配そうな声色でそう言った。

「大丈夫だって！もし何かあってもベルクトの奴がついてんだから！」

アルフが元気良くこう答えるが、フェイトの表情は晴れない。

「それにあの2人も訓練を重ねてかなり腕を上げた。

アルフが言ったようにベルクトもいる。問題は無いだろう」

「うん…そうなんだけど、やっぱりちょっと気になっちゃって…」

「相変わらず心配性だねフェイトは…」

ザフィーラの言葉にフェイトは答え、それを聞いたアルフが少し呆れ気味に言うのであった。

＊

ベルクト、エリオ、キャロ（＋フリード）の3人は
屋敷の宝物庫へとやってきていた。

「こ、こんなにたくさん…」

部屋の様子を見たキャロが驚いて声を漏らす。

なんせ部屋のあらゆる所に積み上げられた金塊だの

金貨の詰まった樽だの、色とりどりの宝石だのが転がっているのだ。

「こ、ここの屋敷の人って凄いお金持ちだったんだ！」

キャロと同様に驚いていたエリオがそう言う。

「だが俺達の目的は別だ、さっさと探すとするぞ」

しかし、ベルクトはそんな財宝の山々には一切目を向けず
目的の品を探し始める。

それを聞いたエリオとキャロも中に入っていく。

ガタン！！

だが、3人全員が宝物庫に入った途端に入り口の前に鉄格子が降り
宝物庫の入り口が閉鎖されてしまう。

「気をつける…何か来るぞ…」

ベルクトが警戒心を強め、戦闘態勢を取る。他の2人もそれを見て
同様の動きをする。

「ケッケケケケ………」

すると、宝物庫の奥に飾ってあった白い菱形の仮面が突如として動
き出し

3人の前で静止する。すると仮面の付近から赤いマントと紫の帽子
と2つの白い手袋が出現する。

「ヨウコソ……………」

白い仮面—いや赤いマントの怪しげな道化師が甲高いしわがれ声を

発し

右手を赤いマントの前に持ってきて深々とお辞儀をした。

「こいつ……」

見た目がおちゃらけていながらもかなりの魔力を感じ、エリオは冷や汗を垂らす。

と、道化師が一枚のカードを取り出す。

「ENEMY!!」

道化師の甲高い声と共にカードから紫の靄が噴出される。

そして、その靄から抗体コーリアンがいくつも姿を現した。

「こ、これって……!」

「ガジェットに続いてこいつもか……」

驚くキャロに対し、ベルクトは冷静な表情を崩さない。

そして両肩の砲台を構える。

「スカーレッドキャノン」

大型の砲台から魔力弾が発射され、それがいくつも分裂しコーリアンを撃墜していく。

しかし、その程度ではコーリアンは完全には消滅しない。

ベルクトは一旦横に飛び退き、長身砲を構える。

「グレイブキャノン」

長身砲から黄色い閃光が発射され、それが一直線に道化師へと向かう。

「ケッケケケケ!!!」

「チッ……」

だが、道化師は余裕の表情でそれをかわす。

ベルクトはそれを見て舌打ちをした。

離れた位置でキャロは竜魂召喚を行い、フリードを巨大化させる。

「フリード、ブラストレイ!!!」

そしてフリードに指示を出し、彼の火炎でコーリアンを焼き払っていく。

それを見た道化師が狙いをキャロに定める。

「DEATH!!!」

道化師はどこからともなく現出させた巨大な鎌を振り上げ、それをキャロに向かって振り下ろす。

「させない!!!」

それをエリオがキャロの前に立ち、ストラーダで受け止める。

エリオはストラーダで道化師を切り払った後、足下に魔法陣を展開する。

「たああああ!!!」

そしてブースターを吹かし、道化師に向かって突っ込んでいく。

「クツケツケケケ!!!!」

だがその攻撃も、道化師は横に飛び退いてヒラリとかわす。

それを見たエリオは悔しげな表情を浮かべる。

「PUPPET!!!」

道化師が再びカードを取り出す、すると、銃剣を手を持った頭部が異様に大きい灰色の人型機械兵が2体、姿を現す。

「これは……………」

機械兵の姿を見てエリオが声を漏らす。

すると機械兵の1体が銃剣を構え、そこから光線をエリオに向かって放つ。

エリオはそれを回避しながら、ストラーダを構えて機械兵に向かっていく。

だが、攻撃が当たると思った瞬間、機械兵の姿が瞬時に消滅し少し離れた位置に再び出現する。

「ッ！：ワープした！？」

エリオが驚いたその瞬間に、もう1体の機械兵がエリオの背後に移動し

彼に向かって銃剣を振り下ろす。

「ぐあっ！！」

反応の遅れたエリオはまともにそれを喰らってしまい、痛みで声を上げる。

「エリオ君！！」

「MOON！！」

それを見たキャロが心配そうに声を出す、その隙をついて道化師が再びカードを取り出す。すると、キャロの頭上から巨大な白い拳が降ってきた。

それをベルクトが左腕のシールドで受け止める。

「ベルクトさん！」

「……余所見をするな、敵はまだいるのだから……」

固い表情でそう言った後、ベルクトは肩の砲台から魔力弾を放ちそれをコントロールして2体の機械兵に向かわせる。

が、その攻撃も機械兵は先程の瞬間移動で回避をする。

「……………」

それを見たベルクトは一旦距離を取り、エリオ、キャロと共に一箇所に集まる。

「一度に道化師とあの機械兵を相手にしていたのでは能率が悪い…俺が機械兵の相手をしている間に、お前らで道化師をしとめろ」

「は、はい!!」

エリオは力強く返事をして答えるが、キャロは困惑気味だ。

そんなキャロを見てベルクトは表情を和らげる。

「…お前達の実力ならば大丈夫だ、フェイトに教わったことを思い出せ…」

そして更にエリオがキャロの方を向いて言った。

「大丈夫だよキャロ、僕達なら何とかなる!ベルクトさんとフェイトさんの為にも…」

「……………」

エリオの励ましも貰い、キャロは力強い表情に変わる。

「じゃあ…行くとするか」

ベルクトは2人に背を向けた後、デバイスをファントムモードに切り替える。

機械兵2体がベルクトに向かって光線を放つ。

ベルクトはそれを凄まじいスピードで飛び退いて回避する。

「スケイルブーメラン」

そして左腕の7つの刃を敵に向かって撃ち放つ。

機械兵はそれを瞬間移動でかわしていくが

「…遅いな」

瞬間移動し終わった位置にベルクトが移動し
ライフルから形成した魔力刃によって2体とも斬り裂いて破壊した。

「DEATH!!」

道化師が再び鎌を取り出し、エリオに向かって斬撃を放つ。
エリオはストラーダでそれを受け止める。

「ケツケケケケケ!!」

道化師が高笑いを上げながら飛び上がる。

「我が求めるは…戒める物…捕らえる物…言の葉に答えよ
鋼鉄の縛鎖…錬鉄召喚、アルケミックチェーン!」

その隙にキャロが召喚呪文を唱える。すると、道化師の真下に魔法
陣が現れ

そこから現れた鋼鉄の鎖が道化師を捕らえる。

「ギギッ!!?」

道化師が驚いたように声を上げるが

「うおおおおおおお!!!!」

その間にエリオがストラーダによる突撃を行い
動きの止まった道化師の仮面に強烈な一撃を叩き込んだ。

その一撃によって道化師の仮面は真っ二つになる。

「ギャアアアア!!!!」

道化師は叫び声を上げながら、掻き消すように消滅していく。
そして道化師がいた場所に、先端に水色の宝石がついた1つの杖が
残った。

「やった!!」

敵を倒した事にキャラは喜びを浮かべる。

「2人共見事だったな」

機械兵を倒し終えたベルクトが2人に向かってそう言う。

エリオとキャラはそれを聞いて顔を赤らめる。

それと同時に入り口を塞いでいた鉄格子も消滅する。

「さて：戻るとしよう」

ベルクトは道化師のいた場所に落ちていた杖を拾い上げてそう言った。

＊

全員が再び合流した後、フェイトはベルクト達の報告を聞いて驚きを浮かべる。

「コーリアンが：？」

「はい、いきなり変な道化師が出てきて：そいつが召喚してきたんです」

フェイトに対してキャラが遭遇した事について説明をする。

「となると：この屋敷にスカリエッティが関わってるかもしれないのかい？」

「状況的に考えてまずそうだろうな：偶然の一言で片付けられるような話じゃない：」

アルフの問いに、ベルクトが固い表情で腕を組みながら答える。

「でも：2人が無事で良かった：まさかそんな敵が2人の所に出て

くるとは思わなかったから…」

「いや、寧ろこいつらがいたからこそ何とかなったと言ってもいいな
2人共戦闘を見る限りでは確実に成長している」

「そう…よく頑張ったねエリオ、キャロ」

「あ、ありがとうございます！」

フェイトに笑顔で言われ、エリオは戸惑いつつも礼を言う
キャロは顔を赤らめて俯いたまま黙りこむ。

「でも…まだまだ油断は出来ません…この先にもまだ何かいると考
えた方がよさそうですから…」

固い表情でカトルはそう言いながら、台座に3つの宝をセットして
いく。

「……なあフェイト」

「どうしたのベルクト？」

急にベルクトがフェイトの方を向く。

「あの3つの宝…見てみると何かよくかわらない気分になってくる
んだが…」

「どういうこと？」

「いや…頭に妙な言葉が浮かんでくるんだ…『○せ』とか『○アン
グ！』とか」

『○導は我にあり！！』とか…」

「???…ベルクト大丈夫？」

何やら妙な電波を受信したベルクトに対し、哀れむような視線をフ
ェイトは向ける。

と、そんなやり取りをしている間に青い扉が開き
その先に地下室へ通じる階段が姿を現した。

＊

階段を下り、一行は地下室の最深部へと到達する。

広々とした空間の中心部にはE2の入ったケースが置かれている。

「あれがそうだな…」

目的の品を見つけデュオがそう呟くも、表情は険しいままだ。

「もしこの屋敷にスカリエッティが関わってるとしたら…」

「貴重なE2のある空間に何も無し…というのはありえないだろうな」

フェイトの言葉にベルクトが付け足しをする。

「だが…どの道レリックは回収しなくてはならない…」

ザフィーラがそう言いながらE2の置いてある台座に近づいていく。

シュン！！

「!!!!!!」

ザフィーラが台座に近づくと同時に、突如暗闇から攻撃が放たれる。ザフィーラは直前でそれを察知し、背後に飛んでそれをかわす。それを見た周りの者も警戒心を強める。

すると地下室の周りの松明に火が灯り、部屋が明るくなる。そして部屋の奥には、黄緑色のヒレを大量に携えた白銀の巨人がいた。

「こいつは確か……」

「リクレイマーの使っていた……」

その姿を見たデュオとカトルが困惑気味に声を上げる。

「知っているのか？」

「知ってるも何も……こいつも俺達の世界の兵器だぜ」
ベルクトの問いにデュオが答える。

白銀の巨人一バロンズウは8人の姿を確認した後、両肩のヒレーフィンを大量に8人に向かって飛ばす。エリオとキャロはフリードに飛び乗って、彼の力を借りて回避し他の6名はそれぞれ飛行してその攻撃を回避していく。

「鋼の軛……」

ザフィーラが魔法陣を展開し、白い魔力刃で大量のフィンをなぎ払っていく。

「はあっ!!」
フェイトがバルディッシュに魔力刃を形成し、フィンを斬り裂いていく

だが、斬られたフィンの根元からまた新たなフィンが生えてくる。

「再生した!？」

エリオが驚いて声を上げる。

「再生能力なんて：オリジナルには無かった筈なんだけど：」

険しい表情でカトルが呟く。

と、その隙にキャロがフリードに指令を出す。

「ブラストレイ!!」

フリードの口から火炎放射が放たれる。

しかし、バロンズウはそれを瞬間移動ーバイタルジャンプをする事で難なく回避する。

「!! 今の：」

「さっきの機械兵と同じ：」

見覚えのある光景にエリオとキャロは驚きを浮かべる。

バロンズウはフィンをフリードの方に向け、そこから大量の光線を放つ。

フリードは危なげない飛行でそれらを回避していく。

「でやああああ!!」

直後にエリオがフリードから飛び降りて、バロンズウに突撃する。
そしてストラダを振り下ろし、バロンズウの左肩を斬り落とした。

しかし、バロンズウはそれでも斬られた左肩からまた新たな腕とフィンを形成する。

「これでは埒が明かな…」

その光景を見ていたザフィーラが苦々しい表情で呟く。

「再生出来ないくらいの強力な一撃を叩き込むか…」

「でもあいつのフィンは厄介だよ…何とか攻撃の隙を作らないと…」

「とはいえ斬った側から再生していきますしね…」

ベルクト、フェイト、カトルの3人が真剣な表情でそうやり取りする。

すると、黙って話を聞いていたアルフが突然声を出す。

「ねえちよつとみんな…こういうのはどうかな…?」

＊

全員がバロンズウから距離を取り、同じ場所に集まる。

「じゃあデュオ…：よろしく頼みますね?」

「やれやれ…俺はいつつもこういう役目かよ…」

カトルに対し、デュオは疲れ気味にそう答える。

そしてハイパージャマーを起動させ、バロンズウに向かって突っ込んでいき

バロンズウのフィンを何度も何度も斬っていく。

しかし、やはり敵の再生能力は並ではなく、斬られてもすぐに再生していく。

その間にアルフが周辺に魔法陣をいくつも展開し、魔力を集中していく。

バロンズウは敵の姿が確認出来ず、どうすればいいかわからず混乱している。

「デュオ！準備出来たよ！！」

「はいよ！！」

アルフの呼びかけと同時に、デュオが皆のすぐ前に姿を現す。

それを見たバロンズウが全てのフィンを一斉にデュオに向かって飛ばす。

「やらせん！！」

だが、その前にザファイラが巨大な防御壁を展開し、それらの攻撃を全て防いだ。

「チェーンバインド！！！！」

そしてアルフが周辺に展開していた魔法陣から鎖をいくつも召喚しバロンズウが伸ばしていたフィン全てを縛り上げる。

「ご自慢のヒレも：そうやって全部捕らえられたら使えないからねえ…？」

アルフがニヤリと笑みを浮かべる。

その間にフェイト、ベルクト、エリオがそれぞれのデバイスを構える。

「一閃必中！！！！」

まず最初にエリオが敵に向かって突撃し、バロンズウの体を貫通していく。

「プラズマスマッシャー！！」

「グレイブキャノン・マキシマム！！」

直後、フェイトとベルクトが巨大な閃光を放ち、バロンズウを飲み込んでいく。

バロンズウはその猛攻に再生が追いつかず、巨大な爆発を起こしてその姿を消滅させた。

「ふう…いっちょあがりってか？」

戦闘を終え、右腕で額の汗を拭いながらデュオがそう言う。

「2人共凄いです！！あんな巨大な敵を一瞬に…」

エリオはフェイトとベルクトの魔法を見て興奮気味にそう言う。

「ううん…その前にエリオの一撃があったからこそだよ」

フェイトがエリオに笑顔を向ける。

「それに…アルフ、何よりお前の作戦が今回の戦闘での一番の功績だな…」

「えっ！？そ、そうかい…そう言ってくれると嬉しいね」

ベルクトの言葉を聞いてアルフは喜び、ベルクトにじゃれつく。

他の者達はその光景を微笑ましい表情で見っていた。

*

所変わって機動六課の管制室

ベルクト達の報告を聞いて、アムロは険しい表情を浮かべていた。

「そうか：やはりスカリエッティが関わっていたか」

「コーラリアンが出てきたとなると間違い無いやろうな：

入り口の前でガジェットが出てきたのも納得や」

一緒に報告書を見ていたはやても険しい表情を浮かべる。

「でも：腑に落ちない事が1つある：もしこれがスカリエッティの仕業なら

なんたってわざわざレリックを捨てるような事を：

顎に手を置いてはやては考える。

スカリエッティが用いる兵器ガジェットドローン

それがレリック、E2を狙って動いているのは間違いない

だが、今回は屋敷の地下にE2がそのまま放置してあったのだ。

狙っている品をわざわざ自分から手放すような事をしているような物なのだ。

その点についてはやては疑問を浮かべていたのだ。

「だが、いずれにしても…」

アムロがモニターを操作する。すると、赤いマントの道化師
道化師の召喚した機械兵、そしてバロンズウが映し出される。

「グランチャーにバロンズウ…こいつらまで再現していたとはな…」

「この点については…ギンガと一緒にいる勇君と比瑠ちゃんに
伝えておいた方が良さそうやね…」

「ああ…」

はやての言葉に、険しい表情のままアムロが頷いて答える。

（スカリエッティ…何が狙いなんや…アムロさん達の世界の兵器を
使って

一体何をしよういんや…）

はやては心内でそう呟いていた。

＊

「……それどうしたのバレル？」

「どうしたもなにも……」

六課隊舎の自室でバレルは戸惑いを浮かべていた。

その手に握られていたのは、フェイトが屋敷で発見した薄緑色の拵

え刀である。

「ベルクトが土産にやるっていきなり…」

「任務の土産に日本刀って…何なのよそれ…」

バレルの答えに、フェイはわけがわからず呆れ気味に声を出す。

（でも何だろう…この刀、妙にしっくりくるというか…）

だがバレルは自分でもよくわからないが、この刀を結構気に入っていた。

せっかく貰っておいて捨てるのも勿体無いので、とりあえず自室に飾る事にするのであった。

…後にこの刀がちよつとした事件を巻き起こす事になる…

第11話（後書き）

はい本当にごめんなさい：色々はっちゃけちゃいました：
？とか黒翼大魔とか：何してんだ本当に：

道化師についてですが実は元ネタが存在します。

といってもロボットゲームすら全然関係ないんですが：

最近やったレトロゲーの敵キャラで、使えるかなあ：と思って使っただけです。

極めて個人的な事情で本当にごめんなさい：

謝ってばっかだ今回：

（道化師の元ネタわかる人いたら本当に凄いよ）

まともに書けたのはバロンズウ戦くらいだよ本当に：

（というかアルフを活躍させたくて出したって感じでしたし）

こんなんでもそれなりに楽しめたのなら幸いです

黒翼大魔だけ、また別の機会に小ネタで出す予定ですが
本編ではこういう下りはちゃんと自重します。ハイ：

それではまた

アナザーD（前書き）

他勢力の現状その4です

アナザード

— Another Side ?

スカリエッティのアジト

薄暗い廊下をポニーテールの男とシャアが並んで歩いていた。

「珍しいですね…あなたがここを尋ねるとは…」

「何…お願いをしているのは私の方だからね…」

やはり自分の目で確かめたくなるものなのだよ…」

互いに薄ら笑いを浮かべながら2人はやり取りしていく。

「ルーテシアさんはどうしたのですか？」

「今はゼスト達と一緒にだ…何より彼女に今の私の有様を見せたら恐らく悲しむだろうからね…」

「相変わらずルーテシアさんには甘いのですね…」

「…当然だ、今の私はあの娘の為に生きているようなものだあの娘の幸せの為なら何でもする覚悟が私にはあるよ………」

シャアは真剣な表情でそう答える。

（その為に、真実を知りえながらもスカリエッティと協力しこの私の頭脳も頼る…随分と立派な事ですね…）

ポニーテールの男はやれやれといった感じに、内心で呟く。

「あらゝミスター・シャア、お久しぶりですゝ」

反対側から白色のケープを纏い、何故かサングラスをかけた茶髪の少女がシャアに声をかけてきた。

「…またその格好をしているのかねクアットロ？」

「そうなんですよゝ何故かミスター・シャアに会ってから

無性にサングラスをかけたくなるんですよゝ」

両頬に手を当ててクネクネ動きながら少女クアットロはそう答える。

それを聞いてシャアは溜息を吐く。

「頼むから私の前ではやめてくれないか…どうにも昔を思い出してしまう…」

「わかりましたゝどうもすみませんでしたゝ」

おちよくるような口調でそう言いつつも、クアットロはサングラスを外し

普段自分がつけているメガネを取り出してつけ直した。

「ルーお嬢様はお元気ですかゝ」

「ああ…特に問題は無いよ」

「そうですかゝ出来たらドクターに会わせて上げて下さいねゝ最近ドクターがお嬢様に嫌われちゃったってがっかりしてましたからゝ」

「…：…わかった、今度ルーテシアに聞いてみるよ」

クアットロはそこまでやり取りした後、その場を離れていった。

＊

ポニーテールの男に案内され、シャアとはある部屋に入る。

「…凄いものだな…ここまで見事に再現させるとは…」

「ええ…性格の差異さえ気にしなければ、生前の、容姿、能力、記憶…」

全てが思うがままなのですよ…」

感心したように言うシャアに対し、嬉しそうにポニーテールの男は答えた。

「最終調整ともありますから…稼動にはもう少しかかりますが…」
「いや大丈夫だ…ありがとう、君に頼んで正解だったね…」

「当然です…ジェイル…そしてプレシア・テストロッサの作りあげた理論は

完璧ですからね…これくらいはお手の物ですよ…」

ポニーテールの男は右手の指でメガネをくいと上げた。

(…そうだ…全てはルーテシアの為…その為なら何だってやってやるさ…)

目の前の生体ポッドに浮かぶ2人の人物―

黒髪ショート男性とエメラルドグリーン髪の少女を見つめながらシャアは内心でそう呟くのであった。

— Another Side ?

ミッドチルダ西部に位置するとある郊外の一軒家

「ただいま」

その一軒家に跳ねた前髪でキツネ目の若々しい女性が入っていく。

「よう、戻ったか」

その女性に対し、やたらと濃い顔をした屈強な男性が答えた。

女性は買い物袋をテーブルに置いた後、男性に尋ねる。

「子供達は…どうしてるの？」

「何でも遠くの方の街に遊びに行くとかいって随分前に出て行ったぞ？」

女の子達も一緒だからトリプルデートってやつだな！！」

そう言って男性は豪快に笑う。女性もそれにつられてクスクスと笑みを浮かべる。

「あれから…もう1年近く経つんですものね…」

「そうだな…俺としちゃあお前が『あの娘』を受け入れたのが意外だったがな」

それを聞いて女性は少し寂しげな笑みを浮かべる。

「確かに…あの娘とは色々あったけど…ちゃんと誤解だってわかったんだし

私が何時までも引きずるわけにはいかないから…それに…」

そこまで言って女性はまた朗らかな笑みに戻る。

「…レントンの未来のお嫁さんに酷い事は出来ないでしょ？」

「クッ…ハハハ！全く以ってその通りだな！！」

男性はまた豪快に笑い出す。

「あいつらがあんな義賊紛いの事を楽しんでやるのも意外だったしな」

「あら…発案したのはあなたじゃないのよ？」

「いや…まさか酔った勢いの冗談を真に受けるとは思わなかったからな」

「でも…そのおかげで私達の暮らしも安定してるとも言えるんだけどね…」

「そうだな…俺達もそろそろ潮時だからな…バルチャーやフリーランスの仕事にも限界が…」

そこまで言った時に側においてある通信機が鳴り響く。

「噂をすればなんとやらだな：何時もの大口のお客さんだ」

「じゃあ私が：」

女性はそう言って通信機のスイッチを入れる。

「あゝ：こちらリンディ・ハラオウン：どうしたのクロノ？」

「：そのネタでおちよくるのはやめてくれと言っているだろう、レイ・ビームス：」

モニターに映し出された人物ークロノ・ハラオウンは頭を抱えながらクスクスと笑う目の前の女性ーレイ・ビームスに向かって言う。

「まあまあお茶目なイタズラさ、大目に見てくれ」

「だからあなたが通信に出てくれといつも言っているんだチャールズ：」

クロノは次いで隣に居る男性ーチャールズ・ビームスに向かってそう言う。

「それで？今日は一体どんなご用件で？」

「大した用ではない、また何時もの軽い頼み事だ」

そしてクロノはビームス夫妻に対して、仕事の話を持ちかけるのであった。

アナザーD（後書き）

いかがでしたでしょうか？

シャアはポニーテールの男に何を頼んだのか？
大方の人は予想がつくでしょうけど…

そしてまさかの登場ビームス夫妻。

セリフでおわかりだと思えますがそういう事です。

アクセルさん…つまり彼らは彼女連れです。

そして再びごめんなさい…

さっき謝ったばっかなのにまたやっちゃいました
でもわかって下さい。

クワトロネタとリンディレイネタはどうしてもやりたかったんだ
よ〜！

：とまあそんなこんなで
次回から、待ちに待った（待ってたのか？）休日編になります。
恐らくギャグ的にもシリアス的にもかなりカオスになる予定です。

それではまた

第12話（前書き）

休日編その1です

第12話

(と、とうとうこの日が……)

機動六課隊舎のフェイトの自室

屋敷探索の任務も無事に終わり、アルフも海鳴市に戻って数日経ったその日

フェイトは自室で顔を真っ赤にしながらそわそわしていた。

因みに纏っているのは管理局の制服ではなく私服である。

それも、自分なりに目一杯考えてオシャレを試みた。

なんたってこんな事になっているのかと言えば

今日の早朝の訓練で、フォワード陣の第二段階クリアの見極めテストであり

4人とも見事にそれに合格、その褒美に加え

ここのところ皆訓練漬けであった為に、訓練再会は翌日からになったのである。

つまるところを言うと今日一日休日という事なのだ。

それでまあ、事前から休日を取ると考えていたフェイトは前日に明日、街にでも行かないかとベルクトに持ちかけていたのだ。

ベルクトはその申し出を当然の如く二つ返事で了承し、そして今に至る。

（ベルクトとデート…ベルクトとデート…ベルクトとデート…）
前日からその事で頭がいっぱいのフェイトである。

今日のフォワード陣の早朝訓練もどこかそわそわしていて落ち着きがなかった。

というか、今日の休日もフォワード陣を休ませるという目的よりも自分がベルクトと…みたいな考えに至っている節すらあるのだ。

フェイトが部屋でそわそわしていると

「準備は出来たかフェイト？」

同じく私服姿のベルクトが部屋に入ってくる。

「！！う、うん！全然だいじょうぶだよ…」

いきなりベルクトが入ってきて驚いたフェイトは思わず噛んでしまった。

ベルクトは私服姿のフェイトをまじまじと見て、そして笑みを浮かべてこう言う。

「……ほう、やはりお前は綺麗だな、何を着ても似合っている」
「！！！！……あう……その……／／／」

相変わらぬストレートなベルクトの発言にフェイトは顔を真っ赤にして縮こまるのであった。

＊

隊舎入り口、そこでなのはとユーノの2人が

バイクに乗ったスバルとティアナを見送っていた。

「じゃあ転ばないようにね」

「大丈夫です！前の部隊では毎日乗ってましたから」

「ティア、運転上手いんですよ！」

なのはの言葉にティアナが得意げに答え、スバルが付け加える。

「それじゃ、今日は2人で楽しく遊んできてね」

「はい！」

「いってきます！！」

にこかやに言うなのはに2人は笑顔で答え、そしてバイクを吹かしてその場を離れていった。

スバル、ティアナと入れ替わるようにして、今度はその場にエリオとキャロ

そしてベルクトとフェイトがその場に現れる。

「おや、ライトニングも今日はお出かけなんだね？」

ベルクト達の姿を見てユーノがそう言う。

フェイトはエリオとキャロの前に屈み込む。

「あんまり遅くならない内に帰るんだよ。夜の街は危ないからね」

「「はい！」」

フェイトの言葉にエリオとキャロは頷いて答える。

その光景を見ていたベルクトがふと呟く。

「こうやって見ていると…本当に母親みたく見えるな？」

「ちょ、ちよつとベルクト……」

ベルクトに言われてフェイトは慌てて立ち上がる。

すると、それを見ていたユーノがニヤリと笑みを浮かべて一言。

「…その理屈でいくと君は父親かいベルクト？」

「はあ？」

ユーノの一言に本気で意味がわからずベルクトはポカンとなる。

「だってそうじゃないか？フェイトが母親で、そのフェイトの最も大切な人である君は

つまりエリオとキャロの父親で、つまりフェイトの「わーわーわー

！……」

ニヤケ顔で呟いていくユーノの言葉をフェイトが顔を真っ赤にして遮る。

それを見ていたベルクトは溜息を吐き、他の者は苦笑いを浮かべるのであった。

*

ベルクト達から少し離れた場所

「さあ、準備はいいバレル？」

そこに何故かサングラスをかけ、カメラを手にしたフェイとバレルがいた。

「……何を考えてるんだ君は？」

おおよその察しはついていたが、頭痛を感じつつバレルは尋ねる。
フェイはバレルに対して満面の笑みで返答する。

「決まってるでしょ？あの2人を尾行^{つけ}るのよ！！！」

そう言っ^てフェイはベルクト達のいる方向に向き直る。

「こんな面白そうなイベント…逃さない手は無いじゃない？」

フェイはこの状況を本気で楽しんでるように笑みを浮かべながら言った。

（フェイ…君は一体どこに向かおうとしているんだ……）

自分の大切なパートナーが何やら危ない方向に進みつつあると感じバレルは激しい頭痛を感じるのであった。

*

一方でタック、マリナ、シグナム、ヴィータの4人は
同じ車に乗って外回りに向かっていた。

108部隊との合同捜査本部の立上げやら戦技指導やらを頼まれた
からである。

「しかし：テストロッサも言うようになったな：」

「本当驚いたよ：『シグナムは副官なんだし：準備とかはお願いし
てもいいよね?』なんて：」

前のフェイトなら絶対言わなかったぜ：」

後部座席に座り、互いの顔を見ながら疲れ気味にシグナムとヴィー
タが言う。

「それもこれも：お前達が戻ってきてからなんだよな」

「まあいいじゃないか、フェイトとベルクトの関係はお前も知って
いるだろう?」

ヴィータの言葉に、車を運転しながらタックが笑顔で答える。

「新人達もこのところ訓練漬けであったしな：休息も必要だろう」

「私達に休息は無いのかしらね：」

「仕方あるまい、これも上に立つ者の務めだ」

助手席に座るマリナの言葉にシグナムが答える。

「上というより：中間管理職の務めか?なのはやフェイトの行動を
考えるに：」

「つて：お前とマリナにはあんまり関係ねえじゃねえか：」

「いや?俺は別にお前やシグナムと一緒に居た方がいいかなって思
つて：」

「なっ：！いきなり何言うんだテメェ!!」

突然のタックの意味ありげな言葉に、ヴィータは顔を赤くして怒鳴
る。

それを見た他の3人は楽しげな笑いを浮かべるのであった。

＊

部隊長オフィス、はやてとアムロは大量の書類とにらめっこしていた。

「……やっぱり納得いかへん」

「仕方ないだろう。これもリーダーの務めなんだから」

書類整理の途中で不満げな声を上げるはやてに対し、アムロは淡々と答える。

すると突然、はやては両手をデスクにバン！と叩きつける。

「けどなあ！やっぱりおかしいやろ！？なのはちゃんとフェイトちゃんはやんは

彼氏と一緒にデートを満喫して私だけオフィスで書類整理とかどう考えたって不公平やないかい！？」

「お、落ち着けはやて…」

妙なスイッチが入ってしまったはやてをアムロは宥めようとする。

「大体なあ！私だけ独り身ってのがそもそも間違っとなるわ！！」

確かに男運ないかもしれないけどなあ、私だって色恋話の一つや二つ…」

「……これは無理そうだな」

どんどん暴走していくはやてを見て、アムロは大きなため息を1つ

吐き

とりあえず落ち着くまで静観する事を決めるのであった。

*

レールウェイ車内

エリオとキャロは（理由はよくからないが）シャーリーから受け取った

デートプランに従った行動を取っていた。

「そういえば、キャロの竜ってフリード以外にもう一騎いるんだよね？」

「うん、ヴォルテール。黒くてすっごく大きな竜

フリードは私が卵から育てたんだけど…ヴォルテールはアルザスの土地の古い守護竜なの。」

「そっか…そんなに偉大な竜ならわざわざ来てもらって挨拶だけってわけにもいかないよね…」

「うん…ヴォルテールの力を借りるのは本当に危険な時だけだから…でも、いつかきつと紹介するよ。フリードもね、エリオ君の事本当に友達だと思ってくれてるみたいだから」

「あはは…嬉しいなあ」

エリオとキャロはこんな感じで和気藹々と会話を続ける。
なかなかいい感じのムードになっていた。

そうこうしている間に目的地のサードアベニューに到着する。

電車の降り口は多数の人々で混雑していた。

「あっ！」

キャロは後ろから降りてきた人物にぶつかってしまう。

「ごめんね、大丈夫？」

「あ、はい…ありがとうございます…す…」

後ろに振り向いたキャロは思わず後ろの人物に見惚れてしまう。

エメラルドグリーンの髪の毛、色の白い神秘的な雰囲気その少女は
心配そうな表情でキャロを見つめていた。

「キャロ、どうしたの？」

「あ、ごめんエリオ君！」

エリオに声をかけられ、キャロは慌ててそちらに向かう。

キャロはもう一度後ろに振り向くと、先程の少女は

側に居た赤と白のパーカーを着た少年と一緒にキャロ達とは
反対の方向に歩いてくのが見えた。

（何だか……不思議な感じの人だったなあ…）

エリオの隣を歩くキャロはそんな事を心内で呟いていた。

＊

市街地のとある喫茶店、そこにベルクトとフェイトがいた。
それなりに人がいる座席の一面に2人は互いに向き合って座り、お茶をしていた。

「しかしまあ…こんなにのんびりするのも久しぶりだな…」

「そうだね…最近は訓練やら任務やらでずっと忙しかったから…互いに笑みを浮かべて、和やかなムードで2人は会話をする。

ベルクトは一度ティーカップの茶を啜り、それを置いて口を開く。

「お前と2人きりというのは…やはり一番楽しい時間だからな…」

「……………もう……………」

ベルクトの言葉にフェイトは顔を赤らめる。

「で、でも……………本当に楽しめてる？……………私……………こういうの慣れてなくて……………」

もじもじとフェイトは答える。出時が出時だけに

フェイト自身多少常人とズレている部分もあったりするので

こういうデートだの何だのでどうすればいいのかをよくわかっていないのだ。

だが、ベルクトは笑みを崩さずにやんわりと答える。

「それはお互い様だ…俺もこういう事には不慣れだからな…」

でも別に構わん…基本的に俺はお前が側に居れば大概の事は楽しめるからな…」

「……………そうだね…私も、ベルクトが側に居ればそれで……………」
そう言って2人は互いに顔を赤らめる。

何とも甘々なムードが漂うのであった。

「くーっ…あんな事言っちゃって…新婚さんかってのあなた達は
!？」

「……………フェイ…君もホントにいい加減にしとけよ……………」

やや離れた位置で2人のやり取りを聞いていたフェイは

ハンカチを噛み締めながらそんな事を言い

そんな彼女を見てバレルは頭痛が悪化するのを感じるのであった。

＊

市街地のとあるゲームセンター、そこにスバルとティアナが入って
いく。

「こうやってティアとこういう場所に来るのも久しぶりだよね」

「そうね」

2人は和やかな感じで中に入っていく。

すると、ゲームセンターのある一画に人だかりが出来ているのが見えた。

「すっげえ！これで19連勝目だぜ！！」

「この人はホントに無敵か！？」

「正にゲームチャンプだな！！」

人だからからはそんな声が飛び交っている。

スバルとティアナは気になって人だかりをかき分けて中心へと向かう。

すると、あるシューティングゲームの前で

項垂れている金髪の青年と、その隣で得意げな表情を浮かべたメガネの少年がいた。

「そ、そんな：シューティングゲームでは負け無しこの俺が：」

金髪の青年は沈んだ声でそう言う。

「ねえねえ……これは何の騒ぎなの……？」

「ああ：あのメガネの奴な：最近有名なゲーム少年でな

この辺でキングって言われてる凄腕の奴なんだぜ？

格ゲー、シューティング、パズル：とにかくゲームなら

何でもござれの怪物なんだよ、今日も19連勝中の負け無しさ」

野次馬の1人にスバルが尋ね、野次馬が説明を行なう。

「へえ！負け無しねえ……」

それを聞いたティアナはどこか滾る物を感じ、そして前に出た。

「そのアナタ、次は私とやりましょう？連勝をストップしてやるわ！！」

「はあ……いいですけど」

突然勝負を申し込まれ、メガネの少年は困惑気味に返答する。

それにより周りのテンションは更に高まっていった。

2人は互いに銃を構える。

「ティアゝ頑張ってゝ!!！」

スバルの応援にティアナは得意げにガッツポーズして応えてみせた。

…10数分後

そこにはがっくりと項垂れるティアナと、少し驚いた感じのメガネの少年がいた。

「ふう…まさか僕がここまで僅差に持っていかれるとは…」

メガネの少年がそう呟く。結果は僅差でメガネの少年の勝ちであった。

「嘘でしょ…私が…私が…!!！」

「ティア落ち着いて!!ほら…所詮ゲームなんだし…さ?」

本気で落ち込み、暗い影を背負っているティアナをスバルは必死に慰める。

「遂に20連勝だぜ!!！」

「やっぱりキングは違うな!!！」

野次馬達はメガネの少年に惜しめない賞賛を贈っていた。

すると突如メガネの少年が携帯を取り出し、そして苦々しい表情になる。

「…あっちゃあ、ごめん。ちょっと待たせている人が居るから今日はこの辺で…」

そう言ってメガネの少年は急ぎ足にその場を立ち去っていった。

「待たせてる人って…ひよっとして彼女か？」

「ゲームが強くてしかも彼女持ちって…」

「キングは現実でもキングなのかよ…凄すぎだぜ」

野次馬達は義望の眼差しで去っていく少年を見つめつつも、次第に散らばっていく。

後に残ったのはシューティングゲームの前で項垂れるティアナとそれを必死に慰めるスバルだけであった。

＊

市街地から少し離れた公園、そのベンチになのはとユーノが隣り合って座っていた。

「こうやって、ユーノ君と2人きりで話すのも久しぶりだね」

「う、うん…そうだね……」

2人共どこかそわそわしていて落ち着きが無い感じであった。

「私達が会ってから、本当に色々な事があったよね…」

「そうだね…僕も、なのは達とここまで深く関わることになるなんてあの頃は正直考えてもいなかったから」

そこまで言って、ユーノはなのはの手を握る。

「…でも、だからこそこうして一緒にいられると思うと…」

今まであった事も…悪くはないかなって最近思えるようになってきたんだ」

「ユーノ君…：そうだね、私もユーノ君と一緒にいられると、とっても楽しい…」

「なのは…」

「ユーノ君…」

2人は互いに顔を赤らめながら互いの顔をじっと見つめ合っていた。

それから少ししてユーノは、何か飲み物を買う為に席を離れていた。

「つとと…」

すると、周りをキョロキョロしている間に、ユーノは誰かにぶつかってしまった。

「ああっ…ごめん!!」

ぶつかってきた相手一赤いジャケットの妙に濁声の少年は慌ててユーノに謝った後走って去っていく。

ユーノがその少年を眺めていると少年は、やや離れた位置に座って

キャンパスに絵を描いていた少女の前で静止する。

「……………」

ふとユーノは、不思議な感覚に襲われる。

（今…あの娘がこっちを見てきたような……）

少女が顔を上げてこちらを見ている気がするのだが

自分の周りにも大勢人がいるので気のせいかもしれない。

けど、どういうわけかユーノは少女に見つめられているようなそんな感じがした。

（……おっと、早く飲み物買ってこないと……）

ふとユーノは本来の目的を思い出し、その場を後にしていった。

＊

市街地の中をベルクトとフェイトが肩を並べて

和気藹々といった感じに歩いていた。

「でも本当に…今までのドタバタが嘘みたいに平和だね」

「そうだな…本当に昔の俺には考えられないような事だ」

互いに笑みを浮かべてにこやかに2人はやり取りする。

「このまま……ずっとこんな感じの平和な時間が続けばいいのにね……」
「そうだな……ずっとこのまま……」

ガリッ……

「……？」

ふと、ベルクトは突然歩みを止め、表情を曇らせる。

「どうしたのベルクト？」

「フェイト……今何か聞こえなかったか？」

不思議そうに尋ねてくるフェイトに対して、ベルクトは尋ね返す。

そして突然近くの路地裏に向かって駆け出した。

フェイトも慌ててベルクトの後を追う。

「ッ……これは……」

そしてベルクトとフェイトは路地裏のその光景を見て驚いて声を上げる。

そこで見たのは蓋の開いたマンホールとE2のケース。

そして……それを運んできたと思われる1人のボロボロの少女であった。

＊

とあるトンネルの横転事故現場、多数の局員がその場の捜査をしている。

「陸士108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です」

「同じく特別陸士、ユウ・イサミです」

「同じく特別陸士、ヒメ・ウツミヤです」

その場所にギンガ、勇、比瑯の3人が姿を現す。

「横転事故と聞きましたか…」

「ええ…ただ、事故の状況がどうも奇妙でして…」

「奇妙？」

ギンガの言葉を聞いて現場の捜査官が3人を案内しながらそう言いそれを聞いた比瑯があたりをキョロキョロ眺め始める。

「運転手も混乱してるんですが…どうも何かに攻撃を受けて荷物が勝手に爆発したとか言ってるんです」

「こんなトラックにそんな危険物が積んであったんですか？」

「いえ、積んであったのは缶詰や飲料ボトルだけで…」

爆発物を運んでいた形跡は無いんですよ」

勇の漏らした疑問に現場の捜査官が答える。

「それと…下の方に妙な遺留品があつてですね…」

捜査官がそう言ってその場所に案内する。

それを見て3人は驚きを浮かべた。

「この銃剣：グランチャーのソードエクステンション!?」
「アムロさんから報告があったばかりなのに…」
転がっていた銃剣の残骸を見て、勇と比瑠は困惑して言う。
「これは…生体ポッド!？」
ギンガは銃剣の残骸の近くにあった、生体ポッドに驚きを浮かべていた。

＊

スカリエッティのアジト
『E2反応を追跡していた、グランチャー部隊が全て破壊されました』
モニター越しに紫髪の女性－ウーノが報告を行なう。
それを聞いたスカリエッティはニヤリと笑いを浮かべる。
「ほう…破壊したのは局の魔導師か…それとも、当たりを引いたか?」
『確定は出来ませんが…どうやら後者のようです』
それを聞いてスカリエッティは口元を更に吊り上げる。
「素晴らしい…早速追跡をかけるとしよう…」

「ねえドクター、それならあたしも出たいんだけど？」

するとその場に、赤髪ショート機の強そうな少女がその場に現れる。

「ノーヴェ、君か」

『ダメよノーヴェ、あなたの武装はまだ調整中なんだし…』

通信モニターでウーノは少女ノーヴェに向かってそう言う。

「今回出て来たのが当たりなら、自分の目で見てみたい」

「別に焦らずとも…アレはいずれここにやってくる事になるわけだがね…」

ノーヴェに対し、スカリエッティはニヤケ顔のまま言う。

「まあ…落ち着いて待っていてほしいな…いいかい？」

「……わかった」

スカリエッティに対し、ノーヴェはしぶしぶといった感じにその場を離れていった。

『ドローンやグランチャー、サーペントの追撃は状況を見てからにしましょう』

妹達から適任者を何人か選んで出します』

「ああ…後は…愛すべき友人達にも頼んでおくでしょう……」

そう言ってスカリエッティは別の通信モニターを表示する。

＊

市街地のとある高いビルの屋上、そこにルーテシアとシャアがいた。
「：スカリエッティの指示だ、E2とマテリアルが見つかったらしい…」

「うん：じゃあ早速探しに行かないと…」
そう言って飛び降りようとするルーテシアをシャアは肩を掴んで引き止める。

「どうしたのシャア？」

「いいのか？君にはもうE2は必要ないのだろう…？
私はルーテシアに無茶な事はあまりしてほしくないのだが…」

「：ドクターは今の私の事知らないから：レリックが見つかったなら探さないと…」

ドクターに怪しまれちゃう…：それに…：」
そこまで言ってルーテシアは、シャアに笑顔を向けて続ける。

「シャアには必要なんでしょう？：なら、私はシャアのお手伝いがしたい…」

シャアの幸せが…：私の幸せでもあるから…：」

「……ありがとう…本当に優しいんだねルーテシアは」

「ん……………」

ルーテシアはシャアに頭を撫でられ、気持ち良さそうな表情を浮かべる。

「じゃあ行こうか…決して無理はしないでくれたまえよ？」

「うん…シャアも気をつけて…」

互いに笑顔を向け合った後、シャアとルーテシアは飛び立っていった。

＊

再びスカリエッティのアジト

「ルーテシアは引き受けてくれたか…最近は嫌われていたみたいだがやはりE2が絡むと違うみたいだね……」

スカリエッティがそんな事を呟いていると、

その場に黒いフルフェイスヘルメットの男が現れる。

「なあスカリエッティ…俺も出ていいかね？」

メットの男—BBはスカリエッティに対してそう持ちかける。

「私は別に構わないが…父親に許可は取ったのかね？」

「いえ全然」

「ククク……………相変わらずだね君は……」

あっけらかんと答えるBBに対し、スカリエッティはつい笑みをこ

ぼす。

「ただまあ：遊ぶなら控えめにしてくれたまえよ？
今回の目的は悪魔でマテリアルの確保だ：君がちよっと本気を出してしまえば

それこそ市街地が壊滅しかねないのだからね：」

「わかってるよ。俺も今回はそんなに暴れる予定無いし：挨拶程度さ」

そう言ってBBはその場を後にしていった。

（さくてと：久々のご対面だ！楽しく遊べるといいけど……）
BBは内心でそんな事を呟いていた。

第12話（後書き）

フェイトとベルクトの描写もうちよい多くても良かったかなって思いました

あんまりくどいのもアレなんでちよい控え目に。

ヴィヴィオの登場に、遂に動き始めるシャア

勇と比瑯の参戦に街中に潜むあの3人とその彼女

（ゲーセンネタは今回書いて一番ノリノリになってた部分です）

そしてメットの男ことBB…は読者のにはどうでもいい…？

次回下水道やら上空の戦いやらで益々カオスになる予定です。

それではまた

第13話（前書き）

休日編その2です

第13話

ベルクトがE2ケースと謎の少女を発見した事により
機動六課の休日は一時中断となった。

現在、現場の路地裏にはフォワード4人とベルクト、バレル、フェイ
そしてなのは、フェイト、ユーノ、シャル、リインの計12名が
いる。

因みに全体通信を受けて真っ先にやってきたのがバレルとフェイで
ベルクトに「随分近くにいたんだな？」と問いかけられて
フェイがしどろもどろになったりもしていた。

「うん…バイタルは安定してるわね。危険な反応もないし……心配
ないわ」

「そう…とりあえずは大丈夫みたいです」

少女の診断を終えてシャルが言い、それを聞いてフェイがホッと
したように言う。

「すまないな…せつかくの休日中に面倒事を持ち込んで」

「いえ」

「平気です！」

申し訳無さそうに言うベルクトに対し、エリオとキャロが全く問題
ないという風に答える。

「ケースと女の子はこのままヘリで搬送するから、皆はこっちで現
場調査ね」

「」「はい！」「」

なのはの指示にフォワード4人が答える。

フォワード陣がいなくなった後、ベルクトはしゃがみ込んで少女を
に視線を向ける。

「ベルクト…この娘は一体何なんだろうな？」

「さあな…ただ、普通ではないという事だけは間違いないだろう…」
バレルの問いに固い表情でベルクトが答える。

すると管制室のシャーリーが敵の反応を察知する。

『…ガジェット来ました！地下水路に数機ずつのグループで総数
16…20！』

海上方面に12機単位が5グループ！！』

「思ったよりも数が多いな…どうするはやて？」

「そうやなあ…」

敵機の数聞いたアムロがはやてに尋ね、それを聞いたはやては顎
に手を当て考え込む。

すると、別のモニターに新たな通信が入ってくる。

『こちらタック・ケプフォード、並びにスターズ02：海上で演習中だったんだが

ナカジマ三佐から許可を貰って今そっちに向かっている』

モニターに映し出された、バリアジャケットを纏ったタックが報告する。

『それからもう1人：』

隣を飛行していたヴィータがそう呟いた直後、更に別の通信が入ってくる。

『108部隊ギンガ・ナカジマです。別件捜査の途中だったんですけど

そちらの事例とも関係がありそうなんです：』

モニター越しにギンガがそう言い、次いで側にいた比瑯が口を開く。

『この間報告があったグランチャーと思わしき残骸も発見されているんです：』

アムロさん、勇とギンガさんと一緒に参加してもよろしいでしょうか？』

「：わかった、協力に感謝する」

比瑯の提案をアムロが了承する。

「ほんならタックとヴィータはラインと合流、協力して海上の南西方向を制圧

なのは隊長とフェイト隊長、ユーノ君とベルクトさんは北西部から、バレルさんとフェイさんはバックアップをお願いや！」

はやての指示に、全員が力強く答える。

＊

近くのビルの屋上になのは、フェイト、ベルクト、ユーノの4人が立つ。

「お前と一緒に戦うのは久しぶりだなユーノ？」

「…大丈夫さ、僕もこの9年間で何もしてなかったわけじゃないんだから」

ベルクトの言葉にユーノは得意げに答える。

「ユーノ君……」

なのは心配そうな表情をユーノに向けたが、ユーノはそれに対して笑顔を返す。

それを見てなのはもつられて笑顔になった。

「じゃあ…皆行くよ!!」

フェイトの言葉に他の3人も真剣な表情で頷き、そしてバリアジャケットを纏っていく。

「早く事件を片付けて、また今度お休み取ろうね」

「そうだな、お前と一緒にいるのも今回程度では物足りなかったしな」

「……………もう／＼／＼」

飛行しながら言ったフェイトの言葉に、ベルクトは笑みを浮かべながらこう返答し

フェイトはその答えを聞いて顔を赤らめる。

（そうさ……今度こそ僕の力で守って見せる…なのは達の事を…）

ユーノは真剣な表情で内心で呟き、左のポケットから黒い何かを取り出す。

「行くよ…コスモスター……」

ユーノのその言葉と同時に、巨大な黒い砲台が出現する。それを見た他の3名は驚きを浮かべる。

「ユーノ…結界魔導師のお前が何故そんな物を？」

今までの自分の記憶を辿り、疑問点の浮かんだベルクトがユーノに尋ねる。

「ただの砲台じゃないんだよコレは：僕は結界魔導師だからね基本的には魔法による攻撃は出来ない：こいつはそれをサポートする為の物なんだよ」

ユーノが手に持つ黒い砲台―コスモスターについて説明していると前方から飛行型ガジェットの大群がやってくるのが見える。

「まあ：口で言うよりも見てもらった方が早いかな」

そう言ってユーノは右腰についていた青い小箱から1枚のカードを取り出し

そしてそれをコスモスターの上側に差し込む。

すると、ユーノの足下に魔法陣が展開し、コスモスターの発射口に光が収束していく。

「バランス良好：制御良し：！行け！！アクセルシューター！！」

砲台を構えたユーノの声と同時に、砲台から黄緑の魔力弾がいくつも発射されていく。ユーノはそれをコントロールし向かってくるガジェットの何機かを撃墜していった。

「これって：私の魔法！？」

その光景を見ていたなのはが驚く。魔力光の色の違いはあれどユーノが使った魔法は、自分の得意技であるアクセルシューターその物だったからだ。

すると、別方向から何機かのガジェットが4人に向かって攻撃を放つ。

それを見たユーノが再び小箱からカードを1枚取り出し

今度はそれを左腕に装備された機械的な作りをした大型の黒い籠手の差込口に装着する。

「カウンターフィールド！！」

ユーノのがそう言って左手を前に出すと、4人を覆う様に黄緑の防御フィールドが展開する。

それに当たったガジェットの攻撃が反射し、逆にガジェットを撃ち

抜いていく。

「ユーノ……そのカードはもしかして：フィードル・バルクホルツのそれか……？」

ベルクトはユーノの持っている青い小箱に目を向けて呟く。
すると、その疑問にフェイトが答えた。

「そう……10年前の闇の書事件の時にあの人が使っていた魔法カード……」

ユーノはそれを自分用に改良して使用しているんだ」

「だが……その籠手と砲台は何なんだ？」

ベルクトの新たな疑問に、今度はユーノ本人が答える。

「この魔法カードをあの人に譲ってもらってよくわかったんだ……これは他人の魔法を性能・威力等をそのままに完全複製出来る優れたものなんだけど……」

その分、ランクが高まれば高まるほど制御も難しくなる。

さっきのアクセルシューターなんかも、なのはの威力に合わせて作ってあったから

そのままの状態で使ったりしたら僕の場合、発動自体が出来ないか出来たとしても魔力弾が好き勝手暴れて暴発するのがオチなんだよ正直、あの人は魔力制御だけで見ればSSランクはいつてたと思う何せなのはやフェイトの魔法をあれだけバシバシ使ってたんだから」
そこまで言ってユーノは右手コスモスターを掲げ。更に左手の籠手を見えやすい位置に持っていく。

「そのサポートに作ったのがこの砲台のコスモスターと、この籠手AZ-3……」

魔法カードにインプットされた魔法を瞬時に刻み込み

高ランク魔法の魔力の制御をサポートしたり、魔力を増大させたりする効果があるんだ

コスモスターは砲撃・射撃魔法、AZ-3は防御や回復魔法の補助に使う」

「通称ホルダーデバイス……魔法カードの恩恵によって力を発揮する

新型デバイス：

ユーノが8年前からずっと研究を続けてたんだ

結界魔導師でも攻撃が可能になり…その他の魔導師も魔力カードの効果によって

実力以上の力を発揮できるようになる…」

ユーノの説明にフェイトが付け加える。

「でも…まさかコスモスターの方ももう完成してたなんて知らなかったな

少し前に聞いた時にはまだ全然形になってなかったみたいだったし…」

「うん…大分急ピッチだったけど何とか実戦運用に耐えうる状態になったからね」

得意げに笑みを浮かべてユーノは答える。

(ユーノ君……凄い……!!)

そんな中、ユーノに対してなのはは尊敬の念さえ浮かべていた。

自分が管理局入りしてからは、あまり表立った戦いには参加せず

ユーノと一緒に戦う機会がほとんど存在していなかったのだが

まさか、この10年間でここまでの実力を持つに至っていたとは予想外だったからだ。

そして、やはりユーノは自分にこの道を進むきっかけを与えてくれた存在。

自身の大切な人間で魔法の師である事を再認識するのであった。

すると、更に別のガジェットの大群が4人に向かってくる。

それを見て4人は気を引き締めなおす。

「…じゃあ、行くよなのは!!」

「うん!!」

ユーノの言葉になのはは力強く頷いて答える。

久しぶりに2人は、肩を並べて同じ戦場に立つのであった。

＊

下水道を突き進みながら、ギンガは通信を行なう。

『私が呼ばれた事故現場にあったのは、例の機械人形の残骸と壊れた生体ポッドなんです…ちょうど5、6歳の子供が入るくらいの…』

近くに何か重い物を引き摺って歩いた様な跡があって…それを辿ってここまでした最中

連絡を受けた次第です』

険しい表情でギンガは報告を続けていく。

『それから…この生体ポッド少し前の事件で良く似た物を見た覚えがあるんです…』

「私もや…」

ギンガの言葉に暗い表情ではやてが答える。

『人造魔導士計画の……素体培養器』

「人造…魔導師…？」

その言葉にアムロがピクリと反応する。

『これは悪魔で推測ですが…あの子は人造魔導師の素材として造り出された子供ではないかと…』

その言葉を聞いて、アムロが表情を暗くする。

「そうか…どの世界にもそういう事をする奴らがいるんだな…」

「アムロさん…何かひっかかる事でも？」

「いや…個人的な感傷だ、気にしなくていい」

心配そうに尋ねてくるはやてに対し、やんわりとアムロは答える。

そして当のアムロ本人は、その事とは別の事がずっと気にかかっていた。

（さっきから感じるこのプレッシャー……気のせいで済めばいいんだが…）

＊

なのは達とは別の海上で、ヴィータとタック、そして合流してきた
ラインが

ガジェットの大群を全て撃破し終えた。

「よし…とりあえずは問題無さそうだな」

「リインも絶好調ですー！」

固い表情で呟くタツクに、リインが元気良く答える。

「ガンガン行くぞー！さっさと片付けて他のフォローに周らねえと…」
ヴィータがそう言った時、リインが何かに反応する。

「あれは……」

リインの言葉に他の2人も後方に振り向く。

「増援……にしては随分と数が多いな…」

タツクが呟く。視線の先には先程まで相手にしていたのとは比べ物にならない数のガジェットの大群であった。

＊

その増援はなのは達の方にも出現していた。

しかもただの増援ではなかった、攻撃を喰らって普通に爆発する機体と

掻き消すように姿を消す機体の二種類がいたのだ。

「幻影と実機の混成編隊……！」

「しかもリーダーを誤魔化すほど巧妙だ…これは少し厄介だな」
険しい表情を浮かべてフェイトとベルクトがそう呟く。

「ここまで派手な引き付けをするって事は……」

「主力は地下かへりの方かもしれない…」

ユーノの言葉をなのはが次いで言う。

「皆…私が残ってここを抑えるからヴィータと一緒に…」

「フェイトちゃん!？」

フェイトの言葉になのはが驚く。

「コンビでも普通に空戦してたんじゃ時間がかかりすぎる…」

限定解除すれば…広域殲滅でまとめて落とせる…」

「それはそうだけど…けどフェイト、君1人に任せるわけには…」

止むこと無いガジェットの猛攻を掻い潜りつつ、ユーノはフェイトの案に

否定的な態度を示す。

「なんだか…嫌な予感がするんだ…」

「しかしフェイト…お前だけでは…」

意見を曲げないフェイトに対し、今度はベルクトが口を開くが

『割り込み失礼!!』

その言葉は突如入ったはやての通信によって遮られる。

＊

六課隊舎の屋上、そこに騎士甲冑を纏ったはやてと

バリアジャケットを纏ったアムロが立っていた。

「ロングアーチ並びにロンド・ベルからライトニング01へ

その案も、限定解除申請も、部隊長権限にて却下します」

『はやてちゃん！？何で騎士甲冑！？』

『それにアムロ一尉も…』

戦闘態勢を取っているアムロとはやての姿を見て、なのはとフェイトが驚きを浮かべる。

「嫌な予感私は私とアムロさんも同じでな…クロノ君から私の限定解除許可を貰うことにして…」

そんでアムロさんも今回は戦闘に参加する事になったんや」

「ああ…今回の戦いは、状況から察するにガジェットを潰すだけでは終わりそうにないんでな…恐らくまだ何かが来る」

はやてが穏やかな表情、アムロが真剣な表情で2人に答える。

「それに…運がええ事に、強力な助っ人さんも近くに居たみたいなんや」

「強力な助っ人？」

モニター越しにユーノが呟いたその時。

『こちらプリベンター01、別件の任務中にガジェットの反応と戦闘行動の形跡を確認…聖王教会との盟約により、これより機動六課を援護する』

別モニターにバリアジャケットを纏って飛行するヒイロの姿が映し出される。

『成る程…ウイングゼロの能力ならうってつけという訳だな』

ヒイロの姿を見てベルクトがそう呟く。

「そういう訳で上空の敵機ははやてとヒイロで片付ける。

なのは達4人は地上に向かってヘリの護衛、ヴィータ、タック、リンの3人は

フォワード陣と合流してケースの確保にあたってくれ」

アムロが指令を出す。周りの者はそれを了承していく。

＊

限定解除後、アムロとはやては上空に飛び上がる。

「…それじゃあ、任せるぞ」

「了解や、アムロさんも気をつけてな？」

「ああ…」

どこか浮かない表情で答えつつ、アムロはその場を離れていく。

（あのアムロさんがあれだけ警戒してるんや…よっぽどの大物が現れるんやろうな…

けど今は…こっちの掃除が最優先や！！）

はやてが真剣な表情でそんな事を考えていると、入れ替わるようにしてヒイロが到着する。

「遅くなってすまない…」

「ううん…まだ始める前やから全然大丈夫や」

冷静な表情で言うヒイロに対してはやてはにこやかに答える。

そしてはやては己のデバイスの1つ、夜天の書を現出させる。

「よし…久々の遠距離広域魔法、いってみよか！」

＊

下水道内、フォワード陣は向かってくるガジェットの大群を破壊しながら

前へ前へと進んでいた。

「空の上は何だか大変みたいね…」

クロスミラージュの魔力弾でガジェットを撃墜しながらティアナが言う。

「ケースの推定位置までもうすぐです！」

「うん！」

ケリユケイオンを構えたキャロの言葉に、スバルが頷いて答える。

ズドオン！！

と、突如としてスバルの側にあった壁が破壊される。

それを見て4人は身構えた。しかしそこから現れたのは敵ではなく

「ギン姉！！」

「ギンガさん！！」

同じく下水道を探索していたギンガ、勇、比瑠の3人であった。

「一緒にケースを探しましょう、ここまでのガジェットは

私達3人でほとんど潰して来たから」

左手のリボルバーナックルを構えながらギンガが言う。

「108部隊、ユウ・イサミだ。よろしく頼む」

「同じくヒメ・ウツミヤです」

それぞれ水色とベージュのバリアジャケットを身に纏い銃剣―ブレンバーを構えた勇と比瑠が自己紹介をする。

「あなた達も：ひよつとしてアムロ隊長と同じ：」

「ああ：俺と比瑠も俗に言う、97―2番世界の人間だ」

「正式ではないけど：2人共魔力ランクだけで見たら私より1つ上だからね、頼りになるわよ」

「ギン姉より上!？」

ティアナの質問に勇が答え、ギンガの補足にスバルが驚きを浮かべるのであった。

＊

高域の上空ではやてはシャーリーと通信を行なう。

『ロングアーチ01からロングアーチ00へ、サイティングサポートシステム』

準備完了です。シュベルトクロイツとのシンクロ誤差、調整終了』

「うん：ごめんな、精密コントロールとか長距離サイティングはリインと一緒にないとどうも苦手で：」

『その辺はこっちにお任せ下さい！準備完了です！』

「うん：おおきにな!」

得意げに言うシャーリーに対して、はやては礼を言う。

そして通信を閉じた後、表情を引き締めなおして後ろにいるヒロに言った。

「ほんならヒロは反対側を…手加減無しで思いっきり頼む!!」

「任務了解…」

はやての言葉にヒロは普段の冷静な口調で答える。

そしてはやてはシュベルクロイツを高く掲げ、夜天の書のページを開く。

「来よ…白銀の風…天より注ぐ矢羽となれ!!」

はやてが呪文を唱えていくと、彼女の目の前に大型の白い魔法陣とそれを取り囲むように4つの白い魔法陣が出現する。

「着弾後の爆発効果を付属…エネルギー充填…」

はやての背後でヒロもツインバスターライフルを前方に構え

銃口に光を収束させていく。

「フリース…ベルグ!!!!」

「最大出力…照射開始…!!」

そしてはやての5つの魔法陣から巨大な白い閃光が多数発射されヒロのツインバスターライフルから膨大なエネルギーの放流される。

そしてそれは、それぞれの前方にいるガジェットの大群に着弾し巨大な爆発を巻き起こして敵をまとめて消滅させていくのであった。

*

下水道ではフォワード陣とギンガ達が、新たに現れたガジェットの
大群と戦っていた。

？型ガジェットの大量をティアナが次々に撃ち落とし

エリオが片っ端から切り刻み、フリードの火炎でまとめて燃やして
いく。

「うわあ：皆凄いですね」

「みんな優秀な隊長達に鍛えられてるみたいだからね：これ位は」
怒涛の勢いで敵を落としていくフォワード陣の戦いぶりを見て
比瑪は驚きを浮かべ、それにギンガが穏やかな表情で答える。

と、皆を挟み撃ちにするように二方向からガジェット？型が現れる。

「ギンガさん！片方は私達が！」

「わかったわ！そっちはお願いね比瑪ちゃん！」

「はい！」

比瑪とそうやり取りした後、ギンガはスバルを伴って敵に突っ込ん
でいく。

「スバル！一撃で決められる？」

「決める！！！」

ギンガの問いにスバルは力強く答える。そしてギンガが前に出る。
ガジェット？型がレーザーとベルトアームをギンガに向かって放つ。

「トランシエルド!!」

ギンガは小型のシールドを展開してレーザーを防ぎ

リボルバーナックルの打撃によってベルトアームを抑え込む。

その隙にスバルが敵に接近し飛び上がる。

「デイベイン……!!」

スバルは自分の目の前に水色の魔力弾を形成する。

「バスタアアアア!!!!」

そしてそれをリボルバーナックルの打撃と同時にガジェットに向かって叩き込む。

その一撃は敵のAMFを容易く破りながら貫通し、ガジェットを機能停止に追い込んだ。

「行こう! 勇!」

「こんな狭い通路で使うのはちょっと気が引けるけどな…」

比瑠の言葉に、勇は少し低テンションで答えるも、すぐに気を引き締める。

ガジェット? 型がレーザーとベルトアームを放つ。

勇と比瑠はそれを瞬間移動—バイタルジャンプで回避しつつ、敵を翻弄する。

「比瑠、合わせろ!」

勇が叫ぶ、そして2人がバイタルジャンプを繰り返しながら敵から距離を取り

「1…2…3…チャクラエクステンション!!」

「シュート…シューツ!!」

勇と比瑪が互いの体とブレンバーを至近距離に近づけたその瞬間
2人のブレンバーから巨大な魔力の閃光が放たれる。

そしてそれはガジェットを丸々飲み込んで行き、爆発を起こして敵
機を破壊していった。

その強力無比な戦いぶりを見て、今度はティアナ、エリオ、キャロ
の3人が
呆然と立ち尽くしていた。

ガジェットの大群を殲滅し終えて、一行は下水道を更に進んでいく。
そして

「あっ…! ありました!!」

キャロがE2の入ったケースを発見する。

他のメンバーもそれを確認して笑顔を浮かべる。

だが喜びも束の間、何かが飛び跳ねる音が下水道内に響き渡る。

「何この音？」

ティアナがそう呟いた瞬間、キャロに向かって赤黒い魔力弾が数発放たれる。

「きゃあああ！」

その衝撃でキャロは吹き飛ばされ、ケースを落としてしまう。

「でやああああ！！！」

それを見たエリオが何者かの存在を察知し、上空に飛び上がってストラーダを振るう。

そして、金属音と肉が切り裂かれる様な生々しい音が響く。

「ぐうっ……！」

着地したエリオの肩からは血が流れていた。

「エリオ君……！」

それを見たキャロが心配そうな表情で叫ぶ

エリオはキャロを庇うようにして彼女の前に立つ。

そして、2人の視線の先には全身に黒い甲冑を纏った人物――ガリュ―が立っていた。

すると、その隙を突いてキャロの背後からルーテシアが現れる。

ルーテシアはキャロの背後に落ちていたE2のケースを拾い上げる。

「あっ……！」

それを見たキャロが慌ててルーテシアの方に向かっていくが

「邪魔……」

ルーテシアは右手から紫の魔力光を放ち、キャロを吹き飛ばす。

「きゃあああ！！」

「キャロ……ぐああ！！」

キャロとエリオは共に近くの壁に叩きつけられてしまう。

それを見たガリユーが赤い目を光らせ、2人に向かっていく。

「うおおおおお！！！！」

すかさずスバルがガリユーに蹴りを放つが、ガリユーはそれを紙一重でかわす。

「はあっ！！」

が、更にその直後ギンガが放った打撃によって後方に吹き飛ばされる。

「コラ！！その女の子！それ危険な物なんだよ！触っちゃダメ！こっちに渡して！」

スバルがルーテシアを大声で呼び止める

すると、ルーテシアは背後に振り向き敵意を剥き出しにした表情で呟く。

「それは出来ない……これは……私の大切な人が求めてる物なの……あなた達なんかは渡せない……！！」

「ッ……！！」

見た目の幼さとはあまりにも不釣り合いなルーテシアの気迫に当てられスバルは思わずたじろいでしまう。

だが、その直後ルーテシアの背後にティアナが現れ

クロスミラーージュから形成した魔力刃をルーテシアの首元に突きつける。

「ごめんね乱暴で……でもね、これ本当に危ない物なのよ……」

「……………」

ルーテシアはティアナを怒りの表情で睨みつける。

その時、比瑠が異変を感じて口を開く。

自身が纏っているバリアジャケットから鈍い緑の光が溢れていた。

「何なの…ブレンが怖がってる…何か凄いのが近づいてるって…！」

比瑠のその言葉に全員が辺りを見渡し始めたその時

「ファンネル…！」

何者かの声が響いたかと思うと、周辺に赤い円形のユニットが数個現れ

そこから魔力弾が放たれて爆発を起こす。

それによってティアナはしゃがみ込んでしまい、ルーテシアを逃がしてしまう。

その隙にルーテシアはケースを抱えてその場を離れていく。

「逃がさない…！」

ティアナはクロスミラージュをティアナに向けるが

「スターレンゲホイル…！」

今度はどこからともなく火炎弾が放たれ、爆発と巨大な爆音、眩い光を放つ。

それによってフォワード陣とギンガ達は全員が倒れ伏してしまう。

「ルーテシア：無茶はしないでくれと言ったろう？」

「シャアの言うとおりだ！勝手に突っ走ったりするからだぞ？
ルーラーもガリューも！！」

そしてルーテシアの側に赤髪の気の強そうな融合機と

赤基調のバリアジャケットとマントを纏い、大型のライフルと盾を
装備した金髪の男性

ーアギトとシャアが姿を表す。

「アギト：シャア：ごめんなさい：」

2人の姿を見て、ルーテシアは沈んだ表情で2人に謝る。

シャアは笑顔を浮かべてルーテシアに答える。

「：だが、もう大丈夫だ。私達が来たからにはもう敵に好き勝手は
させんよ」

「そのとおり！！この私！烈火のお！剣精い！アギト様と！

赤い彗星い！シャア・アズナブルが来たからにはな！！」

アギトが何やら芝居がかった口調で言いながら辺りを飛び回る。

何故だかわからないがアギトの周辺に火花が上がる。

「赤い彗星：シャア・アズナブル！？」

「ジオンの伝説のエースが何でこんな場所に：！？」

シャアの正体を知っている勇と比瑪はあまりに予想外の人物の登場
に、目を見開く。

「ほう：私の事を知っているのかね：面白い：」

歪んだ笑みを浮かべながらシャアはプレッシャーを放つ。

「！：何、この息苦しい感覚は：！」

ティアナが歯を食いしばりながら胸を抑える。他の者達も同様の状
態に陥っていた。

（目的は悪魔でE2の奪取だ、敵の排除ではない

適当に消耗させた後、脱出してマテリアルの方に向かう…いいな？）

（わかった…）

（りょーかい！！）

シャアが周りのメンバーに念話を飛ばし、ルーテシアとアギトがそれに答える。

ガリューは念話に対して無言の頷きで返答した。

「さーて…お前らまとめて…かかってこいや！」

アギトが明らかに挑発的な口調でフワード陣達に向かって言い放つのであった。

第13話（後書き）

今回は原作に沿った流れが多かったのですが、そんなに目新しい要素は無かったと思います。

ユーノの新たな力、魔法カードと、ホルダーデバイスのA Z - 3とコスモスター

プロット時点でユーノにバルクホルツの魔法カードを使わせるのは決まっていたが

それだけじゃなんか単純なので、カードの力を更に引き出すという形で

ホルダーデバイスという新要素をこういう形で登場させました
（アイデアの原案を提供してくれた虚空さん、感謝です）

そして遂に戦場に降り立つ赤い彗星ことシャア・アズナブル…
何だろう…勇と比瑠もいるというのに、

機動六課側が勝つシーンが全く思い浮かばない…
上手く収拾つけないと…

次回、ナンバーズの登場やアムロ再びの戦闘参加に加え
遂にあの3人…G G Lが正式に登場します。

本当どんどんカオスになっていくな休日編…

それではまた

第14話（前書き）

休日編その3です。

※書いてる内にノリノリになってきて滅茶苦茶長くなってしまいました…
した…

読んでる内に飽きが来ないかが心配です…

第14話

管理局地上本部のロビー

「何だ？ 一体何事だこれは？」

ソファに座り、モニターに映る戦闘を眺めてレジアス・ゲイズは尋ねる。

「本局遺失物捜査部、機動六課の戦闘のリアルタイム映像です」

「撃っているのは六課の部隊長八神はやて：ランクは総合SSです」その質問にレジアスの傍らに立つシャギアとオルバ……

いや、不気味な仮面を纏い、姿を偽ったヴェンデイスとクリーノが答える。

「地上部隊にSS？ 聞いておらんぞ！ 後見人と部隊長は？」

「後見人の筆頭は本局次元航行部隊提督のクロノ・ハラウン：加えてリンディ・ハラウン統括官：更に、聖王教会の騎士

カリム・グラシア殿もいます」

レジアスの質問に、クリーノがモニターを操作して該当の人物を映しながら答える。

「チッ：英雄気取りの青二才どもが：しかも八神はやてと言ったら：中規模次元侵食未遂事件の根源：犯罪者ではないか！」

レジアスが忌々しいといった感じに声を荒げる。

「八神二佐の執行猶予期間は既に過ぎていきます：これ以上は言及出来る物ではないかと：」

「同じ事だ！ 犯した罪が消えるものか！」

静かに答えるヴェンデイスに対してレジアスが怒鳴りつける。

「中将：今のは失言かと：公式の場ではお控え下さい」

「わかっている：次元^{うみ}の連中はいつもそうだ：危険要素を軽視しすぎる：」

そう言ってレジアスは座っているソファから立ち上がり続ける。

「近くオーリスに査察に入るように伝えておけ、何か1つでも問題

が見つかったら

即部隊長の査問だ：平和ボケの教会連中を叩くいい材料になるからな！」

「了解です：」

レジアスの言葉にヴェンデイスとクリーノは敬礼して答える。

そしてレジアスはその場を離れていった。

(……下衆が、精々そうやって高みから見下ろしているがいいさ：)
(いずれ我ら兄弟の踏み台になる為に：今はそうやって粹がついていくがいい：)

レジアスが去った後2人は表情を歪め、内心で毒づくのであった。

＊

下水道内、六課の面々とシヤアの一行が相對する。

「ルーテシア：あれを頼む」

「わかった…」

シヤアの言葉を聞いて、ルーテシアは一步前に出て己のデバイス・アスクレピオスを構える。

「ブンターヴィヒト：オブジェクト3機：転送移動…」
ルーテシアの周辺に紫の魔法陣が3つ展開する。

するとそこから1体ずつ、グランチャーが姿を現す。

「こいつは…あの時の機械人形!？」

その姿を見てエリオが険しい表情で呟く。

すると、グランチャーはすぐに六課の隊員達に向かってくる。

「させるか!!」

その内一機を勇が蹴り飛ばす。

「皆さん!こいつらは私と勇で抑えます!」

そう言いながら比瑪は前に出て、ブレンバーから光線を数発放つ。
グランチャーはそれをバイタルジャンプでかわしていく。

「ブレイーン!!」

その隙を突いて比瑪がグランチャーの一体に蹴りをかます。

その後すぐさま敵の背後に回りこみ、ブレンバーで斬りつけて敵機を破壊する。

比瑪の背後からグランチャーが二機、比瑪に向かって光線を放つ。

「比瑪!!」

それを見た勇が比瑪の背後に回りこみ、チャクラシールドを纏ってそれを防御する。

「よし：行けブレン！！」

勇の言葉と共に、彼のバリアジャケットが鈍い光を放つ。

勇は上に跳び上がってバイタルジャンプを繰り返す。

トリッキーな動きを繰り返しながら光線を放って敵を翻弄する。

そしてそれに惑わされ隙を作った2体のグランチャーに瞬時に接近しブレンバーの斬撃を放ってそれらを破壊していった。

勇と比瑯がグランチャー達の相手をしているのと同じ時

「どりゃあっ！！」

アギトが両手から火炎弾を生み出し、それをスバル達に放つ。

スバル達はそれを後方に飛び退いてかわす。

「……………！！」

それを見たガリユーが右腕からスピアを展開し、スバル達に突撃する。

「はあっ！！」

それに対してギンガが、リボルバーナックルを叩きつけて応戦する。
互いの武器が交わって爆発を起こし、2人は後退する。

「なんのっ！！」

アギトが更に4つの火炎弾を生み出し、周囲に放って爆発を巻き起こしていく。

(ティア……どうする?)

真剣な表情を浮かべてスバルが念話で、この後どうするかをティアナに尋ねる。

(任務は悪魔でケースの確保よ……撤退しながら引き付ける……!)

(こっちに向かっていているヴィータ副隊長達と上手く合流出来れば……あの人達も……)

互いの顔を見ながらスバルとティアナが念話でやり取りするが

(その必要は無い……どの道私達の目的も撤退なのだからね……)

何とその念話にシヤアが割り込んでくる。そして皆が顔を上げたその瞬間

「敵の目の前でそんなに隙まみれとはな!」

ビームサーベルを構えたシヤアが眼前に迫っていた。

「くっ!!」

スバルが咄嗟に立ち上がってシールドを展開してその攻撃を防ぐ。

「……甘いな!!」

しかしシヤアはサーベルの出力を上げ、シールドごとスバルを斬り払う。

「うわあああ!!」

「スバル!!」

後方に吹っ飛んでいくスバルを見てギンガが叫ぶ。

「本当に……隙だらけだな!!」

シヤアがギンガに向かって右手のライフルから魔力弾を放つ。

ギンガはそれをシールドを展開して防ぐが

「ぐうっ……! 何て威力なの……」

魔力弾の威力は並ではなく、その衝撃によってギンガは後方に仰け反ってしまう。

シヤアはその後バックパックについているファンネルを2つ射出する。

が、それはフォワード陣を通り抜けていく。

「勇…ありが…!!」

攻撃を防いでくれた勇に比瑠は例を言おうとするが、言い切る前に背後に違和感を感じる。

だが気づいた時には時既に遅し。シャアの放ったファンネルが眼前に迫る。

「!!…きゃああ!!」

比瑠はファンネルが放った攻撃の爆発によって吹き飛ばされてしまう。

「比瑠!!……なっ…」

勇が比瑠の方に向かおうとするが、直後ガリユーが勇に刃を向ける。咄嗟に振り向いた勇はブレンバーでそれに対応する。

(強い…さっきの息苦しさといい判断力といい…この人は並じゃない…!)

目の前の男、シャアの強さを見せ付けられ、苦い表情をティアナは浮かべる。

人数的にはこちらが有利であったのに、シャアが少し動いただけでこちら側はあつという間に2人やられてしまった。

現在まともに動けるのは自分とギンガくらいだ

スバルと比瑠は先程シャアにやられてしまい、エリオは負傷したキヤロを抱えているので

普段どおりには動けない、勇はガリユーの相手で手いっぱいだ。

（それでも：副隊長達が来るまでに：何とか抑えないと！）

ティアナが決意を固め、クロスミラーージュを構える。

だがシャアはティアナがクロスミラーージュを上げる少し前に上空に飛び上がる。

「ッ！読まれた！？」

あまりに判断の早いシャアの回避を見てティアナは目を見開く。

上空に飛び上がったシャアは自分の前に魔法陣を展開する。

「パーティクルキャノン！！」

シャアの声と共に、魔法陣から大量の魔力弾が下に向かって放たれる。

「うわあああ！！」

「きゃあああ！！」

ティアナ、エリオ、ギンガの3人はそれを防ぎきれず、何発か喰らってしまう。

攻撃を放った後、シャアはルーテシアの傍らに降り立つ。

「よし…このくらいでいいだろう…後は…」

シヤアは途中で言葉を止め、何かの気配を感じて上を見上げる。
隣にいたルーテシアも何かを感じ、シヤアと同じように上を見る。
すると、そんな2人の側にアギトが慌ててやってくる。

「ちょっと待ってシヤア、ルールー！！何か近づいてきている…魔力反応…デケェ！！」

アギトがそう言ったその時

「バーストモード！！」

上空から3人に向かって魔力弾が飛んでくる。それが地面に着弾し巨大な爆発と爆風を巻き起こす。

「どおりやあああ！！」

直後、ギガントフォルムのアイゼンを構えたヴィータが現れ地面に向かってアイゼンを叩きつけ、周辺をその衝撃風によって遮る。

「何とも…強引な事だな…あれが噂の鉄槌の騎士か…」

その後景を見ていたシヤアが固い表情で呟く。
すると、衝撃風の中からリインが姿を現す。

「捕らえよ！凍てつく足枷！！フリーレンフェッセルン！！」

リインが魔法陣を展開して呪文を唱える。
するとルーテシア、シヤア、アギトの3人が氷の檻によって幽閉される。

その後、衝撃風からタックが姿を現す。

「カートリッジロード！！」

タックはカートリッジを消費して魔力を増大

ライフルの切っ先に普段より遥かに大きい魔力刃を展開する。

そしてそれをガリユーに向かって振り下ろし、彼を吹き飛ばす。

「大丈夫か！」

タックは勇の方に振り向いて叫ぶ。

「ええ…何とか…」

勇はホッとしたように静かに呟き、そして比瑪の方に駆け寄っていく。

「比瑪！無事か！？」

「うん…何とか…」

勇に抱き抱えられて、比瑪は苦しげながらも笑顔で答える。

「よお、待たせたな」

アイゼンを通常状態に戻して下に構え、後方に振り向きながらヴィータが言う。

「あ…あはは…副隊長達…やっぱすごい…」

今まで苦戦していた敵をあっさり撃退したヴィータ達を見て、スバルは苦笑いを浮かべる。

「あ…キャロ！！」

「エリオ君…フリード…」

エリオの腕の中でキャロが目覚めます、エリオとフリードは心配そうな表情でキャロを見つめる。

「いや…お前達こそあの『赤い彗星』相手によく持ちこたえたよ…」
タックが感心した様に皆に向かって言う。

「赤い彗星って…タックさん、知ってるんですかあの人の事？」
それを聞いて疑問に思ったティアナがタックに尋ねる。

「知ってるも何も…あの男は俺達の世界の人間…しかもそこらの三下じゃない…」

赤い彗星シャア・アズナブル…アムロ隊長のライバルだった男だ…
「ええええっ！！？」

「あ、あのアムロ隊長とですか!？」

タツクの答えに心底驚き、スバルとティアナは飛び上がってしまう。何せ、管理局内でもなのはやフェイトと言った伝説のエースと肩を並べる

アムロのライバルだというのだ。驚くのも無理はない。

「そ、そんな凄い人と戦っていたとは…」

現状があまり信じられず、スバルは再び苦笑いを浮かべる。

「迂闊でしたよ…こっちは数で勝ってるから何とかなると思ったんですが…」

「シヤアはその程度なら物ともしないだろうな…俺達がこうしているのも…」

不意をつけたからだ…真っ向勝負なんかしていたらどうなっていたか…」

近寄ってきた勇に対して、固い表情でタツクは答える。

「くそっ…逃げられたか!!」

ガリユーが吹き飛んだ場所に近寄り、ヴィータは苦々しい表情を浮かべる。

そこにガリユーの姿は無く、衝撃で空いた穴があるだけであった。

「こっちもです…!」

リインも同様に眩く。フリーレンフェッセルンが解除された中には

誰もいなかった…

「やはりな…この程度で赤い彗星は捕まらないか…」
タックが腕を組みながらそう呟く。

ゴゴゴゴ……

するとその時、下水道内が激しく揺れ始めるのであった。

＊

地上に上がった後、ルーテシアは自身の持つ巨大な黒い召喚獣―地雷王を呼び出し

下水道に向かって衝撃を与え続けていた。

「シャア：これはマズいんじゃないか!？」

「：どの道ケースは確保してある、ならせめて足止め程度は必要だろう」

アギトに対し、ルーテシアの持つE2ケースに視線を向けながらシャアは答える。

「でも：このままじゃあいつら潰れて死んじゃうかもなんだぞ!？」

「大丈夫：あのレベルなら誰も死なないよ：そうだよねシャア：？」

「ああ：その通りだ：」

尚も否定的な姿勢を見せるアギトに、今度はルーテシアが答える。
そしてシャアもルーテシアの意見を肯定するように口を開く。

次の瞬間、衝撃音と共に地雷王が乗っている地面が円形に窪む。

「ああ：やっちゃった：」

それを見てアギトは項垂れる。

「ガリユー…戻っていいよ…シャアもアギトもいてくれるから…私のワガママに付き合ってくれてありがとうね…」

ルーテシアはそう言ってガリユーに笑顔を向ける。

ガリユーは一礼した後魔法陣を展開し、その姿を消滅させた。

「ツツツ!!…これは……!!」

「……………!!」

だがガリユーがいなくなった直後、シャアとルーテシアの頭にまるで電流が走ったかのような衝撃が走る。

「シャア……これって……あの時の……!!」

目を見開いてルーテシアは心配そうな声で呟く。

すると、シャアは後ろに振り向いて真剣な声色で言う。

「アギト!!ルーテシアを頼む!!急いでここを離脱しろ!」

「えっ…ちよつと待てよシャア!一体何が!?!」

突拍子も無いシャアの発言にアギトは驚いたように言う。

そしてシャアは飛び立とうとする。

「シャア!!」

だが、ルーテシアがシャアを呼び止める。

その顔には心の底からの心配の念が浮かんでいる。

「……ルーテシア、悪いが君達の実力ではアイツは抑えられん…すぐに逃げるんだ……!!」

そう言ってシャアは凄まじいスピードで飛行し、その場を離れていく。

＊

（気の迷いであってほしかったが…こうまで近いと認めざるをえん…！！）

シャアはプレッシャーを感じた方向へとひたすら飛んでいく。

その反応が大きくなるにつれて、1つの白い影が視界に入ってくる。

「やはりか…こんな場所で再会する事になるとはな…！！」

どういうわけかシャアは笑みを浮かべ、そしてサーベルを構える。

それは相手も同じであった、白い影の正体はつきりしてくる。

相手も自分と同様にサーベルを構えている。

だが顔は笑っていない、そこに浮かんでいるのは怒りの表情。

「シャア！！」

白い影ーバリアジャケットを纏ったアムロが叫ぶ。

「アムロ！！」

シャアも同様に相手の名を叫ぶ。

「「やはり貴様だったのか！！」」

2人の声がシンクロし、次の瞬間サーベルが交わり火花が散る。
白い悪魔と赤い彗星が再び戦場で激突したのである。

＊

「シャア！！ シャアッ！！」

「ダメだよルーラー！！ あんなのアタシらじゃ無理だって！！」

「でもっ…！！ シャアが…！！」

ルーテシアはシャアの後を追おうとしたが、それをアギトが必死に
制止する。

アムロが接近してきてアギトも直感的に感じ取っていた。

自分達ではとても相手に出来るような敵ではないと。

それをわかっていてもルーテシアはシャアの下に行こうと必死だった。

その目には涙さえ浮かんでいる。

だがその時、地面に待機していた地雷王が桃色の鎖で拘束される。それに気づいたルーテシアとアギトは地雷王に視線を向ける。

「召喚：私以外に：！」

ルーテシアは目を見開き、周辺を見渡す。

すると地雷王の近くのビルの上で、魔法陣を展開しているキャロを見つける。

その後方からウイングロードを駆けるスバルとギンガ

その間を飛行するヴィータ、タック、勇、比瑪の姿を確認する。

「くっ：！！！」

その後景を見てルーテシアは歯噛みする。

「！！！！」

次の瞬間、ルーテシアとアギトは横に飛び退く。

すると、2人のいた場所をオレンジの魔力弾が通り抜けていく。

それは別のビルの屋上から放ったティアナの魔力弾であった。

*

ビルの間を飛び交いながら、アムロとシャアはビームライフルを撃ち合う。

「貴様が何故ここにいるシャア！」

ビームライフルを撃ちながらアムロが叫ぶ。

「その言葉！そっくりそのまま貴様に返すぞアムロ！」

笑みを浮かべながらシャアは魔法陣を展開、大量の魔力弾をアムロに向かって放つ。

アムロはそれをビルの陰に隠れることで回避する。

シャアはアムロの後を追って、ビルの陰に入る。

「……ハッ！！」

そこにはアムロの姿は無く、代わりにバズーカが置いてあった。そこから放たれた大型の魔力弾をシャアは左腕の盾で防御する。

「防がれた！？」

離れた位置でワイヤーを手にしたアムロが叫ぶ。

「それでこそ私のライバルだ！！」

シャアはアムロの姿を確認しファンネルを1つ放つ。

「シャア！！」

それに対応してアムロもフィン・ファンネルを1つ射出する。

互いのファンネルがビル街を掻い潜りながら飛び交い

攻撃を放ち合うが、どちらの攻撃も当たる事無く高速で飛びあう。

「フィフスを落とし…アクシズを落とし…そして今度は何を企む！」

！
「ファンネルの砲撃が飛び交う中、アムロはライフルを撃ちながらシヤアに接近する。」

「頭の固い事だな！自分の力を無駄に消耗しているだけのお前が！
」

シヤアは後方に飛び退きながらライフルの砲撃をかわし
盾の裏に仕込んであるトマホークを投擲する。

「俺達の世界の兵器を再現しているのは貴様か！！」

「そうだと言ったらどうする！？」

「何が目的でそんな事をする！？」

アムロは投擲されたトマホークを盾を使ってなぎ払い
上空に飛び上がりながらサーベルを抜き、シヤアに向かって急降下
する。

「言ったところで貴様には理解出来まい！！」

「当たり前だ！！人の死に乗っ取った世直ししか出来ない男が！！」

シヤアはアムロの急降下攻撃を紙一重で後方に下がってかわし
アムロに向かってサーベルを振り下ろす。

「ハハハ！！結局そうか！世界が変わっても貴様は変わらんアム
ロ！！」

「何が！！」

「時空管理局という…連邦と同じく世界を牛耳り腐敗させるだけの
愚か者どもに才能を利用されているだけという事だな！」

「このお！！」

嘲笑を浮かべるシヤアに対してアムロは怒りを露にする。

シヤアの振り下ろしたサーベルを盾で防ぎ、後方に飛び退く。

追ってくるシヤアに対してダミールを発射し、シヤアに行く
手を防ぐ。

「やらせんよ！」

爆発したダミールの爆風から、サーベルを構えたアムロが急接近して
くる。

シャアはそれを下に飛び退いて回避し、自分もダミーを発射する。
「それでまた：自分と無関係のこの世界を滅ぼそうとでも言うのか！」

「そうだ！私にとっての生きる目的：愛すべきルーテシアの幸せの
為にな！！」

ダミーの爆風を隠れ蓑にして、シャアはニュータイプ能力を頼りに
アムロに向かってライフルの散弾を放つ。

「愛すべきだと：ふざけるな！幾多の女をたぶらかして利用した男
が！！」

「それは貴様も変わらんだろうが！！」

アムロが再び急降下してくる。シャアはそれに対して身構えるが

シャアに近づいた瞬間、アムロは急停止する。

「なっ：！！」

シャアの振り下ろしたサーベルは虚しく空を切る。

その隙を突いてアムロはシャアの後ろを取った。

*

シャアやルーテシアとは離れた位置のビルの上
そこにボディースーツを纏った怪しげな2人の女性が立っていた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

メガネの少女ークアットロは巨大な砲台を構える少女ーディエチに軽い感じで尋ねる。

「ああ…遮蔽物も無いし…空気も澄んでる…良く見える」

ディエチは感情を感じさせない冷たい声でクアットロに返答する。

「でもいいのか撃っちゃって？ ケースは残せるだろうけど…マテリアルは破壊しちゃう事になる」

持ち前の能力を活かし、シャマル達の乗るヘリを捉えてディエチは言う。

「大丈夫、ドクターの話通りなら聖王の器は砲撃程度では死なないらしいから♪」

ディエチの疑問にクアットロが軽いノリで答える。

「ケースの方はミスター・シャアに頼んであるし…万一捕まったらしても」

切り抜ける為のおまじないは教えてあるし…セインちゃんも待機してる

だから私達は気にせずこっちを優先すればいいのよ♪」

「了解…」

軽いノリで楽しげに言うクアットロに答え、ディエチは手に持った砲台を構える。

*

「こんのお!!」

ティアナの魔力弾を回避したアギトは火炎弾をティアナに放つ。
ティアナはそれを飛び上がって回避する。

「邪魔しないで…! シャアを助けに行かなきゃいけないのに…!!」
ルーテシアは怒りで表情をきつく歪め、敵に対して紫の魔力刃をいくつも飛ばす。

スバルやギンガ、その間を飛び交うヴィータ達は
爆発を起こすルーテシアの魔力刃にお構いなし突撃していく。

悔しげな表情を浮かべてルーテシアは近くの道路の手摺に着地する。
だが次の瞬間、ルーテシアの目の前にエリオが現れ
ストラーダの切っ先を彼女の前に向けた。

「ッ…!!」

ルーテシアは慌てて後方に引こうとするが

「無駄な抵抗はしないでほしいな…」

ルーテシアの背後にはライフルを構えたタックが固い表情で浮かんでいた。

「ルールー!! ……あっ…!」

アギトが叫ぶが、アギトも大量の氷の刃に囲まれてしまう。

「ここまでです!」

ルーテシアの側にリインが降り立ち、彼女とアギトをバインドで拘束する。

その後ヴィータが2人の目の前に降り立ち、少し呆れた感じに言った。

「子供を虐めてるみてーでいい気分はしねーが…」

市街地での危険魔法使用に公務執行妨害…その他諸々で逮捕する」
ヴィータはルーテシアのバインドを一時解除、手を後ろに縛り

彼女の持っていたE2ケースをエリオに手渡す。
ルーテシアは終始怒りの表情でヴィータを睨んでいるが、ヴィータは柳に風状態だ。

（やれやれ…君も子供だろうに…）
すると何と、再びシャアの念話がその場にいた皆に響き渡る。
それを聞いて六課のメンバーを驚いて辺りを見渡し、ルーテシアは喜びを浮かべた。

＊

「くそっ…いつの間にか入れ替わっていたのか!!」
シャアの気配を辿りながら飛行し、アムロは悔しげに拳を握り締める。
先程、サーベルが当たった瞬間シャアの姿は掻き消す様に消えたからだ。
つまりはシャア本人を見失ってしまったのである。

アムロはシャアの気配を追って他のメンバー達の方に近づいていた。

＊

同じ頃、なのは達がへりの護衛の為にへりの近くまで来ていた。

「見えた！」

「よし：とりあえずは無事みたいだな：」

へりの姿を確認してなのはとベルクトが胸を撫で下ろす。

『市街地にエネルギー反応！！』

『砲撃のチャージ確認！！物理破壊型、推定Sランク！！』

しかし、直後に入ってきた管制側の通信に現場の隊員達に緊張が走る。

「まさか：狙い撃つつもりか：！！」

チャージの反応があった方に振り向き、苦虫を噛み潰した様な表情でベルクトが呟く。

「迂闊やった…！まさかそれが狙いやったなんて…」
はやても同様に反応を確認し、悔しげに歯を食いしぼる。

「……クソッ！！」

「ヒロ！？」

ヒロが珍しく焦りを露にした表情で、猛スピードでヘリの方に向かう。

＊

（シャア！大丈夫！？）

（ああ…君の為に私は死ぬわけにはいかんからな…）

（良かった…）

シャアの念話を聞いてルーテシアは安堵する。

（ルーテシア、今から君を助ける…言うとおりに行動してくれ）

シャアは念話でルーテシアに指示を伝え、そして六課のメンバー達の上に姿を現す。

シャアの姿を確認して六課のメンバーは全員がそちらに視線を向ける。

「フッ…私達にかかりつきりになるのは構わんが…いいのかね？

大事なへりを放っておいて？」

歪んだ笑みを浮かべてシャアは皆に言い放つ。

その言葉に六課のメンバーはハッとしたように反応する。

この場のメンバーも、先ほどのエネルギー反応の通信を聞いていたからだ。

それを確認したシャアは口元を更に吊り上げ、そしてヴィータに視線を向けて言い放つ。

「…結局君はまた、大事な物が傷つくのを…

そうやって黙って見てる事しかできない腰抜け騎士という事かね…？

呪われた闇の書のプログラム…鉄槌の騎士ヴィータ…」

「……………テメエエエエ……………」

ヴィータはシャアの言葉を聞いて、目を青くさせる。

そう、彼女が心の底から激怒した時に見せるそれである。

ヴィータはアイゼンを構え、シャアに向かって突撃する。

「ヴィータ！よせ！」

タックがヴィータを止めようとするが、ヴィータは全く聞いていない。

シャアはヴィータのアイゼンの一撃を難なくかわす。

（セイン…今だ…！）

（了解…！ミスター・シャア…！）

シャアは待機していたもう1人の人員に合図を送る。

「頂き…！」

「えっ…うわああ!!」

突如、ケースを持っていたエリオの背後から水色の髪の女性が
まるで地面から這い出てくる様に現れ、エリオのケースを奪う。
そして女性はそのままルーテシアに抱きつき

彼女と一緒に地面の下に、まるで水に沈むかの如く消えていった。

「あっ…!!」

リインが何かに気づいたかのように声を上げる。

いつの間にかアギトとシャアもその場から姿を消していたのだ。

＊

「発射…!!」

時を同じくして、ディエチが砲台から赤い閃光を放つ。

そしてそれは一直線にヘリに向かっていった。

『えっ…ちょっと待って! エネルギー反応がもう1つ!』

『しかも…こつちもSランク相当です!!』

管制室から新たな通信が入る。すると次の瞬間どこからともなく巨大な青白い閃光が放たれる。

そしてそれはディエチの放った砲撃と激突し。

へりに当たる前に互いに爆発を起こして消滅した。

「あらあゝ…?」

「何…何が起こった!」

その光景をクアットロはポカンとした表情で見つめ

ディエチが予想外の事態に慌てふためく。

と、次の瞬間2人に向かってリング型の魔力弾が数発飛んでくる。

2人は慌てて後方に飛び退いてそれをかわし、近くの別のビルの上へに降り立つ。

「……誰だ!!」

何かの気配を感じ、ディエチが叫ぶ。

すると、彼女たちの前にボードを手にした、赤と白のバリアジャケットを纏った少年と

青と白のバリアジャケットを纏い、後ろの首下に妙なヒラヒラを付け銃剣を右手に持ったメガネの少年が降り立つ。

「…こんな市街地であんな事するなんて…どう考えてもおかしい…」
「少なくとも…あなた達はこのまま放っておけるような人間じゃない…」

2人の少年は固い表情を浮かべてクアットロ達に言い放つ。

「ふう…出力4割で大丈夫かなとは思ってたけど…どうにかなったみたいだな…」

すると2人の少年のそばに、白基調のトリコロールで体の中心にエメラルドに光るコアの様な物を携えたバリアジャケットを纏い、背中に巨大な2つの砲台を装備した

濁声の少年がそんな事を言いながら降り立つ。

「目の前でこんなドンパチやってるのを…見て見ぬ振りには出来ないんでね…！」

そして濁声の少年はニンマリと笑みを浮かべ、得意げに大声で叫んだ。

「ジャンジャジャーン！！炎の魔導師団、GGL参上だぜ！！」

そう…ACE3のプレイヤーなら殆どが知ってるであろう3人組恋するあの娘の為に一直線…別の世界では少年恋愛団などとも呼ばれている…

GGL…

ガロード・ラン

ゲイナー・サンガ

レントン・サーストン

3人がミッドチルダに姿を現すのであった…

＊

驚きを浮かべているのは六課のメンバーも同様であった。

「G G L って…あの…！」

「何でこのタイミングで…」

なのはとフェイトは噂に聞いていた謎の魔導師集団—G G L の出現に驚きを隠せない。

「G G L …みんな子供やったんか!？」

はやてはG G L のメンバーの幼さに驚く。

「……………」

猛スピードでヘリの近くまで来ていたヒロは無言で3人を見つめている。

(アイツらまで……)

3人の正体を知りえていたベルクトも、冷静な表情ながらも内心ではかなり驚いていた。

＊

「さーて！その変態2人組！大人しくお縄について貰おうか！」
右手のライフルを相手に向け、ガロードが叫ぶ。

「変態って：こういう場面でそういう表現は無いだろガロード：」
ゲイナーは大声で変態だ何だと言うガロードに少し呆れ気味である。
「そんな事言われて：素直に捕まる子なんていないのよ」

小馬鹿にしたような口調でクアットロは言い、後方に飛び上がる。
ディエチもその後を追って、ビルとビルを飛び交いながら逃亡する。
「逃がすか！！」

ガロードとゲイナーはそのままの状態で、レントンはボードに乗って飛行して後を追う。

「IS発動：シルバーカーテン！！」

クアットロがISを発動。ディエチと共にその姿を消滅させる。

「消えた！？」

「いや：恐らく視界を誤魔化すだけの筈だ、手分けして探すんだ！！」

驚いて声を出すレントンにゲイナーが冷静に答える。

3人はそれぞれ別方向に飛んでいき、消えた敵の搜索を開始する。

「……………!! アイツは…!!?」
しばらくした後、ゲイナーはある人物が視界に入り驚愕の表情を浮かべる。

＊

「消えたな……」

「うん、はやてに頼んで広域空間攻撃を…」
ガロード達同様にクアットロとディエチを追っていたフェイトとベルクトが呟く。

そして2人は反対方向に飛び退こうとするが

「!!!!!!」

その時、ベルクトの背後から赤い弾丸が迫り、彼の足元に直撃する。すると、ベルクトの両足が凍りつく。

「ベルクト!!」

フェイトがベルクトに向かって叫ぶ。

「…不自然すぎると思ってたけど…まさかお前が絡んでるなんて思わなかった」

そして2人の側に険しい表情を浮かべたゲイナーが姿を現す。

「僕達の世界をあんなにしておいて…それでも飽き足らないのか！」
ゲイナーの言葉にフェイトが驚いて目を見開く。

（僕達の世界…この子ってもしかして…！）

（そう…コイツも俺やバレルの同郷者だ…）

フェイトの疑問にベルクトが念話で返答する。

それを聞いてフェイトはゲイナーに向かって慌てて言う。

「ま、待って！今回の事件にこの人は関係ない！私達は時空管理局
起動六課の者です！」

「時空管理局！？」

フェイトの返答を聞いてゲイナーは目を見開いて驚く。

だが、すぐに表情を引き締めなおし、ベルクトに向かって言う。

「そうか…新連邦と同じように、管理局を隠れ蓑にしているんだな
！」

「えっ…ち、違う！ベルクトはもう…」

疑ってかかっているゲイナーに対し、フェイトは益々慌ててしまう。

「……………」

すると、足の凍結を解除し終えたベルクトが

いきなり長身砲から閃光をゲイナーに向かって放つ。

「……！」

ゲイナーは慌てて横に飛び退いてそれをかわす。

（ベルクト！？）

（先に行っている…こっちは俺が解決する……）

予想外の行動を見せたベルクトは、ゲイナーを追ってその場を離れていった。

＊

ガロード達の追跡を振り切り、とあるビルの間の薄暗い道路で
ディエチとクアットロが姿を現す。

「どうやら…向こうでちよつとモメたみたいだね」

「儲け物じゃない、おかげで逃げ切れたんだから♪」
クアットロが相変わらずの軽い口調でそう言う。

「I…:can…:」

するとその場に、何者かの声が静かに響き渡る。

「フアアアアイ!!!」

そして突如としてナイフを構えたレントンが上空に現れ
二人に向かって猛スピードで急降下する。

「グッ…もう追いつかれていた!?!」

「いやー!!!」

咄嗟に避けようとするも、反応が遅れてしまい2人は腕を斬り裂か
れてしまう。

「出来れば殺したくは無い…大人しくしていてくれ…」

急降下後、地面に激突前に急停止して降り立ち、ナイフを構えなが
ら2人を睨んでレントンが言う。

それを見てディエチは悔しげな表情を浮かべ、クアットロは目を吊
り上げる。

だが次の瞬間、膨大な魔力を感じて3人は同時に上を見上げる。
すると、はなれた位置に黒い魔力の塊が浮かんでいた。

「広域空間攻撃!？」

「うそ〜ん!! 立て続けにこんな事になるの〜!!」

ディエチが驚いて言い、クアットロはいまいち緊張感の無い声で言う。

「……え? ちょっと待って、これってまさか!」

何やら嫌な予感のしたレントンが引き攣った笑みを浮かべて呟く。

＊

「位置確認…詠唱完了…発動まであと4秒!!」

上空でシュベルトクロイツを構えたはやてが呟き。

魔法陣と繋がった黒いスフィアに魔力を集中していく。

「遠き地にて…闇に沈め…デアボリック・エミッション!!」

魔法陣の輝きが増し、そして黒いスフィアが急速に巨大化していき

あたり一面を覆う広域空間攻撃として放たれる。

＊

「うわあああああ!!」

「いや~~~~~!!」

「やっぱり巻き添えだああああ!!」

黒い波動から逃れる為に、ディエチ、クアットロ

そして何故かレントンまでもが一緒に、必死の勢いで飛行する。

波動から逃れたクアットロとディエチは安堵するも

（因みにレントンは姿を消している）

「しまった…囲まれてる!!」

2人を囲むようにして4方向になのは、フェイト、ユーノ、ヒイロが立っていた。

「デイベイン……」

「バスターー!!」

なのはとユーノがそれぞれのデバイスから桃色、黄緑の閃光を放つ。

「プラズマスマッシュャー!!」

フェイトもバルディッシュから黄色い閃光を放つ。

「……………」

ヒイロは無言でツインバスターライフルを構え、膨大なエネルギーの塊を発射する。

4方向から放たれた攻撃は、クアットロとデイエチに当たり爆発を起こした。

＊

ゲイナーとベルクトの戦いは激しさを増す一方だった。

「お前は一体…今度は何をやらかすつもりなんだ!」

銃剣―チェーングンをベルクトに向かって振り下ろす。

「……何も考えてはいない、俺は何かをするつもりは無い」

その斬撃を左腕のシールドで防ぎ、ベルクトは距離をとる。

そして肩の小型の砲台から魔力弾を数発放つ。

「だったら何故いきなり攻撃してきた!!」

「……………」

「答えないのか!!」

ゲイナーは飛んできた魔力弾をフォトンマットで防御する。

「なら一気に決めさせて貰う…オーバースキル!!」

「…………ファントムモード」

ゲイナーはオーバースキルを発動、飛躍的にスピードを高める。

それを見たベルクトもファントムモードを起動する。

そして互いに武器を構え、暫しの間を置いた後同時に動き出し

「ストローリースプ!!!」

…2人が激突する寸前で間にバレルが割って入り、戦闘を無理矢理中断させた。

＊

4人の放った攻撃の爆煙が徐々に薄れていく。

「えっ…!」

「誰……!?!」

だが、その先にいたのはクアットロとディエチではなく、黒づくめのバリアジャケットを纏い、黒いフルフェイスヘルメットを被った

明らかに怪しげな男――BBであった。

「!?!……こいつ……」

「……………」

ユーノとヒロは冷や汗を浮かべる。目の前の男――BBから溢れ出ている

膨大な魔力を感じとったからだ。

（黒いフルフェイスヘルメット……まさかこの男が……!）

BBの魔力にたじろぎながらも、フェイトはバルディッシュを構え、気を引き締める。

「……お前がベルクト達をこの世界に呼び込んで、9年もの間私達と離れ離れにした男か……とでも言いたげな表情かおだねえ……」

「なっ……!」

すると、いきなりBBがフェイトの方に振り向いてこんな事を言う。

「ご名答だよ……あいつらを連れてきたのは俺さ……その方が

面白そうだったんでねえ……」

「ツツツ!!!!」

明らかに馬鹿にしている口調で言うBBに対し、反射的にフェイトは突っ込む。

自分の9年間の思いを踏みにじられたような気持ちになったからだ。

「はあっ!?!」

フェイトがバルディッシュに魔力刃を形成し、BBに向かって振り下ろす。

しかし、どういうわけかBBは全く動く素振りを見せない。

「成る程……リミッター付きとは言えなかなかの速度だね……流石はセデイス姉の……」

「!?!……」

フェイトは目の前の光景に驚愕して目を見開く。

何とBBはバリアジャケットに覆われているとはいえ、手で直接バルディッシュの魔力刃を掴んでいたからだ。

「俺の名前は通称BB…退屈を紛らわすために生きる…3つの欲望達の使者さ…」

今日は挨拶程度だからね…ベルクトにも会いたかったんだけど…残念ながら時間ももう無いみたいなんですね…」

そう言いながらBBはバルディッシュごとフェイトを投げ飛ばした。フェイトは後方に飛び退きBBと距離を取る。

「だからアイツに伝えておいてくれ…予言の下始まる大騒乱…その祭りに乗じて…俺はお前の下に遊びに来るとな…」

詩でも読み上げるかのような意味深な言葉をBBは発し直後、一瞬にしてその姿を消滅させた。

なのはが慌てて管制側に追跡を求めるも、レーダーには全く反応していなかった。

（アイツが…ベルクトの事を…!!）

自分とベルクトを引き離れた張本人を前に何も出来ずフェイトは悔しさで拳を握り締める。

「……いつまで隠れているつもりだ？」

ふと、ヒロが突然何も無い空間に向かって呟く。

「いやあ…バレちゃった？」

空間の一部が歪み、そこからガロードが姿を現す。

「ジャミングが甘い…それに隠れているくらいなら一緒に戦えばよかったろう？」

「しょ、しょうがねえだろ！管理局みたいなゴタゴタした組織は嫌いだっし…
あんな状況でいきなり俺が出てきても、余計に混乱させるだけだし…
何よりお前やアムロさんがいるなんて思ってたしよ…」
ヒイロとガロードが口論をする。その光景をほかの3人は
わけがわからないといった心境で見つめていた。

＊

一方レントンはと言うと……
「酷いじゃないっすか！俺はあの2人を追ってたんですよ！！
それをいきなりあんな無差別な攻撃で！！」
「ま、まあまあ…それについてはちゃんと後で謝るから…」
…はやてに対して、先程のデアボリック・エミッションの件について
ギャーギャー喚き散らしていた。
はやてはレントンに対して、苦笑いを浮かべながらやんわりと対応
していた。

＊

戦闘が行われている場所とはやや離れたあるビルの中

「……戦闘、終わったみたいだね……？」

外の様子を見て、エメラルドグリーンの髪の少女がそう呟く。

「全く……人の事ほっぽいてゲームに没頭して……やっと戻ってきたと思ったら

今度は戦いに行っちゃうし……少しは乙女心をわかりなさいっての……」
その隣でサーモンピンクの髪の気の強そうな少女が不満げに言う。

「で、でも仕方ないよ……本当に何か危ない状況みたいだったし……」

「……まあ、それくらい私にもわかるわ……目の前であんな事が起きたら

誰だって助けたくはなるもの……」

エメラルドグリーンの髪の少女の言葉を聞いて、気の強そうな少女は気を落ち着かせる。

「でも……気になるのはティファの言ってた言葉よね……」

「うん……今日この街で私達の今後を左右する大切な出会いがあるって……」

2人はそう言いながら、少し離れた位置に座ってキャンパスを見つめる

ピンクの服を着た物静かな少女に近寄っていく。

「そう：でも私はあなた達がこんな場所で一緒にいるって事の方が気になるけど：」

直後、3人の誰の物でもない言葉が響き渡る。

「！！あなたは……」

「フェイ……さん：ですよえ！？」

「バックアップで周辺警戒をしていたら：こんな事が起こるなんて……」

突如として現れた人物を見て、エメラルドグリーンの髪の少女と気の強そうな少女が驚きを浮かべる。

「……みんな久しぶりね、こんな場所で会うとは思わなかったけど……」

笑みを浮かべて言うフェイの前に立っていたのは
バルドナ・ドライブで生まれたもう1つの地球の人間……

GGLが戦う最大の理由とも言える少女達……

ティファ・アディール、サラ・コダマ、エウレカの三名であった。

そして事の成り行きを静かに見つめていたティファのキャンパスに描かれていた物

それは起動六課の隊舎の外観であった。

＊

ロングアーチからの反応ロストの報告を聞いて、ヴィータは表情を暗くする。

「ああ：悪い：こっちは最悪だ：召喚士一味には逃げられて：ケースも持ってかれちまった：迂闊だった：」

「あ、あの～：ヴィータ副隊長：」

報告を行うヴィータに、何やら言い辛そうにスバルが語りかける
ヴィータはスバルにアイゼンを突きつけてそれを遮り、報告を続ける。

「ああ：フォワード陣はベストだった：今回は完全にあたしの失態だ：」

「副隊長：あの～：」

今度はティアナがヴィータに向かって言う。それを聞いてヴィータはイライラした感じに皆の方に振り向いて怒鳴る。

「何だよ！報告中だぞ！！」

ティアナ達はヴィータの怒りに少したじろぎながらも、つつかえつつかえに話し始める。

「いや：あの：ずっと緊迫してたんで：切り出すタイミングが無かったんですけど：」

「レリックには：私達でちょっと一工夫してまして：」

「……？」

苦笑いを浮かべながら言うティアナ達に、ヴィータはポカンとなる。

「ケースはシルエットではなく本物でした、あたしのシルエットって衝撃に弱いんで…奪われた時点でバレちゃいますから…」

「なので…ケースを開封して…レリック本体に直接厳重封印をかけて…」

「その中身は…」

スバルがキャロの帽子を取る、彼女の頭には花が1つ乗っかっている。

「こんな感じで」

ティアナが指をパチンと鳴らす、すると花は姿を変え緑色の宝石のような物—E2へと姿を変える。

「敵との直接接触が一番少ないキャロに持って貰おうって…」

「な…るほど…!!」

「へえ…なかなか考えたじゃないか」

エリオの説明を聞いて、リインとタックは感心したように笑顔で言う。

「あ、あはは………」

「そ、そんなオチか……」

「私達の気苦労は………」

ヴィータ、勇、比瑯の3人は引き攣った笑みを浮かべていた。

*

「私達の出番は、どうやら無くなったようだな」
「まあ：無事に任務が終わったから良しとしましょう」
離れた位置でヴィータ達を見つめていたシグナムとマリナがそう呟いた。

＊

（愛すべき者の為だと……：シャア……）
そんな中、アムロはヴィータ達と少し距離を置いて、1人思考の海に沈む。

シャア・アズナブル：ネオ・ジオンの総帥で地球を潰そうとした男……
自分の記憶が正しければ自分との決着と地球壊滅意外の事にはほとんど興味が無かった筈である。
アクシズでの戦いで行方知れずになっていたその男が
どういうわけかここ、ミッドチルダに姿を現し
言動から察するにスカリエッティと関わりがあり。

また何かとてつもない事を引き起こそうとしている疑いが十分にあるのだ：

だが戦闘中は興奮していて気づかなかったが：

あの時言った愛すべき者の幸せの為：それを言ったシャアに違和感を感じた。

どうも何かの皮肉や誤魔化しではなく、本心から言ってるように聞こえたのだ。

それは、自分の知っているシャアでは到底あり得ない姿だ

（シャア……お前は何を企んでいる……？）

アムロは1人で宿命のライバル：シャアの事について悩み続けるのであった。

第14話（後書き）

とまあ、休日編はこれにて終了です。

アムロ対シャア、GGLの登場、メットの男BBの暗躍…
詰め込めすぎて物凄いカオスになってしまいました…

特にアムロ対シャアの戦闘シーンが
ちゃんとそれっぽく見えてるかが心配です…

あとルーテシア。本小説ではシャアが絡むと本当に感情剥き出しに…
本編のルーテシアとは別人に見えてくる…

つーかキャラが多くて出番の配分が難しい…
今回バレル、フェイ、マリナの3人が
本当の本当にチョイ役になってしまったのが悔やまれます…
（GGLの彼女組に接触したフェイはまだマシだったかな…）

ベルクトが何故ゲイナーにあんな事をしたのか？
それはアナザーパートを挟んだ後の第15話で説明します。

それではまた

アナザーE（前書き）

他勢力の現状その5です

アナザーE

— Another Side ?

— あなたは……誰……？

— 君ももしや……そうだとか……？

— 知らない……私に心なんて……

— その感じているものが……心という……

— ドクターは……私に嘘を……

— ああ…私にとって君こそが新たな…

— この胸の熱いのが…嬉しいって…

— ルーテシア…君はもしかしたら…

— ありがとう…私にも心が…

— 共に行こう…必ず君のことを…

— 優しい人…あなたの名前…

— 私か？…私の名前は…

「…………ハッ…!」

とある山の中、小さな池のほとりでシャアは目覚める。

「……まさか、あの時の夢を見るとはな…」

そう言いながらシャアは右手で額を抑え、その後隣にいるルーテシアに視線を向ける。

「…………シャア……………」

ルーテシアは何とも可愛らしい顔で眠っており、寝言で静かにシャアの名を呟く。

そんなルーテシアを見て、シャアは穏やかな笑みを浮かべる。

(やはり…この娘こそが…私の新たな希望なのだな…)

内心でそんな事を呟き、シャアは眠っているルーテシアを起こさないように注意しながらそっと立ち上がる。

シャアは森の中に入ってすうっと深呼吸をする。

「やはり…どんな世界でも自然は美しい物だな」

穏やかな表情でそう言い、ふと昨日の事を思い出す。

「アムロ……」

シャアは表情を歪める。

あの後、アジトに帰還したセインが持ってきたE2ケースの中身は

空だったのだ。

その後モニターで確認した結果、敵の召喚士の頭部からE2の反応を確認

自分たちはまんまと出し抜かれたのだ。

そして、その最中で再会した自分の宿命のライバル…

その男も魔導師となり、またしても自分に立ち塞がる敵となっていた。

戦闘中は久方ぶりのライバルとの戦いに心を弾ませていたが
今更になって冷静に考えると忌々しさが浮かぶ。

一年戦争での悲劇の記憶に加え、ネオジオン総帥として挑んだ戦いでも

一騎打ちに敗れ、アクシズの落下も止められてしまった。

そう…過去の自分と決別し、ルーテシアと共にいる今の自分にとって
アムロは今まで以上に大きな障害になるのだ。

（アムロ…私からはもう何も奪わせん……！

今度こそやり遂げてみせる、ルーテシアの為に……！）

何かを決意したようにシヤアは表情を固くし、明け方でまだ薄暗い
空を見上げるのであった。

— Another Side ?

バルクホルツの研究所

辺りが沢山の書物や書類でゴタゴタな部屋の中

バルクホルツはデスクに座り、パソコンに送られてきたメールを読み上げる。

「…コスモスターの実戦使用は上手くいったみたいですね…流石ですよユーノ君…私が見込んだだけの事はある…」

ユーノからの報告を読んでバルクホルツは笑みを浮かべる。そして次のメールを読み上げていく。

「…戦闘機人の可能性が有り…ですか…やはりいたのですね…スバル君とギンガ君の他にも………」

マリエルの報告は、表情を曇らせながら読み上げていく。

次いでバルクホルツはパソコンを操作し、フォルダに保存してある資料に目を通す。

「やはり…完全な復元作業にはコレが必要となりますか…難しい事です…」

顎に手を置きながらバルクホルツはウームと唸り

次いで傍らに置いてある生体ポッドの中の銀髪の女性に目を向ける。

「ここはやはり…またあの方にお願ひするかなさそうですね…」
そう言ってバルクホルツは再びメール機能を呼び出し、新規作成をクリックする。

（ほんの数ヶ月の縁だというのに：彼は随分と協力してくれる：やはりタツク君の言う通り、身近な触れ合いは大切ですね）
内心でそう呟きながらバルクホルツはメッセージを書き上げていく。
その文面の冒頭にはこう記されていた。

ードクターDからプリベントー・ウインドへ

— Another Side ?

スカリエッティのアジト

その一室でスキンヘッドの男がモニターを操作しながら作業をしていた。

「E2もマテリアルも見事に奪取されたわけか…
戦闘機人として完全ではないのだな…」

昨日の戦いの報告を見てスキンヘッドの男はそう呟く。
ちなみにさっきまでセデイスが自分の部屋に来て

「またパパの機嫌が悪くなっちゃった」と

不満タラタラといった感じに愚痴をこぼしにきていた。
それを思い出してスキンヘッドの男はつい笑みを浮かべる。

「……………」

しばらく作業を続けた後、スキンヘッドの男はふと表情を和らげ目の前のモニターを操作して映像を切り替える。

「あの思い出すのも嫌になる悪夢から…もう10年近くになるのだな…」

モニターの画像を眺めてスキンヘッドの男はしみじみした感じに呟く。

そこに映されていたのは衛星砲ーガーディアン

の画像であった。「こちらの生活に不満が無いわけではないが…まあ仕方あるまい…」自分以外誰もいない部屋で、スキンヘッドの男は語り出す。

「あの頃は皆が私の知識を求めてきた…」

私も人々の笑顔の為に自分の事は後回しにしてそれを提供した…

しかし…平和を求めた民衆の為に生み出したガーディアン…

その素晴らしさを理解しないで…私の知識を求めた者達は私を抹殺した…

私は世界の為に知識を振るつたのに…その世界に裏切られた…」

俯きながら部屋の中を歩き回り、スキンヘッドの男は続ける。

「だから…私はもう知識を振るうのに疲れた。」

私は私の都合の為に…私の知識を真に求める者に対して…

自分の好き勝手で選択して…知識を提供すればいい…

所詮私は世界に裏切られた人間…ただの亡霊だ…

善悪など関係無い…気の向くままに暮らしていけばいい…

その為に彼らとゆりかご…いや、はこぶねを作っているのだからな…」

そう言ってスキンヘッドの男は再びモニターの画像を切り替える。

そして映し出されたのはスキンヘッドの男と肩を並べ

共に笑顔を浮かべるバルクホルツの姿であった。

（フィーデル：私の知識を受け継ぐ息子よ…

今の腑抜けた私を見たら：お前は何と言うのだろうか…）

映された写真を見上げて表情を曇らせながらスキンヘッドの男――
ガーディアンシステムの創始者、フィーデル・バルクホルツの実父
かの天才科学者――アルバート・ライネンはそう思うのであった。

アナザーE（後書き）

現状というよりかはいろいろ種明かしの回って感じでしたかね…？

打倒アムロに燃えるシャア・アズナブル
彼とルーテシアの間には一体何があるのか？

バルクホルツがメールを送った人物…
あの5人に肩を並べる彼の存在が遂に示唆されたというわけです。
つっても現時点のプロットでは登場はまだしばらく先なんです（
オイ）

スキンヘッドの男の正体が判明。アルさんことアルバート・ライネン
UCEに裏切られ、すっかりやさぐれた彼は
スカリエッティと共に気紛れに行動するわけです
しかしまさか息子のバルクホルツまで来てるとは思ってないでしょ…

2人が再会した時何が起こるやら……

関係ないけど、つまりバルクホルツの本名は
フィーデル・ライネンって事なんでしょうかね？

それではまた

番外〜この先の展開について〜（前書き）

皆さんの声援もあったおかげでStrikerS編もようやく折り返し地点です

本当にありがとうございます。

私自身の息抜きも兼ねまして、今回は番外として今後の話の展開について書かせて頂きました。

尚、今回の話はネタバレがかなり含まれるのでネタバレ嫌いな人はお控え下さい。

（ネタバレ嫌いな人ごめんなさい…）

番外この先の展開について

黒仮面「どうも、作者の黒仮面です」

フェイト「フェイト・T・ハラオウンです」

ベルクト「ベルクトだ」

ベ「それで、今回は何をするんだ？」

黒「小説が折り返し地点に到達したのを記念して

今後の展開についての話をしたいと思います」

フ「折り返しって…記念にしては少し理由が弱くない？」

黒「うっ…別にいいだろう！これから先長くなりそうだし

更新も不安定だから、触り程度は話しておきたいんだよ！」

ベ「その程度で一々騒ぐな。正直見苦しいぞ」

黒「…相変わらず辛辣だなお前は？」

ベ「書いてるのは貴様だろうが？」

フ「ベルクト…身も蓋も無い事言わないで…」

黒「まあとりあえず本題に入りたいと思います」

フ「原作通り進むならこの後聖王協会で予言を聞いて…」

ギンガ達が六課に合流して…」

ベ「そして地上本部襲撃↓ゆりかご戦と続くわけだな」

黒「はいその通りです。ではおさらいした上でまずはその1…」

●カリムの予言内容の大幅変更

フ「……………」

ベ「……………」

黒「アレ？何で2人とも黙り込むの？」

フ「いや…これネタバレって言うほどの物でもないよね？」

ベ「そもそもこの小説自体、貴様があれこれ改変してるからな

予言内容が変わる事くらい寧ろ読者は想像してたんじゃないか？」

黒「むう…そういうものなのかね？」

フ「そもそもクロス部分を除いてもこの小説って

オリジナル色が結構強いでしょ？」

ベ「ああ…ユーノやルーテシアなんかはそのいい例だな」

フ「前書きでああ言っただから『ネタバレ上等！』って人を

ガツカリさせないようにしないと…」

黒「…まあ一理ありますね…改変した予言が

ある意味今後の展開のヒントの塊みたいなもんですからね…」

黒「では気を取り直してその2…」

●地上本部襲撃前にオリジナル話を投入

フ「えっ？またやるのオリジナル話…」

黒「何で怪訝な顔するんですか？」

ベ「当たり前だろう？病気の影響もあったが

貴様自身あの話は消化不良だと思ってるだろうが？」

フ「○ンバー○ンの敵キャラとか声優ネタとか…」

わかんない人も多くてあんまり良くなかったし」

黒「ご心配なく…今度はスベらない自信がありますとも

というよりさっさと書きたくて仕方ないくらいなんです」

ベ「大層な自信だな…どんな話をやるんだ？」

黒「ヒント…GGLと運行部長」

フ「って待って！それヒントじゃなくて完全に答えだよ！？」

黒「やつぱり……？」

べ「……ACE3では有名なあの伝説のイベントをやるのか…」

黒「GGLが出るんだから当然です。」

現在六課側の犠牲者を誰にするか考えてる真つ最中なんですから」

フ「うわあ……あの3人みたいに叫ぶ度胸は無いなあ……」

黒「だが残念。あなたは既に確定済み」

フ「ええええええええ！？」

べ「ちよつと待て……ここは流れるに俺なんじゃないか？」

黒「セオリーすぎてつまらないでしょう？」

「普段おとなしいフェイトが叫ぶからこそ面白みがあるんだし」

「このひねくれ魔神め……」

[illegible]

黒「ではその3…今度は地上本部襲撃での部分をいっぺんに…」

● B Bとセデイスとポニーテールの男の詳細判明

● リーンの翼のメンバーが登場&サコミズ王があの人を救う？

● 寝返りが発生

● シグナムがあのかつらと交戦

フ「二番目に関しては以前アクセルさんに答えたよね」

ベ「俺は一番目が気になるな…貴様が考えた

あのイマイチなオリジナルキャラの正体か…」

黒「だからそういう事を言うなっつーに…」

黒「まあ…B Bもセデイスも君ら2人にとって

深い関わりがあるという事は言っておくよ…」

ベ「半数以上の読者は何となくわかっていそうな気はするがな…」

黒「というより地上本部襲撃編で特にB Bが大暴れする予定ですか」

フ「今現在わかってるだけでもかなり強そうだからね…」

これは苦しい戦いになりそうだね…」

黒「ええ…原作以上に地上本部襲撃編は重くなる予定ですから」

ベ「三番目の寝返りというのは？」

黒「言葉の通りです。因みにスカリエッティ側からです」

フ「うーん…これまた何となく想像できちゃうような…」

ベ「というより…ただでさえこの小説の六課は人外魔境だというのはに敵の戦力減らして大丈夫なのか？」

黒「ご心配なく。その為のオリジナルキャラなのですから…
それに…ラスボスはかなりの化物にする予定ですしね…」
フ「四番目については？」

黒「シグナムが戦うのはACE側の版權キャラ
それだけ言っておきます」

黒「ではラスト、最終決戦での部分…」
フ「ここはかなり深いネタバレもありますので注意してください…」
ベ「本当に核心に触れる部分もあるのでな
見たくない者は素直に戻っておけ」

- ドゥーエは死なずに戦闘に本格参加
- チンクも修復が間に合い戦闘に参加
- ヴィヴィオは戦闘に参加せず
- ギンガもスカリエッティ側にあらず
- 新たなオリキャラが登場？（未定）
- ルーテシアが新たな力を得て決戦参加
- ゆりかご本体の大幅な改変
- A's編のキーパーソンのあの人が登場
- E2物質が本格的な関わりを見せる

フ「凄いね…もう本当にぶっちゃけまくりだよ」

黒「最終決戦ですからね…超絶改変&カオスになる予定です」

ベ「ドゥーエとチンクが戦闘に参加するのだな」

黒「ええ…やっぱナンバーズ全員を上手い具合に使いたいですから」
フ「本来ならチンクはスバルの振動破碎の影響で不参加…」

ドゥーエはゼストにあっけなくやられちゃうもんね…」

ベ「逆にギンガとヴィヴィオが戦闘未参加か…これは何故だ？」

黒「ドゥーエとチンクが出るってのもありますが」

その2人が最終決戦前に救出されるからです」

ベ「救出する人間というのが気になるな…」

黒「流石にそこまで言っちゃうと楽しさを奪いすぎちゃうので伏せます」

でも…ギンガとヴィヴィオの穴埋めはきちんとしますので…」

フ「それにルーテシアにもテコ入れされるみたいだし…」

エリオやキャラが心配だな…」

ベ「何せこの小説のルーテシアには」

セットで必ずシャアがついてくるからな…」

べ「そしてようやくE2が活かされるのだな」

黒「ええ…現時点ではレリックと名前以外は大差無いのですが地上本部襲撃から最終決戦にかけてE2が一気に台頭に出ます

恐らくは六課側にもスカリエッティ側にも膨大な力をもたらすかと

いや…というよりスカリエッティ側は既に…」

べ「やめておけ。そこから先はネタバレ度合いがデカすぎるからな」

黒「というわけで発表は以上…この先の話に

少しでも興味が持てたなら幸いです」

べ「今回はGGLやヴィヴィオの処遇についてや

聖王協会の予言についての話となる」

フ「また更新が少し遅れるかもしれませんが…」

どうか気長に待っていてくださいね」

黒「それではまた」

第15話（前書き）

明かされる六課設立の本当の理由…

それと共に浮かび上がる謎の男BBとの関連性…

第15話

サードアベニュー周辺での争いから数時間後

以前リニアレール事件後にベルクト達と話しを行ったのと同じ部屋に今度はガロード、ゲイナー、レントンの3人が椅子に座り向かい合う様にアムロとはやてが座りその一団の側にはベルクトとバレルが立っていた。

「しかし驚きやわ…まさかあのGGLまでアムロさん達と同じ世界の人間やったなんて…」

ガロード達3人の姿をまじまじと見ながら、はやてが呟く。

「それも…前にベルクトさんが話してたバルドナ・ドライブ言う装置で生まれた

もう1つの地球の人間…やったっけ？…何かややこしいなあ…一体地球はいくつ存在するんや？」

言っている内に微妙に混乱してきて、はやては人差し指で頭を掻く。「まあ深く考えなくていい…枝分かれしたとはいえ根本は同じだからな」

悩むはやてにアムロがフォローを入れ、次いで3人の方に視線を向ける。

「しかし…何でお前達はあるな事をしていたんだ？わざわざ正体を

隠さなくても

普通に管理局に次元漂流者だと事情を説明すれば良かったんじゃないか？」

「ああーいやあ…それは、その…ねえガロード？」

「お、おうえ！？…ああうん…俺達、組織に属するとか…そういう堅っ苦しいの嫌いだったから…」

けど…今回ばっかしは目の前でドンパチやってたから…こっそりってわけにもいかかったし…

な、なあゲイナー？」

「ええっ！？…ああ、はい…そうなんです、管理局は巨大な組織で一枚岩じゃないから

下手におかしな人に睨まれても大変だって思いまして…」

3人が3人とも苦笑を浮かべながら、しどろもどろに答える。

傍から見ていると明らかに不自然極まりない。

（言えない…チャールズ（さん）の酔った時の冗談を真に受けてノリと勢いで始めたなんて…）

この時3人の心内の本音は完璧にシンクロしていた。

そんな3人に疑問を感じつつもアムロは質問を続ける。

「それに見た所魔法戦闘も初めてじゃなさそうだったみたいだが：誰かしらに手ほどきを受けたのか？」

「「！！？」」

それを聞いて3人は何故かビクリと大げさに反応を示す。

(レ、レントン：どうしようか：？)

(うーん：でもチャールズもレイも俺達と関わっているのは隠しとけって言うてたし：)

ゲイナーとレントンが念話を使ってやり取りをする。

(そうだぜ：情報なんてのはどっから漏れるかわかんねーんだ：アムロさんの仲間が相手でも下手に話したらあの2人に迷惑かかるし：)

他の2人よりも裏社会での生活が長いガロードが

ミッドチルダに飛ばされて右も左もわからなかった自分達をかくまってくれた

ビームス夫妻の事を正直に話す事について難色を示す。

急に黙りこくってしまった3人の様子を見て、アムロは何となく察しをつけ

そして3人に向かって念話を飛ばす。

(：何か言えない事情があるなら後で俺だけにこっそり話してくれればいい

一応管理局での生活も長いんでな：秘匿する方法くらいはある：)突然念話で話されて3人は驚くも、表情に笑みを浮かべてコクリと頷いて答えた。

しばらくした後、ゲイナーが挙手をして予てよりの疑問を尋ねる。

「それより：何でベルクトが管理局で働いているんですか？

しかも何かアムロさん達もそれを認めてるみたいだし：」

何せ嘗て世界を破滅に導こうとした張本人が管理局で

何の企みも無しに普通に周囲に受け入れられて働いているのだ

アムロ側の地球と管理局、ベルクト達のその後のいざこざを知らない
もう1つ側の地球の人間であるゲイナーにとっては至極真っ当な疑問であった。

それに対してはやてが少し表情を曇らせながら答える。

「ベルクトさんの過去の事情は私もわかつとる：けどな、ベルクト
さんも

こっちに來てから本当に色々あったんや：彼は過去の自分の罪を本
当に悔いてて

私達の為に必死に戦ってくれた：今日会ったばかりの人に言われても
信じづらいかもしれへんけど：これだけはわかつてほしい：

ベルクトさんはもう何も企んでない：アムロさん達と同じで
私達機動六課の大切な仲間やって：」

「まあ：その辺については俺が後で詳しく説明するから：
とりあえず今はそういう事で納得してくれないかな：？」

はやての言葉にバレルが付け足しをして3人にそう訴える。

「ああ：はい：」

「わ、わかったぜ：」

寂しげな表情でどこか必死さを感じるようなはやての言葉を聞いて

まだ疑問は晴れきらないものの、レントンとガロードは一応の納得を見せる。

「…話は大体わかったんですけど…」

ゲイナーはまだ納得しきれてない部分があり、ベルクトに視線を向けて表情を強張らせる。

「じゃあ何でお前あの時問答無用で襲ってきたんだよ？僕達の事知ってるなら

ちゃんと説明してくれば良かったじゃないか？」

それを聞いて腕を組みながら黙って傍観していたベルクトが、冷静な口調で答える。

「…お前はあの時俺の事を完全に疑ってかかっていたからな…

あのままフェイトが説得を続けたところで効果は薄そうだったんだ…だから引き離れた」

「フェイトって…あの金髪で黒い衣装の管理局の人？それが何の関係が…」

「お前の実力は以前の世界の時から知っていたからな。魔導師という勝手の違う戦いでも順応しているのはすぐにわかった…あのまま行く」

事情の知らないお前がフェイトに手を出しそうだったんだ…」

「は…？」

話の方向がよくわからない方向に進んで感じがして、ゲイナーはつい声を上げる。

しかしベルクトはお構いなしに続ける。

「何がおかしい？自分の大切な人間が傷ついてほしくないと思うのは当然の感情だろう？」

下手にお前を刺激してフェイトが攻撃されるのはご免だったのにな…もつとも…そんな事態になっていたら俺がお前を潰していただろうが…」

至って真面目に話すベルクトを見て、ゲイナーだけでなくガロードとレントンも口を開けてポカーンとなってしまう。

アムロはため息を吐き、はやては顎に手を置きニヨニヨと笑いを浮かべている。

(…ねえバレル…こいつ本当にあのベルクトなのか?…何か全然イメージが…)

(…それについても後でちゃんと話すから…)

あまりにも予想外なベルクトの返答を聞いて、ゲイナーは念話でバレルにこう尋ねる。

それに対してバレルはくたびれた感じに念話を返す。

その後、はやてがニヨニヨ笑いを引っ込めて、3人に向かって言う。

「けどなあ…3人がやってきた事は面倒な事になるんや…

無許可の飛行魔法使用に市街地での危険魔法使用…

その他諸々の罪状を含めたら3人は牢獄行きになるんや…」

それを聞いてゲイナーとレントンは顔を青ざめさせ、ガロードはああやっぱるか…みたいな感じのどこか落ち着いた表情を浮かべる。しかし、はやては直後笑みを浮かべて続ける。

「でもこれは悪魔で普通の場合の話や。3人ともアムロさん達の同郷者やって言うんなら

話は早い。今後私達に協力してくれるんやっていうなら。その辺は私が何とかする。どうや?」

笑みを浮かべて可愛らしく首を傾げてはやては3人に持ちかける。

3人はそれを聞いて顔を見合わせてヒソヒソと話していたがしばらくしてそれについて了承すると答えるのであった。

「うん、なら話は早い! さっそく君らの事についていろいろ手回ししなアカンな!」

そう言っではやては席から立ち上がった。

＊

話し合いが無事に終わり、ゲイナーは用意された個室に戻っていく。

「ゲイナー、どうだった？」

「ああ…大丈夫だったよ…こっちで協力してくれれば今までの事は問わないって…」

既に個室にいたサラに対して、ゲイナーは少しくたびれた感じに答える。

「でもまさか…こんな展開になるとは思ってたよ…これからどうなるやらだね…」

「なーに気弱な事言ってるのよ！大丈夫よ、皆いるんだから！

アンタだけ不安になってもしょうがないでしょ？」

そう言ってサラはゲイナーの背中をバシッと叩く。

「痛た…わかってるよ。弱気になったところで何も変わらないし…前向きに考えるさ

今回だって、ガロードやレントンが一緒なんだから何とかなると思うし。それに…」

ゲイナーはそこまで言ってサラの方に顔を向け、笑みを浮かべる。

「サ、サラの事……ちゃんと守っていききたいから……」

「なっ……！フンッ！そう言って今日もアタシの事ほっぽいてゲーセンで随分ワ〜ワ〜騒がれてみたいじゃない？」

「……！ああいや……それはええと……その……」

痛い所を突かれてしまい、ゲイナーは慌てて弁明しようとするも言葉が思いつかない。

「それに……アタシはアンタに常日頃守れてなきやいけない程ヤワな女じゃありません！」

そう言ってサラはプイッとそっぽを向いてしまう。

その様子を見てゲイナーは失敗したかなあ……と思いつつ縮こまってしまう。

「……けど……」

しばらくの間互いに沈黙が続いた後、サラが突然口を開く。

「ホントは……ちょっと不安だった……ビームスさん達に会うまでは……どうなるかわからなくて……」

「サラ……」

顔を赤らめながらポツリポツリと呟くサラを、ゲイナーは見つめる。

「だけど……ゲイナー……あ、あなたが側にいたから……少し……安心し、してたんだ……」

顔の赤みが更に増し、恥ずかしそうにサラは呟いていく。

「……………」

そんな彼女にゲイナーは近づき、黙ってサラの事を抱きしめる。

突然の事にサラは一瞬体を硬直させて目を見開くも。

すぐに落ち着いた表情になり、ゲイナーの抱擁を黙って受け入れるのであった。

＊

同じ頃。隣の部屋ではレントンとエウレカが話し合っていた。

「チャールズとレイには、後でちゃんと連絡入れないとだね…」

「そうだね…私も含めて皆本当にお世話になってたから…」

レントンの言葉に、備え付けのベッドの端に座っているエウレカが答える。

「こんな魔法の世界に突然飛ばされて…一時はどうなるかと思ったけど…」

ガロードやゲイナー、チャールズにレイや…それにアムロさん達みなどと会えて良かったよ」

「うん…みんなが助けてくれたから、私達こうやって無事でいられ

るんだよね…」

和やかなムードで2人は会話をする。

「でも本当の所…私は全然大丈夫だった…確かにいきなりこんな場所に飛ばされて

多少は不安になったけど…」

「…?」

突然そんな事を言い出したエウレカに対して、レントンは首を傾げる。

そんなレントンに対してエウレカは、ぱあっと明るい笑みを浮かべて続ける。

「だって…レントンが側にいれば…私は何も怖くないもん…」
そう言ってエウレカは立ち上がり、レントンに近寄っていく。

「…俺もさ、俺もエウレカが側にいれば…どんな困難だって乗り越えられる」

「レントン…」

エウレカの答えを聞いて、レントンも男らしい頼りがいのある笑みを浮かべて言う。

それを聞いてエウレカは明るい表情のまま顔を赤らめる。

そして2人の距離は段々と縮まっていき、そのまま体を寄せてきつく抱きしめあうのであった。

*

レントンの更に隣の部屋、そこにはガロードとティファがいた。

「ティファの言ってた出会いってこれだったんだな…」

「うん……………」

ティファの描いた六課隊舎の絵をまじまじと眺めながらガロードが言う。

ティファはそれに対し、椅子に座ったまま俯いて答える。

「ティファ：大丈夫か？最近元氣無いみたいだけど…」

そんな彼女の様子を見てガロードは不安に駆られる。

他の2人もそうなんだが、ガロードにとってティファが元氣が無いという事実は

自分に降りかかる如何なる不幸よりも一大事なのである。

「……………」

でも、ガロードに対してティファは何も答えない。

「ひよつとして…また怖い夢でも見たのか？」

すると、ガロードのその言葉にはピクリと反応を示す。そして静かに話し始める。

「……数え切れない程の無邪気な悪意と…それを遥かに超える大きな悪意を感じるの…」

それによって……みんなが飲み込まれていく…たくさんの人が傷ついていくの…」

表情を更に曇らせ、ティファは夢の内容をおぼろげに語る。

「この世界のどこかに……とても強大な悪意をたくさん感じる……」
そこまで言ってティファは顔を上げ、側にいたガロードのそつと手を握る。

「ガロード…私怖い…前の世界で起きた…あんな事がまた繰り返されるんじゃないかって……！」

どこか必死な感じでティファはガロードに訴えかける。

それを聞いてガロードはすぐさまティファをガバツと抱きしめる。

そして目を閉じ、彼女の耳元で言葉を紡いでいく。

「大丈夫だティファ…ティファが不安になる未来なんて…俺が全部
なぎ払ってやる…」

絶対にこの世界もティファも…誰かのいいようになんかさせない…
俺が必ず…皆と一緒に守ってみせる…ティファや皆の事を…」

「ガロード……」

ガロードの言葉を聞いて、ティファは自分が今まで抱えていた不安
が薄れていくのを感じる。

DOM Eとの出会いによってニュータイプという言葉は捨てたとは
いえ

やはり自分の力はこのいう悪い方向でも容赦なく働いてしまう。

だけど…目の前にいる自身のにとつての全てとも言える人物がいれ
ばきつと…

ティファは曇らせていた表情を明るいものに変え、ガロードを見つ
める。

「ありがとうガロード……ガロードがいればきつと……」

「当たり前だろ……俺はティファの為なら何だってするさ……」

「ガロード…」

「ティファ…」

ガロードは一旦抱擁を解き、今度は両手でティファの肩を掴む。
ティファは椅子から立ち上がり、互いに見つめ合う状態になる。
そして2人は互いの顔を近づけててき、そのまま唇を重ねるのであ
った。

＊

「……ねえティア：今日のこのカレーやけに甘くない…？」

「同感ね…というよりこれ本当にカレーなの？砂糖菓子みたいな甘さじゃないの…」

食堂で夕食のカレーライスを頬張りながら、スバルとティアナはそんな事を言う。

よく周りを見渡してみると、他の隊員の殆ども同じ事を感じているようだ。

「そうか…？俺は普段と変わらんと思うが…」

「そうだよね…私もベルクトと同じ意見…」

そんな中、ベルクトとフェイトはしれっとした表情でこんな事を言った。

…余談だかこの日、夕食が妙に甘く感じる以外にも
隊舎のとある場所に限り、桃色の靄が見えるだの、空気がべたべた
するだの
不自然な報告が隊員の何名からか舞い込んできたという。
しかし、ベルクトとフェイトに限りそのどれにも遭遇しなかったん
だとか。

＊

翌日、ロビーでフェイトとはやて、それとベルクト、バレル、フェイ
タック、マリナの7人が集まって話していた。
7人のモニターの前に映し出されていたのはメットの男—BBであ
る。

「…こいつで間違いないな」

「ええ…あの時私達をこっちに連れてきたのと同じ…」
モニターを見ながらタックとマリナが固い表情で呟く。

「でも何で…？私達がいたのは10年前よ…」

「俺達を連れてきた事と言い…フェイトの攻撃を難なく受け止めた事と言い…」

そいつの実力は想像を遥かに超えるって事だけは確かだろう…」
顎に手を当てて疑問を漏らすフェイに対して、バレルが答える。

「その事について1つ言っておきたい事があるんや…」

はやてはそう言ってモニターを操作する、するとBBの姿が
サーモグラフィの様な図へと変わる。

「このBBっていう男のこの部分なんやけどな…」

そう言っではやてはモニターの一部を拡大する。よく見ると

BBの体の胸の辺りが異様に赤くなっているのが見えた。

「…この魔導師の体の中にレリックが内臓されてるんや…」

そして次いで出たはやての言葉を聞いて全員が一斉に驚きを浮かべる。

「体の中にE2って…そんな滅茶苦茶な…」

タックが頭をガリガリと掻きながら困惑気味に言う。

「けど…それなら完全にはじゃないけど…ある程度納得も出来る…
こっちのE2…つまりレリックがどんな力を持ってるかは知らない
けど…」

それを魔法を使うのに応用出来れば…確かに莫大なエネルギーを生
み出せるわね…」

マリナが真剣な表情でそう呟く。

E2…バレル達の地球における機動兵器、アークシリーズの動力源で
そのアークシリーズが用いるガーディアンエネルギー源にもなっ
ている

無限にエネルギーを生み出し続ける半永久機関なのだ。
その理屈でいくと、E2の力を得たこのBBという男が
あのような莫大な力を発揮しているのにもある程度納得がいく。

「10年前のあの事件は：行き詰って大分経つから：これは大きな
進展になるよ」

モニターを見つめながらフェイトが言う。

「しかし：この男までもがスカリエッティと関わっていると…
今回の事件もまた：一筋縄ではいかないというわけだな：何より：」
腕を組みながらベルクトはそう言い、途中でフェイトの方に顔を向
ける。

「その男は俺の事を知っていたのだろうか？」

「うん：予言の下に始まる大騒乱に乗じてベルクトの所に現れるっ
て：」

ベルクトに対して、真剣な表情でフェイトが答える。

「予言と言うのが何なのかは知らんが：いずれにしろその男とは
一度じっくりと話をお聞かせ願わなくてはな…」

「うん…」

そう言って表情を強張らせるベルクトを見て、フェイトは少し不安
になる。

何せあの時リミッター付きだったとはいえ、自分の斬撃を余裕で受
け止め

追っていた2名の共犯と思わしき人物を瞬時に転移させ

自身も一瞬でこちら側の追跡網を振り切って消滅したのだ。

いくらベルクトと言えども、そんな人物と面と向かって対面したら
どうなるのか…

すると、そんなフェイトの気持ちを察したのか、笑みを浮かべてベルクトは言う。

「…こいつが相当な実力者なのは俺にもわかる…だから1人で勝手に突っ走ったりはせん…だから大丈夫だフェイト…なるだけ慎重に事を進めていかなくてはな…」

「……うん」

ベルクトの言葉にフェイトは安心し、彼女もまた笑みを浮かべる。

「んん…コホンッ!!」

そんな2人の様子を見てはやてがわざとらしく咳払いをし、皆の視線を集中させる。

「その事についてなんやけどな…私の方で引つかかることが1つあってな…」

六課設立の本当の理由にも関わることなんや…」

急に真剣な表情ではやてはそんな事を話し始める。

「今日これから聖王教会本部…カリムの所に報告に行くんよ…クロノ君も来る」

「クロノも?」

クロノの名を聞いてフェイトがピクリと反応を示す。

「そういうわけでフェイトちゃん、ベルクトさん…なのはちゃんと一緒についてきてくれるかな?」

そこで詳しい事をまとめて話すから」

はやての提案に対し、ベルクトとフェイトが頷いて答えた。

しばらくの間、シリアスな空気のまま静寂が流れる。

そしてふと気づいたようにフェイトが切り出す。

「そうだ、なのはもう戻ってきてるかな」

「そういえば…昨日保護したあの女の子の様子を見に行ってたんだっけ？」

フェイトの言葉を聞いてバレルがそう言う。

そしてフェイトがなのはの自室に通信を入れたその瞬間

『ああああああん！！うわああああん！！』

『ああほら…泣かないで』

耳を劈くような泣き声と共に映し出されたのは、なのはに泣きつく少女と

そんな彼女の様子に困り果てるなのは、そしてフォワード陣の姿だった。

「おいおい…これは何の騒ぎなんだなのは？」

『ああ…バレルさん…実は…』

さっきまでのシリアスな空気が完全に崩壊し

少し精神的な疲れを感じつつも、モニター越しにバレルが尋ねる。

それに対してなのはが困り顔で答えようとするも

『やあだあああ！！いっちゃいやだあああ！！』

なのはに泣きつく少女の声によってかき消されてしまった。

＊

なのはの自室にフェイト、はやて、バレル、フェイが入ってくる。

（タック、マリナの2人はああいう状況は苦手だと言って断り

ベルクトはバレルが「お前が行ったら余計泣かれる」と逆にお断りを入れた）

少女は相変わらずなのはに泣きついている。

彼女の側にいるスバルやキャロはどうすればいいかわからず困り顔だ。

「エースオブエースにも勝てへん相手はおるもんやね」

はやてが笑みを浮かべてそんな事を言う。

すると、フェイトとフェイの2人が少女の方にゆっくりと近寄る。

「あらあら、かわいい女の子ね」

「ふえ……」

フェイは満面の笑みを浮かべてしゃがみ込み、少女の頭を優しく撫でてやる。

すると少女はそれが気持ちよかったのか、どうにか泣き止む。

「こんにちわこの子はあなたのお友達？」

フェイトは少女が使っていたウサギ人形を持って、親しげに声をかける。

「ヴィヴィオ、こちらはフェイトさんとフェイさん。なのはさんの大事なお友達」

なのはは少女ーヴィヴィオに2人の事を紹介する。

「ヴィヴィオちゃんかゝかわいいお名前ね♪」

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「……………」

フェイは相変わらずヴィヴィオの頭を撫でており、フェイトは人形を上手く用いて

ヴィヴィオを落ち着かせる。

（とりあえず病院から連れて帰ってきたんだけど…何か離れてくれないの…）

（ふふっ…懐かれちゃったのかな？）

（それで…フォワード陣に相手して貰おうと思ったんだけど…）

なのはとフェイトがそこまでやり取りをすると

（すみません…）

フォワード陣が頭を下げながら申し訳なさそうに念話で謝ってくる。

それを聞いてフェイトは再びヴィヴィオに優しく話しかける。

「ねえ、ヴィヴィオはなのはさんと一緒にいたいなの？」

「……………うん」

なのはの服の裾を握り締めたまま、ヴィヴィオが小さく答える。

「そっかあ…でもなのはさんは大事な御用があっってお出かけしなきゃいけないのに…」

ヴィヴィオちゃんがワガママ言うから困っちゃってるよ？」

フェイがそんな事を言いながら、頭を撫でる手を止める。

「ふえ……………」

するとヴィヴィオはまた涙目になる。それを見てすかさずフェイは頭撫で撫でを再開する。

「あ……………」

「大丈夫よ♪なのはさんがいない間は私がこうやってしてあげるからそれに、ヴィヴィオちゃんもなのはさんが困ると悲しいでしょ。ね？」

「ヴィヴィオはなのはさんを困らせたいわけじゃないんだよね？」
泣き止んだヴィヴィオに対してフェイとフェイトが再び優しく話しかける。

（何かフェイトさんとフェイさん…達人的なオーラが…）

（…元々フェイの奴…小っちゃい子供が好きとか言ってたしな…）

（それにフェイトさんも…小さい甥っ子さんと姪っ子さんがいますし…）

スバルがその光景を見てポカンとしたまま念話を発し

その疑問にバレルとエリオが答える。

（ああ…更にあんたらの小さい頃も知ってるわけだしね）

ティアナが思い出したようにエリオとキャロの方を見ながら言いそれを聞いてエリオとキャロは恥ずかしそうに縮こまった。

＊

どうにかヴィヴィオの説得を終え、なのは達は聖王教会へ行く為へリに乗り込んだ。

「ごめんね、お騒がせして…」

「いやゝええもん見せてもらったよ」

謝ってくるなのはに対し、満足そうに笑ってはやてが答える。

それを聞いてなのはは苦笑いを浮かべ、フェイトがクスクスと笑みをこぼす。

「……………」

そんな中ベルクトは全く反応する事無く、黙ったまま窓から外の様子を眺めていた。

（俺の顔……そんなに怖いのか…？）

実はバレルに来るのを断られたのを結構気にしているベルクトであった。

＊＊

そうこうしている間に4人は聖王教会本部に到着する。

「失礼致します。高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官です」

2人はビシッと敬礼をして、凛々しい表情で言う。

「…………ベルクトです、機動六課の皆さんには民間協力者として同行させて貰っています」

これから会う人物はかなりの地位の人間だと聞かされていたのでベルクトもきちっとした挨拶を行う。

「いらっしやい。はじめまして、聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します。どうぞ、こちらへ」

入り口に現れた人物ーカリム・グラシアはにこやかに答え4人を部屋へと案内する。

♪

すると、部屋の方から何やら楽器の音が聞こえてくる。
それに疑問を浮かべつつも4人は案内された部屋へと入っていく。

そこにいたのはヴァイオリンを弾くカトルとフルートを吹くトロワ
そしてその二重奏を椅子に座って心地よさげに聞いているクロノで
あった。

ちょうど4人が入ってきたところで演奏が終わり、カトルが顔を上げ
る。

「ああ：皆さん、お久しぶりです」

「カトル：ヴァイオリンなんか弾けたの？」

「ええまあ：嗜む程度にですがね…」

意外そうに聞いてくるフェイトに対して、穏やかな笑みでカトルは

答える。

「トロワもなかなかのもんやなあ…そんな特技あったん？」

「まあな………」

フェイト同様に尋ねてくるはやてに対し、トロワは普段の冷静な口調で答える。

そしてカトルはカリムの方に顔を向ける。

「じゃあカリム…皆さんお揃いのですから僕達はこれで…」

「はい。相変わらず素晴らしい演奏でしたよ。今度また私にも聞かせてね」

カトルに向かってカリムはにこやかにそう言った。

＊

カトルとトロワが部屋からいなくなった後

白い丸テーブルの前の椅子、クロノの右隣にカリムが座り、その更に隣にはやてが座った。

「失礼します」

なのはがお辞儀をしてからクロノの左隣の席に着く。

「クロノ提督…少しお久しぶりです」

「ああ…フェイト執務官」

なのはの隣でフェイトがそう言いながら敬礼する。それに対しクロノは固い表情を崩さずに答える。

ベルクトは無言で一礼した後自分の席へと座る。

「うふふ…皆さんそんなに固くならないで。私達は個人的にも友人ですから…」

それにベルクトさんも、話はプリベンターの皆さんからよく聞いてますから

普段どおりで平気ですよ」

3人のお堅い態度を見てカリムがクスリと笑いながら言う。

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで」

「平気や♪」

カリムの一言でクロノは温和な表情になる。

はやては元からにこやかな感じだ。

「じゃあ…クロノ君久しぶり」

カリム達の言葉を聞いて、なのはも表情や態度が砕けた感じになる。

「お兄ちゃん、元気だった？」

「っ…それはよせ、お互いもういい歳だぞ？」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ、クロノ」

可愛らしい笑顔で兄と呼んでくるフェイトに対してクロノはたじろぐそんなやり取りを他の者達はクスクス笑いながら見ていた。

「…君も、こうやって会うのは本当に久しぶりだなベルクト」

「ああ…そうだな…」

次いでクロノはベルクトに挨拶し、手を差し伸べる。

ベルクトも笑みを浮かべた表情でその手を握る。

「……………」

が、どうも握る力が妙に強く感じ、ベルクトはクロノの顔をよく見る。

よく見るとクロノは穏やかな笑みを浮かべているように見えて、目が全然笑ってなかった。

(……今度フェイトを泣かせたら……覚悟しておけ……)
いきなりドスの効いたクロノの念話が聞こえてくる。それを聞いてベルクトは納得する。

(ああ……わかつている……二度とフェイトにあんな想いはさせん……)
不本意とは言え9年間フェイトを待たせてしまった事を指しているのだと気づき

ベルクトは念話を返す。それを聞いてクロノは手を離れた。

「……さて、昨日の動きについてのまとめと、機動六課設立の裏表について、それから……今後の話や」

しばらくした後、はやては真剣な表情になって本題提議に入る。

6人のいる部屋のカーテンが閉じ、暗闇に包まれる。

そしてクロノ達は話し始める。

六課設立の表向き理由はロストログア『レリック』の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例
後見人にクロノ、カリム、リンディ、加えて非公式だが伝説の三提督が関わっている事

「その理由は私の能力と関係があります…」

そこまで言った後カリムが席を立ち、手に持った紙の束の紐を解く。

「私の能力、プロフィール・シュリフテン…」

紙が光を放ち始め、一枚一枚がカリムを取り囲むように浮き上がる。

カリムは説明を続ける。

2つの月の魔力が上手く揃わないと使えないため、ページ作成は年に一度しか出来ない事

その中身も難解な文章である古代ベルカ語であり、世界に起こる事件を

ランダムに書き写すだけなので、的中率や実用性はよく当たる占い程度である事

ただ、信用するかどうかは別として、有職者の予測情報の1つとしてそれなりに目が通される事

地上部隊は実質トップのレジアス中將がこの手の希少技能を嫌っている為、あまり信用してない事

「そんな騎士カリムの予言能力に：数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている」

クロノ言葉の後、カリムが紙を一枚手に取り、それを読み上げる。

旧い結晶と3つの欲望が交わりし地、死せる王の血を糧に

聖地より彼の翼を象りし黒き舟が舞い降りる

異界の地の使者が集い、欲望の下生み出された

金色の破壊神と鉄の傀儡達くろがねが踊り

中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ちる

それを先駆けに快楽を求めし黒き魔王が鍵となり

狂気の扉は開かれ、数多の大地と海は

それを守る法の船と共に破滅の道を辿る

「それって…」

「まさか…」

予言を聞き終えて、なのはとフェイトは驚きを浮かべて声を出す。ベルクトも黙り込んでいたが、表情が若干強張っている。

「ロストログアを切欠に始まる管理局地上本部の壊滅……
そして、たくさんの次元世界の崩壊を巻き込んだ、管理局システムの崩壊……」

極めて真剣な表情でカリムが予言から読み取れる未来を正確に話す。

カリムが予言の紙をしまい、席に戻った後はやてが口を開く。

「……実のところを言うと、アムロさんみたいな人達が現れるのも……
確信してたわけやないけど……タックやベルクトさんが戻ってくるのも……」

私は数年前から予想してた……」

「……異界の地の使者が集い……という部分でだな？」

ベルクトの言葉に、真剣な表情のままはやてが頷いて答える。

「そして何より気になるのは……3つの欲望っていう部分や……」

「これ……前にあの男が言っていたのと同じ……」

ハッと気づいた様にフェイトが言う。

『退屈を紛らわす為に生きる……3つの欲望達の使者』

『予言の下始まる大騒乱……』

B Bが以前去り際にフェイトに言った言葉は、カリムの予言と重なる部分が多かった。

「もし…その男が言っていた予言の下の大騒乱というのが…この予言の地上本部壊滅と管理局システムの崩壊を指しているというのなら…」

「それを引き起こすのは…例のスカリエッティの一味だと？」

「そうや…旧き結晶…3つの欲望…偶然の一言で済ませられない部分が多すぎる」

「あの人…3つの欲望の使者って言ってたもんね…」

クロノの言葉をベルクトが次いで、それに対してはやてが答えてなのはが付け加える。

その後、カリムやクロノがこの予言に関して更に詳しい話をする。

情報源が不確定という事もあり、管理局崩壊というのがそもそも有り得ない話である事

一応本局では警護強化をしているものの、本局や教会とは仲の悪い地上本部は

今回のこの予言を全くアテにしておらず、特別な対策は採っていない事

ただでさえ地上本部の武力や発言力の強さは問題視されており、表立っての手回しが行えない事

「裏技気味でも地上で自由に動ける部隊が必要やった…レリック事件だけでコトが済めば良し、

予言の通りに、ベルクトさん達の世界の人間が現れるようやったら…
その人達を引き込み…可能ならば六課に協力してもらう…

ほんで…大きな事態に繋がっていく様やったら最前線で事態の推移
を見守っていく…

それが。機動六課という組織が設立された本当の意義や」

はやてが真剣な表情で核心部分を話した。

それを聞いた後、カリムが立ち上がる。

「改めて、聖王教会教会騎士団騎士、カリム・グラシアがお願い
いたします…

華々しくもなく…危険も伴う任務ですが…協力をしていただけます
か？」

カリムはそう言って頭を下げる、それを聞いてなのは、フェイト、
ベルクトの3人がそれぞれ答える。

「非才の身ですが、全力にて…」

「承ります…」

「了解した…俺達がこの場に連れ込まれた原因も関わっているとい
うなら…」

この任務、俺も全力で協力させてもらう…」

*

夜も遅い時間

教会での用事が済んだ後、ベルクトはフェイトと別れた後六課隊舎の自室のベッドで寝っころがっていた。

（黒き魔王：金色の悪魔：鉄の傀儡：）

そして今日の予言についての事を詳しく考えていた。

どういうわけかベルクトは、自分でもよくわからないが

予言の正確に意識されていない部分について引っかかる物があった。

505

（鉄の傀儡：これは報告のあったサーペントやグランチャーの事だろうか：）

そして快楽を求めし黒き魔王か：）

ベルクトは黒き魔王の部分が、もしかしたらあのBBという男なのではないかと考える。

しかし、その場合他の予言の部分をどう解釈すればいいのか？

（いくらE2を用いているとはいえ：それだけで次元世界を破壊出来るとは思えん：）

となると…黒き舟や金色の悪魔…それに狂気の扉というのが関わってくるのか…?)

こんな感じでベルクトは、夜の間、ひたすら予言の事について考えるのであった。

＊

同じ頃はやては部隊長のデスクに座り、電気もつけずに机の上に自分のアルバムを開き、その中の写真を眺めていた。そして、ある一枚の写真に目が止まる。

(グレアムおじさん…ディールおじさん…)

そこに写っているのは温和な笑みを浮かべている老人と分厚いコートに身を包み、メガネをかけている壮年の男性—ギル・グレアムとフィードル…いや、ディール・クルーシブルであ

る。

（私の命はグレアムおじさんが育ててくれて…途中からデイルおじさんも支えてくれて…

家の子達や…タックやマリナが守ってくれて…なのはちゃん達に救ってもらって…

初代リインフォースが…残してくれた命や…）

はやてはアルバムをしまって立ち上がり、背後の窓に映る夜の景色を眺める。

（あんな悲しみとか後悔なんて…この世界の…いや、どんな世界の誰にもあつたらアカン…）

そして右手に持っていた初代リインフォースの形見のペンダントを握り締め

真剣な表情を浮かべて決意を新たにするのであった。

（私の命は…その為に使うんや…!）

第15話（後書き）

GGLの描写がちよつと都合主義臭かったかなと反省気味…

いちゃつくシーンは結構ノリノリでしたが（笑）

この6人今後日常的なパートでも

なのは側キャラと上手く絡ませられるといいんだけど…

（ティアナとゲイナーなんか特に）

予言の中身が大幅に変わっておりますが

これは本小説の今後を示す予言でもあります。

後半はかなりの変更点とカオスが巻き起こる予定ですので…

（そこまで辿り着く前に燃え尽きなきやいいんだが…）

どうでもいいですが、フェイトとフェイを同時に書くと
微妙に混乱してくる…

それではまた

第16話（前書き）

クロノと対面するアコースと＋α
そして：ヴィヴィオの保護者立場となったのは…

第16話

機動六課部隊長オフィス

朝の早い時間帯にはやてがデスクに座り、その側にタックとマリナが立っていた。

「そうか：六課設立の裏にはそういう理由があったんだな」

「何とも荒唐無稽な話だけど：私達がここにいる事も考えれば信じざるをえないのかしらね：」

タックもマリナも真剣な表情を浮かべている。

昨日、聖王教会で話された例の予言についてはやてから話を聞かされていた。

「うん：けど何より重要なのは：敵が予言について知ってるって事なんや：」

「予言の下始まる大騒乱か：あの男は何を知っているんだろうな：」
デスクに両腕を置き、2人と同様に真剣な表情のはやての言葉を聞いて

タックは顎に手を置いて考え込む仕草を見せる。

「この事：私達以外には？」

「バレルさんとフェイさんにはベルクトさんから伝わってる：

前線メンバーには地上本部が襲われる可能性があるって事だけ伝え
てある」

マリナの質問にはやてがこう答える。

「まあ戦力は十分：情報もプリベンターの協力もあってかなり整ってるからな」

「けど油断は禁物：敵の戦力が計り知れない以上、いつ何がおきても対処できるよう

しっかり準備をしておかないとね」

「うん、流石タックとマリナや！よくわかつとる！」

タックとマリナの言葉に、はやてが感心したように笑顔を浮かべる。

そんなはやてを見て2人も笑顔になる。

「じゃあ俺達はこれで…」

一通り話も聞き終えたので、タツクとマリナは部隊長オフィスを後にする。

「…………あのな！」

が、部屋から出る寸前ではやてがデスクから立ち上がって2人の下に駆け寄り

何やら落ち着かない不安げな表情で2人に訴えかける。

「私にとって2人は命の恩人で…大切な家族や！9年前いなくなつた時も

すっごく寂しかった…六課がどんな展開と結末になるかはわかれへんけど…

でも、2人には本当は…」

すると、はやてが言葉を言い切る前に、タツクが彼女の肩をポンと叩く。

「今更になってそんな事言うなよ？俺もマリナも、お前やヴィータ達お前の家族が本当に好きだから、ここで協力してるんだぞ？」

別にはやてが気負う事なんて無いぞ？」

笑顔で優しくタツクは語りかける。すると、マリナもはやての肩に手を置き優しく語り掛ける。

「それに10年前、はやてに会えたからこそ私達はこうしていられる…

あなたが私やタツクを受け入れくれなかったら、今頃私達はここにいない…

だからその恩を返す為にも、今度は私達ではやての夢をサポートしないよね」

2人の言葉を聞いて、はやては苦笑を浮かべる。

「アカンなあ…それやったら恩とサポートの永久機関や」

「仲間ってというのは…家族ってというのはそういうものだと思わ…

自分の命を懸けてでも守り抜く：助けていくというくらいの意気込みでね：」

マリナはそう言ってチラリとタツクの方に視線を向ける。

「お前も部隊長って立場上色々辛い事はあると思う：けどな

決して1人で抱え込むなよ？俺達に言ってくれれば最大限のサポートをする

勿論、俺もマリナもお前の事を長く助けていく必要があるから：無茶やらかして死ぬつもりはない。

だから大丈夫だ。気を使わずにどんどん命令してくれよな？俺達は大切な仲間：そして家族だろ？」

胸を張って強気な感じでタツクははやてにこう言う。

「……………うん！！」

2人の心遣いに感動し、はやては涙を浮かべつつも笑顔で頷いた。

＊

早朝訓練、廃墟のビル街を模した空間シュミレーターでスバルとテ

イアナが模擬線を行っている。

「クロスファイヤー：シュート！！」

ティアナが多数の魔力弾を放つ。その先にいるのは：

「クツ：フォトンマット！！」

ゲイナーであった。

ゲイナーは右手を前に出しリング型の防御壁、フォトンマットを張ってティアナの弾幕を防ぐ。

直後、ゲイナーの背後からウイングロードが伸びてくる。

「うおりゃあああ！！！！」

そして間髪置かずにスバルがリボルバーナックルを振り上げて突撃してきた。

「なっ…！！」

ゲイナーは一瞬慌てるも

「キングゲイナー！！」

自身のデバイスーキングゲイナーの特殊能力、オーバースキル…加速を発動。

瞬時に上空へと飛び上がり、スバルの攻撃を防ぐ。

「嘘！？ってうわわわわ！！」

あの距離で避けられるとは予想していなかったのでスバルの拳は見事に空を切り、そうした体制が前のめりになってしまふ。

そして次の瞬間、ゲイナーはスバルの背後に現れ、手持ちの銃剣チエーンガンで

スバルに対して思い切り打撃を加える。

「きゃあああ！！！！」

攻撃をまともに喰らったスバルは悲鳴を上げながら落下していく。

「スバル！んもうっ！！」

ティアナは撃墜されたスバルに一瞬視線を向けるも

瞬時に頭を切り替え、クロスミラーシュを上空のゲイナーに向ける。だが、ゲイナーフワリフワリと不規則な軌道の飛行を繰り返しており

なかなか照準が定まらない。

すると、突然ゲイナーが猛スピードでティアナに向かって突っ込んでくる。

「うわっ！」

ティアナは慌てつつも、横に飛び退いてそれをかわした。

＊

「うわあ…すっごいや…」

その様子を離れた位置でレントン、ガロード、サラ、エウレカの4人が見ていた。

「あのティアナって娘…妙に気合入ってるけど何かあったのかな？」

「さあ…？俺にはわかんねーや」

モニターを指差しながらレントンは尋ねるが

ガロードはサッパリという感じに両手を広げて答える。

「でもまあ、ゲイナーはあんまり体を動かす方じゃないからね…ちよーどいいんじゃないかしら？」

「この2人も凄いいね…2対1とはいえゲイナーのスピードについていけない」

「そりゃあ魔法っていう枠組みの戦いは向こうの方が上なんだから当然じゃないの？」

サラとエウレカが女同士の会話を行う。

「そういえば…レントンはこれに参加しないの？」

「いやあ…俺の能力って特殊すぎるし…あんまり参考にはならないかと…」

「そうよねえ…ボードに乗って飛行する魔導師なんて他にいるのかしら？」

エウレカの質問に対し、レントンは苦笑しながら答え、サラが付け加える。

「でも…デバイスになってもニルヴァーシュはニルヴァーシュだよ…レントンと一緒に戦ってる時凄く嬉しそうだもん…」

「うん、俺もニルヴァーシュの声はよく聞こえる…でも」

本当は前みたいのエウレカと一緒に戦えたら良かったんだけどね」
朗らかな笑みを浮かべながら、2人はそんな風に会話する。

とその時、ティファがその場に現れる。

「あれティファ？どうしたんだよ一体？」

急に現れたティファに疑問を浮かべ、ガロードが首を傾げる。

すると、ティファを顔を赤らめつつも笑みを浮かべながら静かに呟く。

「えっと…ガロードと…その…一緒にいたかったから…」

「…ハハッ！」

ティファのその一言で全てを察したガロードは

朗らかな笑みを浮かべて彼女の肩を掴んで自分の側に引き寄せる。

ティファはされるがままに、満足そうな笑みを浮かべていた。

「ティファも相変わらずだね…」

「好きな人と一緒にいられるっていうのは…何よりも幸せなんだよ

レントン？」

「う、うん…」

ティファに触発されたのか、エウレカもレントンの側に近寄る。レントンは少し恥ずかしがりながらもエウレカとピッタリくっついた。

「はあ…ゲイナーにも普段からこれくらい積極性があつたらなあ…」
唯一今、この場に相手がいないサラは、ガロードとレントンの様子を見て

ゲイナーと対比してそしてため息を1つ吐いた。

「かぁーっ！…！！…羨ましいねえ…若いってのは……」

そんな5人の様子を物陰から覗いていたヴァイスは

微笑ましさやら嫉妬やらが入り混じった複雑な感情を浮かべていた。

＊

早朝訓練も無事に終了し、各々方はそれぞれの場所へと移動していく。

「ヴィヴィオーー!!」

隊舎の近くの道で、フェイトと一緒に歩いているヴィヴィオを見つけ

なのは手を振りながら彼女の方に駆け寄っていく。

なのはのすがたを確認したヴィヴィオも嬉しそうになのはの方へと駆けていく。

「おはようヴィヴィオ、ちゃんと起きられた?」

「うん!」

なのはの手を握りながら、ヴィヴィオは元気よく答える。

「おはようフェイトちゃん」

「おはようなのは」

次いでなのはは顔を上げ、フェイトにも挨拶をした。

「おはようさーん!!」

するとその場に、ガロードとティファが現れる。

「あっ…えっと確かガロード君にティファちゃんだっけ?」

「ははっ…君付けされるのなんて何年ぶりだろ?」

なのはがガロード達の方を見てそう言い

ガロードは君付けされる事に擦ったさを感じて苦笑いする。
ティファは微笑を浮かべたままペコリとお辞儀をする。

「2人ともいつも一緒にいるけど…随分仲がいいんだね？」

「おう！何てたってティファは誰よりも大切な人ってやつだからな
！」

「はい…私にとって…ガロードは全てですから…」

ガロードが自信満々にエヘンと答え、ティファも微笑を浮かべたまま静かに答える。

そのあまりにも真正直な発言になのはとフェイトは遂顔を赤らめてしまう。

「へ、へー…2人とも本当に親密なんだね？」

「そういうアンタの方こそ、今じゃベルクトの奴と結構よろしくやってるんだろ？」

「ええっ！！？そんな…私なんてまだ…／／／」

急に来たガロードのカウンターをまともに喰らってしまい
フェイトは顔を真っ赤にして縮こまってしまう。

（普段あんなに人目を憚らずに相思相愛なのに…）

そんなフェイトを見て、なのはは内心でこう呟く。

そんな皆の様子をポカンとした感じにヴィヴィオは眺めている。

「ヴィヴィオ、こちらの人達にもちゃんと挨拶して」

なのはにそう言われて、ヴィヴィオはペコリと頭を下げる。

ガロードは親しげに「おう」と手を上げて答えた。

が、どういわけかティファは全く反応を示さない。

「ティファ？どうかした？」

そんな彼女の様子に真っ先に気づいたガロードが尋ねる。

「あっ！……ううん……ちよつと…ボーツとしてたから……」
ハッとしたようにティファは慌ててそう言った。

(……………さっきの娘……………)

なのは達と別れた後、ティファはヴィヴィオから感じた違和感について考え込んでいた。

＊

管理局本局、新造艦クラウディア内部

その廊下をクロノと緑髪の好青年一本局査察官ヴェロッサ・アコースが並んで歩き

そのアコースの後ろについていくようにしてチャールズとレイが歩いていた。

「はやてが来るまではまだ少し時間があるな…」

「お前さんの言ってた超エリート部隊長さんかい？会うのが楽しみだねえ」

クロノの言葉に、後ろを歩くチャールズが親しげに答える。

「ああそうだ…ケーキ食べるかい？レイさん特製だよ？」

隣を歩いていたアコースが、右手からケーキの箱を現出させる。

「だから…僕は甘い物は苦手だと言うのに…」

「心配しないで、甘さ控えめにしておいたから♪」

困ったように言うクロノに、レイがにこやかにそう答える。

「…まあ、せっかくだから頂くか」

そう言ってクロノは部屋に入り、アコース達もそれに続く。

クロノがソファに座り、彼に向かい合うようにして

アコース、チャールズ、レイが反対側に座る。

「しかし…君の依頼通りビームスさん達と一緒に内密で地上本部の
中身…」

ゲイズ中将周りを調べてみたけど…何と言うか本当に面白いくらい
豪腕な人だよね…」

ティーカップを片手に、モニターに映るレジアスの写真を見ながら
アコースがそう言う。

「優秀な奴ではあるが……叩けば埃が出るわ出るわなんだなコレが

…」

チャールズが右手を広げ、呆れた感じにそう言う。

「だが黒い噂が絶えないとはいえ…彼が地上の正義の守護者であるの事実だ…」

「企業や政界からの支援も山ほど…最高評議会っていうののバックもついでる…」

そりゃあまあ確かに…あなたみたいな本局の要人が動くのは難しいわね」

真剣な表情でクロノとレイが言う。

「迂闊な介入が出来ないからこそ…君達みたいな人材に頼むしかない…」

申し訳ないとは思ってるんだが…」

「はっ気にしなくていいよ、査察官って立場は秘密行動に向いてるしさ」

「言いつこ無しだぜそういうのは？食べてく為には危険な橋も渡るさ」

「私達のフリーランス魔導師としての生活が安定してるのも…」

クロノ、あなたが依頼を多くまわしてくれるおかげだもの」

すまなさそうに頭を下げるクロノに対し、3人は全く気にしてないという風に答える。

（……それに、あの6人に関する根回しもしてくれたしな）

（ああ…はやての頼みだったしな…でもあの時は驚いたよ…

まさか噂のGGLを君達がかくまっていたなんて……）

その後、チャールズとクロノは念話でアコースに聞こえないようにこうやり取りした。

＊

上空を飛ぶヘリコプター内、そこに現場調査に出向くライトニング隊と

それに同行するベルクトがいた。

「テロ行爲って…地上本部にですか？」

「そういう可能性があるという話だ…」

キャロに対して腕を組みながらベルクトがこう答える。

昨日聞いた予言をある程度ぼかしてエリオとキャロに話していたのだ。

「でも確かに…管理局本部の魔法防御は鉄壁ですけど…ガジェットを使えば…」

「そう…管理局法では質量兵器保有は禁止だからね…対処しづらい…」

固い表情で言うエリオの言葉にフェイトが付け加える。

「質量兵器…？」

「大雑把に言えば…魔力を使わない物理兵器…でいいのかな？」

首を傾げるキャロに対して少し自信なさげにフェイトが答える。

その後質量兵器について詳しく解説し始める。

「質量物質を飛ばしてぶつけたり爆発させたり…先史時代の古代ベ

ルカやミッドは

そういう兵器がほとんどだったの…」

「聞いたことあります…一度作ってしまったら子供でも使えるとか…指先1つで都市や世界を滅ぼしたりとか…」

「そう…管理局は創設以来…平和の為、安全の為にそういう武装を根絶して

ロストログアの使用も規制し始めたんだ」

すると、その解説を聞いてベルクトがフツと笑みを浮かべてこう言う。

「フツ…その理屈で行けば…俺のいた世界は凄まじく野蛮で物騒な世界だったというわけか？」

「い、いや！…悪魔で管理世界での話であってベルクトの世界の事を言ったわけじゃ…」

フェイトが慌ててそう弁明するが、ベルクトはそんな彼女の様子を見てクスクスと笑う。

「別にいい…どの道俺の世界が荒れてたのは事実だからな…」

だが…兵器というのも安全だ防衛だのという名目で作られて時には抑止力になるわけだ…質量兵器を捨てたお前らの世界はどうやって代案を取ったのだろうか？」

笑みを浮かべながらエリオとキャロの方を見てこんな事を言う。

しばらく顎に指を当てて考えた後、エリオが答えた。

「比較的クリーンで安全な力として魔法文化が推奨された…」

「正解。魔法の力を有効に使って、管理局システムは今の形で各世界の管理を始めた

各世界が浮かぶ海、次元空間に本局、発祥の地ミッドチルダに地上本部を置いて…」

「あっ！それが新暦の始まり75年前！」

フェイトの解説の途中でキャロがハツとしたように声を出してこう言う。

「まあ、歴史の話はこれくらいにしておいて…ガジェットが出てく

るようなら

レリック事件以外にも、六課が出動になるからねって事…しつかりやろうね」

「はい!!」

フェイトの言葉にエリオとキャロは力強く頷いて答えた。

やがてエリオとキャロが2人で会話をはじめ、そんな中でフェイトはどこか浮かない表情を浮かべる。

(…何か気がかりなのか?)

そんなフェイトの様子を見てベルクトが念話で尋ねてくる。

(うん…本当はエリオとキャロにはもっと平和で安全な道に進んでほしかったんだけど…)

(…あの2人が自分で考え自分で決めた道だ…今更そんな事は言うまい…)

念話で2人はやり取りを続ける。

(予言の事と言い…俺達の世界の人間や兵器といい…事態はもう引き返せないところまで来ているんだからな…)

(うん…地上と次元^{うみ}の平和や…たくさんの次元世界の平和…)

エリオやキャロも含めた部隊の皆の安全と将来…はやての立場やなのはの飛ぶ空…全部守るのは大変だけど…)

そこまで聞いてベルクトはため息を1つ吐いて念話を続ける。

(…フェイト…何もお前1人で抱え込む必要は無い…)

それだけ多くの物…お前1人ではかなりの重荷になるだろう?)

(確かにそうなんだけど…)

フェイトが困惑ぎみに念話を返すが、ベルクトは更にこう言った。

(安心しろ…今は俺が側にいる…お前の守りたい物があるなら

俺はいくらでもその手伝いをしてやる…)

(ベルクト…)

(だから…あまり1人で生き急ぐなよ?…側には大切な仲間がいるのを忘れるな…)

(…うん…ありがとうベルクト…)

フェイトは顔を赤らめる。それを見てベルクトも笑みを浮かべるのであった。

*

お昼休み、寮に戻ってヴィヴィオと一緒に昼食を取る為に

なのは、ユーノは寮へと向かい、それにスバルが同行していた。

「そう言えばヴィヴィオって…この先どうなるんでしょうか?」

「受け入れてくれる家庭があればそれがベストなんだけどね…やっぱり難しいものもあるよ…」

スバルの質問に、少し表情を暗くしながらユーノが答える。

「ですよね…やっぱり普通と違うから…」

そう言ってスバルも少し俯く。

しばらく歩いた後、なのはが口を開く。

「だから当面は私とユーノ君で面倒見ればいいのかなんて：エリオやキャロのフェイト隊長みたいな、保護責任者って形にしようと思って」

「それで僕が、後見人って感じかな？」

なのはとユーノがそう言い、それを聞いてスバルは表情を明るくして右拳を胸の前でグッと握る。

「いいですね！ヴィヴィオ喜びますよ！」

「うーん…喜ぶかなあ…」

スバルの言葉になのはは少し困ったように返答していた。

＊

「ほえ……………」

ヴィヴィオの自室、なのはに抱きつきながらヴィヴィオはポカンとした表情を浮かべる。

「ほら、やっぱりよくわかってないみたいだよ？」

「えーと…何て言えばわかるのかなあ…」

側にいたユーノの言葉を聞いて、スバル髪を掻きながら考え込む。すると、今までヴィヴィオの面倒を見ていたフェイが

ヴィヴィオに笑顔に向けて指を立てて唐突にこう言った。

「つまり…しばらくなのはさんがヴィヴィオのママで…

ユーノ君がヴィヴィオのパパって事ね♪」

「お、おい…ちよつとフェイ…」

急にそんな事を言われてユーノは慌てる。

「ママ…：パパ…：？」

ヴィヴィオは汚れの無い無垢な瞳でなのはとユーノを見上げて呟く。

「ああ…まあ…うん、そうだね。僕がヴィヴィオのパパって事」

ユーノは多少悩みつつも、ヴィヴィオの前に屈みこんでこう言った。

「うん…ヴィヴィオの本当のパパとママが見つかるまで

なのはさんとユーノさんがパパとママの代わり…ヴィヴィオはそれ

でもいい？」

なのははさして慌てた様子も無く、優しい表情でヴィヴィオを見つ

めながら屈みこんでそう言う。

それを聞いてヴィヴィオはなのはとユーノを交互見ながら言った。

「なのはママと…ユーノパパ？」

そう言っってヴィヴィオが首を傾げる。なのはとユーノはそれに笑顔

で答える。

それを見てヴィヴィオもぱあっと明るい笑みを浮かべる。

スバルやフェイはそれを微笑ましい気持ちで見つめていた。

その日の夜、食堂にて

「それにしても…なのはさんがママでユーノさんがパパって…」

「ヴィヴィオ…かなり無敵な感じ…」

食事をしながらエリオとキャロがそんな事を言う。

「それを言ったら君たちもフェイトの被保護者でなのはの教え子だろうか？」

同じ席でそれを聞いていたバレルが朗らかに笑いながらそう言う。

「えっと…それはそうなんですけど…」

少し困ったようにエリオが返答する。

「そういえば…2人にとってはフェイトさんはお母さん？それともお姉さんの存在？」

両腕をテーブルに置いて、フェイがにこやかにそんな事を尋ねる。

「私は…優しいお姉さんですね」

「僕はどっちだろ…難しいかも…」

キャロはすぐにキツパリと答えるが、エリオは考え込む。

「フェイトさんはエリオ君が子供なのと弟なのとどっちが嬉しいのかな…？」

明日聞いてみよっか！」

「ぶっ…！キャロ、それはやめて！」

キャロが突然そんな事を言い、エリオ思わず食べてたサラダを噴出しそうになってしまった。

そんな様子を見てバレルとフェイはおかしくて笑みを浮かべる。

「……………」

が、そんな中もう1人の同席者―ベルクトは黙り込んだまま明後日の方を向いていた。

（ベルクト……どうかしたのか？）

それに気づいたバレルが念話を送るが返答は返ってこない。
だが直後バレルがハツとしたように気づく。

（そうか…ベルクトには家族ってのが…）

父は自分を実験道具扱い、母は顔も名前も知らない…

そんなベルクトにとって家族云々の話は参加しづらいのだろうとバレルは察する。

（父親か……）

そんな中、バレルも黙り込み、ある人物の事について考える。

ジル・バルドナ……………

昔からオーランドという姓を名乗っていたし、両親から自分が養子だというのも知らされていた。だが、今更になって自分の実父がどのような人物だったかが気になってくる。

フェイの話ではベルクトの真意に気づいた彼女をかくまってくれた研究者で

自分を保護させるためにフェイにイクスブラウを託した

バルドナ・ドライブの開発者…という情報と

バルドナ・ドライブで新たな世界を形作ってしまった事に負い目を感じ

もう1つの世界でもバルドナ・ドライブを作って元の世界に帰還しその上で2つの世界との繋がりを完全に絶とうとしていたと聞いた。

しかし、真ドラゴンに乗っていた時のベルクトの話によれば

自分達は枝分かれた世界を繋ぐ扉を開くための鍵であり

ベルクトはバルドナ博士にとってはバルドナ・ドライブ使用の為の道具でしかなく

たまたま生まれたバレルではない何かであったという

そしてバルドナ博士がバルドナ・ドライブを作った真の理由は

自分自身に会う為だと言っていたという

それに絶望したベルクトは実の父親を殺害し、自分と世界に憎しみを向けた…

バレル自身、顔も名前も知らぬ人物ではあるし

ベルクトが自らの手で殺害したと言っても、それについて言及する

つもりはない。

しかし…フェイとベルクトの情報では…思い浮かぶ人物像に差が生じる。

果たして…ジル・バルドナという人物の本質は…

「バレル？」

「……！ああっ、どうしたのフェイ？」

急に声をかけられ、バレルは思考を一旦中断してフェイに答える。

「食事の手が止まってたみたいだし…浮かない顔してたから…」

「ああ気にしないで…ちょっと考え事…」

心配そうに尋ねるフェイに対して、バレルは笑顔で答えて食事を再開する。

ベルクトも、いつの間にやら笑顔でエリオとキャロと一緒に楽しげに会話をしていた。

（そうだな……今更考えても仕方ない…今は目の前の事に集中しよう）

バレルは心内でこう呟くのであった。

第16話（後書き）

嵐の前の静けさって感じてでしょうかね。
特に目立った動きは無し

チャールズとレイを今後どうするか考えた結果、アコースサイドに
まあ、この2人は裏方専門の予定なので
あんまり目立った活躍は期待しない方向で：

そしてヴィヴィオ

なのはがママとくりやあ必然的にユーノがそうなります。
作中パパと呼ぶ人はいなかったなので何か新鮮だ

示唆されるジル・バルドナが存在
一応実父とはいえバレルは全く知りませんからね
果たして：

それではまた

アナザーF（前書き）

他勢力の現状その6

と言っても今回はほとんどスカリエッティアジトの話ですが

※執筆機能の不具合か、携帯の改ページ機能がうまく働かず
最後と一つ前の話がページ分けされてないので
携帯で閲覧している方は注意してください

アナザーF

— Another Side ?

「くそっ！もっかいだ！もっかい戦え！！」

「また…いい加減あきらめてよ…」

スカリエッティのアジト

戦闘テスト用の空間にシンシアとノーヴェエがいた。

「うっせーよ！今度は絶対あたしが勝つんだよ！！」

「アンタ真正面から突っ込んでくるだけじゃん…」

そんなんでクイーンのアタシに勝てるわけないっしょ…」

ギャーギャー騒ぐノーヴェエとは対照的に

シンシアのテンションは物凄く低かった。

今日ノーヴェエの固有武装が完成したので

そのテストの為に本人から名指しでテスト相手を頼まれたのだが

初戦でシンシアが本気でやった為に圧倒してしまい

それでムキになったノーヴェエが何度も再戦を申し込んでくるのだ。

で、シンシアのテンションからわかるように結果はノーヴェエの負け

越し…

いい加減にシンシアは面倒くさい気分になってきていた。

するとその時、テスト空間に眼帯をつけた銀髪の小柄な女性が現れる。

「ノーヴェいい加減にしろ。シンシア嬢もお疲れのようだ」

「チンク姉！」

女性ーチンクは入ってくるなりノーヴェを叱りつける。

「固有武装も完成したばかりだし…何よりお前はシンシア嬢と比べる」と

実戦経験やセンスに大きな差がある。今のお前では勝てん」

「けどチンク姉！」

尚も食い下がるノーヴェを見て、チンクはため息を1つ吐く。

「ふう…今度姉が直々に手ほどきしてやるから、今日はもうやめておけ」

「うっ……わかったよ…」

直接手ほどき、という単語をきいた途端にノーヴェは落ち着きを取り戻す。

チンクはノーヴェの教育係であり。ノーヴェもまた

そんなチンクのおかげでよく懐いていたので、真っ向からなかなか反論出来ないのだ。

ノーヴェが退室した後、チンクはシンシアの方に向き直る。

「すまなかったシンシア嬢、妹が迷惑をかけた」

「べっつに…どうせここいても他にやる事無かったから気にしないで…」

謝ってくるチンクに対して、シンシアは両手を後頭部に置いてぶっきらぼうに答える。

「とうかさあ…最近トーレを見ないけど何してんのさ？」

「トーレ姉は妹のセツテの教育につきっきりらしい…」

「すまないがしばらくはシンシア嬢に付き合う時間は無さそうだ」

「ちえっ…遊んで楽しいのはトーレくらいなのになあ…」

チンクの返答を聞いて、心底不満げな声でシンシアは呟いた。

チンクも退室して、部屋で1人きりになった後、シンシアはため息を1つ吐く。

「はあ…ここもつまんなくなってきたなあ…早く元の世界に帰りたい…」

「ゲイナーやサラは今頃何してるんだろ…」

暗い天井をぼうつと見上げ、シンシアは自分の世界の友人達に思いをはせるのであった。

— Another Side ?

「はあ…はあ…ぜえ…」

スカリエッティのアジト

アネモネは自室のベットの上で仰向けに横たわり荒く呼吸していた。つい先程までポニーテールの男の実験に付き合わされていたので心身共にかなりの疲労が溜まっていたのだ。

「はあ…はあ…あんな物作って…アイツは何しようってのよ…」
息も絶え絶えにアネモネは呟く。そしてベットから体を起こして立ち上がり

テーブルの上に置いてあったロケットと手鏡を手取る。

(……微笑みなんて…こんな状況で浮かべられるわけ…ないじゃない…)

手鏡に映る沈んだ自分の顔を見て、アネモネは心内でそう呟く。
次いでロケットに映る青年の写真に目をやる。

「どうすればいいのよ…どうすればまたあなたに会えるのよ……ううっ…」

そう言うアネモネの目には涙が浮かんでいた。

「アネモネ…入るっスよ」

するとその時部屋の扉が開き、ウェンディがその姿を現す。

「……………」

アネモネは入ってくるなりウェンディを目を吊り上げて睨みつける。

（どうしてこの女は事ある事にアタシに絡んでくるのよ……
こいつはあの変態茶髪メガネの手先でアタシの敵じゃない……
アタシだってこいつを拒絶してるのに……何で……）

アネモネがそんな風に考えてみると、ウェンディは唐突に
アネモネの前に置いてあるテーブルの上のロケットを手に取る。

「うわゝカッコいい男の人ッスねゝ」

「!!!!!!」

ロケットをまじまじと見ながらウェンディはそんな事を呟く。

そんな彼女に対してアネモネは反射的に手が伸び

ロケットを強引にひったくる。

「勝手に触らないでよこの馬鹿!!!!」

ロケットを握り締め、表情を更に歪ませてアネモネは怒鳴る。

そんな彼女の剣幕を見てウェンディは気まずそうな表情を浮かべる。

「……ご、ごめんっスアネモネ……」

流石にマズかったかと感じウェンディは素直に謝る。そして更にこ
う尋ねた。

「けど……何もそんなに怒らなくても……何か特別な人なんスかその人
?」

「……………」

しばらくの間アネモネは黙っていたが、やがてポツリポツリと答え
始める。

「……………そうよ、この人はアタシにとって誰よりも大切な人……

彼はアタシを本当に愛してくれたし……アタシも彼を愛している……

それが……こんな状況になって出会うことすら叶わない……」

アネモネの話をウェンディはポカンとした表情で聞いている。

そしてアネモネはウェンディの方に顔を向けこう言う。

「アンタらにはわかんないでしょうね……あの紫マッドのいいなりに

なって

人形みたいに動くしか出来ないアンタ：アタシの気持ちなんて：」

言っていてアネモネは自分でも何を言っているのだろうと感じていた。

目の前にいるこの少女は自分にとっては厄介者でしかない：

特別な思い入れなど何も無いのだ

そんな赤の他人に自分の彼の事をこうもべらべら喋るなんておかしい：

何故自分はこんな話をしているのだろう：とこんな事を感じていた。

ウェンディは右頬を指で掻きながら悩んだ感じの表情を浮かべていたが、やがてこう言った。

「うーん：確かに難しい事はわかんないっすけど：

アネモネもその男の人もまだ生きてるならその内会えるんじゃないっすか？」

「……はっ：？」

想像していなかった答えを聞いてアネモネはポカンとなる。ウェンディは続ける。

「だってそうじゃないっすか？死んだらおしまいっすけど生きてればいくらでもチャンスがある

アネモネもその男の人もお互いをスッゴイ大切に思ってるならお互いスッゴイ会いたがってるって事じゃないっすか？

だから：心配しなくてもその内また会えると私は思うっすけど」

そう言っつてウェンディは純粹な笑みを浮かべる。

そんなウェンディに対して、アネモネの心は複雑に揺れ動いていた。

「……………ありがと：」

「えっ？なんスかアネモネ？」

小声で聞き取れなかったのでウエンディは尋ねなおす。

すると、アネモネはハツとしたように顔を上げそして怒鳴った。

「ッ…！いいからさっさと出てきなさいよ！！出てけ！！」

「ああ…わかったっス…」

またしても怒りだしたアネモネを見てウエンディは苦笑いを浮かべながら退室していった。

「……どうしたっていうのよアタシ……あんな奴なんかただの……！！」

1人残ったアネモネは、いつだかにあった言いような無い苛立ちをまた感じ

椅子に座り込んで頭を抱えるのであった。

— Another Side ?

スカリエッティのアジト

医務室のような部屋でポニーテールの男とセデイスが椅子に座って対面していた。

ポニーテールの男はセデイスの体中に巻かれた包帯を剥がしている。

「…うん、定着は済んだみたいです」

そして包帯を全部剥がし終えた後、ポニーテールの男がこう呟く。

それを聞いてセデイスはぱあっと明るい笑みを浮かべて立ち上がる。

「それじゃ私、もう全力で戦ってもいいってこと!？」

「ええ…そういう事ですよ…」

「やったー!!!」

セデイスは嬉しさのあまりピョンピョン飛び跳ねる。

「嬉しいのはわかりますが…少し落ち着いたらどうですセデイス？」

「嬉しすぎるに決まってるじゃない!これでまたパパの役に立てるんだもん!」

苦笑を浮かべながら言うポニーテールの男にもお構い無しに

セデイスは飛び跳ね続ける。

やがて彼女の興奮が収まった後、ポニーテールの男が更に言った。

「まあ…その気持ちは今度の大々的な作戦までとっておいてください…」

あなたは私が作り上げた子供の中で最初のご成功体…

やってもらうことがたくさんありますからね…オリジナルの排除も含めて…」

「もちろん!パパが言えば私は何でもするよ!?オリジナルだってすぐに

ぶっ潰してあげるよ」

今度は甘ったるいどこかネットリした口調で言いながらセデイスは体をクネクネさせる。

そんな彼女にポニーテールの男は近づきこう呟く。

「流石ですセデイス…BBより素直で大変よろしい…」

「だってビーちゃんの方が力は上だけど…パパへの愛は私のが強いもん」

常人が聞けばイラっとするようなセデイスの言い方にも

ポニーテールの男は笑って応えるのであった。

ルンルン気分でセデイスは医務室を後にする。

「おや：ちようどいいところに：」

「アルさん？」

すると部屋を出てすぐに、スキンヘッドの男ーライネンと鉢合わせになる。

ライネンはセデイスの姿を見つけると、彼女に近づいてくる。

「包帯が取れたのかね？」

「うん！おかげさまで！これでまたばりばり働けますよー」

「それはよろしい：ちようどハルバートの調整も済んだところでね：君にお渡ししようと思ってたところだよ」

そう言ってライネンは白衣の懷から黄色い六角形のオブジェを取り出す。

「ナイスタイミングだねアルさーん！」

「それはどうも：では私はまだ仕事があるからこれで：」

オブジェを手渡した後、ライネンは足早にその場を離れていった。

（準備万端！！楽しみだなく今度の公開陳述会：パパの為にとびきりハッスルしちゃうんだから！）

六角形のオブジェを見つめながら、セデイスは心底楽しそうな笑みを浮かべて

心内でそう呟くのであった。

— Another Side ?

スカリエッツィのアジト

その一画でウーノが改良の終わった自身の体の動きをチェックしている。

「あゝんウーノ姉さま、お素敵です」

「どうですかウーノ姉さん？新しいボディの方は？」

「いいに決まってるわ：妹達の動作データが生きてるもの：」

クアットロが頬に手を当ててクネクネしながら言い

側にいたBBがウーノに動作に関して尋ね、ウーノは満足げに答える。

「BB：この間は妹達が迷惑をかけて悪かったわね」

次いでウーノがこう言い、それを聞いたクアットロとディエチが気まずそうな表情を浮かべる。

「そりゃあまあ：現場に着いたら二人がピンチになってるわ：

長距離転送で回復途中の魔力を無駄に使っちゃうわ：

それが原因で親父に無断外出がバレてさっさと戻って来って言われるわ

ダメ押しにE2は偽者だったわで：散々でしたからねえ：」

意地悪い口調でBBは言う。クアットロはさして反応を示さないがディエチは少し表情を歪める。

「けどまあ：大丈夫なんじゃないんすか？スカリエッツィもライネンも親父も

計画は順調だって言ってたし：ウーノ姉さんの妹さん達もほとんど完成したんですよ？」

「ええ：」

軽い口調でそう言ったBBにウーノは静かに答える。

「No.7セツテは無事稼動：今はトーレ姉さまが教育中：

No.8オットーとNo.12ディードも基本ベースとIS動作までは完成です♪」

クアットロがいつものニヤケ笑いで説明を行う。

「9番ノーヴェと11番ウエンディの固有武装も完成して戦闘テスト中…」

次いでディエチがパネルを操作しながら冷静な口調で説明を行う。

「2番ドゥーエはフロスト兄弟と一緒に任務中…なかないペースね」

ウーノがそう言って妖しげな笑みを浮かべ、そしてBBに顔を向ける。

「あなたも魔力はほぼ回復状態なんですよ？」

「ええまあ…7割ってところですかね？後3日もカプセルで寝れば万全になりますよ」

ウーノの質問にBBはこう答える。

「BBちゃんの本気は本当物凄いくらいアタシ達の仕事が無くなっちゃいそう」

「ハハ…心配ないってクアットロ、加減はするさ…」

甘ったるい口調で話すクアットロにBBはやりわりこう答えるのであった。

— Another Side ?

「……………」

「……………」

「……………」

人気の無い砂漠地帯をとある魔導師団が進んでいく。

が、皆が皆がイラついたような表情を浮かべていて、誰とも会話をしていなかった。

「…隊長…何とかありませんかねこの空気？」

「あんな事があった後では仕方あるまい……」
先頭を歩く副隊長が嫌悪なムードに耐えきれずに隊長に言うが
隊長は疲れた感じに答えるだけである。

以前も登場したこの地上勤めのベテラン魔導師団
今回はミッド最南部に点在する怪しい研究施設の調査任務があった
のだが
施設に足を踏み入れた途端にあるアクシデントが発生
隊員達のチームワークがバラバラになり、帰還せざるをえなくなっ
てしまったのだ。

「けど……いくらなんでもこれは胃が痛いですって……」
「副隊長君……私に『さっさと隊長代われよ老いぼれめ』とか言った
のは誰かね？」
「なっ！……そういう隊長こそ『肝心なところでいつもミスする間拔
け』とか言ったじゃないですか！」
会話をしている間に副隊長までもが喚き始める。
それを見て隊長は精神的な頭痛を感じ始める。

（何とも不可思議な場所だったな……心の声が筒抜けになるとは……）
本部に戻る直前、隊長はこんな事を考えていた。

アナザーF（後書き）

心境の変化が見えてくるシンシアとアネモネ
果たして今後どのように行動していくのか…？

謎の女性セデイスがようやく完全復活…

つつても劇中であんまり目立ってないからまだそんなには関係ないか…

残りのナンバーズも着々と完成していき決戦はまさに秒読み状態…

が、その前にラスト部分、皆さんもうおわかりですよ？

そういうわけで次回からオリジナル話その2

「アレ」をやりたいと思います。

前回のオリジナル話は正直消化不良だったので
今度は上手くいくように頑張りたいです。

それではまた

第17話（前書き）

とある怪しい研究施設の調査任務。
そこで待ち構えていたのは……

※今回は話の8割がギャグです。

※キャラ崩壊が凄まじいです。

※甘々症候群発病の恐れあります。

※特にフェイトファンの方、今回ホントにヤバいです。

それでも大丈夫な方は先にお進み下さい。

第17話

その任務は軌道六課に唐突に舞い込んだ。

「研究施設？」

六課管制室、モニター越しにアムロが五飛と会話を行う。

「ああ。ミッド最南端の砂漠地帯に存在しているんだが：こちらの調査でどうもきな臭い情報が入ってきていてな」

「きな臭い情報？」

それについて部隊長の椅子に座るはやてが尋ねる。

それについて別のモニターに映されているトロワが答える。

「施設の周辺でガジェットドローンの残骸をいくつか発見した：」
その答えを聞いて、はやてが腕を組み真剣な表情を浮かべる。

「つまり：スカリエッティ絡んでる可能性があるってことやな：」

「その施設からE2やロストログアの反応は？」

「念の為に調べてみたが確認されてない」

アムロの質問に五飛がそう答える。

それを聞いてはやてが椅子から立ち上がってアムロにこう言った。

「何にせよ調べてみる必要はありそうやね：何人か人員を派遣しようかアムロさん？」

「ああ：その方がいいだろう：E2反応も無い場所にガジェットがいるんじゃない：」

アムロもそれを了承した。

＊

今回は副隊長除いたスターズ、ライトニング両分隊の面々とそれに加えてユーノ、フェイ、マリナ、ガロード、ゲイナ、レントンの6人が同行する事になった。

研究施設のすぐ近くの上空で皆はデバイスを起動させて飛び降りる。着地後、目の前に黒い工場のような建物が視界に入る。

そして突入を目前にしてなのはとフェイトが皆の方に向き直って真剣な表情で言う。

「ここから先は何が起こるか分からないから：皆気をつけてね」

「今までの訓練通りにやればきっと大丈夫だから：みんな頑張っ
ね」

「「「はい！！」」」

フォワード陣が力強い声で返事をし、その他の者は無言で頷く。

そして一向は錆付いた大きな扉を開け、中へと入っていった。

＊

が、建物に入った途端にその異変は始まった。

一行は扉を開けて最初の部屋一広々としたロビーの様な空間に足を踏み入れる。

そして皆で固まって辺りを警戒しながら歩いていたその時

「なんか最近スバルのお腹がぼっちゃりしてきたわね…アイスの食べすぎじゃないかしら…」

辺りにティアナの声が響き渡る。

「ちょ！ちよっとティア何言ってるの任務中に！？」

「へっ？な、何が？」

スバルが顔を真っ赤にしながら、ティアナを睨んでいる。

他のメンバーもティアナの顔をいぶかしむ様に見ていたが

当のティアナ本人はわけがわからないといった感じにポカンとしている。

「ティアナ…任務中に戦友の体型なんて気にしてる場合じゃないでしょ？」

「えっ！？何で考えてる事わかったんですか？」

呆れたように言うマリナに対し、心底驚いた感じにティアナは答える。

（考えていた事……？）

それを聞いたマリナは、表情を歪めてピクリと反応する。

「キャラってもう少し常識を持ってほしいんだよなあ……なんというか僕まで恥ずかしくなる事が……」

と、今度はエリオの声が響き渡る。

「そ、そんな！私は非常識なんかじゃないよエリオ君！」

「ええっ！どうして僕が一瞬頭によぎった事を……」

キャラが目には涙を浮かべてエリオを見ながら怒鳴るが

やはり当の本人であるエリオはティアナ同様何のこっちゃん状態だ。

「エリオ君……女の子にそんな事言っちゃダメでしょ？」

「いや！違うんです！本当に一瞬そう思っただけで……！」

子供を叱るような口調で言うフェイに対して、エリオは大慌てで反論する。

その様子を見てフェイも疑いを持ち始める。その後マリナの方に歩み寄って彼女に話しかける。

「マリナさん……何か覚えが無いですかこの状況？」

「思いつきあるわね……というより……」

フェイとマリナは口論をしているフォワード陣達は気にせず、ガロード達の方を見る。

するとガロード、ゲイナー、レントンの3人はどこか引き攣った笑みを浮かべている。

「どうしたのよその顔？」

明らかに様子がおかしいと思ったマリナが3人に尋ねる。

「いやあ何と言うか……」

ガロードは何とも煮え切らない感じにこう言う。

「こういう状況だとアレを思い出しますからね」

レントンも同様にこんな事を言う。

「でもまさか……こんな場所にアイツがいるとは考えたくないんですけど……」

ゲイナーは他の2人以上に何か思い出したくない感じに言った。

「この3人の反応を見る限りでは……」

「でもまさか：本当に彼がここにいるんでしょうか？」

互いの顔を見やりながら話すマリナとフェイの念話も筒抜けである。それを聞いたフェイトが疑問を持ち、2人に尋ねる。

「フェイ、マリナ、何か知ってるの？」

「知っているというか：もし私達の想像通りなら……」

フェイが答えかけたその時

「！！皆、口論は終わり！敵が来たよ！！」

なのはの言葉に皆が反応する。

それと同時に部屋にある全ての扉と、そして天井に空いている穴から大量の？型ガジェットが蟻の行列の如く部屋の中に進入してくる。

「ちよつと：どれだけいるのよ！？」

ティアナが叫ぶ。ガジェットは止まる事無く部屋に入り続けていき部屋の中がどんどん埋め尽くされていく。

「うろたえないで！落ち着いていつも通りに迎撃してって！」

「「「はい！！」」」

なのはのその言葉にフォワード陣が再び力強く返答する。

「これが噂のガジェットドローンか……」

初めてガジェットを目にするゲイナーがそう呟く。

すると、何機かのガジェットがゲイナーに向けてレーザーを放つ。

ゲイナーは横に飛び退いて難なく回避し、チェーンガンから魔力弾を発射する。

しかし、それはAMFによって阻まれてしまう。

「射撃はダメか……それなら！」

ゲイナーは冷静に分析し、チェーンガンを構えてガジェットに突っ込む。

そしてすれ違いさまにガジェットを横に斬り裂いて爆散させた。

「遅いぜ!!」

一方少し離れた場所ではガロードがサーベルの二刀流で

ガジェットの大群をバッサバッサと斬り捨てていた。

「こんな狭い場所でサテライトキャノンは使えないからな……」

余裕の表情でそんな事を呟きながらガロード横の上に飛び上がり下方にいるガジェットを勢いに任せて斬り伏せた。

天井付近に浮遊しているガジェットにレントンは向かっていく。

「いっけー!!」

ある程度近づいたところでレントンはナイフを投げつける。

それはガジェットを数機貫きながら飛行し、再びレントンの手元に戻ってくる。

と、別のガジェットの一群がレントンに向かってレーザーを放つ。

「よっと！」

レントンはそれをボードに乗ったままくりりとバク転してかわし

そして速度を高めてガジェットに突っ込み、すれ違いさまにナイフで破壊していった。

マリナとフェイはガジェットの大群に四方を囲まれている。少しの間を置いてガジェットが一斉にレーザーを放つ。

「シールドユニット!!」

しかしそれは、フェイが展開した6つのユニットから形成されたシールドで防がれる。

その隙を突いてマリナはカートリッジロードを行い。ライフルを構える。

「はあああああ!!!」

そのままグルグルと回転しながらライフルの乱射を行い自分たちを取り囲んでいるガジェット達をまとめて撃ち落していく。

皆の活躍でガジェットはどんどん数を減らしていくも

「くそっ…キリが無い…!」

ストラダーでガジェット達を片っ端から碎いているエリオが苦々しげに呟く。

ガジェットは倒せど倒せどどんどん新しい物が現れてくるのだ

自分だけでももう20機前後は落としているのに

部屋にはまだ、下手をすれば100機近いガジェットがいるのだ。

「なのは…どうする…?」

コスモスターから放たれる魔力弾でガジェットを撃ち落しながらユーノが尋ねる。

するとなのはは、それに対してニコリと笑顔を向けて答え、そして更にこう言った。

「みんな一旦攻撃を止めて！私の側に近寄って！！」

それを聞いて一瞬戸惑いを見せるも、皆はガジェットを掻い潜りながらなのはの下へと近づく。

「ユーノ君…サポートお願い」

「なのは……まさかこの数を？」

得意げに言うなのはにユーノは戸惑いを見せるが、なのはは笑って続ける。

「大丈夫！ユーノ君のサポートがあれば必ず成功する！

だって…ユーノ君が側でいつも支えてくれたから私は上手く出来てきた！」

「なのは……」

その言葉に10年前までの戦いを思い出し、ユーノも笑みを浮かべる。

「期待に応えなくちゃな……」

心内でそう呟いた後、ユーノは左腕のA Z-3にカードを差し込む

「増強効果50%…広範囲捕縛……よし！！」

そしてユーノは足元に魔法陣を展開し、左手を前に翳す。

すると、部屋の至る所に魔方陣が展開し、そこから放たれたバインドによって

ガジェットが1体も漏らす事無く全て縛り上げられる。

「嘘！？」

「これだけの数をいっぺんに！？」

結界魔導師とはいえ、そのあまりにも強力なバインドの使用にスバルとティアナが驚く。

その間になのはがレイジングハートを構え、数発のカートリッジロードを行う。

「アクセルシューター！！」

そして桃色の魔力弾が大量に放たれていき、捕縛されたガジェットを1つ残らず撃墜していった。

「ふう……何とかなったね」

「うん……ありがとうユーノ君」

大量のガジェットの残骸が飛び散る部屋の中で

ユーノは左手でコスモスターを置き、右腕で額の汗を拭いながら言う。

なのはは笑顔でユーノを見ながらお礼を言う。よく見ると顔が若干赤らんでいる。

「なのはさん……相変わらず凄い……」

「それにユーノさんも……」

フォワード陣はその圧倒的な戦いぶりを呆然と見つめていた。

「や、やっぱり……ヴァイスさんが言ってた通りだね……白い悪魔……」

「そうだな……ありゃあ悪魔そのものだぜ……」

「いや……俺ははやてさんから聞いた様に魔王っぽく見えただけ……」

ゲイナー、ガロード、レントンの3名がこっそり念話でこうやり取りするが

2人の戦いに圧倒されていた為、3人は肝心な事を忘れていた。

「……3人とも、それはどういう意味？」

なのはが実にいい笑顔を浮かべてガロード達の方に近寄ってくる。それを見て3人はハッとしたように口をつむぐ。

「ちよつとみんな！なのはさん悪魔説はタブーだって！！」

「そ、そうよ！管理局の白い悪魔の話は、なのはさん本当に気にして……」

スバルとティアナが慌ててフォローに入るも、いかんせん慌ててたためか

全くフォローになってない言葉を口走ってしまう。

それを聞いたなのは更にいい笑顔になる。気のせいか背後にオーラの様な物が見え

ゴゴゴゴゴゴ……といった感じの擬音まで聞こえてくる。

「5人とも……少し頭冷やそうか？」

そう言いながらなのははレイジングハートを構える。

5人はユーノやエリオに視線で助けを求めるも、気まずそうに顔をそらされてしまった。

……そして次の瞬間、魔王が降臨した……

＊

「……つまりこの現象はマリナやフェイの同郷者が起こしてる可能性

がある？」

「悪魔で可能性の話だけど：シャアやシンシアって前例もあるし：」
ロビーの中心で一行は固まってそんな話をしている。

尚、スバル、ティアナ、ガロード、ゲイナー、レントンの5人は黒
コゲである。

理由？聞くまでもないじゃないですか。

「心の声が聞こえるって：悪趣味な能力だね」

「いくら信頼している仲間とはいえ：ある程度のお世辞やオブラー
トはあるもの」

「それを取り外してしまえば争いの種には十分成り得る：」

顎に手を置いて悩むフェイトにマリナとフェイがそう答える。

「何か対処法は無いんでしょうか？皆さんは前回同じような状況に
なったと聞きましたし：」

エリオがマリナ達、つまり97-2番組を見てそう尋ねる。

が、その途端に全員が気まずそうな顔を浮かべる。

「どうしたんですか？」

「まあ：無いことも無いんだけど：ねえ：？」

「アレは流石に……」

全員がよくわからない事を呟くので、エリオは首を傾げる。

シュン！！

「！…スバル！！」

ティアナが突然スバルを抱きかかえて横に飛び退く。

すると次の瞬間、スバルの立っていた場所に電流を纏った鞭が叩きつけられる。

それを見た瞬間全員が表情を引き締める。

「ムッフッフ…：…ようやく当たりが引っかかりましたね…：…」

流石は機動六課…：…あれだけの数のガジェットを破壊できるとは」

気色の悪い声が響くと同時に、天井の穴から趣味の悪い紫のモヒカンで

顔がやたらと悪い方向で濃ゆく、汚らしい感じの灰色のバリアジャケットと

くすんだ黄土色のマントを纏い、マントと一体化した2つの鞭を両手に持つという

あまりにも不気味で奇抜な格好をした男が降りてきた。

「…ってちょっと待ちなさい！何ですかこの紹介文！失礼ですよ！
あなたの仇名からしてアレなんですから仕方ありません
感想くれた読者のほとんどがそれで呼んでるんですからこれくらいの紹介は今更です。」

「何あの人……」

突如現れた男を見上げてスバルが呟く。

「まさかとは思ったけど……」

「またコイツか……」

「相変わらず気持ち悪いなあ……」

ガロード達3人組はくたびれた感じにそう呟く。

「皆さん始めまして…私の名前はカシマル・バーレ…あなた達を倒す者です…」

男一カシマル・バーレは大きな身振り手振りでノリノリに言う。

「目的は何だ…！私達を誘い出して何がしたい！あなたもスカリエッティの仲間なの…！？」

そんな中、フェイトが極めて真剣な表情でバルディッシュを構えながら言う。

それを聞いてカシマルはニヤケ笑いを浮かべながら答えた。

「敵にわざわざ情報を漏らすような…お馬鹿ちゃんはいませんよっ！」

言いながらカシマルは鞭を振るう。

「クッ…！」

フェイトは飛び上がってそれをかわし、バルディッシュに魔力刃を形成してカシマルに振り下ろす。

「遅いッ！」

「避けたっ!？」

しかし、カシマルはフェイトがバルディッシュを振り上げた頃にはもう回避を済ませ

再びフェイトに向かって鞭を振るう。フェイトは咄嗟にシールドを張ってそれを防御する。

「ほう……流石は隊長……素晴らしい反応そk……ふっ！」

カシマルは突然下に高速移動する。次の瞬間黄緑の閃光がカシマルの頭上を横切る。

「あの状態で気づいたのか!？」

少し離れた位置でコスモスターを構えたユーノが驚きを浮かべる。

「フフフ……無駄ですよ……私にはあなた方の心の声……息遣いまで聞こえるのですから……」

あなた方の攻撃が何時どのタイミングで来るか……よつと!」

カシマルが再び上に飛び上がると今度は桃色の閃光が横切る。

それを放ったのは悔しげな表情を浮かべる。

「……何時どのタイミングで来るか丸わかりなのですからねえ!!」
皆から離れた位置でカシマルは自身ありげに言った。

「攻撃が全部わかつちゃうなんて……どうすれば……」

胸の前で両手を握り、心配そうな表情でキャロは言う。

「ゲイナーさん!何とかならないんですか!」

そんなキャロを見てエリオが、ゲイナーの方を見てこう言う。

「へっ……ゲイナー?……」

と、その名前にカシマルがピクリと反応し、そして該当の人物を見つけて顔を青ざめさせる。

「き、貴様はゲイナー・サンガ!? 報告には無かった筈なのに何故ここに!？」

心底焦った感じにカシマルは言う。周りの者は先程まで余裕着々だったのに

突然態度を一変させたカシマルに疑問を浮かべる。

「ガロード……レントン……」

そんな中、ゲイナーは腕を組みながら目を瞑って俯いており
そして顔を上げて目を開き、両隣にいるガロードとレントンにこう
言った。

「……やろう!」

その言葉にガロードとレントンは無言で頷いて答える。

「な、何? 何が始まるの?」

急に真剣な態度になった3人を見て、少し興奮気味にスバルが言う。

「よく見てなさい:これから男の:いや、漢の生き様を体感する事
になるわ:」

「へっ:~?」

そんなスバルにマリナが肩に手を置いて黄昏た感じに言い。
スバルは言っている意味がわからず首を傾げる。

ゲイナー両腕を広げてスーッと深呼吸をし

「そうだ！どうせ聞こえるなら何度だって聞かせてやるさ！！」
そして始めた……

「サラ！好きだ！サラ！愛してるんだサラ！！

エクソダスをする前から……いや！この世に生まれ落ちた瞬間から好きだったのかもしれない！

サラの事はもっともっと知っておきたい！結ばれた今でも知りたい事はいっぱいあるんだ！

サラを抱きしめたい！抱きしめてそしていっぱいいいキスをしたい！

頭の中までとろけてしまうような熱いキスを！！

心の声なんて……心の叫びで何度でも掻き消してやる！サラ！！好きだああ！！」

突然こんな事を叫び始めたゲイナーを見て、正式な六課隊員は顔を赤らめながら啞然としている。

と、今度はガロードとレントンが前に出て、更に続く。

「ティファア……！！俺はティファアに会った瞬間に感じていた！！運命ってこういうものなんじゃないかって！！いや、そんなヤワな話じゃない！

今ならわかる！俺はティファアと会おう為に生まれた人間だって！！ティファアと結ばれる為に生きてきたんじゃないかって！！

もし俺とティファアの邪魔をする奴がいるってんなら許さない！！今すぐ出て来い！

例え存在する次元世界の全てを敵にまわそうと……俺はティファアを守

つてみせる!!」

「エウレカー!! 俺、君を一目見て何かを感じたんだ!!
君と出会って何かが変わったんだ!! 俺は……君が大好きだ!!」
君を守るためならどんな危険だって乗り越えてみせる!!

あの時だってそうだった!! 君が世界を守るために1人犠牲になる
のなら!

俺は君と一緒にこの身を捨てる覚悟だってある!!

世界の崩壊と君の命を天秤にかけるというのなら! 俺は迷わず君を
選ぶ!

君が地獄の果てだろうと悪魔の巣窟だろうとどこにしよう!

俺は必ず君を救いに飛んでってやる! エウレカー!! 大好きだ
ああ!!」

度重なる愛の大告白を正式六課隊員は啞然としながら聞いている。

「あ、あの……これに何の意味が?」

なのはが近くにいたマリナにそう尋ねる。するとマリナは無言でカ
シマルの方を指差す。

「ああああああアアアアアア!!」

カシマルは奇声を発しながら頭を抱えて空中でのた打ち回っていた。

「ど、どういう事?」

「アイツはね……健全な男女交際っていうのが大嫌いな人なの……」

「それで前回はどうやってあの人の嫌いな大告白を繰り返して……
心を読む力をカットさせて……その隙に一気に倒したってわけ……」

わけがわからないといった感じに尋ねるのはに対し

マリナとフェイは心底疲れた感じにこう答える。

すると何を思ったのか

「じゃ、じゃあ私も………」

なのはが顔を赤らめながらそう呟き、深呼吸をして、そして…
始めた……

「ユーノくーん！！私は10年前ユーノ君の声が聞けて本当に
良かった！！

ユーノ君がいたからこそ！今の私は存在している！！
でも気づいたの私！あの日ユーノ君の本当の気持ちを聞いたあの日
に！！

私は……私はユーノ君を愛してる！！尊敬とか友情とかじゃない！！
1人の男性として純粹に！！ユーノ君より素敵な人なんてもう絶対に
生きてる内に出会えない！！

ユーノくーん！！私のこの思いを受け止めてえええ！！」

突如そんな大告白を始めたなのはを、フェイトとフォワード陣は
顔を真っ赤にして聞いていた。

「なのは…君はそんなに僕の事を……なら僕だって……」

が、当のユーノ本人はなのはに触発されてしまったらしく
真剣な表情を浮かべてそんな事を言いそして後に続く…

「なのはーっ！！君の思いは当然わかっている！！だから僕の
思いも聞いてくれー！！

10年前になのはに出会って僕は本当は悩んでいた！！巻き込んで
よかったのかずっと悩んでいた！

でも今となってはどうでもいい！！僕はなのはに出会えた事をあら

ゆる神に感謝する！！

あの日なのはの本当の気持ちを聞いて僕は漸く理解した！！君の事が好きだったって！！

このあらゆる世界に存在する女性の中で君ほど優しくて魅力的で！
そして僕の心火をつけてくれる女性は例え1億と2000年経つ
たとしても現れやしない！！

だからこそ正直に言わせてくれ！！なのはーーーーっ！！君が好きだーーーー！！

君の全てを僕が受け止めてやる――！！！！」

「なのはさん……ユーノ君……」

2人の告白を聞いてフェイは口をパクパクさせてそう言う。

「フフツ……こう何度も聞いてると何か吹っ切れてくるわね…」

「マリナさん!？」

突然隣にいたマリナが笑みを浮かべて不吉な事を口走る。

フェイは慌てて止めようとしたが時既に遅し……

「タックカー！ー！！私は訓練生の時にあなたに会った時は特別な感情なんて何も感じてなかった！！」

でもあなたに助けられて！自分の身を犠牲にしてまで仲間の命を優先する

あなたの人間性に私は本当に惚れ込んだ！！

バルクホルツと一緒にいた時もそうだった！世界のどんな人よりも大切だった！

あなたとあなたの住む世界を守るためなら私の命なんて安い物だと思ってた！

でも違う！あなたはまた教えてくれた！あなたは私を守ると言ってくれた！

その言葉が何よりも嬉しかった！その時あなたを1人の男性として本当に好いたのよ！

だから今はもう、あなたのいない人生なんて考えられないわ！

タックーーー！！あなたが好きよーーー！！あなたと共にずっと戦っていききたい！！」

「……えーいっ！こうなりやケクソよ！！」

そしてフェイもタガが外れてしまい、顔を赤らめつつも大声で叫ぶ

「バレルーーー！！セントクルスの屋上であなたを助けた時が全ての始まりだった！

あなたは最初は情けないくらい弱かったけど…今は逆に私が助けられてる！

全ての真実を話して落ち込む私の背中をあなたは力強く押してくれた！！

その時胸が熱くなった！！本当にあなたに感謝していた！！

ううん！そんなもんじゃない！あなたを本当に最高のパートナーだっ

て感じた！！でもそれだけじゃ物足りない！もっともっと踏み込んだ関係になりたい！

あなたにも当然わかってると思う！でも、敢えて言わせて！！

バレルーーー！！私はあなたを1人の男として愛してる！あなたが本当に大好きよーーー！！」

「アアアアアオアアアアアウウウウウ……………」

どンドン続いていく大告白の押収に、カシマルは意識が遠のいていくのを感じていた。

「キャロー……！！僕は出会ったあの時から君の事が……」

「エリオく……ん！！私もエリオ君の事……」

「うおおおお！！アイスクリームをたらふく食べた……い！！」

「兄さ……ん！！私は今でも兄さんの事……」

そんな状態で、吹っ切れてしまったフォワード陣達の追い討ちがかり

（内2名は方向性が少し違う気がするが……）

カシマルは何故だか知らないが吐血してしまう。

「えっ……ちょっと……あの、み、みんな……／＼／＼」

周りが大告白を続けていく中、フェイトだけは場の空気になじめず顔を真っ赤にして俯きながらもじもじしていた。

「フェイト！続きなさい！」

そんな中、マリナから振りが来る。

「ええっ……でも……そんな……／＼／＼」

しかし、フェイトは俯いたままもじもじを繰り返すだけだ。

「フェイトさん！あなたただけ逃れようたってそうはいかないわ！」

フェイがヤケクソ気味に追い討ちをかける。

「フェイトさん！」

「頑張っ……て！」

「聞かせてください！」

「フェイトさんの熱い告白を！」

エリオが、キャロが、スバルが、ティアナが口々にそう言う。

（何を頑張れというのだろうか？）

しかしそれでもフェイトは顔を俯かせたままだ。

そんな彼女に痺れを切らしたのか、ユーノがこんな事を言った。

「フェイト！君の気持ちは所詮その程度なのかい！？」

僕達の気持ちに劣るほど、君のベルクトへの思いは

そんなちっぽけですぐに崩れるような情けない物だったのかい！？」

ブチッ！

「……私のベルクトへの思いが……ちっぽけ……？」

その瞬間フェイトの中で何かが壊れた。

フェイトはゆらりゆらり前に出て、顔を上げて

「聞かせてあげる……私がどれだけベルクトを愛してるかを……！」

……そして始めた

「ベルクト……！！！！今更言ってもわかってると思うけど……
10年前あなたに会ったのが全ての始まりだった！私という人間の
全ての始まりだった！

あなたは私に道を開いてくれた！私という：フエイトという存在を育ててくれたのはあなただった！

あなたは私の全てだった！この世に存在するあらゆる言葉を使ってもとても言い表せない！

闇の書事件の後あなたは私に思いを伝えてくれた！あなたも私が好きだと言った！

その時の私は本当に嬉しくて嬉しくて嬉しすぎて体がとろけそうだった！！

あの時以上の喜びは生きているうちには絶対に出会えない！！

いや：あなたの存在全てが私にとって何にも代えがたい幸福であり喜びであり全てなの！！

9年前あなたは忽然と姿を消した！その時の私の悲しみは自分でも計り知れなかった！

私は塞ぎ込んだ！あなたのいない人生なんて考えられなかった！命を絶つ事さえ考えた！

でもあなたの言葉を思い出した！あなたは決して裏切らないと！だから私は待った！ひたすら待った！

毎日毎日心が張り裂けそうだったけど私は耐え抜いた！そしたらあなたは戻ってきた！

私を裏切らなかった！！また会いに来てくれた！！そして今でも私を愛してくれてる！！

時の流れで大きく姿が変わった私を綺麗だと言ってくれた！そのどんな宝石よりも

美しく輝いている2つの瞳で！どんな神のお告げよりも心地よく聞こえるあなたの声で！！！！」

……長すぎるため以下中略……

……そして10分後

「……今だから言える！！私はあなたが大好き！好きすぎて好きすぎて頭が痛くなるほど！！」

あなたが大好き！ベルクトと一緒にいるためなら世界だろうと何だろうと壊してみせる！

あなたを再び奪おうとする奴がいるなら私が命に代えてでもそいつを止めてもみせる！！

好き！あなたが好きなのベルクト！このあらゆる次元世界に存在するどんな生物よりも！

あなたがっ！！一番っ！！私にとっての大切な人なの！！ベルクト
「……………！！」

「アアアアアア！！こんな所で死ぬるかああああ！！！！」

最後の最後でとてつもない爆弾発言を浴びせられてしまいとてでもないか戦闘を行えるような精神状態じゃなくなったカシマルは

激痛のする頭を抱えながら、建物入り口から外に跳び出て行く。

「機動六課！あなた達はブラックリスト入り……っでもうしてるんだったー！！……」

そして何とも締まらない捨て台詞を残して逃亡していった。

＊

「……終わったな」

「ああ……」

カシマルがいなくなった後、ガロードの呟きにレントンが答える。
その場にいる殆どの者がやりきった表情を浮かべていた。

「……で、結局今回は何の任務だったのよ？」

「さあ…私達をおびき寄せる罠だったって報告すればいいんじゃないんですか？」

真っ先に正気に戻ったマリナとフェイがこうやり取りする。

「フェイトさん!？」

「しっかりしてくださいフェイトさん!!」

エリオとキャロが必死に呼びかけている。

フェイトは仰向けにバツタリ倒れこみ、真っ赤な顔でにへらーと笑いながら気絶していた。

そんな光景を見て、周りの者達は苦笑いを浮かべるのであった。

だが…皆はこの時気づいていなかった…
あの大告白が大変な事態を招いていた事を…

＊

機動六課隊舎

その日女性局員の殆どがきゃーきゃー言いながら騒いでおり
男性局員は殆どがうんうん頷き、一部は黒いオーラを纏っていた。

…そう、原作キングゲイナーやACE3を知ってる方はわかると思
うが…

本気で告白してしまうと世界中に声が響いてしまうのだ…
つまり砂漠施設にいた一行の告白がミッドチルダ中に流れた事になる

当然、この機動六課の隊舎も例外ではない……

「あいつら……何やってんだよ……」

「まさかマリナまで……」

ヴィータとシグナムは頭を抱えて呆れていた。

シャルは顔を真っ赤にして俯いていた。

ザフィーラは全くの無反応だった。

「パパやママたち、どうしておおごえでさけnderの？」

ヴィヴィオは汚れの無い純粋な子供の気持ちを垣間見せた。

「レントン……もう……／＼／＼」

エウレカは顔を赤らめつつも、笑顔を浮かべて両頬に手を当てていた
どうやら満更でもない様子だ。

「あのバカーッ！こっちに來てまで何てこと怒鳴ってんだ！！」

サラは顔を真っ赤にして天を見上げて大声で怒鳴っていた。

ティファは無言だったが、その顔には僅かな笑みが浮かんでいた。

「フェイ……」

「マリナ……やめてくれよホント……」

デスクで書類作業を行っていたバレルとタックは揃って顔を突っ伏
していた。

その隣にいるベルクトも流石に堪えたのか両手で頭を抱えていた。
（今更声高に叫ばなくとも……お前の気持ちはわかっていう
のに……）
が、ベルクトが呆れていたのは皆に聞こえる大告白の事ではなく
今更言わなくても気持ちはわかっていう、というある意味斜め上の
考えだった。

＊

部隊長デスク

「フッ……フフフッ……フフフフフ……」

「お、おいはやて……」

机に座ってはやては不気味な笑みを浮かべてボールペンをペキツと
折りまくっていた。

そんな彼女の傍らには真っ二つになったボールペンの山が置かれて
いる。

アムロは先程からはやてを宥めようとしていたが全く効果が無い。
リインははやてのあまりにも凄まじい迫力に怯え、物影に隠れてし
まっている。

「あてつけか？……嫌がらせなんか？……フヘヘヘ……」

独り身の私に対する……極限の嫌がらせなんか……これは……？」

はやては相変わらずボールペンを折り続けている。

それも半泣き半笑いの状態で奇声を発しながらだ。

正直言っただけかなり怖いとアムロは感じていた。

そしてはやては突然デスクから立ち上がる。

「いいで……そっちがその気なら私にだって考えがある……」

独り身の恐ろしさ……目に物見せたるわ……クケッ……クケケケ……」

奇妙な笑い方をしながら、ゆっくりとはやては部隊長デスクを後にする。

「アムロさ……ん……」

「……今の俺達にはどうする事も出来ん……」

そんなはやての背中をリインとアムロは哀れむように見つめていた。

……それから数日後、任務から帰ってきた直後ののはやフェイト達を
はやてとその他数名の男性局員が隊舎入り口で襲撃したなどという
噂が

機動六課内を飛び交ったが、真相は定かではないと言う……

第17話（後書き）

うわーいやっちゃったーorz

GGIの告白を書いてる時点で頭が溶けそうでしたが何とか書ききりました…

もうホントに…悪ノリも大概にしろって感じですよね…

もう何というか…頭が完全にやられていて

後書きに何を書いていいかわかりません…ごめんなさい

ただ1つ言っておきますとウンコ部長は再登場します。

しかも今度はシリアスな場面で

その際、ACEには出てないネタを使う事になると思います…
度々ごめんなさい…

こんなんでも笑っていただけたのなら幸いです…

それではまた…ゴフツ…

第18話（前書き）

六課に新たなメンバーがやって来る。
そして地上本部では…

第18話

機動六課大告白事件&八神はやて暴走事件から数日後
早朝訓練の前に隊長陣とフォワード陣が集まっていた。

「さて、今日の朝練の前に1つ連絡事項です。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹

ユウ・イサミ特別陸士、ヒメ・ウツミヤ特別陸士の3人が、今日からしばらく六課へ出向となります」

なのはに紹介されて3人は前に出て敬礼をする。

「108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします！」

「同じく特別陸士ユウ・イサミだ。みんなよろしく」

「ヒメ・ウツミヤです。よろしくね」

「」「よろしく願います!!」「」「」

フォワード陣は元気よく返事をする。

その後、フェイトが反対側のシャリーリーの隣にいる人物を紹介する。

「10年前からうちの隊長陣のデバイスを見てきてくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです。気軽に声をかけてね♪」

「」「はい!」「」

にこやかに言うマリエルに対しても、フォワード陣は元気よく答えた。

＊

挨拶も終わり、皆はそれぞれ早朝訓練へと入る。

ギンガは参加してるみたいだったが、勇と比瑠は丁重にお断りしていた。

「いや…賢明だったと思うぞ。俺も1回試しに受けたけどあれはヤバイ…」

「そうですか…」

フォワード陣からやや離れた位置でタックが少し青ざめた顔でそんな事を言い

それを聞いた勇は少し同情した感じになる。

「でも今更ですけど不思議ですよ…私達ってみんな偶然こっちに來ただけにすぎないのに…」

向こうのロボットと同じ性能のデバイスを持っていて、それをすぐに使いこなせる…」

「考えてみればそうよね…本当はああやって努力を積み重ねて養っていく物なのに…」

比瑠の言葉を聞いて、マリナは考え込む。

日常的にこちらの世界の人間と多々再会していたので感覚が麻痺していたが

そもそも自分たちの世界には魔法技術なんてものは存在していない。

なのにこっちに飛ばされた人間の殆どは、魔法を使って数日で魔導師としては「優秀」と呼べるレベルに到達してしまうのだ。勿論こっちの世界にもなのはやはりやてといった例外はいるがこれって実はかなり異常なのではないだろうか？

「魔力ランクや戦闘センスにある程度バラつきがあるとはいえ…やっぱり変よね…」

ひょっとして私達のデバイスにパイロット時代の能力を反映する力でも備わってるのかしら？」

「俺と比瑪のブレンもマリーさんに見てもらったりはしたんですが…俺達のデバイスってどうも普通の比べてプロテクトが多いらしいんです」

「偶然に生まれた産物だからなあ…機密の塊って事か…」

悩んだ表情を浮かべて言うマリナの言葉に勇が答えそれを聞いて更にタックが口を開く。

「私達の世界って意外と目に触れられてないだけで…こっちの世界以上に

魔力が充満してたりするのかもしれないね…」

「それがこっちの世界の空気にあてられて覚醒している…って線も無くは無いかな？」

比瑪の言葉を聞いてタックはそんな事を言う。

自分とマリナは10年前にはやてと出会って魔導師として覚醒し初めて戦闘を行った時にはもう、守護騎士達に追隨する力を持っていた。

魔法を使って1年程経過し、今では彼らと肩を並べるほどの実力を持つ。

一番恐ろしいのはやはりアムロだろう。使い始めて3日程で

なのはやフェイトといった凄腕魔導師達についていけてたというのだから。

そんなアムロと互角に戦う赤い彗星シャアもまた、優秀ということか。

プリベンターのメンバーとは普段はあまり一緒にいない為詳しくはわからないが

アグスタやその他任務で同行した時の实力を見る限りではやはり優秀といえる。

ガロード、ゲイナー、レントンの3名も来たばかりでよくは知らないが

あの3人の力も少なくとも並みの魔導師よりは遥かに上であろう。

バレル、フェイの2人は最近事務仕事も多く、自分やマリナと

訓練や模擬戦に付き合う事が少なくなった。

が、それでもイクスブラウMを用いた幅の広い戦術や

イクスブラウPによる守備戦特化の戦い方も、普通と呼ぶのは憚れるレベルである。

そして、自分達5人の中ではベルクトが一番魔法との付き合いが長い。

特にデバイスのグレイブアークのファントムモードを用いた高速戦闘能力は

最愛のパートナーたるフェイトにも匹敵している。

（俺達5人ではマリナとベルクトが一番上で…その下に俺とバレル…更に下にフェイといった感じか…？いや…でもフェイは根本的に戦術が違うから

一概に強さが下と言えない…第一俺らなんかよりアムロ大尉の方がよほど優秀だし…

うーん…というかはやてやなのはといい俺らといい…六課って何だか戦力が大きすぎないか…？
だが…予言で示唆されてる地上本部や次元世界壊滅の対策も考える
と…寧ろ…)

今更ながら自分達の強さに疑問を持ち、腕を組んでタックは思い悩むのであった。

＊

早朝の個別訓練が終了し、なのは達は森林を模した戦闘シュミレーター
の

中央広場にフォワード陣とギンガを集める。

「それじゃあ折角だから、ギンガも入れたチーム戦…やってみよう
か？」

そう言っただけなのは胸を張る。

「フォワードチーム5人対、前線隊長4人チーム！」

「……………え？」

それを聞いてギンガは目を丸くしてポカンとなってしまふ。

「いや、あのねギン姉…これ、時々やるの」

「隊長達、かなり本気で潰しにきますので…」

「まずは地形や幻術を駆使して逃げ回って…」

「どんな手を使っても決まった攻撃を入れられたら、撃墜になります」

そんなギンガに対しフォワード陣が小声で説明をする。

「ギンガはスバルと同じくデバイス攻撃ね。左ナツクルか蹴り」

「……はい！」

近寄ってきたなのはの説明を受けて、ギンガは表情を引き締めなおし返事をする。

「それじゃあ…やってみよっか！」

「「「「はい！！」」」」

なのはのその言葉を合図にして、チーム戦が始まった。

＊

機動六課隊舎、洗面所でヴィヴィオは顔を洗っていた。

「ん……むう………」

ヴィヴィオは顔を拭くためのタオルを探す、洗ったばかりで目を閉じている為

下に落ちてしまっている事に気づかない。

「はい、ヴィヴィオ」

「あ……………」

そんなヴィヴィオの様子を見て、その場に一緒にいたユーノが落ちたタオルを拾って手渡してやる。

ヴィヴィオはそれを確認して笑顔になり、顔を拭く。

「ありがと、パパ」

顔を拭き終わった後、ヴィヴィオは明るい笑みをユーノに向ける。それを見てユーノも笑顔になる。

「ちょっと待ってて…」

ユーノはヴィヴィオの前にしゃがみ込み、ポケットから青いリボンを取り出す。

「なのはママを迎えに行くから…きちんとした格好で行かないとね」

「うん!!」

リボンで髪を結びながら言うユーノに、ヴィヴィオは元気よく答える。

ユーノはヴィヴィオの手を握って、彼女と一緒に並んで歩く。

「あ、やあどうも」

「こんにちは」

すると、途中の廊下でレントン&エウレカに出会う。

レントンは手を上げて親しげ挨拶をし、エウレカはペコリとお辞儀をする。

「ああ、レントンにエウレカ…でよかったよね?」

ユーノの言葉に2人はコクリと頷いて返事をする。

「ヴィヴィオ、挨拶して」

「こんにちは」

ユーノに言われて、ヴィヴィオもお辞儀をして答える。

「うわあ…ちっちゃくて可愛い子っすね」

「こんにちはヴィヴィオ」

ヴィヴィオの方を見てレントンが言い、エウレカはにこやかに笑ってヴィヴィオの前にしゃがみ

彼女の頭を撫でてやる。

「えへへ♪」

ヴィヴィオは満足そうに笑顔になる。フェイにされて以来、頭を撫でられるのがお気に入りようだ。

「この子はえっと…ユーノさんの？」

「いやまあ…正確には違うんだけど…」

ヴィヴィオの頭を撫でながらエウレカが尋ね、ユーノがそれに答えるようにするも

「ユーノパパはヴィヴィオのパパだよ！」

答える前にヴィヴィオが元気いっぱいにこう言う。

それを聞いてユーノは少し慌ててしまい、エウレカとレントンはクスクスと笑う。

「俺達とそんな歳変わらなさそうなのに…やるっすね」

「お、おい！ちよっと！」

完全にからかい口調で言うレントンの言葉を聞いて、ユーノは顔を真っ赤にして怒鳴る。

その様子を見てヴィヴィオはポカンとなり、エウレカは口元を抑えて笑いをこらえていた。

ユーノとヴィヴィオがいなくなった後、レントンがポツリと呟く。

「子供かあ…」

それを聞いて、突然エウレカが顔を赤らめてこんな事を言った。

「レントン…：ひょっとして私と…」

「いいいっ！？いや別にそんなつもりじゃ！第一いろいろ段階を飛び越えてる気が…！」

ある種爆弾発言とも取れるエウレカの言葉に、レントンはアタフタしながら答えるが

そんな彼の様子を見てエウレカはイタズラっ子の様にペロリと舌を出す。

「フフ…冗談だよ♪」

「はあ…：やめてよホント…」

がつくりと肩を落としてレントンは落ち着きを取り戻す。

そしてエウレカと並んで再び歩き始めた。

…：彼らの普段の熱々振りを考えれば何を今更なやり取りだったか…

＊

チーム戦も無事に終了し（因みに結果は隊長チームの勝ち）
フワード陣はストレッチを行っていた。

「すごいねえ…毎日朝からこんなにきついのか？」

「隊長戦はちょっと特別だけど…」

「大体こんな感じです」

クタクタになっているギンガの言葉に、スバルとエリオが答える。

「出動があっても大丈夫な程度には…限界ギリギリまでですね」

「密度濃いです…」

少し離れた位置でティアナとキャロが体を伸ばしながらこう言った。

「うん、みんないい感じの子達ね」

その様子を見ていたマリエルがニコニコしながらそう言う。

「エリオ達ですか？それともデバイスの方？」

「両方！」

隣にいたシャーリーの問いに、マリエルはにこやかなまま答える。

とその時、ユーノとヴィヴィオが手を繋いでその場に現れる。

「お久しぶりですマリーさん」

「ユーノ君！久しぶり〜六課にいるってホントだったんだ〜」

ユーノの姿を見て、マリエルは再会を懐かしむように声をかける。
次いで、マリエルはヴィヴィオの方に視線が移る。

「ヴィヴィオ、シャーリーさん達にもきちんとか挨拶」

「おはようございます」

ユーノに言われて、ヴィヴィオは頭を下げる。

「ああえつと…おはようございます」

「おはようヴィヴィオ」

マリエルは丁寧に挨拶してくるヴィヴィオを見てやや戸惑いながら挨拶を返す。

シャーリーはいつも通りに普通に挨拶をする。

ユーノに連れられていくヴィヴィオを見てマリエルは尋ねる。

「シャーリー、あの娘は？」

「えつとですね…」

「ママー！」

ユーノに連れられてヴィヴィオは笑顔でなのはに手を振る。
隣にいるユーノも同様に手を振っている。

「ヴィヴィオー！ユーノくん！」

なのはがそれに気づき、ヴィヴィオ達と同様に笑顔で手を振って返す。

ヴィヴィオがなのはの側までやってきて、なのはは彼女の前にしゃがみ込む。

「ユーノパパ、ヴィヴィオはちゃんといい子にしましたか？」

「あはは…うん、ちゃんといい子にしてたよなのはママ」

わざとらしい口調で言うなのはに苦笑いしながらも、ユーノがこう答える。

「そっか、偉いよヴィヴィオ」

「へへへ♪」

なのはが差し出してきた手を、ヴィヴィオは満面の笑みを浮かべてもう片方の手で握った。

「…あんな感じです」

その一連の様子を見終わった後、シャーリーがマリエルの方を向いて言った。

「ああ…2人の子供かあ………」

それを聞いてマリエルは一瞬納得しかけるも

「……ってうええええ!!? 2人共もうそんな関係に!??」

明らかにおかしい事に気づいて驚いて声を上げた。

「……ヴィヴィオとの歳の差を考えたらありえんだろう…」

と、いつの間にか現れたのか、マリエルに対してベルクトがそう言う。

「ああ!ベルクト君も久しぶり」

マリエルが気づき、ベルクトに向かってにこやかに言う。

ベルクトはそれに対して無言で笑みを浮かべて答え、そしてフェイトの方へと向かう。

「あっ…ベルクトー！」

フェイトがベルクトの存在に気づき、笑顔を浮かべて大きく手を振る。

それに対してベルクトも穏やかな表情でやりわり手を振って答えた。

「スバル…あの人って…」

「あの人はベルクトさん。ギン姉と一緒にいた勇や比瑪と同じ97—2番世界の人で…」

フェイトさんには欠かせない大切なパートナー…」

フェイトと親しげにお喋りをするベルクトを見て、ギンガが尋ね、それにスバルが答える。

「ああ！前にフェイトさんが声高に叫んでいた私の全てとか言ってた……」

「！……！！！」

思い出したようにポンと手を叩いてギンガがこう言うが

その直後、フェイトは茹蛸の如く顔を真っ赤にしてバツタリと倒れこむ。

「えっ！ちょっとフェイトさん！？」

「きゅう………」

急に倒れてしまったフェイトを見て、ギンガが慌てて駆け寄っていき

フェイトからは反応が無い。顔を赤くしたまま目を回していた。

「…すまない、それにはまだ触れないでやってくれるか…？」

「は、はい…」

フェイトの体を支えているベルクトが静かに言い
ギンガは何か触れてはいけない物に触れたと感じ、困惑気味ながら
も頷いて答える。

フォワード陣やなのは、ユーノもそれを見て気まずそうな表情にな
っていた。

＊

食堂、フォワード陣や隊長陣、ベルクト達は昼食を摂っていた。

「なるほど、保護児童なのね」

「僕の時と同じような感じです」

「なのはさんが保護責任者、後見人がユーノさんです」

トレイを持ちながら言うマリエルに、巨大なサラダボールを手にし
て前を歩くエリオが答え

隣を歩くシャーリーが付け加える。

ヴィヴィオはなのはとユーノに挟まれて、満面の笑みでオムライスを食べている。

そんな彼女をなのはとユーノは微笑ましげに見ている。

「しっかしまあ子供って泣いたり笑ったり切り替えが早いよね」

別のテーブルでヴィヴィオの様子を見ていたティアナがそう言う。

「スバルのちっちゃい頃もあんなだったわよね」

「えっ…そ、そうかなあ…」

ギンガの言葉にスバルは照れながら答える。

「いや、実際ギンガさんからいろいろ聞いてるけど面白かったぞ？」

「そうそう5歳の時にアイスクリームの食べすぎで…」

「ちよっ！ちよつとギン姉！この2人に何を話したのよ！？」

同じ席に着いていた勇と比瑯がいきなりこんな事を言い

それを聞いてスバルは顔を真っ赤にして慌てまくる。

その様子を他のフォワード陣とギンガが笑って見ている。

「リインちゃんも」

「ふえっ！？リインは初めっから割と大人でしたっ！」

シヤマルの言葉に、他の人とサイズの変わらぬ皿とフォークで食事をしていたリインは

心外といった感じに怒る。

「嘘をつけ」

「体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねえか」

シグナムとヴィータが意地悪い笑みを浮かべて追い討ちをかける。

「むっ…はやてちゃん！…ってアレ？」

たまらずリインははやてに助けを求めようとしたが、肝心のはやて

がない。

「はやてちゃんはどうしたんですか？」

リインははやてがない事に疑問を感じ、そう尋ねる。

「この間の罰がまだ終わってないからな。部隊長室で書類整理中だ」
それに対してアムロが黙々と食事をしながら淡々と答える。

「ま、まあアレはな…」

「いくらはやてちゃんでも…」

「ああ…あれではただの逆恨みだからな…」

それを聞いて守護騎士達とリインは苦笑を浮かべた。

「それにしても…子供っていうのは見てて微笑ましくなるよな？」
「そうか…？俺はそんな物は感じないが…」
食事をしながらバレルがこんな事を言い、それに対してベルクトが答える。

「でもなのはさんも大変よね…六課での仕事も忙しいのに…」

「まあユーノもいる事だし…何より形式上とはいえ2人の子供だなんてお似合いだと思うけど？」

なのは達の方を見ながらフェイが少し心配そうな顔で言い、それに対してバレルが答える。

その後フェイがテーブルに向き直った後紅茶を啜り、
カップを置いた後いきなりベルクトにこう言った。

「…：フェイトさんとベルクトの子供も、あんな風に可愛くなるのかしら？」

その瞬間場の空気が凍りつく。

「……………きゅう…」

「あ、ちよっと！フェイトちゃん！？」

フェイトはまたしても顔を真っ赤にして倒れてしまい、今度はそれをなのはが支える。

他の者達は複雑そうな表情を浮かべ、バレルは苦笑いを浮かべている。

「……フェイ、おちよくるのもいい加減にしろ」

ベルクトがため息を吐き、呆れ顔でこう言う。

「あらゝそう遠くない先の話だと私は思うけど？」

「……いい加減にしろ…本当に怒るぞ…」

ベルクトは青筋を立てて静かな怒りを見せる。

それを見てフェイはクスクスと笑っていた。

＊

管理局地上本部、レジアスの自室

「機動六課からは材料が出ませんでした…」

「引き続いてこちらの査察部を動かす予定ではありませんが…」

レジアスを前にして厳しい雰囲気を纏ったメガネの女性―オーリス・ゲイズ三佐と

その隣でクリーノが報告を行う。

「そうか…公開陳述会まで間もない…より有利な交渉材料を押さえ
ておかねば…」

それを聞いてレジアスはデスクに座って重々しい声で言う。

その後、オーリスがモニターを操作し何人かの写真を映し出す

「それと、本局査察部や一部の部隊がこちらを調べてまわっている
ようです」

「いつもの事だ…いつものようにこなせ…」

「しかし…本局査察官に1人厄介なレアスキル持ちがいましたね…
本格的に嗅ぎまわられたら深い部分まで探られる可能性もあります
…」

「チッ…忌々しい…」

クリーノの言葉に、レジアスは表情をゆがめて舌打ちをする。

「最高評議会からの支援は頂けないのでしょうか？」

「それに関しては今日、ヴェンデイス一佐が確認に行っています」
オーリスの問いに、クリーノがそう答える。

その後レジアスが更に問いかける。

「アインヘリアルの方はどうだ？」

「三号機の最終確認が遅れています…順調です」

「遅らせるな…陳述会前に終わらせておけ…」

厳しい口調でレジアスは言った。

その後、オーリスとクリーノはアインヘリアルの視察に向かう為に部屋を後にする。

そしてエレベーターに乗り込んだ所でオーリスはふとクリーノに尋ねる。

「アインヘリアルか：君はどう思うクリーノ三佐？」

「：この世界に来てから間もない僕には、その辺の事情はわかりかねますが：

戦力を出し惜しみる頭の固い本局に頼らなくて済むのなら：いいのではないですか？」

うつすらと笑みを浮かべてクリーノは答える。

「：そうだな。例のプランといい：アインヘリアルといい：過ぎた力と思わなくもないが：

あの方の選んだ道だからな：」

「はい：レジアス中将こそが地上の守護者ですからね：」

少し表情を曇らせながら言うオーリスに対し、淡々とクリーノは言った。

そしてエレベーターが目的の階に達する直前で、クリーノはピクリと頭を動かす。

（：……どうやら、ゴミ掃除が終わったみたいだね：ドゥーエ：兄さん：）

＊

地上本部最深部、一般局員には存在すら秘匿されている最高評議会の間

そしてその最高評議会委員の脳が保管されているポッドは：その内2つが無残にも破壊され、その側には形の崩れた脳みそ：最高評議会「だったもの」が無造作に転がっていた。

「な……！何故……！！……何故だああ……！」

唯一1人残った委員が信じられないという感じに叫び声をあげる。

その両サイドには右腕に三本の爪を装着したドゥーエと

凶々しい真紅を基調にしたバリアジャケットを纏い

魔力刃で形成されたサーベルを手にしたヴェンデイス：

いや、仮面をはずし本性を露にしたシャギアが立っていた。

「予定ではもう少し先の話だったのだがね：彼らがもう

君たちは足を引っ張るただの老人だと判断したのだよ……」

「その通り：これ以上ご老体に無理をされたらよくありませんからね……」

そろそろお休み願おうかと思ひまして……」

歪んだ笑みを浮かべながら、シャギアとドゥーエが言う。

「貴様ら……！まさかジェイルの……！」

「あなた方が見つけ出し：生み出し育てた異能の天才児：失われた知恵と：限りなき欲望をその身に秘めた：アルハザードの遺児：

開発コードネーム：unlimited・desire：アンリミテッド デザイアジェイル・スカリエッティ：」

「そしてそんな彼に導かれるようにしてこの世界に招かれ：

君たち最高評議会がスカリエッティの手助けの為に側に置いた：彼に匹敵する知能の持ち主達：

通称：madness・desireとlazy・desire：マッドネス デザイア レイジイ デザイア互いの武器を構えてポッドの前に立ち、シャギアとドゥーエは説明を続ける。

「スカリエッティだけでも手に余るというのに：そんな彼に更なる知識と力を与えた時点で：

あなた方がこうなる運命は決まっていたのですよ：

どんな首輪をつけようと：いかなる檻に閉じ込めようと：」

ドゥーエは右腕の爪に付着した培養液をペロリと舐める。

そしてそのまま右腕を大きく振り上げる。

「扱いきれぬ力は：いずれ破滅を呼び起こします：」

その瞬間ドゥーエが光に包まれ、管理局の制服がナンバーズ共通のボディースーツに変わり

髪の色が青から若干くすんだ感じの金へと変わった。

「次元と地上の平和の為に生み出した人間が：

逆に更なる戦乱と混沌を巻き起こす事になるのだよ：」

シャギアもサーベルを高く振り上げてそう言う。

「馬鹿な……！馬鹿なああああ！！」

残った委員は必死に叫ぶも所詮は脳だけの存在：抵抗する術は皆無であった。

「さて：我等は次のステージへと上がらせてもらうことにしよう！」

「あなた達のような：醜い存在を踏み台にして！」

シャギアとドゥーエが高らかに言った直後、2人の武器が振り下ろ

され、最後のポッドが破壊された。

（…一応の仕事は終わりだ…地上本部の襲撃は彼らに任せればいい…
残りの仕事は…はこぶねが起動してからだ…）

＊

スカリエッティのアジト
ナンバーズの大半とシンシア、アネモネ、そしてBBとセデイスが
集まっていた。

「祭りの日は近い…君たちも楽しみだろうか？」
その場に現れた3人の白衣の男内の1人、スカリエッティがニヤケ
笑いでそう言う。

「まあ武装の改良も無事に済んだし：何よりアネモネとの実戦は楽しみつスね」

それに対してウェンディが楽しそうに答える。

「あなた方のポジションは最前衛ですからね：存分に楽しめると思えますよ：」

ポニーテールの男がスカリエッティ同様にニヤケ顔で言う。

「だってさ：一緒に頑張ろうっスね！アネモネ！」

「……別に何だっていいわよ……あんたが楽しければそれで……」

ウェンディとは対照的に、アネモネは仏頂面でそっぽを向いて答える。

その後側にいる退屈そうな表情を浮かべたシンシアに念話を飛ばす。

（……ねえ：アタシ達ホントにこんな事してていいの……？今回はいくらなんでも……）

（……しょうがないじゃん：今更そんな事言っちゃってどうにもならないでしょ？）

アタシらに出来るのはこいつらに従って淡々と戦う事だけ……

それにアタシは今度の戦いで……楽しく遊べるならそれはそれでいいと思ってるし……）

（……ああそう！……じゃあ勝手にするわよ！）

こんな事を尋ねた自分が馬鹿だったと言わんばかりにアネモネは念話でシンシアに怒鳴った。

「B Bとセデイスも完全復活したみたいだし：今度の戦いは盛り上がりそうだよね！」

セインが興奮気味にそう言う。

「まあね！私はいろいろ忙しいから……クアちゃんやインちゃんと一緒にバックスやったり……」

その後トーレさんやセツちゃんと一緒に空へ上がったっていろいろあるからね」

「けど……セデイス姉の力なら造作も無い……そうだろ？」

「当たたり前じゃん！やっとパパの為に本格的に役に立てるんだから！」

軽い口調で言うBBに対し、セデイスは元氣よく答える。

「BB：お前の方こそ大丈夫なのだろうな？」

「まあご心配には及ばずだよ：俺の自慢のISと魔法の力さえあれば：」

ナンバーズの皆を存分にサポート出来るからね：」

固い口調で言うトーレに、BBはやはり軽い感じで答える。

その後BBはポニーテールの男にこう尋ねる。

「そういえば親父：約束どおりでいいんだよな：？」

「ええ：一通りの仕事さえ終えたら：後はあなたの好きにしていますよ：」

「うっし！そう来なくちゃな！」

BBはガッツポーズを取り、そしてセデイスの方に向き直る。

「セデイス姉のオリジナルと俺の玩具：相手にすんのが実に楽しみだな」

「だね！私はともかくビーちゃんの力じゃ遊びになるかどうかは：微妙？」

「その辺は考えてやるさ：せっかく持ってきた玩具をすぐ壊すのはつまらないし：」

歪んだ笑みを浮かべて非常に悪趣味な事をBBとセデイスは口走る。

「ああ！ん、BBちゃんもセデイスちゃんも楽しそうで羨ましいわ」

そんな2人を見てクアットロがクネクネしながらそう言った。

「ルーお嬢様とミスター・シャアも全面協力してくれるって：」
デイエチがパネルを操作しながら呟く。

「それに：シャアには私が作った新しい作品をもう送ってありますからねえ：」

オットーやデイドと組めばすぐに何とかなるでしょうね：」

ポニーテールの男がメガネをクイツと上げて言う。

「そしてダメ押しに私が作った作品達を送り込むと…やれやれ…物騒な祭りもあったものだ」

ライネンが頭を掻きながらくたびれた感じに言う。

「準備は整いつつある…1つ大きな花火を…打ち上げようじゃないか…！」

スカリエッティが目の前のパネルを操作し、照明に光を灯す。

「ククク…ハハ…アッハハハハ…！」

スカリエッティは両手を広げて狂ったように笑い始める。

その眼前には数十個のE2と大量のガジェットドローン

そしてサーペント、グランチャー、バロンズウが所狭しと並んでいた。

「間違いなく…！素晴らしい一時になる…！フハハハハハ…！」

狂ったように笑い続けながらスカリエッティは言った。

そう…絶望へのカウントダウンは…既に始まっている…

第18話（後書き）

嵐の前の静けさパート2

前半、新たに加わったギンガとブレン組とのやり取りや
ヴィヴィオを中心としたほのぼの風景：

しかし打って変わって後半はシリアスに
予定より早々に破壊された最高評議会に
着々と準備が整いつつあるスカリエッティ一味：

そういうわけで次回から地上本部襲撃編

散々チョイ役だったBBとセデイスも本格始動

シアアの再登場、遂に動き出すゼストとマイヨや

最後の一枚、リーンの翼組の参戦など

休日編すら凌ぐカオス展開になる予定です。

それではまた

第19話（前書き）

襲撃編その1です。

※後書きは全部終わってからまとめて書きます。

第19話

公開陳述会前日、機動六課隊舎

翌日のそれに備え、六課のメンバーはナイトシフトでの警備をする事になった。

メンバーはなのは、ユーノ、ヴィータ、リィンに加え

フォワード陣とギンガ、勇、比瑠、更にはプリベントアのメンバーも
予言から推測される被害の規模を見越して、フルメンバーで警備にあたる。

その他、フェイト、はやて、シグナム、タック、マリナ、
ベルクト、ゲイナー、レントンが当日組となる。

そして万一手薄になった六課に戦力が投入されることを想定して
バレル、フェイ、アムロ、ガロードの4人は残る事になった。

屋上ヘリポート、なのはは地上本部へ出発するヘリに乗り込もうとするが

「あれ…ヴィヴィオ？」

六課寮の寮母であるアイナ・トラインに連れられたヴィヴィオを見つける。

「ごめんなさいねなのは隊長…どうしてもママ達のお見送りするんだって…」

それを聞いてなのは仕方ないなあ…といった感じにヴィヴィオに近寄る。

既に乗っていたユーノもヘリから降りてその後に続く。

「ダメだよヴィヴィオ、アイナさんにワガママ言っちゃ」

「ごめんなさい…」

表情を曇らせてヴィヴィオは謝る。

「夜勤の仕事は初めてだからね…僕達と離れるのがきつと不安なんだよ」

「そっか…」

側にいたユーノの言葉を聞いて、なのは優しい表情を浮かべてヴィヴィオの頬に手を当てる。

「なのはママとユーノパパ、今夜は外でお泊りだけど…」

明日の夜には2人ともちゃんと帰ってくるから」

「絶対…？」

「うん…パパもママも、約束はちゃんと守るよ」

そう言ってユーノはヴィヴィオの頭を撫でてやる。

なのはヴィヴィオの前で小指を立てる。

「いい子で待ってたらヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるから」

それを聞いてヴィヴィオは少し表情を明るくさせる。

「ママと約束ね」

「うん…」

ヴィヴィオも小指を立てて、2人は指切りをした。

＊

隊舎ロビー、夜勤組が出発した後、ベルクト、フェイト、バレル、フェイが集まっていた。

「いよいよ明日だというわけだな…」

「うん…」

ソファに座って腕を組み、固い表情で言うベルクトにフェイトが頷いて答える。

原因はやはり予言の内容と、そしてある1人の男にある。

「BB：俺達をこの世界に呼び込んだ奴が現れる可能性がある…」
バレルも同様に固い表情でつぶやく。

「金色の悪魔：鉄の傀儡：それらが何を指すかはまだわからんが：少なくとも公開陳述会は今まで以上に気を引き締めないといけないのは確実だ…」

「あの男の实力は未知数だものね：何が起きるかわからないもの…」

「地上本部の襲撃っていう大事があるのなら：それ相応の力が必要だもんね…」

ベルクト、フェイ、フェイトがそれぞれの意見を述べる。

「その男の目的が何なのか：俺達を連れてきたのは何故なのかもはつきりしないけど…」

スカリエッティと組んでる以上は碌な事は考えてないのは確かだろう…」

「いずれにしろ：明日奴が現れたらハッキリする事だ…」

バレルの言葉にベルクトはそう答え、ソファから立ち上がる。

そんなベルクトをフェイは急に心配そうな表情になって見つめる。

「ベルクト：お願いだから無茶はしないでね：あなたとフェイトさんを離れ離れにした原因

私達だって自分の大切な人達を傷つける原因になった張本人：憎いのは当たり前：

でも、敵の力は未知数よ：だから：

「フツ：言われなくても当たり前だ：俺はそんなに死に急ぐような真似はしない：

第一：俺に何かがあったらフェイトが悲しむ：そうだろう？」

何を今更といった感じにベルクトは答え、それを聞いたフェイトは顔を赤らめる。

その様子を見たバレルとフェイは相変わらずだなあと思いつつも安堵を浮かべていた。

「お前達の方こそ、留守中は気をつけろ：何が起こるかわからんからな」

「わかってる：六課は今の俺達にとって大切な居場所だ：何が来ても守って見せるさ」

ベルクトの言葉に、バレルは拳を固く握って真剣な表情で答えるのであった。

*

地上本部、前日という事もあり多数の局員が警備に当たっていた。

「あれ：お前らひよっとしてブレンの：」

「ああ：久しぶりです！」

既に外部警備に当たっていたプリベンターの5人の内デュオが勇と比瑪の姿を確認して親しげに声をかけてくる。

「直接会うのは初めてかな：？お2人もこっちに来て長いって聞くけど」

「そうだな：そっちの方も聖王教会でいろいろ活躍してるって聞かし：」

カトルと勇が互いに穏やかな表情で会話を行う。

「その聖王教会って立場の所為でまた面倒でなあ：」

「何かあったの？」

急にくたびれた感じになって話すデュオに比瑪が疑問を感じて尋ねる。

「地上本部は昔から教会に対してあまりいい印象を持ってなくてな教会直属という名目で動いている俺達への風当たりが悪いという事だ」

「それでまあ：譲歩した結果外部警備だけなら許してやるみたいな話になりましたね：」

トロワが普段の淡々とした口調で疑問に答え、カトルが苦笑いしながら付け加える。

「あのレジアスとかいうオッサン：ホントに印象悪いぜ：」

「フン：権力を盾にするあのような男の事など：一々気にする事もあるまい」

デュオと五飛がそれぞれイラついた感じに言い捨てる。

するとその時

「あっ：と：」

「失礼……………」

勇が急ぎ早に歩いてきたとある地上局員とぶつかってしまふ。
局員は一言侘びを言った後、スタスタとその場を立ち去っていく。
「……………？……………今の男……………」
だが、今まで沈黙を保っていたヒイロは帽子の影から一瞬見えた
局員の顔をどこかで見たような気がして、反応を示すのであった。

＊

地上本部から大分離れた位置の上空
その場所に音も影もなくいきなりBBとセデイスが現れる。

「あれね、今回のターゲットって奴は」
額の前に手を置いて遠くを見つめる仕草を取りながらセデイスはそ
う言う。

「…………セデイス姉、その格好は何かなんねえの？」
そんな彼女の格好を見てBBはそう呟く。
セデイスは白いフードで頭をすっぽり隠し、その顔にはピエロのお
面が装着されている。

「え？だってオリジナルと会った時の楽しみが減るじゃない？」

「そうは言ってもなあ…前までミイラ女で次はピエロかよ…」

しれっと答えるセデイスに対し、BBは呆れ気味に言う。

「第一…普段からヘルメット被ってるビーちゃんには言われたくないわよ」

「うっ……………」

痛い所を突かれてしまいBBは反論出来なくなってしまう。

その後セデイスは再び地上本部の方に向き直りこう呟く。

「本当に楽しみ〜これが上手くいけばパパはまた私を誉めてくれる…
そう思うと明日が待ち遠しくて仕方ないわ〜…」

「……………」

ウキウキとした感じのセデイスをBBは黙って見つめている。

(…………セデイス姉にとつての楽しみが親父の役に立つ事か…………)

俺は別になあ…………まあ兄弟つってもそれは個人差だし…俺は俺の楽しみをすればいいんだしな…)

＊

陳述会当日、開始に伴い警備もより一層厳しくなる。

はやてはカリムと一緒に陳述会に参加している。

なのは、ユーノ、フェイト、ベルクトの4名が内部警備に当たっており

その他のメンバーが外部警備を行っている。

尚、内部にいるメンバーは地上側の指示もあり、デバイスを外のメンバーに預けている。

本部の西方面でゲイナーとレントンが会話を行っている。

「けど…本当に俺らだけで良かったのかなあ？どうせなら俺らも向こうにいた方が…」

「重要度で言えばこっちの方が上だよ…それに、シャマルさんやザフィーラもいるから大丈夫さ」

悩んだ表情を浮かべるレントンに、ゲイナーはこう答える。

「それに…ティファがあんな状況な以上…ガロードは離れられなかったろうしね」

何故にガロードだけが残っていたのかというと

陳述会の2日前あたりから、またティファの様子がおかしくなっていたのだ。

まるで何かに怯える小動物のように震えている時間が多くなっていたのである。

ガロードが聞き出した情報によれば、何か大きな悪意が近づいているとの事。

当初はそれを地上本部襲撃の事だと考えていたが
ティファの尋常じゃない怯えようを見てガロードは耐え切れず
とてもじゃないか離れる事など出来なくなってしまうたというわけ
である。

「……それにレントンだって確かめたい事があるんだろ？」

「……うん。本当にそのスカリエツティって奴が、コーラリアンの
事を…」

ゲイナーの問いかけに対し真剣な表情を浮かべてレントンは答える。

以前より聞いていたコーラリアンが敵として現れたという情報

それに関してはレントンとエウレカは特に強い驚きを示していた。

ニルヴァーシュが代理指令クラスターとなり、スカブとの調停も終
わった以上

抗体としてコーラリアンが現れる要素はほぼ皆無の筈なのだ。

なのに狙いすましたかのごとく自分達の敵として現れている…

地上本部を攻めるといふのはつまり相当な戦力が必要という事であ
る。

今回の襲撃にその件のコーラリアン「らしきもの」が含まれている
可能性もある。

自身のパートナー同様、コーラリアンとの関わりが3人の中で最も
深いレントンは

それを己の目で確かめられる可能性があるのなら…という理由でも
ここにいたのであった。

「エウレカの事も心配だけど…でも、どんな世界であれ

無関係の人に危害を加える奴らがいるってなら…俺はそれを何とかしたい…」

「それは当たり前だろ？六課の人達はもう、僕達にとっては大切な仲間だ

仲間や多くの人々を救う為に戦う…何たって僕らは炎の魔導師団 GL なんだから」

得意げに答えるゲイナーを見て、レントンも緊張が解れ、笑みを浮かべた。

＊

別の場所を警備しているタック、マリナ、シグナム、ヴィータはそれぞれ肩を並べて歩きながら念話で会話を行う。

（それにしても…いまいぢわからねえ…予言どおりに事が起こるとして

内部のクーデターって線は薄いんだろ？）

（アコース査察官が調査してくださった範囲ではな…）
悩むヴィータにシグナムが固い声色で念話を返す。

（そうすると…やっぱり外部からって事になるわね…）

（だとすると目的は何だ…？犯人がスカリエッティの一味だという

なら…)

(地上本部を襲うメリットが全く無い…)

マリナの念話にタックが疑問を漏らし、それをヴィータが次いで続ける。

(兵器開発も行ってるというなら、兵器の実験と威力証明っていうのが一番近い線かしら…?)

(だが…それだけというなら他にいくらでも場所がある…デメリツトの方が大きいだろう…)

マリナが一応の答えを示すが、シグナムはそれに難色を示す。

(どうも読めねえなあ…)

不磨難な表情を浮かべて、ヴィータは念話でこう言った。

*

陳述会開始から4時間、辺りが夕暮れになってきたその時
その上空でゼスト、アギト、そして濃紺色基調のバリアジャケット
を纏い

背部に鷹の羽を模したウイングパーツを装着したマイヨが離れた位置
から地上本部を眺めていた。

「連中の尻馬に乗るのはどうも気が進まねえけど…」

「だが貴重な機会ではあろう。今日ここでゼストの果たすべき事が果たせるならな」

空中で胡坐をかいて不満げに言うアギトに対し、固い表情でマイヨが答える。

「まあ：ルールにはシャアの奴がついてるから心配ねえけど：」アギトがそう言った後、マイヨはゼストの前のモニターに映るレジアスに目を向ける。

「お前の目的がこのレジアス・ゲイズという男に真実を問いただす事：

だが地上本部の守りは固い：ならば私とアギトでお前の道を開くまでだ」

「お、おうよ！ゼストの旦那はあたしとマイヨの旦那で守ってやっから！」

ゼストの顔を見て真剣な表情で言うマイヨとグツと拳を握って辺りを飛び回るアギト。

そんな2人の様子を見て、ゼストは目を閉じ静かに答える。

「すまん：俺のワガママに付き合わせて：」

「言ったろう？私にとってあのスカリエッティという男やシャアの事などどうでもよい

私はお前から受けた恩を返す為だけに今は行動している。

その為なら：どんな汚名だろうがいくらでも被る覚悟はある：」

「ああ：何てたってゼストの旦那はあたしとマイヨの旦那の命の恩人だからな」

申し訳なさそうに言うゼストに対し、マイヨとアギトは全く気にしていない感じに答えた。

＊

地上本部周辺とその他の場所、ナンバーズやルーテシア、シャア、シンシア、アネモネ

BBにセデイス、それぞれが己の指定位置へと着いていく。

「いよいよだな…」

「うん…」

地上本部を見つめて言うシャアにルーテシアは頷いて答える。

「ルーテシア…私達の本来の仕事は六課に着いてからだ…何度も言うが…」

「大丈夫…無茶はしないよ…だって、私がいなくなったらシャアが悲しむもの…」

「そうか…」

シャアの言葉を遮るようにルーテシアが微笑を浮かべて言い、それを聞いてシャアも笑みを浮かべる。

するとその時、2人の前にモニターが現れ通信が入る。

「大佐、こちらは指定の場所に到着しました」

「オットーとディードもだよ！後はゴーサインを待つだけ！」

映し出された黒髪ショートの男性とエメラルドグリーンツインテールの少女がそう言う。

「わかった。作戦は間もなく開始される、私達もすぐそちらに向かうからそれまで頼むぞ」

「了解です!!」

「大佐とルーちゃんも早くこっちに来てね」

「うん：ギユネイとクェスも頑張ってるね」

通信を聞いて真剣な表情で言うシャアに対し男性一ギユネイ・ガスは力強く敬礼して答える。

女性一クェス・パラヤはルーテシアに対して手を振り、ルーテシアも笑顔で答えた。

そして通信が途絶え、シャアは内心でこう呟いた。

（プロジェクトFか：凄まじいものだな：記憶や性格の改変まで行えるとはな：）

*

スカリエッティのアジト。多数のモニターを前にしてウーノはパネルを操作し

その背後でスカリエッティが椅子に腰掛け、両サイドにはライネンとポニーテールの男が立っていた。

「ナンバーズ、NO. 3 トーレからNO. 12 デイドまで全機配

置完了：」

「ミスター・シャアやゼスト殿も所定の位置に着かれた」

「私とビーちゃんもスタンバイOKだよ」

「攻撃準備も万全。後は開始の合図を待ただけだ」

ウーノに引き続いてトーレ、セデイス、BBがモニター越しに報告する。

「クッククック……アッハッハッハッ……」

「楽しそうだな……ジエイル？」

静かに笑うスカリエッティを見て、ライネンもうっすら笑みを浮かべて問いかける。

「楽しいさ……この手で世界の歴史を変える瞬間だ……研究者として心が沸き立つじゃあないか」

「わかりますよその気持ち……我々3人には世界を動かすだけの力があるのですから……」

「まあ……私はこの世界がどうなろうと知ったところではないがね……」
くつくつと感情を抑えながら言うスカリエッティにポニーテールの男もまた笑みを浮かべて答える。

ライネンもいつも通り一步引いた立場ながらも、普段よりは楽しそうな感じが見て取れる。

そしてスカリエッティは椅子から立ち上がる。

「我々のスポンサー氏……ゲイズ殿にとくと見せてやろう……我々3人の研究と開発の成果をな……」

そして抑えていた感情を爆発させたかの如く声を張り上げて叫んだ。

「さあ、始めよう……！」

スカリエッティのその言葉を合図にウーノはパネルに手を置く。

「IS発動……フロレス・セクレタリー……」

ウーノの足元にテンプレートが展開し、先程までとは比べ物にならない速度でパネルを操っていく。

（いよいよ開きましたね……私達の思いを乗せた……破滅への道が）
メガネをクイツと上げ、ポニーテールの男は内心で呟いた。

＊

「ミッションスタート!!」

スカリエッティの合図を聞いてクアットロが高らかに言う。

「アスクレピオス：限定解除…」

ルーテシアは両腕のデバイスを交差させ、紫色の魔力光を纏っている。

その後クアットロとセデイスがパネルを出現させ、地上本部の管制にクラッキングを行う。

「しかし驚いたわセデイスちゃん。クラッキング技術まで備わってたなんて」

「まあねー私は試作シリーズらしいから、大抵の事は出来るように設計したって

パパも言ってたみたいだから」

クアットロとセデイスが互いに薄ら笑いを浮かべ（セデイスはピエロマスクを被っているが）

甘ったるい口調で会話を行う。

クアットロとセデイスのクラッキングにより、地上本部のシステムは次々に侵食されていく。

「セデイスちゃん的能力とクアットロさんのISシルバーカーテン……銀幕芝居をお楽しみあれ！」

その間にセインがIS—ディープダイバーを用いて管制室に侵入。事前に用いていた爆弾を使って管制室内を爆破する。

地上本部深部、防壁などのエネルギー制御を行っているその部屋で事前に侵入していたチンクが行動を開始する。

「IS発動：ランブルデトネイター」

防壁制御機械に突き刺したナイフ—スティングーにテンプレートが浮かび上がる。

チンクが指を鳴らすと同時にナイフは爆発、辺り一面を火の海にしてい

「防壁出力減少：チンクの奴は成功したか……さて……俺の出番だな」
メット越しに地上本部を眺めていたBBがそう呟き、遂にその力の一旦を見せ付ける。

BBは足元にナンバーズと共通する漆黒のテンプレートを展開する。
「座標指定：X224—1208：Y224—904……対象範囲への空間清浄を行う……」

両腕を広げて怪しげな言葉を紡いでいく。すると地上本部を囲むよ

うに

漆黒の線で描かれた四角形のサークルが出現する。

「IS発動…空間支配…」

BBがそう呟いたと同時にサークルから一瞬眩い光が放たれる。それが終わった後、BBが呟く。

「万全の防壁を吹っ飛ばすのは力の無駄遣いだからな…チンクがいて助かったよ」

「まあビーちゃんならこんな回りくどい事しなくても一瞬で地上本部を消せるでしょ？」

「無茶言うなよセデイス姉…そんな使い方したら俺の体が先にぶっ壊れるっつーの…」

第一俺ばかり動いてたらみんなの仕事が無くなるだろうが？」
軽いノリで言ってきたセデイスに対し、BBは呆れた感じに言った。

BBのISの1つ一空間支配……………

なんと彼は自身の能力を使い、地上本部を取り囲んでいる巨大で堅牢な魔力防壁を

先程出現させたサークルによって丸々消滅させてしまったのである。

「ルー御嬢様…セデイスちゃん、お願いします…」

「了解♪」

クアットロの言葉にセデイスは一旦クラッキングを止めて

ルーテシアの隣へと移動し、足元に黄色い魔法陣を展開する。

「遠隔召喚…」

「開始ッ!!」

セデイスとルーテシアは地上本部のあらゆる場所に黄色と紫の魔法陣を展開する。

そして紫の魔法陣からはガジェットドローンが

黄色の魔法陣からはサーペント、グランチャー、バロンズウが次々と出現する。

それらの大群はあつという間に地上本部周辺を取り囲んでいく。

「IS：ヘヴィバレル…」

離れた位置でディエチが砲台ーイノームスカノンを構える。

「バレットイメージ：エアゾルシエル…」

砲台の先端に光が収束していき

「発射…」

ディエチの言葉と同時にオレンジの閃光が地上本部の一面に向かって放たれる。

そして着弾と同時に麻痺性のガスを撒き散らし、多数の局員を無力化していった。

別の場所の上空ではトーレとシンシア、ピンク髪でヘッドギアを装着し

半月型の実刃武器ーブーメランブレードを両手に構えた女性ーセツテが立っていた。

「セツテ、お前は初戦闘だが」

「心配ご無用、伊達に遅く生まれていません。姉様やシンシア様の足は引っぱりませんよ」

トーレの問いに機械的に淡々とセツテは答える。

「やれやれ…あんな雑魚連中じゃ面白くもなんともないんだけどなあ…」

離れた位置にいる武装局員の大群を見ながら、明らかにやる気なさげにシンシアは呟く。

「文句を言うな。これも仕事の内だ」

「チェ：最近はそのうちの子にかかりつきりでアタシとは全然遊んでくれなかったのにさ…」

ピシッと言い放つトーレにシンシアは不満を漏らす。

「申し訳ありませんシンシア様、私が未熟なばかりに」

「…………アンタ喧嘩売ってる？」

セツテは一応謝罪するもやはり機械的な棒読み口調なので聞いているシンシアは逆にイラつき、セツテを睨みつける。

「…無駄口は終わりだ、行くぞ！」

トーレはその口論を無理矢理終了させ、そして身構える。

「IS発動：スローターアームズ…」

「ライドインパルス…！」

「…はあ…まあいいや、行くよドミネーター…！」

シンシアも少しは真剣な雰囲気を感じ

「「アクション…！」」

3人は同時に行動を開始し、武装局員の群れへと突っ込んでいった。

「防壁が無くなった以上どうにでもなるんだけど」

無駄な力を使うのは面倒臭いので「無力化させて頂きます」

甘ったるい、実にイラつく口調でクアットロはパネルを動かしながら言う。

それと同時に外に展開していたサーペントやグランチャーの何体かが本部内部へと侵入していく。更にその後建物周辺にいたいくつかのガジェットがAMFを展開

本部の機能を停止させて中の人間達を閉じ込めていく。

一連の作業が終わった後、B Bは呟く。

「さて…次の仕事に向かっておくか…」

B Bがそう呟いたと同時に再び足元に漆黒のテンプレートが展開次の瞬間、B Bの姿が一瞬にして消滅する。

「それじゃ…私もトーレさん達と合流しないとね…」

セデイスもそう言って上空に向かって飛行し、その場を離れていった。

＊

陳述会会場、A M Fによってシステムが粗方ダウンしてしまい

入り口のシャッターが閉じ、電気も消えた暗闇の中

レジアスは目の前の机に拳をバンツ！と叩きつける。

「馬鹿な…！地上本部の防壁が破られただど！管制室は何をやっている…！」

凄まじいまでの怒りを見せてレジアスは怒鳴る。

「A M F濃度が濃い…通信も通らへん…」

会場内にいたはやては現在の状況を分析していき、そして悔しげに

歯を食いしばる。

「……やられた……！まさか防御壁を丸っと消す力があつたなんて……！」

＊

内部警備を行っていたなのは達が一箇所に集まって現状を話し合っていた。

「会議室や非常口への入り口は完全に隔壁ロックされてるね……」

「しかも防御壁が消滅している……ここにもいつ敵が来るかわからない……」

真剣な表情でなのはとユーノが呟く。

「エレベーターも動かないし……外への通信も繋がらない……」

「しかも今の俺達はデバイスを持っていない……絶望的だな……」

フェイトとベルクトも同様に真剣な表情で言う。

その後エレベーターの方に目をやりながら、ベルクトとなのはが言った。

「だが……ここでグズグズしてるわけにはいかない……そうだろう？」

「うん……みんな、ちょっと荒業になるけど付き合ってくれる？」

「当然！」

「当たり前だ！」

なのはの言葉にフェイトとユーノが力強く答える。

その後4人はエレベーターの扉を破壊。

手に魔力を集中させ、ワイヤーを伝って無理矢理下層へと降りていくという

フェイトの言ったとおりの荒業を使う。

「魔法というのも使いようだなフェイト？」

「うん…陸士訓練校で習ったんだけど…いろんな訓練やってとくもんだなって思うよ」

フェイトに続いてワイヤーを伝っていくベルクトの言葉にフェイトは答える。

「目標地点は地下通路ロータリーホール！そこまで一気に行くよ！」

「うん！」

一番下に行くのはが言い、それに対して彼女の上にいるユーノが答える。

しかし、そんな中でベルクトの頭の中にはある疑念が浮かぶ。

（防壁を消滅させるなど…もしかしたらあの男なのか…？）

*

地上本部周辺、時間もかなり経過し辺りは完全に夜になっている。

「ハアアアア！！」

そんな中、マリナがライフルの回転乱射を行い、周囲のガジェットを落としていく。

「チャージモード！照射開始！！」

タックはカートリッジロードで魔力を上げ、ライフルから閃光を放ちそれをずらしていくことでガジェットを纏めてなぎ払っていく。

「ターゲットロック……排除開始……！！」

ヒイロはバスターライフルを両手で構え、回転掃射一ようするにローリングバスターライフルを使い

幾多のガジェット達を焼き払っていく。

「オラオラオラオラ！！」

「躊躇ってはいられない……！！」

地上ではデュオとカトルがそれぞれビームシザーズとヒートショットを構え

向かってくるガジェットやサーペントを次々と斬り払っていく。

「数だけで勝てると思うてか…なめるなあっ！！」

五飛は怒りのままに両腕のドラゴンハングを伸ばし敵を捕らえる。そして捕らえたまま別の敵に叩きつけ同時に破壊していく。

「遅いな……」

トロワは軽快なジャンプとステップ移動を繰り返しながら両腕のガトリングから魔力弾を放ち、敵を撃ち碎いていく。

こんな感じで敵の大群を相手にする7人だが、一向に数が減らない。寧ろどんどん増えていく感じさえしていた。

「クッソ！一体何体召喚したってんだよ！！」

イラつき気味にデュオは怒鳴りながら、ビームシザーで敵を切り払う。

「弱音を吐いている場合か！数如きにうろたえるな！」

そんなデュオに喝を飛ばしながら五飛はビームトライデントで敵を突き倒す。

「とはいえ…流石にこれだけの物量は厄介だな…」

「地上本部を落とそうってんでしようからある意味当然よ…」

それぞれライフル、左腕の籠手から魔力刃を形成して接近戦で敵を落としながら固い表情でタックとマリナが呟く。

「ここで俺達があきらめたら本部は終わる…そうしない為にも…」
ヒロがいつもの冷静な口調で呟きながらバスターライフルを構える。

が、その時

「座標指定……空間周辺の切り取りを開始………」

そんな声が響いたかと思うと、その場で戦っていた全員の周辺に薄いフィールドが展開する。

「なっ…！オイオイなんだよこりゃあ！」

突然の事態にデュオが驚いて声を上げる。

「攻撃が通らない…捕獲結界か…？」

試しにガトリングを放ち、その攻撃がフィールドに阻まれた様子を見てトロワが呟く。

すると次の瞬間、戦っている皆から見える位置にBBが突然姿を現

す。

「あいつは……！」

「B B……！」

その姿を見てタック、マリナが驚きを浮かべる。

フィールドに捕らわれている皆の姿を見て、B Bは甲高い声で言う。

「ご自慢のプリベンターの皆さんとガーディアンの適合者さんも……
情けないもんだねえ

いくら力があっても……空間ごと切り取られて隔離してしまえば無力
となる……ククク……」

メット越しに口に当たる部分を手で押さえてB Bはクスクスと笑う。

I S一空間支配による空間切り取りによる捕縛能力……

プリベンターとタック、マリナはそれによって完全に閉じ込められてしまったのだ。

「クッ……ふざけるなあ……！」

五飛が怒りを露にしながらビームトライデントでフィールドを攻撃するが

それが破られるような素振りとは全く見られない。

「無駄無駄……内部からの攻撃は勿論……外部からもほぼ全ての攻撃を遮断する……」

何せ空間ごと切り取っているんだからね……無駄な努力だよ」

五飛に対して嘲笑うかのようにB Bは言い捨てる。

「さてと……防壁の切り取り……敵戦力の半減……親父に言われた仕事はこれで終わりだ……」

後は……好き勝手に楽しませて貰いますか……！」

楽しげな口調でB Bはそう言った後、捕縛した7人を完全に無視して足元に漆黒のテンプレートを出現させて一瞬でその姿を消した。

＊

機動六課隊舎、ティファのいる自室

「ティファ！おいどうしたんだよ！」

その部屋でガロードに体を支えられながらティファは両腕で体を抑えてガタガタ震えていた。

ティファのただならぬ怯え様を見てガロードは必死だ。

「…逃げて…早く逃げて…！！！」

「逃げるって…！何が起きてるんだよ！」

「来ます…！！たくさんの…たくさんの悪意が…！」

顔面蒼白、目に涙さえ浮かべてティファはガロードの顔を見つめて必死に訴える。

「…くそっ！」

そんな彼女の様子を見てガロードは彼女の手を引いて部屋から飛び出す。

（何が…何が起きてるってんだよ…！！）

ティファと共にガロードはひたすら廊下を走る。

その時、六課全体に警報が鳴り響いた。

＊

六課管制室、敵の反応をシャーリーが知らせる。

「嘘でしょ…高エネルギー反応2体…加えて航空戦力が4体…推定リンクA A A Sです!!」

シャーリーが叫ぶと同時に側にいたアムロも何かを感じ取る。

(…!!…こっちに来たのか…シャアッ!)

アムロは慌てて入り口の方に駆け出し、出際にグリフィスに指示を出す。

「俺とバレル達で敵の迎撃に向かう!後の指示は任せた!」

「了解!」

アムロの指示にグリフィスは即座に答え、そして皆の方に向き直る。

「待機部隊迎撃用意!近隣部隊に応援要請!総員最大警戒態勢!バックヤードスタッフは非難を!」

＊

地上本部に向かってゼスト、アギト、マイヨは高速で飛行していた。その途中で何者かからの警告が響き渡る。

『こちら管理局！あなた方の飛行許可と個人識別表が確認出来ません！』

直ちに停止して下さい！それ以上進めば迎撃に入ります！』

「この声……！」

聞き覚えのある声にアギトを首を傾げる。

と、次の瞬間下方の雲の間から数発の赤い魔力弾が3人に向かって飛んでくる。

3人は横に飛び退いてそれを回避する。

「にやろう！ブレネンクリューガー！」

「イーグルバレット……！」

アギトとマイヨがそれぞれ背部の羽から魔力弾を数発形成し飛んできた魔力弾に命中させる。

すると、魔力弾が爆発すると同時に鉄球が出現。3人に向かって飛んでくる。

「実体弾……！」

「ほう……なかなか味なマネを……」

アギトが驚き、マイヨが感心しながら呟きつつ、防壁を張ってそれを防御する。

「ギガントハンマー……！」

直後リインとユニゾンを行い、白い騎士甲冑を纏ったヴィータがギガントフォームのアイゼンを構えながら飛び上がってくる。

そのハンマーをゼストに向かって振り下ろし、衝撃を巻き起こした。

「ゼスト!!」

「紫電……」

突如の襲撃にマイヨは驚き、ゼストの名を叫ぶが更に直後マイヨの背後から炎を纏ったレヴァンティンを構えたシグナムが現れる。

「!!!グッ……!!!」

「一閃!!」

咄嗟にマイヨはレーザーソードを構えてそれを受け止めるも攻撃の衝撃によって下方へと吹き飛ばされる。

シグナムはその後を追っていく。

（ヴィータ、こちらは私がやる。お前とリインでそっちを頼む!）
（おう!!）

シグナムの念話にヴィータが答え、ゼストの方へと向き直る。

そこにはアギトの姿は無く、髪の色が茶色から金に変化し、纏っているコートの一部が変わったゼストが立っていた。

「すまんアギト…助かった…」

『なんのなんの!!』

ゼストどユニゾンしたアギトがゼストの体内で得意げに答える。

それを見たヴィータはアイゼンを構えなおし、己の名を名乗った。

「管理局機動六課スターズ分隊副隊長、ヴィータだ!」

「……ゼスト」

ゼストも手にした槍を構え、静かに己の名を名乗った。

ヴィータ達から少し離れた場所で、シグナムとマイヨも相對する。

「……成る程、なかなかの腕前のような。私と刃を交えるには相應しい相手かどうか…」

マイヨはまるで値踏みをするかのような視線でシグナムを見つめる
シグナムはそれに動じる事無くレヴァンティンを構える。

「本局機動六課、ライトニング02…シグナムだ」

「……ギガノス帝国軍大尉…マイヨ・プラート」

剣の騎士とギガノスの青き鷹の一騎打ちが始まる…

第20話（前書き）

襲撃編その2です。

第20話

隊長陣との合流地点を目指し、フォワード陣は地下通路を突き進んでいた。

「！！…マツハキヤリバー！！」

その途中でスバルが何かの気配に気づいて立ち止まり、シールドを展開する。

直後、スバルに向かって何かが直撃する。

が、その隙を突いて上空からノーヴェが現れスバルに蹴りを放って壁に叩きつける。

「スバル！！」

ティアナが慌てて振り向いて叫ぶが。

その瞬間にティアナ達を取り囲むように多数の桃色のスフィアが表れる。

「ノーヴェ…アンタ作業内容忘れてんじゃないでしょうね？」

「そうっスよ…捕獲対象3名…生かしたまま連れて帰るんスから」
その場に背部にボードを構えたアネモネと真っ黒いボードを左手に持ったウェンディが現れる。

「うるせーよ…忘れてねえ…タイプゼロがこれ位で潰れるかよ…」

2人の言葉にノーヴェはぶっきらぼうに返答する。

「戦闘…機人……」

壁に叩きつけられたスバルが苦しげに呟く。

「それに……アイツは……」

アネモネの姿を確認してティアナは表情を陰しくさせた。

＊

六課施設の防衛をバレル達に任せ、アムロはプレッシャーを辿って上空を飛んでいた。

（1つじゃない……：シャア以外にも誰かがいる……それも初めてじゃない……）

プレッシャーを複数個感じてアムロは表情を歪める。

「「ファンネル……！」」

その時辺りに二種類の声が響いたかと思うと

アムロを取り囲むようにして黄色いユニットが複数個出現する。

「チィッ……！」

アムロは舌打ちをしつつもフィンファンネルを分離。

敵のファンネルから放たれる攻撃をピラミッド型の防御フィールドで防ぐ。

「久しぶりだなあ！ ロンド・ベルのエース……！」

黄色と緑基調のバリアジャケットを纏い、ライフルと盾を装備したギニューが姿を現す。

それに引き続いて紅白カラーのバリアジャケットとガトリングと盾を装備したクエス

更には以前と同じ赤基調の格好のシャアが姿を現した。

「シャア……！」

「アムロ……悪いが今回は無駄な問答をするつもりは無いのでな……」

やらせてもらうつ！」

以前相対した時の嘲笑するかのような表情とは打って変わり
今のシャアは冷酷な表情を浮かべていた。

「存分に撃ち込んでやれ！！」

「了解！！」

シャアの指示に続き、3人は全てのファンネルを分離させる。
計18機のファンネルがアムロの周囲を飛び交う。

「フィンファンネル！！」

アムロも背部のフィンファンネルを全て分離させて対抗する。

ギユネイのファンネルが攻撃を放つと同時にアムロは斜め上に飛行
流れながらライフルから魔力弾を放ち、その2つを撃破する。

直後今度はクエスのファンネルが下方から向かってくる。

アムロはそれを砲撃が放たれる前にフィンファンネルの1つで計3
つを撃ち落とす。

そのままサーベルを抜き放ち、シャアに突っ込んでいく。

しかし、その前にサーベルを構えたクエスが立ちはだかる。

「大佐とルーちゃんの邪魔はさせないよっ！」

「この声…あのαのパイロットか！…子供に付き合っていられるか
！」

アムロはクエスを斬り払い、後方に飛んで距離を取る。

が、その一瞬の隙を突くようにシャアの赤いファンネルが背後に現
れ攻撃を放つ。

「ぐあっ！」

反応の遅れたアムロはそれをまともに喰らってしまう。

「もらった！！」

更にギユネイがシールドを前に構えて、そこから三条の閃光を放つ。
アムロはそれをシールドを構えて防御し、バズーカを投げ捨てて上
空に飛び上がる。

「武器を捨てた…！？」

ギユネイが驚くのと同時にアムロはワイヤーを引き、ギユネイに向

かってバズーカを放つ。

しかし、事前にそれを察知したシャアが彼の前に出て盾を構えてそれを防ぐ。

「ギユネイ、油断するな」

「す、すみません大佐！」

冷静に言い放つシャアにギユネイは慌てて答える。

（クッ：3対1とはいえ：シャアもいるんじゃない…）

現状が不利な事を悟りアムロは齒噛みする。

強化人間や凡百のニュータイプ相手なら3人だろうが5人だろうが何とかなるが

それにシャアが加わっていると話が変わってくる。

3人の連携は非常に熟練された動きで、アムロといえどそう簡単には潜り抜けられなかった。

そうこうしている間に4人は、戦闘を続けながら六課の方へと近づいていた。

その時六課施設から爆発が起こり火の手が挙がる。それに気づいたアムロは驚きを浮かべる。

「フフッ……上手くいったな」

「！……そうか、最初から俺を引き寄せるのが目的だったのか！」
ほくそ笑むシャアを見てしてやられたと感じたアムロは悔しげな表情を浮かべ

急いで六課の方に向かおうとする。

「行かせない！！」

しかしアムロの背後からクエスがガトリングを放って妨害する。

咄嗟にアムロは振り向いて盾で防御するが、更に今度は頭上からギユネイがライフルを放つ。

アムロはそれを当たる直前紙一重で横にステップ移動してかわす。

（迂闊だった…！シャアに固執しすぎたのか…！）

＊

地上本部の近くの上空、ヴィータとゼストの攻防が続いていた。

「はああああ！！」

「でやああああ！！」

互いに咆哮して武器を打ちつける。

「ゼストだったか…何企んでんのか目的を言えよ！納得できる内容なら管理局はちゃんと話を聞く！」

ハンマーと槍が交わり、火花が散る中ヴィータはゼストに訴える。

「若いな…」

ゼストは静かにそう呟くと、周囲に数個の火炎弾を形成する。

それを見たヴィータも周辺に氷の刃を形成する。
直後、それらが同時に放たれて爆発が巻き起こる。
互いに距離を取り、槍を構えなおしてゼストは言う。

「だが、いい騎士だ」

『旦那あ！誉めてる場合かよ！！』
体内にいるアギトが呆れた感じに叫ぶ。

ヴィータもアイゼンを構えなおして、再びゼストに向かって突っ込む。

（リン：気づいたか？）

（はい：向こうのユニゾンアタック：微妙にですがタイミングがズレています

融合の相性があまり良くないと見ました…）

何度も武器を打ち合いながら、ヴィータとリンは念話でやり取りをする。

そして一旦距離を保ち、苦々しい声色で念話続ける。

（あいつら：融合相性はともかく錬度が高え：しっかり合わせてくる…！）

するとヴィータと同様に距離を保ったゼストがアギトに言う。

「アギト、融合を解除しろ。俺がフルドライブで一撃で落とす」

それを聞いてアギトは驚愕する。

『冗談！！マイヨの旦那も言ってたじゃんか！フルドライブなんか使ったら旦那の体は！』

「終わらんさ：為すべき事を終えるまではな！」

態度を変えないゼストにアギトは怒りさえ見せる。

『ふっざけんなよ！旦那の事は、あたしが護るって言っただろ！！
旦那の命は削らせねえ！あたしが必ず旦那の道を通してやる！！』

アギトは両手に炎を灯し、それを前方に向かって突き出す。

『猛烈炎熱！烈火刃！！』

アギトの言葉と同時に、ゼストの槍が炎に包まれた。

＊

ヴィータ達と少し離れた場所でシグナムとマイヨも戦闘を行っていた。

互いに刃を交わらせては離れ、また交わらせて離れの繰り返しだった。

「ハア…ハア…」

一旦攻防が止み、距離を取ったシグナムは額に汗を浮かべて呼吸を荒げていた。

対するマイヨは多少の疲れを見せるも、シグナム程の疲労は感じさせない。

（スピードで…ついて行くのが精一杯などと…嘗てのテストロッサを彷彿させる…！）

内心でシグナムはこう呟く。

敵の使う武器ーレーザーソードはそれ程の威力は無く

自身の持つレヴァンティンの方が破壊力は上だ。

しかしマイヨはその程度の差など簡単に覆す程のスピードを持っていた。

一度刃を交わらせて、多少の間髪を置かずにもう別の方向から刃が向かってくるのだ。

シグナムはそれを受け止めるのが精一杯で、レヴァンティンの本来の力を

十分に発揮できない守りの一手の戦いを強いられていたのだ。

「フム：私のスピードについてくるとは：ゼストやドラグナーの坊や達に匹敵する：だが」

マイヨはそんな事をシグナムを見据えながらそんな事を言う。

「戦うに相応しい相手といえど：私を倒すにはまだ：足りん！」

直後、マイヨが猛スピードで一直線にシグナムに突っ込んでくる。

「レヴァンティン！！」

シグナムはすかさずレヴァンティンをシュランゲフォームに変形させ連結刃を振るって多方向からマイヨに攻撃を放つ。

しかしマイヨは連結刃の隙間を急速飛行と急停止を繰り返しながら機械的に小刻みに潜り抜けていき、シグナムの眼前に迫る。

「はあっ！」

マイヨはレーザーソードをシグナムに振り下ろすも、咄嗟にシグナムは鞘を使ってそれを防御する。

そしてレヴァンティンを再び通常形態に戻し、マイヨに向かって振るう。

マイヨは後方に大きく飛び退いてそれをかわし、距離を保つ。

「貴様の目的は何だ！」

距離を保ったシグナムは声を荒げてマイヨに叫ぶ。マイヨは対照的に冷静な口調で呟く。

「目的か：今の私の目的は恩人に対する義を果たす事：それ以外の

理由など無い……」

「貴様も奴も理由を言えぬと言うなら……むざむざと道を譲るわけにはいかん！」

そう言っただけシグナムは再びレヴァンティンを構え直す。

「言う必要など無い……恩人への恩を返す為ならば……如何なる雑言を言われようと……」

私は止まらん……戦う理由がある限りはな……！」

そう言っただけマイヨはレーザーソードをしまい、足元に濃紺の魔法陣を展開する。

「モード変更……カスタムフォーム！」

その言葉と同時に背部の羽がより機械的な構造へと変わり、砲台やドーム型の機械などが装着される。

「イーグルキャノン……！」

と、マイヨが2つの砲台から二条の閃光を放つ。シグナムはそれを横に飛び退いてかわす。

マイヨは再びレーザーソードを構えてシグナムに向かっていくが

(速度が落ちている……？ デバイスのモード変更をしたのか？)

シグナムはそう感じる。先程までと比べると突っ込んでくる速度は十分遅い。

シグナムはレヴァンティンを構え、マイヨより先に行動しその刃を打ち付ける。

レーザーソードでそれを受けたマイヨは再び下方へと吹き飛ばされる。

「逃さん……！」

シグナムがその後を追おうとするが

「……ハッキングシステム……作動……」

マイヨがそう呟いた瞬間彼の足元に魔法陣が展開し、直後シグナムは急停止する。

「何だ……コレは……！！！」

指一本動かさなくなってしまう、硬直したままシグナムは焦りを見

せる。

直後、マイヨがカスタムフォルムから再び通常形態一フォルグフォルムに移行し

レーザーソードを構えて高速でシグナムに突っ込んできた。

「このような勝ち方は本来望む所ではないが：ゼストの障害を崩す為なら：それも構わぬ！」

マイヨが眼前に迫った時点で、シグナムはハッキングの拘束から開放されるも。

マイヨは既にレーザーソードを振るう体勢に入っていた。

横一線に振りぬかれたレーザーソードはシグナムの右肩を大きく斬りさいた。

＊

地上本部地下通路、フォワード陣とノーヴェ、ウエンディ、アネモネの激闘が続いていた。

ウエンディがボードの先端から閃光を放つ。それをエリオが小刻みに飛び交いながらかわしていく。

「チョコマカと…！」

「ウェンディ…！さっさと仕留めろ！」

歯噛みするウェンディにイラつきながらノーヴェが言い放つ。

ノーヴェは自身のＩＳ－ブレイクライナーの能力の１つ－エアライナーで形成した道を進み

飛び上がってティアナに向かって飛び蹴りをかます。

しかし、攻撃がティアナに当たった瞬間にティアナの姿が掻き消す様に消滅した。

「幻影…！？」

それを見てウェンディが辺りを見渡す。自分たちの周りには数十人のフォワード陣の姿があった。

幻影を作るティアナはキャロの援護を受けて多数の幻影を作り出していた。

しかしその限界時間も迫り、クロスミラージュとケリュケイオンが警告を発する。

（後もうちょっと……！）

（脱出タイミングが出来るまで頑張つて！）

必死に訴えるティアナとキャロに、デバイスは答える。

「アタシら目を騙すなんて…」

「チイツ…面倒くさいわね…！」

ウェンディが驚いた様に呟き、アネモネはイラついた感じに舌打ちをする。

「幻術だろうがなんだろうが…要は全部潰しやいいんだろうが…！」
ノーヴェが怒り任せてガンナックルを振り上げる。

「うおおおお…！」

が、その直後スバルが背後から猛スピードで迫ってきて、ノーヴェ

に打撃を叩きつけ吹き飛ばす。

「あのバカ……!!」

アネモネはそう言いながらも両肩の赤い砲台を構えるも

「サンダー……!!」

その頭上にストラーダを構えたエリオが迫っていた。

「しまった……!」

「レイジー……!」

エリオは電撃を纏ったストラーダをアネモネに振り下ろす。

「危ないっス! アネモネ……!」

しかしその直前で両者の間にウエンディが割って入り、ボードでエリオの攻撃を防ぐ。

しかしストラーダの電撃は広範囲に駆け巡り、爆発を起こす。

「撤退……!」

ティアナが大声で皆に叫び、それを合図にフォワード陣はその場から離れていく。

「……の野郎オオオ……!!」

心底怒り狂いながら苦しげに立ち上がりノーヴェは叫ぶ。

「痛た……大丈夫っスかアネモネ?」

「アンタ……どうして?」

自分を庇ったウエンディに対して、アネモネは目を丸くして尋ねる。そんなアネモネに対してウエンディはニコツと笑って答えた。

「え? 私はアネモネを気に入ってるから、アネモネを助けるのは当然っスよ?」

「……………」

しれっと答えるウエンディに対し、アネモネは複雑な感情抱き、目

を背けてしまう。

するとその時3人に通信が入る。

「ノーヴェ、ウェンディ、アネモネ嬢、ちよっとこっちを手伝ってほしい」

＊

合流地点に無事に辿りつき、フォワード陣と隊長陣が無事に合流する。

「皆さん無事でしたか!？」

やや遅れてゲイナー、レントン、勇、比瑯の4人も現れる。

「お待たせしました!!」

「お届けです!!」

フォワード陣はそれぞれなのは、ユーノ、フェイト、ベルクトにデバイスを手渡す。

「助かったよ」

「ああ：これで行く反撃開始だな…」

ユーノとベルクトが笑みを浮かべてそう言う。しかしそれから間髪置かずにスバルが叫ぶ

「ギン姉…ギン姉!!」

「スバル!？」

「ギン姉と通信が繋がらないんです!」

スバルの言葉を聞いて勇と比瑠も慌てて確認をする。

「ギンガさん!ギンガさん!返事をして下さい!」

比瑠が必死に呼びかけるも、返事は返ってこない。

すると、六課と通信を行っていたフェイトも異変を察知する。

「ロングアーチ…こちらライトニング01」

「……イトニング…ここ……ングアー…」

ノイズ混じりの音声でグリフィスの声が返ってくる。

「グリフィスどうしたの…!通信が…」

「…こちらは今…敵の襲…を受けて…バレルさんや他…皆さ…が…ちこたえて……もう…」

そこで通信が途絶えてしまう。

「バレル…フェイ…まさかやられたとでも言うのか…」

珍しく困惑を見せながらベルクトが呟く。

「もう持たないって…じゃあガロードは!？」

「エウレカ…それにサラやティファだって!」

残してきた自身の親友やパートナーの身の安否を危ぶみ、ゲイナーとレントンが焦りを見せて言う。

そんな中なのはは冷静に状況を判断し、指令を出す。

「スターズとユーノ君、勇君と比瑠ちゃんはギンガの安否確認と襲撃戦力の排除

ライトニングとベルクトさん、レントン君とゲイナー君は六課に戻る!」

「はい!!」

全員が力強く頷き、各々方の目的地へと散っていった。

＊

六課隊舎前、施設の至る所から火の手が拳がっている。
その上空を数十…いや数百とも言わんばかりのガジェットと
そして抗体コーリアンが飛び交い、辺りを完全に埋め尽くしてい
た。

そんな上空で4人を見下ろすように、ナンバーズの1人
散切りの茶髪でボディースーツの上から上着とズボンを着た中性的な
少女一オットーが浮かんでいた。

「ハア：ハア：ハア：」

隊舎の前ではバレルがHフォームの火器を纏って荒く呼吸をしてい
る。

側にいるザファイラなかなりの疲労の色が見え

フェイとシャマルに至っては膝をついてしまっている。

（クソッ：まさか六課の方にこれだけの戦力を送ってくるとは…）
悔しげにバレルは内心で呟く。戦闘が始まった直後でもう上空には
1000近い敵がいたのだ。

一体一体は弱いとはいえこれだけの数は到底相手に仕切れるもので
はない。

あっという間に至るところを焼き尽くされ、数の暴力で一方的に蹂

躓られてしまった。

バレルはもう何十発もフルファイヤーキャノンを放っており、魔力が殆ど残っていない。

デイスパーションも5機が破壊され、残っているのはダガー2機とセイバー1機のみ。

フェイのユニットもシールド、ブレード共にその半数近くが破壊されている。

シャマルとザファイラも防壁を張ったりして必死に応戦していたが敵の数は減らせど減らせど一向に減らない。バレルの感覚で言えばもう500近い敵を倒したはずなのに、未だに空を埋め尽くさんばかりの数が残っているのだ。

しかもそれに加えて強力な戦闘機人、オットーの能力もあった。

（ガロードの奴も建物内で必死に戦ってるってのに……）

ガロードはヴァイスと共に内部の敵の排除を任されていた。

しかしある種失敗と言えたのが屋内という事、それに加えて敵はガロードに対して

絶え間なく向かってくる習性がどういうわけか備わっていたのだ。

そこから導き出された答えは……ガロードにサテライトキャノンを撃たせないという事。

現にガロードは戦闘開始からずっとライフルとサーベルで敵を裁いている。

チャージの時間が必要なサテライトキャノンを使用する暇など無かったのだ。

「……たったこれだけの人数でよく守った」

オットーが冷たい口調で口を開き、右手を掲げる。

「けどもう終わり……これだけの物量と、僕のIS……レイストームの前では抵抗は無意味だ」

オットーの掲げた掌に緑色のスフィアが現れ、そこから多数のレーザーが放たれる。

「クラールヴィント！防いで！」

「シールドユニット!!」

シャルとフェイが咄嗟に立ち上がり、各自のシールドを張ってそれを防ぐ。

「うおおおお!!」

その隙を突いてザフィーラが飛び上がり、オットーに向かっていく。

「デイド」

動じる事無くオットーは一言呟く。直後ザフィーラの真上にオットーと瓜二つの顔をした長髪の女性―デイドが姿を現す。

「IS：ツインブレイズ」

デイドが両腕に持った赤い魔力刃を振り下ろしてザフィーラを叩き落とす。

「ぐわああああ!!」

まともに攻撃を喰らったザフィーラは3人の前に墜落する。

その衝撃で3人は倒れこんでしまい、シャルとフェイの張った防壁が破壊され

レーザーは再び六課の施設に直撃し爆発を起こした。

＊

「うおりゃあああ!!」

建物内でガロードは必死にサーベルを振るって向かってくる敵を片っ端から倒していく。

その背後からヴァイスが狙撃銃型デバイスーストームレイダーで敵を撃ち落す。

「すまねえヴァイス!!」

「言いつこ無しだ!俺達が倒れたら全部終わりなんだぞ!!」

ガロードもヴァイスも呼吸が荒く、大量の汗を流し、服の至る所が汚れ、傷ついている。

しかし2人はほんの一欠けらの弱音も吐くことは無かった。

彼等の背後の部屋には避難の済んでいないスタッフや、ティファ、サラ、エウレカ等もいるのだ。

自分達が倒れれば中の人間達は一方的に蹂躪されてしまう。

2人はたくさんの人々の命を背負って戦っているだ。

「こんな所でやられてたまるか!!」

ガロードがガジェットを1体サーベルで斬り捨てる。

「死ぬもんか!!」

ライフルを放ってコーリアンを数体撃ち落す。

「死なせるもんかああ!!」

咆哮と同時にサーベルを2本構え、向かってきたガジェット数体を纏めて破壊していった。

*

六課に向かってフェイト、ベルクト、ゲイナー、レントン、そしてフリードに乗ったエリオとキャロが高速で飛行していた。

「!!!!!!」

その途中、突然フェイトが上に飛び上がって防壁を展開する。

直後にフェイトに向かって閃光が放たれる。それを見て他のメンバーも身構える。

その上空に居たのはトーレ、右手から煙が吹き出ているセツテ、退屈そうにしているシンシアの3人。

「戦闘機人……!! それにもう1人……」

「…………いや待て、アイツは……」

フェイトが険しい表情で呟くが、ベルクトはその内1人に見覚えがあった。

「シンシ「シンシア! ? 何で君が! ?」」

「えっ……嘘お! ? ゲイナー! ?」

ベルクトが名を言う前にゲイナーが叫ぶ。その声に気づいてシンシアも

ゲイナーの姿を確認し、信じられないといった感じに叫んだ。

「何で君がスカリエッティなんかと! 一体何の目的で!」

「何のって……そりゃあこっちが聞きたいよゲイナー! 何で管理局に!」

「僕らはサラやレントン達と一緒に管理局に保護して貰ってるんだ!」

「ア、アタシも一緒だよ! 行くアテ無かったから仕方なくコイツらと……」

互いに興奮が収まらない状態でゲイナーとシンシアは会話を行う。

「お喋りはそれくらいにしておけ」

だがそのやり取りをトーレが無理矢理終わらせる。それを見てフェイトが身構える。

「エリオとキャロ、レントンは先に行って…ここは…」

「その必要は無いよ、綺麗なお姉さん♪」

フェイトが言い切る前に、シンシアは突如右腕を剣状に変形させてそれを何とトーレに向かって振るった。

トーレは咄嗟の判断で腕の魔力刃でそれを防ぐ。

「グッ…何のつもりだシンシア!!」

後方に飛び退きフェイト達の方に降り立ったシンシアにトーレが怒鳴る。

フェイト達もわけがわからずポカンとしている。

「当ッたり前じゃん! アタシにとっての優先順位はアンタらよりゲイナーだよ!

胡散臭いアンタらにこき使われるよりは、ゲイナーと一緒にの方がよっぽど楽しいもん!」

「貴様……!!」

しれっとした感じでスラスラ言い放つシンシアに、トーレは奥歯をギリリと噛み締める。

「そういうわけでここはアタシとゲイナーで抑えるから行っちゃっていいよ!」

「ええっ!? ちょっとシンシアそんないきなり…」

唯我独尊状態なシンシアにゲイナーは焦りまくる。

「……わかった、任せるぞ」

「ええっ…ちよつとベルクト…!」

しかしベルクトは冷静な口調でそれを了承して飛び立っていく。

フェイト、エリオ、キャロ、レントンの4人も慌てて後追う。

「ベルクト何で……？」

「奴等の実力は折り紙つきだ……しかもコンビネーション能力もある……如何に戦闘機人が強力とはいえそう簡単にはやられん……」

納得のいかないフェイトに冷静な口調でベルクトは答えた。

「さーてと……キングとクイーンのチーム戦！ 試してみよっか！！」

「やれやれ……こんな事態だって言うのに……」

場の状況を全く考えないシンシアの楽しい発言にゲイナーは頭痛さえ感じてしまう。

そんな2人を見ながらトーレ、セツテの2人も戦闘態勢を取るのであった。

＊

なのはとユーノ、勇、比瑪、そしてなのはに抱えられたティアナが地下通路を突き進む。

「スバル！先行しすぎ！」

ティアナが叫ぶ。姉を思うあまり1人で突っ走っていたのだ。

「仕方ないよ：こういう場所だとスバルの方が速いから：」

「なら：こっちが急げばいいだけだしね！」

ユーノの言葉になのはが続いて言う。

（ギンガさん：無事で居てくれよ：）

ギンガの安否を心配しながら、勇が険しい表情で内心呟く。

ヒュン！！

その直後、右側の壁から黄緑の触手が伸びてくる。

4人は咄嗟に飛び退いてかわす。そして触手が伸びてきた壁が爆発する。

「ッ……コイツは…」

「バロンズウ……！」

勇と比瑪が険しい表情で呟く。触手ーフィンを伸ばしてきた敵の正体はバロンズウであった。

「なのはさんユーノさん行ってください！ここは私と勇で抑えます！」

比瑠がなのは達に背を向けてそう言った。

「で、でも…」

「大丈夫です！アイツの相手は俺達が一番手馴れますから！」

困惑気味に言うユーノに対し、得意げに勇は答える。

そんな2人の様子を見てなのは考えを固める。

「…わかった！2人とも気をつけて！！」

「はい！！」

なのはの言葉に勇と比瑠は力強く答える。そしてなのは達はその場を離れていった。

＊

（ギン姉……ギン姉……！！）

心の中で必死に叫びながらスバルは先へ先へと進んでいく。

自分の大切な家族……自分と同じ境遇……同じ体を持ち

同じ苦しみを分かち合うたった1人の大切な姉……もしその姉の身に

何かがあったら……

スバルの心はネガティブな思考で埋め尽くされていく。

そして廊下の突き当たりで広い空間に出た時、スバルの考え通りの

光景が広がっていた。

「あ……………あ……………」

ガタガタと震えながらスバルは声を発する。

そこにいたのはチンク、ノーヴェ、ウエンデイ、アネモネの4人

そして…体中血塗れになって気を失い、チンクに乱雑に髪を持ち上げてられているギンガの姿…

「あ……………ああ……………！！！！！」

その光景を見つめてスバルは後方へと後ずさっていく。

そんな彼女の瞳の色が緑から黄色へと変化していく。

チンク達もスバルの様子がおかしいのに気づき彼女を凝視する。そして…

「うああああああああ！！！！！！！」

凄まじい咆哮と共にスバルから莫大な魔力が噴出して暴風を巻き起こした。

*

六課に向かってフェイト達は飛行を続けていた。

「後もう少しだから…みんな頑張って」

「はい!!」

フェイトの言葉にエリオとキャロが頷いて答える。

(……………!!)

しかし、どういうわけか最後方に居たベルクトが突然立ち止まる。

「ベルクト…どうし……………!!」

フェイトがそれに気づいて後方に振り向き、そして目を見開いた。

ベルクトの背後にフルフェイスヘルメットの男ーBBが立っていたからだ。

「フウ!!」

「ぐわああああ!!」

BBがいきなり猛スピードでベルクト接近し、彼を下方に蹴り飛ばす。

それを追ってBBも高速で飛行していく。

「ベルクト!!!!」

フェイトが慌ててその後を追おうとするが、直後彼女の目の前に白いフードを被り、ピエロマスクを装着した女性ーセデイスが現れる。

「や…っ与会えたねオリジナル…この日を楽しみにしていたわ…!!」

セデイスはそう言って懷から六角形のオブジェを取り出し高く掲げる。

「行くよ!ハルバート!!」

セデイスの体に白基調で金色のラインが入った貴族風のバリアジャケットと

真っ黒なマントが装着され、バルディッシュに酷似した黒い杖が現れる。

そして先端の黄色いコアの前側に大型、後ろに小型の半月型のパー

ツがついていた。

「さーてとオリジナル：あなたの実力：見せてもらおうわ！！」

その言葉と同時にセデイスのデバイスーハルバートの半月型パーツの部分に

黄色い魔力刃が発生し、ハルバートは巨大な戦闘斧となった。

セデイスはそれを片手で軽々と振り回しフェイトに襲い掛かる。

咄嗟にフェイトもバルディシュを鎌状に変形させてそれを受け止める。

「レントン！！エリオ、キャロ！！先に行つて！」

「でもフェイトさん！」

攻撃を受け止めながらフェイトは必死に叫び、それにキャロが困惑した声を返す。

「フリード！！」

「あっ！！」

しかしエリオがフリードに指示を出し、その場を離れていく。

レントンは困惑した感じにフェイトを見ていたが、しばらくしてエリオ達の後を追った。

「エリオ君…」

「空戦だと僕達じゃ足手纏いになる…！」

キャロに対してエリオは悔しげな声を発する。

隣をボードで飛行するレントンも複雑そうな表情を浮かべつつ、六課にいる皆の安否を心配する。

（エウレカ……………無事でいてくれ……………！！）

＊

セデイスが武器の打ち合いを止め、一旦距離を取ってフェイトと相対する。

そんなセデイスの事をフェイトはキツと睨んでいた。

「あなた達の目的は何…！何の目的でこんな事件を…！」

「くししし…そんな怖い顔しないでよオリジナル」

「ふざけないで！！」

完全なからかい口調で答えるセデイスにフェイトは怒りを露にして叫ぶ。

「怖いなあ…私とアナタは姉妹のようなものなんだよオリジナル…最も…パパの邪魔になる以上、私はアナタを容赦なく殺すけどね」

「オリジナルって…あなたは一体……」

先程から意味ありげな言葉を発するセデイスに疑問を持ち、フェイトはそう言う。

「一体も何も……こういう事だよ……」

そう言ってセデイスは空いた左手でフードと仮面を外して投げ捨てる。

その下に映っていた顔を見てフェイトは目を見開いて固まってしまう。

そこに刻まれた瞳の色、目鼻立ち、輪郭、長く伸びた金髪

自分とは違いツインテールではなくポニーテールで結っている。

そんな些細な違いはあれど仮面の下の素顔は……

フェイト・テストロッサ・ハラウンその人と全く一緒の顔だったからだ。

「初めましてオリジナル：フェイト・テストロッサ……

ZB—H0026…セデイス・バルドナ……それが私の名前……わかったあ？」

悪戯っ子の様な笑みを浮かべてフェイトと瓜二つの女性—セデイスはそう言うのであった。

第21話（前書き）

襲撃編その3ラストです

※休日編ラストと同じくとても長いです。

※ちよつと残酷な描写があります。

※都合によりゲイナー&シンシアのパートは省略です……
何故！？と思われるかもしれませんが本当にすみません…

第21話

「グッ……」

吹き飛ばされたベルクトは途中で制止して身構える。

その後間もなく自分の前にBBが降り立った。

「くししし…漸く自分の玩具で遊べるぜ…楽しみだあ」

この場の状況にはあまりに不釣り合いな楽しそうな声でBBは言う。

ベルクトは玩具呼ばわりされた事に怒りを覚えながらも冷静に尋ねる。

「…貴様の目的は何だ…何故俺達をこの世界に連れてきた…」

「何故って？決まってるよそんなの、俺が楽しむためだよ」

「何だと…」

ケラケラと答えるBBに対し、ベルクトは冷静さを保てなくなってくる。

「お前の実力はよく聞いてたからねえ…過去に大罪を犯しながらこちらの世界で生き直し、フェイト・テストロッサと共に幾多の大事件を解決してきた

凄腕の魔導師…そんなお前で遊んでみたかったわけ…

ああ後、フェイト・テストロッサの絶望する顔が見たかったからってのもあるかな？」

「ッッ！！！！」

ベルクトはその一言に怒りが爆発し、相手に向けて長身砲から閃光を放つ。

BBは突っ立ったままそれを避ける素振りを全く見せない。

「…ダメだねえ…それくらいで熱くなっちゃ…世界への復讐者も変わったもんだ…」

その声は目の前ではなく自分の背後で響いた。

ベルクトは驚いて後ろに振り向くとそこにはBBの姿。

「なっ…！」

「ウオリヤ！」

BBは驚くベルクトの体に思いつき正拳を叩き込む。

その衝撃でベルクトは大きく後方へと吹き飛ばされてしまう。

「グウッ……」

ベルクトは痛みで顔を歪めながら途中で立ち止まり、BBを真っ直ぐ見据える。

（……状況は最悪だな……）

ベルクトは冷静に分析する。

目の前のこのBBという男の実力は間違いなく自分より上だ。

しかもその上限が計り知れない。自分とどれくらいの差があるかわからないのだ。

本来なら自分1人で相手にするような敵ではなかったのだ。

しかし、六課も地上本部も敵の攻撃晒され

フェイトももう1人の敵と戦っている以上応援は望めない。

ここで逃げようものなら追いつかれて殺されるか、別の場所を破壊されるかだけだ。

選択肢は1つだけ、他の仲間が来るまでに何とか1人で抑える事……

だが……そんな分析云々以前にベルクトはこの男を許せなかった。

（こいつが……俺とフェイトを引き裂いた張本人……！）

六課では散々1人で突っ走らないと言っていたベルクトであったがいざ相対し、本人の口から小馬鹿にするような口調で真実を告げられベルクトは分析を行いながらも、激情を抑えきれないという非常に不安定な心持ちとなっていた。

寧ろ、仲間が来るまで1人で何とかするというのは自分に対する言い訳なのかもしれない。

「……ファントム……！」

そんな複雑に絡み合った心境の中、ベルクトはファントムモードを

起動する。

「……いいよ、せっかく会えたんだ…俺も少し本気で遊びに興じないと損だな…」

ベルクトはそう言って黒いバリアジャケットの懷から船の形のオブジェを取り出す。

「セットアップ…ノア…」

そう言った瞬間、BBの背部に巨大な白い羽と黒い羽が1つずつ生えてきた。

＊

「畜生ビクともしやがらねえ!!」

地上本部外部、空間捕縛の中でデュオがビームシザースを振り回しながら叫ぶ。

他の者達も必死に破壊を試みているが一向に効果が現れない。

「急がないと…他の奴らだって戦っているというのに…!!」

フィールドを攻撃しながらタックは必死の表情で言う。

仲間達がピンチだというのに自分達が閉じ込められて

こんな場所で足止めを喰らっているなど、仲間の命を最優先するタックにとっては

あまりにも屈辱的で耐え難いシチュエーションなのだ。

「……IS解除、デイスペルカード」

だが、そんな状況下で突如そんな声が響いたと思うと7人を閉じ込めていた空間捕縛が解除される。

「何が起きた……」

普段冷静なトロワも珍しく驚きを見せて呟く。

「……バルクホルツから貰っていたAIS効果のカードをこんな風に使う事になるとはな…」

すると、7人の前に帽子を目深に被った地上局員が1人現れる。

「アンタは一体……？」

わけがわからないといった感じにタックが呟く。

そしてそこから微かに見える顔を見て、ヒイロが言った。

「やはりさっきのお前か…どうしてここに…」

「えっ？ ヒイロアイツ知ってんの？」

意外と言った感じにデュオがヒイロに尋ねる。すると、局員は皆に背を向けて呟く。

「悪いが再会を喜ぶのは後だ、お前達はすぐに六課に戻った方がいい。」

六課は敵の攻撃を受けて壊滅状態だ。」

その言葉を聞いて7人全員が驚きを浮かべる。

「私はまだやる事があるのでな…」

そう言っただけで局員は懐から何かを取り出してそして呟く。

「行くぞ：ツールギス？」

その言葉と同時に局員に白と青基調の貴族風のバリアジャケットが装着され

盾と巨大な砲台も装備される。そして局員は凄まじい加速を出して地上本部内へと入っていった。

＊

ゼストと相対しているヴィータは荒く呼吸をしていた。

すると、距離を置いて相対していたゼストが空を見上げる。

「オーバーSが数人動いているな：向こうの守りは復活したか：」

『くそっ！くそっ！』

ゼストの中でアギトが悔しがる。

「ここまでか：撤退するでしょう！」

そう言ってゼストはアギトとのユニゾンを解除する。

「ちつくしょう！：せめて：せめてアイツらだけは：！」

融合解除後アギトは上空へと飛び上がる。

『ヴィータちゃん！上！』

ヴィータの中でリインが叫ぶ。言われたとおりに上空を見上げると「アタシがここで叩いとく!!」

巨大な火球を形成するアギトがいた。それを見てヴィータはアギトに向けてアイゼンを構える。

「むっ…!」

しかしヴィータがアギトに攻撃する前に、ゼストがフルドライブを発動。

手に持つ槍でヴィータのアイゼンに打撃を叩き込む。

「なっ!」

予想を上回る速度で攻撃を止めてきたゼストにヴィータが驚く。

「はあああああ!!」

ゼストはそのまま槍を振りぬき、ヴィータをアイゼンごと吹き飛ばして墜落させる。

「うあああああ!!」

ヴィータはそのまま遙か下のビルの屋上へと叩きつけられた。

その後ゼストはアギトを見て強い口調で言った。

「アギト! 撤退だ!!」

しかし、アギトはそんなゼストを見つめてガタガタ震えている。

「あ……あ……ああ……!!」

ゼストを助けるつもりが逆に足を引っ張ってしまった

その所為で命を削らせるフルドライブを使わしてしまった

アギトの心はゼストに対する申し訳なさ一色で染められていく。

「あああああ!!」

頭を抱えてアギトは悲痛な叫びを上げる。

＊

「ゼエ…ゼエ…」

激痛が走り、血が大量に流れる右肩を抑えながらシグナムはマイヨと相対する。

額からは大量の汗が流れ出て、うっすらと視界がボヤけてきていた。状況は絶望的である。

しかしそんな状況のその時、突如マイヨの左手から光が発せられる。

「！！…フルドライブを使ったのか…ゼストツ…！」

表情を急変させそんな事をマイヨは呟く。そしてシグナムに向き直りこう言った。

「悪いが勝負はお預けだ剣の騎士よ」

「なっ…！！」

いきなりそんな事を言ったマイヨにシグナムは驚くがマイヨは背を向けて一瞬にして飛び立っていった。

（命拾いをしたのか……）

ボーッとしてくる中、シグナムは内心でそんな事を呟く。だが直後に顔を俯かせて表情を曇らせた。

（……私の負けだな……）

＊

地上本部地下通路、チンク達と怒れるスバルが相對する。

「返せ………!!」

周りに大量の魔力を噴出させ、凄まじい怒りのこもった声をスバルは発する。

左腕のリボルバーナックルのカートリッジを大量に消費し、魔力を更に高めていく。

「ギン姉を………返せエエエエエエ!!」

激情に任せてスバルが拳を振り上げて突撃してくる。

それを見てノーヴェが咄嗟に腕を構えて防壁を張るがスバルの怒りのこもったその一撃はノーヴェの防壁を容易く破壊する。

「どおおおけええええええ!!」

スバルは足を振り上げノーヴェに蹴りを放つ。

ノーヴェもそれに対抗して足を振り上げてスバルの蹴りを受け止める。

しかし接触した瞬間スバルの脚部から振動を感じたかと思うとその場で爆発。

2人は後方に大きく吹き飛ばされてしまう。

「グッ……アイツのIS……接触兵器か……！」

苦しげに立ち上がりながらノーヴェが呟く。

それと同時にスバルもユラリと立ち上がり、更にカートリッジロードを行う。

そんな光景を見てアネモネは言い知れぬ恐怖を感じ取る。

「何だっと言うのよ……冗談じゃないわよ……！！！」

恐怖に駆られるままアネモネは右腕を前に突き出す。

「このバケモンがああああ！！！」

叫びと共にクローが一直線にスバルに向かって射出される。

しかしスバルはあろうことかそのクローを刺さる前に拳で掴み取る。

「邪魔だアアアアアア！！！」

掴んだクローごとアネモネを引き寄せ、近くの壁へと叩き付けた。

その様子を見たチンクが大型のケースにギンガを収容しながら言う。

「ノーヴェ、ウェンディ、アネモネ嬢、アレは姉が抑える。ここから離脱しろ」

「了解っス！」

チンクの言葉にウェンディが答え、手にしたボードを浮遊させてその上に乗る。

「ISエリアルレイブ！！行くっスよノーヴェ！アネモネ！」

「ちょっと待ちなさいよ！あんな化物1人で抑えさせる気！？」

フラフラと立ち上がったアネモネがウェンディに反論する。

「大丈夫だアネモネ嬢……」

しかしチンクは両手にナイフを数本構えて前に出ながら言う。

「姉ならば……触れずに戦えるッ！！！」

その言葉と同時にナイフをスバルに投擲して爆発させる。

苦々しい表情を浮かべながらも、3人はその隙を突いてギンガのケースを持ってその場を離れた。

「うあああああ!!! ああああああ!!!」

スバルは必死に追いつがろうとするも、チンクは再びナイフを投げ、それを足止めする。

「邪魔ア……すんなアアアアアアア!!!」

更なる怒りを見せてスバルを叫ぶ。

その足元に展開するのは戦闘機人のテンプレートであった。

＊

六課からやや離れた上空、ベルクトとBBの激闘…

いや、BBの一方的な蹂躪が続いていた。

「うおおおお!!!」

「ハイハイハイハイハイイツッ!!!」

ベルクトはBBに接近して魔力刃で目にも止まらぬ速度で斬撃を繰り返す。

それをBBは全て手で一つ一つ裁いているのだ。

「セイヤア!!」

「グッ!!」

ノリノリな声でBBはベルクトに対して蹴りを放つ。

ベルクトは咄嗟にシールドを構えてそれを防いだ後、その姿を消滅させる。

「ダッシュか……けど」

BBが一言静かに呟いた後、右手をゆっくりと上げる。

次の瞬間その手にはベルクトの構えた魔力刃が収められており、消滅したベルクトが姿を現す。

「な……に……!!」

「これくらいの速度なら……見切れるよ」

目を見開いて驚くベルクトに、BBは反対の左腕を振り上げる。

ドスッ……

「ガハッ……!!」

そして左手で手刀を形成してベルクトの体をバリアジャケットごと貫いた。

腹部に突き刺さった部分から血が溢れ、ベルクトは口からも血を吐

いてしまう。

「でも流石だねえ…思ってたより全然速いや…楽しい…楽しいよベルクト」

手刀を突き刺したまま楽しげにBBは呟く。

「……………うあああああ！！！！」

そんなBBを睨みつけてベルクトは自身の周りに魔力弾を形成し、BBに直撃させる。

魔力弾は瞬時に爆発を起こして爆風を撒き散らす。

BBの手刀から逃れた後、ベルクトは痛む腹部を抑えながら激しく吐血してしまう。

「フウッ…あんまカリカリしなさんなって、その程度で俺が傷つくとも？」

爆風が段々と晴れてきて、そこから全くの無傷のBBが姿を現す。

「冷静さの欠如は…」

BBが呟いている途中でその姿を一瞬で消滅させる。

「敗北へのカウントダウン……………ってね！！」

そして再びベルクトの側に移動して彼の左腕を両手で掴み取る。

ゴキッ…

そして力任せにベルクトの腕を折った。

「ぐあああああ！！！！」

再び襲い来る激痛にベルクトは表情を歪ませて叫んだ。

そんなベルクトから一旦距離を保ってBBは楽しげに言う。

「くししし……楽しいねえ……愉快だねえ……さて……これからどうやって壊していいのかなあ……」

余裕着々でBBは辺りを飛び回るが、その時ある反応に気づく。

「?…魔力が増大している…でも今のアイツはファントムモードの筈…」

疑問に思ったBBがもう一度ベルクトの方に顔を向けると

ベルクトの足元に魔法陣が展開し、ライフルはいつの間にか長身砲へと変わっていた。

「グレイブキャノン……マキシマム！！」

激痛の中ベルクトは叫び、長身砲から巨大な紫の閃光を発射する。

BBはそれにする術もなく飲み込まれていった。

「グハッ………！！」

グレイブキャノンを撃ち終わった後、ベルクトは腹部と左腕の激痛によって意識を失いかける。

本来ファントムでは魔力配分の関係で砲撃・収束魔法には大きな負担がかかる。

しかし今のベルクトにはモードを変える暇さえ惜しかった。

無茶を承知でキャノンを放った結果膨大な魔力を消費してしまったのだ。

（これで少しは……足止めに……）

激痛で視界が歪む中ベルクトは祈るように思った。

「IS発動……時間支配……」

次の瞬間BBの声が響くと同時にベルクトの周囲に黒いテンプレートがいくつも現れる。

「空間支配……プレイスバレット……」

そしてそこから大量の魔力弾が発射されてベルクトに直撃した。

ベルクトは悲鳴を上げる間もなくそれに巻き込まれる。

「驚いたよ……まさか右腕が吹っ飛ぶとは思わなかった……」

そしてベルクトの目の前にBBがその姿を現す。

よく見るとバリアジャケットの右腕の肘から下の袖が無くなっていく。

「な………ん………」

激痛と魔力の大量消費、更には先程のダメージでベルクトはもうまともに喋る事すら敵わない。

そんなベルクトの体を自身の腕で支えてBBは呟く。

BBに支えられる形となったベルクトには抵抗する術も意志も残っていないかった。

「速度も上々……その上砲撃の威力も俺の肉体を吹き飛ばすほど……ホントに今回はアタリだねえ……」

まさか空間支配だけじゃなくて時間支配まで使う事になるとは……」

BBのもう1つのIS―時間支配……

BBはその能力を応用してベルクトのグレイブキャノンで吹き飛ばす
だ右腕を

時間を戻して再生させるというとてもない技を使用したのだ。

ベルクト達をこの時代に連れてきたのもこのISの能力の応用による
ものだった。

「けど任務続きで空間ワープの使いすぎと時間再生の使用で……こっち
の残存もスッカラピンだ

またカプセル休養が必要になる……本当に凄いやベルクト……おまけに
……」

BBのメットの中の右目に当たる部分が紅く光る。

「俺と同じで適正があると来た……まさか天然物がいたなんて……
これも運命って奴なのかなベルクト……いや、兄貴？」

「な………!!」

その一言を聞いて掠れた声をベルクトは発する。

そしてBBはベルクトの体を支えたままヘルメットを脱ぎ捨てる。

その下にあった素顔……それはベルクト……いや、バレルの物と同一
であった。

「ZB―H1937…バレル・バルドナ…通称『BB』それが俺の
正体だよ……そして……」

＊

少し離れていた場所ではセデイスとフェイトの攻防が続いていた。

「ほいさあ!!」

セデイスはハルバートをフェイトに向かって振り下ろす。

フェイトはそれをバルディッシュで受け止める…

(ッ!!……どこにこんな力が……)

受け止めた際の凄まじい衝撃にフェイト顔を歪める。

そんなフェイトにセデイスは今度は横薙ぎにハルバートを振るう。

フェイトはそれを飛び上がって回避し、そしてバルディッシュを前に構える。

「プラズマスマッシュー!!」

バルディッシュから黄色の閃光がセデイスに向かって放たれる。

それを見てセデイスもハルバートを前に構える。

「サンダーストーム!!」

ハルバートからも黄色の閃光が放たれ、2つはぶつかり合い爆発を起こした。

爆破発が収まった後フェイトはセデイスに向かって叫ぶ。

「どうしてあなたがその顔を！あなたもプロジェクトFで生まれたというの！」

自身と同じ顔を持っていたセデイスにフェイトが問いかける。

するとセデイスはぷくーっと頬を膨らませて不満げに言う。

「アンタのバカ親と私のパパの偉大な研究を同一視しないでよお……私にFなんていう欠陥だらけの研究で生まれた子供じゃありません」

「なら……一体どういう過程で……！」

尚もフェイトはセデイスに向かって訴え続けるが

「くししし……そんな事より……」

いきなりセデイスがハルバートを振り上げてフェイトに急接近してそれを振り下ろした。

「くっ……！」

咄嗟にフェイトはシールドを張って防御するも、その衝撃で下に吹飛ばされてしまう。

フェイトは途中で踏みとどまり体勢を立て直して

そして目を見開いた。

「あ………ああ………」

目の前にいる2人の人間……全身ズタボロになっているベルクトとそれを支えているBBの姿が視界に入った。

「ベルク……!」「余所見は禁物♪!」

BBがベルクトと同じ顔をしているとかそんな事も全く意に介せずフェイトは急いでベルクトの方に追いつくがろうとしたがその一瞬の隙を突いてセデイスが背後からハルバートを振り下ろす。

「あああああ!!」

フェイトの背中が大きく斬り裂かれ辺りに鮮血が舞う。激痛でフェイトは表情をゆがめて叫び声を上げる。

セデイスはフェイトにバインド魔法をかけて拘束した。

「ビーちゃん素顔見せちゃったの……?」

「おうセデイス姉、そっちも終わったみたいだな」
緊迫した状況下だというのに、BBとセデイスはそれぞれ互いの獲物を側に置いて

親しげにそうやり取りする。

その時、4人の前にモニターが現れる。

『クククク……楽しんでいただけましたかね? フェイトさん……そして出来損ない……』

モニターに映ったポニーテールの男が妖しげな笑みを浮かべて言う。その男の顔を掠れる視界で見たベルクトは苦しげに声を上げる。

「な……ん……で………」

『驚きますよねえ……あなた自身が殺した父親が……ジル・バルドナがここにいますから……』

ベルクトをモニター越しに冷たい視線で見ながらポニーテールの男——ジル・バルドナは言った。

「ジル・バルドナって……」

バインドで拘束されながらフェイトも驚きを浮かべていた。

ジル・バルドナ……ベルクトの実父であり、彼を道具扱いしてベルクトが狂気に落ちた原因、ベルクト自身が殺した筈の人物がいるのだ。

『あの時……あなたに殺された私は偶然スカリエッティの元に流れ着きましてねえ……』

それでこっちで研究を続けていたのですよ……魔法と言う……新たな研究対象を相手に……』

モニター越しにバルドナは突然説明を始める。

『その過程で発見したのがプロジェクトF……人造人間の製造ですよ……私はこれ程素晴らしい研究は無いと思いましたがね……人の手で人を作り上げる……』

ククク……正に神をも恐れぬ所業ではないですか……』

楽しそうに笑うバルドナにフェイトは表情を歪める。

ベルクトには最早怒りを感じる余裕さえ残っておらず、ぼーっとモニターを見つめている。

『それを改良し……ジエイルの人造魔導師と戦闘機人のノウハウを生かし……』

強力な魔導師製造計画として完成したのが……ZB—H……

ジル・バルドナヒューマンというわけです……』

「私が初の成功体で試作シリーズ26人目ってわけ♪」

バルドナの説明を引き継いでセデイスが言う。

『だが……私はその程度では満足しなかった……』

そう言ってバルドナがパネルを操作すると別のモニターが現れ、そ

ここにE2が表示される。

『半永久エネルギー機関E2…こっちの世界では通称レリックでしか…』

それを私の計画に組み込むべく更なる研究を続け…そして完成させたのです…

E2を体内に宿し…無限とも言えるエネルギーを持った最高の息子を…!』

「それがこの俺1937人目のヒューマンってわけだ」

今度はBBが引き継いで説明をする。

『バルドナ・ドライブの応用も加えた時間と空間の支配能力…』

ガーディアンを応用した究極の破壊能力…適合するデバイス…ノアの製作…

それを養う為のE2へ完全に適合する為の肉体の作成…

苦労しましたよ…そこに至るまでに1935個ものゴミを作ってしまったんですから…』

「なっ…!!」

その言葉にフェイトは信じられないという風な表情を浮かべる。

それはつまり…2000人近い人間をゴミ同然に扱ってきたという事に等しいのだ。

背中の痛みに耐えながらフェイトは怒りを込めて静かに呟く。

「狂っている……!」

『狂ってなどいませんよ?全ては息子を取り戻すため…』

完全な私の子供を作り上げるためです…本当のバレルもこっちに来たらしいですが…

今となってはそれも最早どうでもよい事…』

「2000人近い命を捨てておいて何が息子だ!!」

しれっと答えるバルドナに対しフェイトは怒鳴る。しかしバルドナには柳に風だ。

『あなたの意見など知りませんよ…私には私の目的がある…』

まあ…正義だなんだと言うあなた達には聞いた所で理解出来ないで

しょうけどね…』

そこまで言った後、セデイスがバルドナに尋ねる。

「で、どうするのパパ？こいつら殺すの？」

『……いえ、気が変わりました。この場は見逃してあげなさい……せつかくですから更なる絶望を見せてあげるとしましよう…』

それを聞いてセデイスはニコリと笑みを浮かべてフェイトに向き直る。

「良かったねえ…パパに感謝しなさいよ♪」

そう言ってセデイスはバインドを解除し、BBもベルクトから手を離す。

「ベルクト……！！ベルクトッ！！」

フェイトはすぐさまベルクトに駆け寄って彼の体を支える。

ベルクトはバルドナの話の途中で気を失っており

腹部からは夥しい量の血が流れ、左腕があらぬ方向に曲がっている。そんな2人を見てBBとセデイスは言った。

「また遊ぼうな兄貴…出来れば…兄貴も俺と同じ力を持てるって事に気づくの願うよ…」

そうすれば…俺と兄貴はもっともっと楽しく遊べるからな…」

「そんじゃねーオリジナル…今度は容赦なく殺すからねー次ははこぶねで会おう」

BBはIS一空間支配を発動、一瞬でセデイスと共にその場から消え去った。

『……所詮は全て無駄なあがき…いずれ開く狂気の扉に…あなた方も飲み込まれるのですから…』

バルドナは最後に意味深な言葉を残してモニターを消滅させた。

「くうっ……………」

2人だけになった後、フェイトはベルクトを抱えてフラフラと飛行する。

フェイトも背中中の激痛と大量の出血で今にも意識が飛びそうだったがベルクトに比べれば全然軽いという思いと、自分が倒れたらそれこそベルクトが…という一心で

自分の気持ちを何とか奮い立たせていたのだ。

「お願い……死なないで……生きてっ……！ベルクト……ベルクト……！！！」

気を失ったベルクトを抱えたまま呟くフェイトの目には大量の涙が溢れていた。

＊

地上本部地下通路、チンクとスバルの戦いが続いていた。

「うわあ！！ううっ！うわああ！うあああああ！！！！」

怒りに任せるがままにスバルは両腕でチンクに何度も拳を叩きつける。

チンクはそれを固有武装―シエルコートで形成した防御フィールド

で防いでいる。

「ううううらあああああ!!!」

スバルはリボルバーナックルの一撃に振動を加え、チンクの防御フイールドを破壊する。

「うわああああ!!!」

衝撃によってチンクは後方に吹飛ばされてしまう。

「ギン姉!!!」

「い……か……せん!!!」

ノーヴェ達を追おうとするスバルに対し、チンクは残った力を振り絞り

スバルの周りにナイフを数本浮遊させ、それをぶつけて爆発を起こす。

その攻撃をスバルは咄嗟にシールドを張って防御する。

「返せ……………」

爆風の先からバリアジャケットが破れ、頭から血を流し

左腕の皮膚が剥がれ、そこから金属部品が露出しているスバルが現れる。

「ギン姉を……………」

両足と露出した機械部分から電流を発しながらスバルはゆっくりとチンクに近づいていく。

「返せよおおおおお!!!!!!」

チンクの前でスバルは叫ぶ。チンクは目を閉じて己の最期を悟った。

しかし次の瞬間、チンクの背後から有線クローが伸びてきて、それがスバルの腹部に突き刺さる。

「な……………」

その光景をチンクは驚いて見ていた。

スバルは突き刺さったクローを引き抜こうとしていたが

「ウエンディ！今よ！」

「了解っス！！」

チンクの背後からアネモネとウエンディが現れる。

ウエンディは漆黒のボードを逆方向に構え、後ろについていた白いコーンに光を収束していく。

「バスクードクライシス！！」

ウエンディの声と同時にボードから凶々しい紅い閃光が放たれ。

それがスバルに直撃して爆発した。

「大丈夫っスカチンク姉！！」

ウエンディは倒れたチンクに駆け寄って心配そうな声で言う。

「……………どうして……………」

「別に……………ただ……………何となくよ……………」

苦しげに呟くチンクに対してアネモネはそっぽを向いて答えた。

そして離れた場所で気を失っているスバルの髪を掴み、ズルズルと引き摺ってくる。

「こいつも捕獲対象なんですよ？さっさと連れて帰るわよ」

アネモネがそう言ったその瞬間、地面からギンガのケースを抱えたセインが現れる。

「うわっ…派手にやられたねえチンク姉…」

「セイン……ノーヴェは…」

「大丈夫！私のディープダイバーでちゃんと脱出させたから！」

ノーヴェの身を案じるチンクに対しセインは笑顔で答える。

その後アネモネがケースを開け、ギンガと一緒にスバルも無理矢理
いれた後言った。

「チンクは私とウエンディが連れてくわ。セインはケースをお願い」
「了解！！」

普段よりかなり落ち着いた表情でアネモネが言い、セインがそれ
に答えた。

＊

燃え盛る機動六課をバックにアムロとシャア達の戦いが続く。

「何の目的でこんな事をする！この世界も滅ぼすともいうのか！
！」

サーベルを振り下ろすアムロ、それをギユネイが盾を構えて防御す
る。

「…魔法という発達した文明を手にしても、所詮人は変わらぬ事を
私は知ったのだ！！」

だから私はこの世界を滅ぼすと決めた！ルーテシアの為に！」
クエスがアムロの背後からガトリングを放つ、それをアムロが飛び

上がってかわす。

アムロはフィンファンネルををシャアの背後に回らせる。

それに気づいてシャアはダミーを射出して盾にする。

「人が人に罰を与えるのがただのエゴだと何故気づかない!!」

「知ったことか! 何の罪も無いニュータイプであるルーテシアが管理局の所為で傷ついている事に比べればそんな事など!!」

「何ィ!」

その一言にアムロは驚きを浮かべる。シャアは怒りの表情で叫ぶ。

「父も無く…母を失い…自身も人造魔導師として改造され…記憶も感情も失った…

それも全て管理局の者が望んだ事だ!! 人はどんなに優れた文明を手に入れても…

心の革新を果たせなければ何も変わらんのだ!!」

シャアの前に魔法陣が展開する。

「私は決めたのだ!! ルーテシアの為に世界を作り変える!! 貴様に破れ生きる目的を見失った私の全てとなってくれたルーテシアを幸せにする為にな!!」

展開した魔法陣から大量の魔力弾が発射される。

アムロはそれをシールドで防ぎ、そしてシャアに向かって叫ぶ。

「それを本人が望んでいても言うのか! 貴様は結局自分のエゴでしか戦っていない!

ルーテシアという少女を盾に自分のエゴに縋り付いてるだけじゃないのか!」

「違うな! 私はそんな矮小な考えを持ってはいない!

貴様のように優しさなどという不確かな物に頼るほど愚かではない!!」

ズブリ…

次の瞬間アムロは背中に焼けるような痛みを感じる。

「おま…え…は…」

その背後には腕のスピアをアムロに突き刺すガリユーが立っていた。シャアはそれを見てライフルをアムロに構える。

「貴様との決着も最早どうでもよいのだ！さらばアムロ！！」

シャアのライフルから大量の魔力弾が発射されそれが全てアムロに直撃する。

そしてアムロは墜落していった。

＊

「はあ……はあ……」

「くそっ……次はどうだ…？」

ヴァイスとガロードは荒く呼吸しながらひたすらに敵を倒し続けていく。

するとその時、2人の目の前にルーテシアが姿を現す。

「！……！！」

ルーテシアの姿を見た瞬間ヴァイスがガタガタと震え始める。

「ヴァイス！どうしたんだよ！？」

ただならぬヴァイスの変わり振りを見てガロードが呼びかけるが

「邪魔……」

その隙にルーテシアが右手から閃光を放ってヴァイスとガロードを吹飛ばした。

「ううっ……ま、待て……！」

倒れこんだガロードがルーテシアにしがみつこうとするが

「……………」

「ぐあっ！」

ルーテシアは無言でガロードをバインドで捕縛して奥へと進む。

ガロードは何とか後を追おうとするも、先程までの戦いによって魔力も体力もほとんど残されていなかった。

「くそおおおおお！！！！」

そしてルーテシアは部屋に侵入し、中の人物達を殲滅しようとするが「……………」

その直前で部屋の隅でサラとエウレカと身を寄せ合って震えているティファと目が合う。

（あの人……………）

一瞬ルーテシアは違和感を感じるも、任務が最優先だと考え閃光を放って部屋で爆発を起こした。そして気絶した人間の中からヴィヴィオを引っ張り出してその場を後にする。

＊

「この子で間違いない…？」

「……ああ、よくやってくれたねルーテシア」

六課隊舎前でヴィヴィオを引き連れてきたルーテシアをシャアは優しく撫でてやる。

その後ヴィヴィオをギュネイが抱えてこう言った。

「俺達と大佐はまだ仕事が残ってるからな…ルーテシア、お前は先に帰ったほうがいい」

安全に転送出来る場所までついて行ってやろう」

「うん…よろしくねギュネイ…」

ルーテシアは笑顔で答え、近くの空戦ガジェットに乗り込む。

そしてギュネイ、ガリユーと共に上空へと飛び上がった。

＊

ちょうどその時レントン、エリオ、キャラが漸く六課へと到着する。

「ああ…」

「ひどい…」

燃え盛る六課隊舎を見てエリオとキャラは悲痛な面持ちで呟く。

「…エウレカツ!!」

いても立ってもいられなくなったレントンが速度を上げて隊舎へと向かう。

「あれは…!!」

レントンがいなくなった直後にエリオはある人物達を発見する。

ルーテシア、ガリユー、ギユネイ、そしてギユネイに抱えられたヴィヴィオだ。

「あの子…! ヴィヴィオが!」

キャラが震える声で言う。その光景を見たエリオが目を見開く。

その脳裏に浮かぶのは過去の自分の事…

プロジェクトFの真実…その事を知らされた両親が抵抗を止めた事
悪質な笑みを浮かべる研究者…引き連れられていく自分…

「ツツ! ストラダー!! フォルムツヴァイ!!」

エリオはストラダーをデューゼンフォルムに変形、それに跨る。

「エリオ君!？」

「キャラ! フォローお願い!!」

突然の行動に驚くキャラにもお構いなしにエリオはストラダーのブーストを吹かし

敵に向かって一直線に突っ込んでいく。

それに気づいたガリユーがエリオに向かって突撃していく。

「でやああああ!!」

「……………!!」

そした互いの武器が交わり、ガリユーはスピアを損傷し、エリオは肩を斬り裂かれる。

「邪魔だ!!」

エリオの背後からギュネイが迫り、サーベルを振り下ろしてエリオを撃墜する。

「エリオ君!!」

「落ちろ!!」

キャロが叫ぶが、キャロの背後からクスが現れ
ファンネルを放ってフリードごとキャロに砲撃を放って撃墜させて
いった。

＊

「ううっ……………」

六課入り口前、シャマルは腕を押さえて跪いていた。

ザフィーラ、バレル、フェイは既に気を失って倒れている。

その眼前にはツインブレイズを振り上げたデイドが迫っていた。

シャルは何とか対抗しようとするも、もう手段が何も残っていなかった。

「さよなら…」

そしてディードの無情の言葉と共に刃が振り下ろされる。

キン！！！

しかしそれがシャルに向かって降ろされることは無かった。

シャルが驚いて前を見つめると、そこには紫色のバリアジャケットと

蝶のような羽を携え、左目を覆う角飾りを頭に被り

二本の刀剣を構えてディードの刃を防ぐ謎の男性が立っていた。

「…何者だ？」

ディードが男性に尋ねる。男性はそれに答えずに呟く。

「…争いが殆ど無き「この」地上界にも…街を焼き民を焼く者がいたのか…！！」

ギリギリと音が鳴り、ディードが段々と押されていく。

「許さん…許さんぞっ！！」

男が怒鳴りながら刀剣を振るってディードを吹飛ばす。

「ディード！！」

上空で様子を伺っていたオットーが叫ぶ。

直後、背後に何かの気配を感じて振り向いた。

「なろうっ！！」

そこには緑色のバリアジャケットを纏い、蜻蛉の羽のような物で飛

行する金髪の青年。

その青年が持っていた刀を振り下ろしてオットーを叩き落した。

「あなたは…？」

か細い声でシャルマルが目の中の男性に尋ねる。

「貴様の活躍しかと見た…『この』地上界を焼く者と必死に戦っていたな…」

オーラ力の調整が合わずに私達の参戦が遅れた事真に不本意なり！
後の始末は私達がつける…！」

シャルマルに対して男がそう叫んだ後、男は空へと飛び上がる。

（助かったの…私達…）

どういふわけかシャルマルは目に涙が浮かんでくる。先程の男に理由がわからぬ安心感を覚えていた。

男はオットーを撃墜した青年の隣に降り立つ。

「行くぞおお！！鈴木君…！」

「はい、サコミズ王…！」

男—シンジロウ・サコミズに青年—エイサップ・鈴木が力強く答える。

そして2人の背部から巨大な白い翼が生えてきた。

＊

「エウレカ！！エウレカー！！」

燃え盛る建物内をレントンは必死に走る。そして目的の部屋へと到達する。

中は散々な有様になっていた。沢山の局員が気を失い倒れている。そしてその部屋の隅に気絶したサラとティファその側で膝をついてすすり泣くエウレカを見つける。

「エウレカ！！」

「レントン……！！」

レントンの姿を見つけたエウレカは彼に駆け寄って抱きつく。

「レントン……！！レントン……！！」

レントンの体に顔を埋めてエウレカは涙を流す。

レントンは何も言うことが出来なかった。

自分が遅れたばかりに仲間を……大切な人を大勢傷つけてしまったのだ……

自分には激情に駆られて叫ぶ資格も謝罪の言葉を言う資格も無いと感じていた。

だからこそ……

「エウレカ……」

レントンはエウレカの両肩に手を置き真剣な表情で呟く。

「俺には何も言う資格は無い……だから、一緒にあいつらを止めよう……」

「……うん……私もみんなを守りたかった……だから……」

何かを決意した表情を浮かべ、エウレカはポケットから緑色に光る四角い小さな箱を取り出す。

「行こう……レントン……」

「うん……」

エウレカの言葉にレントンは答え、2人は手を繋いでゆっくりと歩き始めた。

＊

地上本部、ディープダイバーによってセインは外に出てくる。

「よし！後はこのままアジトに……」

セインがそう言いかけたその時、どこからともなく鞭が飛んできてそれがセインの持っていたケースに絡みつく。

「な、何コレ！！」

驚くセインの前に手にした盾から鞭を伸ばす1人の男性が立っていた。

「な、何だよお前は！？」

「…名乗るほどの名前など無い…どうしても呼びたければ…ウインドとでも呼んでくれ…」

男は静かに呟きながら右手の砲台を構えて光を収束していく

「メガキャノン!!」

男の声と同時に砲台から巨大な閃光が発射される。

「やばっ…デーパーダイバー!!」

セインは地面に潜る事でそれを回避する。

だが、すぐさま地上に戻ってきたらそこにはケースも男の姿も無かった。

「……急がねばな…」

スバルとギンガの入ったケースを抱えて空を飛び

男―ゼクス・マーキスは呟くのであった。

＊

燃え盛る六課前で気を失ったエリオとフリードの近くに膝をついて
キャロは涙を流す

「何で……こんな……!!」

そう呟いたキャラの足元に巨大な召喚魔法陣が展開する。

「竜騎…召喚…」

そしてキャラは上空を見上げて涙を散らしながら叫んだ。

「ヴォルテール……!!」

その声に応え、キャラの背後に全長15mはあろう巨大な四枚羽の黒竜

ーヴォルテールが姿を現した。

＊

上空に飛び上がってエイサップとサコミズは敵の大群の真っ只中へと身を置く。

そして背中に生えたリーンの翼を構えて叫んだ。

「リーンの翼が聖戦士の物ならばっ!!」

「我等が思いに応えええい!!!」

その叫びと同時に翼から無数の光球が生み出され、敵の大群を撃ち貫いていく。

六課隊舎前でレントンとエウレカが手を繋ぐ。

2人は互いに手を前に突き出し、エウレカの取り出した箱を握り締める。

そして上空を見上げて真剣な表情で叫んだ。

「「セブンスウェル!!!」」

その言葉と同時に2人が眩い光に包まれ。そこを中心に巨大な光が周囲に広がっていき敵を飲み込んでいった。

「壊さないで……」

ヴォルテールをバックにキヤロがひしひしと呟く。

「私たちの居場所を…壊さないでえええええ!!!」

キヤロの悲痛な叫びと共に、ヴォルテールが羽から巨大な火炎砲—ギオ・エルガを放つ。

「何だアレは…!!!」

離れた位置でヴォルテールを見つめるシャアが驚きを浮かべている。そしてギオ・エルガの魔力を感知してその場を離れようとした。

「なッ…!!!」

しかし、突如としてシャアの体はバインドによって拘束される。

その下方でアムロが必死の表情を浮かべてシャアにバインドを唱えていた。

「アムロ貴様……!!」

アムロを睨んでシャアは奥歯を噛み締める。

「シャア！！」

その様子を離れた位置で見ていたルーテシアがシャアに近寄ってくる。

シアアは丁度ギオ・エルガの射線上にいたのだ。

「来るんじゃないルーテシア!!」

「嫌！ シャア！！ シャア！！」

「……ガリユー！！」

シヤアの声によってガリユーが動き、ルーテシアを捕らえる。

「離して！！ガリユー離して！！」

ルーテシアはガリユーに必死に訴えるがガリユーは離さない。シヤアは残った魔力を振り絞って自身の周りに防壁を展開する。そしてシヤアはギオ・エルガの火炎に飲み込まれていった。

「嫌！嫌！嫌！嫌！嫌アアアアアア！！！」

狂ったように泣き叫ぶルーテシアをガリユーが引き連れていく。そして全身に火傷を負って墜落してきたシヤアをギュネイとクエスが受け止める。

「大佐あ！！大佐あ！！」

「急ぐぞ!! 早くドクター達の所へ!」

シアアに向かってクエスが必死に呼びかけ、ギユネイはそれを見て
 ヴィヴィオと共に

シアアも抱えて猛スピードでその場を離れていった。

＊

地上本部に回線を繋ぎ、スカリエッティ、ライネン、バルドナの3人が演説を始める。

スカリエッティが言う。

「ミッドチルダ地上の管理局員諸君：気に入ってくれたかい？ ささやかながらこれは私達からのプレゼントだ」
ライネンが言う。

「治安維持だの倫理だの：自分の儲けや立場だの：そんな下らぬ理由で圧迫され：

素晴らしい知識と進化の促進を否定されてきた希代の技術者達：」
バルドナが言う。

「今回のこのプレゼントはそんな者達の恨みだという事をお忘れなく……」

そして3人は順々に言葉をつなげていく。

「忌むべき敵を一方的に征圧できるこの技術：」

「この素晴らしい力を：私達の知識を真に求めるなら：いつでも依頼してきてくれ」

「格別の条件でお譲りする事を約束しますよ……」

そう言って3人はモニターの前で高らかに笑い声を上げた。

3つの欲望……それが本格的な行動を開始したというある種の宣戦布告であった。

「予言は……覆らなかった……」

モニターを前にしてカリムが悔しげに言う。

「まだや……機動六課は……私達は……まだ終わってない……！」

その隣ではやてが真剣な表情で呟くのであった。

第21話（後書き）

というわけで襲撃編はこれにて終了…

なんつーカオスですかねコレは…

終盤はリーンの翼組も唐突に現れてカオスの極みだよ本当に…

（サコミズがシャルを救ったのは当然の如く狙ってました

問題はこれを今後どう生かすかなんですけど…

遂にシャルにも春到来か？はやては血涙流しそうだが…）

BBとベルクトの戦いは書いてるこっちが痛々しくなりました…

一度ベルクトは大敗する予定だったとはいえない…

正体の判明したBBに、登場…ポニーテールの男ことジル・バルドナ

時間と空間を操る…いや当然デメリットや制限は考えてありますし

ベルクトにもテコ入れするから大丈夫です

でなきゃいくら六課が人外魔境でも誰も勝てねえよあんなの…

ヴォルテールの攻撃に巻き込まれたシャア

ここで退場ってわけではありませんからね？

この件がルーテシアにどう影響するのか…

ギンガだけでなくスバルも！？と思いきや華麗に登場ゼクス・マーカー
キス…

休日編といい今回といい何かセインの立場が無くなってるような…

いよいよ最終戦に向けて動きだしました。

でもこれどちらかといえれば次の話でどう収集つけるかが一番大事な
も…

こんな感じでグダグダ続いてますが今後もよろしくお願いします。

それではまた

アナザーG（前書き）

他勢力の現状その7です

アナザーG

Another Side ?

「どういう事なのよそれは!？」

「どうもこうもない、言ったとおりの意味だ」

スカリエッティのアジト

地上本部の襲撃から帰還した後、アネモネとトーレが口論を繰り広げていた。

「アイツが裏切ったのをアンタは止めなかったって言うの!？」

内容はシンシアの裏切りについてである。

こっちの世界に飛ばされてから唯一の同郷者であるシンシアがいなくなったという事実は

そんなに親しい間柄では無かったとはいえ、アネモネにとって精神的にダメージが大きい。

しかしトーレはアネモネに対し、厳しい口調で答える。

「アイツが裏切ったというならそれはそれだ。現にドクター達ももうシンシアは必要ないと言ったのだ、今後はアイツも敵として認識する」

「アンタねえ…!今まで一緒にやってきた人間に何か思うことはないの!」

淡々と返すトーレにアネモネはヒステリックに叫ぶ。

しかしトーレはキッパリと言い捨てる。

「下らん…所詮私達は道具にすぎん…ドクター達が判断した以上ア

イツも用済みというわけだ。」

「なっ…!?!」

驚くアネモネを他所にトーレは話は終わりだという感じに踵を返し、その場を離れていった。

1人残されたアネモネは呆然と立ち尽くしていた。

(同じだ…あの時と同じ…私も所詮道具に過ぎない…)

頭を抱えてその場にしゃがみ込む。トーレに真っ向から自分達は道具だと言われ

何の躊躇いも無しにシンシアを敵と言った事を思い返す。

…そう、結局自分もいつかは捨てられるのかもしれない…あの時と同じで…

(…今更になって…何やってんのよ…私は…!!)

アネモネはポロポロと涙をこぼす。

ちょうどその時アネモネの目の前の廊下をバルドナとセインが歩いていく。

そして彼らの話している事を聞いてアネモネは顔を上げた。

*

赤い液体の入った小さな長方形のガラス箱を片手にバルドナが歩いている。

「死せる王の血…漸く手に入りましたね…ククク……」
不気味な薄ら笑いを浮かべながらバルドナは呟く。

「それがドクター達がずっと欲しがってた物なの？」
隣を歩いていたセインがバルドナに尋ねる。

「そうですね…遂に私達の夢が達成されるのですから…
これはその為の一番の重要な道具なのですからね……」

バルドナはそう言ってセインの方に顔を向ける。
「にしても…またしても任務を失敗するとは思いませんでしたがね…」

「うう…面目ない…」

セインはガックリと肩を落とす。予想外の事態だったとはいえ
捕獲対象である戦闘機人タイプ・ゼロ2体を両方とも取り逃がして
しまったのだから。

度重なる任務の失敗に流石のセインも落ち込んでいた。

「まあ今回は構いませんがね…主となる目的は聖王の確保でしたからね…」

あんな旧式の出来損ないの人形など…あっても無くても差は大して
無いですよ…」

バルドナは今回の失敗を咎めるつもりはないらしい。
それを聞いてホッとしたセインが次いでバルドナに尋ねる。

「そういえば…聖王…あの女の子はこれからどうするの？」

「血液採取が終わった以上はこぶねの起動には何の問題もありません

んからね…

まあ…彼女もBBと同じくE2ウェポンとしての適正がある…

私の実験道具にして後はポイツ！ですかね…」

残酷な事をサラリとバルドナは言っただけ。そしてセインと一緒にある研究室へと入っていった。

＊

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

シアアの眠るベットの裾に顔を埋めてルーテシアはすすり泣く。

先の六課襲撃の際にキャロの召喚したヴォルテールの攻撃をまともに受けたシアアは

その後すぐにアジトへ運ばれスカリエッティ達によって治療を受けた。

今は安定しているが、全身包帯だらけでベッドに横になっている状態だ。

「…私は大丈夫だ、だから泣かないでくれルーテシア…」

「でも…でも…シアアが…酷いケガを…」

「ルーテシアが悪いわけではない…私が油断をしていたのが原因だ…何も悪くないよ…」

シヤアはルーテシアを安心させるように穏やかな表情で言うがルーテシアは相変わらず泣きっぱなしだ。

「私がちゃんとちゃんとシヤアの事守れたら……」

「君はよくやってくれたさ……何も悪いことはない……だから……」

そう言ってシヤアは体を起こしてルーテシアの頭を撫でる。

ルーテシアは顔を上げ、涙でくしゃくしゃな顔でシヤアを見つめる。

「笑ってくれたまえ……私はこうして大ケガをした事より……君が泣いてる事の方が悲しい……」

「……………うん……」

シヤアに言われてルーテシアは涙目のままうつすらと笑みを浮かべる。

そしてルーテシアはシヤアの胸へと飛び込む。

「シヤア……私……今度はちゃんとシヤアの事守るから……」

シヤアがいなくなったら……私も……ギユネイやクエスだって悲しむ……」

「……ありがとうルーテシア……君は本当に優しい子だ……」

シヤアもルーテシアを優しく抱きしめる。

「……………」

そんな2人の様子を扉の隙間からクエスが覗き見ていた。

（……やっぱり大佐はルーちゃん一筋だよね……）

少し暗い表情を浮かべながらクエスはその場を後にする。

「クエス？ どうしたんだ？」

「別に……」

廊下でクエスはギユネイと鉢合わせになる。

ギユネイは何かを見上げており、クエスもそちらに視線を向ける。

2人の視線の先にはXIと刻まれた生体ポッドに浮かぶ一人の女性。
「この子ってルーちゃんの…?」

「ああ…メガーヌ・アルピーノ…ルーテシアの母親だと大佐が言っていた」

メガーヌを前にして2人はそうやり取りし、ふとクエスがこう尋ねる。

「でもさあ…あのスカリエッティって奴が言ってる事は嘘なんだよね?」

「らしいな…E2が無くともこいつは目が覚めるらしい」

「じゃあ何で?ルーちゃんも大佐もあいつらと一緒にいるの?」

「そこは俺にもわからん…大佐の考えている事はこの世界を変える事と言っていたが…」

そこまで言ってギユネイはクエスの方に顔を向けて笑みを浮かべる。

「しかしクエス意外だな?てつきりルーテシアに嫉妬でもしてると思ったが」

それを聞いてクエスはプリプリと怒り出す。

「もう…アンタじゃあるまいし、あんな小さい子にまで嫉妬なんかしないわよ…それに…」

そこまで言ってクエスは表情を少し曇らせる。

「あたしはクエスであってクエスじゃない…そうでしょ?」

「……そうだな…俺も本当のギユネイ・ガスじゃない…けど、大佐は俺達を必要とした…」

だったら…大佐の為に戦うのが一番だろう?大佐はあの娘の為に今は戦っているなら

俺達は大佐とルーテシアの為に戦えばいい」

「……まあ、結局そういう事だよね!」

ギユネイの言葉に、本来の彼女なら考えられないほど素直にクエスは答えるのであった。

＊

ライネンの自室、そこでライネンに対してカシマルが怒鳴っていた。
「だーかーらー！ さっさと新型のデバイスを作れって言ってるのよ！」

「…それ以前に君の体質を何とかするべきだと思うんだがな…」
「きいーっ！ 人間1つは嫌いな物があって当然でしょうがっ！！」
ギャーギャー騒ぐカシマルに対しライネンは呆れ顔だ。

「全く…あのような無様な敗走をしておいて…まあ…」
そこまで言ってライネンはパネルを操作し、モニターを映し出す。

「一応プランはあるのだがね…」

「おほっ！？」

カシマルはライネンの映したモニターを凝視する。

「リオンネッター…ジルが持ってきたデータを参考に製作中だ
ロールアウトはルーテシアの新型、ヒュギエイアと同時期になるだろう…」

「な〜んだ、作ってるならそう言えばいいじゃない」

「…やめなさい、気色悪い…」

態度を急変させて近寄ってくるカシマルにライネンは頭痛を感じていた。

＊

研究室、多数の生体ポッドが並ぶその部屋にクアットロ、ノーヴェ、ウェンディ、セデイスがいる。

そしてその場にセインとバルドナが姿を見せる。

「チンク姉の様子は？」

「基礎フレイムの破損がかなり酷いつて…」

セインの問いにノーヴェが重々しく答える。

「まあ私とアルバートがいますから…修理にはそれほど時間はかからないかと…」

メガネをクイツと上げてバルドナが呟く、

「あの子…ゼロセカンドのIS振動破碎って…私達の体内にある電子部品とか…」

フレイムに対して物凄い威力が出るのね」

パネルを高速で操作しながらどこか楽しげにクアットロが言う。

「まともに当たれば間違いない一撃必殺…」

「恐ろしい能力もあったもんっスね…」

セインとウェンディが呟く。

「チンク姉…そんな攻撃を何発も…」

ノーヴェは右腕を押さえて顔を俯かせる。そんなノーヴェの前にセ

デイスが立ち

にこやかに笑いながら彼女の頭に手を置く。

「大丈夫よノーちゃん♪チンクちゃんはパパ達がすぐ直してくれるからさ♪」

そんなに悔しいのなら…次会った時にぶっち殺せばいいだけじゃない

い」

「当たり前だ!!」

ノーヴェは顔を上げて表情を険しくし、拳を握り締める。

「チンク姉をこんなにしたあの青いハチマキ…アイツは絶対ぶっ壊す!!」

「そうそう!その意気その意気♪」

怒りを見せながら決意をするノーヴェの側で、楽しげにセデイスが言う。

「そういえばBBはどうしたんっスか?」

その後ウェンディが唐突にこう尋ねる。

「ビーちゃんはまたカプセル休養だよ…ちよつと派手にIS使いすぎたみたい…」

それに対してセデイスが淡々とその疑問に返答する。

それを聞いてセインが顎に指を当てて疑問を漏らす。

「前々から思ってたけど…BBは体にE2を内臓してるんだよね…だったら何でわざわざ休む必要が…」

「…：…そういえばそうっスよね…あれって確か半永久エネルギー機関とか言ってたような」

セインと同様にウェンディも腕を組んで悩み始める。

「それについては私が説明しておきましょうか…」

そんな彼女達の様子を見てバルドナは皆から見える位置に移動する。

「B Bは確かにE 2を内蔵しているから…魔力やI S用のエネルギーは無限に供給される…」

しかし無限にエネルギーが発生しているとしても貯蔵しているエネルギーが減らないわけではない…

ですから消耗が激しい技を連発していれば動けなくなるのは当然というもの…」

「うーん……」

バルドナの説明がいまいち理解できずウェンディは更に悩んでしまう。

バルドナは続ける。

「わかりやすくいうとE 2が水道…B Bの肉体がタンクと変換装置みたいなものですか…」

E 2という水道から流れるエネルギー…それを溜め込んでI Sや魔法の発動に使う…

でも水道から一度に流れるエネルギーには限界というものがあります…

そこで体内…つまりタンクにエネルギーを一旦溜め込んで規定量に達したところで技を発動するというわけです…」

そこまで聞いてクアットロが挙手をしてバルドナに言う。

「つまり…B BちゃんのI S発動にはかなりのエネルギーを使う必要があるから…」

体内のタンクが空っぽに近づいてしまうと…戦闘中の自然回復ではとても追いつかないと？」

「そういう事です…B Bは私が作り上げた息子の中でも最高に近い…故にエネルギーの貯蔵量も莫大です…それこそE 2の供給だけでも満タンになるまで2週間近くはかかるほどに…」

クアットロの意見を肯定しながらバルドナは続ける。

「通常の魔法ならE 2の自然回復で十分に追いつきますが…」

時間支配と空間支配はタンクの水を一度に大量に放出して使うような物です：

故に使いすぎると貯蔵していたエネルギーをまた大量に溜め込む必要があるのです：

しばらくはISが使えなくなるという事です：

「その為にビーちゃんはE2の回復増進効果があるカプセルベッドで休んで

体の中のタンクにISが何度も使えるくらいのエネルギーを溜め込んでるってわけなんだよね」

「その通りですよセデイス：

セデイスの言葉を満足げな笑みを浮かべてバルドナは肯定した。

A n o t h e r S i d e ？

時は少し遡りバルクホルツの研究所

「何という事だ……！！」

地上本部襲撃から少し経ったその時間帯に、バルクホルツはパソコンの前で項垂れていた。

理由は先のスカリエッティの演説の際に映っていたある人物についてだ。

「父さん……何故あなたがこんな……」

自分の敬愛していた父が生きており、このような行為に手を染めていた事が信じられなかった。

「ディール博士……」

たまたまその時研究所にいたマリエルは地上本部並びに六課の襲撃や尊敬するバルクホルツの傷心を見て胸を痛める。

そしてバルクホルツはパソコンを操作して画面を変える。

そこに映されているのはギュネイに連れ去られるヴィヴィオの姿。

「しかもこの子供…以前裏ルートから報告のあった聖王の器…父さんはまさか…」

そこまで言った後にバルクホルツは顔を上げて立ち上がる。

「ディール博士…？」

マリエルが問いかけたその時

「失礼ドクター…例の戦闘機人2人は無事に救出した」

研究所の扉を開けてゼクスがその場に現れる。

「本当ですか!？」

「ああ…今は教会の病院にて療養中だ」

「はあ…良かった…」

ゼクスのその言葉を聞いてマリエルは安堵の表情を浮かべる。

次いでバルクホルツは近くに立てかけておいたコートを纏い

真剣な表情でゼクスに言う。

「ゼクス…帰ってきた早々申し訳ないのですが…少々厄介な事になってきました…」

「…アルバート・ライネンや聖王については私も確認済みだ。この際我々も…」

「そういう事です…彼女も覚醒した以上…ここそと身を隠しているわけにはいきませんから…」

互いに真剣な表情を浮かべながらゼクスとバルクホルツがやり取りする。

その後バルクホルツはゼクスが入ってきたのとは別の扉を開ける。

その先の部屋にいたは黒い衣装に身を包んだ銀髪紅眼の女性と白を基調にした軍服のような物を着た小柄な好青年。

「……………行くのか？」

「ええ…目覚めたばかりのあなたには酷かもしれませんが…」

「構わぬ…私を復活させてくれたのはお前だ…それに…」

女性 は 淡々とバルクホルツに答える。

一方、青年は椅子に座り込んでモニターを凝視している。

そこに映っているのは黒いボードに乗って宙を舞うピンク髪の少女—アネモネであった。

「君はどうしますか？ 必要最低限の技能は教えてきましたが…」

バルクホルツが青年に言う。それを聞いて青年は立ち上がり何かを決意したような強い意志のこもった表情で言った。

「行きます…彼女を救えるのは僕だけです…」

「……………わかりました」

バルクホルツはそれを聞いて後ろに振り向く。

そしてゼクスとマリエルも引き連れて研究所の外に出た。

「…行きましょう」

バルクホルツがカードを一枚投げると、巨大な四角いボードが出現する。

一行はそれに乗って飛び上がり、目的地へと一直線に向かう。

(アネモネ……………!!)

その最中で青年は自分の思い人の事をずっと考えていた。

A n o t h e r S i d e ?

アネモネはとある場所を目指してアジトの廊下を歩いていた。

「あれ：アネモネ！」

するとその途中でウエンディがアネモネに気づき、親しげに声をかけながら近づいてくる。

「どうしたんスか？」

「……ウエンディ、あの女の子の事知ってる？」

「女の子って：ミスター・シヤア達が連れてきた聖王の事っスか？」
ウエンディに対してアネモネはどこか冷めた感じで話していた。

しかし、ウエンディはそれを全く気にしていない。

「……アイツ：これからあのマッド達の実験道具にされるって……」

「ああ～：確かに可愛そうっスけど：仕方ないっちゃ仕方ないんじゃないスか？」

あの女の子も結局はそうなるように仕組んできたってドクター達も言ってたっスから……」

「……………！！！」

その言葉にアネモネは少しピクリと反応するが、すぐにまた冷めた表情に戻って続ける。

「……シンシアの事については？」

「トーレ姉から聞いてるっス：あたしも残念だとは思ったっスけど……
けど、シンシアにはシンシアのやりたい事があったって事じゃないスか？」

「そう……………」

ウエンディの言葉を聞いてアネモネは静かに呟きそして背を向ける。

「アネモネ？」

「……………ごめんね……」

「……………？」

アネモネはその場を後にする。1人残されたウエンディは
どうして自分に対して謝ってきたのか全くわけがわからなかった。

＊

「ここね……」

アネモネは実験室の1つへと足を踏み入れる。

広々としたその部屋の中央には小さな実験台が置かれており
その上には先の襲撃で捕らえられたヴィヴィオが縛り付けられてい
た。

アネモネはヴィヴィオにゆっくりと近づいていく。

「ひっ……………!!」

アネモネの姿を見たヴィヴィオは弱弱しく声を上げる。

アネモネはヴィヴィオの前にしゃがみ込むと穏やかな表情を浮かべ
た。

「……………う……………う……………!!」

顔面蒼白でヴィヴィオはガタガタと震えだす。

突然の拉致に加え、先程までのバルドナやスカリエッティの処置が
原因で

彼女は体内の血液を大量に抜かれており、心身共に弱りきっていた。

「大丈夫…アタシはアンタの味方よ……」

アネモネはヴィヴィオを安心させるように優しい声色で言う。

そんなアネモネを見てヴィヴィオは少し震えが収まる。

「アンタ…やたらとパパママって叫んでたけど…パパやママは大事

…?」

「……………」

「パパやママに会いたい?」

「……………うん…」

穏やかな態度を崩すことないアネモネを見て

ヴィヴィオは警戒心を解き、か細い声で答えた。

「そう……なら会わせてあげるわ…」

アネモネが右手を翳す、するとヴィヴィオを拘束していたバインドが解除された。

突然の事態にヴィヴィオはキョトンとしており、そんな彼女をアネモネが抱き上げる。

「パパとママに会いに行くわよ……」

「パパ……ママ……また会えるの?」

「そうよ……お姉さんが会わせてあげるわ……」

「……………うん!!」

アネモネの言葉を聞いてヴィヴィオはぱあっと笑みを浮かべて頷く。パパとママに会わせてあげる、その一言でヴィヴィオはアネモネに心を許していた。

そんなヴィヴィオの様子を見た後アネモネは顔をあげて魔法陣を展開する。

「……派手にぶっ壊してやるわっ!!」

凜猛な笑みを浮かべて己のデバイス―ジェンドを起動させる。

そして両肩の砲台から大量のホーミングレーザーを射出して部屋の壁を破壊し

そこから外へと飛び出していった。

＊

（アイツらに追いつかれる前に何とかして辿りつかないと…！）
左手でヴィヴィオをしっかりと抱えてアネモネは暗闇を飛行する。

連れてこられたヴィヴィオを見てアネモネは昔の自分を重ねてしまったのだ。

デューイの道具として利用され、エウレカの代用品として改造された自分の事を

そして偶然聞いたバルドナの言葉とウェンディとの会話を経て彼女は確信したのだ。

あのままいけばヴィヴィオがスカリエッティ達に道具として利用されるのは目に見えている。

昔の…いや、今の自分と全く同じになってしまうのだ。

（あんな目に会うのは…アタシだけで十分よ……！！）

こちらの世界に来てから元の世界に帰る事以外に関心が無かった。その為に昔と同じように言われるがままに非人道的な事もたくさんやってきた。

最初はそれでも構わなかった、愛するあの人と再び出会うためならば。

でもやがてそれは違う…違うのだという風な思いが生まれ始める。
こんな昔の…デューイ・ノヴァクの道具と同じだった自分と再会し
ても彼はきつと喜ばない。

それに大切な人と離れ離れにされる苦しみは今の自分が誰よりも知
っている。

ここまで来ておいて何を今更と思われるかもしれないがそれでもア
ネモネは決意したのだ。

帰れる確証はないが、それでもあんな場所にはもういたくなかった。
とにかく今は自分と同じ境遇の子供—ヴィヴィオの事を助けてやり
たいと思っていた。

自己満足と言われるかもしれないが…それでも胸を張って彼ともう
一度会う為に。

（そうよね…ドミニク…!）

アネモネは空いた右手で首元のロケットを握り締め

アジトで入手したデータと資料を基に、起動六課へと一直線に向か
っていった。

アナザーG（後書き）

プライベートが忙しい＋最近どうもスランプ気味…
何か展開が無理矢理臭くてあんまり自信が無いなあ…

スカリエッティアジトでの色々。

B Bの説明やウンコ部長の再登場etc…

でもトーレはここまで冷血キャラではなかったかな…

遂に動き始めるバルクホルツ一行…

新たに登場した女性と青年の正体は果たして…？

（バレバレでしょうけど…）

アネモネがまさかの行動に…

もうこれユーノやルーテシア並の改変だと思っています…

いくら原作終了後の丸いアネモネでも

ここまでやるかは微妙なとこでしたからね…

果たしてどうなるか…

次回の更新もまた遅れるかもしれませんが

気長に待ってくれたら幸いです。

それではまた

第22話（前書き）

襲撃を受けた六課隊員達のその後…
そしておとずれる彼らとの会合…

第22話

スカリエッツィのアジト、アネモネとヴィヴィオの脱走から数時間後の明け方

「アネモネさんまで逃げたということですか…全く…」

バルドナが自室で椅子に座って頭を抱えていた。

これから更に忙しくなるというのに、相次いで脱走者が現れると流石にくたびれる。

（とはいえコーリアン発生ガスも十分な量を確保してあるし…

血液採取が終わっている以上あの少女にも実験動物以上の価値は無いのですがね…）

心内ではアネモネとヴィヴィオはもう用済みと考えつつも

「…まあ、とりあえず追っ手は出しておきますかね」

バルドナはそう言ってパネルを操作し、セデイスの部屋に電子メールを送った。

その後バルドナは部屋から出てアジトのある場所を目指す。

「はこぶねの調整も上々…新しいドライブの空間座標と接合の点検も済んでいる…」

ひとり言を呟きながらエレベーターに乗り込み、アジトの地下深くへと潜っていく。

「後は…あの出来損ないが使っていた残骸のアレを…完成させるのみですかね…」

エレベーターから降りた後、その先にある真っ暗な部屋に入り壁についているレバーを下げて部屋に明かりを灯す。

「ククク……はこぶねにドライブ…そしてコレの力があれば…ククク…クキキキキ…!!」
興奮が抑えきれずに不気味に笑うバルドナの目の前には巨大な物体…
3つの頭を持ち、体の上部にポツカリと巨大な穴の開いた
毒々しい紫色のボディを持った機械的な竜の様なシルエットが映し
出されていた。

＊

管理局地上本部、レジアスの自室

先の襲撃事件にレジアスは怒り狂っていた。

スカリエッティと秘密裏に取り引きをしていた筈が、逆に噛み付かれた形になってしまったのである。

「何故だ！何故こんな事になっている！！あの男に連絡は！？」

「外線が変えられています…研究所も蛻の殻で…」

机に拳を叩きつけながら側にいる平局員に怒鳴り散らす。

局員はオドオドしながら答える。それを聞いてレジアスは更にイラつく。

「ここまで十分に重用してきた筈だ…なのに何故…！」

レジアスは顔を上げて今まで以上に怒りの籠った大声で叫ぶ。

「ヴェンデイスとクリーノはどうしたア…！」

「今対策に駆け回っています…」

レジアスの怒りに終始怯えながら局員は受け答えをした。

＊

至る所が崩壊した地上本部の廊下を数人の局員を引き連れながらクリーノが歩く。

クリーノは局員に指示を出しながらも内心で笑みを浮かべていた。

（派手にやったものだね…まあ、あの髭面にはいい薬になったかな…）

そんな事を考えながら歩いていた時、反対側からやってきたはやてと鉢合わせになる。

クリーノと局員は立ち止まって敬礼をする。

「お疲れ様です八神二佐…此度は六課も大変な事になったみたいで…」

クリーノの言葉にはさして反応を示さず、真剣な表情を浮かべてはやては言う。

「クリーノ三佐…後ほど少しお時間よろしいでしょうか？お伺いしたい事があります」

「…これから会議がありますから、こっちから連絡を入れます」

クリーノははやてに対して簡潔にそう述べた後、局員と共にその場

を後にした。

＊

機動六課は施設・局員共に散々な状態になっていた。

建物の殆どが崩壊し、現在多数の局員によって事後処理や調査が進められている。

無事と呼べるのは正式隊員でなのは、ユーノ、ティアナ、はやて、キャロの5人

協力側でプリベンターの5人、タック、マリナ、ゲイナー、レントン、勇、比瑠くらいで

残りのメンバーは重軽傷含めて何かしらのケガを負っていた。

「酷いことになったね…」

「…まさか、あんなに敵が来るなんて…」

崩壊した六課隊舎を見上げてゲイナーとサラが呟く。

そんな2人の側ではシンシアが複雑そうな表情を浮かべていた。

「：何か：ゴメン：アタシ達大変な事してたみたいで：」

そう言ってシンシアはゲイナー達に謝る。

戦いをゲーム感覚で捕らえたり、見知らぬ人間には無関心など幼い面が目立つ彼女ではあるが

本当の根は優しく、自分が起こした目に見える範囲の友人の不幸を見て見ぬ振りする程薄情でもない。現に砂漠地帯でゲイナーと交戦した際

誤ってゲイナーにケガをさせた際にも大泣きしながら帰っていくという例もあるくらいだ。

「：別にシンシアだけが悪いわけじゃないよ、ここで言ってもしょうがない」

「そうよ、シンシアだって行くアテ無くてアイツらに言われて仕方なくだったんでしょ？」

ゲイナーとサラがやんわりと答えるが、シンシアの表情は優れないままだ。

そんな状況を見かねてその場にいたレントンが唐突に話題を変える。

「それより：君と一緒にアネモネがいたっていうのは本当なの？」

「あ、うん：アタシと一緒に一年半くらい前に急にアイツらの近くに飛ばされて：」

なーんかいつつも泣いてばかりだった：元の世界に帰りたいって：」

少しくたびれた感じに言うシンシアの言葉を聞いて、今度はエウレカが尋ねる。

「ねえ：あなたとアネモネ以外に私達の世界の人はいなかったの？」

「アタシが知る限りではたまにあのシャアって男と会ったくらいで：他にはいなかったねえ」

「そう……」

シンシアの答えを聞いてエウレカは表情を曇らせる。

（アネモネ……きつとドミニクの事……）

自分と近い境遇を持つ少女の身を案じ、エウレカは不安な気持ちでいっぱいになっていた。

＊

別の場所ではティアナが黙々と調査を続けている。

「またとんでもない事になったわ…」

「マリナさん…」

するとその場にマリナが姿を現す。ティアナは不安げな表情で尋ねる。

「病院の方はどうでした…？」

「重症の人達も、もう峠は越したわ…」

「そうですか…良かった…」

マリナの答えを聞いてティアナは安堵の表情を浮かべる。

「なのははどうしてるの？」

「中です…ユーノさんと一緒にいつも通りしっかりお仕事を…」

攫われちゃったヴィヴィオの事とか…負傷した隊員達の事を確認したら…後は少しも…」

「そう…」

表情を曇らせて言うティアナから資料を取ってマリナは言う。

「こっちは私がやっておくわ。あなたも病院へ行ってあげて…」

「はい：ありがとうございます」
マリナに対してお辞儀をした後、ティアナはその場を離れていった。
（……情けないわ：！みんな必死に戦ってたのに私は：）
ティアナが去った後、マリナは拳を強く握り締めていた。

＊

病院へ向かう途中、ティアナはなのはに念話を飛ばす。

（なのはさん：ティアナです）

（ああ：何？）

（マリナさんが現場を代わってくださいって：ちょっと病院の方へ行ってきます：）

（そう：わかった）

少し沈んだ声色でなのはは念話に答えた。

なのはは廃墟と化した六課隊舎の中を歩き回っている。するとその途中でユーノの姿を見かけた。

だが何やら様子がおかしい。しゃがみ込んだままじっと動かない。

「ユーノ君：どうし：……！！」

声をかけようとしたのはも、ユーノの手の中に納まっている物を見て固まってしまう。
そこにあっただのは焼け焦げたウサギ人形…ヴィヴィオが大切にしていた物だ。

「ヴィヴィオ……」

顔を俯かせたままユーノは一言呟く。なのはは口元を手で押さええて目に涙を浮かべながら震えていた。

＊

聖王病院、中は多くの負傷者で芋洗い状態であった。
怪我の酷い何人かのメンバーは集中治療室に運び込まれている。

「無理するなシャル…酷い怪我だったんだ…」

「平気よ…ザフィーラに比べたら私の怪我は軽いもの…」

心配そうに言うタックに対し、ベットから体を起こしながら優しい表情でシャルが答える。

次いでシャルは全身に包帯を巻き、体中に管を通してゐるザフィーラに目を向ける。

「ザフィーラが盾になって…守ってくれた…」

シャルに引き続いて側にいたヴィータが言う。

「あたしの方もリインが守ってくれた…リインとユニゾンしてなかったら死んでたかもしれねえ…」

ヴィータが言った後、シャルはシグナムの方に顔を向けて心配そうに言う。

「シグナムも…大丈夫？」

「心配するな…お前やザフィーラに比べれば私の傷は浅い方だ…

そんな事より…私はお前達の将であるのに…あんなにあっさり敗れた事の方が恥だ…」

右肩に包帯を巻いたシグナムが、目を瞑りながら静かに答える。

「アムロさんが言ってたじゃない…あなたの相手はあの赤い彗星にも次ぐ強敵だったって…」

「ギガノスの青き鷹マイヨ・プラート…あいつまでスカリエッティと…」

自分を責めるシグナムにシャルが慌てて答え、その側でタックが腕を組みながら

真剣な表情で呟く。

「そういや…アムロは何やってんだ？」

「今はプリベントーと一緒に今後の対策やあのサコミズとエイサツプという奴らの

処遇について話し合っていると聞いた」

「そうか…アムロの奴もケガしてるってのに大変なんだな…」

「主はやてが忙しいらしいからな…自分が仕事を引き継ぐと無理を言ったそうだ…」

シグナムの言葉を聞いてヴィータは表情を曇らせていく。

「……………」

そんな皆の様子を見た後、タックは無言で立ち上がって部屋から出

て行った。

「……………くっ…！」

部屋を出てすぐに、タックは拳を握り締めて歯を食いしぼる。

皆必死に戦っていた。守護騎士の皆も自分の世界の同胞達も

例によっては命に関わるような大けがをしてまで戦っていたのだ。

なのに自分は何をしていた？BBの魔法にまんまとかかってしまい戦いの終盤までほとんど何も出来なかったではないか…

自分は一体何をやっている…そんな気持ちでタックの中を支配していく。

「くそおおおおお！！！！」

タックは握り締めた拳を病院の壁に思い切り叩きつけた。

＊

別の病室ではバレル、フェイ、ガロードがベットに横たわっておりガロードの側ではティファが心配そうな表情を浮かべていた。

「…情けないぜ…みんなの命を預かってたってのに…挙句ヴィヴィオまで…」

「ガロード…」

悔しげに呟くガロードの背中をティファは心配そうにさすっている。

「……俺がもっとちゃんとやれてれば…」

「違うわバレル…私がちゃんと防御をしていなかったから…」

バレルとフェイは互いに自分に過失があると自己嫌悪を重ねている。そしてバレルは1つ気になる点があつてフェイに尋ねた。

「フェイ…昨日のアレは本当なの…記録映像に映ってたあの眼鏡の…」

「間違いないわ…私だって信じたくなかったけど…あれはバルドナ博士よ…」

沈んだ表情でフェイは答える。

バレルの実父であり、バルドナ・ドライブの開発者であるジル・バルドナ…

自分にイクスブラウを託し、バレルの事をいつも案じていた優しい科学者…

そのバルドナがスカリエツティと共にいたというのだ。

しかもフェイトの話によれば、あのBBという男はバレルに瓜二つの人物で

フェイトにそっくりな人物と共にフェイトとベルクトを襲撃したという。

その二人を生み出した…いや、作り出したのがバルドナだという話まである…

正直フェイには信じ難いというよりわけがわからない話であつた。

「私にだってわからないわ…あのバルドナ博士がどうしてそんな…」

顔を俯かせてひしひしとフェイは呟く。

「けど辻褄があってしまふ…もし俺の…いやバルドナがスカリエツ
ティの側にいたなら…」

俺達の世界の技術を使ってきたのにも納得だ…」

険しい表情を浮かべてバレルが呟く。そして自身の腿に拳を叩きつ
けて更に言い放った。

「どうなってるていうんだよ…！ベルクトはあんな大怪我をしてる
ってのに…」

六課も壊滅状態だったのに…その上何で今更俺の本当の父親なんか
が…！！」

「バレル……」

1人憤るバレルに対して、フェイはかける言葉が見つからなかった。

＊

病院に到着したティアナは特別病室の前でエリオとキャロの2人と
会う。

2人とも沈んだ表情を浮かべており、エリオは右腕にギプスを装着している。

「…差し入れいろいろ買ってきたわよ。どうせ2人ともろくにご飯も食べてないんでしょ？」

「ありがとうございます…」

ティアナはそんな空気を紛らわすかのように言い。

エリオとキャロも少し表情を明るくして差し入れを受け取る。

「スバルとギンガさんは…？」

「えっと…まだ面会謝絶らしくて…」

「何でも…脳内にダメージが響いてるらしくて…治療に時間がかかるらしいです…」

ティアナの問いにエリオとキャロがまた表情を暗くさせて答える。

「…2人の事はどこまで聞いてる？」

「お2人の生まれの事とか…戦闘機人の事とかは一通り…」

「そう…悪かったわね…あたしが止めてたの…しばらく秘密にしておいた方がいいって…」

言いにくそうに喋る2人に対し、申し訳なさそうにティアナが言う。

そして少しの静寂を挟んだ後、キャロが口を開く。

「でも…スバルさんやギンガさんを連れてきたのは一体…」

「それについては私もわからないわ…隊長達の話だと

事件が終わった後にはもう病院に搬送されてたらしいし…

病院の人達も『2人の治療を頼む』って書置きを見ただけだったって言うてる…」

キャロの言葉にティアナが答えた。

＊

「ぐっ……ぬう………」

特別病室の一室、そのベッドの上でベルクトは目を覚ます。

「ここは………」

「………ベルクトッ!!」

何かを考える前にベルクトは横から不意にフェイトに抱きつかれる。

「良かった……目が覚めて本当に良かった……」

涙声でフェイトが呟く。目元に隈が出来ておりまともな睡眠を取ってないのが目に見えた。

そんなフェイトに感謝と申し訳なさの両方を感じつつも、ベルクトは思い返す。

（俺はあの時どうなった……あのBBという男にいいようにやられ……
どういうわけか

フェイトにそっくりな奴まで現れて……その後あのバルドナ……親父
……!!）

ハッと気づいたように目を見開き、ベルクトはフェイトに尋ねる。

「フェイト……あの時何があった？俺はどうなったんだ!!何である男が……!!」

「ちよっ……ちよっとベルクト……落ち着いて……」

普段冷静な彼にしては珍しく焦っている様子を感じ
フェイトは一旦抱擁を解いて説明を始める。

突如出現したBB：バレル・バルドナが存在

自分と相対した更なる敵：自分と瓜二つのセデイス・バルドナ

その裏で糸を引いているとされるジル・バルドナ：

完膚なきまでにやられた後に、自分が必死にここまでベルクトを運んできた事

「……………」

一通りの説明を聞いた後、ベルクトは俯いてポツリと呟く。

「………すまないな…お前を守れないばかりか…それほどまでの苦労をお前に…」

「ち、違うよ…私の方こそ…油断して大怪我したのは私の責任だよ…」

後悔の念が体中から噴出しているベルクトの様子を見て

フェイトは慌ててフォローするも、ベルクトは益々落ち込んでいく。

「あの男が…まさかジル・バルドナが今回の黒幕だったとはな…」

しかも…そいつが育てた子供に対し俺は何も出来なかったというわけか…」

ベルクトは布団の裾をギュツと握り締めて悔しげに呟いていく。

「情けないものだな…お前俺を離れ離れにした張本人に対して何も出来ないとは…」

しかもお前がやられている時に俺は気絶していたなどと…」

「そ、そんな……」

フェイトは何か言葉をかけたかったのだが、普段滅多に見せない弱気なベルクトの雰囲気困惑してしまう。

「よりにもよってあの男…ジル・バルドナがお前の事を……なのに俺は…!!俺は……!!」

ベルクトは俯いて涙を流している。

耐え切れなくなったフェイトは再びベルクトを抱きしめる。

「俺はどうすればいい…あの男の…バルドナの力に屈服して俺はお前をまた……!!」

俺は無力なのか……!?!?…またお前を傷つけてしまうのか……!?!?」

「ベルクト……違うよ……私の方だって……何も出来なかった…傷ついたベルクトの側でただ見てるしか出来なかった……!!」

フェイトもまたベルクトに抱きつきながら涙を流し始める。

「悔しいよ……私も悔しい……これじゃ…ベルクトや皆を守れない……!!」

「フェイト……」

ベルクトも無事な右腕を使ってフェイトを抱き返す。

2人は互いに涙を流しながら、互いにパートナーを守れなかった事に深い悲しみを感じるのであった。

＊

管理局地上本部、夕焼け空の下で

はやてとクリーノが廊下を歩きながら会話している。

「戦闘機人：人造魔導師：いずれもかつてはレジアス中将が局の戦力として採用しようとした技術です」

「管理局に入ったばかりの僕にはその辺の事情はわかりかねます…」
真剣な表情のはやてに対し、どこか冷ややかにクリーノは返答する。
はやてはお構いなしに話を続けていく。

「安定して数を揃えられる量産可能な力：倫理的な問題を問われず量産によるコストダウンさえ出来れば実現可能な計画…」
はやては前を歩くクリーノと距離を詰める。

「レジアス中将はその計画をどこかで秘密裏に進めてはいませんでしたか？」

それを聞いてクリーノは黙ったまま立ち止まる。
はやてはクリーノと真っ直ぐ向き合い更に表情を厳しくして問い詰める。

「スカリエッティはその依頼先として理想の存在です…
彼と司法取引が行われ…中将は機が熟するのを待っていた…」

スカリエッティが人造魔導師や戦闘機人を大量生産し…

それを地上本部が発見…摘発する…そういう状況を作れるのを…」
はやてから背を向け、窓に浮かぶ夕日を眺めながらクリーノは沈黙を保ち続ける。

「そうなれば摘発したそれらを試験運用…という形に持っていけるでしょうし…」

その途中…掴まれたくない事実に近づいた捜査員を事故死させるのも優秀な人造魔導師素体を得ることも出来る…！！！」

段々と感情的になってきてはやては口調が強まってくる。

一通りの話が終わった後、クリーノは黙って外を眺めていたが

「……………ククク……………クククク……………」

しばらくした後、不気味な薄ら笑いを浮かべ始める。

「クリーノ三佐……………」

はやてが名を呼ぶのと同時に、クリーノは笑みを浮かべたままはやての方に向き直る。

「世間知らずで裏の世界も知らない温室育ちの小娘だと思っていたけど……」

ククク……………成る程流石に優秀だね……機動六課も甘くはないということか……………」

そこには管理局員という空気は全く見られない……

クリーノはオルバ・フロストとしての素の口調で喋っていた。

そんな彼の突然の変貌振りにはやては戸惑いを隠せない

「だけどね……君の言っている事が例え事実だとしても証拠が何一つ無いだろう？」

でなければ君の言っている事はただの妄想だよ……」

「ツ……………ご意見を伺いたいです……」

明らかに見下すような態度のクリーノにたじろぎながらも

強い態度を示してはやてはクリーノに尋ねる。

「まあ……君が余計な心配をしなくともレジラス……あの髭オヤジは勝手に自滅するさ……」

君はただ指をくわえて眺めているだけでいいんだよ……」

「なっ……!」

その発言には流石のはやても驚きを隠せない。

外面的にはレジラスの片腕の1人と称されている人物が

実質の自分のトップを貶す発言をサラリと言ったのけたからだ。

「クリーノ三佐……あんた……………あんた一体何者なんや……!」

はやては強い口調でクリーノに尋ねる。

するとクリーノは突如として表情をゆがませて静かに言い放つ。

「……ガロード・ラン君に伝えておいてくれるかな……?」

僕ら兄弟の世界に対する復讐はまだ潰えてないよね……!!」

「ツツ……!!」

話の内容の不自然さやクリーノという人物の実像……

あらゆる面に疑問があったはずなのに。は yet はクリーノが発する言い知れぬ強烈なプレッシャーにあてられてしまい、それ以上問いただす事が出来なかった。

そしてクリーノはこれで話は終わ리と言わんばかりにその場を離れていった。

＊

夜遅く、レジアスの自室でヴェンデイスがレジアスに報告を行う。

「委員会から連絡がありました……近い内に中将に査問を行いたいと

……」

「ぬうう……!!」

「同時にアインヘリアルの運用にもあれこれ口出しされそうですが」
淡々としたヴェンデイスの口調にイラつき、レジアスは机に拳を叩きつける。

「緊急事態は継続中だ！！査問など引き延ばせ！！」

今回の事態がよほど堪えたのか、レジアスはヒステリー気味に怒鳴り散らす。

「あの男の掌で踊ってたまるか……！動かしてきたのはワシだああ！！」

レジアスは机の上のガラスのオブジェを掴み、地面に叩きつける。

（全く：見苦しいものだなレジアス・ゲイズ……）

ヴェンデイスは無表情ながら内心で笑みを浮かべて毒吐きレジアスに近寄って更なる報告を行う。

「もう1つ急ぎご確認いただきたい事があります……」

「何だ！？」

ぶっきらぼうに言い返すレジアスに、ヴェンデイはモニターを映して説明を続ける。

「昨日本部に向かおうとしていたアンノウンの映像です……」

航空魔導師が映したのですが……この男は恐らく……」

モニターに映っていたのはヴィータと相対するゼストの姿。

「！！……ううっ……うごお……ヴヴウウ……！！」

それを見た途端にレジアスは目を見開いて苦しげに胸を押さえてデスクに倒れこむ。

（ククク……散々あくどい事をしておきながら……過去の友人に関する後悔は残っているのか……）

どこまでも愚劣な俗物だな……）

ヴェンデイスはそんな彼に何をするわけでもなく、冷やかな視線で見下していた。

＊

「グッ…！ゴホッ…：ガハッ…：！！！」

「旦那！！旦那あ！！」

とある森林地帯、ゼストは激しく咳き込みながら大量の血を吐いている。

彼の周りではアギトが心配そうな表情を浮かべて飛び回っている。

しばらくした後にゼストは咳が止まり、背後の木に腰掛ける。

「すまん…もう大丈夫だ…」

「ごめん旦那…アタシが使えなかったから…！」

アギトは涙声でレジアスに訴える。

「お前はよくやってくれた…あの赤い騎士は融合機の乗りこなしも含め…いい騎士だった…」

「旦那の方が強い！旦那がベストでアタシがもっとちゃんとやれてたらあんな奴！」

「今が俺のベストだ…お前も精一杯やった…」

そこまで言った後ゼストは人差し指を立ててこう言う。

「なあアギト…お前が入れてくれた薬湯…もう一杯貰えるか？」

「！…うん！」

それを聞いてアギトは嬉しそうな表情を浮かべてその場から消え去る。

そして、入れ替わりになるようにマイヨがその場に現れる。

「容態は…良くはないようだな…」

「ああ…」

厳しい表情を浮かべるマイヨに対しゼストは静かに答える。

「あれほどフルドライブは使うなど言っただろうが…」

「お前が気にする事ではない…俺はやるべき事を終えたら勝手に死ぬだけだ…」

お前の迷惑にはならん…」

「随分と命を軽く見ているな…私も貴様の事を言えた身ではないが…今の私の行動理由はお前にある…私が恩を返す前に先に死なれては困るのだ…」

「俺はお前とは違う…一度は死に…再び土に還るまでのわずかな時間を生きているだけの」

ただの死者だ…」

そこまで聞いた後、マイヨはゼストを真っ直ぐ見据えて言う。

「貴様がどう思っているか…今の私は貴様と共に動いている…」

貴様も…もう少しは私やアギトを頼るべきだな…でなければ果たすべき目的も果たせぬぞ…」

「…ああ…覚えておこう…」

ゼストは目を閉じて静かに答えた。

＊

半壊した六課施設の一画、そこでなのはは1人で黄昏ていた。

「なのは？」

するとその場にユーノが現れてなのははに声をかける。

「どうしたの…こんな所で…」

「うん…」

「……ヴィヴィオの事…？」

俯くなのははに対し、ユーノも沈んだ表情で尋ねる。

「…約束…破っちゃったなって…」

なのははそう言ってユーノの方に振り向く、その目には涙が浮かんでいる。

「私がママの代わりだよって…守っていくよって約束したのに…側にいてあげられなかった…」

守ってあげられなかった…！…あの子…きつと…泣いてる…！」

「ツツツ………」

涙ながらに訴えるなのはは見て、ユーノは咄嗟になのはをきつく抱きしめ自分も静かに呟く。

「僕も同じだ…僕もヴィヴィオの事…あの子の…あの子のパパは僕だっていうのに…」

ひしひしと呟くユーノの体に顔を埋め、なのはは訴える。

「ヴィヴィオが1人で泣いてるって…悲しい思いとか痛い思いをしてるかもって思うと…」

体が震えて…どうにかなりそうなの…！今すぐ助けに行きたい…！

だけど…私はッ…！」

大量の涙を流し、ユーノの顔を見てなのは懇願する。

ユーノはきつく胸が締め付けられるような気持ちになる。

「……大丈夫…必ず助けよう…僕たちできっと……」

ユーノはそう言って泣き続けているなのはを更にきつく抱きしめるがそれが自分に対する誤魔化しだという風に感じていた。

（……また…守れなかったのか……僕は……僕はッ……！！）

ユーノの心にもまた深い悲しみと後悔が刻まれていた。

＊

たくさんの悲劇をもたらした地上本部及び機動六課襲撃事件…
しかし…それから二日後…事態は急展開を迎える事となる…

＊

管理局本局、そこにはやて、なのは、アムロ、レントン、エウレカ、ヒイロの6人が呼び出されていた。

「はやて…大丈夫かい？」

「ロッサ！お待たせや！」

到着直後にアコースが気さくにはやて一行に声をかけてくる。

「ヴェロッサ・アコースだ、よろしく」

初めてのメンバーもいたので、アコースは軽く自己紹介をし、6人を引き連れていく。

一行はまず最初にとある戦艦のドックへと移動する。

「凄い…これがアースラ…」

「月光号よりもずっと…」

窓越しにその戦艦を見てレントンとエウレカが驚きを浮かべている。そう、嘗てのリンディ・ハラウンが艦長を務め、なのはやフェイト達にとっては馴染み深い艦…

はやてはそのアースラを臨時の六課本部として運用したいと頼んでいたのだ。

「しかし本気なのかい？はやてとクロノ君の頼みだから何とか許可は取ったけどさ…」

「隊員達の住居や生活空間も含めて…本部は絶対必要や…」

「それに今後の敵の動きを予想して考えたら…移動式の本部の方が都合がいい…」

向こうにはシャアもいるんだ…何をしてくるかわかったもんじやない…！」

困惑気味に尋ねるアコースにはやてとアムロが真剣な表情で答える。

次いではやてはアースラの方に向き直ってこう言った。
「アースラ：お休み前にもうちよつとだけ：私達と一緒に頑張つてな…」

＊

その後6人は本来の目的である場所へと案内されていく。

「でも：一体誰なんですか：私達に会いたって…」
廊下を歩きながらなのはがぼつりと呟く。

「それにこのメンバーって：何か共通点が…」
それに続いてレントンがそう疑問を浮かべる。

今回呼びだされた6人の接点が六課所属以外にあまり無いのはやてやアムロはともかく、何で自分やエウレカまで呼ばれたのか
がわからなかった。

「……悪いけど、そんな軽い話ではない：君達もきつと驚くと思う：…
何せ：今後の動きを左右する人達だからね：僕も最初は驚いたし：」
それに対しアコースが普段の軽いノリとは違う真剣な雰囲気話す。
そして一行は廊下の突き当たりにある薄暗い小部屋へと入っていった。

「連れてきましたよ…要望のあった人達を」

部屋に入って最初にアコースがこう言い、中にいた人物達が一斉に顔を向ける。

「なっ……………!!」

「あ……………ああ……………ああ……………」

「嘘や……………何で……………何で……………」

「お前は……………」

中にいた計7人の人物達を見てはやて達はそれぞれ驚きを浮かべる。まるで信じられない物を目にしたかのように。

「お久しぶりです…はやてちゃん…」

コートの男がはやてを見て静かに呟く。

「主はやて……………」

銀髪紅眼の黒い衣装の女性がはやてを見て穏やかな笑みを浮かべる。

「ヒイロ……………他の4人は元気か？」

薄い金髪の整った顔立ちの男性がヒイロにそう尋ねる。

「あははは…何か私だけ凄い場違いな気が…」

緑髪のメガネの女性は苦笑いを浮かべている。

「……………」

桃髪の少女はどこか申し訳なさそうな表情を浮かべている

「ママ!!」

その桃髪の少女に抱かれている金髪オッドアイの少女がなのはを見て嬉しそうに言う。

「レントン……………エウレカ……………久しぶりだね」

白い衣装で帽子を被った好青年がレントンとエウレカの名を呼ぶ。

遂に表舞台に立った彼らの存在により、物語は終局へと急速に進み始める…

第22話（後書き）

ネガティブまっしぐらな六課の面々…

ギンガは健在とはいえみんなやりきれない気持ちでいっぱい…

とか思っていたらラストでまさかの彼らの登場
時系列がぶっ飛びまくりですが

間の話はちゃんと説明しますのでご心配なく。

最終戦に向けて大きく動きはじめたわけです。

登場した彼らによりたくさんの方が六課にもたらされるでしょうな…

バルドナも独自に物騒な物作ってますし…

果たしてどうなるか…

それではまた

アナザーH（前書き）

アネモネとヴィヴィオが如何にして難を逃れたか

アナザーH

時間は少し遡る。襲撃事件翌日の夜明け前

「待ちなさいったら〜!!」

「くっ……」

薄暗い空の上をヴィヴィオを抱えたアネモネが飛行し

その背後から戦闘斧型デバイス、ハルバートを携えたセデイスが猛スピードで追いかけてくる。

「モネちゃん! 今大人しく戻ってくればパパも許してくれるってよ〜!

だから素直に戻ってきなつてば〜!!」

「……嫌よ! もうアタシやこんな小さい子まで実験動物扱いするあんな変態茶髪メガネなんてこりごりなのよ!!」

どこか楽しげに言うセデイスに向かってアネモネは両肩の砲台を構えそこから大量のホーミングレーザーを発射する。

「くししし…ならしょうがないっか…」

セデイスは自分の目の前でハルバートをプロペラのように回転させ飛んできたレーザーを残らず弾き飛ばす。

「パパの邪魔になるゴミは掃除しないとね!」

そう言ってセデイスは満面の笑みを浮かべながらハルバートを後ろに構える。

「インパルスブーメラン!!」

そして大きく振りかぶった後にハルバートを投擲する。

ハルバートは高速回転しながら一直線にアネモネに向かって飛んでいく。

「チッ…何なのよあの馬鹿力は…!」

アネモネは表情を歪めつつも下に高速移動してそれを回避する。が、その程度はセデイスの想定内であった。

「甘い甘い…インパルスショックカー!!」

セデイスが指をパチンと鳴らす、するとハルバートが空中で急停止し突如何条もの電撃をアネモネに向かって放出する。

「なっ…くあっ！」

「きゃああああ！」

想定外の攻撃をアネモネは避けきれず、電流が腕を掠めていく。

アネモネに抱えられたヴィヴィオも悲鳴を上げる。

「おねえちゃん……」

ヴィヴィオが不安げな声を上げる。それを聞いてアネモネは気を引き締めなおす。

（そうよ……ここで捕まったらこの子まで…そしたらアタシは何の為に…）

アネモネはヴィヴィオを手放さないようにしっかりと抱きしめ再びセデイスから逃れようと更に速度を上げて逃亡を続けようとする。

「くししし…：モネちゃんもしっこいんだからあ…：」

セデイスは投擲したハルバートを持ち直した後右手を口に当てて笑う。

そして黄色い魔法陣を展開し、突然顔を俯かせてカートリッジロードを行う。

すると、彼女の周りに夥しい量の魔力が舞い暴風が巻き起こる。

その状態でセデイスは顔を上げる。その顔に写っているのはいつもの楽しげな笑いではない。

「これ以上パパの手を煩わせんなっつつてんだろこのクソボケがああ…！！！！」

酷く歪んだ表情で怒鳴った後、セデイスはかなり離れた位置を飛んでいた

アネモネの目の前に一瞬で移動する。

「嘘……!?!」

いきなり目の前に現れたセデイスに驚きを隠せないアネモネ。

セデイスは普段より遥かに大きい魔力刃がついたハルバートを大きく振り上げる。

「おらああああ!!」

セデイスはそのままアネモネに向かってハルバートを振り下ろす。

アネモネは咄嗟に防壁を構えて防御するも

セデイスの力と接触時の大爆発によって大きく吹き飛ばされてしまう。

そしてその衝撃でヴィヴィオを手放してしまう。

「グッ……ハッ……!!……あ、あの娘を……」

凄まじい衝撃に呻き声を漏らしつつも、アネモネは急いで自分の下を落下していくヴィヴィオに追いつくとする。

しかしその上空でセデイスがハルバートを高く掲げ

電流を纏った巨大な黄色い魔力球を形成していた。

（は、早くしないと……!!）

アネモネは必死だった。このままでは自分もろともヴィヴィオまでもが

セデイスによって消されてしまう。一刻も早くこの場を逃れなくてはいけない。

「死ねやああ!! パパを裏切ったゴミ畜生がああ!!」

しかし無情にもセデイスが魔力球を形成し終え、それをアネモネ達に向かって発射する。

「おねえちゃん!!」

アネモネと背後に迫る魔力球を見てヴィヴィオが涙を浮かべて叫ぶ。ヴィヴィオと後少しの距離まで来ていたが、同時に魔力球もすぐ側まで迫っていた。

（嘘……ここまでなの……アタシ……）

背後に迫る光を感じ、アネモネは己の最期を悟っていた。

「メガキャノン!!」

しかし魔力球はアネモネにぶつかる直前、別方向から飛んできた巨大なオレンジ色の閃光とぶつかって爆発を起こして消滅する。

「……………え？」

突然の事態にアネモネはポカンとなってしまう。

が、その影響で落下していくヴィヴィオと再び距離が離れていく。

「おねえちゃん! おねえちゃああん!!」

「あっ…マズイ!!」

アネモネはハツとしてヴィヴィオをおいかけるも

ヴィヴィオは既に海上に落下する直前まできていた。

「……………ネモネー!!」

その場に何者かの声が響き渡る。そしてヴィヴィオは海面に叩きつけられる直前で突如現れた、青いスフィアのついた杖を携え

白いバリアジャケットを纏った青年にキャッチされる。

「!?!?…そんな…嘘…」

その青年を見てアネモネは目を見開いてパクパクと呟く。

ありえない…どうして…どうしてこんな場所に彼が…
だが見間違えようもない…今自分の目の前にいるのは…
自分の人生を大きく変えた…自分にとって何よりも…

「アネモネッ!!」

目の前の青年がヴィヴィオを抱えてアネモネに向かって叫ぶ。
それを聞いてアネモネは目に涙を浮かべて相手の名を叫んだ。

「ドミニクーーーー!!!!」

＊

「ああ…いきなりなんだっていうのよ!?!」

敵を仕留めそこなったセデイスは心底イラつきながらあたりを見回す。

「穿て…ブラッディダガー…」

するとまたどこから誰かの声が響いたかと思うとセデイスの周辺に紅い刃が出現する。

セデイスは咄嗟に防壁を張ってそれを防御する。

「あれを防いだか……情報どおりの反応速度だな……」

「……………」

そしてセデイスの目の前にゼクスと、銀髪紅眼の女性が姿を現す。

「……ゴミどもが揃いも揃ってウジャウジャと……!」

眉間に深い皺を浮かべながらセデイスは再びハルバートを構えるが突如としてその場にモニターが現れた。

＊

セデイス達から少し離れた位置、ボードに乗ったバルクホルツと

疲労によって深い眠りに落ちたヴィヴィオを抱えたマリエルがいた。

「まさか……目的地に向かう途中でこんな場面に出くわすとは……」

後頭部をガリガリと掻きながらバルクホルツが呟く。

それを聞いてマリエルがクスクスと笑う。

「でも……本当に良かったです……ヴィヴィオが無事で……」

「……ええ、なのは君もユーノ君も本当にこの娘の事を可愛がってたらしいですからね……」

これからお会いしに行くのにはちょうど良かったですよ……」

「しかもその子を救ったのがドミニク君の彼女だったなんて……」

「偶然というのは時に重なりを続け…このような奇跡を見せるものなのですね…」

すやすやと眠るヴィヴィオを見つめながら、微笑ましい気持ちで2人は会話していた。

（フェイト君のコピーはゼクスと彼女が何とかしてくれるでしょう…だから…もう少し彼女達は再会の余韻に浸る余裕がありそうですね…）

次いでバルクホルツはアネモネの方に顔を向け、フツと笑みを浮かべた。

＊

『セデイス、ここは一旦引くのです』

「パパ!？」

3人の前に突如モニターが現れ、そこにジル・バルドナが映し出される。

「でもパパ!!こいつらは!」

『いいから引くのです…私の言うことに逆らうのですか?』

「……わかったわ…パパの言うことだもんね」

セデイスは歪めていた表情をいつも通りの楽しげなものに変える。

そして足元に魔法陣を展開し、長距離転送を唱えてその姿を消滅させた。

「ジル・バルドナか…」

「おや？私の事をご存知なのですね…閃光の伯爵ゼクス・マーキス…いやミリアルド・ピースクラフトとお呼びしましょうか？」

モニター越しにバルドナは皮肉を込めてゼクスに言い放ち次いで銀髪紅眼の女性に顔を向ける。

「しかも…これは随分と懐かしいお方ですねえ…実に興味深い…一体どのようなにして舞い戻ってきたのです？」

「お前のような奴に教える理由はない…私はただ…主に再び会いたくて

恥も外聞も…犯した罪も全てかなぐり捨ててここまでやってきたのだ」

無表情のまま女性が淡々と答えた。

『やれやれ…我々の夢の実現を前にして悩みの種は尽きませんね…』

「お前らの夢…それはゆりかごの復活か？」

『おやおや優秀な…流石はプリベントー…そのくらいは調べ済みでしたか』

感心したようにバルドナは言う。

「聖王の器は見てのとおりこちらで確保した…貴様らの夢は実現不能だ」

『勘違いしないでくださいねえ…私らにとってはあんな少女はもうどうでもいいのですよ…』

「なに…？」

『我々にとっての夢…それはゆりかごではなくはこぶねです…』

「はこぶね…？」

聞き覚えの無い単語を聞いてゼクスは困惑する。

『あの少女をみすみす見逃してやったのもそういうわけです：精々指をくわえて悔しがつてるといいですよ：どの道あなた方には何も出来ないのですから：』

バルドナはそう言い残してモニターを消滅させた。

(……どうやら、また忙しくなりそうだな)

バルドナのモニターが消えた後、ゼクスは心内で呟いた。

＊

ヴィヴィオをマリエルに預けた後、白い服の青年ードミニク・ソレルは

アネモネと真っ直ぐに向き合う。しかし肝心な場面だというのにどう言葉をかけていいかわからない。

「その……えっと……久しぶり……」

目を逸らしながら照れくさそうにドミニクは呟く。

すると、アネモネは黙ってドミニクに抱きつき彼の体に顔を埋める。

「ア、アネモネ…」

「会いに来てくれた……また私を救ってくれた……!!」

困惑するドミニクをよそに、アネモネは涙声で呟く。

「救えた……のかな……?」

「十分よ……十分救ってくれたわ……あの娘の事もよ……!!」

ドミニク……やっぱりあなたは……私の大好きな……!!」

そこまで言ってアネモネは顔を上げる。そこに浮かんでいたのはこの世界に来て以来一度も見せていなかった、本心からの優しい笑顔であった。

「……久しぶりに見たよ……君のそんな顔……とても素敵だ!!」

アネモネの笑顔を見てドミニクも笑顔になってそんな事を言う。その言葉にアネモネは一瞬驚くも、すぐまた笑顔になる。

「私も久しぶり……こんな素敵な気持ち……!何だかもう死んじゃってもいい……!」

アネモネはそう言った直後にドミニクと唇を重ねる。

突然の行為にドミニクは顔を赤らめつつも、それを享受した。

しばらくした後、唇を離してアネモネは再び言う。

「ううん……嘘……アタシ……今まで沢山酷い事してきちゃった……」

またあの時と同じになっちゃった……だから戦いたい……たくさん償いをするために……」

少し寂しげな感じの笑みになってアネモネは呟く。

ドミニクはそんな彼女をきつく抱きしめて耳元で囁く。

「戦おう……一緒に……今度は僕もついている……もう絶対に離れやしない……」

「ああっ……!!……ドミニクッ……!!」

アネモネは心の底から幸せだと感じ、ドミニクを抱き返した。

この世界に来てからアネモネがずっと望んでいた事が遂に叶ったのである。

その後バルクホルツ一行と共にアネモネとヴィヴィオは管理局本局
に向かう事になり
そこで嘗ての仲間達やヴィヴィオが再会を望んでいた人物と出会う
事となる…

アナザーH（後書き）

というわけでアネモネとバルクホルツ一行の合流シーンでした。
ただ：非常にトントントン拍子な展開で申し訳ないです：

偶然にしても出来過ぎな展開かもしれませんが

ドミニクの立ち位置が決まったのが結構最近だったんですよ：

で、アネモネに会わせるのに一番都合が良かったのが

バルクホルツポジションだったというわけで：

結果的に時系列がちぐはぐになってしまったのは少し失敗でしたけど…

何よりもう1人：初代の彼女もバルクホルツと一緒にわけですが

今回の本編ではさぞかしはやてとの感動的なシーンを：

書けるように頑張りたいです：

余談ですが今回ドミニクとアネモネの再会シーンと同じくらい
セデイスの豹変シーンを気合い入れて書いてたりしました：

それではまた

第23話（前書き）

重要人物達との再会…そして最終戦へと動き始める。

第23話

「ママ!! ママッ!!!」

ヴィヴィオがアネモネの手を離れてなのはの方に駆け寄っていく。

「ヴィヴィオ!」

それを見てなのはも目に涙を浮かべつつも、笑顔になって駆け寄ってきたヴィヴィオを抱きしめる。

「ママ……………」

「ごめん…ごめんねヴィヴィオ…約束…守れなくて…」

「…ううん…ママはちゃんとやくそくまもってくれた…」

ヴィヴィオのほうがまもれなかった…でも、アネモネおねえちゃんがたすけてくれた」

涙を流しながら謝るなの是对し、ヴィヴィオが静かにそう言う。

すると、アネモネが気まずそうな表情でなのはの方に近寄ってくる。

「アンタがこの娘のママなの…?」

「うん…あなたは…その…」

突如現れたアネモネに対し、なのはは何を言ったらいいのかわからない。

そんななのはに対し、アネモネは頭を下げる。

「ゴメン……アタシ達が好き勝手やってたから…その…」

でもその娘…どうしてもあいつらの道具にはさせたくなくて…だから…」

言いよどむアネモネを見て、なのはは彼女の手を握って穏やかな表情で答える。

「そんな事ない…ありがとう…ヴィヴィオを助けてくれて本当にありがとう…」

うっすらと涙の痕を残してなのはは礼を言う。

それを聞いてアネモネは顔を上げ、表情も幾分和らぐ。

「良かったねアネモネ…」

「うん…」

その側でドミニクがアネモネに対して囁き、それを聞いてアネモネも笑顔になる。

「2人ともどうしてここに…?」

「久しぶりなのはとっても嬉しいんだけどアネモネ…」

そんな2人の側に再開を喜びつつも、疑問を浮かべたレントンとエウレカが近寄ってくる。

「レントン…エウレカ…あんた達もやっぱりこっちにいたのね」

アネモネは2人の姿を見てうつすら笑みを浮かべて答える。

「まあ話せば長くなるし…詳しい事はあっちの方から説明があると思うから」

ドミニクはそう言ってバルクホルツの方に視線を向けた。

「主はやて…お久しぶりです…」

「……………本当に…? 本当にそうなんか…?」

「はい…正真正銘…あなたから名を授かった…リインフォースです…」

目の前の銀髪紅眼の女性を前にして、はやては開いた口が塞がらなかった。

当然である。今の自分が存在している最大の理由とも言える人物
一度は自分を蝕み、されど最後には大きな力となってくれて
自分の命をつなぎ止める為にその身を犠牲にして消滅した筈の人物…

自身が名前を与えた者…夜天の書の官制人格…初代祝福の風…
リインフォースその人が目の前に立っているのだから。

「……本来なら、今の私にあなたと出会う資格など無かったのです…
一度はあなたを救う為にこの身を捨てた…今存在している私も…
本来なら出会う事などなかった偽りの存在なのかもしれません…
ですが…私を蘇らせた彼の気持ちも…」

「そんな…そんな些細な事どうでもええ…！」
はやてはそう言ってリインフォースに抱きつく。

「あんたはリインフォースなんやろ…私の知ってるリインフォース
で間違いないんやろ!？」

「………はい…」

「………なら…それならいいんや…」
少し困惑しながらもリインフォースは答える、それを聞いてはやて
は抱きつく手の力を強めて呟いた。

「おかえり…リインフォース…」

「………はい…我が主…」

リインフォースは静かに目を閉じ、はやての頭を優しく撫でてやる。
そんな2人の事をバルクホルツが穏やかな表情で見つめている。

「はやてちゃん………」

「…やっぱりこれも、ディールおじさんのした事なんか？」

しばらくした後、はやてはリインフォースに抱きついたままバルクホルツ
の方に顔を向けてこう尋ねる。

「…ずっと考えていましたからね…はやてちゃんへの罪を償うには…
はやてちゃんが最も喜ぶ事は何なのかと…そして私の行き着いた先
がこれです…」

ただ…正確に復活と言うには語弊があるかもしれませんが…」
言いづらそうにバルクホルツはぼそぼそと呟く。

「…私のした事は勝手でしたか？」

「…いろいろ聞きたい事は山ほどあるけど…」

そう言ってはやては笑顔を浮かべる。

「勝手なわけない…ディールおじさんのした事は私にとって本当に嬉しいことや…！」

今は細かい事なんてどうでもええんや…ありがとうな…リインフォースの事…」

「そう言って貰えて何よりですよ…」

はやての返答を聞いてバルクホルツも笑みを浮かべた。

ヒイロはゼクスと対面していた。

「やはりあの時の局員はお前だったか…」

「そういう事だ、前々から地上本部には何度か出入りしていたんだ…改めて久しぶりだなヒイロ」

「ああ…1年と9ヶ月に2日ぶりだな…」

「フツ…そういう言葉はノインから聞きたかったな…」

ヒイロの冷静な口調から放たれた言葉にゼクスは苦笑いを浮かべ、互いに手を取り合った。

そんな中でアムロは残った人物ーマリエルに声をかける。

「一体全体これはどういうことなんだ？それにマリエル：何故君が彼らと…」

流石のアムロもこの場の状況を整理しきれない。

バルクホルツ、ゼクス、ドミニク、アネモネといった自分達の世界の人物。

以前話は聞いていたリインフォース、攫われた筈のヴィヴィオなど普通はいる事事態がありえない人物達が集っているのだから。

しかもその一団に何故かつい最近六課に来たばかりのマリエルまでいるのだから。

「ええっと…何から話したらいいのか…」

だがマリエルの方もしどろもどろで言葉が上手く出てこないようだ。そんな彼女を見かねてバルクホルツがアムロの方へとやってくる。

「あなたの言いたい事は御尤もですアムロ・レイ…」

「：フィードル・バルクホルツか：はやてからは話を聞いていたが…」

バルクホルツの事を固い表情でアムロは見つめる。

「ですが：事態は一刻を争うと言っても過言ではないですから：細かい事はとりあえず抜きにしましょう…」

バルクホルツもまたアムロ同様に固い表情を浮かべている。そしてはやてとリインフォースの方に戻って更に言った。

「機動六課：並びに私の世界の同郷者の皆さんにお話せねばなりません…」

この10年間で私が得た知識の全てと：ミッドチルダを脅かす脅威の大元を…」

＊

スカリエッティのアジト

ライネンの自室にバルドナが入っていく。

「どうですか？準備の方は？」

「概ね順調だ…君とジェイルの言っている戦力は殆ど整っているよ…」

薄ら笑いを浮かべて話すバルドナに淡々とライネンは答える。

彼の自室には様々な機械部品が散乱しており

部屋の奥に巨大な2つのシルエットー大量の赤いフィンを携えた漆黒のバロンズウと

血塗られたように紅いカメラアイを持った独特な形状のシルバーの巨人が立っていた。

「サーペントも予定生産量を大幅に上回っている…

ブラックバロンズウとデビルフィッシュも調整は完了済みだ…」

「加えてはこぶねの起動も秒読み段階…いよいよというわけですね…」

バルドナは口元を更に吊り上げて呟く。

「やはりあなたは流石ですね…これだけの数と種類の機動兵器を生

み出せるのですから：

ガーディアンシステム創始者の名は伊達ではないということですね
：」

「：別に褒めても何も出ないぞ：」

「おやこれは手厳しい：」

からかい気味に言うバルドナにライネンは少し疲れを見せている。
次いでバルドナの方に向き直って尋ねる。

「君の子供達に比べれば：私の作品など大したことはないだろうに
：」

「専門の違いという奴ですよ：私は機械より人間を弄くる方が好き
ですから：」

「そんなだから悪趣味だと言われるんだろうに：」

「フフフ：私に悪趣味は褒め言葉ですよ：」

そんな感じに他愛のない会話を2人は続けていた。

＊

ミッド地上、アインヘリアル壱号機建設現場
いたる所から火の手が上がっており、多数の局員が倒れ付している。

「退屈ね〜アンタらみたいな雑魚どもにアタシが止められるわけないっしょ〜?」

その上空にピエロマスクを装置し白い貴族風バリアジャケットを纏い戦闘斧型デバイスーハルバートを構えたセデイスが浮かんでいた。

地上にいる局員の数名がセデイスに向かって魔力弾を放つ。

セデイスはそれらを難なくヒラリヒラリとかわし、ハルバートを高く掲げる。

「そ〜れいけ!インパルスショットカー!!」

セデイスの言葉と同時にハルバートから何条もの電流が放たれ多数の局員を無力化していく。

「ば、化け物だ…」

残った局員達は顔面蒼白でがたがた震えながらセデイスの方を見ていた。

たった1人の魔導師に自分達が蹂躪されていく恐怖にとても耐え切れなかったのだ。

「ひ、怯むな!地上本部の意地を見せてやれ!!」

別の生き残り局員が他数名を引き連れてセデイスの方に向かって特攻していく。

そんな局員たちをセデイスは哀れむような視線で見つめていた。

「くししし…意地とか根性とかで何とかなるわけないっしょ〜?」

セデイスは楽しげに笑いを浮かべながら足元に魔法陣を展開する。そして手に持ったハルバートを高速回転させる。

「あたしのかわいいペット達!脳筋の地上の連中を貫いちゃえ〜!」

その言葉と同時にセデイスの周辺に2つの魔法陣が展開する。

そしてそれぞれの魔法陣からスパークを纏った青白い雷球が出現。

雷球は出現直後に形状を変化させ、巨大な鷲と鯨へと姿を変える。

「舞え〜！サンダーバードッ！！」

セデイスが一声かけると同時に鷲型の雷球がまるで生きてるかの如く羽ばたく。

「ピギヤアアアア！！！！」

「うわああああああ！！！！」

そして突っ込んできた局員達に真っ向から激突し、彼ら有感電させる。

「ギュルルルル………」

直後、今度は鯨型の雷球が地上に降り立ち超高速で地上スレスレを舞う。

「グオオオオオオ！！！！」

「ツツツ！！！！アアアアアア！！！！」

鯨型の雷球は巨大な口を広げて局員の1人に噛み付く。

局員は電流と本物の鯨に噛まれてるかのような感触、2つの痛みが同時に襲ってきて

そのあまりの苦痛に顔を歪めて叫び声をあげる。

「くしししし……くししししし……！！！！さ〜ておしまいにしますか！！」

その光景を本当に楽しげに眺めながらセデイスが言い、再び魔法陣を展開する。

するとセデイスの眼前に新たに3つの雷球が出現する。

雷球は電流を発して互いに結びつき、巨大な1つの正三角形を形成する。

「いっけ〜！トラインスパークッ！！」

セデイスの掛け声と同時に形成された正三角形の中心から

巨大な黄色い閃光が竜巻のごとく渦を巻きながら発射される。

そしてそれは一直線にアインヘリアルを貫いていき、爆散させた。

＊

アインヘリアル式号機建設現場

壱号機のそれと同じくここもまた火の海と化していた。

「ふわあゝあ……………」

その上空ではいつもの黒いバリアジャケットにメット姿のBBが浮かんでいる。

BBは退屈そうに大あくびをして空中で仰向けになっている。

「退屈極まりないなあ…親父達の助けが無きゃ

結局あのオッサンもこの程度のポンコツしか作れないってことか…」
そう呟いてBBは体を起こし、己のデバイス—ノアを起動させる。

「まあ完膚なきまでに破壊しろってのが親父の命令だからなあ…」

BBの背に白い翼と黒い翼が一枚ずつ生えてくる。

「兄貴との遊びにとっておきたいし…何よりこんな連中にISはいらねえ…」

BBの足元に漆黒の魔法陣が展開する。すると白い翼の近くに巨大な黒いスフィアが現れる。

「インサニティボム…」

白い翼が大きく羽ばたき、それによって発生した暴風がスフィアを
発射する。

スフィアは一直線に地上に着弾して大爆発を巻き起こし
元から火の海だった地上を更に焼き尽くしていく。

それを確認した後、BBは更に黒い翼の方を動かす。

「デモニックレイン：」

黒い翼が大きく羽ばたき、そこから無数の針のような紫の光が
地上の施設へと降り注いでいき、無数の小爆発を巻き起こしていく。

「とどめ：ガーディアン・ドライ」

BBが両腕を下に下ろす。すると既に8割方は破壊されていたアイ
ンヘリアルの上空に

巨大な3つの魔法陣が出現する。そしてそこから3つの巨大な閃光
が降り注ぎ

アインヘリアルを塵1つ残さないほどに破壊していった。

＊

アインヘリアル参号機建設現場

こちらは火の海：というような惨状にはなっていなかった。
ただ、別の意味で異様な光景が広がっていた。

「ぎゃああああ！！！！」

「うわああああ!!!」

「ごめんなさい!ごめんなさい!もう塩ふりかけたりしないからあ
!」

「お尻にストロー挿して膨らませたりしないからあ!」

地上局員の大多数が巨大な蛙やら蛞蝓やらゴ○ブリやらから逃げ回
っていた。

「げひゃひゃひゃひゃ!お前たちは自分の心に負けていくのです
!」

その上空に浮かんでいるのはオレンジのバリアジャケットを纏い
両肩に赤と青のスフィアを携え、右目に怪しいレンズをつけたカシ
マルであった。

「すごいわあこのリオンネッター!これさえあれば機動六課の奴ら
も…」

カシマルは眼下の惨状を眺めながらうつとりした口調で言い

その最中で突然ギリッと奥歯を噛み締めて

顔の前で右拳を握り締めで更にこう言った。

「プラネッタの破壊に巻き込まれこの世界に飛ばされて苦節3年

シベ鉄運行部長に返り咲く前に!絶対にアイツらだけは潰してやら
ない!

私の気が収まりませんからねえ!」

どこか凄まじさを感じる闘志のような物を垣間見せていた。

＊

バルクホルツ一行との会合並びにアインヘリアル襲撃から更に2日後
機動六課の面々はその活動拠点を次元航行艦アースラへと移してい
た。

そして一部を除いた、プリベンターも含めたほぼ全てのメンバーが
巨大な会議室へと集まっていた。

「す、すげえやこりゃ…」

「こんな立派な戦艦…僕達の世界にだって無いよ…」

ガロードとゲイナーは辺りをキョロキョロしながら驚きを浮かべて
いる。

「まさかもう一度これに乗るとは思わなかったな…」

「本当ね…私達やなのはさん達には馴染み深い艦だもの…」

バレルとフェイが懐かしむような感じに言う。

「けどなのは…さっきの話は本当なの？僕も確かに嬉しかったけど
…」

「うん…その事に関してはやてちゃん達がこれから詳しい説明をす
るって…」

ふとユーノがなのはに対してこんな感じに尋ねる

ヴィヴィオが戻ってきた事は知らされていたが

その背後に位置する人物達や詳しい経緯はぼかされていたのだ。

「いずれにせよ…これまでわからなかった事が明らかになるという
事だろう…？」

「うん…私も最初は半信半疑だったけど…」

左腕にギプスをはめて固い表情で呟くベルクトに対し
フェイトが少し沈んだ感じに答えた。

「みんなお揃いやな」

しばらくした後に部屋の扉が開き

その奥からはやて、アムロ、バルクホルツ、リインフォース、ドミニクにアネモネ、更にはゼクス、エイサップ、サコミズグリフィスにマリエルと多数の人物が部屋へと入ってきた。

「あれは…！」

「嘘…！リインフォースさん！？」

「アイツって確か…！」

「おいおい…何でゼクスが…」

その一行を見た六課の面々は様々な反応を見せる

「リインフォース…」

「嘘だろ…何で…」

「だって…あなたは確かにあの時…」

シグナム、ヴィータ、シャマルが本来存在しない筈の人物ーリインフォースを見て各々眩く。

「…今までのすまなかったな…私はこの通り戻ってきた…主の為に…」

対象的にリインフォースは穏やかな表情で語りかけている。

「大丈夫だ…もう私が主の身を蝕んだりはない…」

今までお前達は主を守ってきてくれた…

今度こそは私もお前達と共に主はやてを守っていく…」

そう言ってリインフォースは3人の側でガチガチに固まっているリインに顔を向ける。

「…お前が新たな祝福の風だな」

「…！は、はいでふっ…！初代リインフォースにお、お会い出来るなんて光栄です…」

いきなり声をかけられてリインはビクツと反応する。

そんなリインを落ち着かせるようにリインフォースが優しく言う。

「…その名に相応しい活躍をしていると聞いている…」

これからも主や守護騎士達と共に戦ってくれ…」

「は、はいですっ！」

緊張が抜けきらない声でリインは答えた。

「さて…いよいよ話させて貰うで…今後の方針も含めた全部を…」

はやてが席に着き、極めて真剣な表情で切り出す

その場に重苦しい雰囲気が始める。

「まず先に紹介しとかなアカン…六課に新しく協力してくれる方々や…」

はやてがそう言った後にエイサップとサコミズが前に出る。

「皆さんはじめまして…エイサップ・鈴木です

アムロさん達と同じ世界からやってきました。

今後は僕も皆さんに協力させて頂きます。どうかよろしく願います」

まずエイサップが簡潔に自己紹介を済ませる。

「…別に私は貴様らの仲間になるつもりはない

だが！この世界の地上界を滅しようとする者を追っているというから手を組もうというだけだ！そこを勘違いするでないぞ…！」

「ちよつとサコミズ王…すみません。

こんな感じですけど本当は立派な人ですから」

サコミズは尊大な態度でそんな事を言い、エイサップが慌てフォロ―を入れる。

「……………」

「シャルどうした？」

そんな中シャルは顔を赤らめてサコミズのことをじっと見つめている

疑問に思ったヴィータが声をかけるも反応は返ってこなかった。

「では……」

次にバルクホルツが前に出る。

「皆さんはじめまして：久しぶりの方もいるのでしようね：

私の名前はフィードル・バルクホルツ：

こっちではデイル・クルーシブルの方がわかりやすいでしょう：」
その名前を聞いてシャーリーが反応を示す。

「あ、あなたが10年前に台風の如く現れて消えたかの有名な：？」

「まあまあ：その辺りの話はまた今度にしましょう：」

興奮するシャーリーをバルクホルツはやりわりと制する。

「さて：何からお話するべきですかね：」

バルクホルツがそう言った時、真っ先にシグナムが口を開く。

「まず聞かせてもらおうか。貴様が何故リインフォースと一緒にいるのだ？」

シグナムの視線は鋭い。何せ10年前の闇の書事件の裏で糸を引きはやてや自分達をはめた人物なのだ。シグナム達からしてみれば好意的な印象が持てないのはある意味当たり前だった。

しかしバルクホルツはたじろぐ事なくモニターを操作し説明を始める。

「：私のはやてちゃんやあなた達守護騎士にした事：それはとんでもない大罪です：

私はどうしてもはやてちゃんの為に罪を償いたかったのです」

モニターを操作し、リインフォースと闇の書を映し出す。

「消えてしまったりリインフォースの復活…

はやてちゃんを喜ばせる為に私は10年間のほぼ全てをその為に使ってきました…」

「ちょっと待てよ！リインフォースを復活つつたってそんな事普通は…」

途中でヴィータが口を挟むも、バルクホルツは気にせず説明を続ける。

「確かに普通ならそんな事は容易に出来るような事ではない…

が…あなた達の前でこんな事は言ってはいけないのでしょうか…

夜天の書の守護者達は一種のプログラムとも言える存在…

その構成を辿っていけば…」

「ッ！てめえ…！」

「抑えろヴィータ…最後まで聞いてやってくれ」

プログラムと言われてヴィータが立ち上がるも、

リインフォースがそれを厳しい口調で止める。

「わかっています…プログラムと言ってもあなた達は普通の人間と変わりない…

私はここにいるゼクスを通じて各地の次元世界から

闇の書に関する記録をかき集めていました…」

バルクホルツに名を呼ばれてゼクスが会釈をする

「世界を旅する魔導書…その発現の起源…軌跡…構成…ありとあらゆる情報…

はやてちゃんとの出会った際の記憶とリインフォース？を参考にしたデータ…

その全てをプログラム化して図面に書き起こし、

更にはインテリジェントデバイスのAIを発展させた人間の感情と寸分違わぬ知能を組み込み、そしてゼクスが持ってきた夜天の書の

断片…

それを骨組みとして加え1つのユニゾンデバイスとして組み上げた者…

それが今いるリインフォースの正体です…」

誰もがその内容に絶句している。

確かに、正確にはこの場にいるリインフォースは嘗てのそれとは違う。

だが夜天の書の断片を骨組に再生されたとはいえ

嘗ての記憶と感情を持たせ、オリジナルと殆ど変わらぬ存在を
バルクホルツは作り上げたのだから。

「デイルおじ…クルーシブル博士のした事は確かに
管理世界の法に基づいたら間違えてるかもしれへん…

けどこの際そんな細かい事は言ってられへん…

今はクルーシブル博士もこのリインフォースも

私達機動六課に協力してくれる仲間くらいに考えてくれてれば…

何より…それよりも遥かに厄介な事が私達の近くには存在しとる…」

普段のはやてらしからぬ煙にまくような物言いに

特にフォワード陣が戸惑いを見せていたが

（…わかってあげて…あの人達ははやてにとって

とても大切な人達だから…今は詳しい言及はしないであげて…）

それを察したマリナが念話を送る。フォワード陣はそれを聞いて頷
いて答えた。

しばらくした後、グリフィスが説明を開始する。

「2日前、地上本部がかねてより開発を進めていた地上戦艦
アインヘリアルがスカリエッティ一味によって破壊されました
ですが地上本部はこの事件や先の襲撃も含め
本局への事件介入を固く拒んでいます。」

よって本局所属である機動六課にも情報は公開されません……」

「フン……相変わらず頭の固い奴だ」

グリフィスの説明を聞いて五飛が言い放つ。その後はやてが説明を始める。

「けどな……私達が追うのはあくまでロストログアE2……通称レリック
その捜査線上にスカリエッティとその一味がおるだけ……そういう方
向で動いていく」

はやてがそこまで言った後、バルクホルツがモニターを操作する。

「今回の事件の黒幕といえる存在がこの3人……ジェイル・スカリエ
ッティ……」

アルバート・ライネン……そしてジル・バルドナ」

モニターに該当の3人が映し出される。

「後者2名は俺達の世界で名が知れ渡っていた優秀な科学者だ」
アムロの発現に六課の正式なメンバー達が驚きを浮かべる。

「それが……なんでスカリエッティと一緒に行動を？」

ティアナが疑問点を口に出す。

「それは俺達の方でも全くわからない……」

だが、以前より確認されていた俺達の世界の兵器

これら全てがスカリエッティだけの手では作れない事実だ……

となれば現時点では彼らも敵と認識せざるをえない……」

真剣な表情でアムロが言う。その後バルクホルツが更にモニターを
動かす

「現状確認されている戦力が多数のガジェットドローン……
我々の世界の兵器……サーペント、グランチャー、バロンズウ
そして抗体コーラリアンと思われる生物体」

コーラリアンの映像を見た時、エウレカとアネモネがピクリと反応する。

「特にこの抗体コーラリアン…今までその正体が不明でしたが…最近になってようやくそれがハッキリしました」

「その正体って一体…」

バルクホルツの言葉に、真っ先にエウレカが反応を示す。

「…アタシが原因よ」

すると、今まで黙っていたアネモネがそれに答える。

「詳しい話は省く事になるけど…あのコーラリアンは私の血液を元になっている

あの変態茶髪眼鏡…バルドナって奴がそれを元に

空気中にスカブの敵がいると無理矢理誤認させ

強制的に抗体コーラリアンを発生させる…そんなガスを作ったのよ」
そう言ってアネモネは後ろを向いて着ている服を上へと上げる。

「！！…アネモネッ…！」

「酷い…」

エウレカが両手で口元を抑え、レントンが沈んだ表情で静かに呟く。
露わになったアネモネの背中には無数の切り傷が刻まれていたのだ。

「あの男……………」

ベルクトは右拳を握って表情を歪める。

他の者達もアネモネの事を悲しげな表情で見つめていた。

アネモネは服を下ろすと再び皆の方に向き直って言う。

「…どの道私もアンタ達に酷い事してたんだから別に同情しなくてもいいわ…」

けどこのままいけばアタシは間違いなくアイツらに捨てられていた…
それが嫌で逃げ出したのよ。あのヴィヴィオって子と一緒にね…」
するとそこで、隣に立っていたドミニクが真剣な表情で口を開く。

「何も知らなかった僕が言っても仕方ないかもしれないが…」

どうか僕達も一緒に戦わせてくれないか！？」

六課にいる皆は僕達にとっても大切な友人なんだ…」

そう言ってドミニクが頭を下げる。

するとしばらくした後

「…当然じゃないか！俺は全然OKだよ！」

「アネモネにも事情があったって事はよくわかったかな！」
レントンとガロードが明るい笑みを浮かべて最初に言う。

「元々この部隊自体がわけあり連中の溜まり場みてーなもんだしな」
「ですね。今更これくらいじゃ揺るぎませんよ」

「カリムの苦労は1つ増えるかもしれないがな」
次いでデュオ、カトル、トロワの3人が次々にこう言う。

「…：あなたにもちゃんと理由があったみたいだし：

97—2番世界の人達の仲間だっていうなら私も：何も言わないわ」
ティアナが言いにくそうにボソボソと呟き

最後に表情を引き締めてピシッと言い放つ。

「けど！スバルとギンガさんにはちゃんと謝ってよ！」

「…うん」

皆の言葉を聞いてアネモネの表情も幾分穏やかな物になった。

「アネモネ…」

エウレカは尚も心配そうな表情をアネモネに向けていたが

「…大丈夫よエウレカ。今の私にはアンタと同じで大切な人が側にいる…」

私は戦うわ。皆の為にも…」

アネモネがエウレカを安心させるようにこう言った。

「ふーんアンタも言うようになったじゃん」

それを聞いてシンシアが軽い感じで言う。

「まあね…ってちょっと！アタシに黙って勝手に先に逃げ出したアンタには言われたくないわよっ！！」

アネモネはほんの一瞬照れくさそうにしたが
すぐにハッと気づいてシンシアに向かって怒鳴る
それを聞いてもシンシアは大して反応を示さなかったが：

「では：話を続ける事にしましょう：」

バルクホルツがモニターを操作する。

すると、共通のボディスーツに身を包んだ数人の女性達が映し出される。

「スカリエッティのメインの戦力と呼べるのが彼女達：戦闘機人でしょう」

全員が固唾を飲み込んで真剣に話を聞いている。

「人間を模した機械兵器：いや、生前の時点で兵器として生まれるよう調整された者達」

苦々しい表情でバルクホルツが言う。

「誕生の前から機械の体を受け入れられるように調整して子供を産み：

それを何の躊躇いもなく改造する技術をあの男は持っている：」
途中でフェイトも説明に加わる。

「下衆が：アイツらのやりそうな事だな：」

ベルクトが忌々しいといった風に吐き捨てる。

「現状確認されているのが10体：それ以上いる可能性も十分有り得ます

しかし：私達の敵はそれだけにはとどまりません」

モニターが移り変わり、また違う人物達が映し出される。

「赤い彗星シャア・アズナブルとそれに付き従っているとされる
召喚士：ルーテシア・アルピーノ」

「この娘…」

淡々と説明するゼクスの側で、ルーテシアの映像を見たキャロが反応を示す。

「そして謎の騎士、ゼスト・グランガイツにギガノスのマイヨ・プラート」

「……………」

マイヨの姿を厳しい視線でシグナムが見ている。

「更にはシベリア鉄道運行部長の…これは省略してもいいでしょう…」

「でしょうね…」

バルクホルツの言葉にゲイナーもあっさりと肯定の意を見せる。

カシマルは完全に戦力外として舐められていた。

「そして誰よりも警戒しないといけないのがこの2人でしょう…」

モニターが更に移り変わり、ベルクト、フェイトに瓜二つの人物達が映される。

「セデイス・バルドナ並びにBB…セデイスの方はフェイト・T・ハラオウンに

匹敵する強力な力を持ち、BBの方は体内にE2…レリックを内蔵した

極めて莫大な力をもった人造魔導師だ」

「レリックを…ですか？」

ゼクスの説明にエリオが驚きを浮かべて反応する

そして一通り説明を終えてバルクホルツが更に続ける。

「…今説明した以外にも更なる戦力を敵は投入してくる可能性がある

ります

戦いの激化は避けられないでしょう：そこで」

モニターが再び移り変わり、今度は複雑なデータ式のような物が現れる。

「：スカリエッティが行動を開始するまでに、

私が出来る限り皆さんのデバイスを改造したいと思います」

その言葉に再び一同がどよめく。

「改造って：俺達のデバイスはいろいろ謎が多いんだぞ？」

「そうよ。それにこれだけの人数だととても時間が：」

勇と比瑪が言う。しかしバルクホルツはサラリとこう返す。

「心配には及びませんよ：皆さんのデバイスデータはマリエル君を通じて

全て私の下に行き届いてますからね：改造プランもある程度構築済みです」

「ええっ!？」

その発言内容にシャーリーが声を上げて驚く。

「マリーさん、いつの間にそんな：」

「黙っててごめんねシャーリー：元々私が六課に来たのもそれが一番の理由だったのよ：」

シャーリーに対し申し訳なさそうにマリエルが言う。

「バルクホルツさん：用意周到すぎだよ」

タックは感心しながらも少し呆れた感じに言った

「では最後にもう1つ……」

モニターにBBとE2が映し出される。

「現時点で最も厄介といえるのが彼…BBでしょう…

ベルクト君との交戦データを見る限りでは

皆さんが束になってかかっても勝てるかどうか危ういです…」

その場に重苦しい空気が漂い始める。

「ですが…対抗手段が無いわけではありません」

「…：言え、それは一体何だ…！」

ベルクトが凄みをきかせてベルクホルツに言う。

自分達の人生を狂わしてきた張本人たるBB

しかしベルクトは何も出来ずに負けてしまい

それを打開する方法は是が非でも知りたかったのだ。

バルクホルツは腰に付いてる小箱から魔法カードを取り出してある物を転送する。

「…ってちよっ…ディールおじさん…これは…」

はやてはそのある物—E2ケースを見て慌てる。

しかしバルクホルツはお構いなしに説明を続ける

「…タック君やマリナ君は特によく知っていますですが

E2というのはガーディアンシステムの例にあるように

特定のDNAパターンを持った人間と共鳴することによって

初めてその力を発揮出来ます。

それはこっちの世界でも例外ではありません…」

モニターを忙しく操作しながらバルクホルツは続ける。

「ならば目には目をとというやつです…現状彼に対抗するには危険が伴いますがこちらもE2の力に頼るしかないでしょう…」

真剣な表情でバルクホルツが語る。

「…ちょっと待て、いくらなんでも行き当たりばったりじゃないか？」

「それにさっきお前が言ったように、適合者がいなければ不可能な話だ」

アムロとヒイロがその案に難色を示す。

「お二人の言うことはごもっともです…しかし…」

マリエル君が持ってきたデータを調べる内に判明したのです…

機動六課に1人だけいたのですよ…こちらの世界のE2に適合する方が」

その場にいた全員が今まで以上の驚きを見せる。

それを確認した後バルクホルツは極めて真剣な表情で

ある1人の人物に顔を向けて言った。

「…あなたなんです…ベルクト君…」

＊

スカリエッティのアジト

「ドゥーさん久しぶり〜」

「久しぶりねドゥーエ。任務の方は大丈夫なの？」

「心配ないわーノ…残った雑務はフロスト兄弟がやってくれるものの」

ドゥーエが何年かぶりにアジトへと帰還しており

それをセデイスとウーノが出迎えていた。

「本当に珍しいことね：あなたがそこまで信頼してるなんて」

「当然よウーノ：あのお二方は：妹達以外で

初めて私が心を揺れ動かされた人達だもの：」

ウーノに対してウツトリした感じにドゥーエが言う。

「あ、パパ！」

ふとセデイスが嬉しそうに声を上げる。

3人の近くにスカリエッティとバルドナがやってくる。

「これはまた懐かしいお方ですね：」

「ドゥーエ、君か」

「お久しぶりですドクター：それにバルドナ博士も：」

スカリエッティとバルドナにもドゥーエは挨拶する。

「ちょうどよかった：これからはこぶねの最終調整があるんだ：

ウーノ、ドゥーエ、君達も見にくるかい？」

「はい：」

「喜んで：」

スカリエッティの言葉にウーノとドゥーエは嬉しそうに答える。

「あなたも来ますかセデイス？」

「うん！」

バルドナに対してセデイスが元気よく答えた。

一行は薄暗い廊下を歩き目的の場所を目指す。

その途中でふとスカリエッティが昔語りを始める

「管理局が実用寸前までこぎつけ：私が長い時間をかけて改良した戦闘機人：

最高評議会の依頼で作りあげたゼストやルーテシアをはじめとした人造魔導師：

思えばこの数年間：たくさんの研究を続けてきた：」

「ドクターがライネン博士やバルドナ博士と出会って以来：更に多くの実験を行ってきましたからね：」

「そしてフロスト兄弟をはじめとする多くの異世界人を取り込み：ドクターの研究は今や集大成を迎えようとしている：」

スカリエッティ、ウーノ、ドゥーエが順々に話していく。

「古代ベルカの英知の結晶：聖王のゆりかご：

その起動こそがあなたの夢でしたからね：」

バルドナはそう言っただけでメガネをクイツと上げる。

「ですが過去の遺産をただ修理して使うだけならただの天才でも出来る：

スカリエッティ：君や私は遥かに優秀なのだからそれで満足してはいけなかったのですよ：」

「それでパパやアルさんが協力してゆりかごをもっと強力に改造したんだよね：」

バルドナに続いてセデイスが楽しげに話す。

「ああ：そして改造に改造を重ねた結果：それは見事な完成を見た：聖王の器が無くとも：その身に流れる血さえあれば起動可能：私達の新たな夢：」

スカリエッティがそこまで言った時に一行は目的の場所に到達する。

「そう：はこぶねだよ！！」

感極まったようにスカリエッティは部屋の明かりをつける。

そこに映し出されたのはゆりかごの原型を留めぬ巨大な戦艦：

最上部がドーム型になっており底部に巨大な筒型の砲台を備えた漆黒の巨大艦であった。

「夢が：叶うのですね」

「まだだよーノ…どの道ミッドチルダの支配は
ミスター・シャアやフロスト達に委ねる事になる

このはこぶねの力を使って始まるのさ…

多くの次元世界を遊び場とした…私達の楽しい夢が…！」

ウーノに対して心底楽しげにスカリエッティは話す。

「そう…私達の全てはここから始まるのですからね…

その為の最後の大舞台の始まりも近い…

その時にはセデイス…あなたにも存分に働いてもらいますよ？」

「うん！パパの為なら何でもするよ！」

セデイスはバルドナに即答して更に続ける。

「私はパパの為に生まれてパパの為に生きてパパの為に死ぬ…

それがパパの最高の道具として作られた私の存在意義…でしょ？」

「素晴らしい…大変素直でよろしいですよセデイス…」

「へっへっ♪」

バルドナは満足げにセデイスの頭を撫でてやる。

それによってセデイスはだらけた表情になって涎を垂らしていた。

（もうすぐです…もうすぐ全てが…私が…）

セデイスの頭を撫でながら、バルドナは獰猛な笑みを浮かべていた。

第23話（後書き）

更新遅れて本当にごめんなさい…

リアルが非常に忙しい＋重度のスランプで

まともに話を書けませんでした…今回もあんまり自信ないしなあ…

リインフォースの復活

バルクホルツの登場

デバイスの改造にベルクトの意外な真実

B B、セデイスの新たな魔法にウンコ部長（笑）の新デバイス
とにかく最終戦に向けて詰め込めるだけ詰め込んだ感じです。

B Bへの対抗手段が正に目には目になりましたけど

かといって彼レベル超絶チートにはなりません

当然大きなリスクも存在しますので…

作者の中でも忘れかけていたエイサップとサコミズ王

…正直リーンの翼もそんなに詳しくなかったので

また見直さないとなあ…

シヤマルとは上手く絡ませていきたいし…

そして遂に登場したはこぶね

当然母体となったゆりかごなんざ目じゃない
とんでも機能を搭載しておりますとも
ライネンとバルドナが関わってるんでしから…
ねえ？…やっぱりの2つは使いたいですから…

バルクホルツのデバイス改造によって
本当に色々はっちゃける予定です…
もう本当にACEという枠があんまり意味なくなってきたな…
でもやっぱり私も出したいですから
アムロのソレなんか特に

次回の更新もまた不定期かもしれません…
それでも待ってくれるなら幸いです。

それではまた

第24話（前書き）

決戦前のそれぞれの時間
そして姿を現すはこぶね

第24話

戦艦アースラ、はやての自室にて

「……それで戻ってきてみたらリインも驚いちゃったんです！
はやてちゃんから話を聞いてたタックさんやマリナさんがいたんで
すから〜！」

「そうか……………」

部屋の中にははやて、タック、マリナ、リイン、リインフォースの
5人がいる。

リインは大分打ち解けたのか、リインフォースに対して
親しげにこれまでの自分や六課での出来事を話している。

リインフォースは椅子に座ったまま終始穏やかな表情で、リインの
話に耳を傾けている。

「うふふ…リインも少し落ち着きいな？」

「でもでも！リインも嬉しいんです〜！まさか私の偉大な先輩とい
うか…」

憧れの人というか…その…とにかく初代リインフォースとお話でき
るなんて！」

クスクスと笑うはやてに興奮ぎみにリインはまくしたてる。

「でも、本当に信じられないというかなんと言うか…」

「バルクホルツの技術力には驚かされるわね…」

そんな様子を見ながらタックとマリナがしみじしした感じに呟く。

「あの男は…私を創りだすために何年も必死であったからな…」

そのおかげでこうして再び主と共にいられるのだ…感謝してもしき
れない程だ…」

「そやな…私もディールおじさんには本当にお世話になつとる…昔
も今も…」

リインフォースの言葉にははやてが答えると、直後にははやては少し表
情を曇らせる。

「けど：ディールおじさんも本当は今、凄い心中複雑やと思う：何せ：自分のお父さんが今回の事件に関わってるんやから：」それを聞いてハッとしたようにタック、マリナ、リインの3人が反応する。

リインフォースは表情を固くさせる。

（アルバート・ライネン……か：）

静かに目を閉じ、タックは心内で考える。

前の世界、10年前の闇の書事件で敵対関係であったとはいえ最終的には自分達に協力してくれ、今も機動六課に協力してくれている。

その彼の父親たるアルバート・ライネンが黒幕の1人となるとバルクホルツがどんな思いを抱えているのかは想像がつかない。

（ましてや：あの人は言っていた：）

タックは時系列的には10年前の彼との戦いを思い返す。

一父は危険思想の持ち主などではない……私はそんな教えなど受けていない……

一私も……私の父も……本当はきちんとした科学者だと……多くの人に貢献する為に努力してた……

一誰でもいい……どの世界のどんな人間でもいい……認めさせたかった……

彼は言っていた、前の世界でも海鳴市でも。自分は父親の正しさを証明するべく戦っている。

どんな方法でもいいから自分の父親の偉大さを認めさせたかったのだと。

だが、今のアルバート・ライネンはどうなのだろうか？

完全なる別世界とはいえ、今の彼はジェイル・スカリエッティと共にこのミッドチルダに混乱を振りまく人物となってしまうているのだ。多くの人々に貢献する為に努力していた立派な科学者…などとは程遠い姿なのである。

「けど…」

そこまで考えて目を開き、真剣な表情でタックは口を開く。

「バルクホルツさんの考えがどうであれ…俺達はあの3人を…」

ライネン博士も含めた彼らを必ず止めなくちゃならない…

そうでないと…前みたいになまた多くの人が犠牲になる」

前回の地上本部襲撃の事を思い出す。このまま彼らを放っておけばあれ以上の大事件が起こる可能性は十分すぎるほどにある。

「私達の地球…はやて達の地球…そしてこのミッドチルダ…」

私達は本当にいろいろな所で戦ってきたわ…」

タックと同様に真剣な表情を浮かべてマリナも語り始める。

「だから私の…私達のやる事は今回も変わらないわ…」

私達の仲間…私達の住む世界…それを壊そうとする脅威と戦うだけ…その為にバルクホルツも協力してくれている…」

そこまで言っってマリナはうっすら笑みを浮かべてはやての方を向く。

「だから…今までと何も変わらないわ。みんなを守る為に私は戦うだけよ」

そう言っ てマリナはタツクの方に顔を向ける。
タツクもマリナを見て言いたい事を察し、マリナの方に笑顔を向ける。

「……そうやな」

2人の話を聞いて、はやてもまた話し始める。

「私はそんなに頭はよくない…何が誰の思惑でどんな計画が渦巻いてるかはわからへん…」

けど…あの3人がタツクやマリナやいろんな人達を巻き込んで管理局に…ミッドチルダにとっての脅威であることは事実や…」

他の4人に見える位置にゆっくりとはやては移動し、そして声を張り上げて言った。

「私達は時空管理局機動六課…この世界の脅威なら…彼らを止めないアカン！」

今まで以上に厳しい戦いになるのは間違いない…だけど…」
少し間を空けて、はやては最後にこう言った。

「必ず終わりにしような…もうこれ以上、私達のように悲しい目に遭う人を作らない為にな…！」

はやての言葉を聞いて、他の4人も力強く頷いて答えた。

*

会議室のような部屋で、なのはとユーノがプリベントー、ゼクスと共に話し合っていた。

「…スカリエッティのアジトの居場所については俺達が大体の目星はつけていた

だが今回ヴィヴィオが攫われたのと、アネモネやゼクスが合流してくれたのを合わせた結果

その所在位置の情報がより詳しく確実なものとなった」

パネルを操作してモニターを映しながら淡々とそろわが説明していく。

「そしてその所在位置なんだが…」

次いでゼクスがモニターを動かすと、モニターに青い装甲の戦艦が映し出される。

「古代ベルカ時代の悪夢の兵器…聖王のゆりかご…それが封印されている場所だとわかった」

「ゆりかごだって…！」

それを聞いてユーノが驚きを浮かべる。

無限書庫の調査中にその情報を耳にしていたのだ、その脅威を少なからず知っていた。

「そして僕の方の調査でわかった事なんですか…」

ヴィヴィオの遺伝子データは…約300年前の聖王時代…古代ベルカの人物が元になっていると…」

「そしてこれまた厄介な情報なんだけど…さっき言ったゆりかごって兵器の機動には

古代ベルカの支配者…聖王の遺伝子が必要不可欠なんだとよ…」

「それって…まさか…」

重々しく報告したカトルとデュオの言葉を聞いて、何かに気づいたかのようなのはが声を上げる。

「つまりは…あの少女は聖王のコピーという可能性が極めて高いということだ…」

ピシヤリとトロワが正解を言い放ち、皆は複雑そうな表情を浮かべる。

「だが気になるのはジル・バルドナの言った言葉だ：ゆりかごの起動には聖王が必要不可欠：

けど奴はヴィヴィオは必要ないと言ったのだ：」

「その男が言っていたはこぶねという単語も気になるな：」

その後ゼクスとトロワが固い表情でその件について詳しく話を始めるが

「お2人とも控えてください：なのはとユーノがいるんですよ？」

カトルが少し怒気を含ませて2人に警告する。見るとなのはとユーノは表情を曇らせている。

ゼクスとトロワは軽率だったと感じ口を閉ざした。

そしてしばらくした後、なのはが言いにくそうに口を開く。

「カトルさん：300年前って事は：ヴィヴィオの本当の親はもう……」

「……………」

カトルの返答は沈黙だった。わかっていたとはいえなのはは表情を更に暗くさせる。

するとそんなのはを見て、ユーノが口を開く。

「なのは：たとえ聖王だろうと何であろうとヴィヴィオはヴィヴィオだろう？

それに本当の親がないっていうなら、僕達がこのまま：」

「けどユーノ君：私もう：ヴィヴィオの事幸せにしてあげられる自信が無いの：」

俯きながらなのはは、弱々しい声でユーノに言葉を返す。

「私っていつも自分の事ばかりで：優しい母親になれる資格なんて多分無い：

今回だってそう：バルクホルツさん達がいなかったらどうなったかわからなかった：

それに何より：私は空の人間だから……」

そこまで言っとなのはは言葉を止める。その意味する事が何なのかを察したユーノは
ガタンツと大きな音を出しながら勢いよく立ち上がってなのはに向
かって怒鳴る。

「縁起でもないこと言うんじゃない！君は必ず僕が守ると言っ
たろう！？」

なのはだってあの時僕に言ってくれたじゃないか！それくらいで弱
気になっても…！」

「そうですよ…せっかくヴィヴィオはあなたの事を家族だと思っ
てるのに…何も自分から…」

「そんな弱気になってたらあいっだって悲しむぜ？」

ユーノに続いてカトルとデュオも言葉を投げかけるが、なのはの表
情は暗いままだ。

「でも可能性はゼロじゃない…ユーノ君の気持ちは痛いほどわか
ってる…」

…けど、それでもヴィヴィオに何かあったら…私…もう…」

なのはの目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

「ママ……」

その声を聞いてなのはは顔を上げる。他の皆も声のした方に注目す
る。

するといつの間にか現れたのか、会議室の入り口の扉が開いておりそこにヴィヴィオが立っていた。

「ごめんねなのはさん：大事なお話の最中だと言ったんだけど：ヴィヴィオが言うことを聞いてくれなくて：」

その後ろでフェイが困ったような表情を浮かべている。

ヴィヴィオは不安げな表情でなのはの方に近づいていく。

「どうしたの、ヴィヴィオ？」

なのはは無理に笑顔を作ってヴィヴィオの前にしゃがみ込む。

「ママとパパ：げんきがなかったから：そしたらママのしょんぼりしたこえきこえたから：」

ヴィヴィオが不安げな表情を浮かべる。

「ああ：大丈夫だよヴィヴィオ：パパもママも大丈夫だから：」

それを聞いてユーノもヴィヴィオの側によってしゃがみ込む。

すると、ヴィヴィオは唐突に両手を上げて2人の頭を撫でる。

「ママ、パパ、いいこ：」

突然の行為に2人はキョトンとするが、やがてヴィヴィオの純粋な優しさに感動し、笑顔になる。

「うん：ヴィヴィオは優しいね：」

そう言ってなのは目に涙を浮かべつつヴィヴィオを抱きかかえる。

「：平気だよヴィヴィオ：ヴィヴィオが笑顔で元気でいてくれたら：」

なのはママもユーノパパも、笑顔で元気だから：」

そう言ってユーノも立ち上がり、ヴィヴィオの頭を撫でてやる。

「えへへへ♪」

ヴィヴィオは満面の笑みを浮かべる、それを見てなのはとユーノも笑みを浮かべた。

（なのは：ヴィヴィオだっとうして僕達の事を心配してくれてるんだ：だから：）

(……うん……ごめんねユーノ君……もう弱音は吐かない……ヴィヴィオの為にも絶対に……)

その後2人は念話でやり取りを行う。

ヴィヴィオの思いに触れて、なのはは気合を取り戻すのであった。

＊

ロビーの一面でバレルは1人で黄昏ていた。

(………父親……ジル・バルドナか……)

原因は実の父であるジル・バルドナについてだ。

嘗てベルクトが自ら殺した自分にとっての本当の父親である。

だが……その父親のやってきたことは何なのだろう？

スカリエッティと手を組み、このミッドチルダを混乱させ

自分やフェイトと瓜二つの人間を作り出し、破壊のために使っている……

ベルクトに殺されたという事実を念頭に置いても

バレルはバルドナが何を考えているのかが全く理解できなかった。

(………例えばベルクトが原因だったとしても……今の俺達はどう……)

バレルはしばらくした後に座っていたソファから立ち上がり

真剣な表情を浮かべたまま歩き始める。

「あれ、バレル？」

するとその途中でガロード、レントン。ゲイナーの3人と鉢合わせになる。

「ああ、みんなどうしたの？」

「僕達の分のデバイス改造が終わったから取りに行ってたところなんだ」

バレルの質問にゲイナーが答える。

するとレントンがバレルの顔を覗きこんで尋ねる。

「バレルどうしたんだ？何か元気が無いように見えるけど…」

「えっ、そ、そうかな…」

突然そんな事を言われバレルはて困惑する。

「ひょっとして…親父さんの事か？」

恐る恐るガロードが尋ねると、バレルは表情を急変させる。

それを見てガロードはしまった、という気分になった。

だが、バレルはすぐに笑顔を浮かべて返答する。

「…大丈夫だよ、確かに驚いたっちゃあ驚いたけど…そんな事で悩んでる暇なんか無い」

僕はバレル・オーランドだ…バルドナは関係ないよ」

「そ、そうか！ならいいんだけどよ…」

ほっとしたようにガロードは胸を撫で下ろす。それを見てバレルが再び口を開く。

「それにみんなと再会出来たからこそ…悩まないでいられるのかも…
しれないな…」

「どういことだい？」

ゲイナーがバレルに尋ねる。するとバレルは実にいい笑顔でこう答えた。

「僕達、結局はみんな一緒じゃないか？大切な人の為に戦うって目的で…」

それを聞いて3人も妙に納得したような表情になる。

「ああ、成る程！確かにそれは言えてるかもね」

「俺もゲイナーもガロードもバレルも…最初は戦いなんて無縁の所にいたからなあ…」

「けど戦いの中で俺達は出会って…そして大切な人の為に戦えるんだよな」

皆それぞれ、過去のこと、自身のパートナーのことを思い返す。

「…だから一々父親のことがどうこうでなんて悩んでいられないみんなを見てると僕もフェイを守る為に頑張んなきゃって思えるから」

「そうだね…僕もサラを守る為ならあいつらにだって絶対に負けるわけには行かないから」

「俺だって…この世界を滅茶苦茶にしようとしてる連中…そいつらからエウレカを守りたいし…」

「ああ…俺も前の戦いでティファの事を…だから今度は絶対に勝ってみせる！」

ティファの言ってた不安なんて…全部俺がなぎ払ってやる！」

4人はそれぞれ言った後にガシツと拳をぶつけ合う。

「この世界を守るため…」

「自分の大切な人のためにも…」

「そして無事に自分達の世界に帰る為にも…」

「絶対に勝とう！」

「」「」「おう！」「」「」

4人はそれぞれ思いを共にした同士で固く誓い合うのであった。

＊

訓練スペース、その1つでシンシアとエリオが模擬戦を行っていた。

「よっと!!」

「うわああああ!!」

シンシアはエリオを引っ掴んだまま右腕を延ばしてエリオを投げ飛ばす。

エリオは途中で踏み止まってストラーダを構えなおす。

「ストラーダ!!」

気合と共にストラーダのブーストを吹かし、シンシアに特攻する。

「ハイッ!!」

シンシアそれを直前でヒラリと横に回避し、右腕を剣型に変形させてエリオに向かって振るう。

エリオは空中でストラーダを構えてその一撃を防御して、地上に着地する。

シンシアも一旦エリオから距離を取って地上に降りる。

ちょうどその時に終了のブザーが鳴る。それを聞いて2人は構えを解く。

「ふーん…なかなか速いんだね…結構センスあると思うよ」

「はい…」

息を荒げるエリオに対し、シンシアは満足げに言う。

その様子を離れた位置で眺めていたサラが、エリオに近寄ってタオルを渡してやる。

「けどエリオ君大丈夫？シンシアと訓練する意味が私にはちよつと…」

「大丈夫です…いろいろ参考にさせてもらってますから…」

シンシアさんやゲイナーさんと戦ってるといういろいろ学べるんです…」サラが持ってきたタオルで顔を拭いながらエリオは答える。

「アタシも結構本気だったし…流石あのピンクの女剣士さんが見込んだだけの事はあると思うよ」

「あ、ありがとうございます！」

シンシアもエリオの方にやってきて彼を褒め、それを聞いてエリオは嬉しそうに答えた。

*

別の訓練スペースではアムロとティアナが模擬戦を行っていた。

「……そこだっ！」

分離させていた2つのフィンファンネルを操作し、ティアナに向かって魔力弾を放つ。

ティアナを地面を必死になって駆け回りながらそれらを回避していく。

その隙にアムロがティアナに向かって突っ込み、サーベルを放つ。

「くっ！」

ティアナはクロスミラージュを近接戦闘モードに移行し、魔力刃を発生させてそれを防御する。

その隙にアムロがフィンファンネルの1つをティアナの背後に移動させる。

「……そこっ！」

それを瞬時に悟ったティアナが背後へと振り向いて魔力弾を発射する。

「気づいたか！」

アムロはフィンファンネルを操作し、ティアナの魔力弾から逃れさせる。

ティアナの放った魔力弾は破壊までは行かなかったが、アムロのファンネルに掠って消滅する。

と、ちょうどその時に終了のブザーが鳴る。

「……時間だな」

「はい……ありがとうございます」

うつすらと額に汗を浮かべて言うアムロに対し、ティアナは疲労困憊といった感じだ。

互いに戦闘態勢を解いて、デバイスを解除する。

（反応速度が以前より格段に上がっている……サイコフレームの技術を魔法デバイスに組み込んだ実験結果の応用か……）

アムロは模擬戦での自分の動きを思い返し、バルクホルツの言葉进行を思い出す。

そして待機状態の自身の新しいデバイスをまじまじと見つめていた。

（H i ー v ガンダム……魔法デバイスという形とはいえ本来望んだ v ガンダムの完成系か……）

しばらくして呼吸が落ち着いた後、ティアナがアムロに対して言う。

「すみませんアムロ隊長……私なんかの訓練の為に時間を割いてくれて……」

「いや……俺も新型デバイスの調整も必要だった……ティアナみたいなタイプの相手との戦いは

俺にとっても貴重な経験になってるさ」

そう言ってアムロはティアナに笑みを向ける。

「反応速度も射撃のスピードもコントロールの精密さも格段に上がっている……」

なのは達の教えの賜物だな。もっと自身を持っていぞティアナ」

「は、はい！ありがとうございます！」

アムロに褒められてティアナは、少し緊張気味に礼を言った。

＊

ティアナは訓練スペースを後にする。

「さあさあ善は急げよ！速く訓練を始めましょう！」

「ちょ、ちょっとそんなに急かすんじゃないわよ…」

すると、廊下の反対側から声がして、スバル、ギンガ、そしてアネモネの3人が姿を現す。

「スバル！ギンガさん！」

「あっ…ティア！」

ティアナがそれに気づいて声をかける。スバル達もそれに気づいて笑顔で答える。

「怪我のほうはもう大丈夫なの？」

「うん！私もギン姉も、キャリバー達も無事に完治したよ！」

「心配かけてごめんねティアナ…」

そう言っただけでスバルとギンガは各々のデバイスをティアナに見せる。すると、ティアナは次いでアネモネの方に目をやる。

「て、あれ…何でアンタがスバル達と一緒に」

「そ、それは…何かアタシが謝りに行ったら流れでこんな感じに」
ギンガに腕を掴まれたまま困ったようにアネモネは答える。

すると、ギンガがフーツと1つため息を吐いた後にティアナに答える。

「…事情は全部知ってるわ…けど私はこの娘の事を恨むより…」

自分の未熟さを恥じてるの…」

「うん：私も何も考えないで暴走しちゃって：マツハキヤリバーの事も傷つけちゃった…」

だからそんな自分の事を棚に上げてクヨクヨしてるよりは…

この娘と一緒に訓練して自分の弱点を見つめ直した方がいいかなって！」

途中でスバルも参加して元気よく答える。

それを聞いてティアナは若干ポカンとしていたが、やがて笑みをこぼして言った。

「そ、そう：まあスバルがそうやって言ってるなら私は何でもいいわ」

「うん！」

スバルもティアナに向けて笑顔を向けた。

「さあ急ごう急ごう！時間は限られるんだから！」

「だ、だから：そんなに引っ張らないでってば…」

そしてギンガと流されるままのアネモネと一緒に訓練スペースへと入っていく。

（相変わらずだけど：元気そうで何よりね…）

そんなスバルの後ろ姿を見て、ティアナは穏やかな表情を浮かべていた。

＊

医務室、パネルを慌しく操作しながらシャルは考えていた。

（再生機能だけじゃない：騎士同士の相互リンクとかはやてちゃんから魔力供給も：）

ここ数年見られる自分達の体の異常について悩んでいたがやがてパネル操作を止めて、一息ついて席に座る。

（でも：システムの破損だとは考えられない：やっぱりこういうのって：

普通の人間と同じになってきてるっていう：）

と、そんな事を考えていたのだが：

「む、失礼。どうやら部屋を間違えたようだ」

「あっ…！」

医務室の扉が開き、やたらと民族衣装のような物を纏った渋い男一サコミズが姿を現す。

すると、シャルはサコミズの顔を見た途端に顔を赤らめさせる。

「ん…私の顔に何かついていいるのか？」

「あ！いえ…その…！」

自分をジロジロ見てくるシャルに対して、サコミズは疑問を抱く。そのシャルは自分でもよくわからないまま顔を赤くしてモジモジしている。

（な、何なのこの気持ち…）

シャルは今まで感じたことの無い感情に困惑しっぱなしで頭の中がどんどんヒートアップしていつてしまっている。

「え、えっと！サコミズさんですよね！？」

「ああそうだが…それがどうかしたのか？」

サコミズは普段の尊大な態度を崩す事無く会話に応じているが
シャルは大分ヒートアップしており、呂律が回らない口調で尋ね
る。

「あ、あの…どうして私達と一緒に…」

「前の時も言ったが私は貴様達とは一時的に手を組むだけだ…」

この世界の地上界を滅しようとする者どもと戦う為にな」

少しイラついた感じに答えるが、シャルは更に質問する。

「じゃ、じゃあ一体何の為に…」

「……………」

それを聞いてサコミズは少しの間を置いた後に静かに語りだす。

「…私も嘗ては腐敗する政府を滅し、地上人に鉄槌を振るう為に生
きてきた…」

だが私のした事によって地上界そのものが滅しかねない状況を生み
出してしまったのだ…」

私は一度は地上界を汚させぬ為に朽ち果て…そしてこの世界へとや
ってきたのだ」

「地上…界…？」

バイストンウェルに関して全く知らないシャルにとってはわけの
わからない話ではあったが

そんな事もお構いなしにサコミズは1人で勝手に語っていく。

「私も1度は死した身だ…今更自分の世界に戻ろうなどとは思わな
いし

私にとっては時空管理局とやらも連邦政府とは大して変わらん
だが！世界を異にするとはいえ地上を焼き民を滅ぼそうとする者が
いるのを

再会した鈴木君から聞いてな…それを放っておくわけにもいかん
しかし、今の私が人を正しい方向に導くなどというのも傲慢だ
よって私は戦うのだ。民を、街を焼き払う愚か者どもに鉄槌を下す
ためにな

この身が再び滅する時まで私は戦いつづるだけだ」

(……カッコいい……)

サコミズの独白を聞いてシャルは頭がポワポワしてきていた。そして唐突にサコミズの両手を握る。

「む、何だ!？」

「あ、あの頑張ってください! わ、私達も出来る限りサポートしますから!」

突然の事態に流石のサコミズも戸惑いを見せているが、シャルは更に爆弾発言をかます。

「こ、この小説の最終回あたりで結婚しましょうか?」

「何を言っているのだ貴様あああ!？」

「す、好きなのかも……これが一目惚れなのかも……白い仮面が似合いそうな素敵な方……」

サコミズは怒鳴りながらシャルを払いのけようとしたがシャルはサコミズの腕をガッチリ掴んで離さない。

「シャルウ……いるか……って何だ?」

「サコミズ王……ってええ!？」

すると、偶然その場をヴィータとエイサップが通りかかりシャルと密着するサコミズを見て2人は驚く。

「な、何やってんだよシャル!」

「……ハッ! 私は一切何を!？」

ヴィータに声をかけられてシャルはようやく正気に戻り、サコミズを解放する。

「サコミズ王…大丈夫ですか？」
「あ、ああ…私にもわけがわからんよ鈴木君…」
「あんなにオロオロしてるサコミズ王なんて初めてですよ…」
「リュクスが見たら何と言っていただろうな…」
そんな風に会話をしながら心底疲れた感じにエイサップとサコミズは医務室を後にした。

＊

ティアナとの訓練を終えた後、アムロは自室で書類整理をしていた。
「ん、誰だ？」
すると誰かの気配を感じて顔を上げる。直後部屋の扉が開き
ティファが部屋の中へと入ってくる。
「どうしたんだティファ？ガロードは一緒じゃないのか？」

「アムロさん…」

アムロの質問には答えず、ティファは真剣な表情でアムロに質問する。

「あのニュータイプの子の事…知ってますか？」

「…シヤアと一緒にいたルーテシアという少女の事か？」

真剣な表情で言うアムロに、ティファはコクリと頷いて答える。

「私は…機動六課が襲われた時にあの子の心を見ました…」

そしてルーテシアの事について静かに語っていく。

「あの子は…あの子の心はとても純粹です…でも…純粹すぎて透き通っている…」

あの子は側にいるシヤア・アズナブルに心の全てを許しています…だから…今のあの子の心はシヤアで染まっているんです…」

「そうか…」

それを聞いてアムロは苦々しい思いになる。

「結局俺もアイツも…ニュータイプという言葉に捕らわれて生きているのかもな…」

自分とシヤアの板ばさみになって死んだニュータイプの少女…

今も自分とシヤアの心に色濃く留まっている彼女の姿を連想してアムロは思い悩む。

「でも…」

すると、そんなアムロを見てティファが再び口を開く。

「ニュータイプなんてものは最初からいない…私はDOMEからそう言われました…」

私達はみんな…ニュータイプという言葉の幻想で繋がった世代だ…きっと…あの子もその力に魅せられて…」

「わかってるさ…」

アムロはティファの肩をポンと叩く。

「決着は必ず俺がつける。ニュータイプはアイツの野望の道具でもないし…

主義主張を語る為の偶像でもない…ニュータイプを巡る悲劇なんて…

こんな別の世界にまで持ち込んじやいけない……」
そう言ってアムロは席から立ち上がる。

「だから……シヤアとの事は俺が何とかする。君はガロードの側にいて彼を支えてやってくれればいい……心配するな」

「はい……」

ティファはうつすらと笑みを浮かべて答えた。

＊

「……………むう」

アースラ内の研究室、その中央にある白い台の上でベルクトは目を覚めます。

「気がつきましたか？」

その傍らにいた白衣を纏ったバルクホルツがベルクトに声をかける。

その後、ベルクトはすぐにバルクホルツと共にこの部屋へと移動しE2の移植手術を行っており、それが今し方終了したのである。

「気分の方はいかがですか？」

「問題は無い……ただ変わりが無さ過ぎて逆に不安なんだが……」

「E2の稼働は改良したグレイブアークで行えます。」

普段はE2は体の中にある機能していない無害の異物程度の存在で

す…」

台の上で胸を摩るベルクトに対してバルクホルツが説明する。

「頭の中で念じればE2がデバイスを通じて稼動し、莫大な魔力が供給されます…」

「そうか…」

「ただ先程も言いましたが忘れないで下さい…E2の魔力は確かに無限に近いですが…」

あなたは彼…BBと違って肉体の改造は行っていません…

彼の肉体と違ってE2の魔力を留めておくだけの容量は持ち合わせていないのです…

連続使用すればE2の膨大な魔力が体内に留めて置けなくなり…

体内から魔力が暴走して死に至るでしょう…」

極めて真剣な表情でバルクホルツがE2の危険性を説明する。

「24時間以内での連続使用はどんなに長くても10分程度が限界です…」

それを肝に銘じておいて下さい…」

「ああ…わかっている…感謝する、フィーデル・バルクホルツ…」

＊

研究室を後にし、ベルクトはアースラの甲板へと移動する。

「あっ：ベルクト！」

強い風が吹く青空の下であるアースラの甲板、その場所には既に先客がいた。

「ベルクト、手術は大丈夫だった？」

「問題は無い：無事に成功した」

「そう：良かった：」

フェイトはベルクトの姿を見るなり駆け寄ってきてベルクトの無事を確認する。

ベルクトは穏やかな表情で答え、それを聞いたフェイトは安堵の表情を浮かべる。

そして2人で甲板の端へと移動し、眼下に映るミッドチルダの街並みを見つめる。

「こうやって見てみると：この街も綺麗なものだな：」

「うん：私達の地球と同じ：ミッドチルダは平和で恵まれた世界だよね：」

飛び交う強風で髪を靡かせながら、互いに穏やかな表情で会話を言う。

「フェイト」

そしてベルクトはフェイトの方に顔を向ける。

「俺とお前のコピー：BBとセデイス：そして俺の父親ジル・バルドナ：」

「ベルクト？」

急に真剣な表情になったベルクトをフェイトも見つめ返す。

「この一連の事態：ひょっとしたら罰なのかもしれないな。あの男を殺した俺に対する：」

「……………」

「あの男がああしているのも元はといえば：「ベルクト」いつつ：！」

沈んだ表情で話すベルクトの額にフェイトは己の拳を軽くコチンとぶつける。

「そんな事言わないのベルクト：確かにベルクトがお父さんをこ、殺したのは事実だけど：

でも、その事と今の事件は関係ないよ」

少し不満げな感じでフェイトは反論していく。

「ベルクトも確かに責任感じちゃうかもしれないけど：

かといってベルクト達やこの世界に酷いことをしていい理由になんてならない

あの人はスカリエッティと同じでもう：多くの人を悲しませる犯罪者なんだから

私達はそれを止める為に戦うだけ：私やベルクトのコピーも含めて：ね？」

そう言ってフェイトは可愛らしく小首を傾げる。

ベルクトはそれを見て、クスリと笑ってそして言った。

「そうだな：確かにお前の言う通りかもしれない：すまないな：また情けない事を言って：」

「大丈夫だよ：ベルクトの事なら私が一番よく知ってる：だから：」
そう言ってフェイトはベルクトに抱きつく。

「絶対に無茶しないで：必ずみんなで：生きて帰ってこようね：」

「：当然だ：俺が死ねば誰よりも悲しむのはお前だ：俺は絶対に生きて帰って見せるさ：

そして奴らから全ての真実を聞きだして：そして全てを終わりにする：

お前も：決しては無茶はするなよ？」

「うん……………」

そう言って2人は互いの体をきつく抱き合って目を閉じた。

＊

ほぼ同時刻、スカリエッティのアジトのすぐ近くに3人の人影があった。

「こんな洞窟の奥にアジトがあるっていうのかしら…？」

「協会直属のプリベントーの情報筋だ。恐らくここで間違いない…それに…」

薄暗い洞窟の奥を覗き込むレイに対し、足元に魔法陣を展開しながら固い表情でアコースが言う。

「僕の猟犬を発見して一発で潰した…並のセキュリティじゃ不可能だ…ここで間違いない…」

それを聞いてアコースの側でチャールズが朗らかに言う。

「大したもんだねえお前さんも…見た目と違ってなかなかやり手みたいじゃないか？」

「チャールズさん…僕を子ども扱いするのはやめてほしいな」

苦笑いを浮かべつつアコースは答え、その直後、彼のしたに現れた3匹の黒い犬を撫でながら言う。

「それでも一応カリムやはやと同じ古代ベルカ式の、レアスキル後継者なんだから…」

「まあ今回のこの発見はお前さんの活躍もそうだが：プリベントーやら
六課の凄腕執務官さんやらの地道な捜査があったからこそ：」
チャールズが腕を組みながらしみじみとそう言った時。

「!!!!!!」

周辺の森林から大量のガジェットドローンが出現して3人を取り囲む。

「大人しく帰してくれる気はないって事ね：！」

レイが表情を強張らせて呟く。

「あんまり戦闘は得意じゃないけど：」

「あなたが心配する事は無いわよアコース♪」

レイはアコースに向けてウインクした後、チャールズと共に懐から待機状態の己のデバイスースピアヘッドを取り出して起動する。

そしてチャールズは青、レイは赤を基調にしたデザインが同一のバリアジャケットを纏う。

「こういう荒っぽい事は私達の方が得意だから：！」

そう言ってレイは両腕のバリアジャケットからスピアを展開する。

「俺の可愛い子供達の居場所をメチャメチャにくれた落とし前は：」

キツチリつけて貰わんといかないからな：！」

そう言ってチャールズもスピアを展開し、レイと背中合わせになる。

「行くぞレイ！」

「OK！チャールズ！」

そして互いに目の前の敵の大群へと突っ込んでいった。

＊

アースラ内メインブリッジ、船員達の報告が飛び交う。

「廃棄都市区画より戦闘機人の反応あり！地上本部へと向かっています！」

「例の騎士とあの青い騎士も別ルートで本部へ向かっています！」
それを聞いて隊長席の傍らに立っているアムロが固い表情で呟く。

「いよいよというわけか……！」

アムロが言った直後、アコースから通信が入る。

『はやて！こちらヴェロッサ！スカリエッティのアジトの位置を確定した！』

それを聞いてはやて達が驚きを見せる。

『協力者のビームスさん達が今迎撃に来たガジェットを叩き潰している』

協会騎士団から戦力を呼び寄せてるけど……そっちからも応援を頼めるかい』

「もちろんやけど…！」
はやてが困惑気味に返答をしようとしたその時
『ハロー！！元気してたかなあ？機動六課のボンクラ諸君？』
全周波の通信割り込みが入り、モニターにフェイトと瓜二つの女性
ーセデイスが姿を現す。

＊

ミッドチルダとは違う次元世界のとある田舎町
その町の外れにある小さな病院。その一室で紫髪の女性が横たわっ
ていた。

「……………」

その傍らにはシャアとルーテシアの2人が立っている。

「……おかあさん」

そしてルーテシアが口を開き、意識の無いその女性ーメガーヌ・ア
ルピーノに喋りかける。

「もう少しだから…もう少しで私達はドクター達から解放される…
そうすればシャアが…私達を幸せにしてくれる…」

私やシャアのような…本当の心でお話し出来る人達が幸せに暮らせ
る世界…

そんな世界をシャアが作ってくれるんだって…」
そしてルーテシアは笑みを浮かべてメガーヌの頭を優しく撫でる。

「だからここで待ってて：私達はきつと帰ってくるから：そしたら
シヤアとおかあさん：3人で幸せになれるから：」

そんなルーテシアをシヤアは黙って見つめている。

そしてルーテシアはシヤアの方に向き直った。

「じゃあ：行こうシヤア：」

「ああ：これで終わりにしよう：ルーテシア：」

シヤアは真剣な表情でそう答えて懐から待機中の自身の新たなデバ
イスを取り出し、

ルーテシアが首から提げた深緑色のペンダントを見つめる。

（ルーテシアの新たなデバイスーヒュギエイア：そして私の新たな
デバイスーナイチンゲール：

準備は全て整った：そうだ：今度こそ：）

シヤアは通信回線を開く。

「BB：こちらの用事は済んだ：頼む」

シヤアがそう言ったと同時に2人の足元に漆黒のテンプレートが展
開し

2人の姿はその世界から消滅した。

（今度こそ：全てを終わらせてみせる：！アムロ：！！）

*

セデイスの割り込み通信アースラ内の至る所に響いていた。

「あの人がフェイトさんの…！」

「本当にそっくり…」

フェイトと寸分違わぬセデイスの姿を見て、エリオとキャロが驚きを浮かべる。

「どうやってこの艦の通信回線に…」

『こんな旧式艦のポンコツ回線…パパの作品たる私の手にかかればお茶の子さいさい、への河童なのよ』

実にイラつく子供じみた言い回しでセデイスが言う。

そんなセデイスに対し、フェイトは表情を歪ませながらも冷静な口調で尋ねる。

「このタイミングで割り込んでくるなんて一体何が目的なの…？」

『くしししし…相変わらず怖い顔だねオリジナル』

目的なら単純だよ♪パパやジェイルさんの準備が万全整ったのよ♪
その言葉にアースラ内にどよめきが走る。セデイスはその光景を楽しんでいるかのように

満面の笑みを浮かべている。

『せっかく楽しいお祭りの開幕セレモニーなんだし…一言挨拶しておこうかなって思ってた！』

「悪いがそんな物はいらない…さっさと姿を見せたらどうなんだ？」
セデイスの言葉に動じる事無くキツパリとベルクトが言い放つ。

『まあまあベル君もそんなに慌てないで…すぐに姿を現すよ…』

私やビーちゃんやパパ達を新たな世界へと誘う夢の乗り物がね♪

セデイスがそこまで言った直後、別のモニターに映されたのはスカリエッティのアジトの近くで激しく地震を起こす地雷王の姿。

「あの虫…例の召喚士の…！」

『すごいでしょう？ルーちゃんはちょっと忙しいから私が借りてるの』
その光景を見てユーノが口を開く。そしてセデイスが一際大きい声で言った。

『さあ！いよいよお披露目っ！パパ達の最高傑作！！』

＊

戦艦はこぶね内部、最上階マスタールーム
照明が完全に落ちた完全な真っ暗闇の中で
素顔を晒したままのBBがその部屋の中心に浮かんでいた。

「さあBB：準備はよろしいですか？」

「ああ：」

いつも以上に興奮しているバルドナに対し、BBは静かに答える。

「大丈夫ですよBB：出来損ないは必ずあなたの下へとやってくるでしょう：」

いや：あなたはこれまで随分頑張ってくれましたから：私がそのようなように仕組んであげます：

ですから：遊び終わった後は確実に破壊するのですよ？」

「：へっ！親父もわかってきたじゃねーか！」

それを聞いてBBは満足げに答える。それを見たバルドナはパネルを操作する。

「さあ今こそ…今こそ私の夢…それが羽ばたく時なのです」
感極まった声でバルドナは目の前のスイッチを押す。

『認証完了』

機会音声と共にBBの部屋の照明が一斉に灯り、船体が大きく揺れ始めた。

＊

戦艦はこぶね、サブ動力ルームA

「アジトの周辺に誰かいるみたいだが無駄な事だ…あそこにはもう誰もいないのだからね…」

その部屋でスカリエッティがモニターを眺めながらクツクツと笑いそしてセデイスの全周波回線を開いて演説を開始する。

「さあ…いよいよ生誕の時だ…！」

アジト周辺の地面が地雷王の起こした地震によって割けていく。

「私のスポンサー諸氏…こんな世界を創りだした管理局の諸君…見えるかい…？」

これこそが…君達が忌避しながらも求めていた絶対の力…！

それを…我々3人の天才達が改良し進化させた…究極の力ツツ…！」

＊

地割れから逃れるべく空中へと上がっていたアコース、チャールズ、レイの3人は
その姿を眼前で見事となる。

『旧暦の時代：一度は世界を席捲し：そして世界を破壊した古代ベ
ルカの悪魔の英知：』

スカリエッティの演説と共に、漆黒の塊：上部がドーム型になっ
ており

機体下部に巨大な筒型の砲台を備えた巨大艦：はこぶねが姿を現す。

「なんだってんだよコイツは：」

「銀河号よりも遙かに大きいわね：」

チャールズとレイがはこぶねの姿を見て言葉を発する。

「これが予言にあった：かの翼を象りし黒き舟：！」

カリムの予言の意味する所が判明し、アコースが言う。

『それを異世界よりの使者達の英知を結集し：新たな力として生誕
させた：

我らを楽園へと誘う舟：そう：はこぶね：Ark^{アーク}だよッッ！！！』

これまでに見せた事無い程に興奮し、スカリエッティは体を大きく捻って

天を見上げて叫んだ。

『さあッ！！見せてやろうじゃないかッ！愚かな管理局やミッドチルダの諸君にッ！！』

その最初の挨拶は私の同士の1人：アルバート・ライネンに任せる
としようッッ！！』

＊

戦艦はこぶね最深部、兵装制御室

薄暗いその空間にライネンは1人で立っていた。

「…やれやれ…勝手な事を言うものだ…ジェイルめ…」

呆れ気味にそんな事を呟きながらもライネンはパネルを操作している。

「…私も落ちたものだ…これでは防衛者ではなく破壊者だ…」

途中で一旦操作を止めてそんな事を呟くが、再び操作を再会する。

「だが今更戻る気も無い…全ては私の知識を求める者の為に使うだけだ…」

そしてライネンは自身の最高傑作ともいえるそれを起動した。

＊

はこぶね下部についている砲台が動きを見せ始める。

接続部分が展開していき、何枚にも渡るリングパーツが姿を現す。そして砲門に膨大な光が収束していく。

「…あれは…まさか…!!」

「アルバート・ライネン…あなたはそれでこの世界を破壊しようというの!？」

そのあまりにも見覚えのあるその砲の姿を見て

タックとマリナが青ざめた表情で信じられないという風に言う。

その側でベルクトもまた驚きを浮かべており、そして静かに呟いた。

「ガーディアン……」

ドゴオオオオオオオオン!!!!

ベルクトの眩きと同時に砲門一ガーディアンから純然たる破壊の光が降り注ぎ

スカリエッティのアジトがある森林周辺を一瞬で地獄絵図へと変貌させるのであった。

第24話（後書き）

うう…スランプから脱せないです…

気晴らしにパソゲやったり他の小説書いたり不貞寝したりしてますが
寧ろ悪化する一方…何とかならないかなあ…

ベルクトのE2の説明が簡潔すぎなんですが

その辺は戦闘シーンでフォロー出来たらなあ…と思ってます。

アムロは結局H i vに落ち着きました。

（その方がシャアのあっちも出しやすかったので…）

HWSを期待していた方本当にごめんなさい…

そして他のメンバーの強化に関してもまた戦闘シーン待ちになります…
す…

そしてまたしても妙な電波を受け取ってしまったらしいです…

もうシャマルとサコミズがどんどんおかしいな方向へ向かっている…

決戦前に下らないネタでのお目汚し大変失礼しました…

遂に姿を現したはこぶね

そして壮大すぎる挨拶…

次回からいよいよ決戦開始です。

といってもこの大スランプ状態だと
また1ヶ月くらいかかるかもしれません…

それでも気長に待ってくれたら幸いです。

それではまた

番外2 独り身戦士はやて0075: Cherry Girl Memory

どうにもシリアスな話を書けないので

息抜き代わりに書きちゃいました番外その2です
時系列は第17話直後となります。

本編更新しないで何してんだとは自分でも思いますが…
まあ…生暖かい目で見てください。

※話の内容の10割がギャグです。

※タイトルからわかる通り、所々にパロセリフが入っています。

※サブタイトルに深い意味はありません

考えないで感じて下さい

(というか意味合い的に大丈夫か心配…)

番外2 ひとり身戦士はやて0075: Cherry Girl Memory

これから語られるのはバカップルという存在に嫉も…ではなく
バカップルという組織の風紀を乱す者達を正すために命を散らした
とある戦士たちの物語である…

＊

機動六課隊舎ロビー、漢達^{おとし}はそこに集っていた。

そんな彼らの前で機動六課部隊長である八神はやてが演説を始める。

「孤独を耐え忍んできた機動六課の同士達に言いたいのは1つだけ
や…！」

俗に言うバカップルと呼ばれる存在がうちらにとつて妬まs…

コホン！…日々真面目に仕事に励むうちらにとつて

奴らが機動六課の風紀を乱す存在であるように見えるのは

誰の目にも明らかや！」

どこぞのスキンヘッドのおっさんを彷彿とさせる

無駄に熱い語り口ではやては演説を続ける。

「私は日々思い続けたんや…今度こそは大丈夫と女の子に突撃し
ごめんなさいという無情の一言の業火に焼かれた者達の事を！」

バカッフルという名の害悪の側でひたすらその身が張り裂けんばかりの

精神的な苦痛に耐えてきた若者達の事を！」

もはや何を言ってるのかサッパリ意味不明だが

どういうわけか漢達^{おとし}は大粒の涙を流し

拳を握り締めて演説に聞き入っている。

「私は長い間待ったんや……！最早うちらの中に躊躇いの吐息を漏らす者はおらん！」

今！私と同じ独り身の諸君の熱き血潮を我が血として！

ここに私は改めて！粹がっているバカッフルどもに鉄槌を下す事を宣言する！

僻みだの妬みだのそんな苦痛を知らぬ者達の下らない囁きに惑わされる事なく……

繰り返し聞こえてくる独り身達の名誉の為に！

ジーク・ヤガミ！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

漢達^{おとし}から盛大なスタンディングオベーションが上がる。

今ここに独り身達のカリスマが誕生した。

「…で、主はやては何をするおつもりなんだ？」

そんな様子を遠目で見つめるシグナムが頭痛を感じながら呟く。

「大体想像はつくでしょ…？何やらかすかまではわからないけど…」
隣にいたシャルもまた頭痛を感じている。

「確かにマリナ達の言動も言動だが…これは止めるべきではないか…？」

「じゃあ止めてきてよシグナム…私にはあんな状態のはやてちゃんを止めるなんて絶対無理よ…」

お互い半ばあきらめ状態で会話するシグナムとシャル。

「お前ら何情けねえ事言ってるんだよ！」

これも機動六課の風紀を守る為だろ！？」

そんな2人を前に何故かヴィータはやる気満々といった感じだ。

(ちょ…何で？ヴィータちゃん…)

シャルが不思議そうにポカンとしてると

隣にいたシグナムが黙ってポンと肩を叩きヴィータの方を指差す。

「…ああ、そういう事なのね…」

シャルがヴィータをよく観察して、納得したように言った。

当然だろう。ヴィータの制服のポケットに

サードアベニューの人気アイスクリーム店の割引チケットが

ギッチリ詰まっているのが見えたのだから…

「まったくお前ら真面目に考えてみるよ！」

はやては六課の為を思っってやっつてんだぞ！」

「どう考えてもただの嫉妬だろうに」

「アイスクリームに釣られたあなたが言っても

説得力全く無いわよヴィータちゃん」

意気込むヴィータにシグナムとシャルが容赦なくツツコミを入れた。

＊

「……………」

「……………」

「……………」

六課へと帰還するメンバー達の間にあまの沈黙が続いている。

「ね、ねえゲイナー君…さっきの話って…」

「…何度も言いますが本当です」

「そう…」

唐突に質問するのはに対し、ゲイナーはげんなりした感じに答える。

実を言うと正気に戻ったゲイナー達3人が

自分が過去に体験した真実…つまりは

あの大告白がミッドチルダ中に

響いてしまっている可能性があるという事を

皆に伝えてしまったのである。

それを聞いた六課正式メンバー達は

顔を赤くさせたり青くさせたり百面相。

帰還の際は全員気まずい表情になり誰も口を開こうとはしなかった。
ある意味当然といえば当然なのだが。

（ううゝ恥ずかしい：ユーノ君への思いがみんなに筒抜けなんて：）
（なのはへの気持ち全部バレてるのかあ：）

互いに肩を並べて歩くのはとユーノは
それぞれ違う方を向いて俯いている。

（ああゝもう！アイスクリームの事なんて言うんじゃない！）
（私：ブラコン疑惑が立ってなきやいいけど：）

（どどど、どうしよう：キャロの事がみんなにバレてるなんて：）
（エリオ君への気持ち：わあああああ：）

フォワード陣も皆それぞれにさっきの自分の行動を後悔する。

（……………カハアア）

フェイトに至っては完全に灰になっていた。

＊

そんなこんなで憂鬱な気持ちを抱えたまま一行は六課へと帰還する。
が、どうにも様子がおかしい事に気づく。

「明かりが全然点いてない：それに妙に静かだね：」

「…勤務終了の時間にはまだ早いよね…？」
首を傾げるフェイトとなのはが言うように
六課隊舎はまるで廢墟のように静まり返っており
人一人見当たらないどころか物音一つ聞こえない
日が落ちてそれなりに時間が経つとは言え不自然極まりない状況だ
った。

ドドドドド…

するとその時、隊舎の方から3つの人影が姿を現す。

「あれ…みんな揃ってどうしたんだろ？」

レントンが呟く。やってきたのはティファ、サラ、エウレカの3人
だった。

と、次の瞬間

「このお…バカアアアアアアア！！！」

「ガチコッ!？」

物凄い勢いで走ってきたサラがゲイナーに向かってドロップキック
をかます。

それがダイレクトにヒットしてゲイナーは思いきり地面に倒れ込む。

「あんたねえ！こんな異世界まで来といて！
なに私にいらぬ恥かせてんのよお！」

サラはゲイナーの襟首を掴んで乱雑に持ち上げ
真っ赤な顔で彼をガクガクと揺さぶりながら怒鳴り散らす。

しかしゲイナーは最初のドロップキックがいいところに入ってしまった
白目を剥いたまま気絶してしまっている。

「知らない恥って：やっぱり全部聞こえてたの？」

「……………」

恐る恐る尋ねるスバルに、ティファが無言で頷いて答える。

「うあああ：やっぱりか…」

「考えてはいましたけど：キツイですね…」

マリナとフェイがそんな事を言いながらうなだれる。

他のメンバー達も程度の違いはあれど同様のリアクションを見せて
いる。

「…ってそんな場合じゃないんだって！」

呆然とサラとゲイナーのやり取りを見ていたエウレカが
ハッと何かを思い出したように声を上げ

そしてレントンの腕を掴んで慌てて駆け出す。

「ちょっ…エウレカどうしたの急に！」

「レントン今とはとにかく走って！」

引きずられたままレントンが尋ねるが

エウレカは答える事なくレントンを引き連れてあっという間にその
場から姿を消した。

それを見たティファとサラも同じように

それぞれのパートナーを引き連れて駆け出す。

「ちょっと何をみんなそんなに慌てて…」

「ごめんなさい説明してる暇無いです！」

とにかく急いで逃げて下さい！今はとっても危険なんです！」

右手を上げて引き止めようとするユーノに対し

気絶したゲイナーを抱えたサラが逃げながら答えた。

「何なのよ一体……」

3人がパートナーと共に姿を消した後、マリナが少し不満げに呟く。

「シュワルベフリーゲン……」

しかし更に次の瞬間、一行に向かって鉄球が数発飛んでくる。

「うわあ！」

「な……何いきなり！」

困惑しつつもそれぞれ防壁を展開してそれを防ぐ

すると、一行の前に騎士甲冑を纏ったヴィータが姿を現す。

「ヴィータ副隊長……」

驚いてスバルが声を上げる。

「ヴィータちゃん！？これは一体……」

「悪いなのは……これも六課の風紀の為だ」

困惑するなのはに対し固い表情でヴィータは答える。

「風紀の為に……私達何かしたのヴィータ！」

微かに怒りさえ見せながらマリナが怒鳴る。

「ああ……はやての命令なんぞでな」

「八神部隊長が……」

それに対するヴィータの返答を聞いてティアナが驚いて声を上げる。

するとヴィータが左手の親指を突き立てて後ろを指し示す。

次の瞬間六課隊舎がライトアップされ

そして一行は口をあんぐりと開けて固まってしまう。

何故なら六課隊舎にデカデカとこんな垂れ幕が下がっていたからだ。

『イチヤイチヤ反対!!』

く孤独に耐えて仕事に励む我らの風紀を乱すバカカップルに肅正を!
く』

(やっぱり理由はそれかああああ!)

一行の心の声が見事にシンクロする。

「ってヴィータ! はやてと一緒にこんな馬鹿馬鹿しい事を!」

「馬鹿馬鹿しくなんかねえ! これも六課の風紀の為だ!」

羞恥と怒りで顔が赤いフェイトの言葉に

至極真面目にヴィータが怒鳴り返す。

「……大方アイスクリームか何かで釣られたんじゃないのヴィータ
?」

「ギクウツツ!」

が、冷ややかな表情でポツリと呟いたマリナの一言に
ヴィータは慌てまくる。

(ビンゴだ…)

一行の白い視線がヴィータにグサグサ突き刺さる

ヴィータは何とか冷製さを取り直した後再び言う

「と、とにかくだ: お前ら仕事中にもイチヤイチヤして
目に余るってはやてが言ってたんでな:

悪いがちよっとキツメのお仕置きをさせて貰うぜ!」

ヴィータがそう言って指をパチンと鳴らす。

それに応えるかのように大勢の男性局員が姿を現す。

しかも全員目が血走っていてどす黒いオーラを纏っている。

(…意外とバカな人が多いのかしら機動六課って…)

内心でフェイが呆れまくるが

ピシュン！

バタンツ

「スバル！？」

何かの物音がしたかと思うと、突然スバルが気を失って倒れる。

『多くの毒男達が無駄に散ったわけではない事の証明の為に……
独り身達の理想を掲げる為に……バカップル打倒成就の為に……！』

六課隊舎の屋上でストームレイダーを構えたヴァイスが

魔力で音声を拡散させて演説をしながら

強力な睡眠効果がある魔力弾を相手に打ち込んでいく。

「エリオ！キャロ！」

フェイトが叫ぶ。スバルに続いてエリオ、キャロ

そしてティアナもヴァイスの凶弾に倒れていく。

『ミッドチルダよ！俺は帰ってきたあああああああ……！』

一際大きな声でヴァイスが叫ぶ。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！！！

それに呼応するように男性局員達が一斉に残ったメンバーに襲いかかる。

「みんな逃げて！」

なのはの一声で全員がそれぞれ違う方向へと散っていった。

「逃がすな！1人残らず捕まえるんだ！」

「ウオオオオオ！！！」

ヴィータの声に漢達おとこが一斉に答え

逃げていった者達を凄まじい気迫で追っていった

＊

六課部隊長オフィス

「フォワード陣四名、ヴァイス副隊長の活躍により確保いたしました」

「上出来や…他の連中も任せるで」

「ハッ！！」

報告をはやてはニヤリと笑い、報告係はビシッと敬礼して答えた。

そして再び1人になった後、薄暗い副隊長オフィスではやては呟く。
「見とれよ…なのはちゃんフェイトちゃん…これが独り身の恐ろしさや…」

全員まとめて一網打尽にした後…愛する男どもの目の前で

二度と嫁さんに行けなくなる位所々触りまくったるわ…グヒヒヒヒ

…」

両手をワキワキと動かすはやての表情は

この世に存在するあらゆる生物とは違う

見たこと無いおぞましい物になっていた。

＊

両腕を後ろに回されてロープで縛られたエリオが
肅正部隊数名に連行されて廊下を歩く。

（…空気がとっても重いです）

エリオは半泣き状態になっていた。

周りの男性局員は例外なく黒いオーラを発しているのに加え

「妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい…」だの

「10歳でマセやがって…俺は40だぞ…」だの

「シヨタカップルハアハア…」だの

「私の心は今の宇宙そらのように震えている…」だの

肅正隊の（主に嫉妬に満ちた）囁きが絶えず聞こえてくるのだ。

エリオでなくても正直怖いと感じるだろう。

「ここで大人しくしている」

肅正隊がとある一室にエリオを入れた後、扉に鍵をかける。

「あっ：エリオ」

部屋の中にいた人物がエリオに声をかける。

「バレルさん！それにタックさんも：」

エリオが声を上げる。

先に部屋にいたタックとバレルも手を後ろに縛られていた。

「君も捕まっちゃったかエリオ：」

タックが疲れ気味に声をかける。

「これはどうなってるんですか一体：」

「どうもなにも：見ての通りだよ。俺達もはやてを止めようとしたんだが

予想以上に敵の数が多いわ：ヴィータも味方してるわけでこの有り様だ：」

エリオの質問にタックが答える。

「八神部隊長は何をする気なんですか：？」

「：考えたくもないよ：全員とっ捕まえた後

あーんな事やこーんな事をしてやるとか言ってたけど：」

質問を重ねるエリオに今度はバレルが答える。

「監禁さえされてなければ今すぐにでもフェイを助けに行きたいのになあ：」

「俺もマリナが心配だ：あと違う意味ではやての頭の中もだ：」

拘束された両腕を見ながら悔しげに呟き

タックとマリナは自分のパートナーの身を案じる

（キャラ…無事かな…）

それを聞いてエリオもキャラの事を心配した。

＊

「……ここにはいないみたいだね」

「うん…」

六課隊舎近くの茂みの中に身を潜めてなのはとユーノが呟く。

「でも何で…はやてがこんなわけのわからない事を…」

「…前々から六課にカップルが多いのは気にしてたみたいだけど私だってびっくりだよ…いくら私とユーノ君の関係が…その…」
なのはは言ってる内に段々と顔が赤く染まっていく。

ガサガサ

「!?!?!」

後ろで物音がして2人が慌てて後ろに振り向く。

「パパ：ママ？」

そこにはキョトンとした表情のヴィヴィオが立っていた。

「な、なんだ：ヴィヴィオ：」

ユーノはほっとしたように胸をなで下ろす。

「ヴィヴィオ：どうしたのこんな所で？」

なのはがヴィヴィオに視線を合わせて優しく語りかける。

「えっとね：シャーリーさんがパパとママをみつけたらよんできてほしいって」

「シャーリーが？」

「うん。ヴィヴィオはよくわかんないんだけど

いまみんながおかしなことになってるから

おちつくまであんぜんなばしよにひなんさせてあげるっていった」
淡々と語るヴィヴィオの話を聞いて、なのはとユーノは顔を見合わせる。

（なのは：どうする？）

（うーん：シャーリーなら信じていいと思うよ：

彼女ならこんな騒動に参加してると思えないし：）

ユーノの念話になのはがこう答える。

実際問題シャーリーが愛だ恋だのの話を嫉妬を抱く姿は見た事無い。
寧ろカップルを煽って楽しむフェイと同じ類の人間に近いと言える。
ましてや仮とはいえ自分達の子供であるヴィヴィオをメッセンジャーにしている。

そう考えればこれは単純に自分達を安全な場所に案内している：
と、そんな風になのはは結論づけた。

「わかった：ありがとうねヴィヴィオ」

「うん！」

なのははヴィヴィオの頭を優しく撫でてやり

ヴィヴィオは満面の笑みを浮かべて答えた。

＊

ヴィヴィオに連れられてなのはとユーノは六課隊舎の外れの部屋へと案内される。

「シャーリーさん。つれてきたー。」

「ああっ！2人とも無事だったんですね！」

ヴィヴィオと共にやってきた2人の姿を見てシャーリーが安心したように声を出す。

「シャーリーも無事だったみたいで何よりだよ」

「ええ…まあ…無事というかその…」

が、笑顔で話しかけてくるのはに対し、シャーリーの口調はどうか覚束ない。

「……………」

そんな彼女の様子を見てユーノが首を傾げる。

「じゃ…じゃあヴィヴィオ？約束通り自分のお部屋で待っていてくれるかな」

シャーリーさんはちょっとパパとママに大切なお話があるから」

「うん！」

「「え？」」

すると唐突にシャーリーが、どう見ても不自然な笑みを浮かべてヴィヴィオに向かってこんな事を言う。

するとどうした事か、ヴィヴィオはそれに素直に従い部屋の出口に向かってテテテと駆け出す。

その様子になのはとユーノが疑問を浮かべる。

「あ、おちちゃった…」

出際にヴィヴィオの服のポケットから飴玉袋が2、3個落ちてくる。ヴィヴィオは慌ててそれを拾った後部屋を後にした。

（ユーノ君：今のって）

（いや：でもまさか：シャーリーさんがそんな）

何やら2人は嫌な予感がしてくるが…

……………ドドドド！！！！

「バカップルどもに肅正をおおおお！！！！」

それが見事に的中してしまう。
ヴィヴィオと入れ替わるようにして大量の男性局員が押しつけてきたのだ

「ぐあああ！やっぱりかああ！」

ユーノは頭を抱えてうなだれる。

「シャーリーどうして!？」

なのはがシャーリーに向かって叫ぶ。

まさかシャーリーがはやて側だとは思ってもみなかった。

しかもよりによって飴玉をエサにヴィヴィオまで利用するとは。

「ご、ごめんなさい! どうしても逆らえなかったんです!」

両手を合わせて本当に申し訳なさそうにシャーリーが謝ってくる。

その手には一枚のDVDケースが握られていた。

『永久保存! 機動六課隊員のあんな秘密こんな秘密ぜんぶ見せちゃいます!』

制作…機動六課部長, 八神はやて

協力…ヴァイス・グランセニック』

「はやてちゃん…な、何を作って…」

シャーリーが持っているDVDのタイトルを見たなのはは開いた口が塞がらない。

「いえ、局員の間では有名ですよ。

六課の運営資金の増強に役立ってますし」

「ヴァイス陸曹の秘蔵映像集が有効利用されましたしね」

部屋の扉に立ちふさがる肅正隊がポツリと呟く。

「あの状態ヘリパイロットおおお!」

それを聞いてユーノが大声で叫んだ。

＊

「はあはあ…」

六課敷地内をフェイトは1人で必死に逃げ回っていた。

（いくらなんでも同じ六課の人達に手を出すわけにはいかないし…）
彼女はデバイスを発動しておらず、普通の状態で逃げ続けている。
いくらはやてが仕組んだ事とはいえ
こんな事に一々味方相手に魔法を使うのもどうかと思ったからである。

しかしフェイトのそんな思いとは裏腹に

肅正隊は血眼になってフェイトを追跡しており

フェイトもまたここまで必死に逃げてきた疲れが溜まってきていた。

「見つけたぞ！大本命のフェイト隊長だ！」

「捕まえれば給料2倍だあああ！！！」

「独り身の恨みいいいいいい！！！！」

その時曲がり角から新たに3人の肅正隊が現れる。

「クッ…」

フェイトは疲労の溜まった体を引きずり再び逃亡しようとする。

「「ごふうっ！」」

が、更に次の瞬間に肅正隊が突如として地面に倒れ伏す。

「：嫉妬にまみれたバカどもが人の女に手を出すな：」

そしてファントムモードでバリアジャケットを纏ったベルクトが現れる。

「ベルクト！無事だったんだね！」

それを見てフェイトがぱあっと明るい笑みを浮かべてベルクトに駆け寄る

「ああ：お前も無事で本当に良かった」

ベルクトも穏やかな表情を浮かべている。

「まったく：八神はやてもバカな事をやらかしたものだな」

「うん：でもベルクト：何も気絶させなくてもいいのに：」

「こうでもしなければこのバカどもは止まらんだろう：」
のびている3人の肅正隊を冷ややかに見下してベルクトは言い捨てる。

「こんな三下どもを止めていてもきりがない：

さっさと大元の八神はやてを止めなくてはいけないんだが：

なにぶん敵の数が多いからな：もう少し味方がいれば助かるんだが
：」

「そうだね：他の人達の安否も気になるし：」

2人がそんな風にやり取りをしていたが

ドオオオン！！

突如として2人の背後の壁が破壊される。

「見つけたぜ：大本命のバカップルさん達：」

そこからアイゼンを構えたヴィータが姿を現す。

「いやちよつとヴィータ：！隊舎の壁壊したらダメでしょ！」

「関係ねえ！今回の件の修理費は全部はやて持ちだからな！」

フェイトのツツコミにヴィータが堂々と言い返す。

（どれだけ俺達が憎いというのだ：というより）

内心でかなりの呆れを感じつつ、ベルクトは武器を構えて冷静に呟く。

「こういう話には全く無頓着な貴様が何故八神はやて側につく？」

「何度も言わせんなよ！六課の風紀を守るためだよ！」

「……もう少し信憑性のある嘘を吐け」

内心の呆れが口調に始めるベルクト。

「ベルクト：あのね：」

フェイトがベルクトに、ヴィータがはやてに味方している

理由の可能性をそつと耳打ちする。

「そうか：」

それを聞いたベルクトが突然デバイスを解除する。

「……？何のつもりだ？」

アイゼンを構えたままヴィータが首を傾げる。

「ベルクト……？」

フェイトもベルクトの行動に疑問を浮かべる。

「ヴィータ：物は相談なんだがな」

そんな事を言いだしたベルクトの口元には微かに笑みが浮かんでいた。

＊

部隊長オフィス

なのは、スバル、ティアナ、キャロ、マリナ、フェイの6人はロープで体をグルグル巻きにされている。

「残りの本命4人がまだ捕まっとらんけどしゃあない…

まずは時間潰しでアンタらから先に味見するとしよか…？」

「「「ヒイヒイヒイヒイ！」「」」」

そんな彼女達の前ではやてが不気味な笑みを浮かべ

両手をクネクネと動かしながらユラリユラりと6人に近寄る。

その言い知れぬ恐怖に当てられたなのは達は悲鳴を上げる。

キャロに至っては涙目になっている。

「ッ！いい加減にしなさいはやて！

こんな事しても何にもならないでしょうが！」

「そうよはやてさん！あなたのしている事はただの逆恨みじゃない！」

そんな中マリナとフェイが強気で言い返すが

「じゃきゃあしいわバカッブルの片割れ！！」

はやてが物凄い剣幕で2人に怒鳴り散らす。

「恋人が出来てキャツキャツウフフな毎日を過ごすアンタらにわからへんやろ！

原作では完全空気だったユーノ君が

作者補正でスーパーユーノタイムなんちゅー

大活躍をしてなのはちゃんといい感じになったり

言わずもがなフェイトちゃんはベルクトさんとラブラブになったり

で：

原作3人トリオで1人だけ取り残されとる

私の気持ちがわかってたまるかつーに！！」

部隊長オフィスが壊れんばかりの大音響ではやては怒鳴る。

それを聞いてマリナとフェイもたじろいしまう

（（どうでもいいけど：私達ってとばっちりな気が：））

そんな中スバルとティアナの2人は心内で自問自答していた。

だがその時、部隊長オフィスに肅正隊の報告係が飛び込んでくる。

「隊長、た大変です！」

「ああ、！？なんやいいところで」

報告係にドスの効いた声ではやては言う。

「別室で捕らえていた男性陣が：ヴィータ副隊長「ギガントハンマ

ー！」おぐふっ！」

言い切る前に報告係は地面に叩きつけられる。

「な、何やいきなり：」

「：ハッ！柔らかい脇腹をつついちまえばこんなもんだな」

驚くはやての前にヴィータが姿を現す。

その背後にはフェイト、ベルクト

そして捕らえた筈の男性メンバー達が立っていた

「ユーノ君！」

「なのは、今解いてあげるからね」

ユーノはなのはの方に駆け寄り、ロープを解いてやる。

他の男性陣も自分のパートナーの下へと駆け寄っていく。

「エリオくううん！」

「キャロ……う、うわあ！！」

よほど怖かったのか、キャロは拘束が解けるとエリオに思い切り抱きついた。

「な、何でや…何でこんな…」

一瞬にして形成逆転されてしまったはやてがガタガタ震えながら呟く。

「…味方を一気に増やす最後の手段があったわけだ…」
そう言ってベルクトが懷からある物を取り出す。

それは、以前のフェイトとのデートの際に手にいれた
サードアベニューの人気アイスクリーム店の

一年間無料食べ放題のゴールドパスカードだった

「これを見せた途端に犬が尻尾をふるかの如くに

簡単にヴィータがこっち側についてくれたんでな…」

ニヤリと嫌らしい笑みを浮かべてベルクトが説明する。

ヴィータの裏切りによって肅正隊があらかた始末され
捕らえた男性陣もあっけなく解放されたのだ。

「ヴィータお前…それでも鉄槌の騎士かあ！？」

「甘いんだよはやて！あたしは故あれば寝返るのさ！」

怒るはやてに微塵の迷いもなくヴィータは答える

「さて…それじゃあ…」

フェイトがデバイスを起動して冷酷な表情へと変わる。

「はやてちゃん…少し頭冷やそうか…？」

なのはもデバイスを起動してはやてを前にして身構える。

他のメンバー達も同様に臨戦態勢だ。

完全に四面楚歌状態のはやては後方に後ずさった後、突如叫ぶ。

「ええいこうなったら…！リイン！！ユニゾンやっ！！」

「は、はいです！」

すると今まで物陰に隠れていたリインが飛び出し、はやてとユニゾ

ンする

はやては騎士甲冑を纏い魔力を増幅させていく
それによって隊舎全体がカタカタと揺れ始めた。

「はやて…！いい加減にあきらめろって…」

尚も抵抗の意志を見せるはやてを見てタツクが言うが、はやては聞き入れない。

「させへん…させへんで…このまま終わらせないで…」

そしてはやてはシュベルトクロイツを掲げる。

「私達の真実の戦いを後世に伝える…！」

言い切る前にははやては多重バインドで拘束されて気を失う。

「…ナカジマ三佐との打ち合わせから帰ってきてみれば…

何を馬鹿馬鹿しい事やってるんだお前達は…」

そして部隊長オフィスの扉の前に

ヴァイスをはじめとした肅正隊を連行した

アムロが姿を現すのであった。

……こうして八神はやて率いる独り身隊による
バカッフルの肅正は失敗に終わった。

尚、今回の罰としてはやてが責任のすべてを取らされる羽目になり
部隊長オフィスで山のような書類と格闘する事となり
はやてはしばらく表に姿を現さなかったらしい…

番外2 独り身戦士はやて0075: Cherry Girl Memory

……ツツコミ所満載だと思われたでしょうが
楽しんでいただけたなら幸いです。

本編の更新もできる限り早く……どんなに遅くても
何とか今月中位までには書き上げたいと思っています……

それではまた……

第25話

「ふんふんふん♪忙しいったら忙しい」

戦艦はこぶね総司令室、その部屋でセデイスは自分を取り囲むように設置された

大量のパネルを凄まじいスピードで操作していく。

「流石はアルさんの発明だねー一発撃っただけで

私達の元アジトも木っ端微塵の火の海だよ」

モニターの1つに映る惨状を眺めながら楽しそうにセデイスは言う。そして多数の通信回線を同時に展開する。

「あゝあゝこちらセデイス。皆さん聞こえますか？」

『うっせ…聞こえてるよ』

通信モニターの1つに映るノーヴェがイライラしながら返答する。

「現状は皆が知っての通りだよ。はこぶねの起動は安定状態…

後は目的地に向けて一直線に進行すればオッケーだね」

楽しげにそういった後、パネルを操作して更に別のモニターをいくつか現出させ

それぞれのメンバーに指示を出す。

「ウーノさんはジェイルさんと一緒にAルームの警備をお願いね」

『ああ…わかっているとも…君や君の父上には本当に感謝している…ククク…遂に…遂にはこぶねが起動出来たのだからね…』

「楽しいのはわかりますよ。これからもっと楽しくなりますからね」

興奮が冷め切らない様子でスカリエッティはセデイスに返答していた。

「Bルームはトーレさんとセツちゃん…Cルームはインちゃんにお願いするわ」

『心得た』

『了解!』

モニター越しにトーレが固い表情で、セインが笑顔で元気よく答える。

「Dルームがウンk：マルさんだね」

『…今何か失礼な事を言いかけませんでしたか？』

「気のせいだよ」

青筋をピクリと立ててカシマルは尋ねるが、セデイスはそれを笑顔で受け流す。

「そんでは…外周警備がウエンちゃん、内部警戒がディエちゃん、ブラッドルームがドウーさんとクアちゃん…」

駆動炉はフロストさん達が帰ってきたらお願いしよっと♪」

パネルを動かす手を休める事無く、セデイスは次々と配備を決定していく。

「それで地上本部襲撃はノーちゃんとチンクさん、オトちゃんとデイーちゃんだね」

そっちはルーちゃんやアズさん：グラさんやプラさんも一緒だから楽勝だと思うけどね」

そこまで言った後別のモニターが開き、バルドナが姿を現す。

『BBは今回都合により参加できませんが：こちらの戦力は十分ですからね：』

はこぶねが目的地に到達し：ガーディアンと2つの月の魔力が十二分に使える様になれば…』

「ミッド地上のゴミどもを人質にして本局艦隊をぶっ壊せるってわけね」

バルドナの言葉にセデイスが続く。

『そういう事です：この作戦が完遂すれば我々の邪魔をする者はいなくなる…』

故に我々の天下となるわけです：頑張ってくださいね皆さん…？』

「もっちゃん！！」

メガネをクイツと上げて呟くバルドナに、セデイスが満面の笑みで答える。

モニターの向こう側にいる他のメンバー達も頷いて答えていた。

「さてとそれじゃあ…」

パネルを操作する手を止め、セデイスは足下に黄色い魔法陣を展開する。

「3ヶ月程早いクリスマスプレゼント…地上のゴミどもに送ってやりますか！」

＊

戦艦アースラ内部、会議室に集まる皆の下にブリッジからはやての通信が響き渡る。

『…理由はどうあれ、レジアス中将や最高評議会が異形の天才科学者達を利用しようとし…』

そして逆に噛み付かれた形になったわけやな…』

真剣な表情で呟くはやてに続き、その傍らに立つアムロが言う。

『だけど今の俺達はそんな事を気にしている余裕など無い…』

あの巨大艦…はこぶねがミッドを焼き払えるだけの火力を持っている事は明らかだし…

現在街中にガジェットや戦闘機人達が現れて市民の安全を脅かしているという事実がある…』

更にアムロに続いて、彼の反対側にたつバルクホルツが口を開く。

『…全てを起きてしまった事…ですから私達はこれ以上被害を広げないように動かねばなりません…』

私の父さ…いや、アルバート・ライネン…ジェイル・スカリエツェイ…そしてジル・バルドナ…

彼らを野放しにしておいたらどうなるかは…先の映像でもハッキリしているでしょう…』

会議室にいる全員が真剣な表情で一言も声を発する事無く通信に聞き入っている。

『私達は2グループ…空と地上に分かれて各部署に協力する形になる…』

そう言っではやては椅子から立ち上がる。

『今までに無いシビアな戦いになるのは明らかや…けど、皆の力を貸してほしい！』

ミッドチルダや…他の世界の平和を守り抜くためにも…この戦い…必ず勝つんや！』

はやては右手の拳をグッと握って高らかに言う。

それを聞いた者達全員が力強く頷いて答えた。

＊

それぞれの担当場所を聞いて、隊員並びに協力者達は各々の場所へと移動していく。

「フェイトさん！」

会議室から出る間際で、フェイトがキャロに声をかけられる。それを聞いて後ろに振り向く。

「あの…」

そこには心配そうな表情を浮かべたエリオとキャロが立っていた。

「…別グループになっちゃったね」

フェイトは2人を安心させるように、穏やかな表情を浮かべて2人の方へ近寄る。

「ごめんね…私、いつも大切な時に2人の側にいられないね…」

「そんな…！」

「フェイトさん…」

申し訳なさそうに言うフェイトに2人は戸惑いを見せる。

「大丈夫だよ…地上はアムロ一尉がついてくれてるし…はこぶねの方にも大勢の戦力がある…」

そう言っつてフェイトは2人の事をそっと抱きしめる。

「2人とも頑張っつて…絶対無茶とかしないんだよ…」

「はい…」

「それは…フェイトさんです…」

エリオとキャロはフェイトの抱擁を受けて少し安心したもののやはりまだ不安な声でフェイトの事を心配した。

*

(いよいよだ…)

アースラ内の自室、そこでユーノが改良を加えた己のデバイスの調整をしていた。

「失礼しますよ…」

するとそこにバルクホルツがやってくる。

「ディール博士…」

ユーノは一旦調整を止めて立ち上がり、バルクホルツと向き合う。

「…ありがとうございますディール博士…あなたがいたから僕はここまで来れた…」

「今更ですよユーノ君…ホルダーデバイスをそこまでの形にしたのは君自身の熱意があつてこそだったのですから…」

会うなり札を言ってくるユーノに対し、バルクホルツはやりわりと返答する。

「新作のサポートカード…魔力コンデンサーとコールドシステム…そしてレイジングハートとのデバイスユニゾン能力…」

「はい…急ぎででしたけど…ディール博士がアースラに来てくれたから」

何とか完成出来ましたからね…」

「そうですか…」

デバイスの改良内容について2人は話し合っていく。

「なのは君のレイジングハートは相変わらず規格外の性能でしたからね…」

特にブラスタースystemなど…あそこまで危険な代物を使う気になるとは」

「ははは…昔からそうですからなのは…」

互いに笑いを浮かべながら楽しげにやり取りをする。

「けど…そんな無茶を黙って見てるなんて僕には出来ません…だからこそ…僕が今度こそ支えて見せます…なのはの事を…この、コスモスターとA Z-3で…」

「…頑張ってくださいユーノ君…」

決意めいた表情で語るユーノに対し、バルクホルツはどこか眩しいものを感じていた。

（…懐かしいですね…私ももう一度ユーノ君のように純粋な心を持ちたいものです…）

そんな事を考えつつ、バルクホルツはユーノのいる部屋を後にした。

＊

アースラ内廊下、互いに肩を並べてバレルとフェイが会話していた。

「…フェイ、あんまり気にしててもしょうがないよ」

「ええ…でも信じられないわ…バルドナ博士が何であんな…」

先のガーディアンでの攻撃を思い返してフェイは沈んだ表情で呟く。バレルにとっては実の父親という立場でありながらも

本人の中ではその事に関してはそんなに悩んではいなかったのだがフェイにとっては、追われていた自分をかくまってくれた

心優しい科学者としての印象が強く残っていたのだ。

故に、今のバルドナの姿は信じたくないものだった。

「…ベルクトが言っていた事も気になるの…結局…バルドナ博士が何を考えていたのか…」

私はどうしても気にかかって…」

「うーん…あの人は俺に会いたがっていたってベルクトは言ってた

けど…

けどフェイトが言ってた話じゃ俺の事なんてどうでもいいとも言ってたしなあ…」

「だとしたら何で…バルドナ博士は一体…」

話をしていく内にフェイは段々と表情が暗くなっていく。

そんな彼女をすぐ近くで見えていたバレルは、しばらくした後立ち止まって彼女の方に向き直る。

「…なら…確かめてみようじゃないか」

「バレル…？」

急に真剣な表情でそんな事を言うバレルを見て、フェイはキョトンとする。

「あの人が何を考えてるかなんて俺達じゃ想像しきれないよ…
だったら直接話をすればいい…どうしてこんな事をするのかってね…」

「けどバレル…」

「わかってる…あくまでも任務が最優先だ、あの人がスカリエッテイ達と一緒に

この世界を滅茶苦茶にしようとしているのは間違いない…

だからこそ何があの人をそうさせるのかを直接問いただしたらいいんじゃないか？」

心配そうに見つめてくるフェイ対し、そう言ってバレルは軽く笑みを浮かべる。

そしてフェイの手を握って更に言った。

「…あの人が君を悩ませてるというなら白黒はつきりさせた方がいい…」

勝手な話かもしれないけど…協力してくれるフェイ？」

フェイは一瞬戸惑ったものの、笑みを浮かべてこう返す。

「…：そうね、確かにあなたの言うとおりかもしれないわ…

ごめんね…最近はお私の方があなたに慰められてばかり…」

「フェイ…ってうわ！」

フエイは急にバレルに抱きつく。

「だからバレルも：絶対に何があっても迷わないで：

今のバルドナ博士がどんな事を言ってきたても：今のあなたには私が
ついてるから：

例えどんな結果になっても：あなたには大切な人がたくさんいるっ
て事を：

「……大丈夫だよフエイ……僕はバレル：バレル・オーランドだ：
あの人が：ジル・バルドナが何を言おうと俺は揺るがないさ
大切な君を放って1人で勝手な事なんて出来るもんか：」

「バレル：」

2人は互いに顔を赤らめて真っ直ぐ向き合う。そして段々と顔を近
づかせていき：

ガタンッ

：あと少しというところで2人はハッと横に振り向く。

「あちゃあ：バレたか」

「もう！だから覗き見なんてやめなさいって言ったのに：」

サラがゲイナーを叱りつける声が響く。

そして物陰からGGLの三人組とそのパートナーが姿を現した。

「いやゝバレルも言うようになったじゃねえか！」

「なかなかの熱々シーンだったよゝ」

「…お前らなあ」

ニヨニヨと笑みを浮かべて話しかけてくるガロードとレントンを見てバレルは右手で頭を抑えてため息を吐いた。

「私はやめた方がいいって言ったんですけど…」

「気にしないで…人目を気にしてなかった私も私だし」

申し訳なさそうに話しかけてくるエウレカに対し。

全く気にしてない風にフェイは答える。

「……………」

そんな和やかなムードの中で、ティファは黙ったままだったがその口元には僅かに笑みが浮かんでいた。

＊

そしていよいよ、その時がやってきた。アースラは降下ポイントへと到達する。

「そんじゃまあ…俺達は先に行ってるぜ」

「地上にも既に大量のサーペントが展開していると聞いている…奴らとの戦闘経験が少ない地上の魔導師を率先してサポートする」デュオがいつもどおりの軽いノリで答え、トロワが冷静に呟く。

「現在確認できるだけでも軽く500は超えています…」

それに加えてガジェットや他の戦力もいる…かなり厳しい戦いになるね」

「敵が何体いようと関係ない…俺は俺の正義を貫くだけだ」
モニターを確認しながら固い表情でカトルが呟き
その近くで五飛が腕を組みながら普段の強い口調で言った。

「……………」

「ヒイロ、どうかしたか？」

黙りこくっているヒイロに対し、いつもの事のように思いつつも、
ゼクスは声をかける。

「……この戦いが終われば、今度こそ俺は戦わなくて済むようになるだろうか…？」

と、急にヒイロが口を開いてそんな事を呟く。

「それはわからない…だが今は戦うしかないだろう…お前の帰りを待つ者…リリーナの為にもな…」

「……ああ…」

ゼクスの言葉に、ヒイロは静かに答えた。

そして降下ハッチが開き、プリベンターの6人がそれぞれのデバイスを起動させる。

『皆さんどうか…無事で』

「大丈夫さカリム、もともとこういう不利な戦いってのは慣れてるしよ！」

通信を通して6人に声をかけるカリムに対し、デュオが不安を全く感じさせない雰囲気で答える。

「じゃあ…皆さんもどうかご無事で！金星の女神によろしく！」
そう言ってカトルが先陣を切り地上へと降下していく。それに残り

の5人も続いていった。

＊

「じゃあ次は俺達だな…」

続いてガロード達が降下ハッチの前に出る。

「ガロード…」

すると、ガロードの側にティファがやって来る。

「お願い…ガロード…どうか…」

「…わかってるよティファ、必ず生きて帰ってくる。ずっとティファと一緒にいる為にな」

不安げな表情で語りかけてくるティファを安心させるようにガロードはそう言ってティファをそっと抱きしめる。

「レントン…気をつけて…」

「ああ…絶対に止めて見せるよ…エウレカ…」

レントンとエウレカもまた互いの体をきつく抱きしめ合ってその温もりを確かめ合う。

「ええっと…サラ…その…」

そんな2人を見てゲイナーもサラに話しかけるが

如何せん他の2人に比べると積極性に多少欠けていた。

「…んもう」

自分の目の前でモジモジしているゲイナーに痺れを切らし

サラは自分の方からゲイナーに抱きつく。

「サ、サラ…」

「…死ぬんじゃないわよゲイナー…必ず皆で…無事に帰るんだから…」

「……ああ、わかってる」

ゲイナーも男らしい表情を浮かべて、サラを抱き返しながらそう呟いた。

そんな3人の側ではドミニクとアネモネが話し合っている。

「アネモネ…その…無茶しないでくれよ」

心配そうな表情でドミニクがそう言うが

「何よドミニク！私がやられるっていうの！？」

それを聞いたアネモネは心外だと言わんばかりのきつい口調で怒鳴り、そっぽを向いてしまう。

「ええっ！いやその…ごめん！」

予想外のリアクションにドミニクは慌てふためく。

「………冗談よ」

アネモネはすぐに穏やかな表情を浮かべてドミニクに向き直り、彼の頬に口付けをする。

「ア、アネモネ…」

「…必ず勝ってみせるわ、ドミニクの為にも」

「…本当は僕も戦いたかったんだけど…基礎知識を付け焼刃で身に着けた程度じゃきつと足手まといだから…」

残念そうにドミニクがそう呟く。彼にも一応リンカーコアは形成されており

バルクホルツから基礎の魔法スキルと一般的な量産デバイスは受け取っていたのだが

激戦になるのは間違いない今回の戦いでは逆に足手まといになると感じ

アースラで待機する事になったのだ。

「…うん…でも大丈夫、私はドミニクが側にいる…それだけで私の力になるから！」

「アネモネ…ははは…そう言ってくれると嬉しいよ」

顔を赤らめてあたふたしているドミニクに対し、

心の底から安らいでいる感じの表情を浮かべてアネモネはそう言った。

「はあ…アンタら仲いいのはいいけど、そろそろ行くよ？」

唯一人相手のいないシンシアがそんな熱々空気をもともせず呆れた感じの口調でそう言い放ち、その場のカップル全員に苦笑いを浮かべさせた。

＊

ガロード達4人が飛び立った後、続いて勇、比瑪、ギンガの3人が前に出る。

「ギン姉!!」

と、ギンガの事を心配してか、スバルがギンガに声をかける。

ギンガはそれを聞いてスバルの方に近寄り

「あいてっ！」

「もう…任務前からそんなにしょぼくないの、シャンとしなさい！」

少し怒った感じに右手を上げてスバルの頭を軽く叩く。

その後表情を和らげて更に言った。

「…危険なのはみんな同じよ、私だって本当はあなたが心配なんだから…」

「ギン姉…」

「だからこそ悩んでなんかいられない…大丈夫よ、私だってそう何回もやられたりしない…」

だって…私達は母さんの子なんだから」

「……………」

キョトンとしているスバルに対し、比瑪も前に出て話しかける。

「大丈夫スバル、今度は私と勇もついてる。ギンさんは絶対に守ってみせるから！」

「フフツ…比瑪ちゃんも頼もしくなったわね」

「比瑪…」

得意げに言ってみせる比瑪の姿を見て、ギンガは笑みを浮かべスバルは少し涙ぐみながら比瑪のことを見つめる。

すると、今度は勇がやや固い表情で前に出ながらスバルに言う。

「スバル…君とギンガさんは本当にお互いの事を大切に思ってるんだな…」

「えっ?…う、うん…」

急にそう言われて、スバルは少し戸惑いながらも頷いて答える。それを聞いて勇はフツと笑って穏やかな笑みを浮かべる。

「…その気持ち、忘れないようにな。家族と心から分かり合えるってのは素晴らしいことだから」

「勇……うん!!」

ちよっとしたすれ違いで長い間両親と、そして姉とお互いの気持ちを

確かめ合う事が出来なかったからこそ、スバルとギンガのような家族で互いを大切にしようというのを壊したくないと、勇は考えていたのだ。

スバルも勇の言葉を聞いて迷いが幾分晴れ、右手で涙を拭いた後、明るい表情を浮かべて力強く頷いて答えた。

＊

一所のメンバーが出動した後、一旦降下ハッチを閉じ、隊長陣がフォワード陣を前に決戦前の最後の説明を行う。

「今回の出動は：今までで一番ハードになると思う」

「地上は一応俺が指揮するとはいえ敵の層も分厚い：」

君達がピンチの時にいつでも助けにいけるとは限らない」

真剣な表情で語るなのはとアムロはフォワード陣に言葉をかける。そしてなのはがさらに続けて言う。

「だけど：ちょっと目を瞑って、今までの訓練の事を思い出して」
言われてフォワード陣は固く目を閉じる。

「ずっと繰り返してきた基礎スキル：磨きに磨いたそれぞれの得意技：」

痛い思いをした防御練習：全身筋肉痛になっても繰り返したフォーション：」

いつもボロボロになるまで私達と繰り返した模擬戦：」

「ツツツ……!!」

なのはが言っている内フォワード陣の表情が段々と歪んでくる。

(……聞いてて少し切なくなってくるような)

(まあ確かに……みんな本当に苦労してたものね……)

そんな様子を見てタックとマリナの2人が内心で苦笑を浮かべていた。

「まあ……私が言うのも難だけど、きつかったよね？」

「それでも……4人ともよくついてきた！」

なのはに続いてヴィータが前に出ながら強い口調で言う。

「4人とも誰よりも強くなった……とはまだちょっと言えないけど」
褒められたと思った直後に否定され、4人はちよつと肩をすくめる。

「だけど……どんな相手が来てももどんな状況でも絶対に負けないように教えてきた」

なのはが笑顔を浮かべ、それに続いてフェイトが口を開く。

「大切な物を守る事が出来る……救いたい人達を救える……」

目の前で何も出来ずに……後悔しないように立ち向かえるだけの力が……
きつとみんなにはもう、身についている筈だから……」

穏やかなながらも、どこか寂しげな雰囲気の入り混じった表情で言うフェイトの言葉を

フォワード陣は真剣な表情で聞き入っている。

「だから、どんな困難に直面しても決してあきらめないでね……
必死に積み重ねてきた努力と時間は……きつとみんなの力になってるから」

「「「はい!!」」」」

フェイトに対してフォワード陣は大きく返事をして答える。

それを見た後にアムロが前に出る。

「じゃあ……そろそろ時間だな。4人とも準備はいいな！」

「「「はい!!」」」」

「よし、行くぞ！」

高らかに言うアムロの言葉に答え、フォワード陣達は駆けていった。

＊

アムロ達とフォワード陣、そしてヴィータが姿を消した後、その場にはやてとユーノ、更にリインフォースも姿を現す。

「ほんなら…私達も出動やな…」

「ああ…」

はやての言葉に、真剣な表情でタックが頷いて答える。

「……よくよく考えれば、私達って本当に不思議な出会いをしてるのよね」

「マリナ？」

急にそんな事を言い出すマリナにタックは首を傾げる。

「そうやな…私となのはちゃん、フェイトちゃんの出会ひも十分不思議やったけど…」

タックやマリナ…バレルさんや、フェイさん、ベルクトさんとの出会ひなんて

本当に天文学的な確率やったもんなあ…」

「みんな最初は魔法なんて物自体知らなくて…それでも自分達のそれぞれ目的の為に

いろんな事件に立ち向かってきた…」

「主はやてが私と別れた後も…お前達はずっと側で支えていた…」
はやての言葉にバレルやリインフォースも思う事があり、昔語りを

始める。

「闇の書事件からの1年間：みんなでいろんな次元世界を飛び回った日々：

あの時間はみんなが漸くわかりあえた後で、本当に輝いていた時間だったよね：」

ユーノがしみじみとそう言った後、それに続いてフェイトが重々しく語り始める。

「けど：それが突然引き裂かれた：私もなのはもはやてもユーノも：本当にベルクト達の事が心配だったんだ：」

少し空気がしんみりしてしまったが、それを紛らわすかのようにフェイトが口を開く。

「けど：9年という時間の流れがあったにせよ：私達はまたこうして同じ時間を過ごす事が出来ている：」

「ああ：そして9年前と同じ：いや、それ以上の脅威が今

俺達の目の前に近づきつつある：」

「そしてそれは：私達とバレルさんやベルクトさん達との繋がりを絶った元凶でもあるんだよね：」

タツクとなのはが険しい表情で言い、周りの空気を張り詰めさせる。

「……たがらこそここで全てのケリをつける必要がある」

そして最後に残ったベルクトが皆に見える位置に移動して口を開く。

「俺達の進むべき道：それは俺達自身が決める物だ：

それを歪ませるアイツらを：俺達の守るべきものを滅ぼそうとしている奴らを：必ず潰すぞ：！」

静かながらも強い意志のこもったベルクトの言葉を聞いて他の者達が一斉に頷く。

「じゃあ行くぞ…これ以上このミッドチルダを破壊させないためにも…」

あの兵器を…ガーディアンをこれ以上悪用させない為にも…!」

「あれは世界を守るべき力…破壊の為に使っていい力なんかじゃないもの…!」

タックとマリナが最初降下ハッチの前に立ち、先陣を切る。

「ガンアーク!!」

「バスターアーク!!」

「「セットアップ!!」」

そしてそれぞれのデバイスを起動し、眼下に映る大空へと飛び立っていった。

「じゃあ…私達も行こか? リンフォース…」

「はい…」

出撃前ではあるものの、どこか懐かしさをはやてとリンフォースは感じていた。

「本当に夢でも幻でもないんやな…こうしてまたリンフォースと一緒に戦える…」

「はい…私も…主はやてと共にいられる事を…本当に嬉しく思います」

穏やかな表情でリンフォースは言い、それを聞いてはやてはちょっと涙ぐむ。

そしてはやては目を閉じ、意識を集中していく。

「夜天の光よ…我が手に集え…!!」

リンフォースが光り輝き、その肉体がはやてへと吸収されていく。

そしてはやては9年前と同じ、騎士甲冑と銀髪の姿へと変化する。

「行くで…リインフォース！」

『はい…！』

はやての言葉に体内でリインフォースは答え、はやては飛び立っていった。

「じゃあ次は僕達だな…」

「ええ…」

バレルとフェイが前に出る。ふとフェイがバレルの方を向く。

「バレル…：さっきの…」

「…まだ心配してたの？らしくないにも程があるよフェイ」

不安げな表情を浮かべるフェイの手をバレルは握ってやる。

「あの時も言ったじゃないか？これから先どんな事が起こるかはわからないけど…」

そして握っていた手を離し、右の拳を前に突き出す。

「俺達なら…きつと乗り越えられるさ！」

「…：うん！そうだねバレル！！」

バレルの言葉に再び勇気付けられたフェイは、自分も拳を前に出してバレルのそれとぶつけ合う。

そうした後2人は降下ハッチの方にへと向きを変え

「行くぞ！イクスブラウM！」

「頼むわね…イクスブラウP…！」

デバイスを起動して大空へと舞っていった。

今度はなのはとユーノの2人が前に出る。

「いよいよ私達の番だね…」

「ああ……」

2人とも真剣な表情を浮かべている。

「…なのは、君の事はきつと…僕が守るから…もう絶対に落とさせやしない」

「それは私もだよユーノ君…私も絶対にユーノ君やみんなを守ってみせる！」

「うん…だから絶対に勝とう…ヴィヴィオの為にも…」

「うん……わかってる…」

お互いの事を守ると、自分の気持ちを真っ直ぐに伝え更に自分達の事を親と慕う1人の少女の事を頭に浮かべ、2人は気を引き締める。

「レイジングハート!!」

「コスモスター!!」

「「セットアップ!!」」

2人も先に行った仲間達の後を追って大空へと消えていった。

最後に残ったのはベルクトとフェイトの2人

「ベルクト……」

「……………」

ベルクトが心配そうにベルクトの名を呼ぶが、ベルクトは黙ったままである。

すると2人は既にわかっていたかのように同時に動き始め、そして互いの体を抱き合う。

「…無茶だけはしないで……………絶対に生きて帰ってこようね…」

「ああ…お前も…死ぬなよ？」

「ベルクトの方こそ……………BBと戦うことになっても…」

「…ヤツに立ち向かえるのは今の俺ぐらいだ…大丈夫…今度こそ俺は勝ってみせる…」

お前を悲しませた元凶を叩き潰すためにな…お前こそ…あの女には気をつけるよ？」

「うん…私も必ず決着はつける……………アイツに…セデイスに全てを聞き出して……………」

互いに目を閉じ、体を密着させた状態でやり取りをする。

しばらくした後、抱擁を解き、各々のデバイスを構える。

「バルディッシュュ!!」

「グレイブアーク!!」

「「セットアップ!!」」

そしてベルクトとフェイトの2人もはこぶねへと一直線向かった。くのであった。

＊

「ふふ〜ん♪どうやらいいいよおいでなすったみたいだね〜」

戦艦はこぶね総司令室

モニターに映る敵のマークを確認してセデイスは楽しげに呟く。

「さ〜て…六課の連中やオリジナル達がこのパパ達の最高傑作を前にどこまで足掻けるかしら〜」

そう言いながらセデイスはパネルを動かして戦力の確認をする。

「ガジェット？型はDルームにまとめて配備…？型はウエンちゃんと一緒に

六機まとめて順調に稼動中…？型はオリジナル達が来てから動かせばいいとして〜…ん？」

ふとセデイスは気になる物が視界に入り、通信を入れる。

「どうしたのよディエちゃん？何か元気ないみたいだけと〜？」

『ああ…セデイス…』

通信の先で砲台を片手に浮かない表情でディエチは答える。

『正直言うところの作戦…あまり気が進まない…』

「ちよっ…今更どうしたのよディエちゃん？」

『…こんな大きな船を動かして…あんな凄い兵器を使って…

たくさんのお客さん達を犠牲にして…そこまでしないといけない事なのかなって…』

困惑するセデイスを前に、ディエチは自身の胸の内を明かす。

「この船を動かして私達の天下を作り…完全なる私達の楽園を生み出す先駆者とする…

その為にジェイルさんやパパ達が頑張ってきたのはディエちゃんにも百も承知でしょ〜？」

『それはそうだけど…』

「そ・れ・と・も…今更地上のゴミどもが可哀想になっちゃった
りしたわけ？」

甘ったるい口調で挑発するかのようにセデイスは言い放つ。

すると、それを聞いてディエチは何かを吹っ切るように表情を引き
締めなおす。

『ごめん…気の迷いだ…忘れて』

「そう？なら心配しなくていいよね！」

『命令された任務はちゃんとやる…でないと地上のお姉や妹達も面
倒なことになるしね…』

「そうそうその意気だよ！頑張ってね〜！」

にこかやにセデイスは笑いかけてディエチとの通信を切る。

そしてしばらくまたパネルを高速で動かしていたが、ふとピタリと
その手を止める。

「……ハッ…馬鹿じゃねーの？ゴミ畜生の分際で何を甘っちょろい
事を…」

普段の彼女の姿からは考えられない…いや、アネモネの追跡時にほ
んの少しだけ垣間見せた

あの時の怒りに満ちた表情を浮かべてセデイスは吐き捨てる。

「所詮はスカリエッティのアホが作った欠陥人形…私やビーちゃん
と比べるべくもないか…」

まったく：シンシアやアネモネのカスといい：どうしてパパの夢には余計な障害が生まれる事が多いのかしら……」

モニターに映る他のメンバーや六課の魔導師達、その他大勢の映像を見ながら淡々と呟く。

「まあいいわ：私はパパとビーちゃん以外がどうなろうと知ったことじゃないしね……」

精々ゴミはゴミらしく無様に働いた後に六課のカスどもと一緒に散れればいいわ………

さうて！ネガティブな思考はやめてと！私は私のお仕事をしないとねー！」

言葉の途中で冷酷な怒りの表情から、瞬時にまたいつもの軽いノリの笑顔に切り替わり

セデイスはパネルの操作を再会するのであった……

第25話（後書き）

出撃するだけで1話消費してしまうとは…
つくづく登場人物が（無駄に）多いと感じてしまいます…
これでもまだ全員じゃないんだし…

それと所々に散りばめた今後の伏線
ガジェットの？型？型やユーノのデバイスの新機能…
特にユーノのコスモスターはオリジナルということもあるので
戦闘では他キャラのデバイス強化と同様に
気合い入れて書いていけたらなと思います。

そして極めつけはまたしてもセデイスの豹変…
え……残念ながら最初期プロットで決まっていたからね…
セデイスはクアットロ以上の腹黒女だと…
果たして今後更にどのように変わっていくのか…

そんな事などを気にしつつ次回も楽しみに待っていてくれたら幸いです。

それではまた

第26話（前書き）

最終決戦、地上編その1です。

第26話

「…おちよくるのもいい加減にしてもらいたいね」

「あら？私は全て本気のつもりで言ったのですが？」

薄暗い空間の中で2人の男とくすんだ金髪の女性が言い争っている。

「僕達の力を理解出来るのは僕達だけだ…ついさっき会ったばかりのお前のような薄汚い女が…わかったような口を聞くな！！」

青基調の服を纏った男の片方が女に対して感情的に叫ぶ。

が、女の方は全く動じた様子は無く、薄ら笑いを浮かべている。

「我らは一度死した身なのだ…この場に存在している事自体が奇跡というもの…」

「死人を生き返らせるなど今の技術では珍しい事ではありませんわ…現にドクター達はそれに近い事を既に実用している」

「では何故、我らのこの力に今更興味を示すというのだ…？」

もう片方の男は冷静な雰囲気を保ちながらも、怒気を含ませた声で問いかける。

「人間なんて…どんなにわかりあってるつもりでも

内心では何を考えてるかなんてわからないものですわ…

それが血の繋がった家族にしろ…長年連れ添った友人であるにしろ…」

ゆっくと2人の男に歩み寄りながら女性は語っていく。

「けどあなた達は違う…どんなに離れた位置でも互いを分かり合えるばかりか…

その気になれば相手の全てを覗き込むことが出来る…

故にあなた方は2人で1人…本当の意味で人の心を理解できる存在…こんなに素晴らしい力を持つお人は他にいないのではなくて…？」

「フンッ…！口だけは達者な女だね…

君如きに理解が出来るなら僕らはこんな惨めな人生は送っていないはずだろう？」

自嘲気味に男の片方が吐き捨てる。

「それは違いますわ：あなた方のした事は正しいのですから」

「何？」

「ニュータイプだなんていう存在の方が私が聞く限りでは偽者に感じますわ：？」

けど愚かな民衆は上辺だけで良しとする：何故なら新に力有る者は恐怖の対象になるからです：

だからあなた達の世界の人間はあなた方の魅力を殺し、ニュータイプというまやかしに走った：

私はそう考えますけど？」

「：我ら兄弟のしてきた事を貴様は認めるとでも言うのか？」

今までに無いタイプの人間だと感じ、男達はやや困惑の色を見せていた。

女の方はウツトリした表情を浮かべ、男達の側に寄る。

「世界があなた方を黙殺したから：あなた方は世界を滅ぼそうとした：

間違っているものを壊し正しい方向へと導く：その何がいけないというのです？」

寧ろ惚れ込んでしまえますわ：／／あなた方のような真っ直ぐな殿方達は：

どういうわけか女は顔が若干赤らんでいる。

一方の男達も、自分達のしてきた事を初めて肯定する存在を前に言葉を失いかけていた。

そして女はそんな男達に笑顔で手を差し伸べた。

「ならもう一度挑んでみませんか？あなた方こそが真に進化した人間である事を証明する戦いに：」

＊

「…兄さん…そろそろ時間だよ？」

自分を呼ぶ声がしてシャギアは意識を覚醒させる。

「珍しいね？警戒心の強い兄さんがうたた寝するなんて？」

「すまないオルバ…あの時の夢を見ていたものでな…」

管理局地上本部の自室で壁に寄りかかってうたた寝していたシャギアはそう言って体を直立させる。

「外は今頃大混乱だろうね…はこぶねがいよいよ起動したんだから…」

「ああ…いよいよ我ら兄弟の計画也大詰めということだ」

互いの顔を見やりながら、笑みを浮かべてシャギアとオルバはやり取りする。

「いずれこの本部にゼスト・グランガイツがやってくる…その時が全てだね？」

「そうだオルバよ…古い考えに拠り固まった地上の阿呆どもには退場してもらわんといかんからな…」

「そしてそれが済めば…僕達は更なるステージへと上がることになる…」

「そういう事だ…寧ろ我らの真の仕事ははこぶねに戻ってからだろう…」

そして2人は机の上に置いてあった仮面を装着し

地上本部管理局員、ヴェンデイス・フラテツロとクリーノ・フラテツロへと姿を偽る。

「セデイスからの指令もある…手早く済ませるとしよう…」

「そうだね兄さん…彼にも…ガロードにも思い知らせてやらなきゃ

いけないからね…ククク…」
2人はそう言って自室を後にしていった。

＊

ミッドチルダ街中の防衛ライン、突如出現したサーペントの大群を相手に

管理局の魔導師達が必死に応戦していた。

「くそっ！数が多すぎる！」

「しかも1体1体が並外れている…このままじゃ…！」

「怯むな！俺達の後ろにはまだ避難の済んでない市民もいるんだぞ！」

だが、敵の物量と1体ごとの性能の高さに魔導師達は苦戦を強いられていた。

「……！！増援……！」

と、更に局員達の背後から新たなサーペントが姿を現す。

ザシュ!!

だが、その新たなサーペント達に突如として斬撃が叩き込まれる。

「ふう…何とか間に合いましたね」

「君は…」

困惑する魔導師達の前にバリアジャケットを纏い両手にショーターを構えたカトルが現れる。

すると直後、上空から何者かが急降下してきた、手にした鎌でサーペント達を破壊していく。

「地獄への道連れは！なるべく多い方がいいからな！」

ビームシザースを携えたデュオが大音声で叫んだ。

別の場所ではトロワとゼクスが背を向け合いながら

それぞれ自身の目の前にいるサーペント達と相対している。

「確認できるだけで残り660機…1人110機の割り当てだな…」

「問題は敵はサーペントだけではないという事だがな…」

互いに冷静な口調でやり取りし、トロワは両腕のガトリングを構えサーペントの大群に向けて乱射し、ゼクスは左腕の盾からヒートロッドを出現させ

サーペントの何体かをまとめてからめとっていく。

「だが…今はそんな事を言っている場合ではない…とにかく敵を消滅させるのみだ」

「当然だ!!」

更に別の場所では五飛が自分を取り囲むサーペント達と敵対する。

「物言わぬ機械人形どもに…正義などありはしない!!」

閉じていた目をカッと見開き、両腕のドラゴンハングを伸ばすサーペントを2体捕縛すると、それを他の者にぶつけてまとめてなぎ払う。

「遅いッ!!」

五飛はその隙を突いてビームトライデントを装備し、残ったサーペントを刺し貫いていく。

「……………」

サーペントの数体が上空に向けてガトリングや魔力弾を乱射する。その対象であるヒイロはデバイスに内臓されたゼロシステムによってそれらを先読みし

高速で右へ左へと飛び交いながらそれらを回避していく。

「破壊する……」

ヒイロは右手にビームサーベルを構え、急降下してサーペントの1体を切り捨てる。

それを狙ってサーペント達が一斉攻撃を仕掛けるも

ヒイロは瞬時に上空へと飛び上がってそれを回避する。

そして今度は背部に携えていたツインバスターライフルを前に構え

る。

「戦いは：今度こそこれで終わりにする：！」
ツインバスターライフルから膨大なエネルギーが放出され
サーペントの大群を飲み込んでいった。

＊

ミッドのビル街を一台のヘリが高速で飛行していく。

『もうすぐ降下ポイントです！！』

「ああ：わかった」

ヘリパイロットのアルトが通信を入れて報告を行う。

それを聞いて搭乗者のアムロが、フォワード陣達に最終確認を行う。

「これから俺達はミッド中央部：市街地方面に展開している敵戦力の迎撃ラインへと参加する事になる

現場の地上部隊と協力しつつ厄介な戦力である召喚士や戦闘機人を止めるのが仕事だ」

アムロの説明を今までにないほど真剣な表情で4人は聞いている。

「地上部隊も奮戦しているが：AMFや戦闘機人との戦闘に関しては俺達のほうが上手だ

よって俺達が先行して敵の戦力を優先的に潰すことになる」

「そして削るだけ削った後は…迎撃ラインに任せるといふ事ですね？」

「その通りだ…キャロ」

途中で自身の意見を言ったキャロをアムロは肯定する。

「でも…」

と、エリオが少し笑顔を浮かべて口を開く。

「何だか…ちょっとだけエースな気分です…」

「そうだな…自分に自身が持てるというのは戦場では大事な事だ」

エリオの言葉にもアムロはやりわりと笑みを浮かべて対応する。

直後に表情を真剣なものへと戻して更に続ける。

「だが油断は禁物だ…敵戦力が迎撃ラインを超えたら市街地へは一直線だ…」

「市民の財産と安全を守るのが管理局員としては…絶対行かせるわけにはいきませんからね！」

スバルがグツと拳を握って得意げに答える。

「後は…くれぐれも単独行動は取らない事…敵戦力は未だ不明な面も多い…」

シャアやマイヨのようなエース級の敵を…単独で相手にするのは危険だということを忘れないでくれ…」

アムロの警告に4人が黙ったまま頷いて答える。

それを確認した後アムロは降下ハッチの前へと移動し、4人もそれに続く。

「セットアップ…Hi—Vガンダム…！」

アムロは改良を加えた新たな自身のデバイスの名を呼び

青と白を基調にグラテーションのかかったカラーのバリアジャケットを纏っていく。

「それじゃあ…みんな行くぞ！」

「「「はい！！」「」「」」

高らかに言い放ったアムロの言葉に4人が答え、地上へと降下していった。

＊

ミッドチルダのとあるビルの屋上、そこにシャアとルーテシア、ガリューが立っていた。

「……………感じるな」

「うん…私達と同じ…あの人が近づいてきてる…」

互いに固い表情を浮かべながら、シャアとルーテシアは敵の存在を感じ取っていた。

「シャア……私…頑張るから…シャアの為に絶対に…」

「…気持ちは嬉しいよルーテシア…本当は君にこんな事はさせたくないのだがね…」

「大丈夫…この戦いさえ終われば私達は自由になれる…ドクター達との関係も終わる…」

そうすればシャアも…シャアのしたい本当の事が出来るようになる…その為のお手伝いが出来るなら私…とっても嬉しい…」

「…すまないな」

とても穏やかな笑顔で答えるルーテシアに、シャアはどこか浮かない顔で言った。

「…ガリュー？どうしたの？」

ふと、ルーテシアがガリユーの方に顔を向けて疑問を浮かべる。
シアアとの出会いによって目覚めた自身の力：それによってガリユーの心が頭に響き

彼の心に迷いがあると感じ取ったからだ。

それを解しているかはわからないが、ガリユーは少したじろぐ。
だが、そんなガリユーにもルーテシアは穏やかな笑みで答える。

「：大丈夫だよガリユー：シアアが側にいれば私は何でも出来る気がする：」

この力も失った心も：シアアがいたから手に入れる事が出来た：だから大丈夫だよ：

きつと：きつと今度こそ全部がうまく行くから：」

心の底からそう思っているルーテシアは自分の気持ちを正直に伝える。

そんな彼女の姿を見てガリユーは何も反応しなかったが、どこか迷っているような雰囲気も漂わせていた。

（ガリユー：？まさかな：）

一方でシアアはガリユーの反応を疑い深げな面持ちで見つめていた。
しかし直後に3人は敵の反応が近づいているのを感じ、前に向き直る。

「じゃあ行こう：シアア：」

「ああ：」

シアアも何かを吹っ切るように表情を引き締め、待機中のデバイスを取り出す。

「アスクレピオス：ヒュギエイア：」

「ナイチンゲール：」

ルーテシアは両腕に装着されたアスクレピオスに加え
新たなデバイスであるヒュギエイアを起動

自身の体に深緑色のローブ型のバリアジャケットを纏っていく。

シアアは以前のデバイスーサザビーに改良を加えたナイチンゲールを起動させ

赤基調のバリアジャケットと両肩に新たに増設したファンネル用の装甲と

より強力になったライフルとシールドを装備していった。

そしてルーテシアは自身の敵を視界に入れると、突如として表情を冷たくさせる。

「見つけた……!!」

＊

アムロ率いるフォワード舞台とは別のポイントを目指してギンガ、勇、比瑠の3人がミッドの街中を突き進む。

「思ったより以上に敵の反応が多いな……!」

「けどこれくらいで弱音なんて……上げてる暇なんて無いわ!」

右手のブレンバーでガジェットを斬り裂きながら苦々しげに勇が呟きその近くで、リボルバーナックルでガジェットを殴り飛ばしながらギンガが答える。

「そうよ勇!他の皆で頑張ってるんだからしっかりしないと!」

「わかってるさ……ここで頑張らなかったら意味ないからな!」

比瑠の言葉に勇は気合を入れ直すかのように強い口調で言い

上空へとふわりと浮き上がって、ガジェットに向けてチャクラ光を放ち撃墜していく。

そして3人は順調に目的地へと突き進んでいくが

「ランブルデトネイター…」

突如3人の下にナイフが数本飛来、3人は急停止する。

「これは…ブレン…!」

何か嫌な予感のした比瑠は咄嗟に前に出て防御フィールドを展開する。

直後、地面に突き刺さった数本のナイフは爆発を起こす。

「2人とも大丈夫!？」

爆風が晴れた後、比瑠が心配そうに後ろに振り向いて勇とギンガに尋ねる。

「大丈夫だ…」

「平気よ…この位は!」

答える2人には特に目立った外傷は見当たらなかった。

「やはりあの程度の不意打ちではダメージにならないか」

更に直後、どこからともなくそんな声が響き、3人の前にチンクともう1体が姿を現す。

「!あなたは…!」

「また会ったなファースト」

以前自分を倒した敵と再び相対し、ギンガは気を引き締めなおす。対するチンクは感情をあまり感じさせない冷たい口調で言葉を放つ。

「勇…あれって…」

「バロンズウ…いやでも…雰囲気が大分違う…」

勇と比瑪はチンクの背後にいたもう1体―バロンズウに注目していた。

が、今まで見たことない黒のボディに赤いフィンを携えた不気味さを課何時させる物であった。

そんな3人を前にして、チンクが再び口を開く。

「今回の私の任務は捕縛ではない…貴様の完全な破壊だファースト」

「ツ…ギンガさんを物みたいに言わないで！」

チンクの物言いにカチンときた比瑪はたまらず怒鳴って反論する。

だがチンクはそれに大した反応は見せずに機械的に呟いていく。

「…お前達のデータもドクター達から受け取っている…ユウ・イサ

ミ…ヒメ・ウツミヤ…

私達の計画の為に…そして妹達のためにも…貴様らをこれ以進ませるわけにはいかん…！」

そう言ってチンクはナイフを両腕に掴んで構える。

それに呼応するかのように背後の黒いバロンズウもカメラアイを光らせ攻撃態勢に入る。

それを見たギンガ達3人もそれぞれの武器を構えて戦闘態勢に入った。

*

アムロ率いるフォワード陣が目的ポイントへと急ぐ。

だが、先行して上空を飛行していたアムロはその途中で脳に直接響くいつもの「ソレ」を感じ取る。

（！……思ったより近くにいたのか……！）

そう思ってフォワード陣に警戒を呼びかけようとするが

「見つけた……！！」

その寸前に辺りに冷たい怒りを感じさせる重々しい声が響き渡る。

一行がそれを聞き取り、周辺を見回す。

「あの子……！！」

エリオ共にフリードに跨っていたキャロがビルの屋上にいたルーテシア一行を捉える。

直後、ルーテシアは右手を前に翳して紫色の魔力刃を形成。フリードに向かって放つ。

「フリード……！！」

キャロの指示によってフリードは魔力刃を難なく回避する。

（ここでシア達と遭遇するとは……）

その一連の光景を見つつ、アムロは頭を高速回転させて状況を分析する。

シアとまともにやりあえるのは恐らく、というよりほぼ確実に自分しかない。

ましてやシアの性質上、むざむざ自分達を見逃すとは考えられない。

側にいるルーテシア・アルピーノもデータ上ではかなり高ランクの

召喚士であり

今までのシャアとのやり取りや彼女の行動を考えるに

シャアから離れて単独行動をするとはこれまた考えにくい。

さっき自分で言ったように敵の戦力が不明な点が多い事を考えると
ここで自分達の方から分散するのも得策とは言い難い

もたついていればガジェットや戦闘機人の応援がやって来て更に追
い込まれる可能性もある。

となると、先に5人で一斉にかかってあの2人を何とかするべきか
……

「…予定変更だ！先にアイツらを片付けないと

面倒なことになる！ここで潰すぞ！いいなスバル、ティアナ！」

「了解！！」

考えをまとめたアムロは急停止し、背後に振り向いてスバルとティ
アナに指示を飛ばす。

スバルとティアナも同様にその歩みを止め、そしてスバルは拳を振
り上げる。

「ウイング……！！」

「IS発動……レイストーム……」

だがスバルがウイングロードを展開するよりも先に

別のビルの屋上にいたオットーが自身のISーレイストームを発動。
何条もの黄緑の閃光をアムロ達に向けて発射する。

その攻撃をアムロは左手の盾を使って防御し

スバルとティアナは近場のビルの屋上へ飛び上がる事で回避する。

「はあっ！」

だが間髪いれずにティアナの目の前にツインブレイズを構えたデ
ィードが出現

その刃をティアナ振るう。咄嗟にティアナはクロスミラージュに魔
力刃を形成して応戦するが

突然の急襲に態勢が整っておらず徐々に背後へと押されていく。

「ふっ！」

「きゃあっ！」

ディードの強烈な一撃がティアナに叩きこまれ、彼女を近くの廃ビルの中へと吹き飛ばす。

「ティア！」

ティアナに向かってスバルが叫ぶ。

「おらああああ！！！」

が、更に直後スバルの目の前にノーヴェが出現。彼女に向かって連撃を放つ。

「チンク姉の痛みを思い知れええええ！！！」

「うわあっ！」

怒涛の如く放たれるノーヴェの攻撃をスバルは捌ききれずティアナと同様にこちらはビルの屋上からやや離れた道路上へと吹っ飛ばされる。

「情けない……！自分で言うておいて分散を許してしまうとは……！」
自分の指揮が遅れた所為で戦力を分散されたと感じ、アムロは歯噛みする。

「とにかく……急いで合流を……！」

キャロと共にフリードに跨っているエリオが慌しい口調で言う。

が、息つく暇もなく今度は3人の周辺に赤いユニットが飛来する。

「チイツ……フィンファンネル……！」

それがシャアによるものだど瞬時に感じ取ったアムロは

自身もフィンファンネルを分離し、ピラミッド型の防御フィールドを展開

直後、赤いユニットーシャアのファンネルから砲撃が放たれ爆発を

起こす。

「こうも易々と攻撃を許すとは…指揮の腕が落ちたか？アムロ！！」
爆風の先からサーベルを構えたシャアが凄まじい勢いで突っ込んでくる。

アムロもサーベルを構えそれに応戦するも、後方へと弾き飛ばされてしまう。

「シャア…その格好は…！」

「ほう…デバイスに手を加えたのは私だけではなかったらしいな！
互いの格好を見て2人はそうやり取りする。

後方へと飛ばされながら態勢を立て直すアムロとそれをシャアが追っっていく形で

2人はエリオとキャロのいる位置からどんどん離れていく。

「アムロさんが…！」

アムロまでもが離れていってしまい不安げな口調でキャロが呟く。
だがそんな事を心配する暇もなく、今度はガリユーが二人に向かって突撃してくる。

「ホイールプロテクション！！」

キャロはすぐに気を引き締めなおし、右手を掲げて防御魔法を唱える。

右手のケリユケイオンから桃色の光が放たれガリユーの動きを封じ込める。

その隙を突いてガリユーから距離を離していく。

すると、2人の目の前にガジェット？型に乗ったルーテシアが姿を現す。

「……あなたがシャアを傷つけた…あたなの竜がシャアに酷いケガを負わせた…

あなたの所為でシャアが痛い思いをした…！許さない…絶対許さない…！」

ルーテシアはまるで呪詛を唱えるかのような刺々しい口調でそう呟きながら

眉間に深い皺を寄せて、鋭い目つきでキャロの事を睨みつける。

(この子……)

対照的にキャロは困惑した表情を浮かべながら、胸の前で右拳を握っていた。

＊

時間は少し遡り、ビルの上

「…あれがセディスの言っていた幻術使い…」

ティアナを吹き飛ばしたディードは彼女が吹き飛んだ廃ビルを見つめて機械的に呟く。

「…先に潰しておかないと…厄介な事になる」

そう言っただけティアナの突っ込んだ廃ビルへと飛んでいこうとする。

「はあああっ！！！！」

「！！！！」

だが、その進行を阻むかのように突如としてサコミズが目の前に現れる。

ディードは驚きながらもサコミズの放った刀剣の一撃をツインブレイズで受け止める。

「…またお前か」

「地上界を焼く者が…これ以上はやらせんぞ！！」

上空に浮かんだまま互いに武器を構えて2人は相対する。

「…そう何度も上手くいくとは思わない事だ」

「いいだろう…貴様に我と一体となりしオウカオーの真の力…とくと見せてくれる！」

冷静に呟くデイドとは対照的に、サコミズは激情的に叫んだ。

＊

「デイド…またアイツと…」

別のビルの上でデイドの様子を伺っていたオットーが呟く。

「アイツの力は厄介だ…ボクも加勢に行かないと…」

オットーがデイドの下へと行こうとした矢先、彼女に向かって数発の光弾が飛んでくる。

オットーは瞬時にそちらへと振り向いて防壁を展開してそれを防ぐ。

「お前が実質的な地上側の指揮官と見た…」

「お前は…」

オットーの目の前に光弾を放った張本人―サコミズと共に周辺を警戒していた

エイサップがその姿を現す。

「異なる世界とはいえその平和を乱す者達を止める為に…お前は僕がここで落とす！」
一本の刀剣を両腕で構えてエイサップがオットーに向けて言い放つ。
「…落ちるのは…お前のほうだ」
対するオットーは周辺に数十機のガジェットをその場に引き寄せて応戦の構えを見せた。

＊

(ティア…………ティア!!)

廃ビルの中でヨロヨロと立ち上がったティアナは、スバルの念話を察知する。

「コホッ…この状況で個人戦はマズイ…！とにかく合流を…………ッ！」
ティアナがそう言ったのとほぼ同時に、彼女のいる廃ビルを覆いこむように青い光の壁が展開する。

「これは…捕縛結界…！」

その光の壁を見てティアナは呟く。そして…

「大佐から貰った結界発生装置…効果は十分みたいだね…！」

「お前がフォワードのヘッドだと聞いてるからな…ここで確実に仕留めさせて貰う！」

廃ビルの内部にバリアジャケットを纏ったギユネイとクエスが姿を現した。

＊

地上本部へと向かってゼスト、アギト、マイヨの3人が空を突き進む。

「！！…ゼスト…どうやら来たみたいだぞ…」

その途中でマイヨがポツリと呟き、その進行を止める。

3人の目の前ではシグナムとリインの2人が固い表情を浮かべて立っていた。

「アイツら…！」

2人の姿を確認してアギトが苦々しげに呟く。

「久しぶりだな、剣の騎士よ」

「……………」

冷静な口調で呟くマイヨの言葉に、シグナムは沈黙を保っている。

「局の騎士か？」

「…本局機動六課シグナム二尉です」

静かに尋ねたゼストの言葉を聞いて、ここでシグナムが口を開く。

「前所属は首都防衛隊…あなたの後輩ということになります」

「そうか…」

「中央本部を…壊しにでもいかれるのですか？」

「古い友人に…レジアスに会いに行くだけだ…」

互いに冷静さを保ったまま淡々と2人はやり取りする。

アギトはやや戸惑いながら二人の顔を交互に見やり、マイヨは黙ってゼストの隣に突っ立っている。

「それは…復讐の為に…？」

ここでシグナムが口調に少し強みを加えてゼストに尋ねる。

「……悪いが、貴様にそれを答えている時間も惜しいのでな」

が、その質問に答えを返したのはマイヨであった。

そして次の瞬間マイヨがレーザーソードを構えてシグナムに突撃する。

「ッッ！！」

咄嗟にシグナムはレヴァンティンでその一撃を防ぐも、後方へと飛ばされる。

「マイヨの旦那！！」

「…行け、そして真実を確かめてこい」

「けど！！」

「アギト…貴様にもわかっているはずだ…もうゼストには時間が無い…」

困惑するアギトを他所に、マイヨは淡々とそう答えてシグナムを追う。

「…すまない…行くぞ、アギト」

「あ…！待ってよゼストの旦那！」

ゼストは一言申し訳なさそうにマイヨに言った後、地上本部へと向かう。

その後ろをアギトが慌てて追いかけていった。

「騎士ゼストが本部に！」

「まずい…！」

それを見たシグナムが後を追おうとするが、彼女の前にマイヨが立ちはだかる。

「貴様個人に恨みは無いが…果たすべき義の為に…お前はここで止

めさせてもらう」

レーザーソードを前に構え、マイヨは静かに呟く。

「…そうやって我儘を言っ！お話しないで意地を張るから戦うことになっちゃうんですよ！！」

その一言に憤慨しつつ、リインはシグナムとユニゾンを行う。

シグナムの体が光に包まれ、全体的に白みがかった姿へと変わる。

「…行くぞっ！」

「……………！」

シグナムの言葉と同時に2人は突撃し、互いの剣を交わらせた。

＊

戦艦はこぶねマスタールーム

「ふわあ…退屈だな…」

その部屋の中でBBは仰向けになりながらプカプカと浮かんでおり大欠伸をする。

そして首だけを横に向けてある1つのモニターに目を向ける。

「チャージ率は20パーか…まだまだ時間がかかりそうだな…
ま…これを使わなくても今ある戦力だけで十分な気がすつけどな…」

5分の1程の赤い光が溜まっている棒グラフが表示されたモニター
を見てそう呟く。

（にしても…スカリエッティやライネンにも内緒でこんなもん再現
して…

鍵はまだ開けてないとはいえ…こんな危険物はこぶねに搭載して
親父は何がしたいんだか…しかも兄貴が最終決戦に使ったアレまで
持ち出してるし…）

その後BBはマスタールームの下部を見つめながら心内で淡々と呟
く。

「はあ…早く兄貴ここに来ないかなあ…俺の言った事…ちゃんと
気づいてればいいんだけど…」

そう言ってBBはまた仰向け態勢になって暇そうにし
自身と瓜二つの存在…自分の楽しみみの為にこの世界へと連れてきた
その人物の到着をひたす待っているのであった。

第26話（後書き）

コロコロ場面を変えると混乱するので

先に地上側の様子からまとめて書きました。

（そういうわけでベルクトとフェイトが全く出番無し（泣））

構図を整理すると

- アムロ、エリオ、キャロVSシャア、ルーテシア、ガリユー
- スバルVSノーヴェ
- ティアナVSギュネイ、クエス
- ギンガ、勇、比瑯VSチンク、黒バロンズウ
- プリベンターVSサーペント軍団
- シグナムVSマイヨ
- エイサップVSオットー
- サコミズVSデイド

こんな感じになります。

次回ははこぶねと空中側の戦闘内容になります。

あと冒頭のような悪役側のスカリエツティ一味との出会いの詳細も
いつかまとめて書けたらなあ…と考えてます。

それではまた

第27話（前書き）

最終決戦、空中側その1です。

※今回は後書きは無しです。

第27話

地上側の部隊が奮戦している最中、はこぶね周辺のの空域でもまた激戦が繰り広げられていた。

空を埋め尽くさんばかりの数の？型ガジェットに、その機体の一部から放出される

紫色の靄ーコーラリアン発生ガスから出現する無尽蔵の人工コーラリアン。

その敵の大群に対して、機動六課と航空魔導師部隊の面々は一步も引く事無く敵を次々に撃墜していく。

「はあっ！」

バレルが手にした実体剣を振るい、目の前にいるガジェットを1体斬り捨てる。

その隙を突くようにバレルの背後から別のガジェットの集団が迫る。

「やらせない！！」

それを見たフェイがバレルの背後にシールドユニットを飛ばし防壁を展開。

彼に向かって放たれた攻撃を防ぐ。

「遅い……！！」

直後、凄まじい速度でベルクトとフェイトがその場に駆けつけ

それぞれ手にした武器でバレルの背後にいたガジェットを瞬時に切り刻む。

だが息つく暇も無く、今度は別方向からコーラリアンの大群が4人に向かってくる。

それを確認してフェイトはバルディッシュを変形

ベルクトとバレルの2人もデバイスのモード変更を行う。

「トライデントスマッシュー!!」

「グレイブキャノン・マキシマム!!」

「フルファイヤーキャノン!!」

各々が持つ大火力による魔力砲撃で、コーリアンの大群をまとめて消し飛ばしていく。

「……にしても、一体何体いるってんだ」

砲撃が終わった後、苦々しい表情でバレルがポツリと呟く。

そんな間にも更に別のガジェットとコーリアンの集団が迫る。

「戦闘はまだ始まったばかりだ：弱音を吐くには早いぞバレル：」

「わかってるさ：」

長身砲で直接敵を叩き落しながら、ベルクトは冷静にバレルの言葉に返答し

バレルもベルクトの返答を聞いて気を引き締めなおし、手にしたライフルから魔力弾を放つ。

「こんな巨大艦とこれだけの戦力を：随分と壮大な計画なのね：バルドナ博士：」

ブレードユニット4機を浮遊させ、それを操って敵を切り裂いていくそんな中でフェイが目の前の漆黒の巨大艦はこぶねを見やりながら呟く。

「けど私達が止まるわけには行かない…でないと多くの人達が犠牲になる…」

「それくらいは…わかりきったことよ！」

鎌型に変形させたバルディッシュを手にし、高速で飛行しながら次々に敵を打ち倒すフェイトが固い表情で呟き、それにフェイが強い口調で答えた。

＊

「防御陣形！隊列乱したらアカンよ！」

別の交戦ポイントで、リインフォースとユニゾンしたはやてが航空魔導師隊員達に指示を飛ばしていく。

それと並行させてはやてはシュベルトクロイツを構え持ち前の広範囲殲滅で一度に多数の敵を撃墜していく。

「チャージモード！！」

その傍らでタツクが手にしたライフルから閃光を放って別方向にいる敵を撃ち落とす。

「行きなさいっ！」

更にマリナがトランスユニットを展開して魔力弾を発射しはやての上空から迫ってきていた敵の大群をその兆弾によって落としていく。

3人の周辺にいる魔導師部隊達も次々に攻撃を放って応戦する。
だが、敵の数は一行に減る気配は無かった。

「敵の数が多すぎるな…このままじゃジリ貧だぞ…」

まだ魔力残量に余裕があるとはいえ、減ること無く現れる敵の大群を見てタックが呟く。

「外から攻めるのはキツイわ…はやてとリインフォースがいるにしても」

あの巨体相手に決定打を与えるのは厳しいわよ」

「そやな…タックとマリナと一緒に砲撃を放とうにもこれじゃあ…やっぱり中から攻めるのを考えなアカンか…」

ライフルから魔力弾を同時に何発も放ちながらマリナが冷静に呟きその側で防壁を展開し、敵の砲撃を防ぎながらはやてが呟く。

『24番射出口より小型機出現!!』

『南側からも…これは11航空ルートです!』

『こちらからは例のガスが噴出!コーラリアンの数が一気に!』

だがそんな3人を嘲笑うかのように、航空魔導師隊から更なる増援の報告が入る。

それを確認したはやてがタックとマリナの方を見て言う。

「やっぱりこのままじゃキリがあらへん…タック、マリナ!」

「……わかったわ、私達で中から潰してくればいいのね?」

皆まで言わなくてもわかると言った感じに、マリナが笑みを浮かべて答える。

それを聞いてはやては少し心配そうな表情になりつつも続ける。

「…外周警戒は私とリインフォースで引き受ける…行ってくれるか?」

「当然だろ?ここで攻めあぐねても仕方ないしな」

それに対してタックもまた得意げに笑みを浮かべて答えた。

そして2人ははやてから背を向けてはこぶねの方に向き直る。

（…2人とも、任せたぞ）

その時はやての中でリインフォースが2人に向かって念話を飛ばす。それを聞いた2人は後ろに振り向き笑みを浮かべた表情で一度頷いた後

はこぶねへ向けて一直線に飛んでいった。

タツクとマリナがいなくなった後、はやてはリインフォースと念話を行う。

（あの2人の為にも…私達も頑張らんな！）

（はい…）

はやての中でリインフォースが答える。その後はやてが航空魔導師隊へと激を飛ばす

「皆、落ち着いて！拡散されたら手が回れへん…叩ける小型機は空で叩く！

潰せる砲門は今のうちに潰す！ミッド地上の航空魔導師隊、勇気と力の見せ所やで！」

『はい！！』

はやての言葉に魔導師隊員達も力強く答え、自身の武器を構えた。と、そんなはやて達の目の前に増援の大群がやってくる。

「ちよっとデカいのを一発放つとこか…行くで、リインフォース！」

（はい…！！）

はやては夜天の書を開き、もう片方の手でシュベルトクロイツを高く掲げる。

それと同時に足下と目の前に白い魔法陣が展開する

（響け……終焉の笛……！）

リインフォースが目を閉じ詠唱する。それに続いてはやてがシュベルトクロイツを振り下ろす。

「ラグナロク……！」

展開した魔法陣からいくつもの巨大な白い閃光が放たれも敵の大群をまとめてなぎ払っていった。

＊

同じ頃、はこぶねの近辺でなのは、ユーノ、ヴィータの3人が敵と交戦していた。

「でやあっ……！」

ヴィータが手にしたグラーフアイゼンでガジェットを叩き潰して破壊する。

その側でレイジングハートを構えたなのはが持ち前の砲撃魔法で多数の敵を一度に撃ち落していく。

その身に纏うのはリミッター解除状態のエクシードモードのバリアジャケット。

最初から本気で戦っていた。

「第7密集点撃破！次……！」

熱と共に白い煙を噴出するレイジングハートを下に構え
いつも以上に気合の入った表情でなのはが叫ぶ。

その少し上空でユーノがコスモスターを構え、カードをセットする。
「増強効果20：アクセルシューター：発射！！」

状況が状況なだけにユーノも一切の手加減なしの全力で戦闘にのぞ
んでいる。

普段以上の魔力数値でアクセルシューターを発動し

コスモスターから大量の黄緑の魔力弾が放たれ、敵をまとめて爆散
させていく。

「！クッ：！！」

数値を高めに設定したため、多少の反動が返ってくるも
ユーノはすぐに振り払い別の敵へと向かっていく。

『ユーノ！こちらバレル！突入口を発見した！』

『今、フェイトさんとベルクトが先行してしてるわ！』

と、その時バレルとフェイから通信が入る。それを聞いてユーノが
側にいる2人の方に振り向く。

「なのは！ヴィータ！！」

「うん：はやてちゃん！！」

ヴィータが真剣な表情で頷いて答え、その側でなのはがはやてに通
信を入れる。

『思ったより早く見つかったな：これは好都合や：！3人も中の方
をお願いや！！』

「「了解！！」」

モニタに映るはやてに対して3人が同時に答える。

「ユーノ君！」

「ああ：行こう！！」

なのはに対しにユーノが強い口調で返し、そして3人は突入ポイン
トへと向かっていった。

＊

戦艦はこぶねブラッドルーム、本来の史実では玉座の間と呼ばれるはずだったその部屋に

ドゥーエとクアットロの2人が楽しげな笑いを浮かべて佇んでいた。2人の間には大量のコードで繋がれたポッドが置いてありその中身は聖王の血：つまりヴィヴィオの血液で満たされていた。

「素晴らしいものね：こんな液体1つを支えにこれだけの巨大艦が空を舞えるなんて：」

「そりゃそうですよドゥーエ姉様がいない間にドクター達が物凄く頑張ったんですからあ」

ポッドを見つめてウツトリした口調で言うドゥーエにクアットロはいつもの甘ったるい口調で答える。

それを聞いた後にドゥーエがモニターをいくつか展開し、戦闘の光景を眺める。

「外でも管理局の連中が頑張ってるみたいだけど：所詮は無駄な足掻きね：」

「ですよねドゥーエ姉様く何にも出来ない無力な命なんて虫ケラと同じですからね」

「：ちゃんと私の教育は覚えてるみたいねクアットロ」

クアットロの言葉を聞いてドゥーエが満足げな口調で言う。

「いくら殺しても勝手に生まれてくる命なんて：守ってやるだけ時間の無駄なのよ：」

だったら籠の中にでも閉じ込めて、もがき苦しむのを眺めるのを楽しむ：それが一番有効な扱い方：」

「んふふ♪でもドゥーエ姉様にも特別はいるんですよ〜」

その言葉にドゥーエは一瞬ピクリと反応するも、冷静な口調を崩さずに答える。

「：あの2人は虫ケラじゃないもの：寧ろ真に特別な存在を虫ケラ扱いした

世界こそが虫ケラ：そんな風に思ってしまうわね：」

「変わりましたよね〜ドゥーエ姉様も：」

「人の命なんて価値があるか無いかだけよ：あの2人は価値があり地上の連中には無い

それだけの簡単な事よクアットロ：」

そう言ってドゥーエはクアットロの方に歩み寄って更に言った。

「いずれにせよ私達はここにやってくる虫ケラを迎え撃てばいいだけ：いいわね？」

「当然ですよ：私も久しぶりに興奮してるんです：

尊敬するドゥーエ姉様と一緒に戦えるなんて：」

先ほどまでのものとは違う、どこか尊敬の念のこもった口調でクアットロは言った。

*

はこぶねの外周の別ポイント、ガロード、ゲイナー、レントンそしてシンシアとアネモネの計5人が大量のコーリアンと対峙していた。

「またコイツらと戦う事になるとはね…」

固い表情で呟きつつ、ゲイナーは手にしたチェーンガンを構える。

「…エウレカ、俺…また君の同族と戦うことになる…」

その隣でレントンがポツリポツリと呟きつつ、てに1つの巨大な砲を出現させる。

「だけど…君と世界を守る為なら…俺は何度だって罪を背負ってやる…!!」

強い口調でレントンは言い放ち、デバイス改造の際に組み込んだ大型ライフルから閃光を放ってコーリアンの何体かを消滅させる。それを合図にするように他の4人もそれぞれ武器を構えて応戦していく。

「一辺に叩き落とす…!!!!」

ガロードがそう呟き、レントンと同様に改造されたデバイスのDXの機能を発動する。

すると、背部のツインサテライトキャノンが消滅し、代わりに横長の盾が出現する。

ガロードを手にして前に構え、盾を展開して中の砲門に光を収束させる。

「ディバイダーのビームならっ!!」

盾—ディバイダーから何条もの光が放たれ、コーリアンを撃墜する。

サテライトキャノンのチャージ力の長さの欠点を克服する為に威力は劣るものの、即効性のある武器を求めた結果生まれたものである。

それと同時にゲイナー、シンシア、アネモネの3人がコーラリアンの大群の中心へと突撃していく。

それを見たコーラリアン達が3人に向けて一斉に攻撃を開始する。ゲイナーは放たれる攻撃をフワリフワリとした軌道の飛行で回避していく。

「キングゲイナー!!!フルパワーだ!」

そして攻撃を掻い潜りながらチェーングンを振り回しオーバースキルを発動、辺りに白い粒子の様な物が舞い散り。コーラリアンの何体かが凍結していく。

「ナイスだよゲイナー!」

シンシアが楽しげに言いながら横へ一回転し背部に日輪のようなパーツを出現させて両腕を広げる。

その傍らでアネモネも両肩の砲台を展開する。

「それそれえええ!!!」

「ええいっ!!!」

シンシアがその場で高速回転をすると、赤い弾丸一辺りに分離したドミネーターのパーツが

全方向に無差別に飛び交う。その隣でアネモネがホーミングレーザーを放出する。

2人の同時攻撃によってコーラリアンの大半が消滅していく。

「...フォトンマット!!!」

そして凍結の及ばなかった残ったコーラリアンを

ゲイナーがフォトンマットリングを全方向に放って落としていく。

一所敵を打落とし終わった後、シンシアがやや不満げに呟く。

「ふう…多人数戦も悪くないけど…やっぱり少し退屈だね」

「油断するんじゃないわよ…敵はまだ残ってんだから…」

それに対しアネモネが少しイラついた感じでシンシアに言い放つ。
すると、ゲイナーが皆の方を向いて大声で言う。

「はやてさんから通信だ！進入口が見つかったらしい！」

「マジか！ならとっと中に入ってぶっ潰さねーと…！」

それを聞いてガロードが興奮気味した様子で口を開く。

「……………」

その時、5人に向かって大量のレーザーが向かってくる。

5人はそれぞれ各々の方向へと飛んで回避を試みるが

「追尾式!？」

ゲイナーが驚いたように言う。そのレーザーはかなり高度なホーミング能力を持っていた。

「これって…まさか…!!！」

ボードに乗って器用に空中回転を繰り返してそれらを回避したアネモネは

その攻撃に何か思う事があったのか、困惑した感じに呟く。

「流石っス！あれを回避するとは！」

辺りに声が響く、すると5人の前に黒いボードに乗ったウェンディと彼女の周囲を囲むように飛行する6機の形状の変わったガジェットが現れる。

「ウェンディ…！」

「久しぶりっス、アネモネ!!それとシンシアも!」

困惑を浮かべたまま相手の名前を呼ぶアネモネとは対照的にウエンディは普段の元氣一杯な態度を崩す事無く答える。

「あれってガジェットドローン…だよな?」

「形状が違う…新型か?」

ガロードとゲイナーがウエンディの周りにいるガジェットを見て眩く。

それはウエンディが乗るのと同じようなボード型のパーツに人の上半身をそのまま取り付けたといった感じの奇妙な形状をしていた。

「アンタらがアネモネやシンシアの話してた奴らっスね」

ウエンディがガロード達3人の方を見ながら言い、指をパチンと鳴らす。

それと同時にウエンディの傍らに突如としてもう一機の敵が現れる。

「あれは……!!」

その敵の姿を見たレントンが驚いたように言う。

ウエンディの隣に出現した敵…特異な形の銀色のボディに禍々しさを秘めた紅いカメラアイ…

そう、ゲッコーステイトリーダーであり自分の人生を大きく変えた人物の1人

ホランド・ノヴァクが駆っていたLFOーデビルフィッシュそのものだったからだ。

「……………」

出現したデビルフィッシュはカメラアイを不気味に蠢かし

定めた標的に向かって両腕のブレードを展開して突っ込んでいく。

「!!!!!!」

突っ込んできたデビルフィッシュに対し、咄嗟にナイフを構えてレントンは応戦する。

デビルフィッシュはすぐさまレントンの頭上を飛び越えるように一回転し

背後から再びブレードを振るう。

「危ねえ!!!」

それを見たガロードがその間に割って入り、盾を構えて敵の攻撃を防ぐ。

「ごめんガロード!!!」

「心配すんな……けど、まさかこんなもんで出してくるとはよ……!」

レントンの言葉に対し、得意ながらも内心少し焦りながらガロードが答える。

「敵は一匹だけじゃないっスよ」

背後でウェンディが呟き、小さく飛び上がってボードを半回転させる。

そしてボードの背部についていたコーンに光を収束させていく。

「しまった!」

「バスクードクライシス!!!」

気づいた2人が慌てて振り向くも、その瞬間にウェンディの乗るボードから

紅い閃光が一直線に2人に向かって発射される。

「!……やらせないわっ!!!」

その前にアネモネが瞬時にその間に入って、自身の胸部装甲について白いコーンに光を溜め

紅い閃光を放ってウェンディの物と激突させる。

2つの閃光は少しの間闘ぎあった後に爆発を起こす。

「反応がメツチャ早いっスね」流石はアネモネっス!

攻撃を防がれたのにウェンディは子供のように無邪気にはしゃぐ。

「……レントン?」

「な、何アネモネ?」

ウェンディの方を向いたまま、アネモネは背後にいるレントンに話しかける。

「そっちの銀色のやつ……アンタ1人で潰せる?」

「デビルフィッシュを？けど…」

「所詮見てくれよ…中身がアイツと同じってわけじゃないわ！

どの道ここで5人全員が戦ってたら時間がかかりすぎる…」

アネモネは自分の考えを伝える。それを聞いてシンシアが不満げに口を開く。

「ちよつとちよつと！せつかく大物が来たのにアンタとレントンで独占する気？」

「悪いけどシンシア、アタシはちよつとアイツと話があんのよ…

それに、LFOの相手は型が同じアタシとレントンの方がやりやすいわ」

シンシアの不満をアネモネは聞き入れる事無く切り捨てる。

すると、今度はガロードが前に出て言う。

「お前ら2人で任せていいんだな…？」

「ええ…アタシらが抑えてる間にアンタらがとつと中を潰してこいってことよ！」

どこか決意めいた感じを漂わせながらアネモネが力強く答える。

「ちよつと待ってって…何か俺の意思無視して勝手に決めてない…？」

「気にしない方がいいかもだね…それにアネモネの話にも一理あるし…」

トントン拍子で進行する話についていけず、また目の前に敵がいるというのに

レントンとゲイナーがその場の空気にそぐわないポカンとした様子で話し合う。

その間空気を読んでいるのか、ウェンディは一切の攻撃をしていなかったが

「…お話は終わったっスか？」

「ええそうよ…派手に潰してやるわよ！！！」

「望むところっス！！！」

ウェンディの言葉に答えるようにアネモネが突っ込んでいき、ウェ

ンディがそれに応戦する。

同時にデビルフィッシュもレントンへの攻撃を再開する。

「うう…仕方ないけどアネモネの言うとおりに！」

幸いコイツは俺を狙ってるから引きつけてる間に早く！！」

デビルフィッシュを引き離すように遠くへと飛んでいきながらレントンが叫ぶ。

それを追ってデビルフィッシュも飛行していく。

「わかった！2人とも頼んだぞ！！」

「よし行こう！！」

2人の（というよりアネモネ1人の？）決意を無駄にしない為にガロードとゲイナーの2人ははこぶねへと向かって飛んでいく。

「ちよっとお！何でもみなでそんな勝手に話を進めんのよ！」

シンシアは未だに不満タラタラといった感じながらも、ガロードとゲイナーの後に続いていった。

*

戦艦はこぶね内部通路、先行していたフェイトとベルクトは通路内に配置されているガジェットの大群を相手に戦っていた。

「スプリットガイドキャノン！」

ファントムモードの状態でベルクトが自身の周辺に魔力弾を数発形成し

敵の大軍に向かってそれらを放って牽制する。

「はあっ！！」

その隙を突いてフェイトがザンバーフォームのバルディッシュを大きく上に掲げ

横に大きく振るってガジェット達をまとめて斬り払っていく。

その間を掻い潜って、ベルクトが左手腕のサーベルを構えて

高速移動と急停止を繰り返しつつ、残った敵を1体ずつ着実に潰していく。

（スピードと：魔力弾の発射速度も上昇しているな：流石はバルクホルツといったところか：）

戦闘での動きやすさから、デバイスの能力向上をまじまじと感じ。ベルクトは感心したように心内で呟く。

「ベルクト大丈夫：無茶してない？」

敵を片付けた後、ベルクトの方に振り向きながらフェイトが呟く。

「これくらいで弱音を上げていたらヤツと遭遇した時にどうにもならん：」

それに対してベルクトは余裕の笑みを浮かべてフェイトに答える。それを見てフェイトも安心した感じに微笑みを浮かべる。

『突入部隊の皆さん、聞こえますか？』

その時、バルクホルツからの通信が入り、モニターが表示される。

『はこぶね内部の詳細構造が判明しました：よく聞いてください』
映し出されるモニターをベルクトとフェイトが真剣な表情で覗き込む。

映し出されたのは何層にも渡るはこぶねの内部地図と、所々で点滅する赤い点であった。

「この点は：？」

『構造上非常に厄介な事になってしましてね：その点が示すのはE2の点在位置です』

モニターを見ながら疑問を浮かべたフェイトに答えるかのようにバルクホルツが呟く。

『エネルギーの供給源となっているE2全てと最深部にあるメイン駆動炉：』

それに加えて動力源といえる聖王の血があるとされる部屋：

更には駆動炉近くにある敵の兵力の制御室に最上階の総司令室：

それら全てを潰していかなければ敵を完全に止めたとは言えないでしょう：』

少し苦々しげな口調になってバルクホルツは説明を続けていく。

『皆さんはその地図と現在位置を参照にして、一番近い所から潰していくってください：』

それを聞いた後、ベルクトはモニターに映る地図を見て自分達から近い重要ポイントを探す。

「俺達が近いのは：最上階の総司令室か：それにこれは：」

総司令室の隣にあるE2点在ポイントだけ、他のより強い輝きを放っていた。

「ひょっとしてここに：」

「恐らくな：多分ここにBBがいるのだろう：奴もそれをわかってエネルギー垂れ流している：」

総司令室近くのE2ポイントを見つめながらフェイトが呟き

それに対して真剣な口調でベルクトが返した後、先へと進もうとする。

「ベルクト……」

「心配するな…寧ろ好都合だろう…俺が奴を引きつければ被害は少なくて済む…」

「そんな…!」

ベルクトの物言いにフェイトはたまらず震える声を発する。

「お前の気持ちはわかっている…だが奴との決着俺がつけねばならん…だから…」

「………?」

「それまで…俺の側を離れるな」

「!?!…うん!」

背を見せたまま言い放つベルクトの言葉を聞いて、フェイトは安心感を取り戻す。

ベルクトもフェイトの反応を確認して僅かに笑みを浮かべ、そしてすぐに気を引き締める。

「行くぞ…!」

「うん…!」

そして2人は互いに並びながら一直線に総司令室へ向かっていった。

＊

「うおおおお!!」

ヴィータはギガントフォームのアイゼンを振り上げ目の前に形成した巨大な魔力球をアイゼンによって打ち出す。打ち出された魔力球がガジェットの大群に激突して爆発を巻き起す。

「はあ…はあ…」

地上に降り立った後、ヴィータは肩を震わせながら荒く呼吸する。

「ヴィータちゃん…あんまり飛ばしすぎると…」

「そうだよ…敵はまだたくさんいるんだ…」

なのはとユーノの2人が心配そうにヴィータに声をかけるが

「うるせえよ…センターや後衛の魔力温存も…前衛の仕事なんだよ…」

ヴィータはそれに構うことなく荒い呼吸を続けたまま前へと進んでいく。

心配そうな表情を浮かべたまま、後ろの2人もそれへ続く。

「ここだな…」

立ち止まったヴィータの呟く目の前には、巨大なアルファベットのDが刻まれた扉であった。

「ここにE2の1つがあるとなると…」

「敵がいるのは間違いない…って事だね」

なのはの言葉に続くようにユーノが固い表情で呟く。すると、ヴィータが前に出ながら2人に対して言う。

「ここはあたしが潰しとく…お前らは先に行け」

「ヴィータちゃん!？」

予想外のヴィータの言葉になのはが驚いて声を上げる。

「ここだけ潰してもこの艦が止まるわけじゃねえ：他にも潰す場所はいっぱいあるんだ：」

なら：こんな所でこっちの戦力を割きすぎたら意味が無え：」

「けどヴィータ：ここまで大分飛ばしてきてるし：」

なのはと同様にユーノがヴィータの身を案ずる。

しかし、ヴィータは疲労を感じさせない様に無理に笑顔を浮かべて答える。

「だからこそここはあたしが潰すんだ：お前らはさっさと先へ進んで他の場所を頼む」

「でも：！」

「心配すんな。一瞬で終わらせてすぐにお前らの方に戻ってくるさ」得意げな表情を浮かべたままヴィータはアイゼンを構えて答える。

なのはは涙がこぼれそうになるが、それをこらえてヴィータに言う。

「気をつけて：絶対すぐに合流だよ！！」

「ったりめーだ！」

なのははヴィータと別れて先へと進む、それにユーノが続いていく。うとしたが。

「ちよっと待てユーノ」

ヴィータがそれを引き止める。それを聞いてユーノは後ろに振り向く。

「どうしたのヴィータ：」

「お前：なのはの事は大切なんだよな？」

「えっ：？それは：当たり前じゃないか！」

さも当然といった感じにユーノは強い口調で答える。

ヴィータはそんなユーノに真剣な表情を向けて続ける。

「：あたしだって8年前はすっげえ後悔してるんだ：なのはの事守ってやれなかったって：」

あたしもお前と同じだ：なのはの事を守ってやりてえ：」

「ヴィータ：」

「だからこそあたしはここを1人で潰しとく…だからユーノ…なのはの事…絶対に落とさせんなよ！」

「……ああ……！」

ヴィータの思いを告げられ、ユーノもまた真剣な態度でそれに応じる。

それを見たヴィータは満足げに笑って、扉の奥へと消えていった。

＊

先へと進むなのはにユーノがやや遅れて合流する。

「ユーノ君、何かあったの？」

「大丈夫…何にも無いよ」

遅れてきた事に疑問を浮かべたのはが尋ねるが、ユーノは笑って答える。

すると、2人の突き進む通路の先から大量のガジェット？型が姿を現す。

「これだけの数がまだ…！」

「一つ一つ潰している時間は無い…ユーノ君！」

「わかってる…！」

なのはの言葉に答えてユーノはコスモスターにカードを挿入する。

なのはもレイジングハートを前に構えて魔力を集中していく。

「「デイベインバスター!!!」」

2人のデバイスからそれぞれ桃色、黄緑色の巨大な閃光が放たれ出現したガジェットの大群は瞬時に消滅していった。

＊

総司令室、モニターの1つからディエチからの通信が入る。

『ダメだセイス! 2人とも無茶苦茶だ! 手がつけられない!!』

「ノープロブレムよノープロブレム♪ガジェット如きで潰せるなんて

最初から思っ^{はな}てないしね」

慌てふためくディエチの通信を余裕の表情でセイスは受け答え、現状の確認を行う。

「件の2人はブラッドルーム：クアちゃんとドゥーさんが応戦する事になるわね」

外ではウェンちゃんがモネちゃんともう1人と戦闘中：残りはそれぞれBルームと

兵装制御室と：パパの実験室か：オリジナルとベル君は都合よくこっちに向かっているみたいだしね：おっ？」

そしてモニターの1つに目が止まって興味深げにこう言った。
「あのチビ騎士はDルーム：ワオ！マルさんの担当してる部屋じゃない」
くししし…これは見ものだわ…あのチビ騎士にはえげつない展開になるかもね…」

＊

Dルーム、ガランとしたその部屋でヴィータはE2を探し回る。

「むっふふ…まさか私の部屋にお客さんとは…」

「！！……テメエは…」

すると、ヴィータの前にオレンジの奇妙なバリアジャケットを纏ったカシマルが姿を現す。

その姿を確認してヴィータは表情を引き締める。

「フェイト達がやり合った…情けねえキシヨ面のオッサンだな」

「その通り…って何ですか物言いは！！？」

あんまりなヴィータの言葉にカシマルは我を失いかけて怒鳴り散らす。

「まあ…いいでしょう…さてさて…ほうほう…これは…」

程なくしてカシマルは冷静さを取り戻し、右目のレンズを光らせてヴィータを観察しながら興味深げに呟く。

「成る程成る程…これは面白そうですねえ…あなたの弱々「ギガン トハンマー!!」おぐふっ!!」

が、突っ立ったままブツブツ呟くだけの隙だらけなカシマルにヴィータは容赦なくアイゼンの一撃をカシマルに叩き込む。

「グググ…人の話は最後まで聞くものですよ!!」

「敵を目の前にそんな隙だらけな方が悪いだろ…」

壁に叩きつけられたまま怒鳴るカシマルに、ヴィータは容赦なくピシャリと言い放つ。

「まあいいでしょう…グッ…どの道あなたはここでやられるのですから」

フラフラと立ち上がり、妖しげな笑みを浮かべてカシマルは呟く。

「うるせえ…さっさとE2の場所を教えろ!!」

「おお怖い怖い…そんな怖い子に情報なんて渡したくありませんねえ…」

「なら…無理矢理聞かせてもらうだけだ!!」

ヴィータが再びアイゼンをカシマルに振るう。カシマルは今度は後方に飛び上がって回避する。

「むふふ…血の気が多い事…報告どおりの性格ですねえ…」

「グタグタ言ってる暇なんてねえ…」

「確かにそうですねえ…しかし…」

イラついた感じに言うヴィータに対し、カシマルは終始妖しげな笑みを浮かべている。

そしてカシマルはいきなり右の人差し指でヴィータの方を指しながらこう言った。

「敵の前で隙だらけなのは…どっちなんですかねえ…?」

ザシュッ！！

何かが突き刺さるような音と共に、何も無い筈の空間でヴィータの腹部が貫通する。

「なっ……あっ……」

わけがわからないといった感じでポカンと口を開けたまま、ヴィータは背後に振り向く。

すると空間が微妙に歪んだかと思うと、腕の鋏でヴィータの腹部を突き刺している

クモのようなメカが姿を現した。

それを見てヴィータはある事を思い出していく。

その形状は8年前…突如としてなのはを襲撃してあの忌まわしい墜事故を起こしたあの…

「あ…ああっ…！…うわあああああ…！！！！」

何かに駆られるかのように、ヴィータはアイゼンを振り下ろしてそのクモ型メカを破壊する。

その爆発で大きく吹き飛ばされ、地面に倒れ付してしまう。

「げほっ！…ぐうっ…！」

腹部から血を流しながら、ひざをついてヴィータは吐血してしまう。

「ぐひひひひ…げひゃひゃひゃひゃひゃ…！！これは傑作ですねえ！！」

まさかあなたの弱点がコイツだったとは偶然の一致ですよ!!!」
その様子を少し離れた位置で見ていたカシマルが狂ったように笑いながら叫ぶ。

「あの時……なのはを落とした……」

苦しげに腹部を押さえながら震える声でヴィータが呟く。

「おやおや？ そんな個人的な事情は私はわかりませんが：

あなたを突き刺したのは元からこの部屋に配備されていたガジェット？ 型……

何があったかは知りませんがどうもそいつがお嫌いなようですねぇ……」

そう言ってカシマルが右目のレンズから光を発する。

それと同時に新たなガジェット？ 型が次々に姿を現す。

「そしてこれが私の能力：我がデバイスリオンネッターの能力『恐怖具現化』……

敵の最も苦手とするものを具現化して戦力とする……

この部屋に元々配備されているものと……私が無限に生み出すもの……それらを全てをあなたが破壊できますかねえ!？」

勝ち誇ったようにカシマルは大声で言い放つ。

しかしヴィータはそれに少しも屈することなく、落としたアイゼンを拾ってヨロヨロと立ち上がる。

「うるせえよ……あの時なのはを落とした奴らだってんなら……何機だろうと……

あたしが全部まとめて……ぶっ壊してやらああああ!!!」

「やれるもんなら……! やってみなさいいいやあああ!!!」

鬼のような形相で突撃してくるヴィータに対し

カシマルも酷く歪んだ表情で叫び、更に数十機のガジェットを出現させるのであった。

第28話（前書き）

※一言で言いますと今回の話…
どうしてこんなに黒くなった…O r Z

第28話

総司令室、モニターに映る血だらけのヴィータを眺めながらセデイスは普段の特徴的な笑いを浮かべる。

「くしししし：やっぱり予想通りの展開になったね：」

あのチビ騎士はご愁傷様ってやつね：にしてみてもいいなあマルさん：私も前線に出向いていっぱいイジメてやりたいのにな：」

次いでヴィータの側でヒステリックな高笑いを上げるカシマルを見てセデイスはぶすーとした表情で不満げに呟く。

自分の全てである父親のバルドナから総司令室の担当を任せられているとはいえ

戦闘の間ずっとバックに待機しているというのに、少し退屈してきていたのだ。

「失礼します、セデイス様」

すると、セデイス以外誰もいなかった総司令室にある1人の人物が入ってくる。

「やっぱ今の内にクアちゃんの所行ってあの2人を：って誰よこんな時に：：えっ：？」

セデイスは不満げな表情のままクルリと後ろに振り返りそしてその人物の姿を確認して意外そうな表情へと変わる。

「あなたって：：ひよっとしてレイちゃん？」

「はい、レイグでございます、セデイス様」

少し悩んだ後にセデイスは目の前にいる自分の半分ほどの背丈の少年に尋ね

それに対し少年ーレイグは感情を全く感じさせない機械的な口調で答える。

「うっそー！？何でレイちゃんがここにいるのよ？」

私とビーちゃん以外のシリーズはアジトごと吹っ飛んだ筈なのに」

目の前の相手が本来はもう亡くなって：いや、淘汰された筈の人物であるので

当然のように驚きを浮かべてセデイスは言う。

「今回の作戦においてバルドナ様が即席戦力として廃棄場にいたZ Bシリーズから

『たまたま』僕が回収され突貫で修復された次第でございます。

何分かなりお急ぎだったようなのでセデイス様への報告が遅れたとの事です」

「そういうこと：パパもあわてんぼさんなんだから：」

まるで録音された音声そのまま再生してるかのような

生気を感じさせないレイグの答えを聞いて、

セデイスは納得したようにうんうんと頷く。

「でもたまたまとはいえ：せっかくパパの気まぐれで蘇ったのにレイちゃんは相変わらずだよね？私はお姉ちゃんなんだからもっとフレンドリーに話したっていいじゃない？」

「いいえ違います、僕はセデイス様やB B様のようなバルドナ様に認められた『道具』ではありません

僕はセデイス様のノウハウを活かし、B B様を完成させる過程で作られただけの

云わば『ゴミ』と同じ存在なのです。セデイス様を姉と呼ぶなどそのような恐れ多い事は僕のような『ゴミ』には許されません」

「：そんなに長ったらしい事ペラペラ喋って疲れないのレイちゃん？」

「僕はセデイス様とは違います。僕は偶然修理されただけの『ゴミ』ですから」

常人が聞けば明らかにおかしいと言える筈のレイグの言葉は全く気にせず

セデイスはレイグがスラスラと高速で喋る事にツツコミを入れる。それに対してもレイグは表情や口調を全く変えることなく淡々と返

答する。

「けど：レイちゃんが協力してくれるってんなら：くししし：オリジナルもチビ騎士と同じ様にイジメる事が出来るかもね：」ふと、急にセデイスはレイグとの会話を止め、唐突に何かを思いつて妖しげに笑う。

その後レイグの方に向き直っていつもの軽い口調でこう言った。

「そんじゃまあ：私としては予想外だったけどこれは寧ろ好都合だね」

レイちゃん早速だけどちよっとお姉ちゃんと一緒にいてきてくれる？」

「拒否権などありません。僕はバルドナ様、BB様、セデイス様の御三方の命には

何時如何なる時でも従うように造りだされたのですから」

「くししし：なら話は早いね：じゃ、行こっか♪」

「了解ですセデイス様」

にこやかに笑みを浮かべてセデイスはレイグの右手を取る。

「マスター権限発動！転送移動開始ッ！」

セデイスとレイグの足下に黄色い魔法陣が展開し、2人の姿は総司令室から消滅した。

*

ガジェットに跨って空を舞うルーテシアを、フリードに乗ったキャラが追う。

「何の為に戦ってるのか、それだけでも教えて！」

キャラはルーテシアに対して必死に訴える。先程からキャラはルーテシアに対し

攻撃する事よりも話をする事に専念していた。

「でないと…僕たちは君達を本当に…！」

近くのビルの屋上でガリューと応戦しているエリオもまた同様であった。

エリオはガリューのスピアをストラーダで受け止めながら口を開く。

「本当に…どうするっていうの…？」

しかし当のルーテシア本人はまともに話し合う気は無かった。

攻撃の手を緩めているキャラに対して容赦なく召喚蟲による攻撃を行う。

「ウイングシュート！！」

それを見たキャラは右手のケリュケイオンから数発の魔力弾を放って応戦する。

その後2人は互いに防壁を展開して相手の攻撃を防御し、その場に爆発が巻き起こる。

そして2人はそのまま近くのビルの屋上へと降り立つ。

「私が戦う理由…あなた達がシヤアの邪魔をするから…シヤアを傷つけたから

だから私はあなた達を殺す為に戦う…シヤアの為に…

それが私の幸せだから…それ以上の理由なんて…無い…！！」

ビルの屋上で真正面から相対し、ルーテシアはキャラの事をキツと睨み付けながら答える。

「そんな…！そんな事の為に…」

答えを聞いた悲痛な面持ちで言葉を発するが

「そんな事……!!」

自分の戦う理由をそんな事の一言で片付けられたルーテシアは怒りほとんど反射的にキャロに向かって召喚蟲を発射する。

「ううっ！」

キャロは咄嗟に防壁を張ってそれを防ぐも、爆発に巻き込まれて小さな悲鳴を上げる。

「……あなたにとってはそんな事でも……私にとっては何よりも……どんな事よりも大切な事……！」

顔に怒りの感情を浮かべたままルーテシアは重みのある強い言葉でキャロに言い放つ。

自分の戦う目的を貶されるのは、シアも一緒に貶されていると感じてしまい

それはルーテシアにとってはどんな事よりも許せない事だった。

「違うよ……！ 私達の事が憎いのは構わない……！ けどこんな……！」

「……私には誰もいなかった……私は少し前までカラッポだった……」

でも……シアがそれを変えてくれた……私に力と心をくれた……だから私は幸せになれた……

シアは私を幸せにしてくれる……そしてシアの幸せは私が幸せである事……

この戦いが終わったら……私達はドクター達とは無関係になる……自由の身になれる……

そうなった上で……シアがもっと幸せな世界を作ってくれる……

そうすれば私は……もう二度と不幸じゃなくなる……シアとお母さん……3人で幸せになれる……」

「違う……それ違うよ……！」

「……うるさいっ……！」

ルーテシアの言葉を必死になってキャロは否定しようとする。

そんなキャロに対しルーテシアは耐え切れなくなり、声を荒げて叫ぶ。

次の瞬間、キャロの背後にガリユーが現れ彼女に襲い掛かる。

「でやあああ!!」

それに気づいたエリオが上空から急降下し、ガリユーをストライダーで弾き飛ばす。

「……………!!」

後方に吹き飛ばされたガリユーは咄嗟に踏み止まり、目の前に黒炎を形成して爆発を起こす。

爆煙が晴れると、体中が煤塗れになったエリオとキャロが姿を現す。そんな2人を挟み込むようにしてルーテシアとガリユーは立っている。

「違うんだよ…! 幸せになりたいなら…人を傷つけたり不幸にしたりしちゃダメだよ…!」

そんな事をしたら…欲しい物も幸せも…何も見つからなくなっちゃうよ…!」

一方的に攻撃されている形だというのに、それでもキャロはルーテシアに訴え続ける。

ルーテシアはキャロの訴えを聞いて、突然目を閉じて意識を集中し始める。

「私、アルザスの龍召喚士、管理局機動六課の魔導師、キャロ・ル・ルシエ!」

「同じくエリオ・モンディアルと、飛竜フリードリヒ!」

エリオとキャロが立ち上がって己の名を名乗り、それに応えてフリ

ードが一声大きく鳴く。

「話を聞かせて！あなたの事を幸せにする手伝いなら：私達だってきつと出来る筈だから！」

「こんな事をしなくても他にやり方はたくさんある！こんな場所で争う必要なんて本当は無いはずなんだ！」

目を固く閉じ、沈黙を続けるルーテシアに2人は訴える。

「……………どうしてあなた達は：そうなの：？」

すると、黙っていたルーテシアが目を開けて顔を上げ、

そして先程までの怒りの表情とは違うどこか物悲しげな表情で2人に尋ねる。

「あなた達だって同じ：私と同じように大人の人の都合で振り回されて：

研究材料にされたり：自分の住んでる里を追い出されたり：いっばい悲しい思いをしてきた」

「！！！！！！！」

いきなり自分達の過去に触れるような事を言われて2人は驚きを浮かべる。

目の前の少女ルーテシアに、自分達の過去の事などまだ一言も話していないというのに

どうして知っているのかという気持ちになっていた。

2人にはルーテシアがシアとの出会いによって覚醒した能力：

それによって先程の沈黙の間に2人の心を読み取っていた事など知る余地も無い。

「でも：あなた達も不幸じゃなくなった：優しい人に助け出されて……………」

その人に恩返しがしたいから：管理局の魔導師になって戦っている……………」

2人の表情の変化などお構い無しにルーテシアは言葉を紡いでいき、そして2人にこう尋ねる。

「大切な人の為に戦う：それは私もあなた達も同じ筈：どこに違い

があるの…？」

「ッ…！それは…！」

核心を突くようなルーテシアの物言いに思わずエリオはたじろいでしまう。

「……………シアア…」

が、考える暇も無く、ルーテシアが唐突に一言呟いたのとはほぼ同時に2人の周りに突如として赤いユニットが2、3機出現する。

ユニットに光が収束していき、2人に対して砲撃を行おうとする。

「やらせるかっ…！」

しかし発射の直前に別方向からピンク色の閃光が飛来し

2人の周りに浮かんでいたユニットを撃墜する。その後、2人の側にアムロが降り立つ。

バリアジャケットの所々に傷や汚れが目立ち、背部のフィンファンネルも二機失われている。

「アムロさん！」

「…下手に話を聞こうとするな…！アイツはシアアに心を囚われている…！」

まともに相手をする自分も飲み込まれるぞ…！」

心配そうに声をかけてくるキャロに対し、厳しい表情でアムロが言う。

「シアア……………大丈夫…？」

「……………」

そしてルーテシアの側にシアアも降り立つ。シアアもまた傷や汚れが目立ち

先程撃墜されたのと加え、ファンネルの半分が既に消失していた。

心配そうに自分の事を見上げるルーテシアに対し、シャアは何も答えない。

「…シャア！これが貴様の望んだ事だというのかッ！」

そして沈黙を保つシャアに対し、アムロが言葉を投げかける。

「こうやって大勢の關係ない人間を巻き込み…挙げ句またその娘のようなニュータイプを

戦う為のマシンの様に扱って…そうまでしてお前は自分の野望に縋り付くのか!？」

「…違うな…ルーテシアはマシンなどでは無い。この娘は自分で望んで

自分で選んで私の為に戦っている」

感情を高ぶらせるアムロとは対照的に、冷静な口調でシャアは答える。

「寧ろ…そうやってその子達のような年端も行かない子供達を…

管理局という組織が当然のように戦場に送り出している方が…私には問題に見えるがな!!」

言葉の途中で突然サーベルを振り上げてアムロに突撃する。

咄嗟にアムロは飛び上がって回避し、ダミーバルーンをシャアに向けて射出する。

「戯言を!!自分のやっている事を棚に上げて!!」

「時空管理局という組織が何をしてきた!?!ルーテシアやその2人のような子供達を

何の躊躇いも無く自分達の益の為に道具のように扱う…そんなノミしかない組織に

力をいのように使われている貴様には…何も言われる筋合いは無い!!!」

ダミーバルーンの爆発を振り払い、魔法陣を展開して魔力弾を大量に撃ち込む。

アムロはシールドを前に構えてそれを防ぎ後方へと下がって距離を取る。

シャアは再び距離を縮めようとサーベルを構えて突進しようとするが「…ええいっ!」

何かの気配を感じて背後に振り向く。その先には自分に向けて火炎弾を発射するフリードがいた。

「フリード!!」

上に跨るキャロの声でフリードは火炎弾を発射する。シャアはそれを難なく盾で防御し

忌々しげな表情を浮かべてキャロに標的を変える。

「何も知らない子供がッ!!」

右手に構えたライフルから閃光が放たれ、キャロとフリードに向かって一直線に飛んでいく。

キャロは防壁を構えてそれを防ごうとするが

「ううっ……きゃあああ!!」

その衝撃に耐え切れずにフリードと共に下へと落下していく。

落下していくキャロとフリードにシャアは容赦ない追撃を加えようとするが。

「シャア!!」

咄嗟にシャアの前にアムロが立ちふさがりそれを防ぐ。

「自分で言っておきながら子供相手にムキになって!!」

「ハッ! 戦場で敵対者の選別をしようとはナンセンスだなアムロ!」
シャアが笑いを浮かべてサーベルを高く振り上げ、それを振り下ろす。

咄嗟にアムロはバックステップでかわそうとするも、

シャアのサーベルが自身の右腿の辺りを掠めていき、少量の血が舞う。

しかし、それを好機と見たアムロは自分もサーベルをシャアに向けて突き出す。

攻撃の直後で隙が出来ていたシャアは回避動作が遅れ、アムロのサーベルが左肩を掠めていく。

「世界を変えるためなら…スカリエッティの様な奴とも手を組むか

！！

情けない奴め！！ジオン・ズム・ダイクンの息子も落ちたもんだな！！」

「今更ジオンの名など関係あるまい！私はシャア・アズナブル！！今はルーテシアを幸せにする為に生きているだけだ！」

今度は同時にサーベルが振られ、互いのサーベルがぶつかり合って火花が散る。

しばらくの間至近距離でサーベルを交わらせたまま2人は拮抗していたが

「ぐうっ！！」

突如としてアムロは腹部に激痛を感じて一旦後方へと下がる。

よく見るとシャアの腹部の辺りに赤い魔法陣が浮かんでおり

そこに小型のサーベルを握ったもう一本の機械の腕が生えてきていた。

「それでも：貴様がこの世界をどうこうする権限など無い：！！！この世界にだって大勢の人間が生きている：それを貴様のエゴ1つで全て滅ぼすのが正しい事だともいうのか！！」

「前にも言っただろう！！ルーテシアのようなニュータイプを：

何の罪も無い子供を利用するような組織が平然と正義面している方がおかしいのだ！！

それに騙され考える事すらしない：多くの管理世界を虐げてきている現状を知らないミッドの人間達も：地球のノミどもと何も変わらん！！」

血が流れる腹部を押さえながら、アムロは後方に下がりながらライフルを連射する。

それをシャアが追っていく形になり、2人はビル谷間へと入っていく。

シャアから逃れるようにしてアムロはビルの影へと入っていく。

「この私に：二度も同じ手が：！」

憤慨したようにシャアはアムロの消えた物影へと進んでいく。

そしてそこに置いてあったバズーカを難なくライフルの魔力弾で破壊する。

「…通用すると思ったか!!」

上空から気配を感じてシヤアは猛スピードで飛び上がる。

直後に予想通りにビルの上から物影が現れる。それに向かってシヤアはライフルから魔力弾を放つ。

「!!…これは!」

しかし魔力弾が当たったのはアムロではなく、彼のパーソナルマークが刻まれたシールドだった。

咄嗟にシヤアは立ち止まってアムロの気配を探り直す。

「…隙を見せたな!!」

「しまった…!」

アムロがやや離れた位置で改造したデバイスH iーVガンダムの新武装—

ハイパー・メガ・バズーカ・ランチャーに魔力を収束し、それを発射する。

放たれた巨大な閃光が一直線にシヤアに向かって飛んでいく。

姿を一度見逃し慌てていたシヤアは、アムロが構えていたそれに気づくのが遅れ

体の右1／3程がランチャーの閃光に巻き込まれてしまう。

「あぐうっ…!!」

激痛に耐え切れずにシヤアは苦しげな声を漏らし一旦またビルの屋上へと降り立つ。

アムロもシヤアを追ってそのビルの屋上へと降下する。

「本当に情けない奴め…!!…!! 結局お前はそうやって自分のエゴを押し通す事しか出来ないんだ!」

「何とでも言うがいい…! 後ろ盾が何も無いこの世界でなら…スカリエッティのような

愚劣な連中の力だろうと私にとっては必要になるのだ…彼らの所業も含めた人類の業…

その全てを誰かが背負わねば……この世界の人間は生まれ変わらん！魔法という上辺の力の恩恵だけに縋り付き……地球の連中と同じように心が腐っていくだけだ……！」

互いに息を荒げ、満身創痍の状態で再び押し問答を始めるアムロとシャア。

「気づかないのか……！確かに地球の人間もこの世界の人間も自分のエゴに囚われているかもしれない……！」

けどそれはお前も同じなんだシャア！貴様も『ニュータイプ』という存在のエゴに囚われているだけだ！

それにアクシズの決戦の死に際で貴様も見た筈だ！人の心の光を……！」

「……あのサイコフレームの共振の事か……！」

アクシズでの出来事を言われ、シャアは心に少し迷いが生じ始める。そんなシャアに対し、アムロは感情的な声で続ける。

「未来は俺やお前のような……ニュータイプという狭い枠組みの一握りの人間で作るものじゃない！その世界に住む1人1人の人間の手で少しずつ作っていかればいいものだ……！」

「グッ……だがそれを妨げるのが管理局なのだ……私はそれを……！」

「UCEと同じだ……！時空管理局の全てが腐っているわけではないだろう……！」

それこそはやて達機動六課のように……その内情を変えようとしている者は存在している……！」

俺は貴様ほど急ぎ過ぎもしなければ人類に絶望もしちゃいない……！」

「アムロ……だが私はもう止まれんのだ……！私にもルーテシアをここまで導いてきた……ッッ……！」

言っている途中でシャアは何か凄まじいプレッシャーを感じる。それはアムロも同様で、背筋にゾクリとするものを感じて後ろへと振り向く。

「シャアを……私の大切な人を……惑わす奴めッッ…………！」

アムロの背後に空戦ガジェットに乗ったルーテシアが姿を現す。

その周辺には紫色のテニスボール程の大きさの丸いユニットが彼女の周辺を埋め尽くさんばかりにいくつも浮かんでいる。

自身の新たなデバイス、ヒュギエイアの力で生み出したものであった。

（この少女……まさかファンネルを……！！）

その浮かんでいる物体がニュータイプ専用兵器の代名詞とも言える物の1つ

ファンネルである事を感じ取り、アムロは驚愕の表情を浮かべる。

「ヒュギエイア……！！」

ルーテシアが右手を前に翳しながら叫ぶ。彼女の周辺に膨大な量の魔力光が舞い

纏っていたヒュギエイアによる深緑色のローブ型のバリアジャケットが

魔力の放流で発生した強風によって激しく靡く。

それと同時にファンネルが一斉に稼動し、あっという間にアムロを取り囲んで攻撃を開始する。

「これだけの数のファンネルを……無茶だ……！！」

ルーテシアの放つファンネルを必死に掻い潜りながらアムロは叫ぶ。実際、ルーテシアから発せられているプレッシャーには

強化人間のそれとよく似た、暴走の兆候が感じられたからだ。

「地雷王……！！」

しかしルーテシアはそんな事もお構いなしに、ファンネルの操作と並行して

アスクレピオスを動かして召喚蟲に指示を出す。

アムロの背後に地雷王が一匹接近してきて、白い光を収束していく。

「アムロさん……！！」

しかし、その攻撃を離れた位置で察知していたキャロが

フリードに火炎弾を発射させて地雷王の攻撃対象を自分達へと逸らす。

「どうして……！……なんでよ……！邪魔しないで……！！シャアの邪魔

を……!!」

「……ルーちゃん……」

攻撃を邪魔されたルーテシアは、眉間に深い皺を寄せてキャロを睨み付ける。

そんな彼女の事をキャロは悲痛な面持ちで見つめている。

そしてヒュギエイアの力を作動し、更に新たなファンネルを10個程展開する。

「殺す…殺す…!!…シャアの邪魔をする奴…みんな…!!」

デバイスを2つ同時に操り、ファンネルと召喚蟲の同時操作を行う。そんなルーテシアの表情は凄まじいまでの怒りが刻み込まれており、両目は大きく見開かれ、周りの血管が浮き上がっていた。

「…シャア!! お前という奴はツツ!!」

その姿を見たアムロは激怒し、ルーテシアの事を呆然と立ちすくんで見つめていたシャアに突撃する。

アムロの怒りの声で我へと帰ったシャアは咄嗟に盾を出して応戦する。

「………何故だ………何故貴様は…何故私は……!!」

後方へと下がっていくシャアの顔には明らかな焦燥と迷いが浮かんでいた。

*

はこぶね内通路、総司令室へと向かってベルクトとフェイトは
辺りを警戒しながら慎重に先へと進んでいく。

「……！！……この感じ……」

「どうしたフェイト……」

すると、その途中でフェイトが突然立ち止まって何かの気配を感じ
取る。

それに疑問を浮かべたベルクトが声をかけたその時
2人の目の前に黄色い魔法陣が浮かび上がる。

「やっほー♪元氣してたかなあオリジナル……？」

「セデイス……！！！」

魔法陣の中心からセデイスが姿を現し、にこやかな笑みで右手をヒ
ラヒラと振るう。

フェイトは表情を陰しくさせて臨戦態勢を取り

すぐ側にいたベルクトも表情こ変えなかったものの、警戒心を強め
た。

「くしし……その私に対する強面も相変わらずだよね……」

それに対してセデイスは全く動じることなく、いつもの甘ったるい
口調で会話を続ける。

「そんなにカッカしててもしょうがないよ……？ パパ達が始めた楽し
いお祭りは……」

まだ始まったばかりなんだから……もっと楽しまないと……」

「何が……何が楽しい祭りだ……！！地上を混乱させて……大勢の人を悲
しませている重犯罪者が……！！」

基本的に温厚で滅多に怒らないフェイトが珍しく明確な怒りを見せ
バルディッシュを構えたままセデイスに向かって怒鳴る。

「くしししし……悲しませてるなんてそんなお門違いな…パパやジエイルさんは自分の夢を叶える為に

一生懸命やってるだけなんだよぉ？その何がいけないっていうの？」

「そんな身勝手な…人の命や運命を弄んでいる癖に……

あなただって……スカリエッティや他の2人の傲慢で……!!」

終始軽いノリのセデイスとは対照的に感情的な声でフェイトは言葉を発していくが

「……使う側の自覚の無いクルクルパーの手前に言われたくないつつーの…」

「なっ……!!」

「…おっとおいけな…素の口調が出ちゃった…と…」

いきなりセデイスが冷淡な口調になってそんな事を吐き捨てる。

それを見たフェイトは一瞬たじろぎ、セデイスも慌ててまた元の口調に戻る。

「…貴様もそんな戯言を言う為だけに現れたのではないだろう？来るならさっさと来い…俺達は急いでいるんだ…」

すると、今まで黙っていたベルクトがライフルの銃口に魔力刃を形成し

それを構えてフェイトの前に出ながら呟く。

「うーん…やる気満々のところ悪いんだけど…」

ここであなただと遊んでる時間は無いんだよね…だからあ…」

そう言っただセデイスは自身の目の前に再び魔法陣を展開する。

そしてそこからある1人の人物を呼び寄せた。

「ほんじゃレイちゃん後はよろしくねー！さっさと片付けて連れてきてねー」

お姉ちゃんはまだお仕事があるからー」

「了解ですセデイス様」

魔法陣から呼び出された人物ーレイグが淡々とセデイスに答える。

「!…!!…嘘……!な、何で……!!」

そしてレイグの姿を見たフェイトは目を大きく見開いて信じられないといった感じに呟く。

「コレは…あの男のやりそうな事だな…！」

ベルクトはレイグを見てフェイトの様にはならず、寧ろ怒りを浮かべている。

その光景を見てセデイスは意地の悪い笑みを浮かべている。

「予想通りの反応だねオリジナル…私っていう前例がいるのに今更見た目で惑わされてどうすんのさ…そ・れ・に…」

右手の人差し指を軽く振るう。その間にレイグがフェイトの背後に移動していた。

「フェイト…！」

ベルクトが声をかけるが、酷くうろたえていたフェイトは反応が遅れてしまう。

「あらあゝ…こりゃ決まったかな？…ほんじゃね♪」

可愛らしく小首を傾けてセデイスがポツリと呟き、魔法陣を展開してその場から消え去る。

「ジェット・マグナム」

そして青いバリアジャケットを纏ったレイグがフェイトに向かって拳を振るう。

フェイトが我に帰った時には、プラズマを纏ったレイグの拳が眼前に迫っていた。

*

ブラッドルームに向かってなのはとユーノは一直線に突き進んでいた。

「指定のポイントまであと少しだ…」

「うん…！」

ユーノの言葉になのはが固い表情で頷いて答える。

2人は曲がり角の1つを通過して、長い通路へと出る。

「……………あの女の子の…父親と母親…なんだっけ…」

しかし、その通路を更に曲がった奥で、ディエチが砲台を構えている。

そしてすぐ側のネニターに映るなのはとユーノの姿を確認して浮かない顔で呟いていた。

「……………あんた達に恨みは無いけど…」

ディエチはすぐに何かを吹っ切るようにそう言って立ち上がり、砲台にエネルギーを溜めていく。

「5…4…3…2…1…」

敵の位置をモニターのマークで確認してカウントダウンを開始する。

そしてカウントが0の直前になったところでディエチのいる通路の真反対に

なのはとユーノの姿が現れたのを視認する。

「なのは…！」

それは相手側も同様であり。咄嗟に気づいたユーノが急停止し、敵の考えを瞬時に察して声を上げる。

「0………」

同時にディエチの構えた砲台からエネルギーが発射される。

「エクセリオンバスター…！」

ユーノの声でなのはは咄嗟にレイジングハートを掲げ

敵の放ったオレンジの閃光に、真正面からエクセリオンバスターの桃色の閃光をぶつける。

「ぐうっ……!!」

「……………!!」

両者の放った砲撃の威力はほぼ互角で、通路の途中で双方の閃光が闘ぎあっている。

「……埒が明かない……! ブラスターシステム……!!」

なのはが早々にケリをつける為に、諸刃の剣ともいえるレイジングハートの

ブラスターモードを起動しようとする。

「リミット「AZ-3」!!」えっ……!」

しかしそれを起動する前にユーノがなのはの前に飛び上がりもう1つのホルダーデバイスAZ-3にカードを2枚挿入する。すると彼の両肘と両踵に計四枚の小型の黄緑の翼が展開する。

「ステルス……!!」

先程挿入したカードによって瞬間加速とステルス機能を発動し瞬時にユーノはディエチの背後へと吹っ飛んでいく。

「!!!!!!」

辛うじてディエチはもう1人の方がこちらへ接近してきたのを捉えたが

砲台の制御に集中してほぼ身動きが取れなかった。

「ディバイン……ぐうっ……バスター……!!」

ディエチの頭上でユーノは急停止し、瞬時にコスモスターを構えてカードを挿入する。

その際に先の高速移動の反動がきて表情を歪めるもほぼゼロ距離でコスモスターから閃光を放ってディエチに直撃させた。

「はあ…はあ…」

仰向けに倒れ付しているディエチの前でユーノは荒く呼吸をしている。

「ぐぐ…撃ち合いの最中に…背後から狙うなんて…管理局員なのに…随分強かな真似を…」

「はあ…なんとでも…言ってくれ…なのはに…ブラスターシステムを使わせるなんて…」

悔しげに呟くディエチの言葉に呼吸が整わないままユーノは答えながら

AZ-3によって効果を増大したバインドで拘束し、更に続ける。

「そんな無茶…：させるくらいなら…：これくらいの事で…躊躇ってなんか…ぐっ…：いられない…」

喋っている最中に苦しげな声を上げて左腕を押さえる。

「ユーノ君…！」

そんなユーノに対し心配そうな声を上げてなのはが駆け寄ってくる。

「ユーノ君…：どうして…！」

突然の乱入行動に疑問を感じたなのはがユーノに尋ねるが

「…敵はまだたくさんいるんだ…：こんな場所でブラスターシステムなんて使っちゃいけない…」

「で、でも…」

背を見せたままユーノは淡々となのはに答え、それを聞いてなのはは戸惑いを見せる。

そんな彼女の事や、バインドを受けて側で気絶しているディエチの事などお構いなしに

ユーノはゆっくりと前へと進んでいく。

「さあ行こうなのは…：この先にもまだ敵はいる…：立ち止まってな

んかいられない…」

「うん…」

そう言っユーノは飛び上がって飛行を再開する。

なのは戸惑う気持ちだが晴れきらないまま、ユーノの後を追っていった。

＊

「…ディエチ…愚かな妹ね…あの程度の不意打ちにも気づけないなんて…」

ブラッドルーム、ディエチの戦いぶりをモニターで観戦していたドゥーエが不満げに呟く。

「あの程度の機人しか作れないなんて…ドクター…腕が落ちたのかしら？」

「大丈夫ですよドゥーエ姉さま…チンクちゃんやセインちゃんみたいなつまんない子達の方は」

「私やセイスちゃんです全然穴埋め出来ますから」

首を傾げるドゥーエの側で、いつもの甘ったるい口調でクアットロが言う。

「にしても…ホルダーデバイスなんて結構な名前がついてるけど…」
次いでモニターに映るユーノのデバイスを見つめて表情を呆れた感

じのものと変える。

「ま…所詮は凡人の付け焼刃…大したことはなさそうねえ…」
明らかに侮蔑しているような視線をモニターの先のユーノへとぶつける。

「けどドゥーエ姉さま？これホントに上手くいきます？」

セデイスちゃんのお願いだからやってるわけですけど…」

天井に釣り下がっている何かを見上げながらクアットロはドゥーエに尋ねる。

「問題ないわよ…セデイスの話じゃ…機動六課っていうのは…
頭にバカがつくくらいの単純でお人好しな連中らしいから…
これくらいのエサにも簡単に引っかかるわ…」

それに対しドゥーエは幹での固有武装の爪—ピアッシングネイルを舐め回すような視線で見つめながらウツトリとした口調で答えた。

次の瞬間、ブラッドルームの扉が勢いよく破壊され、その先からなのはとユーノが現れる。

「ようこそ…お待ちしておりましたわ…」

ニヤリと笑みを浮かべて、ポッドの側でドゥーエが手を振りながら2人を迎え入れる。

その舐めたような態度が気に障り、なのはとユーノは表情を歪める。

「こんな場所まで無駄足ご苦労様…各地であなたのお仲間は大変な事になってますよお？」

クアットロがモニターを操作して各地の戦いを映し、挑発するよう

な口調で2人に言う。

「…大規模騒乱罪の現行犯で…あなた達を逮捕します…!」

「すぐに騒乱の停止と…武装の解除をするんだ…!」

クアットロの挑発に乗る事無く、固い表情でなのはとユーノが言う。そんな2人の姿を見てドゥーエが小馬鹿にしたような表情を浮かべる。

「仲間のピンチにも顔色1つ変えずにそんな事が言えるのね…

カッコいいものね…その悪魔染みた正義感…フフ…見習いたいわ…」

「!!!!!!」

そのあまりに癪に障る言葉に反射的に反応してしまい

なのははレイジングハートを振り上げる。

「おっと…撃たないほうがいいわよ?」

それを見てドゥーエが左指をパチンと鳴らす。すると天井から何かが降下してくる。

「!!!! フェイトちゃん!!!!」

「そんな…!!!! フェイト!!!!」

天井から降りてきたそれを見て、なのはとユーノは呆然となってしまい。そして叫ぶ。

2人の目の前にバリアジャケットが解除され管理局の制服姿のフェイトが

両腕を鎖で固定されて、体中血だらけの状態で吊り下がっていたからだ。

「嘘…！フェイトちゃん…！！しっかり…！！」

目に涙を浮かべてなのは必死に叫ぶが、フェイトは顔をダランと下げたまま微動だにしない。

「さっきセデイスが仕留めてきたらしいのよ……あの子ガツカリしてたわねえ…」

自分が手を下すまでもなく…あっさりやられたって…」

宙ぶらりんのフェイトの近くで、興味なさげにドゥーエが呟く。

「そんな…フェイト…」

ユーノもその目の前の光景が信じられずに呆然として呟く。

「結局この子も…その程度だったってことよ」

クアットロが完全に上辺だけの態度で心配している感じに言う。

「…まあ、今更Fの遺産なんてドクターも興味ないし…」

こんなゴミ…人質の価値も無いわね…さっさと連れて行けば？今治療すれば間に合うんじゃない？」

すると、唐突にドゥーエがこんな事を言って、フェイトの両腕に結ばれた鎖を解除する。

それと同時にフェイトが気絶したまま地面へと降下して倒れこむ。

「フェイトちゃん…！！」

それを見たなのはが倒れたフェイトに駆け寄っていくが

(……ちょっと待て……どうしてあんなにアツサリ…)

この光景にユーノは疑問を浮かべていた。

ドゥーエの言ったとおりならそれまでなのだが、こうも簡単に捕らえた敵を解放するのか？

ましてやフェイトは機動六課の隊長、こちら側には優秀な戦力だし敵にしてみれば相当な脅威のはず。自分でこんな事言うのも難だが使いようによってはいくらでもこつちとのやり取りを有利に進められる貴重な人材の筈なのに…

と、ユーノがこんな風にあれこれ疑問を浮かべていたが

「！…なのほっ！！」

ふと一瞬フェイトの方に目を向けた瞬間、見えてしまった光景に今までの疑問を確信へと変え、背筋に悪寒が走る。

そしてA Z—3に加速魔法のカードを挿入し

フェイトのすぐ側まで来ていたなのは突き飛ばした。

「えっ…きゃあ！」

突然の事態になのはは反応しきれず、ユーノとともに激突して吹っ飛ばされる。

「痛た…ユーノ君…急にな、に……を……」

倒れた体を起こして、なのははユーノの方に向き直って彼に問いかけ…

そして目の前の光景を見て完全に固まってしまう。

「うそ〜ん…本当にこんな簡単なひっかけが成功するなんて…」
「言ったでしょ？お人好しだって……その所為で仲間を信じきれないなんて…本当に馬鹿ね」
ポッドの近くでその光景を眺めるクアットロが意外そうに呟き
ドゥーエが冷ややかな口調でそれに答える。

「ガハッ……!!」
ユーノは口から大量の血を吐き出す。そんな彼の目の前には
デバイスでも何でもない。ごくごく普通の銀色に輝くナイフを
ユーノの腹部に深々と突き刺しているフェイトがいた。

「フェ…フェイト…ちゃん…？」
目の前の光景が何がなんだかわからず。なのははガクガク震えながら
フェイトに声をかける。
それに対してフェイトはしばらく何の反応も見せなかったが

「くしししし………」
ユーノの体に隠れて表情の伺えないフェイトが
これまでずっと共に戦ってきた中で、一度も発した事の無いような
笑い声を上げた。

第28話（後書き）

主要メンバーの戦闘しか書いてないのに1話消費するとは…
完結まであと何話かかるのだろうか…

アムロとシャアのやり取りは

一部コンペイトウさんのアイデアを使わせてもらっています。

ただこの2人が話すと本当に長くなるんだよね…

あとルーテシアも作者補正でどんどん異次元の方向へ向かってくし…

本当に以前指摘された通りまんま強化人間に近づいているという…

さあて…どうなるんでしょうねコレは…？

そしてこのタイミングに新たなオリキャラ…レイグの登場です。

まあ…会話内容などから考えれば

皆さん8割方は彼が何者かは想像つきますよね？

そして前書きでも言いましたが…

本当に何なんだろうこの腹黒三姉妹は…

いや…ドゥーエが言うようになのはがお人好しすぎるのか？

こいつらの末路もどうなっていくのだろうか…

あとこいつらのインパクトの影に隠れて

最近出番が減ってるBBもどうしよう（笑）

それではまた

第29話（前書き）

えー…まず最初に前言撤回します…

地上と空中で分けるとやっぱ色々面倒くさいので
普通に書こうと思います。すみません…

あと更新も遅れてごめんなさい…

第29話

「フェイトッ！！」

「！！！！！！」

ベルクトの一声で我に返ったフェイトは、咄嗟に頭を下に下げる。刹那、レイグの放ったプラズマを纏った左拳がフェイトの頭上を通り過ぎていく。

フェイトは次の瞬間にすぐに後退し、レイグから距離を取る。

「大丈夫か！？」

「う、うん…ベルクトのおかげで何とか…」

駆け寄ってくるベルクトに対し、内心でヒヤヒヤしながららフェイトは答え

次いで2人は目の前の敵、レイグと真っ直ぐに相對する。

「ッ…どうしてこんな…」

フェイトはレイグの姿を再び真正面から見て、ギリッと奥歯を噛み締める。

何故なら目の前にいる小柄で赤毛の少年、レイグ…

その姿形は見間違えるまでも無く、フェイトが救い出し、今は自分の仲間として共に戦っている人物…

エリオ・モンディアルと全く同一だったからである。

当然、目の前にいるこの少年がエリオ本人とは何の関係も無いのは百も承知だ、しかし…

「…フェイト惑わされるな、あいつはあの男の駒に過ぎない…あいつはエリオとは違う」

「…わかってる」

と、隣にいるベルクトから冷静な口調でそんな事を言われる。

しかしその声はどこか震えていて、冷静ながらも

内心には怒りがこもっているとフェイトは感じていた。

そんなベルクトに対し、フェイトも心の動揺を必死に押さえ込み、再び目の前にいる敵へと視線を向ける。

「反応速度、予想データの3割上、解析パターンの変更を要する」
そんな2人の感情などお構いなしに、レイグはブツブツと呟きながら敵対人物の能力を冷静に分析していた。

「任務内容、プロジェクトFプロトタイプ、フェイト・テストロッサの排除」

そして両拳を上に向けてファイティングポーズを取り、続けてこう言った。

「ZB-H0774、レイグ・バルドナ、戦闘行動を再開します」

＊

「くしししし：ホントに馬鹿だね～あなたの彼女：動揺してこの程度の偽装も見破れないなんて：」

ユーノの目の前に屈み込み、彼の腹部にナイフを突き刺したままフェイト：

ではなくセデイスが薄ら笑いを浮かべたままそう言う。

「グッ……ッ……！！！」

「あら～？咄嗟に急所を外したんだ～？意外と冷静なの……ねえッッ！！！」

「ツッア!!」

ユーノの反応を見たセデイスが意外そうな声を上げると同時に突き刺したナイフを勢いよく引き抜き、ユーノに向かって蹴りを入れる。

ユーノは腹部の激痛とケリの衝撃で小さく悲鳴をあげながら、地面を転がる。

「まゝったく…やっぱり私はこれじゃないと落ち着かないな」

セデイスは言いながら服のポケットから紐を取り出し、自身の長い金髪を普段のポニーテールへと結いなおす。

「ほんじゃ2人とも、あとよろしくね」

そして魔法陣を展開して部屋から姿を消した。

「ユーノ君!!」

その光景を見ていたなのはがすぐさま倒れたユーノに駆け寄って彼を抱きかかえる。

「ユーノ君!! しっかり!! ユーノ君ツッ!!!」

「グ…アアツ…カッ…」

目を潤ませながらなのはは必死にユーノに呼びかけるが、ユーノは苦しそうに呻くばかりである。

腹部からは夥しい量の血がドクドクと流れ続けている。

（私が…私の所為でユーノ君が…!!）

なのはは内心気が気でない。自分が冷静さを欠いた行動を取ったばかりに

自分の最愛のパートナーであるユーノが、こんな危険な目に遭ってしまったのだ。

なのはの感情はユーノに対する申し訳なさ对自己に対する不甲斐なさで染められていく。

「はいはいはい、そんな5流の悲恋劇なんて見たくないわよ?」

「まったくね：あんな程度の罠に引つかかるなんて：何て馬鹿なのかしら：」

と、2人の様子を伺っていたクアットロとドゥーエの2人がつまらなそうにそう吐き捨てる。

「ツツツ！！！」

その言葉が耳に入った瞬間、なのはの感情が瞬時に激しい怒りへと切り替わる。

それに駆られるまま反射的にレイジングハートを振り上げ

ドゥーエとクアットロに向かって桃色の閃光を放つ。

「いやーん、こわーい」

口ではそう言いつつも、クアットロ達は全く慌てず、避ける素振すら見せない。

すると、閃光が当たる直前に2人の姿が消滅する。

「んふふーそんなんでも当たるわけじゃないでしょー？」

背後から声が響き、それを聞いてなのはが後ろに振り向く。

クアットロは全くの無傷でなのはに対していつもの軽い笑みを向けている。

「戦場での冷静さの欠如は命取り：」

と、今度は上空からピアッシングネイルを構えたドゥーエが降下してくる。

なのはは右手を前に突き出して防壁を展開し、その一撃を防ぐ。

「BBも：そう言ってたわね：」

攻撃を防がれたドゥーエは後ろへと飛び退き、クアットロと並ぶ。

「さあいらっしゃい：管理局の白いエース：あなたはここで果てるのよ：」

「その手負いのボロカスと同じようにしてあげるわー」

明らかに挑発するような口調で、ドゥーエとクアットロは言い放つ。

「：許さない！絶対！！！」

なのははユーノを傷つけられた怒りで冷静さを見失っており2人の挑発をまともに捉えて更に感情を高ぶらせる。

その顔には未だ嘗て、彼女の仲間達も一度も見た事ないであろう凄まじい怒りが刻まれていた。

＊

ミッドチルダ上空、リインとユニゾンしたシグナムと、マイヨの激しい攻防が繰り広げられている。

以前の戦いと同じように、互いに武器を交わらせては距離を取る動きの繰り返しであった。

「チィッ…！」

しかし、マイヨはその攻防の最中で苦々しげな表情で舌打ちをする。
（破壊力も速度も前とは比較にならない…！！）

前回とは明らかに動きの違うシグナムに対して内心でそう呟く。

リインとユニゾンした事によってシグナムの能力は格段に向上しており

今度はどちらかといえば自分が押されてる立場である。

「ハアッ…！」

「ッッ…！」

そんな事を考えている間にもシグナムの刃が目の前に迫る。

咄嗟の反応でマイヨはレーザーソードを前に突き出してそれを防ぐ。

「イーグルバレット!!」

マイヨは武器を交わらせたまま、自身の周り青い魔力弾を数個形成してシグナムに向かって放つ。

それを見たシグナムがすぐさま後方へと高速移動してかわし、マイヨから距離を取る。

「レヴァンティン!!」

そのままシグナムはレヴァンティンのカートリッジロードを行い、シュランゲフォルムへと移行する。

（炎熱加速!!）

シグナムの中でリインが魔力を集中し、シグナムに合わせた動きを取る。

シグナムはシュランゲフォルムのままレヴァンティンを大きく振り上げる。

「飛竜一閃!!」

シグナムとリインが同時に腕を振り下ろす。それと同時にレヴァンティンが紫炎に包まれ、

巨大な炎の渦が一直線にマイヨへと襲い掛かる。

「ファルゲン!!」

それを見たマイヨは足下に青い魔法陣を展開し、魔力を集中すると彼の体が青い魔力光によって包まれていく。

「うおおおお!!!!」

その状態でマイヨはレーザーソードを前に突き出して、一直線に突っ込んでいく。

「真正面から来るつもりか!?!」

「我が友人の為に…そして何より果たす義の為に…ここで引くことは出来ん!!」

シグナムの放った飛竜一閃と魔力を纏ったマイヨが真っ向から激突する。

両者の力はほぼ互角で、とちらも引く事無く、辺りに火花が散る。

「くっ…………レヴァンティン!!」

自分の一撃に真正面から向かってくるマイヨに必死の表情でシグナムは相対し、

カートリッジロードをもう一発行って更に魔力を高める。

レヴァンティンを纏っていた紫炎が更に巨大化し、徐々にマイヨを押し始める。

「…そこだ!」

しかし、マイヨはそれを狙っていたとばかりに、突如として軌道を変え

飛竜一閃の巨大な炎から逃れるように大きく迂回し、シグナムへと迫る。

（シグナム!! 右!!）

それを見たリインが叫び、シグナムもすぐさま連結刃を引き戻そうとする。

が、魔力を増幅した事が逆に仇となり、防御に転じるまでに大きく隙を作ってしまう。

「もらった!!」

マイヨがレーザーソードをシグナムに向かって振るう。

ガキーン!!

「ぬうつ…!!」

だが間一髪、シグナムは空いていた方の手で鞘を振り上げそれによってマイヨの放った一撃を防御する。

攻撃が後一歩及ばず、マイヨは悔しげな表情を浮かべる。

シグナムの持つ鞘と、マイヨのレーザーソードが拮抗し合い、カタカタと揺れる。

「くらえっ!!」

その一瞬の隙を突いて、シグナムは自分の手元に戻したレヴァンテインを

連結したままマイヨに向かって勢いよく横薙ぎに振るう。

「グハッ!!」

それに気づいたマイヨが回避を行おうとするも、

ユニゾンによって速度と破壊力の増したシグナムのその一撃に反応しきれず

腹部にまともにレヴァンテインの一撃をくらって地上へと急降下していく。

「マイヨ・プラート…時間が無いのは私も同じなのでな…

勝負はひとまずこれで終わりとさせてもらおう…」

マイヨが落ちていった方を固い表情で見つめつつそう呟いた後、シグナムはゼストの後を追って地上本部へと向かっていった。

＊

地上本部、レジアスの自室

そこにいるのはデスクに座るレジアスと、厳しい表情で彼の真正面に立つオーリス

そしてレジアスの横で沈黙を保ったまま立っている仮面の男クリーノの3人

「オーリス：クリーノ：お前達はもう下がれ：」

レジアスが重々しい声でオーリスとクリーノに退却を命じるが

「それはあなたです：あなたには指揮権限はありません

ここにいる意味は無い筈です」

しかしオーリスは強い口調でそれを頑なに拒む。

クリーノは何も答える事無く黙ったままにいる。

「ワシは：ここにおらねばならんのだよ：」

レジアスがそう呟いたその時

ドォォン！！

突如として入り口が勢いよく破壊される。

それを見たオーリスはレジアスを庇うように彼の前に立ちふさがる。

「手荒い来訪ですまんな：レジアス：」

「構わんよ：ゼスト：」

破壊された入り口の先から、ゼストが姿を現す。

それに対してレジアスはさして慌てた様子も無く、冷静に答える。

「ゼスト：さん：！？」

自分の記憶の中では、既に死んだはずの人間を前にして、オーリスは目を見開く。

「オーリスはそいつと同じでお前の副官か？」

「ヴェンデイスやクリーノと同じ位頭が切れるが…ワガママでな…子供の頃から変わらん…」

そんなオーリスの事などお構いなしに、ゼストとレジアスは会話を始める。

「聞きたい事は1つだけだ…」

そう言ってレジアスは数枚の写真を取り出し、レジアスの前のデスクに投げる。

「8年前…俺と俺の部下達を殺させたのは…お前の指示で間違いないか？」

真剣な表情で尋ねるゼストに対し、レジアスは固く目を閉じて俯いたまま黙っている。

(ククク……)

そんな中で、そのやり取りを見ていたクリーノが口元を微妙につり上げていた。

*

結界に囲まれた廃ビル内、そこでティアナはギュネイ、クエスの2人に必死に応戦していた。

「ええいっ!!」

クエスがティアナの目の前に降り立ち、手にしたガトリングから魔力弾を連射する。

だが、それらが当たった瞬間にティアナの姿がかき消すように消滅する。

「やはり幻影だったか…」

クエスの隣にギュネイも現れ、固い表情でそう呟く。

「もうっ!! 面倒臭いなあ!!」

クエスの方はイライラした感じにじだんだを踏みながら言い放つ。

「ッ! クエス!!」

するとその直後、別方向から更に数人のティアナが出現してギュネイとクエスに向かって魔力弾を発射する。

2人はそれぞれ違う方向に飛び上がってそれらを回避する。

「このギュネイ・ガス相手にその程度のこけおどしで…!」

回避をしながらギュネイは目を閉じて意識を集中する。

「ファンネル達よ…あいつの幻影だけを消し飛ばすんだ…当たれええええ!!」

自らに宿った能力を駆使して敵の正体を見破り、目を開いて叫ぶ。同時に6機全てのファンネルが分離してティアナ達に襲い掛かる。それらはティアナ達の放つ魔力弾を掻い潜りながら攻撃を放ちティアナの出していた幻影だけを全て正確に撃墜していく。

「幻影が!?!」

1人残ったティアナは一度の攻撃で幻影全てを見抜かれた事に驚きつつも

すぐさま頭を切り替え、手にしたクロスミラージュから魔力のアンカーを放つ。

それをビルの高層の壁へと接触させて飛び上がる。

（こんな狭い場所で2人相手だなんて…ちょっと分が悪すぎる…結界破壊スタッフが駆けつけるまでに何とか生き延びないと…!）
苦々しい表情を浮かべつつティアナが内心でそう呟く。

「敵はギユネイだけじゃないんだよ!!」

だがその時、上昇していたティアナの目の前に突如クエスが降下してくる。

「しまった…!!」

「落ちろ落ちろ落ちろっ!!」

クエスが左手に装備した盾を前に突き出し、そこから閃光を連続で放つ。

ティアナはアンカーで上昇していた為避ける術も無く、まともにそれをくらってしまう。

クエスの放った閃光はティアナにぶつかった瞬間に爆発を起こした。

*

ビル街の一画、そこでギンガ、勇、比瑪の3人が、チンク、黒いバロンズウと相對する。

しばらくの間互いに膠着状態が続いていたが、やがてチンクがナイフを数本構える。

「来るわっ!!」

それを見た瞬間にギンガが叫び、同時にチンクがナイフを投擲する。3人はそれぞれ違う方向に飛び上がり、3人の居た足下にナイフが突き刺さり、爆発を起こす。

「逃さん!!」

チンクは再びナイフを取り出して、それをギンガに向かって放つ。

「やらせない!!」

それを見た比瑪がギンガの前に立ち塞がり、ブレンバーを振るってナイフを叩き落とす。

更にその隙を突いて勇がバイタルジャンプの瞬間移動により、チンクの背後に迫る。

「甘いな…」

しかしチンクは避ける素振りを見せずに冷静に咄く。

その瞬間、同じようにバイタルジャンプを使ってパロンズウが勇の目の前に出現する。

そして拳を振り上げ、勇に向かってそれを振り下ろす。

それを見た勇が背後に飛び上がって回避し、ブレンバーから光線を数発放つ。

しかし、それらはパロンズウのボディには全くダメージが通らない。

「やっぱりオリジナルと同じで並の攻撃は無理か…それならっ!」
そう言って勇は比瑪の側まで移動し、そして彼女に向かって言う。

「比瑪! 合わせろ!!」

「うん!!」

その一言で比瑪は何を行うかを全て察し、勇と共にブレンバーを前に突き出す。

「チャクラエクステンション!!」

「シューーーーーー!!」

2人でタイミングを合わせて魔力を解放し、2本のブレンバーから巨大な閃光が放たれる。

それは、いとも容易くバロンズウのボディ全体を飲み込んでいく。

「やったか!？」

チャクラエクステンションの爆煙を見つめながら勇は地上に降り立つ。

そして爆煙の晴れた先には、ボディの半分程を消失したバロンズウがいた。

「無駄だ、異界の者よ」

するとチンクが冷静さを崩す事無く呟く。

「あっ…! そんな…」

その次の瞬間、黒いバロンズウは一瞬にしてボディを再生して無傷の状態へと戻る。

その光景を見ていた比瑪が悔しげに声を漏らす。

「一瞬であれだけの傷を…」

勇もまた同様に悔しげな表情を浮かべ、バロンズウの回復力の速さに驚く。

「ドクターライネンがこの決戦の為に用意していた特別製だ
お前達がいくらこいつを攻撃しようと、指一本でも残っていればたちまち再生する」

驚く勇と比瑪を前にして、チンクが冷静に淡々と呟く。

「…ああ、もう1人いたな」

と、背後に気配を感じてポツリと一言。

その直後にギンガの形成したウイングロードが出現する。

「はあああああ!!!!」

その先からギンガが物凄い勢いで迫ってきて、チンクに向かってリボルバーナックルを叩き込む。

「……………防壁展開」

しかしこれに対してもチンクは回避行動を取らず、一言呟いて自身の周りに防御フィールドを展開する。

「くっ……固いッ……!!」

ギンガの放った一撃は防壁に阻まれ、辺りに火花を散らし続ける。ギンガは必死にそれを打ち破ろうとするも、チンクは表情1つ変える事無く突っ立っている。

「無駄だファースト、このシェルコートもまた、ドクターライネンの手によって

大幅な改良を施されてある。今の状態なら…セカンドの振動破砕とてこの防壁を破る事は出来ない。更に…」

そう言ってチンクは防壁を出したままナイフを取り出してそれを投げる。

すると、あろうことかそれは防壁を内側から貫通し、ギンガの横腹に刺さる。

「あっ……!!」

ギンガが気づいた時にはもう遅い、チンクはその瞬間にISを発動。ギンガに突き刺さったナイフを爆発させる。

「ギンガさん!!!」

それを見た比瑯がギンガの方へと向かおうとするがそれをバロンズウが阻む。

バロンズウがフィンを数本、比瑯に向かって伸ばす。

それを見た比瑯が急停止して背後に下がってそれを必死に回避していく。

「くそっ!!」

勇が別の方向からバロンズウに接近し、比瑯に向かうフィンをブレ

ンバーで斬りおとす。

しかし、斬られた断面からフィンは一瞬の間に再生していく。

「更に：こんな芸当も出来るのだ」

チンクが呟いた瞬間、バロンズウが収縮していたフィンの先端にある棘を

全て分離させて勇と比瑪に向かって無数に発射する。

「フィンの：先端だけを！？」

オリジナルには無い攻撃を見て勇は驚きを浮かべる。

「ランブルデトネーター：」

チンクがそのままISを発動。すると、勇と比瑪に向かっていたフィンの棘が

二人の周辺で一斉に爆発を起こした。

放たれたフィンの一斉爆発によって周りの地形が大きく変化している。

その中でうつ伏せに倒れ付しているギンガ、勇、比瑪の3人を

チンクは冷静な表情を全く崩す事無く見つめている。

彼女の隣にいるバロンズウは、分離したフィンを再生し終えている。

「く……うつ……」

苦しげに呻きながらギンガは、腹部を押さえながら何とか立ち上がろうとする。

「ああっ！！！」

しかし、それを見つけたチンクによって足で踏みつけられてしまう。

ギンガはその痛みによって悲鳴をあげ、再び倒れこむ。

「あきらめろファースト…お前達に勝ち目など無い…」
チンクは冷静な表情ながら、敵に対してどこか哀れみを含んだ感じの口調で言う。

踏みつけた足をどけて一步後ろに下がり、倒れたギンガを見下ろす。
「…勝ち目が無いからって…こんな場所で…」

しかし、ギンガは屈する事無く再びヨロヨロと体を起こしていく。

「こんな場所でヘコタレてたら…スバルに…妹に会わす顔が無いのよ…！」

ギンガは表情に再び決意を込め、勢いよく立ち上がって身構える。
体の至る所が傷だらけで、頭部から血も流れているが

その顔には一切の迷いもあきらめも感じられない。純粋な闘志だけが宿っていた。

「…そうだ…ギンガさんの…言うとおりだ…」

「この程度で…私達が…！」

そんなギンガの思いに当てられ、チンクの背後に居た勇と比瑪も再び立ち上がる。

「くっ…これだけやられていながら…何故まだ…」

その様子を見てチンクが、初めて困惑した感じの声を上げる。

「俺達には…守る物が…そして帰らなきゃいけない場所があるんだ…！」

「その為にも…あなた達を倒さなきゃいけないの…！」

ギンガ同様に傷だらけながら、勇と比瑪は力強い口調で言い放つ。

それを聞いたチンクも、先程までの冷静な表情が崩れ始める。

「そうか…しかし私も負ける訳にはいかないのでは…」

ギンガ達と同じ何か決意を感じる表情でチンクは言い、ナイフを取り出して構える。

「別の場所で戦っている妹達の為にも…ドクター達の指令は必ずこなさなければならんだ…！」

声を強めて言うチンクの言葉に呼応するように、停止していたバロンズウも行動を再開する。

それを見たギンガ達も、それぞれの武器を構えて応対した。

＊

戦艦はこぶね内部のとある通路

「ここが…E2の保管場所って事か…」

レントン、アネモネと別れたゲイナー、ガロード、シンシアの3人は2つの巨大な扉一方にはB、もう片方にCの文字が刻まれた一その前で立ち止まっていた。

「E2の部屋が2つって事は…ここは二手に分かれる必要があるな…」

「ああ…もしくは片方潰して、もう片方を改めて潰しに行くか…」
真剣な表情でガロードとゲイナーが話し合う。

E2がある、すなわち部屋の中には敵がいるのは間違いないという事だ。

となると敵の戦力が未知数である以上、下手な戦力分散は命取りになる場合もある。

かといって時間の事も考えると一々一つ一つ潰しているのも面倒である。

そういう感じで2人は悩んでいたのだが…

「もう…そんな小難しく考える必要ないっしょ？とにかく片っ端か

ら入っていった

ドーン！って潰してけばいいんだから！」

2人の悩みなど全く意に介せず、シンシアはBと刻まれた扉の方へと歩みを進める。

「ってちよつと待ってシンシア！いくらなんでも今回は…」

「だったらゲイナーもついてくればいいじゃん！退屈なんだよ！やっとな強そうな相手がいる場所を見つけたんだからさ！」

呼び止めるゲイナーの言葉に対し、シンシアはまるで子供の様にワガママを漏らす。

「まったくもう…今回の戦いはそんな軽い問題じゃあ…」

「さあさ！早く行こ！」

「ってオイ！シンシア！！」

困ったように言いながらも、ゲイナーは何とかシンシアを説得しようとして試みたが

シンシアは我慢出来なくなり、なんとゲイナーの腕を取ってそのままBルームへと入っていった。

「…おい…俺はどうすりゃいいんだよ…」

ただ1人取り残されたガロードは、呆れて果てて殆ど物が言えなかった…

（まったく…とはいえ、時間が押してるのも確かだ…となりや俺がこっちを…）

しかしいつまでもグチグチ言ってる暇も無い。こうなってしまった以上は

仕方ないとガロードは割り切り、ゲイナー達が入っていたのとは反対のCルームへと進んでいった。

＊

戦艦はこぶねBルーム

「さーて…敵はどこだ？」

シンシアは部屋の中を見回して、どこか楽しげに敵の姿を探し始める。

「ちよつとシンシア…いい加減に…」

流石のゲイナーも先程からのシンシアの勝手な行動に対して、一言物申そうとしたが

「IS…スローターアームズ…」

どこからともなく不気味な声が響いたかと思うと、

突如として2つの奇妙な形をした刃が2人に向かって飛んでくる。

「うわっ！」

突然の攻撃に慌てながらも、ゲイナーはフォトンマットを展開して

それを防ぐ。

「よっと！」

シンシアは大して慌てた様子もなく、横へステップ移動して回避し腕を銃口の形に変形させて、そこから赤い魔力弾を放って2つの刃を撃ち落とす。

「アハッ！…この軌道…そしてこの攻撃はつまり…」

「そういうことだ…」

満足げに呟くシンシアの声に応えるかのように、その場にトーレとセツテが姿を現す。

「久しぶりだね！トーレ！！それにセツテも！」

まるで親しい友人に挨拶するかのような感じで、シンシアはトーレとセツテに話しかける。

「ッ…ここに来たのは帰還…というわけではないのは間違いないな…！」

それに対してトーレは、忌々しげな口調でシンシアに言葉を返す。

「お前達は…」

ゲイナーは目の前の2人が、以前戦った事のある人物だということを思い出す。

「…シンシア・レーン、もう一度私達の下に来る気は無いのか？」

トーレの背後でセツテが機械的な口調でシンシアに尋ねる。

「戻るわけないっしょ？私がここに来たのは…極上の戦いを楽しむ為だよ！！」

シンシアはセツテの言葉を真っ向から切り捨てて、そして身構える。

「ならばシンシア・レーン、そしてゲイナー・サンガ…」

ドクター達の障害になる以上、今度こそ貴様らを破壊する」

それを聞いたセツテが表情1つ変えずにブーメランブレードを構える。

隣にいるトーレも腕部に魔力刃を展開し、それを見たゲイナーも武器を構えなおす。

「ふふ…タッグバトルのスタートだね！！」

そんな真剣な空気が張り詰める中、シンシアは普段の態度を少しも変える事無く
楽しげな口調で言った。

＊

Cルーム、ガロードは1人でその部屋内を探索する。

「にしても：こりや一体な何だ？」

後頭部をガリガリと掻きながら、ガロードは部屋の至る所に浮かんでいる

正方形のボックスを見ながら首を傾げる。

（この箱のどれかに：E2が隠してあるとかか：？）

そんな風に考えながら立ち止まり、辺りをもう一度くまなく見直し始める。

「……………うおっ！！何だああ！！」

が、突如背後に違和感を感じて、反射的に後ろに振り向いてライフルから魔力弾を放つ。

しかしライフルの爆発が収まった視線の先には誰もいない：

「いやービックリだねえ、地面の下にいたのに気づいたとは…」

と思った矢先、ガロードから少し離れた地面の下からセインが姿を

現す。

「…戦闘機人か…」

敵の姿をはっきりと確認し、先程の違和感が気のせいでは無かったのと加え

ガロードは表情を引き締めなおして身構える。

「やる気満々だね…けど私も…そう何回も任務を失敗する訳にはいかないからね！」

セインも同様に身構えながら、ガロードと違いどこか明るい感じで言葉を発した。

＊

「…：戦闘は激化する一方ですか…まあ、私にはそんなに関係はありませんが…」

はこぶね内、ある薄暗い部屋の中でバルドナは椅子に座りモニターに映る戦いの様子を眺めながら静かに呟く。

「チャージは30%程…もっとも出来損ないのアレと同様に無理にこの戦いで使う必要は無いのですがね…万が一もありますから…」

次いで別のモニターに映る、赤い棒グラフの様な表示に目をやり、

意味深な言葉を発する。

そしてモニターから目を離して、椅子から立ち上がったその時
「……このタイミングですか…しかも…偶然にしては出来すぎますね…」

突然ニヤリと笑いを浮かべてそんな事を言う。直後、部屋の扉が開かれる。

「お久しぶりですねえ…フェイさん…?」

「バルドナ博士…」

入り口の前に立つ人物に対して、歓迎するかのような口調でバルドナは言う。

その目の前に立っているのは複雑そうな表情を浮かべたフェイ。

「そして…初めまして…それとも久しぶり…むう…何と言え方がいいのでしょうか…」

まあとにかく……会いたかったですよ…私の可愛い息子…」

その後バルドナは今までに見せた事の無いような、どこかうっとりした気味の悪い表情を浮かべる。

「……………」

その視線の先、フェイの背後にいたバレルは、固い表情を浮かべたまま何も言わなかった。

*

レジアスに対して、ゼストは問い続ける。

「俺は：お前の正義の為になら：殉じる覚悟があった：

だが、俺の部下達は：何の為に死んでいったんだ：

今までの思いを全て開放するかのように、ひしひしとゼストは語る。

「どうしてこんな事になってしまった：俺達を守りたかった世界は：

俺達が欲しかった力は：俺とお前が夢見た正義は：いつのまに：こんな姿になってしまった：

辛そうに話し続けるゼストの言葉を、レジアスは黙って聞き続けていたが

それに対して答えるべく顔を上げる。

「ウッ！！！！！」

だがその瞬間、突如レジアスの腹部から黄色い魔力刃が突き出てくる。

それによって貫通したレジアスの腹部から鮮血が吹き出てデスクを赤く染める。

「！！！！！」

それを見たゼストが驚きを浮かべるが、直後彼の体が巨大な2つの鉄で拘束される。

「悪いけど：それ以上話されると都合が悪いからね：

レジアスの背後で、紫基調のバリアジャケットを纏い魔力刃のサーベルを手にしたクリーノが
笑みを浮かべて立っていた。彼の背後には巨大なバックパックが背負われており

そこから伸びる2つのアームに繋がれた鋏がゼストを拘束していた。

「クリーノ三佐！これは……！！」

「邪魔だよ……」

「きゃあああああ……！！」

オーリスが慌てて駆け寄ろうとするが、クリーノは容赦なくもう片方の手から魔力を発し

オーリスを吹き飛ばして本棚へと叩きつける。

「グウッ……」

「今日までご苦勞だったね……君もよく踊ってくれたよ」

クリーノがレジアスからサーベルを引き抜き、その直後にレジアスはデスクに倒れ付す。

「ゼスト……俺は……俺は……」

レジアスがゼストに何かを訴えるべく、手を伸ばして必死に呻くがやかで間もなく力尽き、再びデスクの上へと沈んだ。

「レジアス……」

そんなレジアスの様子を見て、拘束されたままゼストが呟く。

「さて……君もお役目ご苦勞だったね……これにて契約の全ては終了だ……」

そう言いながらクリーノは仮面を外しながらせせら笑い、オルバ・フロストとしての姿を現す。

「……いつでもそうだ……」

ゼストは俯いたまま静かに言葉を発し

「……俺はいつも……遅すぎる……！！」

拘束されたままフルドライブを発動、鋏の拘束から無理矢理逃れようとする。

「グ……ぬうううう……！！」

ゼストが力を込めると、彼を拘束する鉄にヒビがはいり始める。

「なっ…馬鹿な…!!」

それを見たオルバが明らかな焦りを顔に浮かべる。

「ぬあああっ!!」

しかし、レジアスを殺された怒りで冷静さを欠いていたゼストは背後に迫るもう1人の存在に気づく事が出来なかった。

「困るなゼスト・グランガイツ…私の弟に手を出されては…」

ゼストの背後で紅いバリアジャケットを纏ったシャギアが彼の背後から魔力刃のサーベルを突き刺しながら笑みを浮かべている。

それを引き抜いた瞬間、ゼストもレジアスと同様に鮮血を撒き散らしながら

鈍い音を立てて地面へと倒れこんだ。

「大丈夫だったか？オルバよ…」

「ああ、兄さんのおかげでね…」

ゼストやレジアスには目もくれず、シャギアとオルバはお互いの事だけを確認しあう。

「!!これは一体…」

その時になって、その場にシグナム、リイン、アギトの3人が駆け

つける。

「残念：一足遅かったみたいだね…」

シグナム達の姿を見たオルバが、馬鹿にするような口調で言葉を発する。

「ゼストの旦那っ!!」

アギトは大量の血を流しながら倒れているゼストの姿を見つけ、急いで彼の側へと近寄る。

「これは…まさかお前達が…」

「そうとも：初めからこれが僕達の考えだったのさ…」

「管理局の連中も実に役立ってくれた：我ら兄弟の真意も知らずにな…」

状況が整理しきれず、困惑を浮かべるシグナムに対し、フロスト兄弟は冷たく言い放つ。

「何故だ：お前達はレジアス中将の片腕だったのでは…」

「その程度の演技…：幾度も苦汁を舐め続けた僕達にとっては容易い事なんだよ…」

次いでシグナムは目の前の2人が地上本部の中でも高い地位にいた事を思い出すが

オルバはそれに対しても何てこと無いような感じで返答する。

「さて：積もる話もあるだろうが：我ら兄弟の役目はまだ終わっていないのでな…」

「そうとも僕達は更なるステージへと上がるのさ！そこにいるゴミどもを踏み台にしてね！」

2人が高らかに言ったその直後、2人の足下に黒いテンプレートが出現する。

「君達は：客席から指をくわえて眺めてればいいよ：僕ら兄弟の栄光劇をね!!」

オルバが強い口調で言い放ったのと同時に、2人の姿はその場から消滅した。

第29話（後書き）

マイヨあっさりやられすぎだろ！？

いえいえ大丈夫です。寧ろ彼の活躍はこのあとからになります。
（とはいえ今回のシグナム対マイヨに自信が無いのは本当だったり
…）

地上、空中共に様々な展開が繰り広げられていきます。
今回描かれなかったキャラ達も激戦の真っ只中なわけです。

…本当にキャラが多い…あと何話かかるのやら…

レイグの正体は皆さんわかってましたよね？

あと前回で彼のデバイスにも察しがついてる方がいるかもしれません
んが…

一種のサービスの感じの使い方で行く予定ですので…

（使う事自体はかなり前に一度だけ示唆してたりもします）

そして…相変わらずクアットロとドゥーエが黒いな…

そんな中、遂に動きを見せたフロスト兄弟
ドゥーエにとっては死亡フラグなああの場面も
兄弟の連携で華麗に回避（笑）

セデイスの配備通り、彼らははこぶねの駆動炉へと移動です。
彼らと戦うのは果たして誰なのか？
そして原作とは違う展開となったゼストはどうなるのか？

それではまた

第30話（前書き）

深紅やG a r n e t M o o nはいつ聞いても名曲です。

なのに：何でヴォーカル版のA C E 2はOPを端折ってあるんだ：
o r z

（G L O R I O U Sもいい曲なのになあ：）

それとあまり関係ないかもしれませんが：
やっぱり富野監督は偉大なんだなと痛感：

アムロとシャアのやり取りは本当に難しいです：

※今回は後書きは無しです。

第30話

ミッド地上、廃ビルの上空をエイサップが飛び回っている。
その背後から大量の飛行型ガジェットが迫ってくる。

「やあっ！」

エイサップは背後に振り向いて手にした刀剣を振るい、
そこから数個の光球を放ってそれらを撃墜していく。

「くっ…またか…！」

しかしその束の間、すぐに別の場所から新たなガジェットが姿を現す。

エイサップはそれを見て表情を陰しくする。

（あの戦闘機人がガジェットの操作担当である以上予測はしてたけど…

いくらなんでも数が…！！）

現在エイサップが相手をしているのは戦闘機人の1人、オットー。

彼女はどちらかといえば後方からの支援砲撃を主としている。

故に一对一の戦いというシチュエーションには不向きだ。

「これだけの数を使ってもまだ…」

エイサップから少し離れたビルの屋上で

自身の周辺に？型ガジェットをはべらせたまま、固い表情でオットーは呟く。

エイサップと相対してすぐにオットーは自分の周りをガジェットで
固め

攻撃は全て自身が操作担当しているガジェットによって行っていた。
ガジェットと戦闘機人では個体での戦力に大きな差があるとはいえ、
こちらは数で大きく勝っている。ガジェットで消耗させた上で
自分が止めを刺すという戦法を狙っていた。

しかし、先程から予想以上に粘るエイサップを見て少々焦り始めていた。

（あんまりアイツ1人に時間はかけてられない…）
代わりがいくらでもあるとはいえ、ガジェットとてこっちにとって
は貴重な戦力である。

他にも敵が大勢いるし、自分も地上本部制圧の任務が残っているの
だ。

「そこかっ!!」

と、そんな風に考えていた時、エイサップがオットーの姿を捉えた。
エイサップは刀剣の先に魔力を集中していき、大きめの光球をオッ
トーに向かって放つ。

しかし、それはオットーの周りにいる？型ガジェットが展開する
AMFによって容易く阻まれてしまう。

「くそっ…やはりダメか…!」

エイサップは悔しげに拳を握り締める。

「そっちから姿を現してくれて好都合だよ」

オットーはビルの屋上から飛び上がって、ISを発動する。

オットーが掲げた右手にコアが形成され、そこから何条もの緑の閃
光が放たれる。

エイサップはすぐさま後方に飛び退いてそれを回避する。

「時間もあまり無いか…ここで仕留めよう…」

先程感じていた焦りが更に大きくなっていたオットーはここで終わ
らせると決め、

周りに大量の飛行型ガジェットを呼び寄せて、エイサップの後を追
おうとする。

しかし次の瞬間

「なっ…！これは…！」

先程まで自分が居たビルの屋上から突如として何本もの白い光柱が伸びてくる。

それらは自分の周りに呼び寄せた飛行型ガジェット全てを刺し貫いていき、

自分を取り囲むようにして形成されていった。

「焦燥が視野を狭くしていたか…おかげで我が近づいてくるのに気づけなかったみたいだな…」

その少し上空で、白い魔法陣を展開したザフィーラが浮かんでいた。

「くっ…けどこの程度で…ボクを止めたつもりか…！」

新たな敵の出現に慌てつつも、オットーはすぐにISを発動

レイストームの閃光によってザフィーラの出した鋼の軛を瞬く間に破壊していく。

「……………」

敵の包囲網を突破したオットーはすぐに、ザフィーラの方へと視線を向け

再びISを発動しようとする。

「うおおおおお…！！！」

「えっ……………！！！」

だが、先程からの焦りがザフィーラの出現によって更に大きくなり周りが見えていなかったオットーは、背後から迫るエイサップに気づけなかった。

エイサップは刀剣を振り上げたまま凄まじい勢いでオットーに突撃していた。

そしてオットーが気づいて背後に振り向いたのと同時に

エイサップは刀剣にオーラを纏わせ、オットーに向かって全力で振り下ろす。

「ガッハア……！」

その一撃によってオットーは先程のビルの屋上に叩きつけられる。

直後、エイサップとザフィーラがその側に降り立ち

ザフィーラは更にバインド魔法でオットーを拘束し、力強い口調で言った。

「大規模騒乱罪、並びに先述の機動六課襲撃の容疑で、貴様を逮捕する……！」

＊

「!?!?!?!?!オットー!?!?!?!?!」

別の場所で戦闘を行っていたディードが、オットーの異変に気づく。

「遅いわあ!?!」

しかし、その一瞬の動揺すらサコミズは見逃さず

ディードに向かって二本の刀剣を同時に振るう。

咄嗟にディードはツインブレイズを構えて防御するも、後方に吹き飛ばされる。

「逃げてるばかりで…私を止められるかあ!?!」

サコミズは懷からブーメランを取り出し、ディードに向かって勢いよく投擲する。

すんでのところでディードは顔を横に逸らしてそれを回避するも。

「でやあ!?!」

再びディードの目の前にサコミズの刀剣が迫り、

ディードは瞬時に下へと下がってそれを避ける。

(この男……どこまで……!)

ディードは先程から防戦一方であり、サコミズの実力に恐れ慄いていた。

自分はセツテ、オットーと同じ戦闘機人の中では最も後期のナンバーである。

故にその完成度は高く、戦闘能力は機人の中でも上に位置しているのだ。

自身のＩＳーツインブレイズ的能力もあり、接近戦ではかなりの実力を持っている…

そう自負していたのだが、上には上がいたという事なのだろう。

ハウジョウ国の王にして、直心陰流剣術の体得者たるサコミズ相手に接近戦での剣での勝負を挑むというのがディードの間違いであった。

そんな事を考える余裕も無いままサコミズの猛攻は続く。

「地上界を汚す俗物が…チョコマカしおってえ！」

逃げてばかりのデイドにサコミズは苛立ちを感じており
激情に駆られるままに右手の刀剣を勢いよく振り下ろす。

それと同時に刀剣からオーラの波が発せられ、デイドに向かって
一直線に向かっていく。

「ッ…！遠距離まで…！」

デイドは焦りを見せつつも上に飛び上がってそれを回避する。

「…：クラールヴィント…」

だが回避を終えた直後、突如としてデイドは黄緑の鎖に全身を縛
り付けられる。

「うっ！…：な、何が…」

「どんなに逃げ回ろうと…：クラールヴィントのセンサーからは逃れ
られない…！」

何が起きたか把握し切れず、デイドは苦しげに声を上げる。

その近くのビルの上、クラールヴィントを構えたシャマルが立
っていた。

「サコミズさん…！」

次いでシャマルはサコミズに向かって呼びかける。

その一連の流れにはサコミズも困惑していたのだが、すぐに頭を敵
の排撃へと切り替える。

サコミズは両手の刀剣を同時に大きく振り上げる。

「乾坤…：一擲イイイイイ…！」

魂の底から放たれたような凄まじい咆哮と共に刀剣が振り下ろされ
先程とは比較にならない巨大なオーラの渦がデイドを飲み込んで
いった。

墜落したディードをクリアルヴィントで拘束し直した後
シャルは急いでサコミズの側へと向かう。

「あ、あの！サ、サコミズさん…」

どういうわけかサコミズの前では口調がおぼつかなくなるシャル。
「…いらぬ世話をかけてくれたな、真剣勝負の間に横槍とは」

「えっ！あ、あっ…その…！」

しかしサコミズにとって、ディード程度の相手はどうにでもなると
思っていたのに加え
地上を焼く敵とはいえ、一対一で戦っていた自分の戦いに茶々を入
れられてしまい

その事に対してシャルに不満を抱いていた。

そしてそんな明らかに不機嫌な様子のサコミズを見て、シャルは
あたふたしてしまう。

「戦いはまだ終わってはいない、私はすぐに次の敵を探すでしょう」

「は、はい……」

シャルの事など眼中に無いといった感じに、サコミズは踵を返す。
そんな彼の様子を見てシャルはしょんぼりとなってしまう。

「…だがまあ、私を助けようとしたという気遣いは、受け止めてや
らんでもないがな…」

「えっ…！！！」

去り際に、背を向けたままサコミズはこんな事をポツリと呟いてそ
の場を離れていく。

それを聞き逃さなかったシャルは驚いたように顔を上げ
そしてすぐに頬を赤らめてサコミズの後ろを見つめていた。

（わからんな…何故あのような女に…）
サコミズは飛んでいる最中、イラついたような感じに内心で呟いていた。

＊

結界が展開された廃ビル内

「……機人が2体やられたみたいだな」

オットーとデイドの敗北を、ギユネイも感じ取っていた。

「どーすんのさギユネイ？」

彼の隣にいるクェスは、緊張感をあまり感じさせない声で尋ねる。

「どの道ここでの戦力の低下は痛手になる…」

となれば、俺達がさっさと片付けて他に行くしか…ないだろ！！」
ギユネイは途中から語気を強め、6機のファンネルを同時に展開して自分達を取り囲んでいたティアナの幻影達を消滅させていく。

「あたし達ニュータイプを相手に！その程度では誤魔化せないってわかってるでしょ！」

クェスも同時にガトリングから魔力弾を乱射してギュネイを援護する。

その後2人は同時に飛び上がって、ティアナの居場所を探し始める。

「はあ…はあ…！！！」

ビルの物影に隠れてティアナは、足下に魔法陣を展開して幻影を操作していた。

その右足からは血が流れている。先のクェスの攻撃によって出来た傷だ。

「右足も潰されて…カートリッジも魔力も残り僅かか…」

右足の痛みを抑えながら、フラフラとティアナは立ち上がる。

「本当はさ…随分前から気づいてたんだ…私はどんなに頑張っても、万能無敵の超一流になてきつとなれない…」

ティアナは表情を曇らせて俯き、自分の心内を誰に聞かせるわけもなく

ポツリポツリと吐露していく。

「悔しくて情けなくて…認めたくなくてね…それは今も変わらないんだけど…」

そう言ってティアナは目を閉じる。

—大丈夫！ティアナならきっと出来るって！

一射撃と幻術で仲間を守って、知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける…

一君達はまだ先が長いんだ…体を壊したりしたら…

一なのは達の教えの賜物だな、もっと自身を持っても…

その脳裏に過るのは、自分と一緒に戦ってきた多くの仲間達…

「だけど…」

何かを覚悟したように、ティアナは表情を引き締めなおして顔を上げる。

「そこにいたのか!!」

直後、背後からサーベルを構えたギュネイが接近してくる。

咄嗟にティアナはクロスミラージュに魔力刃を展開してそれを防ぐ。

「しっつこいんだよホントに!!」

しかし更に別方向からクエスが現れ、シールドから閃光を放つ。

放たれた閃光は爆発を起こし、その爆煙からオレンジの魔力のワイヤーが伸びてくる。

その先からワイヤーを伝ってティアナが上昇してくる。

「これで終わりっ!!」

それを見たクエスはすぐさま自身の持つ6機のファンネルを展開しティアナを全方位から取り囲んで一斉砲撃を行う。

しかし、ファンネルの攻撃が放たれた瞬間、ティアナの姿は消滅する。

「うそっ！？これも幻影…」

仕留めたつもりがまたしてもあざむかれてしまい、クェスは驚きを浮かべる。

「そこだ！！」

間髪いれずに背後からティアナの声が響き、オレンジの魔力弾が飛んでくる。

その魔力弾は動きの止まっていたクェスのファンネルに正確に命中し、その内2つを破壊する。

そして、シールドの閃光による爆煙の晴れた先には、自分の周辺に2つの魔力弾を浮かばせ

両手でクロスミラージュを構えたクェスが立っていた。

(…今度こそ本物だな…しかし…何をたくらんでいる…?)
ティアナの姿を確認してギュネイは、意識を集中させて分析した結果目の前にいるティアナを本物と見抜きつつも慎重な姿勢を取っている。

「こいつ…！よくも私を…！！」

だが、その隣にいるクェスは対照的に怒りを露にしていた。

シャアの尖兵たる自分が、不意を突かれたとはいえこの程度の相手にファンネルを破壊される…

その事実が焦燥感と怒りを生み出していたのだ。

「調子乗る前に：終わりにしてやるう！！」

クエスが残った4機のファンネルを分離させる。

「クエス！早まる必要は無い！」

「何さ！アタシ達がこんなニュータイプでもない小娘相手に…」

「…ええいっ！」

ギユネイの制止も聞かずに、クエスはファンネルを分離させて突撃する。

仕方無しにギユネイも、サーベルを展開してティアナの背後に迫る。

その瞬間、ティアナが最後の攻勢を転じた。

「ッ：ここっ！！」

浮かばせていた2つの魔力弾を前後に1つずつ射出する。

ギユネイとクエスはそれを難なく回避してティアナへと迫る。

「そんな程度の射撃で！」

クエスは声を張り上げながら残ったファンネルを操作しつつティアナに突撃する。

「そこだあ！！」

ティアナは前方から迫ってきたクエスのサーベルを、クロスミラージュの魔力刃で受け止める。

その直後に横へと飛び退いて、クロスミラージュから魔力弾を連射する。

放たれた弾丸の雨がクエスの残っていたファンネル内3つを破壊する。

「そんな…：がっ：！！」

またしても攻撃を防がれてクエスはうろたえてしまう。

そしてそれによって感情が完全に乱れきっていた為、
ティアナが最初に放った魔力弾に気づく事が出来なかった。
後頭部からまともに一撃を喰らい、クエスは地面へと沈む。

それに安心する事無く、ティアナはすぐに体を横へと大きく捻り
クロスミラージュの刃を振るう。

キーン！！

「貴様…よくもクエスを……！！！」

爆煙の先からギュネイの放ったサーベルが現れ、ティアナのクロス
ミラージュの刃と交わる。

ティアナは後方へと大きく飛び上がってギュネイから距離を取る。

「逃がすか！ファンネル……！！」

ギュネイは自身のファンネルを分離させ、ティアナに向けて放つ。
（…狙うならここだ！）

飛び上がったままティアナはクロスミラージュから魔力弾を放つ。

それを感じ取ったギュネイもファンネルを散開させるが、

初動のタイミングを狙われた所為もあり、その内1つが破壊される。

（やっぱり：戦闘の間に何度も見てきたから：わかる：）

廃ビルの上層に降り立ち、ティアナはしゃがみ込んだまま身構える。直後、残った5機のファンネルが自分を取り囲むようにして出現する。

（一見不規則に見えるアイツらのユニット攻撃：一定のパターンがある：！）

ファンネルが一斉に攻撃を放ち、ティアナは横へと飛び退く。

すかさずファンネルがティアナを追跡する。

直後、ティアナはアンカーを射出し、上層部の反対側へと移動する。

「ニュータイプ：か：私にはそれが何なのかよくわからないけど：」
アンカーでの移動中、ティアナは静かに呟きながら魔力弾を放ち
自分の方へと向きを変えた直後のファンネルを3機、正確に撃ち落す。

「貴様ア！！」

反対側へと着地した瞬間、下層からサーベルを構えたギュネイが飛び上がってくる。

だが、クエスを撃破された怒りによってギュネイもまた冷静さを失っており

その単純な軌道の一撃は、ティアナのクロスミラージュによって防がれる。

「チィッ……なあっ！！」

そして忌々しげに舌打ちを打った直後、脳天に激痛が響き渡り
ギュネイも地面へと倒れこんだ。

先程のクエスと同様に、上空に潜んでいたティアナの魔力弾による一撃だった。

操作主が戦闘不能になり、2人の残っていたファンネルも消失する。

それと同時に廃ビルに展開されていた結界も消滅していった。

ティアナは戦闘の緊張から解放され、その場にペタンと座り込む。

「特別だなんだ言いたいなら：アムロ一尉くらいの力を身に付けてからにしないよ：！」

そして息を荒げたまま、倒れ付したギュネイを見ながら強い口調でこう言った。

＊

ミッド地上の道路上

「あっ……くあっ……」

「まったく：手間取らせやがって……」

ノーヴェがスバルの首下を掴んで、彼女の体を高く掲げていた。スバルは必死にその拘束から逃れようと呻いている。

2人ともこれまで繰り広げていた激闘によって、体中至る所が傷や汚れで染まっている。

「うわああ！！」

ノーヴェは勢いよくスバルを、掴んだ片手で放り投げる。
スバルは悲鳴を上げながら地面を何度かバウンドして仰向けに倒れこむ。

「ISも使わねえで…あたしに勝つつもりだったのか？」

倒れこんだスバルを冷たい目線で見下ろしながらノーヴェは吐き捨てる。

スバル膝をついたまま苦しげな表情を浮かべたまま何も答えない。

「チッ…あたし達と同類の分際で…そういうスカした態度がムカつくんだよっ!!」

怒れるままにノーヴェは脚部のジェットエッジを吹かし、スバルへ向かって猛スピードで突撃して拳を振り上げる。

「!!!!!!」

ノーヴェの拳が眼前に迫り、咄嗟にスバルは手を前に出して防壁を展開する。

ノーヴェの打撃はそれを貫くには至らず、一旦後方へと下がる。

「さっきからそうやって…防いでばっかじゃねえかよ…」

距離を取ったノーヴェは再びイラついた口調で声を発する。

「チンク姉をあんな風にしといて…あたし相手には手加減するってのか…あァ!？」

そしてドスの効いた声を発してスバルに向かって怒鳴った。

この戦闘中、スバルはISを使用していない。

それによってスバルとノーヴェの攻防は殆ど互角のまま進んでいたのだが

ノーヴェにとってはそれがどうも気に食わなかった。

スバルからは敵対心というのがあまり感じられなかったのだ。

ノーヴェにしてみれば、あの時の暴走した彼女を見ているうえに自分の尊敬する大事な姉を完膚なきまでに破壊したような相手だというのに

自分相手にはそういう姿勢を取らないのが余計に苛立ちの原因となっていた。

「そう…だよ……」

すると、スバルは俯いたままポツリと声を発する。

「私は…あなた達を壊したいわけじゃない……」

そう言ってスバルは顔を上げ、強い意志のこもった表情でノーヴェと真っ直ぐに相對する。

「確かに私もあなた達と同じ機械の体だよ…それで苦しい思いもたくさんしてきた…

だけど…だからって…その力を何かを壊す為だけに振るうのは…私は間違ってると思う！」

途中から声を張り上げながらスバルは続ける。

「あなた達の事情はよくわからないし…あの時私があなたのお姉さんを傷つけたのも事実だよ…

けど…あなた達だって戦うだけの機械なわけがない！ちゃんと罪を認めて保護を受ければ…

まだ生きなおす事だって出来る筈だよ！！」

「甘っちょろい事ぬかしてんじゃねえ！！こちとら戦闘機人…戦うための兵器だ！

戦って勝ち残っていく以外の生き方なんて無えんだよ！！」

スバルの言葉を聞いてノーヴェは更に感情を高ぶらせ、真っ向からスバルの意見を否定する。

「テメエと問答してるとホントにムカつくぜ…いいさ…次で終わらせる」

そう言ってノーヴェは足下にテンプレートを展開して身構える。

「セカンド…テメエをぶっ壊したら…すぐにファーストも粉々にしに行つてやんよ…！」

ノーヴェが構えたのを見て、スバルも足下に魔法陣を出現させる。
（この手の力は壊すためじゃなくて…守るための力なんだ…
あの時みたいに暴走して…何もかもを叩き壊すだけの力なんかじゃない…!）

心内で呟きながら、リボルバーナックルのカートリッジをロードして魔力を高めていく。

同時に、マッハキャリバーのフルドライブを発動させる。

（悲しい現在^{いま}を終わらせる為に……今は……!）

スバルの魔法陣がより一層強い輝きを放ち始める。

「ギア・エクセリオン!」

スバルの咆哮と同時に、マッハキャリバーに2つの水色の翼が出現する。

それを見てノーヴェは一步も引く事なくスバルを睨み続ける。

そして、一瞬の間を置いた後…

「うおおおおお!!!」

「どおりやあああ!!!!」

スバル、ノーヴェの両者が真っ向から激突し、周辺に凄まじい衝撃が舞う。

両者の拳は、互いの眼前に展開された防壁によって皮一枚の距離で留まっていた。

「なめんじゃ：ねエエエエ！！！」

更なる咆哮と同時にノーヴェはガンナックルの出力を上昇させていく。

それによってスバルの防壁に徐々にヒビが入り始める。

「もらったあ！！」

勝ちを確信したノーヴェはそのまま勢いに任せて防壁を破壊する。

「ツツツ！！」

その刹那をスバルは見切り、顔を横へとズラす。

ノーヴェの拳は間一髪でかわせれて空しく空を切った。

「一撃……必倒！！！！」

少しの隙も入れず、スバルはカートリッジロードによって魔力を上昇それによってノーヴェの展開していた防壁も消滅する。

「クッ……！！」

ノーヴェは焦って態勢を立て直そうとするが、その間にスバルは左手に魔力を集中させてノーヴェの腹部へと突き出す。

「デイベイン……！！」

左手の魔力が巨大なスフィアとなって現れる。

スバルはリボルバーナックルを備えた右腕を大きく振り上げ

「バスタァアアアア！！！！」

左手で形成した魔力を勢いよく撃ち出す。

それによって放たれた水色の閃光がノーヴェの体を宙へと舞わせた。

＊

ビルの屋上、エリオとキャロがルーテシアと相対している。

彼らの周辺ではアムロやシャア、ガリユーやフリードが舞い、激闘が繰り広げられている。

ルーテシアの表情は激しい憎悪と怒りによって酷く歪んでいる。

目の周りの血管が大きく浮かんでおり、そんな彼女の周辺には

ヒュギエイアによって生み出した大量のファンネルが展開している。

「ルーちゃん！もうやめようよ！私達がここで戦ったって何にもならないよ！！」

キャロは尚もルーテシアに向かって訴え続けていたが

キャロの言葉はルーテシアには届かず、逆に彼女の神経を逆撫でするだけであった。

「…あなた達にはわかる筈も無い…優しくしてくれる人も…友達も

…沢山いる…

いろんな人から愛されてる…」

突風が吹き、ルーテシアの長いピンクの髪が大きく靡く。

「ゼストも…もういない…ギュネイもクェスもやられちゃった…

アギトやマイヨだって…もうすぐどこかへ行ってしまう…」

両腕を広げ、アスクレピオスに魔力を込めていく。

「私の大切な人は…私といつでも一緒にいてくれる人は…今はシャアしかない…」

シャアは私の全て…私を助けてくれた大切な人…

そのシャアの邪魔をするのがあなた達…だから…！！！！」

アスクレピオスから光が放たれ、ルーテシアの足下に紫の魔法陣が現れる。

それと同時に彼女の背後の上空に巨大なサークルが出現

そこから白い巨体の召喚蟲―白天王が召喚される。

「出して……あの黒い竜を……アイツがシャアを傷つけた……」

アイツがシャアに酷いケガを負わせた……あなたの竜が……あなたが達がッッ……!!」

吼える様にルーテシアは声を張り上げて叫ぶ。

それに呼応するかのように、背後にいる白天王も雄叫びを上げる。

「キャロ！」

「うん……!!」

エリオの声を聞いて、キャロは何かを振り払うように首を振り、そして表情引き締めてケリュケイオンを構えて魔法陣を展開する。

「天地貫く業火の咆哮……遙けき大地の永遠とわの護り手……」

我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者……!!」

キャロが呪文を紡いでいくと、白天王の目の前に巨大な火柱が立ち上っていく。

「そうだ……よく似てるんだ……僕達とルーは……」

キャロの隣でストラーダを構えなおし、エリオも静かに呟っていく。

「ずっと一人ぼっちで……誰も守ってくれなくて……誰も信じられなくて……何もわからなくて……」

でも……大事な人がいてくれる……その人の為に戦っている……」

自分の過去と、目の前の少女、ルーテシアの存在を重ね合わせ

自分の思いをエリオは語っていく。

「……僕達だって本当は……こんな戦いなんかしたくない……」

けど……君がああシャアという人の為に戦うように……僕達もフェイトさんや皆の為に戦っているんだ!

だから……ここで引くわけには行かない! この戦いを終わらせてフェイトさんも皆も……そして君も! みんな救ってみせる!

エリオが己の決意を言い終わると同時に、キャロの召喚も完成する。

「竜騎招来……天地轟鳴!! 来よ、ヴォルテール!」

展開していた火柱から漆黒の巨竜―ヴォルテールが姿を現す。

白天王はしばらく硬直していたが、やがてその巨大な両腕を振り上げて
ヴォルテールに襲い掛かる。ヴォルテールはそれを受け止めて真
っ向から対立した。

「あなたの事もあなたのお母さんの事も…あなたの大切な人も…
私達がきつと助ける…ルーちゃん達の事…きつと幸せにする…！
絶対絶対約束する…！だからこんな事もうやめて…！」

ヴォルテールと白天王の眼下で、キャロは涙声になりながらも
ルーテシアの説得をあきらめない。しかしルーテシアは頑なに拒み
続ける。

「嘘だ………！！！」

「嘘じゃない！！！」

「嘘だっ…！嘘だああああ！！！！！」

ルーテシアが再び咆哮し、彼女の周辺に膨大な量の魔力が溢れ出す。
ルーテシアは更に周辺に浮かばせていたファンネルを操作するべく
右手を掲げる。

「……ッ…！」

しかし、そんな彼女の手を抱きとめる者がいた。

「ガリユー…何してるの…？」

ルーテシアは自分の手を掴んだまま離さないガリユーを困惑した表
情で見つめる。

ガリユーは何かを訴えるかのように、首を横に振る。

「その子だって…きつとわかってるんだよ…私達が争ったって何も

…」

ガリユーの様子を見て、キャロがひしひしとルーテシアに対して呟く。

「ガリユー…！…あなたも…あなたもなの…！！」

しかし、ルーテシアはその表情を再び憎々しげな物へと変貌させガリユーの背後にファンネルを浮かばせる。

「私のいう事を聞かない子なんて…いらないっ！！」

ファンネルから大量の砲撃が放たれ、ガリユーに直撃する。

それをまともに喰らったガリユーはビルの下へと落下していった。

「自分の召喚蟲を…！！！！」

その光景をエリオは呆然として見つめていたが

ルーテシアはガリユーを全く気かけずに言葉を発していく。

「白天王…殺して…！！私達の…シヤアの邪魔をする奴…！！」

その言葉と同時に、白天王の腹部に巨大な紫色のコアが出現する。

「貴様らが…！！」

「…！！…うわあああ…！！」

その瞬間、更に上空からサーベルを構えたシヤアが急降下してくる。気づいたエリオが咄嗟にストラダーを構えて応戦するも、背後に弾き飛ばされる。

「エリオ君…！！」

「貴様らがルーテシアを惑わせるのか…！！」

それを見てキャロが叫ぶが、シヤアはキャロにもその刃を向ける。

彼の頭には最早、理性など殆ど残っていなかった。

全ては、ルーテシアと自分を邪魔をする人間を倒す事しか考えてなかった。

「させるかっ!!」

しかしそんな彼の暴動を、アムロが黙って見ているはずも無い。

アムロはキャロとシャアの間に割って入り、自分もサーベルを振ってシャアを吹き飛ばす。

「アムロさん!!」

「殺してやる……」

「!!!!」

キャロが殺気を感じて背後に振り向くと同時に

ルーテシアがファンネルを移動させてキャロを取り囲む。

キャロは咄嗟に防壁を展開してそれを防御する。

そのままケリユケイオンでフリードに指示を出し、彼の火炎でファンネルをまとめて焼き払う。

「殺してやる…殺してやる…殺してやる殺してやるコロシてやるコロシて…やルツ!!」

「ルーちゃん!!!!」

ルーテシアもまた、感情の殆どが吹き飛んでしまい、壊れた機械の様に同じ言葉を繰り返す。

キャロは涙を散らしながら、必死に訴えるが

「地雷王!!!!!!」

ルーテシアは容赦なく地雷王を呼び寄せ、白い閃光を放って攻撃を行う。

「フリード!! ブラストレイ!!」

それに対してキャロは、フリードの火炎砲によって応戦する。

地雷王の閃光と、フリードの火炎が激突して拮抗する。

「ルー…ちゃん……!!」

キャロはその2つの衝撃に吹き飛ばされぬように、必死になりながらルーテシアを見つめる。

「うわアアアアアア！！！アアアアアアアア！！」

ルーテシアは両腕を前に突き出し、両目を大きく見開いておぞましい雄叫びを上げる。両腕のアスクレピオスは魔力の過負荷によって電流が迸り

彼女の両目からうっすら血が流れ出ていた。

互いにサーベルを交わらせながら、アムロとシャアは再び問答を始める。

「あれでマシンじゃないなどと、どの口で言えるんだシャア！！結局は貴様の身勝手があの娘を苦しめてるだけじゃないか！！」

暴走するルーテシアを見つめて、アムロは怒りを露にしながらシャアに言葉を発する。

今のルーテシアは最早、自分が数多く見てきた、力を制御出来ずに暴走する…

それこそ多くの悲劇を生んできた強化人間のような存在と変わりないように見えたからだ。

「黙れッ！！貴様らさえ…貴様らさえいなければッ！！」

それに対してシャアは、まともに反論するだけの冷静さすら失っていた。

彼自身もまたルーテシアの暴走に心を痛めていたのだが、

それが彼にとって認め難い真実として重くのしかかり、

同時に自分が昔から何も変わっていないという事実に向面してしまい

彼の心を激しく揺さぶっていたのだ。

「ルーテシアは：ルーテシアは私にとっての希望なのだ！！」

貴様やこの世界の愚民どもには何もわからんだろう！！

私達がこれまでどれ程の屈辱を味わってきたか：どのような苦しみを感じてきたか！！」

目の前に魔法陣を展開して、大量の魔力弾を発射する。

アムロはそれをシールドを構えて防ぐが、直後にシャアがサーベルを振り下ろしてくる。

間一髪で横にステップ移動してかわし、自分もライフルから閃光を放つ。

シャアは頭を下に下げてギリギリの位置でかわし、再びサーベルを今度はアムロの脚部めがけて横なぎに振るう。

アムロはバックステップで回避するも、僅かにサーベルが足を掠めていく。

「私の思い描く理想を悉く潰してきたのは貴様だ！！」

ニュータイプによる世界の建造：人類の革新：その全てを貴様が！！」

「だから！地球を潰す様な事が！挙げ句異なる世界を混乱させるような事が許されるのか！？」

「この世界も私達の世界も結局は同じ事だ！！」

デラーズ・フリートによるガンダム試作2号機の強奪にコロニー落とし：：

ギガノス、木連連合、火星の後継者達：反連邦政府組織の反乱や

一部のゼントラーディやメルトランディとの衝突：！！」

そして再び互いに距離を取り合いながらのライフルの撃ち合いへと移行する。

その最中でシャアは自身の世界で起きてきた戦乱について語っている。

「そして私の起こしたネオ・ジオンとの抗争：その先に私が見た物：管理局最高評議会による腐りきった蛮行：ジェイル・スカリエツテ

イのような

俗物の製作……アギトの様な融合機の血も涙も無い実験利用……！！
本局の暴動によって荒廃していく世界の数々や……年端も行かない子供が

戦場に送り込まれ……更にはルーテシアの様な罪も無きニュータイプ
を実験動物にする……！

これだけ見せられておいて……こんな世界に何の希望を見出せという
のだ……！！

ライフルを放ちながら高速飛行し、シャアは残った最後のファンネルを射出する。

アムロもそれに応対するように最後のフィンファンネルを放つ。

ミッドチルダのビル街に2人のライフルとファンネルの閃光が縦横
無尽に飛び交う。

「全ては腐敗した巨大な組織が生み出した事だ……！！

それを打倒しなければ私にもルーテシアにも決して未来は無い……！！」

「その為になら……！！ああしてあの少女に重荷を課す事も……！！

罪も無い人間を何千万と殺そうと構わないというのか……！！」

「黙れ……！！貴様が私とルーテシアの邪魔をしているからだ……！！

貴様らさえいなければ……こんな腐った組織と世界の味方をする貴様
らが……！！」

シャアは感情に任せて叫ぶ事しか出来ず、自身の理論の正否など全
く頭の外であった。

「……世直しの事を知らないんだな」

そんなシャアに対して、ライフルを撃ち合いながらアムロは冷静な
声で返していく。

「革命はいつもインテリが始めるんだ。夢みたいな目標をもってや
るから、

いつも過激な事しかやらない……！！しかし、革命の後では気高い革命の
心だって

官僚主義と大衆に飲み込まれていくから……インテリはそれを嫌って

世間からも政治からも身を引いて世捨て人になる！だったら…」

「愚民どもに才能を利用されている…：貴様が言う事か！！」

シャアはアムロの背後へと移動し、直接拳を叩きつけようとする。それにアムロが反応し、2人は空中で取っ組み合う形になる。

「私が考えているのは世直しなどではない…：全てはルーテシアの様な革新を果たした者…：ニュータイプの為の世界を生み出す事に他ならない！

云わば世直しなどではなく、破壊と創造だ！！」

シャアの蹴りがアムロの腰部に直撃する、

その痛みに呻きながらアムロは直接左拳をシャアの顔面に叩きつける。

「グッ…：一度思い知らさなければ…：それこそ世界の滅亡でも見せ付けなければ…

人類は何も変わらんのだ！！一時の平和が導くのは平和に対する甘えと

更なる戦乱への引き金だけだ！！」

背後に吹き飛ばされながらもシャアは態勢を立て直してアムロと距離を取る。

「貴様は言ったなアムロ…：未来は世界に住む1人1人の人間の手で作るものだ…：！

それでは遅すぎるのだ！誰かが人類の業を背負い…：そして人類全体がやり直さねば

人類全てが革新を迎えねば…：世界にも私達にも…：誰にも未来など無い！！！」

「…俺とですら意見ぶつけ合わせ…：互いの事を分かり合う事が出来ない…

ニュータイプなんてそんなもんだよシャア…：この力も1つの革新かもしれない…

だが…億が一貴様の目論見どおりに全ての人間がニュータイプになったところで…

こうやって俺達のように、互いの心内を知る事でより衝突を深める者達や

あの少女のように何かを妄信して心を痛める者は必ず現れる……」

そして互いに距離を取ったまま、2人はそれぞれの持論を述べながら身構える。

「人類が互いを理解しようと務める……その1つの形がニュータイプだ……」

そしてそれは多くの人間が自分で努力し築いていくべき事……

だからこそその力を大切にしより多くの人々を理解しようと務める事が出来る……

他人に強要された革新など……結局は新たな欲望と悲劇を招くだけだ！！

だから俺は貴様のやり方を認めない！！人はまだ、自分の力で先に行けると俺は信じている！！」

「アムロッッ！！！！！」

2人はサーベルを構えて同時に突撃する。そして2人の姿が重なって辺りに電流が舞った。

「……………」

「……………」

2人はしばらくの間硬直していたが

「ウッ……アッ……」

やがてシャアの体がグラリと崩れ落ち、アムロに支えられる形にな

る。

シャアの放ったサーベルはアムロの右肩を掠めたものの、致命傷には至らず

逆にアムロの放ったサーベルはシャアの脇腹を正確に捉えていた。

「アムロ……これだけの力を、何故世界のために使わない……!」

腹部からドクドクと血が流れ、意識が朦朧とする中で、シャアは擦れた声を発して問いかける。

「…俺達は世界と人類のために戦っている。お前のような人間を止める為にな…」

シャアに対し、アムロは静かに言葉を紡いでいく。

「貴様のような人の死に乗っ取った革新……そんなのは世界の為でもなんでもない……ただの破壊だ…」

さっきも言ったが俺は答えを急ぐつもりはない……例えば人の戦いが何年続こうと…

いつかは絶対に終わる……いや、俺達やその意思を継ぐ者達によって必ず終わらせる…

そして強要されなくても人はきっと革新を迎える筈だ……何万年かかったとしてもな…」

アムロは途中から声色が段々と曇っていき、

シャアに対してどこか哀れみを感じさせるものになっていた。

「シャア……お前だって本当は……その事に気づけたはずなんじゃないか……?」

「……………」

アムロの言葉を聞いてシャアは一考し、ふと周りへと視線を移す。

地面へと叩きつけられたガリユーは、エリオの介護を受けている。

地雷王の大群はフリードによって粗方片付けられている。

白天王はヴォル・テールの放ったギオ・エルガによって倒されている。

そしてルーテシアは、力の暴走を制御出来ずに自爆した形となり今は気絶したその身体をキャロに抱えられる形になっている。

勝敗は完全に決していた。

「……私は…答えを出すのを…急ぎすぎたというのか……」

シヤアは何もかもがわからなくなり、完全な放心状態になる。意識も段々と遠くなっていき、瞼が重くなっていく。

そしてその瞳が閉じられようとした瞬間、彼の脳裏に浮かんしたのは1人の女性…

ニュータイプという存在を知る切欠になり、自分の母になってくれるかも知れなかった人物…

「……ララア…教えてく…れ…」

そう一言呟いた後、閉じられた瞳から一滴の涙がこぼれ落ち、シヤアは意識を完全に手放すのであった。

第31話（前書き）

久しぶりの更新…何度も本当に遅れて申し訳ない…

サブタイトル…親子揃って腹黒い

第31話

激闘が続くミッドチルダ、

そのやや離れた空域を高速で飛行する3つの人影があった。

「到着まで：あと20分程度ってところね：」

「そうか：今すぐにでも加勢したいところだというのに：」

「それでも私達だって全力で飛んでるんだよー！！」

左側を飛行する女性の言葉に、中央にいる黒基調の管理局の制服を纏った青年が

表情を曇らせながら呟く。更にそれをきいて右側にいる女性が見た目とは不釣り合いな子供っぽい口調で怒鳴った。

「わかってるさ：そもそも僕がこの場に来ている事自体が、かなりの無茶なんだからね」

その女性の言葉を聞いて、真ん中の青年は冷静な口調で呟く。

「：すまないな、引退した君達や提督にこんな無理をやらせたりして」

「もー！今更何情け無い事言ってるの！弟子は弟子らしく、師匠に甘えてなさいな」

「そりゃ今のあなたは本局でもかなりの要人：迂闊に動くのは難しかったけど：」

そのアナタがそうまでして助けたい仲間だっていうなら：私達が手伝えるのは寧ろ光栄よ」

次いで青年が両サイドにいる女性にすまなさそうに言うがそれを聞いた2人の女性は少しも気にしている様子は無いようだ。

「：誰かを救いたいと思う気持ちは、誰にも止められないくらい強い物：」

今なら君の言葉がわかる気がするよ、バレル：」

青年は表情を真剣なものへと変貌させる。そんな彼の首下には緑色の翼のオブジェが吊り下がっていた。

＊

戦艦はこぶね、ジル・バルドナの個室にて、バレルとフェイはバルドナと相對していた。

「まずはお礼を言わねばなりませんねえ…

バレルの事を守ってくれてありがとうございます…フェイさん…」
白衣のポケットに両手を突っ込んだまま、バレルはフェイに対して静かに礼を言う。

それに対してフェイは、固い表情をしたまま沈黙を続けている。

「そして…大きくなりましたねえ…立派に成長してくれて嬉しい限りですよ…」

次いでバルドナはポケットから手を出して両腕を大きく広げバレルに対して再会を懐かしむような穏やかな声色で言った。

「……………」
しかし、バレルもまたフェイと同様にバルドナの言葉に反応する事は無い。

「どうしましたバレル？ 私はあなたの父親なのですよ…嬉しくないのですか？」

それに対してバルドナは小首を傾げて尋ねる。

「……あなたが俺の父親だとか…そんな事はどうでもいい…！」

それを聞いて、バレルがバルドナに対する視線を強めて言い放つ。

「アンタは：アンタはこの世界で何でこんな事をしている：

スカリエッティと手を組んで：一体何が目的なんだ」

一言一言に恨みを募らせるかのような、重々しい口調でバレルは続ける。

バレルにとって目の前の人物が自分の父であるとか、そんな問題は一切関係が無かった。

自分とフェイに対する親しげな態度も、これまで彼がしてきた事を考えれば

寧ろ白々しさしか感じさせず、それが余計にバレルをイラつかせる要因となっていた。

「：私も同感です、バルドナ博士」

バレルのような怒りは見せずとも、フェイもまたバルドナに対して疑念を抱いていたのだ。

「あなたはあの時私をかくまってくれた、とても理解ある科学者だと思っていました：

けど今はそう思えない：バレルやフェイトさんそっくりの人間を生み出したり：

スカリエッティと手を組んでこの世界を混乱させ：挙げ句、こんな巨大な戦艦まで持ち出して：」

フェイは震える声でバルドナに対して言いたい事を投げかけていく。「教えて下さい！あの後あなたに何があったんですか！？」

私にバレルの事を頼み、二つの世界の在り方についていつも真剣に考えていた：

あの時のバルドナ博士はどこに行ってしまったんですか！？」「……………」

2人の訴えを、バルドナは黙ったまま能面のような表情で聞いているが

「ふう……残念ですよフェイさん：そしてバレル」

全てを聞き終えた後、バルドナはため息を一つ吐いた後

2人から背を向けて部屋の中をテクテクと歩き回る。

「あなた達がここに来てくれたのは、私に協力してくれるためではないのですね？」

「ッ…何をふざけた事を…！」

思いもよらないバルドナの言葉に、バレルは更に表情を歪める。

「だっておかしいではないですか？バレル、あなたは私の息子なのですよ？」

子供なら…親の言う事成す事にはきちんと従うべきなのです

それなのに…その親を殺したあんな出来損ないと共にいるとは…悲しいですね…」

「出来損ない……」

その一言を聞いて、フェイは何かを思い出すようにポツリ呟く。

彼の言う出来損ない…それは、今では自分達の大切な仲間であるベルクトの事だ。

そして目の前の彼は、そのベルクトに殺された筈…であったのだ。

「…バルドナ博士、どうしてベルクトの事を出来損ないと呼ぶのですか？」

「おやおや、フェイさんまでアイツを庇うのですか？」

次いで出てきたフェイの問いかけに、バルドナはさも以外といった感じに返答する。

「…ベルクトから聞いたんです、あなたの本当の目的はバレルに会う事だったと…」

そして彼は自分で…たまたま生まれたバレルではない何かだったとも…」

「おや、自覚あったんですか？だったら何故私に噛み付いてきたのやら…」

先程からバルドナは場の雰囲気にとぐわない、軽いノリで受け答えを続けている。

呆れた感じの口調でフェイの言葉に反応した後、くたびれた様子で言い捨てた。

「簡単ですよ、あの出来損ないは文字通り私の期待に応えられないゴミだった…

だからバルドナドライブの鍵になる程度の価値しか無かった…それだけですよ?」

「何だと…!!」

「バレル…抑えて…」

バルドナの口ぶりに、バレルは沸々と怒りが湧き上がってくるが、それをフェイが宥めている。

が、そんなバレルの気持ちなどお構いなしに、バルドナは淡々と話を進めていく。

「そもそもあの世界自体、偶発的とはいえ私がドライブの起動実験の事故によって生み出した世界…
単純に言えばあのもう一つの地球を生み出したのは他ならぬ私なのです

世界を創建したなど…科学者としてはこれ程無い最高の名誉ではないですか…ククク…」

ウツトリと、実に不気味な雰囲気醸し出しながらバルドナは続けていく。

「バルドナドライブ自体は、UCEの要請を受け入れて製作していたただの兵器に過ぎません…

それが世界を創造し、そして二つの世界を繋ぐ扉となった…私にとっての究極の発明となったのです

そしてその究極の発明を、また更に偶発的に操れる鍵として選ばれたのが…」

そこまで言って、バルドナはバレルをピシッと指差す。

「バレル…：当時はまだ幼かった…私の自慢の息子だったのです」

「息子…：じゃあ何であんたはベルクトの事は…」

バルドナの態度にも演説にも全くたじろぐ事無く、バレルは逆に質問を返す。

自慢の発明を動かすだけの道具だというなら、自分にもベルクトに

も差は無いはずなのだ。

だが、バルドナはそれに対して更なる質問でバレルに言葉を返した。

「そもそも何故、あなたが生まれたのかわかりますか？」

「俺を…」

「簡単な事です、私の素晴らしき知能を受け継ぐスペアとしてですよ」

「……！」

「バルドナ博士……！」

フェイはバルドナに叫ぶと同時に、信じられないという気持ちになっていた。

ベルクトはおろか、目の前のバレルすら道具のような物言いをして
いる……

これが本当に、自分にイクスブラウを託し、バレルを頼むと言った
あのバルドナ博士なのか？

「誕生したばかりのもう一つの世界は、こちらの世界とほとんど同
じでした

ただ一つ、スカブコーラルの存在を除いてですけど……

そしてスカブの存在によって除々に私達の世界と違う歴史を歩んで
いったのです……」

しかし、フェイの訴えすらもどこ吹く風で、ハルドナは更に別の説
明を始めていく。

「だから私はまず最初に、向こうの世界のもう一人のバレルを探し
出した……

そして元の世界でのノウハウを生かし、新たに樹立した地球連邦政
府にら取り入って

表向きは『B計画』と称して、もう一つのドライブの製作を始めた
のです……」

すると、そこまで言ってバルドナの口調が急にキツイ物になる。

「だがガッカリしましたよ……成長するに従ってあの出来損ないは私
の期待を大きく逸れていった……」

ドライブの鍵になる以外は、どのような実験を行っても規定の数値を下回る結果ばかり：

私の息子と呼ぶには到底相応しくない、出来損ないだったのです」

「相応しくないって…彼だって普通の一人の人間ではありませんか！それを博士は道具のように扱ったのですか！？」

「何を言っているのです？自分の子供を道具にする親のどこが不自然なのですか？」

「「なっ……！！」」

激昂するフェイに対し、またしてもバルドナはサラリと言っている。

その言葉にはさすがのバレルとフェイも驚きを隠しえなかった。

「だってそうでしょう？子供が生まれるのは親がいるからです。

なら子供は親の為に尽くすのが当然の理です。そうやって初めて自分の子供と呼べます。

あの出来損ないは、天才科学者たる私の言う事に応えられなかった…親の言うとおりに出来ない子供など、子供ではない…出来損ないです」

「バルドナ博士…！」

フェイも葉をグツと噛み締めて、バレルと同じように怒りを浮かべ始めた。

「それを何を勘違いしたのか…あの出来損ないは私を殺そうとしてきた…」

なら、元の世界にいる方を自分の子供にするしかない…

その為にフェイさん…あなたにバレルの事をお願いしたのですよ…まあ最も…今ではBBもセディスもいますし…その様子を見る限りでは

そこにいるバレルもまた、私の子供に成り得る可能性は低そうですねえ…」

会って数分の時に見せていた再会を懐かしむ親の表情は完全に消えうせ、

今のバルドナは冷酷な科学者の表情となっていた。

そして、先程からのバルドナの身勝手な物言いに

怒りの許容範囲が限界へと近づいていたバレルは、低く唸る様な声でこう尋ねた。

「じゃあ…アンタにとっての…子供ってのは何なんだよ…？」

「しつこいですねえ…何度も言わせないで下さい…」

バルドナは呆れた感じでバレルの方に視線を向け、そして言い捨てた。

「子供は親に従う忠実な道具、そうでないものは子供ではなくゴミ。それだけですよ」

「……！！…お前エエエエエエ！！！！」

遂に限界が来て、バレルの中で何かが崩壊していく。

怒りに駆られるままバレルは実態剣を構え、バルドナに突撃していった。

＊

Bルーム、トーレ&セツテとゲイナー、シンシアの戦いが続いていた。

「でやああ！！」

「はああああ！！」

互いに空中を舞うゲイナーとトーレが、それぞれの武器を高速で何

度も打ち合う。

「姉様!!」

その2人の攻防の間に、地上からセツテがブーメランブレードを投擲して援護する。

ゲイナーは瞬時にそれを察知して、迫り来る二つの刃を回避する。

「そこかっ!」

そのまま地上にいるセツテへと突撃して、手にしたチェーンガンを振るう。

しかし、セツテはブレードを再構築し、ゲイナーの攻撃をそれによって受け止める。

「IS：スローターアームズ:」

セツテが低い声で呟く。すると、最初に投擲していた二つのブレードが

突如軌道を変えてゲイナーの背後から迫ってきた。

「そうれっ!」

しかしゲイナーがそれに気づくと同時に、別の場所にいたシンシアが右腕を銃口の形へと変形させ、そこから魔力段を放ってブレードを撃墜する。

「シンシア!」

「油断しないのゲイナー!」

胸を張ってちょっとムツとした感じにシンシアは言い放つ。

「貴様もだシンシア!!」

が、その彼女の背後にトーレが猛スピードで迫ってくる。

しかし、シンシアは涼しい顔をしたまま右腕を剣に変形させ、体を背後に大きく捻る。

直後、シンシアの剣とトーレの魔力刃が激突する。

「クッ:!!」

「アンタもだよトーレ。その程度でアタシが落とせるわけないっしょ!!」

悔しげに声を漏らすトーレを、シンシアは勢いを強めて切り払う。

「ほーらっ…これはどうだっ!!」

瞬時にシンシアは赤い円盤へと姿を変え、暴風を巻き起こしながらトーレへと突撃する。

トーレは必死に辺りを飛び交いながら回避していくも、避けた矢先にシンシアがすぐに方向を変えて正確にこちらを狙ってくるので、防戦一方となる。

（やはり…コイツのデバイスは読みづらいな…!）

回避を続けていく中で、トーレはシンシアのトリッキーな戦法に対し苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

「…だが、裏切り者如きに負けるわけにはいかん!!」

しかしこのまま押され続けるわけにもいかない。トーレは気を引き締めなおす。

「ライドインパルス!!」

ISを発動してスピードを高める。更に腕の魔力刃の硬度も上昇させ「そこだっ!!」

一瞬の間を置いた後に、回転を続けるシンシアへと突撃する。

「うわっと!」

トーレの超高速による突撃がシンシアの回転の勢いの僅かな隙間を突き

シンシアは元の普通の姿へと戻って後ろへと吹き飛ばされてしまう。

「シンシア!!」

「貴様の相手を私だ」

それを見たゲイナーがシンシアの方へ向かおうとするがその前にブーメランプレードを構えたセツテが立ち塞がる。

（ふふふ…流石にやるよね…）

しかし、吹き飛ばされている状態でも、シンシアは強敵と戦っている楽しみの方が勝っていた。

そして、目の前のこの強敵にちよっと一泡吹かせてやろうという気持ちも生まれていた。

（ゲイナー!!アレをやるよ!）

そして、態勢を立て直して背後に移動しながらゲイナーに念話で呼びかける。

（えっ：アレって：でもそれは）

セツテと武器を打ち合いながらゲイナーは、シンシアの念話の提案に難色を示す。

（いいじゃん！チーム戦での特権ってやつなんだしさ！

そろそろこの2人に見せてやろうよ！キングとクイーンの必殺コンボをさ！）

しかし、シンシアはゲイナーの了承を得る事無くそれを実行に移す。

「くらえーい！！」

「！：：またその技か！」

シンシアは右腕を鞭の様に異常な長さへと伸ばしていく。

それを見たトーレは、それが自分に向けられている物だと思って回避しようとするが

「なっ：：！」

伸びたシンシアの腕はトーレを横切り、背後にいるゲイナーとセツテの方へと向かう。

「セツテ！狙いは：：」

トーレは咄嗟に、狙いがセツテの方だと思って呼びかけようとする。

「うおああ！ちよっ：：シンシア！」

が、それすらも見当違いであった。シンシアの腕はセツテではなくゲイナーの右足を掴んで彼の体を高く持ち上げる。

「これは……」

何を考えているのか全くわからず、トーレはふと動きがとまってしまう。

だが、その一瞬の油断が命取りとなってしまった。

「さあ！いっくよー！！」

「ええいっもう！！」

シンシアは楽しげな笑いを浮かべたままゲイナーを掴んだ腕をクイッと折り曲げる。

されるがままのゲイナーも考えを改め、チェーンガンを構え直す。

「ッ！…姉様！」

それに最初に気づいたのはセツテであったが、気づくのが遅すぎた。ゲイナーはシンシアの腕によって遠心力をつけたまま、トーレに向かって急降下してきた。

「うおおおお！！」

「しまっ……！！！！」

速度と破壊力の増したゲイナーのチェーンガンの一撃がトーレに叩き込まれる。

トーレが気づいた時にはゲイナーは眼前に迫っており、それをまともに喰らって撃墜されていた。

「よくも……あっ！」

「気づいてなかったの？もう一本使ってた事に？」

姉をやられて怒りを露にするセツテ、しかし直後に自分の足に違和感があるのに気づく。

見ると、シンシアが左腕を伸ばしてセツテの事を捕らえていたのであった。

「アンタには特別に見せてあげるよ…ドミネーターの真の力を！！」
高らかに言い放つと同時に、シンシアの赤いバリアジャケットが金色の光を放ち始める。

それと同時に彼女の体が巨大化していき、彼女の下半身が溶けるように地面へと流動していく。

セツテは金色に光るシンシアの体の一部に叩きつけられる。

すると、セツテの倒れた部分がせり上がっていく。

「これは…何だこの無茶苦茶な力は…！」

セツテはそこから逃れようとするも、金色の体の一部はセツテを引きずり込むようにガツチリと捕らえている。

「まだまだ終わらないよ…！」

するとその背後から別の何かが生えてくる。

それは巨大化した、デバイスではない本来のドミネーターの上半身

であった。

「それそれそれえええ!!」

ドミネーターの上半身が槍状に変形させた両腕を振り上げ倒れているセツテに対して一方的な集中攻撃を行っていく。

「10連コンボ!これで終わり!!」

シンシアがそう言うと同時に、セツテが乗っかっていたせりあがった彼女の一部分が

まるで生き物のように大きな口を開けてセツテを飲み込み、すぐに吐き出してセツテを叩きつけた。

「よーしっ!いっちょあがりだね!」

セツテを倒して終えた後、金色に光るドミネーターの体は瞬く間に縮小していき

元の赤いバリアジャケットを纏ったシンシアへと姿を変えるのであった。

＊

「くっそ…!!」

Cルーム、ガロードは息を荒げながら悔しげな表情を浮かべている。彼の目の前にあるのはいくつもの正方形の怪しげなボックス。

「ッ…そこだっ!!」

咄嗟に何かを感じて背後に振り向き、ライフルから魔力弾を放つ。それが彼の背後にあったボックスにぶつかって爆発を起こす。

「残念！はーずれ！」

「ぐああっ！」

するとその瞬間、ガロードが撃ったのとは別の、彼の左上空にあったボックスから

突如としてセインが出現して、手にしたダガーでガロードの腕を掠めていく。

「闇雲に攻撃してたんじゃないよー！」

セインは楽しげに笑った後、再び別のボックスへと潜り込む。

「そーれシャッフルシャッフル！！」

そして、部屋にある全てのボックスが目まぐるしく移動をはじめ、ガロードの周囲を飛び回る。

（あいつの言うとおり…このまんまじゃ…！）

ギリッと拳を強く握り締めてガロードは内心で呟く。

戦闘が始まった瞬間から、セインはISを用いてこのCルームにあるボックスへと身を隠し

更にはそれを移動させ続けることによって自分の居場所をわからせないようにしていた。

それに対して有効な手段が思いつかなかったガロードは

とにかく片っ端から攻撃していたのだが、セインの言う様に闇雲なその攻撃は一度も当たらず

逆に、時たま姿を現すセインの攻撃を一方的に喰らい続ける事となっていたのだ。

（…だけどうする…全部吹き飛ばすにしても時間が…）

いっそ、サテライトキャノンで部屋のボックスを全て破壊しようかととも考えたのだが

以前の戦いと同様、魔力を悠々とチャージしている時間など無い。かといって、このまま不確実な攻撃を続けていても余計に追い込まれるだけだ。

(どうする……)

ガロードが考えに詰まっていたその時であった。

(ガロード……)

(えっ……ティファ!?)

突如としてティファから、魔導師の念話とは違う、ニュータイプの思念としての言葉が響いてくる。

(ど、どうしたんだよ突然!?! てゆーか大丈夫なのか!?!)

(大丈夫……少し無理してるけど……ガロードの為だから……!!)

ガロードのピンチをアースラ内で察していたティファは、そこから彼に対して言葉を送っていたのだ。

嘗ては忌み嫌っていた力ではあるのだが、ガロードの為なら多少の無理や苦痛などはお構いなしである。

(聞いてガロード……あなたの思ってる通り……闇雲に攻撃してもどうにもならない……)

(……そりゃ……わかってんだけどよ……けどどうしたら……!)

(大丈夫……私が導きます)

(導くって……ティファ……!)

その言葉の意味を考えてガロードは心配そうにティファに尋ねる。彼女の力は強力ゆえに、無理に使うと負担が大きい事も彼はわかっていたのだ。

しかしティファは、全然気にしていないような感じで会話を続ける。

(心配しないでガロード……私は……ガロードがいたからこの力と向き合えた……)

ガロードがいたからこそまでせ来れたの……だから……今度は私がガロードを救いたい……!)

(ティファ……)

(……大丈夫だから……ガロード……私を信じて……!)

(……ああ! わかった!)

ティファの決意の強さを感じ取ったガロードは彼女の案に従うことにし、そして固く目を閉じる。

「……………」

意識を集中している間、頭にザワザワとした感触…ティファの思念が流れ込んできていた。

そして暫くの静寂を挟んだ後、頭の中で声が響く。

（ガロード!!）

「今度こそもらったああ!!」

その声と同時にガロードが、丁度自分がいる位置から5時の方向を移動していた

ボックスに向けてライフルから魔力弾を放つ。

「えっ…きゃああ!!」

そのボックスが爆発すると同時に悲鳴が部屋の中に響き渡り

爆発の晴れた先から気絶したセインが落ちてきた。

もともと後方支援型だったセインは直接戦闘向けではなかったので、ガロードのライフルの一撃だけで、簡単に戦闘不能へと追い込まれてしまったのである。

「ふう…何とかなったな」

それを見たガロードが額の汗を拭った後、ホッとしたように呟く。

（ガロード……良かった…）

（ああ…ティファのおかげだよ…ありがとうな…）

そしてティファの安心した思念が再び届いてきて、それに対して礼を言うのであった。

*

はこぶね周辺の宙域では、アネモネとウエンディの戦いが続いていた。

「そーれっ行くっスよ!!」

黒いボードに乗ったウエンディはボードの両側面についている砲台から

大量のホーミングレーザーを放ってアネモネを攻撃する。

アネモネは必死に背後へと飛び退きながら、それらを回避しようとする。

「チッ：人のデバイスの力だつてのに：！」

アネモネはイラついた感じで辺りを飛び回りながら、除々にウエンディと距離を詰めていく。

「オリジナルの力には：勝てないわよ!!」

右腕のクローを展開して、ウエンディに向けて射出する。

ウエンディはそれを苦も無く、横へヒラリと移動してかわす。

「ウエンディ!!」

間髪いれずにアネモネは両腕のブレードを構えて、ウエンディに向かって突撃する。

「こんな事してアンタは何が目的なのよ!!」

ブレードを振り下ろしながらアネモネは叫ぶ。

「目的も何もねーっス! アタシらはドクターやセデイスに頼まれてるからこうしてるっス!」

それに対してウエンディは楽しげな笑いを浮かべたまま、下へと回避しながら答える。

「言われてるからって：アンタはそれでいいわけ?

自分のしたい事も出来ないで：普通の女の子として生きたいと思わないの?」

そして少し距離を保ったまま互いに停止し、アネモネは更に訴え続ける。

スカリエッティとその一味達は自分にとっては忌々しい存在でしかない。

しかし、目の前にいるウェナディだけは自分を気にかけてくれた唯一の人物である。

自分から裏切っておいて厚かましいとは思っていたが、何とか話をつけられないかと考えていたのだ。

トーレが言ったように、嘗ての自分と同じ道具としての存在であるウェンディを

放っておけなかったからからである。

「別にアタシは全然気にしてねーっスよアネモネ！」

しかし、ウェンディは楽しげな表情を崩す無くアネモネに言葉を返し続ける。

「別にアタシら戦闘機人は夢や希望があるわけじゃないし元から戦う為の存在だっていうのは自覚してるっス

だったら、その戦いの中で上手く楽しむ他は無いつスからね」

「そんな…じゃあアタシを気にかけてくれたのも結局はそうだったわけ？」

「いやいや、アレは私の本心っス。初めて見た時からアネモネの事気に入ってたし

一緒に地上本部で戦った時も何より嬉しかったっス！

それにアネモネのおかげで私の武器も強力になったっスからね」

そう意ってウェンディは自分が乗っているライディングボード：

アネモネのデバイス、ジェンドの機能の殆どが組み込まれているそれを見ながら答える。

それを聞いてアネモネは口調を少し強める。

「けど…じゃあ何でアンタはこうしてアタシと普通に戦えんのよ…？それにアタシが裏切った事には何も感じてないわけ…？」

「裏切ったなんてそんな！シンシアと同じでアネモネにもやりたい

事があつたなら

私は全然構わないっスよ！どこにしようと思はアネモネを気に入ってっス！

そして気に入ってるアネモネだからこそ、楽しく全力で戦えるっスよ！」

すると、言葉の途中で何時の間にかウエンディは

自分と一緒にいた奇妙な形をした6体のガジェットーガジェット？型を呼び寄せていた。

「見せてあげるっス！アネモネのおかげで手に入れたすごい力を！」

ウエンディがそう叫んで右手を前に掲げると同時に

6体の？型ガジェットがウエンディを中心に六角形の形を作る。

そして、ガジェット達はウエンディの元へと魔力を送り込んでいく。すると、ウエンディの眼前に禍々しい紅色をした巨大な魔力球が形成されていく。

「あれは…マズい！」

その攻撃が危険な物であると察知したアネモネは距離を取ろうとする。

「いくっスよアネモネ！バハルックスウェル！！」

しかし直後、ウエンディはガジェットの力も合わせて

何倍にも巨大化、そして収縮したエネルギー弾をアネモネに向けて発射した。

（ヤバイ…大きすぎるわよこんなの…！！）

防御は到底無理なので、回避を行おうとするも、

背後から迫るそのエネルギーの塊は、あっという間にアネモネを飲み込もうとしていた。

「セブンスペクトラル!!」

しかし、直後アネモネが逃げようとしていた方向から虹色のスフィアを両腕に抱えたレントンが猛スピードで飛んでくる。そしてそのままバハルックスウエルエネルギー弾に真っ向から激突する。

「うおおおおお!!」

レントンは咆哮しながらギリギリと球体を貫いていき。

レントンの抱えたスフィアがレントンごと球体を貫通して、直後に消滅させた。

「レントン…」

あっけにとられたような表情でアネモネはポツリと呟く。

今のレントンは体中が淡いグリーンの鈍い光に包まれていた。

「ソイツが噂のプロタイプLFOの覚醒ってやつっスね」

「ああ…バルクホルツ博士の改良で俺一人でも使えるようになったんだ」

「ふーん…デビルフィッシュは…もう倒されちゃったみたいっスね」

「…見た目だけどんなに似せてても、ホランドの腕前までいっしょなわけじゃない…」

そんな偽者で俺を止められると思うな!!」

興味津々といった感じでレントンを見つめながらウェンディは呟く。レントンの言うように、以前のデバイスになったニルヴァーシュが真の力を使う為には

こちらの世界に來た際にエウレカが持っていたドライブが必要だったのだが

バルクホルツのデバイス改造によって、それが一人の時でも引き出せるようになったのである。

そしてその力を用いて、ウエンディが召喚したデビルフィッシュをあっという間に片付けたのである。

「凄いっスね！俄然やる気が出てくるっス！」

しかしウエンディはそれに慄くどころか、逆に刺激されてしまった様子である。

それを見たアネモネも、説得は無理そうだと目星をつけ始めた。

「…仕方が無いか……」

そう意ってアネモネは表情を引き締めなおし、更に言った。

「ウエンディ！アンタはアタシが止めるわ！！」

「おうっス！望むところっスよアネモネ！！」

アネモネの言葉を真っ向から受け止め、ウエンディは再びホーミングレーザーを放つ。

「そう何度もやらしゃしないわよ！」

しかし、これに対してアネモネもレーザーを放つことで対応する。アネモネとウエンディの放ったレーザーが至る所で小爆発を起こしていく。

「もらったっス！！」

その爆発の隙間を掻い潜ってウエンディはアネモネに急接近する。

「甘いわ！！」

それを見たアネモネがバク宙しながら下へと高速移動し、再びクローを射出する。

ウエンディは再び横へと移動してそれを回避し、その流れのまま追加のレーザーを放つ。

クローの射出によって多少動きが鈍っていたアネモネだが

咄嗟に体を捻るように動かしながら、蛇の様な軌道を描きながら飛行を続ける。

「ええいつ!!」

そしてそのままの体制でもう片方のクローを射出する。

「…そこっス!!」

しかしウエンディが向かってきたクローを、咄嗟の判断で叩き落とす。

そして、再び態勢の崩れたアネモネと距離を詰めつつ、一旦小ジャンプしてボードを180度回転足させる。

「バスクードクライシス!!」

ボードの背部についていた白いコーンから禍々しい紅い閃光が放たれる

アネモネはそれを回避できず、直撃して爆発する。

「アネモネー!!」

側で見守っていたレントンが心配そうな表情で叫ぶ。

「うわっ!!」

しかし直後、バスクードクライシスの爆風からクローが伸びてきて、ウエンディを捕らえる。

「…こ、この程度でッ…アタシは…倒れてらんないのよッ…!!」

爆風が晴れた先には、頭から血を流したアネモネが、荒く呼吸をしながら佇んでいた。

その表情には強い決意のようなものが感じられる。

「ドミニクが…アタシの大切な人が…帰りを待ってんだからッッ!!」

今までの中で最大の音量でアネモネは怒鳴り、ウエンディを捕らえたクローを引っ張る。

「バスクードオ……」

クローと共に段々と近づいてくるウエンディの姿を捉えつつ、胸部のコーンに魔力を集中していく。

「クライシスッ!!」

そしてほぼゼロ距離の位置で紅い閃光が発射され、ウエンディを飲み込んでいった。

「…………ハア…ハア…フウツ……」

戦闘が終わり、緊張の糸がプツリと切れたアネモネは方をダラんと下げる。

「あっ……いけない…!」

直後にウエンディのことを思い出して、彼女の姿を確認しようとするが

「大丈夫、この通り無事だ」

すぐ側から、ガジェットを片付け終え、元の姿戻ったレントンがウエンディを抱えて近づいてきた。

ウエンディもまた、頭から血を流してグッタリしている。

「ウエンディ……」

「……は…は……負けちゃったっスね……流石は…アネモネっス…」

レントンに抱えられたウエンディは、こんな状態でも笑いを崩さずに震える声で喋っている。

「……バカ……」

そんな彼女に対してアネモネは、どう言葉をかけていいかがわからなかった。

＊

ミッド地上のとある廃ビル街の一面

「でやあああああ！！！」

ウイングロードを展開したギンガが、チンクに向かって突撃している。

「無駄だと言っているだろう！」

防壁を展開しているチンクは動くこと無く、彼女の拳を真っ向から受け止める。

防壁に阻まれたギンガの拳はチンクには届かない。

「くっ…！」

「ギンガさん後ろ…！」

悔しげに呻くギンガの背後で比瑠の言葉が響く。

咄嗟に背後に振り向くと、バロンズウの伸ばしたフィン眼前に迫っていた。

「やらせるかよっ！」

しかし、そのフィンはギンガに当たる直前で勇のブレンバーによって切断される。

バロンズウは切断されたフィンを一瞬で再生していく。

「くそ…これじゃあキリが無いぞ……」

その光景を見た勇が忌々しそうに呟く。

「アイツも…向こうの戦闘機人も…どっちかだけでも落とせたら…」
二人のすぐ側に降り立った比瑠も、固い表情で呟く。

「勇君：比瑪ちゃん：ちよつといい？」

すると、ギンガが2人に顔を寄せて耳打ちする。そして2人は驚愕の表情を浮かべる。

「そんな：無茶ですよそんなの！！」

「そうです！ギンガさん1人で延々と突っ込むなんてそんな：！」

ギンガの考えを真っ向から否定する勇と比瑪

だが、ギンガは意見を曲げる事無く、固い表情で更に言った。

「けど比瑪ちゃんの言うように、このままあの2人を一緒に相手してたら状況が悪すぎる…」

だったら：多少無茶してでも片方は落とさないといけないでしょ？」

「それはそうですけど…」

「心配しないで：私はそんなにヤワじゃないから：伊達に何年も管理局で戦ってたわけじゃないし：

それにあの怪物を抑えておく2人の役目の方が重大なんだから：」

「お喋りはそれくらいにするんだな、ファースト」

勇と比瑪を安心させるように言っている途中で、チンクの声が聞こえてくる。

3人が後ろに振り向くと、再びバロンズウのフィンが襲い掛かってきた。

「ッ：！！2人とも、任せるわよ！！」

「ギンガさん！！」

比瑪の声もお構いなしに、ギンガは再びチンクの方へと突っ込んでいく。

「仕方ない：こうなったらやるしかない比瑪！！」

「け、けど…」

「ギンガさんの決意を無駄にはするな！！」

困惑する比瑪を他所に、勇はブレンバーを構えてバロンズウへと接近する。

勇はひたすらにフィンを切断していくが、切っても切っても瞬く間に再生していく。

「勇……ギンガさん……!!」

その光景を見て比瑪も決意を固めて、バロンズウへと向かっていく。そして勇と2人でひたすらにバロンズウのフィンを切り落として、足止めをする。

(あの2人の限界が来るまでに……私が決める……!!)

自分の思いに応えてくれた勇と比瑪の思いを無駄にしない為に、ギンガはリボルバーナックルのカートリッジを大量にロードして、爆発的に魔力を高める。

「うりゃああああ!!!!」

凄まじい咆哮と共にチンクに向かって突撃し、再び拳を叩きつけた。しかし、それでも尚チンクの張った防壁には傷一つつかなかった。

「無駄だと言うのがわからないか!!」

チンクは両腕でナイフを構え、防壁の内側からギンガに向かってそれを投擲する。

しかしギンガは全く避ける素振りを見せず、放たれたナイフは全てギンガに突き刺さる。

「なっ……何故避けない!?!」

「ツツ……そんな……避ける暇なんて……今の私には無いわ!!」

驚くチンクを他所に、ギンガは彼女の張っている防壁に向かって何度も拳を打ち付ける。

「チィッ……!!」

ギンガの気迫に押されながらも、チンクはISを発動して爆発を起

こす。

「な、何だと……？」

そしてチンクは更に驚くことになる。真っ向から爆発を喰らったはずなのに

チンクはまだ、自分の眼前で攻撃を続けていたのだ。

「何故…何故そんな顔が出来る……！」

言い知れぬ恐怖に駆られるままに、再びチンクはナイフを投げつけ、すぐに爆発させる。

ギンガは再び爆発に巻き込まれるも、攻撃の手を緩めることは無い。

「貴様も私たちと同じ戦闘機人だろう！戦う為の兵器が何故そんな……！」

「決まってるでしょ…私には…守るものがあるからよッッ……！」
ギンガの腕からは血が吹き出ている、チンクの攻撃を喰らい続けていたので

全身が傷だらけであり、至る所から血が吹き出ている。

それでもギンガは、強い表情を浮かべたまま両腕を振り下ろし続ける。

「あなたもさっき言ってたわよね…妹たちの為に任務をこなさなきゃいけないって……！」

「それが何だと言うのだ！？私達は戦う為の兵器として生を受けたのだ！」

なら生き延びる為なら…どんなに歪んだ事だろうと成し遂げねばならないのだ……！」

ギンガの言葉に自分も譲れぬ物があり、再びナイフを投げて爆発させる。

そしてその直後に、勇と比瑯の妨害を掻い潜ってきた
バロンズウのフィンがギンガの背中に突き刺さる。

「くうっ……！」

「ギンガさん……！」

「構わないで……！その足の止めを続けて……！」

痛みに顔を歪めるも、すぐにギンガは表情を戻して攻撃を再開する。
「生き延びる為なら：妹にだってこんな悪事を働かせる：そんなの間違ってるわよ：！」

ギンガは最早満身創痍で、体中の至る所から金属部品が露出している。

それでも尚、ギンガは大量に血が吹き出ている両腕でチンクの防壁を殴り続ける。

「自分の妹が：間違った事をしようとしていたり：進むべき道に悩んでいたのなら：！」

そして遂に、チンクの防壁にヒビが入り始める。

「自分の身を犠牲にしても：妹に正しい道を示してあげる……」
静かな口調で語りながら、キンガはヒビの入り始めた防壁をとにかく殴り続ける。

ヒビ割れは段々と大きくなっていき、全体へと広がっていく。

「バカな：ドクターライネンの改良によって強化された防壁が：！！」

破られる筈の無い筈だった絶対の防御が破られようとして、チンクは目を見開いて驚く。

そんなチンクを見て、ギンガは更にカートリッジロードを行い。

ヒビ割れだらけの防壁に最後の一撃を加えようとする。

「それが：姉の役割ってモンでしょうがああ！！！！」

自身の決意と共に拳を振り上げ、それをチンクに向かって振り下ろそうとした。

『あつるえく？ダメじゃんチンクちゃくん
せつかくアルさんに色々お膳立てしてもらったのに負けそうになっ
ちゃく』

その直後であった。通信音声と共にセデイスの声が周辺に響いたのは。

それと同時に、勇と比瑪が足止めをしていたブラックバロンズウが
眩い光を放つ。

そしてその直後……小型のキノコ雲を発生させる程の巨大な爆発が
ギンガ、勇、比瑪、チンクがいた場所で発生したのであった……

第31話（後書き）

というわけで…いや本当の本当にすみません…
話の構想は出来てるのにいざ文章に起こすとなると全然書けない…
文才が無い自分自身が本当に恨めしい…

さて、今回もまた至る所で決着がつかしました。

ガロードとセインの組み合わせは
ぶっちゃけティファを介入させたかったから…これに尽きますね。

ウエンディはもうやりたい放題な感じ…
バハルクスウェルなんてACEでは使ってないのについてノリで…
（それに関してはシンシアも同じか…
黄金色に輝いたドミネーターの真の力…）
それに引き換えレントンの出番の少なさと
戦闘シーンすらともに書かれずに散った303…（泣）

締めはギン姉。原作ではスカリエッティ側の傀儡扱いだったので
ここぞとばかりにカッコよくしてみました。

そして最後、いよいよ！ってところで…

いや超ド級のKY振りですが、それが彼女のキャラですから…
(いやでもホント…黒いとかそんな次元を飛び越えている)

色々やりすぎた所為で、冒頭の3人の印象が霞む霞むw
彼らもまた、リインフォースと同様に飛び入り参戦な感じです。
味方が多すぎな気がします
まあ最終決戦に魔改造したアレを使うのを考えれば…

それではまた

番外3 試作シリーズNo. 26 実験記（前書き）

番外その3。今回はタイトルどおり
彼女の過去に触れてみたいと思います。

本編執筆の息抜きみたいなもんですので
暇つぶし程度で感覚でお読み下さい。

番外3 試作シリーズNo. 26 実験記

―目が覚めた時、私は薄暗い部屋にいた。

―でも、自分が何者なのかは全くわからなかった。

―周りを見渡すと、私と同じような顔をした子がいっぱいいた。

―その中で、1人だけ違う顔をした人がいた。

―その人が最初に私にかけてきた言葉はこうだった。

「No. 26……問題無く稼動と…」

―その日が、私という存在の生まれた日であった。

*

新暦70年、スカリエッティの研究施設。

私は目覚めた時、何をすればいいのか、どこへ行けばいいのかもわからず

ただただ、黙って目の前の白衣の人を見つめていた。

「調子はどうだいジル？」

すると、私と私そっくりの女の子達、そして白衣のおじさん以外誰もいない部屋に

また新しい白衣の人が入ってくる。

「ああ：君のおかげで試作シリーズは順調に目覚めているよ：

ただ、No. 3とNo. 14は誤動作を起こして消滅してしまいましたがね：

まあ、どうせまだ試作なのですから、残った奴から選別するだけです」

「ククク：いや、実に素晴らしいものだよジル：

プロジェクトFを独自に改良し、たった数年でこれだけの数の魔導師を作り上げたのだから」

「いいえジェイル：私の野望はまだまだこんなものではありませんよ：

この子達は私の目的の第一歩に過ぎないのでから：

いずれ生まれるであろう私の最高の息子：その為の足がかりとなってもらうのです」

2人の白衣の男の人がよくわからない話をしている。

プロジェクトFとは何なのだろう？野望って：何をするのだろう？わからない。

「それにしても：本当にそっくりだね：：私の渡した資料に従えば外見の設定など思うがまだというのに：何故わざわざ彼女と一緒にしたいんだい？」

「お恥ずかしい話：安定して多方向に力を持たせつつ、

容姿を操作するまでには至っていないのです：

彼女たちは試作シリーズ、あらゆる方面において力を発揮する予定です…

流石に外見の操作と両立させる暇は無かったので、プロジェクトのオリジナルである

彼女の容姿に設定するのが手っ取り早かったということですよ：

まあ、どの道彼女達は試作なのですから、外見は然程問題ではありません…」

白衣のおじさん達のよくわからない話が続いている。

試作シリーズって何？多方向の力？よくわからない。

すると、最初にいた方の白衣のおじさんがこちらを向いた。

「さてと…：皆さんついてきなさい」

ついてこいというのは私の事を言っているのかもしれない。

そう思って私は、おじさんの後ろについていくことにした。

けどちょっと肌寒い。白衣のおじさん達以外、

周りの子達もみんな私と同じで何も着ていない。

私達はこれが普通なのだろうか？わからない。

＊

別の部屋に連れて行かれると、沢山の黒い椅子が並んでいた。

「さて…最初の振るい落としを始めるとしましょうか…」

おじさんが部屋の中にある機械を弄くっている。
すると、椅子の後ろにあったおっきな黒い機械がウンウン唸り始める。

そしておじさんは私と一緒にいつてきた他の女の子達を1人ずつ椅子に座らせ始めた。

「あなたはここです26号」

おじさんが私の顔を見てそういつてきた。私は26号という名前なのだろうか？

「どうしました？早く座りなさい26号」

おじさんがまた私の事を26号と呼んできた。

よくわからないことがいつぱいだけと。何となくおじさんに従うべきだと思った。

「はい」

目が覚めてから、私は初めて自分の口を開いてみた。

そしておじさんの言われたとおりに椅子に座る。

すると、おじさんは椅子の後ろの機械についていた、黒いヘッドギアを私に被せた。

おじさんはその後も、他の女の子達を椅子に座らせていつた。

でも何でみんな同じ顔形をしているのだろうか？

この子達はどこからいつてきたのだろうか？やっぱりわからない。

「さて…稼働開始…」

おじさんがそういつて後ろの機械を動かし始めた。

すると、私の被っているヘッドギアが、私の頭を締め付けるようにきつくなつてきた。

ぎゅうつとした痛みが襲つてくる。頭の中に色んな物が入り込んでくる。

何だろう、頭がくるくるして心がむかむかしてくる。気持ち悪い、嫌だよこんなの。

「ウツ……ゲホツ……!!」

お腹の中がごろごろしてくる。目の前の景色がふわふわしてくる。

とっても痛くて気持ちが悪い。両手で胸を抑えて咳き込んでしまう。嫌だ嫌だ、こんなの嫌だ。助けてよ、誰か助けてよ。

＊

「…起きなさい」

ふと気がつくと、おじさんが…いやバルドナ博士が私の顔を覗き込んでいた。

何だろう。さっきまではよくわからなかった事がいっぱいだったのに今では頭の中がとっても綺麗に情報が纏まっていた。

ここはミッドチルダ、そのどこかに存在している秘密の研究所。

目の前のこの人は私を生み出したジル・バルドナ博士。

そして私は人造生命体、ジル・バルドナヒューマン試作26号だ。

「情報転写と精神実験の生き残りが48名中29名…思ったより耐え抜きましたね」

バルドナ博士がモニターを見ながら満足げに呟いている。

よく周りを見渡してみると、椅子から倒れてピクリとも動かない子供達が何人もいた。

この子供達も私と同じだった。けど実験に耐え切れずにゴミ以下になった子供達だ。

そうだ。私はバルドナ博士に生み出されたゴミだ。

「では残った子供達についてきなさい。次の実験を行いましょう」

バルドナ博士がそう言うのと、私は自然と体が動いて、また彼の後ろをついていった。

その後もたくさんの実験を行った。その実験の中でも何人かの子達がゴミ以下の屑になっていった。

バルドナ博士が最後の実験を終えると、私を含めた子達に一枚のディスクを渡してきた。

「では今日はここまでです…実験の続きは8時間後です
それまでそのディスクに書かれた自分の部屋で待機していなさい」
バルドナ博士はそう言って、私達の事は目もくれずにさっさと行ってしまった。

けど私達は何も気にせずに、自分の部屋へと向かった。

部屋の中はガランとしていてベッドが一つと、机と椅子とモニターが一つずつ。

あとは私専用のボディースーツが一着だけ、これだけだった。
する事も無いので、私はかけてあったボディースーツを着た後
モニターのスイッチを入れていろいろ弄くり始めた。

今日の実験の中にはクラッキングというものもあった。早速回線を繋いで試してみた。

実験の時にやった通りにやったら、沢山の難しい情報が入り込んできた。ちょっと面白かった。

その後はインターネットというものを使ってたくさんの事を調べてみた。

そして調べていくうちに、段々と外の世界の事がわかってきた。

「家族…か…」

私の目を引いたのは家族という言葉だった。お父さんというのとお母さんというのがいて

その2人が子供というのを作り出すことが出来るらしい。

お父さんとお母さんは子供を育てて、子供が大人というのになったらその大人がまたお父さんやお母さんになっていくらしい。

そうやって人間はその数を増やしてきたということらしい。

「じゃあ私は…」

自分の生い立ちを思い返してみる。私は生まれた時から大きかった。周りの子達もみんな同じ姿形をしていた。

自分が実験道具であることや、バルドナ博士の事などはよくわかるのに

家族の事とか外の世界の事は全然わからなかった。

じゃあ私のお父さんとお母さんは一体誰になるのだろうか？わからない。

もう一度モニターで調べてみる。大概の家族というものはみんなお父さんとお母さんがと子供が一緒になって笑顔を浮かべている。

「お父さんやお母さんは子供を愛している…だから子供は楽しい…」笑っている子供というのに、私は妙に目を引かれた。

この子供というのはとっても楽しそうに笑っている。それはお父さんとお母さんがいるから…

じゃあ私は何なのだろう？

「私はバルドナ博士に生み出されたゴミ…他の子も同じ…」

ジッと自分の両の手を見つめてみる。私は子供なのかお父さんなのかお母さんなのか？
家族というので考えれば、私を生んでくれた人がお父さんとお母さん……つまりは親らしい。

じゃあバルドナ博士が私のお父さんなのだろうか？でもバルドナ博士は笑っていない。

私や他の子供達を見る時はいつも冷たい顔をしている。

親は子供がいると笑顔になるらしい。じゃあバルドナ博士はお父さんじゃない……

私はバルドナ博士に生み出されたゴミ、バルドナ博士の子供じゃない。

でも、写真の家族というのにとっても興味を引かれる。とっても楽しそうだ。

私にも家族がほしい、お父さんやお母さんが欲しい……でもそれは誰なんだろう？

私と一緒になって笑顔になってくれる人？それとも……

「……やっぱりよくわからない」

結局その日の残りは、少しした後ベッドで横になって過ごした。

＊

薄暗い研究施設では時間が経っても周りの景色は変わらない。

私はきっちり8時間経った後に、バルドナ博士の下へと向かう。そして他の子達と同じように、バルドナ博士の言うとおりに実験をこなしていく。

（家族……）

実験の最中、私は頭の片隅にその事をずっと思い浮かべていた。

実験は楽しくない。言うとおりにしていなければ、私も死んでしまう。そんなの楽しくない。

でも私はバルドナ博士に生み出された、だからバルドナ博士の言うとおりにするしかない。

昨日見た家族というのはとっても楽しそうで幸せそうだった。私もあんな風に笑ってみたい。

私にはお父さんやお母さんがいない。お父さんやお母さんが笑ってくれないと。私は笑えない。

バルドナ博士は笑ってくれない。いつも実験を私達に課して冷たい表情をしているばかり。

バルドナ博士は私を生み出してくれたけど、私を見て笑顔にはならない。

じゃあ私のお父さんは誰なんだろう？ わからない… わからない…

「26号、ペースが落ちていますよ」

「あ、はい」

考え事をしていたらバルドナ博士に注意されてしまった。

私は頭を切り替えて、自分が乗っているロードランナーの方へと集中した。

*

その日の実験も終了して、私はまた自分の部屋へと戻っていった。
今日もまたモニターを使っていろんな事を調べてみる。

「フェイト・テストロツサ執務官…」

モニターに映っているのは私や、私の周りの子と同じ格好をしている子。

バルドナ博士の話によれば、この子は私達のオリジナルというものらしい。

この子にもお母さんというのがいるみたいで、一緒になって笑っている写真があった。

「でも…この子を生み出したのは…」

私は一つの疑問が浮かぶ。この子のお母さんはプレシア・テストロツサというらしい。

私達と同じ感じで、このフェイトという子は生まれたらしいのだ。
でもこの子の親として映っている女の人はリンディ・ハラオウンというらしい。

この人はこの子を生んでない、じゃあこの子のお母さんではない。
家族ではない筈だ。

けど一緒になって笑っている。とても幸せそうに笑っている。

「なんでこの子は…」

言いようの無い苛立ちが私に襲い掛かってくる。どうして家族じゃないのにあんな笑顔なのだろう。

知らない人と一緒にいるのが楽しいのだろうか？

外の世界を全く知らない私には、想像する事しか出来ない。

バルドナ博士は私を生みだしてくれた。でも笑ってくれない。だから家族じゃない。

この子の今のお母さんはこの子を生んでない。でも一緒になって笑

っている。家族じゃないのに。

「むゝ…」

外の世界はわからないことでいっばいだと、そう思ってたまた今日もベッドで横になった。

＊

結局よくわからないまま、何日何日も時間が過ぎていった。

私は正直、どうしてこんな事をしているのだろうと思うようになってきた。

一生懸命実験をこなしても、バルドナ博士は何も言ってこない。

私はバルドナ博士に生み出されたゴミ、だから私達をどうしようと博士の勝手。

私はただの実験台、バルドナ博士の気まぐれで生まれただけ。そんなのちつとも楽しくない。

でも博士の言うとおりにしないと私はすぐに死んでしまう。

だけど楽しいとか嬉しいとか、そんな事すら私にはよくわからなかった。

せめて私にも家族が欲しい。お父さんという人と一緒に笑ってみたい、楽しい気持ちになりたい。

でも、私にはそれは過ぎた願いなのだろうとも思っていた。

＊

私が生まれて丁度一年が経った頃だった。

外の人間達は、一年毎に自分の生まれたときの事をお祝いするらしい。

そこにはお父さんやお母さんがいて、一緒に笑顔でお祝いしてくれるらしい。

とっても楽しそうだった、でも私には無理だとも思っていた。

今日もまた、バルドナ博士の実験に従うのみ。

私を含めた試作シリーズ48人の仲間は、今は私ともう1人の2人だけだった。

他の子達はみんな実験の途中で死んだか、博士の満足行く結果を出せずに捨てられていった。

「さて26号に31号、今日が最後の実験です」

私ともう1人の子、31号に博士はこう言ってきた。

最後の実験ということは、この実験が終わればもう実験はしないという事だ。

そしたら私達はその後何をすればいいのだろうか？

すると、バルドナ博士は私達2人に、実験の時に使っていた簡易型のデバイスを手渡す。

そして距離を取っていつもの冷たい表情でこう言ってきた。

「今から2人で殺しあいなさい。生き残ったら実験成功です」

ああそうか。これが最後の実験なのだ。目の前の私と同じ姿形の子を殺す。

そうしなければ自分が失敗作の屑として処理される。だから私は従うだけ。

「はい」

私と31号は同時に返事をしてデバイスを起動した。

私は頭を切り替えて、どうやって31号を殺すかだけを考え始めた。

＊

：気がついたら私は血の池に立ち尽くしていた。

私の体は自分の傷と31号の返り血によって真っ赤に染まっていた。31号は私の目の前でうつ伏せになって倒れこんでいて全く動かない。

私の放った砲撃魔法が直撃し、頭の半分が消し飛んでいた。

「これで：実験終了：」

31号を殺した事には何も感じない。今までの実験でも

私は8号や42号、他にも何人かの子達を殺してきたので、このくらいは今更だった。

気になったのは最後の実験と言っていた博士の言葉だった。

これが最後の実験なら私はこれからどうなるのだろうか？

そもそも博士は何を考えて実験を続けてきて、私を選んだのだろうか

か？

わからない：わからない：わからない：

『ご苦労様でした、こちらへ来なさい26号：』

バルドナ博士が呼んでいる。私は博士がモニタリングを行っている部屋へと向かった。

＊

扉を開けて、私は博士のいるモニタールームへと入る。

すると、博士はパチパチと手を叩きながら私を迎え入れてくれた。

「え……？」

そして、その時私は信じられない物を見た気持ちになっていた。

「……今まで本当によく頑張りましたね。あなたは私の最初の誇りですよ……」

バルドナ博士は私を見て笑っていた。私に向けて笑顔を見せてくれ

ていた。

実験の最中、一度も崩れることが無かった冷たい顔が、優しそうな笑顔になっていた。

「おやおや？ 生き残れたから嬉し泣きですか？」

「あ……………」

気がつくとも私の目から、しょっぱい何かが溢れ出ていた。

モニターの情報収集で、これは涙というものだということを知っていた。

嬉しい時や悲しい時に出てくるのだそうだ。

じゃあ私は今悲しいのだろうか…違う、私は今嬉しいのだ。

バルドナ博士が私を見て笑ってくれた。私を生みだした人が私を見て笑ったのだ。

「えっと…よくわかりません…でも博士が笑ってくれて…嬉しかったから…」

「はは…そんな事くらいで嬉しかったのですか？」

「はい…何か…博士がお父さんのような感じが…いえ、何でもないです…」

言いかけて私はしまったと思った。私は博士に生み出されたただのゴミだ。

博士が笑ってくれたのも何か思惑があってだ。決してそんな事ではない。

「？…そうですか…最低限の感情しか与えなかった試作シリーズだというのにそんな事を学ぶとは…」

本当は次のシリーズの捨て駒のつもりでしたが…これは興味深いですね…」

すると、博士は何かを考え込むような表情でブツブツと呟き始めた。ゴミの分際で余計な事を言ったから驚いているのだろうか…私はどうなるのだろうか…

そして少しの間を置いて、博士が私の方へと歩み寄ってきた。

「え…？」

私は驚いた。博士がまた笑顔になって私の頭に手を置いたのだ。

「いいでしょう。ならば、あなたを私の最初の娘としましょう」

信じられないような言葉がバルドナ博士から聞こえてきた。

私を娘に…子供にしてくれる？じゃあバルドナ博士は…

「博士は…私のお父さん…ですか？」

「そうですね…あなたは私の為に今まで全ての希望に伝えてくれた…」

あなたは私が生み出し、私の為に尽くしてくれた存在です…つまりはあなたは私の娘…

そして私はあなたの父親ということですよ」

「あ…くあ…：ううっ…」

私の目からたくさんの涙というのが零れ落ちてきていた。

胸がとっても温かくて気持ちが良かった。これが嬉しいという感情だと後になって知ったのだ。

「あなたは私の最初の娘：Z B—H…0026 試作シリーズ初の成
功体…」

名は…セデイス…：セデイス・バルドナです」

「セデイス…：それが…私の名前？」

「そう…子供は親にまず名前を貰うのです…今日からあなたの名は
セデイス・バルドナ…」

あなたが私を満足させる道具である限り、私はあなたを娘と呼び、
あなたは私を父と呼ぶ事を許可しましょう…」

「うん…：うん…：！！」

私は嬉しそうな笑顔で言う博士を見て、とっても気持ちが良くなっ
ていた。

バルドナ博士が…私を生み出した人が私を娘と呼んでくれた。自分
を親と呼んでいいと言ってくれた。

じゃあ…バルドナ博士は私の家族なのだ。一緒になって笑ってくれ
て幸せになってくれる家族だ。

そして、今日までの実験の意味が博士の言葉で理解が出来た。
子供は親の為に尽くす…だからバルドナ博士は私に実験を繰り返させてきていたのだ。

48人のシリーズの中で、博士を満足させられたのは私だけだった。
だから博士は私に笑ってくれたのだ。家族になると言ってくれたのだ。

私は今日という日の為に、今まで生きてきたのだと思った。だから…これからもそうしよう。

博士の為に…親の為に私の全てを捧げよう。

そうすれば博士は笑ってくれる。私を幸せにしてくれる。そう心に誓った。

「ありがとう…ありがとう…：パパ…！！」

両目から零れ落ちる涙を拭いながら、私は震える声で博士をそう呼んでいた…

新暦75年、

戦艦はこぶね総司令室

「まーったく…チンクちゃんも結局ダメダメだったね」

モニターで戦闘の確認を行っていたセデイスは、チンクが劣勢にな
っているのを見ると

一切の躊躇い無く、ブラックバロンズウに予め仕込んでおいた自爆
装置を起動させた。

それによって発生した爆発によってチンク諸とも、敵を消滅させる
為に。

「地上の連中は殆ど全滅じゃ〜ん…アズさんやルーちゃんも意外と
役立たずね〜…」

味方の殆どがやられている現状を見て、ガッカリした感じにセディ
スは呟く。

しかし落ち込んでばかりでもなく、現状の残存勢力の確認を行う。

「残ってる戦闘要員はドウーさんとクアちゃん…マルさんとレイち
ゃん…」

あとは機械連中とフロストさん…そして私とビーちゃんくらいかあ
…む〜…」

思ったよりも少ないと感じ、セデイスは目の前のデスクに顎を乗っ
けて口をとんがらせる。

「やっぱ私が行くべきなのかな〜…いや…ダメダメ！私はパパにこ
こを任せられてるんだから！」

パパの言う事をちゃんと守らないと、パパは誉めてくれないもん！
すぐに首をふるふると横に振るって、セデイスは自分の考えを改め
る。

自分にとってあの日から…父親であるバルドナの言葉は絶対なのだ
から。

だから彼が言ったとおりに、自分はここで大人しくしているべきな
のだと。

「ま、消耗した雑魚どもは私とビーちゃんです最後に蹴散らせばいいし
地上の連中も月の魔力で起動する主砲とガーディアンで吹っ飛ばせ
ばいいだけだしね〜」

すぐにまたセデイスはポジティブに考え直し、自分の課せられた役

割を全うする為

再び超高速でパネルの操作を再開した。

（パパの為なら誰だろうと何だろうと壊して殺して消滅させる…

そうすればパパが私を誉めてくれる…それが私の生きがいだかね

…）

ZB—H…0026試作シリーズ成功体、セデイス・バルドナ
彼女はただ、自分を娘と呼ぶ存在の為だけに動き続ける…

番外3 試作シリーズNo. 26 実験記（後書き）

いかがでしたでしょうか？

同じような言葉の繰り返しでくどいとは自分でも思ったんですが…

この彼女が5年後には猫かぶりの真っ黒な女になっているという…
時間の流れは恐ろしいもんですねえ…

ではまた本編の更新で…

第32話

はこぶね周辺の空域、はやて率いる航空魔導師隊と敵の軍団の戦いが続いている。

はやての指揮の下で、必死に敵の大群を撃ち落していくも

はこぶねからは減る事無く、大量のガジェットやコーラリアンが出現し続けていた。

（天より注ぐ…矢羽となれ…!!）

「フレース・ベルグッツ!!」

ユニゾンしたリインフォースの溢れ出る魔力のサポートを受けつつはやては普段以上に強力な砲撃魔法を何発も放っていた。

フレースベルグにより放たれた巨大な白い閃光は、一撃で三桁近い敵を薙ぎ払っていく。

「はあはあ……」

しかし強力な魔法の連続により、いつも以上に負担の大きいはやては額に汗を浮かばせながら肩で息をし始めていた。

（主はやて…あまり無理をなさっては…）

はやての体内でマスターの疲労を感じ、心配してリインフォースは念話を送る。

「ありがとなリインフォース…けど、こないな所で弱音なんて言うてられへん」

自分を気遣ってくれるリインフォースに対し、笑顔を浮かべてはやては答える。

次いでアースラにいるシャーリーに対して通信を繋げる。

「シャーリー!!! 状況は!!!」

『次元航行部隊の到着まであと45分…巨体船の起動ポイント到達……』

現在2箇所でのレリック停止を確認しましたが…それでもあと38分で到達します!』

「7分差か…」

報告を聞きながらはやては奥歯をギリツと噛み締める。

『敵艦の主砲の照準はミッド首都に向けられています！

それに…機体下部についているあの巨大砲も…いつまた起動するか…』

「7分もあれば余裕やろね…時間が無いか…」

真剣な表情で一考し、そしてはやては背後にいた魔導誌隊にこう告げた。

「防衛ライン現状維持！！誰か指揮交代！今から私も突入するで！！」

＊

はこぶね艦内通路、そこでベルクトとフェイト対レイグの激闘が続く。

「はあああ！！」

フェイトがザンバーフォームのバルディッシュをレイグに向かって振るう。

高速で振り下ろされたその大剣を、レイグは無言のまま横にステツプ移動してかわす。

「そこっ！」

すかさずフェイトはその場に踏みとどまり、回避行動を行ったレイグに対し、

自身の周辺に黄色の魔力弾を形成して相手に発射する。

「……………」

それに対しレイグは、体を後方に大きく90度程反らして、その場に立ったまま魔力弾を回避

「……………！！」

小さな声を漏らすと同時に、反らした体の反動によって瞬時に前のめりになる。

その勢いを利用したまま、左腕にプラズマを纏いながら、地面スレスレを滑空しつつ、フェイトに向かって突撃していく。

「早い…………ッ！」

行動の転換の素早さに焦りながらも、フェイトはすぐ側まで来ていたレイグの攻撃に耐えるべく、シールドを張ろうと左腕を前に突き出す。

「フェイトには攻撃させない……！」

しかし、その前にベルクトが間に割って入り、左腕のスケイルシールドを構える。

同時にレイグの放った左拳による一撃がベルクトのシールドに直撃する。

「……流石……ですね」

その能面の様な冷たい表情を少しも崩す事無くレイグは一言ポツリと呟き

攻撃を止めて一旦後方へと飛び上がって下がっていく。

「しかしベルクト、僕はあなたと争う理由が存在しません」

「何……？」

そして距離を保ったままレイグはこんな事を言う。

それを聞いたベルクトは戦闘態勢を保持したまま険しい表情で呟いた。

「僕が命じられているのはセデイス様のオリジナルたるフェイト・テストロッサの排除です

あなたの破壊は命令に加えられていません、どうか邪魔をしないで下さい」

「戯言を……！自分の大切な人間が目の前で戦っているのを見て引けと言われて素直に引けだと……！」

感情を一切伴わない、機械的な口調に神経を逆撫でされ

ベルクトは怒りを伴った強い口調でレイグに向かってこう言い放つ。

「あなた方の都合など知りません、僕はバルドナ様によって生み出された忠実なゴミです

こうして蘇ったのも単なる気まぐれ、ですから僕は任務を確実にこなすのみ」

「ッ……！あなたはそれでいいの！？そうやって一つの命を持って生み出されたのに……

そんな……そんな自分で自分を物みたいに扱って……！」

自身を殺そうとしている敵とはいえ、そのあまりにも非常識な言い草に

フェイトはうつすらと涙さえ浮かべてレイグに言い放つ。

言うなれば彼も自分やエリオと同じ作られた命だというのに

その持論はBBやセデイスすら凌駕する……自分をただの道具としか思っていない

全く感情の宿らない雰囲気だったからだ。

「僕はBB様やセデイス様とは違います。僕に与えられた感情など何もありません

僕は最後の最後まで命令忠実に従って、そして果てていくだけの存在なのです」

フェイトの必死な訴えも全く意に介せずレイグは答え、

次いでベルクトの方に視線を向けて更に続ける。

「それにベルクト、あなたにここで死なれてはBB様の命令に背く事になります」

「あの男が…？」

「そうです、B B様はこの先にあるマスタールームであなたとの再戦を望んでおられます

僕の使命はフェイト・テスタロッサを倒す事、そしてあなたをB B様の下へ導くことです」

「そうか…」

淡々と語るレイグに対し、ベルクトは静かに目を閉じて一言呟く。
そのまま足下に紫色の魔法陣を展開し、デバイスをファントムモードへと移行する。

「悪いがその必要は無い…貴様を倒してからゆっくり探させてもらう…！」

閉じていた目を開いて、右手のライフルに魔力刃を形成
そのまま凄まじい速度で突風を伴いながら、レイグに向かって一直線に突撃していく。

「……………しかし」

それに対してレイグは全く回避する素振りも、防御の姿勢も見せない。

そしてベルクトがレイグに向かって刃を振るおうとした次の瞬間

「……………なにっ!？」

一瞬にしてレイグの姿が消滅し、ベルクトの刃は虚しく空を切る。

「僕程度に勝てないような人間が、B B様が満足いく玩具となれるとも思いません」

レイグの声はベルクトのすぐ背後から聞こえてきた。

攻撃を外し、体制の崩れたベルクトの後ろの至近距離でレイグは拳を振り上げる。

「ジェット・マグナム」

「グッ……………!!」

レイグの拳が、ベルクトの横腹に容赦なく叩き込まれる。

ファントムモードで装甲が薄くなっていた分、ダメージも絶大であった。

ベルクトは小さく呻き声をあげながら吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「ベルクト!!」

それを見ていたフェイトがすぐさまベルクトの方へと駆け寄る。

「ベルクト! しっかり!!」

「クッ…大丈夫だ…しかし奴の今の攻撃は…」

心配そうな表情で声をかけてくるフェイトに対し、すぐに立ち上がってベルクトは答えつつ

先程のレイグの攻撃に疑問を浮かべる。

「一瞬でどうやって回避したか、とでも言いたげな表情ですね」

ベルクトの表情を見てレイグはすぐさま彼の心境を察知し

それに答えるかのように説明を始める。

「僕はZB—H0774、ジルバルドナヒューマンの中では第4期シリーズ

No. 501〜1200の中の一機、このシリーズはBB様のISの一つ

『空間支配』の開発、安定制御の実験の為に生み出された物」

「!…!…空間支配能力か…」

「そうです、故に僕はBB様には遠く及ばないとはいえ限定的範囲内での空間跳躍が可能なのです、先程の攻撃もそれを使ったまでです」

説明を言い切ると同時に、再びレイグの姿が2人の視界から消滅する。

「ッ…後ろだ!!」

咄嗟にベルクトが気配を捉え、フェイトに向かって叫ぶ。

フェイトはほとんど脊髄反射的に後ろへ振り向くと同時にシールドを展開する。

その瞬間に、レイグのジェット・マグナムの一撃が叩き込まれる。

「くうっ…!」

相手の攻撃の凄まじい衝撃にフェイトは表情を歪める。

攻撃を防がれたレイグは再び後方へと下がる。

「今のあなた方では僕的能力すら捉えられないのですね、大人しく負けを認めてください」

距離を取ったまま再び淡々とした口調でレイグは言い捨てる。

「どうすれば……」

フェイトは悔しげな表情を浮かべて、バルディッシュを握る手の力を強める。

自分とベルクトが如何にスピードに自信があると言っても今の状態で一瞬で消える相手の姿を捉える等と言うのは非常に困難な事だ。

（ここは…ソニックフォームを使うのも考えるべきかな…）

その状況を打破するべく、切り札の解禁に踏み切るべきかフェイトは思い悩む。

「…フェイト、よせ」

しかし、そんな最中でベルクトが突然フェイトの手を握りながら表情をこちらへと向けていた。

「ベルクト…？」

「お前のことだ、ソニックフォームでも使ってこの場を切り抜けようと考えていたんだろう」

だが…こんな場所ですべてはこの先が持たないぞ」

「ッ…やっぱりわかってたんだね…」

自分の最愛のパートナーに全てを見透かされていたのを知ってフェイトは気落ちする反面、こんな状況なのにちよっぴり嬉しく感じってしまう。

「でもどうするの…アイツを倒さないでこの先には…」

「…無茶は俺の方がさせてもらおうでしょう」

「えっ…！ベルクト！」

唐突に放たれたベルクトの一言に、フェイトは表情を一変させる。しかしそんなフェイトの気持ちを他所に、ベルクトは己の体に内蔵された

禁断の力を遂に発動させる。

「E2コア：起動：！！！」

ベルクトのその一言と同時に、彼の体が眩い光に包まれていった。

＊

はこぶね下層部、タックとマリナの2人が敵を倒しながら先へと進んでいく。

「チャージモード！！！」

タックが手にしたライフルの先端を展開し、黄色の閃光を放ってガジェット達を消滅させる。

「てやあっ！」

その爆風を突き進みながらマリナは左腕の装甲に魔力刃を展開する。

「カートリッジ！！！」

同時にカートリッジロードによって魔力刃を巨大化させていきその状態で目の前にいる？型ガジェットへと突き刺して敵を爆散させた。

「マリナ、平気か！」

「何度も鍛えられたからね…これくらいは余裕よ！」

タックの問いかけにマリナは余裕の笑みを浮かべて答え、すぐさま

次の攻撃へと移る。

「はあああああ！！！！」

通路内の上部へと飛び上がり、そのままライフルによる回転乱射を行う。

それによってマリナの周辺にいた小型のガジェット達が一斉に破壊されていく。

「ホーミングシューター！！」

そのすぐ下では、タックが自身の周辺に白色の誘導弾を形成、それをコントロールして残りのガジェット達を正確に撃ち貫いていた。

そして奥へと進んでいった2人は遂に目的地へと到達する。

「ここね…」

「ああ…ここを潰せば敵の戦力は殆ど削られる…」

固い表情を浮かべた2人が立っていたのは錆付いた巨大な扉の前—兵装制御室の入り口であった。

「油断するなよ…重要な場所には強敵が付き物だ…」

「ええ…」

タックの言葉にマリナが頷いて答え、2人は扉を開いて中へと入っていく。

薄暗いその空間で2人は武器を構えながら周辺を警戒しつつ奥へと進んでいく。

コツ……コツ……コツ……

すると、2人の耳に何者かの足音が聞こえてきた。

それは、段々と近づいてきており、2人は更に警戒を強める。少しして、2人の視界に1つの人影が入ってきた。

「ここに来たのは君達か……全く……何の因果か知らないが……」
人影から気だるげな声が発せられる。

「……アンタは……」

そしてその正体は何なのかはつきりしたと同時に、タックが目を見開いて声を上げる。

「私の息子の研究の験体者達だね……よくここへと来たものだ」
静かな口調と共に白衣を纏ったスキンヘッドの男ーライネンはタックとマリナを歓迎した。

*

Dルーム、予想外の事態にカシマルは焦りを見せ始めていた。

「ググ：なんてしつこい輩なのでしょ…！！！」

忌々しげな表情でカシマルは目の前の敵：全身血だらけになったヴィータを睨む。

自身がほぼ無尽蔵に生み出すガジェット？型による一斉攻撃。

ヴィータはそれらを逐一潰しながらも、時間の経過によって多数のダメージを蓄積していった。

今の彼女は血に染まっていない部分の方が少ないといった感じで、本来なら戦闘は勿論、立つことすら適わない状態の筈なのだ。

それでもヴィータの表情からは、その闘志は全く失われていなかった
「うおりゃああああ！！！！！」

ヴィータはギガントフォルムのアイゼンを振り回し、

一撃で何体もの、カシマルの作った幻体のガジェットを潰していく。

「ええい！しぶとい奴ですねえ！さっさとやられたらどうなんですか！？」

ヴィータの気迫に当てられながら、カシマルは彼女を指差しながら怒鳴り散らす。

「っ…ざけた事言ってるじゃねえよ…」

「ヒィッ…！！！」

それに対しヴィータは凄みのある表情でカシマルを睨みながら、静かな怒りを込めて言い放つ。

その圧倒的な気迫に圧されてカシマルはたじろいでしまう。

「こんな…こんな所であたしが負ける訳にはいかねーんだよ…」

なのはや…ユーノやタック達が…みんながあたしを待ってんだ…

手前みたいなの…人のトラウマを抉らなきゃ戦えないようなゲス野郎に…！！」

ヴィータは呟きながらアイゼンを振り上げ、一際大きな声で言い放った。

「こんな場所でやられるわけにはいかねえんだよ!!!!!!」

激情と共にヴィータは足下に魔法陣を展開し、アイゼンのリミットブレイクを決行する。

それによってグラーフアイゼンは更に巨大化し、両部に巨大なドリルが装着された形態――

ツェアシュテールングスフォルムへと変形する。

「この死に損ないめえええ!!!!!!」

その変貌振りを見て、カシマルも右目のレンズを光らせガジェット?型の幻体を更に数十体出現させる。

しかし、少しも引く事無くヴィータは襲い掛かってくるガジェットを前にして

一度に何十発ものカートリッジロードを行う。

「ツェアシュテールングス……ッッッ!!!!!!」

ハンマー背部のブーストを吹かした瞬間、両足に激痛が走る。

ステルス能力を用いたガジェットの幻体が、ヴィータの両足に刃を突き刺していた。

それによって体制がフラつきかけたが、何とか踏みとどまってヴィータはハンマーを振り上げる。

「ハンマアアアアアア!!!!!!」

心の奥底から搾り出された凄まじい咆哮と共に、ヴィータはハンマーを横薙ぎに振るっていく。

ツェアシュテールングスフォルムによるアイゼンの攻撃は

周辺にいたガジェット達を、その巨体と振るった際の衝撃によって一体残らず破壊していった。

「な……なあっ……」

そのあまりに一方的な攻撃によって、スタボロと化したDルームでカシマルは震え始める。

もう自分を警護するべきガジェットは一体も残っていなかった。

「い…いけません…これはいけませんよっ!!」
それに気づいたカシマルはすぐさま追加のガジェットを出そうとする。

「……あれ?…ちよっ…!こんな時に魔力切れですかああ!!?」
しかし、カシマルの右目からは光は発せられず、当然ガジェットも出現しなかった。

そしてこれを好機と見たヴィータは再びアイゼンを振り上げる。

「あわわわ……ま、待ちなさい!ちよっと待ちなさいってばあああ
!!!」

「これで……終わりだあああああ!!!」

焦りまくって必死に弁護しようとするカシマルの言葉には一切耳を貸さず。

ヴィータは巨大なアイゼンを手にカシマルへと突撃する。

「んなあああああ!!!………」

その一撃をカシマルはまともに喰らい、吹っ飛ばされた衝撃で外壁を突き破りながら

そのまま遠くの空へとその姿を消すのであった。

「ウッ………」

カシマルを倒したヴィータは、そのままアイゼンを杖代わりに膝をついてしまう。

リミットブレイクを発動した負担も重なり、重度の疲労が彼女を襲う。

「はやく……行かねーと……なのは……達が……」

小刻みに震える体を何とか起こそうと必死に試みるが、どんなに気持ち勝ち勝っていても、最早体が言う事を聞くような状態ではなかった。

あっという間に視界がぼやけていき、意識が遠のいていく。

「ダメだ……ごめん……なのは……ユーノ……」

意識が途切れる瞬間、遂に援護に行く事が適わなかった仲間達に対して一言呟く。

ヴィータは目に涙を浮かばせながらぱったりとうつ伏せに倒れこむ。

……と、思われたその瞬間、突如としてDルームに黒い翼が舞う。

「謝る事なんて……何もあらへんよ……」

倒れる寸前だったヴィータの体を、その場に到着したはやてが抱えていた。

「はや……て……」

意識が途切れる寸前だったヴィータは、自分を包み込む暖かな感触によって意識がうっすらと覚醒する。

そして自分を抱えたまま寂しげな表情を浮かべるはやてに対して擦れた声を発した。

「たった一人の敵を倒す為に……こんなにボロボロになるまで戦って……」

ひしひしと語るはやての目からは、ポロポロと涙が零れ落ちていた。

「リイン…フォース…」

（ヴィータ…私は…お前が鉄槌の騎士である事を…本当に誇りに思う…）

次いで名前を呼ばれ、リインフォースは穏やかな声色でヴィータに返事を返す。

それと同時にはやてとのユニゾンを解除し、そつとヴィータの頬に手を触れる。

「お前を…死なせはしない…」

リインフォースが足下に魔法陣を展開し、ヴィータの治療を開始していく。

その感触に触れながら、ヴィータはゆっくりと目を閉じて意識を手放した。

「リインフォース…任せてええか？」

ヴィータを自分の手から離してそつと横たわらせた後、

はやてはリインフォースの方を見て真剣な表情でこうた尋ねる。

リインフォースは一度無言でコクリと頷いた後、心配そうにこう言う。

「主はやて…あなたも決して万全の状態とは言えません…どうか気をつけて」

リインフォースの言葉に対し、はやても無言で笑顔を浮かべて頷いて答える。

そしてはやてはDルームを後にし、先へと進んでいった。

＊

「ゼストの馬鹿めがっ…！」

地上本部、傷ついた体を引きずりながらマイヨは先へ先へと進んで行く。

シグナムとの戦いに敗れ、すぐさま後を追いついた直後

またしてもゼストがフルドライブを使用したのを察知したからである。

「あれほど無茶をするなど…何度言えばわかるのだ…！！」

こちらの世界で出会った自分の同士の身の安否を気にしながら、マイヨは目的の部屋へと到達する。

「ゼスト！！………ッ…これは…！！」

マイヨはその部屋の光景を見た瞬間に目を見開いて驚きを浮かべる。そこにいたのはシグナム、リイン、アギトの3人と

そして腹部から夥しい量の血を流して仰向けに倒れているレジアスとゼストの姿であった。

「これは……まさか貴様が…！！」

咄嗟にマイヨは、ゼストを倒したのが目の前にいるシグナムだと連想し

レーザーソードを構えてシグナムを攻撃しようとする。

それを見たシグナムも、すぐに表情を引き締めなおしてレヴァンテインを手にする。

「ま、待ってくれマイヨの旦那！ゼストの旦那をやったのはコイツじゃねえ！」

「なに………？」

しかし、2人が激突する寸前に、慌ててアギトが2人の間に割って入る。

アギトの言葉を聴いた瞬間に、マイヨは熱が冷めていき、冷静な声色で呟く。

「うっ……マ……マイヨ……そこに……いるのか……」

すると、今まで気を失っていたゼストが、突然意識を取り戻して苦しげに呻く。

「旦那……!」

それを見たアギトが慌ててゼストのすぐ側に寄っていく。

マイヨとシグナム、リインもまた、ゆっくりとゼストの方へと近寄っていった。

「ゼスト……」

「お前の……言うとおりであったな……仲間にならず……見境無しに無茶をして……」

結果がこのザマだ……結局……真実も聞き出せ……なかった……」

「旦那あ……!」

ゼストの顔の近くで膝をついて、彼の顔を見つめるマイヨに対し最後の力を振り絞るかのように、必死にゼストは言葉を紡いでいく。同じように彼の側にいるアギトは、既に涙で顔がグチャグチャであった。

「俺の知る限りの……事件のは真相が……ここに収めてある……」

「……お預かりします」

次いでゼストは、自身の指につけていた銀色の指輪をシグナムに手渡す。

真剣な表情でシグナムは答え、それを受け取った。

「マイヨ……お前やルーテシア……アギトやシャアと過ごした日々……存外……悪くないものだったぞ……」

「ゼスト……お前は……」

自身にに向かって言葉を発するゼストに対し、

マイヨは固い表情を浮かべたまま彼の事を見つめている。

「マイヨ……お前は……常々言ってたな……俺に対する恩を返すのが……自分の役目だと……」

「ああ……」

「なら最後に1つだけ……俺の……ワガママを聞いてはくれないか……」

苦しげに声を発し続けるゼストの音量も段々と小さくなっていく。彼の命の灯火が尽きるのも、最早時間の問題であった。

「俺や……レジアスが守りたかったこの空を……今この戦いだけでもいい……」

どうか……そいつらと一緒に守ってやって……く……れ……」

ゼストが最後の願いを友に言い切ったその瞬間、彼の体はグラリと倒れ、

遂に全く動くことが無くなった。

「旦那あああああ……！！！！」

ゼストが事切れたその瞬間、悲しみに満ちたアギトの叫びが地上本部に木霊するのであった。

＊

はこぶねブラッドルーム、ドゥーエに対してフロスト兄弟からの通信が入る。

『ドゥーエ、こちらオルバ、今駆動炉へと到着したよ』

「はい：良かったですわ：2人がご無事で：」

『なに：僕らの力を始めて心の底から認めてくれた君を残して死ぬ筈がないだろう？』

「お恥ずかしいですわ……」

ウツトリとした口調で話すドゥーエに対し、薄ら笑いを浮かべてオルバは答える。

『それより戦況はどうなっているのだ？』

「ああ：もうダメダメですよ：どの子も全然使えなくて：」

隣にいたシャギアの問いに対し、クアットロが心底ガツカリした様子で答えた。

『そうか：まあ大方予想通りと言えよう：どの道生き残れるのは真に力ある者だけだ』

「はい：あなた達のような方々さえいれば：」

「埋め合わせはどうにでもなりますからねえ」

その報告に対して、少しも落胆した感じを見せずにシャギアが答え、更にドゥーエとクアットロも同様に余裕の表情で言葉を発する。

『じゃあ：僕達はこのまま駆動炉の警備を継続するよ』

『お前達もくれぐれも気をつけるのだぞ』

「ええ：ありがとうございます：シャギア、オルバ：」

そしてフロスト兄弟の自分を気遣う言葉に対し、本当に嬉しそうな表情でドゥーエは返答をした。

通信を切った後、ドゥーエとクアットロの2人は邪悪な笑みを浮か

べる。

「まあ…このまま行けば御二人の心配も杞憂で済みそうだけど…」

「ですよねードゥーエ姉様ー」

そんな事を呟く2人の視線の先には

「あ……………くっ……………」

壁に叩きつけられ苦しい表情を浮かべ、体中が傷だらけになった
なのとはと

セデイスの一撃によって、今は完全に気を失って床に倒れているユ
ーノがいた。

「向こうの切り札も…もうじき潰れる事になりますからねえ…」

そんなのはやユーノに対して、侮蔑の視線を込めてクアットロは
言い捨てた。

＊

はこぶね下層部に位置する駆動炉、そこにはやてが到達した。

「ついに来たな……」

目の前に位置する不気味な赤い光を放つ巨大な正八面体の物体…
はこぶねのメイン動力である駆動炉を前にして、固い表情ではやて
は呟く。

「こいつさえ潰せば：到達時間を大幅に遅らせられる：！！！」
すぐさまはやてはシュベルトクロイツを構え、魔導書のページをめくっていく。

足下に魔法陣を展開して、魔力を集中していく。

「響け：終焉の「させないよ！」：ッッ！！」

しかし、魔法を発動する直前で、はやてに向かって突如として黄色い閃光が飛んできた。

咄嗟にはやては魔法の発動をやめて回避し、攻撃が飛んできた方向を見つめる。

「アンタらは：！」

「フフフ……久しぶりだね、八神はやて二佐殿」

視界に映った意外な人物を前にして、はやては驚きを隠せない。

そんなはやてを見つめて、紫色のバリアジャケットとバックパックを背負ったオルバは

小馬鹿にするような口調ではやてに向かって言葉を言い放つ。

「驚いたかね：私達がここにすることが？」

オルバの隣で、紅いバリアジャケットを纏ったシャギアもまた、せせら笑うようにこう言う。

「そうか：アンタらがスカリエッティと地上本部を繋ぐパイプやったんか：」

「まあね：レジアスの奴も馬鹿みたいに踊ってくれたよ：」

「そう：我ら兄弟の真意も知らずに：」

全て合点がいったという風な感じで呟くはやてに対し

フロスト兄弟は笑みを崩す事無く、はやてに対して答えた。

「で、君はここまでやってきたわけだけど：一体何をするつもりなのかな？」

オルバが明らかにわざとらしい口調ではやてに尋ねる。

それを聞いてはやては強い口調で真っ向から言い返した。

「決まっとるやろ：ミッドや沢山の世界の平和の為にこの船を止めに来たんや！！」

「ククク…平和の為か…」

そんな彼女の言葉に対し、クスクスと笑いを発しながらシャギアが答える。

「この船を作った連中こそが…管理局本局に巢食うダニ共結託していたというのにな…」

自身とドゥーエの手によって葬り去った最高評議会の成れの果てを思い出しつつ

シャギアは笑いが止まらなくなってしまう。しかし、しばらくした後

に笑みを浮かべながらも、殺気を伴った冷たい雰囲気纏う。

「だが…その言葉を受け入れる事は出来んな」

「そうとも…この戦争は…僕らが望んだ戦争なんだからね!!」

オルバも同様の冷たい雰囲気放ち、兄の薄ら笑いとは違う怒りの表情で言い放つ。

それを見てはやても戦闘態勢を整えなおすのであった。

＊

E2コアを起動させたベルクトの周辺に、夥しい量の魔力が舞う。

魔力と共に発生した暴風によって彼の髪ゆバリアジャケットが靡く。

「これが……ベルクトの…!」

ベルクトが発動した力を前にして、フェイトはその場で必死に踏みとどまりながら一言呟く。

「あれは……BB様と同じ…」

その力の正体が何なのかをすぐに察知したレイグは、ポツリとこ
う呟く。

「行くぞ……!!」

全身に大量の魔力を纏ったまま、ベルクトはライフルに魔力刃を形
成する。

そしてその状態でレイグに向かって突撃し…その姿が消滅した。

「速いですね」

先程とは比べ物にならないスピードだと感じながらも、

レイグは冷静に分析して、空間転移能力を発動する。

その瞬間にレイグの姿が消え、刹那、レイグがさっきまで立ってい
た場所にベルクトが現れる。

そしてそのベルクトの背後にレイグが立っていた。

「ジェット……」

シュン!!

「……な…に…!」

だがレイグが拳を振り下ろそうとした瞬間、彼の背中は大きく切り

裂かれていた。

初めてその冷静な表情が崩れ、レイグは瞬時に背後へと振り向く。見ると、たった今攻撃を外し、自分の目の前に立っているはずのベルクトが、

背後から自分に対して魔力刃の一撃を与えていた。

ドシュウッ!!

「……………!!」

今度は横腹に激痛が走る。すると、自分のすぐ横に魔力刃を突き刺すベルクトが立っていた。

しかし、自分の背後にもベルクトが魔力刃を構えて立っているではないか…

「どうなって……グアア!!」

考える暇も無く今度は真正面から衝撃を受けて大きく吹き飛ばされた。

見ると、彼の目の前で蹴りを放ったベルクトが立っていた。

(嘘でしょ……あまりに速すぎてこんな事が……)

その光景を離れた位置で見ていたフェイトは啞然としていた。

ベルクトが使っているのは転移能力でも分身でもないのはわかって
いた。

純粹にE2の無限の魔力よってスピードを限界まで高めた攻撃……

そのあまりにも凄まじいスピードと特殊なステップによって

ベルクトはレイグに対して他方向から何度も攻撃を加えていた。

その結果、あたかもベルクトが同時に何人も存在しているかのよう
に見えたのだ。

現に正面から蹴りを放ち終わった後、レイグの背後と横の位置にい
たベルクトの残像は消滅していた。

「全く……とんでもない力だな」

自身の力を使った感想を淡々とベルクトは述べていく。

「解除……」

そしてE2の発動を解除して、魔力値を普通の状態へと戻す。

するとその瞬間、ベルクトは膝をついてしまった。

「ベルクト……!」

その光景に再びフェイトが心配して彼の下へと駆け寄る。

「……ほんの1分程度の使用でもこの反動か……やはり奴との戦いまで
温存すべきだな……」

「ベルクト……」

「……大丈夫だ、反動があったとはいえこのくらいは全然問題は無い」

自分の体を摩ってくれるフェイトに対し、彼女を安心させるように笑みを浮かべてベルクトは答える。

「行くぞ…こんな場所でモタモタしてる暇は無いしな…」

そして立ち上がった後、すぐ側で気絶しているレイグに視線を向けながらこう呟く。

「うん……」

それを聞いてフェイトは、ベルクトの体の事や目の前に倒れているレイグの事など

様々な事が頭の中をよぎるが、ベルクトの言う通り先を急ぐことが先決だと思い

真剣な表情を浮かべて頷いて答えた。

＊

「ヒュウッ♪コイツはすげえや…」

はこぶねマスタールーム、レイグとベルクトの戦いをモニタリングしていたBBが

口笛を1つ吹いた後、感心したような口調でこう言った。

「まさかこんな予想通りに事が運ぶとは思わなかったぜ…」

ゴミとはいえレイグの奴をあんな簡単にぶっ倒すたあな…それに…」

B Bは自身の左目から赤い光を放ち、モニターの先のベルクトを凝視する。

「俺でさえ70パー前後なのに：兄貴の適正値は軽く90を超えてるじゃんかよ：

すげえ：マジすげえぜ：手にしたばかりのE2の力でここまで戦えるなんてよ：

興奮気味にB Bは楽しげな笑顔で言葉を発していく。

「くうく：マジで楽しみだぜ！！速く来いよな兄貴！そして俺と一緒に遊ぼうぜ！

E2に選ばれた者同士の最高の遊びでよお！」

そして今まで以上にベルクトの実力に対して興奮を見せ、マスタールーム内を縦横無尽に飛び回るのであった。

第32話（後書き）

ベルクトが遂にE2の力を発動です。

BBに劣るとはいえ空間支配能力の瞬間移動すら軽く超える超スピード…

残像効果で多人数に見えてしまうような速度なわけです。

（まさしく、残念…残像だみたいなノリw）

…地味とか言わんといてね？

さて、ウンコ部長撃破の代わりにヴィータはリタイア

はやてが駆動炉にてフロスト兄弟と対決です。

しかしはやても大分消費してるし、ユニゾンも解除状態…

これあの兄弟に勝てるのでしょうか？

マイヨに思いを託すゼスト…ライネンと対峙するタックとマリナ
原作同様（？）にクアットロに加えドゥーエにボコボコにされるな
のは…

ラストに向けて益々盛り上がってきた感じですよ。

ではまた次回の更新で…

第33話（前書き）

自分の書いた文章に自信が持てなくなってくる今日この頃です…

とりあえず今まで一番、暗くてカオスで…

そしてドゥーエとクアットロに殺意が沸く話になってると思いますW

ではどうぞ

第33話

ミッドチルダ地上、廃ビルの一画にて

「チッ……やっぱ簡単にはいかねえか……！」

荒々しく呼吸をしながら、苦しげな声でデュオが呟く。

バリアジャケットの至る所が傷ついており、長期戦による魔力の消費で

ビームシザースに形成される魔力刃も弱々しい物になっていた。

彼の周りには、同じように疲労困憊したプリベントーのメンバー達がいる。

「……想定していたよりも敵の物量が遥かに多かったな……このままでは……」

ガトリングを一旦降ろし、自身も魔力が殆ど残っていない状態とはいえトロワは、疲労を感じさせない普段の冷静な口調で呟いた。

今、プリベントー達の周辺には、彼らを取り囲むようにして大量のサーペントが立ち塞がっている。

そして上空にはこれまた、空を覆いつくすように空戦ガジェットが飛び交っていた。

自分達がいるいるエリア以外でも、他の魔導師達が必死に戦っているのだが、

それでも尚、敵の物量が減る気配が一向に見えないのだ。

「まさしく絶体絶命というやつだなこれは……！」

「だけど……僕たちがここであきらめたら……街の人達が……！」

自信無さ気に呟くゼクス言葉に、震える声でカトルが反論する。

別の部隊も手一杯なこの状況で、自分達がここで倒れるのはここら周辺の地域を無条件に蹂躪される事に他ならない。

しかし、悔しげな表情を浮かべるカトルにもまた、魔力の残量は殆ど無い。

バキィ！！

と、その時、凄まじい衝撃音と共に五飛が吹っ飛ばされてくる。

両腕に装着されたドラゴンハングはヒビ割れだらけになっており、手にしたビームトライデントは先端の部分が既に折られていた。

「クッ…この俺が…こんな機械人形どもに負けるというのかッ！」
自身の力が及ばないことにこれ以上ない悔しさを感じ、強い口調で五飛は言う。

その直後、五飛を追って更に十数体のサーペントが姿を現した。

「オイオイ…コイツあ本格的に本物の死神様が見えてきたか…？」

既に四面楚歌な状態で更なる増援が現れたその光景を見て

額に冷や汗を垂らしながら、自嘲気味にデュオが口を開く。

そして5人を包囲していたサーペントがジリジリと距離を詰めてきた。

「…ストラグルバインド！！」

だがその瞬間、5人の誰の物でもない澄んだ女性の声が響き渡る。それと同時に、5人を包囲していたサーペントが全て、青白い光の紐状のバインドで拘束されていった。

「?…何が起こった?」

想定外の救いの手とはいえ、唐突なその光景を見てゼクスが疑問を浮かべて呟く。

「それそれえええ!!」

と、今度は明朗快活な声と共に1つの人影が出現する。

その人影は固まっていた5人のすぐ側を突っ切り、サーペントの大群へと突撃していく。

「よくもこれだけ派手に暴れてくれたわねえ!!」

そして、魔力を込めた拳と蹴りによる連続攻撃によって立ち塞がるサーペントの大群達を片っ端から破壊していった。

「なっ：オイオイ何だよあの無茶苦茶野郎は?」

「魔力付加による直接打撃：いや、それ以上に近接格闘におけるセンスによるものだな」

自分達が苦戦してきた相手を素手で蹂躪するその人物を見て

驚きと呆れが半々と言った感じでデュオが言い

こんな状況下だというのに現れた女性の事を、トロワは冷静に分析していた。

「プリベントアの皆さん、大丈夫ですか!？」

すると、5人の側にサーペントを破壊しているのはまた別の女性が姿を現す。

「あなた達は…?」

「うーん：正義の味方：強力な助っ人：何て言えればいいかな?」
カトルの疑問に、攻撃を一旦止めて、最初に現れた女性が首を傾げながら呟く。

「ロツテ、ふざけてる場合じゃないわよ。まずはこの状況を何とかしないと」

「はいはい、じゃあ行くわよ!!」

もう1人の女性に注意を促され、最初の女性一リーゼ・ロッテはニヤリと笑みを浮かべて拳を構えなおし、再び魔力を練り上げていく。

「くらええええ!!」

そして再びサーペントの大群に突撃し、一方的な蹂躪を再開する。

「：私達の正体はわけあって今は言えませんが、とにかく私達はあなた方の味方です」

今はとにかくこの敵の大群を何とかしましょう！」

面食らっているプリベントのメンバー達の方に振り向き

固い表情で女性一リーゼ・アリアはそう言った。

次いで、自身の足下に魔法陣を展開し、魔力を集中していった。

＊

「グッ………!!」

別の一画の上空では、ヒロが100機近いガジェットに取り囲まれていた。

デバイスと化したウイングゼロのツインバスターライフルによる広域殲滅能力。

そしてゼロシステムを用いた高度な戦術をもってしても止む事の無い敵の大群の攻撃を退ける事は出来なかった。

ライフルの発射による大量の魔力の消費で、ヒイロもまた疲労困憊であった。

しかし、そんなヒイロの事などお構いなしに、ガジェットは大量のレーザーを発射していく。

ヒイロはレーザーの雨を必死に掻い潜りながら、敵のいない抜け穴を見つけ出す。

「俺は………」

その場で踏みとどまる。既に魔力は残っておらず、ツインバスターライフルも

撃ててあと一回が限度といった感じである。しかしその一回で残りの敵を全て殲滅出来るとは到底考えられない。

デバイスに内蔵されたゼロシステムの未来の中にも、自分が勝利する未来のビジョンを見出すことは出来なかった。

「俺は………死なない!!」

それでもヒイロはあきらめない。自分の帰りを待つ者の為にも死ぬわけにはいかなかった。

残った魔力を極限まで集中し、両腕を大きく広げてライフルを構える。

ピキイン……!

と、そんな折に突如として一陣の冷たい風がヒイロの頬を掠める。

「……!!」

そして次の瞬間に起こった変化に、普段滅多に驚きを見せないヒイロが両目を見開く。

自分を追っていた100機近いガジェットが全て凍結していたからだ。

「…どうやら間に合ったみたいだね」

直後、黒いバリアジャケットを纏った1人の青年が姿を現した。

「……………本局の応援が来るまでにはまだ時間があつたはずだが」

ヒロはすぐさま頭の中を高速回転させ、必要な情報を引き出す。

そして目の前の青年が何者なのかを予想立て、そして疑問を投げかける。

「ここに来たのは僕の独断行動さ、君の他の仲間たちの所にも今頃リーゼ達が応援に向かっている筈だよ」

青年はやりわりとした笑みを浮かべて、穏やかな表情で返答する。

「何でこんな事を…？」

「君ははやて達に協力してくれてる大事な仲間だからね…放っておけなかっただけさ」

再びのヒロの問いに対し、やはり穏やかな口調のまま青年、
一クロノ・ハラオウンは答えるのであった。

＊

戦艦はこぶね、ジル・バルドナの自室

「そうやってすぐに感情的になりますか…」

突っ込んできたバレルに向けて、バルドナはゆっくりと右手を掲げてシールドを展開する。

それによってバレルの放った実体剣による攻撃を容易く防御した。

「やはりあなたは私の息子に相応しくない…私の遺伝子を受け継ぎし優秀な人間は

そんな風にすぐに怒ったりはしませんよ」

「黙れよ……何でアンタみたいな人間が……！！！」

呆れた感じに呟くバルドナに対し、一旦後方に飛び下がってバレルは距離を取る。

静かに呟かれるその口調からは、今までにない以上の凄まじい怒気がありありと感じられた。

(バレル……………)

そんな彼の本気の怒りを目の当たりにしたフェイは

自分でも情けない事に、足がすくんで動けなくなっていました。

「やはりあなたはあの女の血を強く受け継いでしまっていますか…残念な事に…」

「あの女……？」

「そうですよ」

唐突に現れたその単語を、実体剣を構えたバレルが反復する。それを聞いたバルドナは口元を微かに釣り上げて更に続けた。

「思えばあなたの母さんも実につまらない人間でしたねえ…

私と同じ研究者という立場でありながら下らない情に流されてしまっ

て…結局はバルドナドライブの実験の際に…嘗ての私と同じようにどこかへ消えてしまいました…」

「俺の母さん……？」

「そうです、まあ…あの時は私の子供を生む機械代わり位にしか考えていませんでしたがね…」

「……………」

「バルドナ博士……！」

とんでもないその物言いに、流石のフェイも耐え切れずに声を上げる。

バレルの方はもう完全に理性が吹っ飛んでしまい、殆ど反射的にカートリッジロードを行う。

「マグナムセイバー！！！！」

凄まじい怒気を含んだ咆哮と同時に、魔力増幅を行った実体剣を地面に突き刺す。

それと同時に電流を纏ったエネルギーの放流が地を這いながらバルドナの方へと向かっていった。

バルドナは今度は、それを全く避ける素振りを見せずにただ突っ立っていた。

「！！……ヌウ……！」

エネルギーの放流がバルドナの右肩を貫通して背後の壁にぶつかって爆発を起こす。

斬り裂かれた肩の痛みにはバルドナは表情を歪める。

「うらああああ！！！！」

バレルは直後にバルドナの方へと飛び上がって拳を振り上げる。

そのまま突撃しながらバルドナの顔面を思い切り殴りつけた。

まともに攻撃を喰らったバルドナはそのまま仰向けに倒れこむ。

バレルは倒れたバルドナの上へと乗っかり、そして仮の顔面を何度も何度も殴り始めた。

「お前が！！お前のような奴がいるから！！！！」

「グッ……！！……やはりあなたは……ゴッ……わ、私の息子には……カハッ……なれませんか……グウッ……！！」

「うるさい！！……お前みたいな奴から生まれたなんて……俺は……俺はああ！！！！」

殴られ続けているというのに、バルドナは度々少し呻きを上げるだけで

冷静な口調でバレルに向かって呟いていた。

一方のバレルは止める事無くバルドナに向かって拳を振り下ろし続

けていた。

その目からは涙が溢れており、両腕は血で赤く染まり始めていた。

「やめてバレル！！」

しかし、そんなバレルの様子を見かねたフェイが、咄嗟に背後から腕を抱きとめ

バレルを止めようとする。バルドナは顔の形が酷く変形し始めていた。

「止めるなフェイ！！」

「いくらなんでもそれ以上やったら本当に死んでしまうわ！！」

殺すのはやりすぎよ！！それに…それに仮にもその人は…！！」

「父親だからか！？そんな関係ないだろ！！俺にとっては汚点でしかないよ！！」

フェイもまた涙声で、暴走するバレルを止めようとしたが

バレルはフェイの制止に構わず、バルドナを殴り続けていた。

「こんな奴の所為で六課の皆が！フェイが！そして何よりベルクトが！！」

みんなみんな傷ついたんだぞ！？こいつの1人の所為で全部が！！」

「バレル！！！！！！」

フェイの悲痛な叫びも全く無視して、バレルは殴る。ひたすら殴り続ける。

両腕は真っ赤に染まり。バルドナは顔の区別がつかない程になり始めていた。

（……無駄な…努力ですね…）

すると、そこまで来て突如、2人の脳内にバルドナの念話が流れ込んできた。

目の前のバルドナは、直接喋ることが出来る状態では無くなっていた。

（殺したければ…どうぞその目の前にいる私を殺せばいい…）

計画は動き始めている…あなた達や…出来損ないに如きには…どうせ止められませんよ…）

「だったら…」

そこまで聞いた所でバレルは両腕を止め、背中に回していた実体剣を手取る。

そしてその切っ先を眼前にいるバルドナへと向けた。

「言うとおりにしてやるよッ！！」

バレルは完全にキレてしまっていた。ただただ、目の前にいるこの男を殺さなければ…そういう一心になってしまっていた。

キーン！！

…振り下ろされた剣は、バルドナの顔面の僅か横の地面を突き刺していた。

「バレル…お願いだからあなたは…」

背後でフェイがすすり泣きながら、剣を持つバレルの手を

自身の手が白く変色するくらいの強い力で必死で握り締めていた。

「……………」

しばらく無言のままバレルは硬直していたが、やがて持っていた剣を手放す。

「ははっ…本当に何してんだろ…僕は…」

フェイに対して背を向けたまま、自嘲気味にバレルは呟き始める。

「人の命を奪うなんて…それこそイクスブラウに乗ってた頃は普通にしてたじゃないか…」

結局僕もこの人と同じで…」

「違うわバレル…あなたは自分が生きる為に…何より世界を守る為の戦いだったじゃない…」

自分の私利私欲だけで命を弄んでいたこの人とは違うわ…

何より…あなたを最初に戦いに巻き込んだのは…」

悲痛な声で呟くフェイの声を聞いて、バレルはゆっくりと彼女の方へと振り返る。

「フェイ……僕は……僕はツツ……！」

ようやく冷静になったバレルは、涙でボロボロになった顔で嗚咽を洩らす。

彼の背後にいるバルドナは実体剣を刺さずとも完全に事切れていた。

バレルに何十回と顔を殴られ、目鼻の区別さえ出来なくなっていた。

「フェイ……フェイ……！！」

バレルは親を求める子供の様な寂しげな表情で、フェイに抱きつく。対するフェイも、バレルを優しく抱き返してやった。

（バレルには辛すぎるわ……）

今のバレルの心境が、フェイには痛いくらいによく理解出来ていた。例えば面識が全く無く、自分たちにとっては害悪でしかなかった人物とはいえ

ジル・バルドナはバレルの実父に当たる人物であったのだ。

バレルはベルクトとは違い、絶望や憎悪を受け止めるだけの強い心は持っていない。

そして一所落ち着いた事によって、彼の心に多くの事実が押し掛かっていたのだろう。

自分は、オーランドの姓を名乗っているのだとしても

この命を命とも思わない人間…バルドナの血を引く息子として生まれていたのだという…

そして先程の自分は、目の前の男と同じように、命を何とも思わないような…

ただ感情のままに暴れる殺人鬼と化していたのだという事実を
そして、その感情のままにバルドナを…機動兵器のコクピットの中
とは違う

自らの手で他人の命を絶ったという感触……それら全ての事実が……
「大丈夫…大丈夫だからバレル…ここで立ち止まってなんかいられ
ないわ…

まだ皆戦っている…あなたには私がついてるから…だから…」

「……………うん…」

フェイはバレルの背中を摩り続けて、どうにか彼を落ち着かせる。

バレルは一旦抱擁を解いた後に、涙の痕を手で拭った後に後ろへと
振り向く。

「……………」

そして寂しげな表情で物言わぬバルドナを一度見つめた後、再び部
屋の入り口の方へと歩き始める。

「……………行こう…」

「ええ…」

静かに呟くバレルの背後で、心配そうな表情を浮かべ、
胸の前で手を握りながらフェイは答え、2人はバルドナの部屋を後
にした。

(……………甘いですね、相変わらず…確認すればいいものを…)

＊

ブラッドルーム

「く……うつ……」

壁に叩きつけられていたなのは、フラついた感じで地面へと着地する。

バリアジャケットの至る所が切り裂かれ、細々とではあるが血が染み付いている。

額にはそれなりの量の汗が付着しており、呼吸もだいぶ荒くなっている。

「ウフフ…情け無いものね…管理局の伝説のエースが…」

こんなたった2人のか弱い乙女に苦戦する様なんて…」

そんななのは前で、ドゥーエは不敵な笑みを浮かべて、

自身の右手の爪にこびりついたなのはの血をペロリと舐め上げる。

「か弱いだなんて…人を笑って傷つけられるようなあなた達が…！

」

ドゥーエからしてみたら、ほんの些細な冗談であれど、

今の頭に血が登りきったなのはの感情を逆なでするのには十分であった。

瞬時になのははレイジングハートを振り上げ、ドゥーエに向かって桃色の閃光を放つ。

「残念…」

しかし、それがドゥーエに当たる直前で、彼女の姿は掻き消すように消滅する。

「そんな単調な攻撃じゃあ、私達は捉えられませんよお？」

今度はクアットロの小馬鹿にするような声が部屋内に響き渡る。

すると、なのはを取り囲むようにして、何十人ものクアットロが姿を現す。

「ドクターの生み出した、誇り高き戦闘機人の4人目…」

「クアットロさんのIS—シルバーカーテン…」

「嘘と幻が織り成すこの完成された幻影術…」

「今のあなたのように、ただ単に強力な砲撃を繰り返すだけじゃあ…」

「私達を倒す事なんて到底出来ませんよお？」

何十人ものクアットロがそれぞれに言葉を発し、なのはを挑発する。

「そんなの…だったら一度に全部破壊すれば!!」

クアットロの挑発に対し、なのはは強い口調で言い返す。

部屋の上部へと飛び上がり、レイジングハートを前へと構えて魔法陣を展開する。

「ブラスター…2!!」

そして、レイジングハートの諸刃の剣である、ブラスターシステムの更なるリミット解除を決行する。

一瞬にしてなのはの魔力が先程までとは比較にならない程に増幅し、肉眼で確認出来るだけの莫大な魔力が、なのはの周辺を飛び交う。

その状態で更になのははカートリッジロードを連続して行い、魔力を高めていく。

それと同時にブラスターモードによる副装、ブラスタービットがなのはの側に二機出現する。

「アクセルシューター…ツッ!!」

力強い咆哮と共に、莫大な魔力が全て魔力弾へと変換され、ビットも含めた計三つの砲台から100は余裕で超える数の魔力弾

が乱射される。

「シューーーーッ！！！」

なのはそれら全てを一個残らず正確にコントロールしていき、部屋内にいる全てのクアットロへと直撃させていく。

膨大な数の魔力弾によって全てのクアットロが消滅し、部屋の至る所が損壊している。

「く……うつ……ごほっ……！！！」

魔力弾を撃ち終わったなのは、呼吸を更に荒げて激しく咳き込んでしまう。

文字通りの切り札であるブラスターモードの使用、それによる

大量の魔力弾の形成や精密な操作、これらの要因全てがなのはの肉体に大きな反動を与えていたのだ。

「まだ……本体をしとめてない……」

なのははその痛みに必死に耐えながら、血眼になってエリアサーチを始めようとする。

「隙だらけね……」

と、次の瞬間突如として爪を振り上げたドゥーエがなのはの目の前に出現する。

「！！！！！！」

突然の襲撃になのはは驚きつつも、咄嗟に右手を振り上げて巨大なシールドを形成する。

ブウン……

「えっ……？」

しかし、ドゥーエはなのはのシールドは愚か、彼女の肉体をそのまますり抜けていく。

「……くああっ！！」

気づいた時にはもう遅い。なのはは自分の体に激痛を感じると同時に何かが腹部を貫通する感触を覚える。

「至近距離の幻影すら判別がつかなくなるなんて……血の上った獣も同然ね」

なのはの背後でドゥーエが冷酷な表情を浮かべて、右腕の爪―ピアッシングネイルでなのはの背中を突き刺していた。

「ッ……ああ……！！」

「そもそも……自分の戦術も省みないでこんな事をする方が理解出来ないんだけど……」

苦しげに呻くなのはに対し、ドゥーエは突き刺した爪を引き抜く。それと同時になのはは地面へと落下していった。

「ハア……ハア……ハア……！！」

仰向けに倒れたなのはは、テンポの速い呼吸を繰り返す。

ブラスターによる反動と、ドゥーエの一撃によって体中がボロボロになっていた。

「ブラスターシステム……って言いましたっけ？」

すると、なのはの側にクアットロが出現し、真上からなのはの顔を覗き込む。

「んふふ……優秀なサポートがいて、後先考えないで一撃必殺が可能な状況なら……」

そりゃまあおつかないスキルだったんでしょうけど…」

「こんな状況では…逆に足枷にしかならないと、どうして気づかなかったのかしらね？」

意地悪い笑みを浮かべるクアットロの側で、ドゥーエもまたなのはの事を見下しながら言い捨てる。

「本当に残念ね…あなたはの実力はドクターも一目置いていた程だったと言うのに…」

そう言っただゥーエはため息を吐き、視線を、部屋の隅で倒れているユーノへと向ける。

「あんな価値の無いゴミ屑なんかを気にかけたらこの有様なんだもの…」

「ツツ…!!」

その言葉になのはは激しく怒り、満身創痍の体に鞭を打ち体を起こしてドゥーエに向けて砲撃を放とうとする。

「ざんね〜ん♪そんな状態で無理をなさらないのっ」

「ああっ!!」

それをクアットロが目ざとく発見し、なのはの体を思いきり踏みつける。

「あはははは!! 無様なものね! 管理局のエースがこのザマなんだもの!」

そしてなのはを踏みつけにしたまま、クアットロは本当に楽しそうに高らかに笑いを上げる。

「……ツ……う……」

「あらあら…冷血な白い悪魔さんにも、人並みの感情はあったみたいね…」

遂にはなのはは悔しさのあまり、小さく擦れた声で泣き始める。

自分の大切なパートナーを傷つけられたばかりか、

その敵に一矢報いるとさえ出来ず、頭に血が上っていた為に

こうして一方的に蹂躪されてしまい、なのはは悔しくて悔しくて仕方無かった。

だが、今の自分にはもう、この2人に抵抗するだけの気力も体力も殆ど残っていないかった。

（ごめん……ユーノ君……みんな………私は…）

心内でなのはは呟く、どんな苦しい状況でも決してあきらめない不屈の心を貫いてきたのはが、初めて心の弱さを表に出していた。

「あっはははは！！泣いてももうどうにもなりませんよお？」

なのはの姿を見下ろすクアットロは、それが愉快で仕方ないといった感じに笑い続けていた。

＊

駆動炉、そこでははやてがフロスト兄弟と激闘を繰り広げていた。

「穿て、ブラッディダガー！！」

はやては自身の周辺に紅い刃を形成し、それをフロスト兄弟へと向けて射出する。

超高速で放たれた紅い刃が一直線に2人に向かって飛んでいく。

「フッ…」

しかし、2人は余裕の笑みを浮かべ、瞬時に防壁を展開してそれを防ぐ。

防壁に激突したダガーが爆発を起こして、爆風によって視界を遮る。すぐさまはやてはシュベルトクロイツを構えて次の魔法を唱えようとする。

「遅いよ!!」

しかし、その時既に彼女背後にオルバが立っており、はやてに向かってバックパックのギガンティックシザースを伸ばす。「ツッ!」

はやてはすぐさま防壁を展開し、それよる捕縛を防ぐ。

「どうしたね? 接近戦には不向きなようだな八神二佐殿!!」
今度は魔力刃のサーベルを携えたシャギアが接近してくる。

「不向きも何も…アンタらそれをわかって私と戦ってるんやろ…!」
苦々しげに呟きながら、はやてはシャギアのサーベルが振り下ろされるより前に

上へと飛び上がって攻撃を回避する。

「闇の…いや夜天の書の主と言え、それを守る守護者がいなければ所詮はこの程度か!!」

オルバも同様に、兄とは違い感情的な声を発しながらサーベルを振り下ろしてくる。

はやては今度は横へと高速飛行を行って回避をする。

このように、砲撃や広範囲殲滅がメインであるはやては限られた空間内での戦闘は分が悪い。そしてはやて本人が指摘したように

フロスト兄弟はそれを理解した上で、はやてに強力な魔法を使用する鋤を与えない為に

2対1という数の有利を利用して、息つく間もない攻撃を行っていた。

「闇の書の主に相応しい度量の持ち主かと思えば、期待外れの様だな」

「ああ…結局の所く真に評価されるべきは、僕達兄弟ともう1人だけだ!」

攻撃を繰り返す中で、シャギアとオルバは強い口調で言葉を発していく。

「どうしてや…どうしてアンタらはこんな事に平気で手を貸せるん

や！」

攻撃を必死にかわしていくなかで、はやてもまた兄弟に対して言葉をぶつけていた。

「我々こそがこの世界の中心に立つべき人物だとわからせるためだ！！」

シャギアが左腕のクローを展開し、それを伸ばしてはやての腕を掴む。

「しまった…！」

腕を封じられたはやてが声を上げる。その隙を突いてオルバがはやての背後に迫る。

「僕達にも、君と同じように生まれながらの力があった！」

そしてギガンティックシザースを展開し、動きの止まったはやての両足を掴んで更に拘束する。

「だがその力は…フラッシュシステムに対応しなかった…！」

「たったそれだけで…僕達は前の世界で掌を返すかのように黙殺されたんだよ…！」

その状態でシャギアとオルバは、自らの本心をはやてに向かって吐露していく。

「そんな理由で…スカリエッティ達と手を組んでこんな事を…」

拘束されたままはやては、全く理解出来ないといった感じに声を上げる。

「ううっ！」

「貴様にはわかるまい…人を超えた力を持ちながら、評価を受けぬ者の苦しみは！」

その一言にイラついたシャギアは、もう片方のクローを伸ばしてはやての首を絞める。

「そう…生まれながらの力を評価され、生温い空間に身を置きつけて来た！」

君の様な小娘には、僕達が味わってきた屈辱や絶望は決してわからない…！」

喋っている内にオルバはどんどん感情が高ぶっていく。

「管理局で得た一佐と三佐の地位も…所詮は仮初の為のハリボテにすぎん…」

たった10年という期間で…それだけの地位を得た貴様とは違ってな…!!」

シャギアははやての首を掴んだクローの力を強め、ギリギリと音を唸らせる。

「思えば…レジアスの奴も中將になるまで40年もかかったそうだからね…」

その点だけはアイツに同情するよ…評価を得る為に必死な中で…君のように力を持つだけでその使い道を知らない…ただの甘ちゃんを近くで見たいれば…!!」

「く…あ…!!」

オルバの声には怒りが籠めり始めており、表情を歪めながらはやての足を掴むシザースの拘束力を強めていく。その痛みにはやては苦痛の声を洩らす。

「そうさ…ただ力を持つだけで、周りの人間に恵まれていただけの小娘だったのだからな!」

「僕達兄弟は…この力を認めさせる為にありとあらゆる事をしてきたんだ!」

「故に許せんのだ!お前のような存在がな!!」

自身の中に築かれてきた怒りを、目の前の相手であるはやてに全てぶつけていく。

「全てを破壊し尽くし、新たな秩序を築く!!」

「その為には、僕達兄弟にとって君は目障りなだけなんだよ!八神はやて!」

シャギアは眼前に凶々しい巨大な真紅の魔法陣を展開する。

「我ら兄弟に敵対した事を後悔するがいい!!」

一際大きな声でシャギアが叫ぶ、それと同時に魔法陣からスパークを纏った赤黒い閃光―メガソニックキャノンがはやてに向

かって撃ち放たれた。

＊

兵装制御室、薄暗いその空間でタックとマリナが目の前的人物、アルバート・ライネンと対面する。

「そう緊張せずともいいですよ：ここはそんな危険な部屋でも無いですからね」

自分と敵対する人物に対し、あまりにも敵対心を感じさせない物腰でライネンは呟く。

対称的にタックとマリナの2人は、固い姿勢を崩さぬままライネンの前に立っている。

「…アルバート・ライネン、アンタに1つ聞きたい事があるんだ…」
やがて、固い表情で武器を構えたままタックが口を開いた。

「今更アンタがどうして生きてるかとかは聞かない…」

けど、何でアンタはスカリエッティに協力してこんな事を…」

「……単純な事です、彼が私の知識を求めたからですよ」

タックの言葉に対し、何てことは無いといった感じでライネンは答える。

「どうして…？ U C Eに裏切られたからとはいえ、あなたはバルクホルツの話では

外宇宙勢力の予見して、それでガーディアンを作ってたって…

そんなあなたがどうしてこんな…世界を滅ぼすような事を…」
納得がいかないといった感じにマリナは答える。

一時期、バルクホルツと行動を共にしていた彼女であるが
その時バルクホルツが言っていた話を総合すれば、彼の目的はガー
ディアンによる

外宇宙勢力の脅威の回避と、そしてそれ以上に、ガーディアンの…
尊敬する実の父親の正しさを証明する事が大きな目的であったのだ。
それに関しては闇の書事件の際に敵対した時に、タックも聞いた話
である。

しかし今、ライネンがしている事は、スカリエッティやバルドナと
結託し、

時空管理局やミッドチルダ、果ては他の多くの次元世界を破滅に導
くような

とてつもない大罪だと言えるのだ。

「…今の私は、あなた達が想像するような科学者などではないとい
うことだ」

2人の反応を見て、ライネンは表情を少し曇らせる。

「そりゃあ…私だって最初は平和というのをきちんと考えてたさ…
私も自分が生まれた地球という星が愛しかったのだからね…」

そして目の前のコンソールを操作して、あらゆる方向にモニタを展
開する。

ガーディアン、アークシリーズの設計図や経過の調査書

タックやマリナ達の地球や、コロニーなど、ありとあらゆる物が映
し出されていく。

「しかし人間というものはあまりにも貧弱だ…故に武器を手に取り
敵と戦う…」

外宇宙勢力の脅威に負けないだけの力を得るには…それだけの時間
と労力が必要となる…」

モニターの数々に目を奪われているタックとマリナにはお構いなしに
ひたすら目の前のコンソールを操作し続けながらライネンは続けて

いく。

「私にはそれを用意するだけの知識があった：人々は平和を求めた：だから私はそれに応えるために、アークシリーズの開発を行ったのだ：」

しかし：それを求めた筈のUCEの俗物によってプロジェクトが頓挫させられたのだ：」

そこまで言った後、ライネンは顔を上げて2人の事を睨み付ける。

「！……」

その瞬間、2人の背筋にゾクリと冷たい感触が襲ってくる。

(何なの：このプレシャーは：)

目の前にいるライネンから突如として発せられた気迫：

それに押され、たじろぎながらマリナは心内でこう呟く。

「あなた達のような：それこそ私の半分ほどしか生きた事の無い若造にわかるかね？

三桁をも超えるガーディアンコロニーの建造：

それらのエネルギー源となる希少物質E2の発掘作業：

アークシリーズの適合者となりうるパイロットの搜索と育成：

それを完遂するのにどれ程の労力が必要か：

そして、直前であきらめざるをえなくなった挫折感がどれ程のものか？」

今までに無い：それこそ、ずっと共に肩を並べてきた他の2人の天才達にさえ

見せた事の無いような、凄まじい気迫感が今のライネンにはあった。

「けど、それとこの世界での出来事は別の話だ：アンタは自分の身勝手で

こっちの世界で暴れているに過ぎないだろう！！」

ライネンの発するプレッシャーを跳ね除けるかのように、

タツクは強い口調でライネンに向かって反論する。

「ああ：関係ないだろうね。けど、私がこの世界で何をするのも君達には関係ないだろう？

裏切ったのはUCEの方なのだ。だから私も裏切られたなりに好きに生きているだけなのだよ…

所詮私は一度死した身…気まぐれで生きているだけの亡霊なのだからね」

対称的にライネンは、冷静な口調を崩す事無く呟いていく。

「だから…私がこれからする事も、君達には直接関係無い…私の気紛れなのだよ」

そう言ってライネンは、コンソールの1つを操作する。

その瞬間、兵装制御室の一带にブザーが鳴り響き始めた。

「ライネン、何を…!？」

表情を強張らせながら、武器を振り上げてマリナはライネンに視線を向ける。

それに対し、ライネンは無言のまま僅かに口元を吊り上げて不敵に微笑んでいた。

＊

ミッド地上、その道路上をスバルは猛スピードで疾走していた。

(ギン姉……!!)

向かう先は自身の姉の下である、前回と同じで何か嫌な予感がしたスバルは

自身が撃破したノーヴェを他の局員に任せ、急いでギンガのいるポ

イントへと向かっていたのだ。

「スバル！！」

「あっ…ティア！！」

すると、その途中でティアナが姿を現し、スバルと合流する。

「そっちは大丈夫だった？」

「ええまあ…苦戦はしたけど何とか撃破したわ」

スバルの問いに対し、落ち着いた口調でティアナは答える。

「地上の方はまだ敵が大勢残ってるわ、急いで私達もアムロ一尉達と合流しないと…」

次いで、その後どうするべきかを冷静な口調でティアナが言う。

「うん…でもティア、その前に私…」

スバルはそうするべきだとはわかってはいたが

やはりギンガの事が心配だったので、その旨を伝えようとする。

その時であった。

『た、大変！！はこぶね下部の巨大砲台、再び稼動！！』

2人の下にアースラからの緊急通信が入る。

「巨大砲台って…まさか！！」

それを聞いた2人はすぐさま、そう遠くない位置に浮かんでいたはこぶねに目を向ける。

すると、今まで沈黙を保っていたはこぶね下部に位置する巨大砲台一ガーディアンが、再び大量のリングパーツを展開して光を収束させ始めていた。

「そんな…あれが今発射されたら…！！」

そう呟くティアナの顔が絶望に染まっていた。

ガーディアン破壊力は、はこぶね出現時にセデイスの通信ジャックによって
見せ付けられた光景で、それがどれ程の物なのか思い知らされていたからだ。

その破壊の閃光が今、自分達も立つミッドチルダへと放たれようとしていたのだ。

「…どうすれば…このままじゃギン姉も、私達も…!!」

スバルはその場に膝をついて震えた声を発していた。

そんな2人をまるで嘲笑うかのように、ガーディアンに集まる光は
どんどん強まっていくのであった。

第34話（前書き）

超展開…とにかく超展開の連続です。

あと今までより長めになっています。

他の全てのケリをつけないとラストのシーンが書けなかったのです…

第34話

「うっ……ぐすっ……あぐっ……」

管理局地上本部レジアスの自室

物言わぬ冷たい死体と化したゼストの側で、アギトがすすり泣いていた。

「アギト……」

「マイヨの旦那あ……」

そんなアギトの側で、マイヨが固い表情で声をかける。

アギトは涙声のままマイヨに答える。

「ゼストの……ゼストの旦那は………！」

「……奴も一人の戦士であったあった以上、覚悟はしていた筈だ」

「でもさあ！……こんな終わり方ってありなのかよ……！」

納得のいかないアギトは、感情的な声で言う。

結局、親友に全ての真実を聞きだすという自身の目的も果たせず、しかも、一時的とはいえ味方であった人間に裏切られて殺されたのだ。

いくらなんでも惨すぎる結末ではないかと、アギトは思っていた。

マイヨも口では落ち着きを取り払ってはいたが

シグナムから聞かされた事の顛末を考えると、

やはりこの世界での戦友の最期が無念なものだと思っていた。

「…私はこれから空に上がる」

すると、そんな2人に背を向けた状態のシグナムが口を開き

そして2人の方に振り向いて更に言った。

「お前達はどうする？」

それに対し、マイヨが立ち上がってシグナムを真っ直ぐ見据えて答える。

「悪いが貴様らと手を組むつもりは毛頭無い、目的も失われた以上私はこの世界がどうなろうと知った所ではないからな」

「……………」

「マイヨの旦那！」

その返答にシグナムは表情を歪め、アギトもまた声を上げて反論の意を示す。

「だが…」

すると、それを聞いてマイヨはゼストの方を向いて更に続ける。

「……私と共に戦ってきた戦友から、最後の願いを託されたからなら私はギガノスの戦士の誇りにかけて、それを叶えなければならない…」

「そうか………」

そこまで聞いて、シグナムは歪めていた表情を元に戻す。

「アギト……お前はもうするのだ？」

次いでマイヨはアギトに尋ねる。

アギトは右手で涙を拭った後に、真剣な表情をして答える。

「決まってるさ……ゼストの旦那はあたしにとっても大切な恩人だ……その旦那がマイヨの旦那に思いを託したなら……」

そして腕を振り上げて、力強くアギトは自分の意思を示す。

「あたしは……マイヨの旦那についていく……!!」

「わかった……」

アギトの決意を聞いて、マイヨは固い表情のまま答えた。

「決まりだな」

「言っておくが貴様に従う謂れは無いぞ、私達は私達で勝手にやらせてもらう」

「かまわない、協力に感謝する」

マイヨとシグナムがお互いに顔を見合いながらやり取りをする。

するとその時

「緊急通信…？」

シグナムに対しアースラからの通信が入る。

「なんだとっ!？」

そしてその内容を聞いてシグナムは表情を一変させた。

＊

ミッド地上、シャアとルーテシアを他の管理局員に預けた後
アムロはエリオ、キャロと別れて1人で目的のポイントへと急行していた。

「シャーリー！状況はどうなっている!？」

『発射予想時間まであと5分足らずです!!』

他の局員達への避難も呼びかけていますが、敵の抵抗が激しく…』

「そうか…くそっ…! アルバート・ライネンめ…!」

報告を聞いてアムロは悔しげに歯を噛み締める。

彼もまた、ガーディアンの再度の起動を聞きつけ

それが発射されると思われるポイントへと急行していたのだ。

『でもアムロ一尉! あんなのを1人で止めるなんて無理ですよ!』

一尉も速く避難なさらないと…』

モニター越しに他の局員が、アムロに逃げるように訴える。

局員の言う事は最もである。魔導師というのはあくまでも人間が戦っているのであって

MSなどの機動兵器を介して戦っているアムロ達の世界とは根本の規模が違う。

そのアムロ達の世界ですら、猛威を振るった純粋な破壊の力であるガーディアン

それを真っ向から止めようというのだ。

「無茶だろうと何だろうと、どうにかしないとミッドが壊滅的な被害を受ける…！」

だったら1人くらいはそれを何とかしようとする馬鹿がいてもいいだろう…」

それに対し、どこか不気味なくらい落ち着いた口調でアムロは答える。

『アムロ一尉！』

「悪いけど…前の世界でも諦めが悪かったからね」

尚も反論しようとする局員をお構いなしに、アムロは通信を切断する。

そして表情を真剣なものへと変え、グッと拳を握った。

「デバイスだろうとMSだろうと…Vガンダムは伊達じゃない！」

＊

そしてアムロはガーディアンとの直射線上の位置へと到達する。

砲口には膨大な光が収束しており、発射まで秒読みの段階であった。アムロはそこから離れた位置に立ち、急ぎで回復させた。デバイスのフィンファンネルを6機全て分離させる。

「たかが衛星砲の1発くらい、ガンダムで防いでやる!!」
力強くアムロが言い放ち、それと同時に6つのフィンファンネルに魔力の全てを注ぎ込む。

すると、フィンファンネルを起点とした巨大なシールドが形成された。

バッシュウウウウ!!!

次の瞬間、ガーディアン砲の砲口から破壊の閃光が降り注ぐ。

そしてそれは一直線に、アムロの展開したシールドへと直撃する。

「……ッッ…ウウウウ!!!」

その凄まじい衝撃に、アムロは表情を歪めながらも手を前に出し、必死に展開したシールドを維持しようとする。

しかし、本人も心の奥底でわかつてはいたが、やはり無理があったらしく

ガーディアンの閃光と拮抗しているシールドに、すぐにヒビが生じ始める。

すると、アムロの側に6つの人影が姿を現す。

「1人だけ抜け駆けとは納得いかんな!!」
多少の皮肉がこもった声で人影の1つーゼクスがアムロに言い放つ。
現れた6人のフリベントー達は、それぞれフィンファンネルの前に立ち

自身の魔力の残りを、ありったけ注ぎ込んでいく。

すると、アムロの形成していたフィールドが再び強度を増し、ガーディアンを防ぐ。

「やめてくれ!こんな事に付き合う必要は無い!!」

シールドを展開する中央でアムロは6人に対して叫ぶ。

「心配なさんなって!無茶するのは昔から得意でね!!」

「それにここであきらめてミッドが焼かれたりしたら…僕達が来た意味が無いじゃないですか!」

それに対しデュオが明るい口調で、カトルが必死の声色でアムロに答える。

「ナタクよ…俺に力を貸してくれ!!」

「……………」

五飛はデバイスとなった愛機に呼びかけながら、トロワは無言で魔力を注ぐのに集中している。

「これ以上…悲劇は繰り返させない…!!」

ヒロもまた、真剣な表情を浮かべて目の前の行為に集中する。

6人全員が誰一人として、あきらめるつもりなどさらさら無かった。

すると、シールドを形成する皆の所に、他の航空魔導師達が続々と集結し始める。

そしてプリベントー達と同じように、アムロのシールドの強化に協力する。

「君達まで…!」

「ミッドがダメになるかならないかなんだ!!」

「そんな時に尻尾巻いて逃げたりしたら、管理局員の名折れですからね!!」

「管理局のもう1人の白いエースに、協力出来るなら本望ですよ!」
集結した多くの局員達が、不安を全く感じさせない声でアムロに言葉かける。

「アムロさん!!」

「!!...」

聞き覚えのある声のアムロの耳に入り込む。

すると、避難するように命じたエリオとキャロの2人が、フリードに跨ってこちらへ来ていた。

「自分だけこんな無茶をして...水臭いですよ!!」

しかもその後ろには、ヴォルテールに乗ったスバルとティアナまでいた。

「みんな!ここが正念場よ!!」

「「はい!!」」

ティアナの声に残りの3人が高らかに答え、そして他の局員達と同様に

フィンファンネルの1つの前で、魔力を開放していった。

「無理だよ!!みんな下がれ!!」

「無理なのは承知かもしれんけど...!!」

「けど...自分の世界でもないのにこんなに頑張ってくれているアムロ一尉を見捨てて...」

自分達だけで避難するなんて...機動六課の名を背負う者の行動じゃないんですよ!!」

尚も逃げるように訴えるアムロに対し、真っ向からスバルとティアナは反論する。

その後も多くの局員達が集まり、アムロの展開したシールドの強化に努めていた。

＊

ブラッドルーム、サディスティックな笑みを浮かべて、ドゥーエとクアットロは

仰向けに倒れこんでいるのはを見下ろしていた。

「さあてドゥーエ姉様？そろそろトドメといきますう？」

「そうね…これ以上邪魔をされても仕方ないものね…」

わざとらしい小馬鹿にした口調でクアットロは尋ね、ドゥーエは右手で口元を押さえながら答える。

クアットロは、既に目が虚ろになり涙を浮かべた表情で全く抵抗の意思を見せないのはの上半身を抱える。

そしてなのはの前に立ち、ドゥーエがピアッシングネイルを振り上げる。

「さようなら、管理局のエースオブエースさん…」

笑みを浮かべたままドゥーエはその狂気の一撃を振り下ろそうとする。

「ッ………？」

しかし、何故か腕が振り下ろされない。疑問に思ったドゥーエが後ろに振り向く。

「……まだ息があったんですね……」

その正体に真っ先に気づいたクアットロが呆れた感じに呟く。

「……………」

何故ならドゥーエの背後に、今まで気を失って倒れていた筈のユーノが

振り上げたドゥーエの腕を掴んで無言で立っていたからだ。

「あ……ユー……ノ………君……」

その光景を見たのはは目に光が戻り、擦れた声でユーノの名を呼ぶ。

「…死に損ないが邪魔をしないでいただけます？」

突然の復活に多少戸惑いながらも、ドゥーエは相手が手負いだというのを思い出し

背後に振り向きながら挑発するようにユーノに言う。

「……なせ」

「あら？小さくて聞こえませんかわねっ！」

何かをポツリと呟いたユーノに対し、ドゥーエは余裕の笑みで残った方の拳をユーノに向かって叩きつけようとする。

「!？」

しかし、ドゥーエの放った一撃は、素手でユーノに止められてしまう。

（戦闘機人の私の一撃を…？）

ドゥーエはヒヤリとした感覚に襲われる。

素体が女性であるとはいえ、スカリエツティによって大幅に身体能

力を強化された戦闘機人の腕力は

並みの成人男性程度なら軽く吹っ飛ばせる筈だったからである。

それを手負いの敵1人に、防壁すら使わずに素手で止められたのだ。

「はなせ……」

「ッッ!!」

再びユーノが声を発する。その一言を聞いただけで、ドゥーエはすくみ上がる。

その声はまるで、地獄の亡者のような凄まじく重みのある声だったからである。

「聞こえないのか……なのはをはなせ……!!」

そしてそんな声を発するユーノの表情もまた常軌を逸していた。

眉間に大きな皺が刻まれ、大きく見開かれた目は、獲物を狙う猛獣のように……

いやそんな生易しいものではなく、ただただ、目の前の敵を排除する事だけに固執しているような

深い深い、怒りと憎しみに満ちた表情だったからである。

「ッ……ア!!」

そんなユーノの姿に言い知れぬプレッシャーを感じたクアットロは突然体がガタガタと震え始め、なのはを抱えていた腕を放してしまふ。

「チィッ!!」

ドゥーエはそんな空気を払いのけるように舌打ちをし、

一旦パックスピンをしてユーノから距離を取り、爪を振り上げて一直線にユーノに突撃する。

それに対してユーノは、右腕をゆっくり振り上げて、シールドを展開した。

カキィン……!

「!!…わ、私のピアッシングネイルが!？」

ユーノのシールドに攻撃したドゥーエのピアッシングネイルが一瞬にした粉々になる。

あまりに予想外の展開に、ドゥーエは激しい動揺を浮かべる。

「コスモスター……リミッター解除…アンリミテッドブースト…」
すると、コスモスターを構えてユーノが一言ポツリと呟く。

その瞬間、彼の周りに突如として莫大な魔力が発生し始める。

「こ、こんな力が…」

「嘘でしょう…あいつは単なるゴミ屑だった筈じゃ…」

今まで虫の息だった敵の、今の状態が信じられず

ドゥーエとクアットロは目を見開いたまま動く事すら出来ない。

「なのは……」

その状態でユーノは、満身創痍になっているなのは側に膝をつき自身も腹部の傷で血だらけのその体でなのはをそっと抱きしめる。

「ユーノ君……む、無茶だよ…そんな…」

「…そのセリフ、今の君が言えることかい？」

抱きしめられた状態でののはは、ユーノの無事を喜びつつも

彼も大きなダメージを受けている事を思い出し、身を案じる。

そんななのはの言葉に、ユーノは苦笑しながら答える。

「でもそんな事はいいんだ…大切な問題じゃない…」

すると抱擁を解き、ゆっくり立ち上がってユーノは真剣な表情で呟いていく。

「許せないんだ…また無茶をした君の事よりも…君を泣かせたアイツらの事よりも…」

コスモスターとA Z-3にカードを挿入し、そして声を張り上げて叫ぶ。

「…君の事をまた守ってあげられなかった…僕自身のことガッツ!

！」

その叫びと同時に、ユーノの魔力が再び暴発し、あたりに衝撃が発生する。

莫大な魔力がユーノの周りを飛び交い、それによる暴風で彼の髪やマントが大きく靡く。

「！！！！：クアットロ！！！」

「は、はい！！！」

ドゥーエとクアットロは本能的に察知していた。あれはヤバイ、只者ではないと。

何かに弾かれるようにドゥーエが叫び、クアットロがそれに答える。

「シルバーカーテン！！！」

瞬時にクアットロがISを発動させ、2人の姿を消滅させる。それを見たユーノが魔法陣を展開し、AZ-3を前に構える。

「リミッター制限無視：超広域サーチ：開始：！」

そして次にコスモスターを前に構え、そして何も無い空間にその銃口を移動させていく。

「リミットブレイク：！！撃て！デイバインバスター！！！」

コスモスターのリミットブレイクによって、魔力増幅を度外視した魔法が放たれる。

なのはの放つそれと同等以上である黄緑の閃光が何も見えない空間を飲み込んでいく。

「ウアアアアア！！！！！」

すると、クアットロの叫び声が部屋中に響き渡る。

そしてデイバインバスターの閃光が消えた後、気絶したクアットロが落下してきた。

「！！！！：あ、ああ：うあ：！」

クアットロが倒れた事によってISが解除され

別の場所で身を隠していたドゥーエの姿が露になる。

そのあまりにも無茶苦茶な力に、ドゥーエは遂に腰を抜かして尻餅をついてしまう。

「ユ、ユーノ君…今の…」

「これがコスモスターの切り札…普段かけているホルダーデバイス特有の

魔力制御の力を大幅に上げて、カードにインプットされた数値の何倍もの…魔力による…魔法の発動が…ゴフッ!!」

なのはに説明をしている途中で、ユーノは激しく咳き込んで血を吐いてしまう。

「ユーノく…ツツ!」

なのははユーノの姿を見て立ち上がろうとするも、今までのダメージで体が動かない。

「だい…じょうぶだ…なの…は…コイツは…コイツだけは…!!」

再び腹部から血が流れ始めていたが、お構いなしにユーノはコスモスターに

再び新たなカードを挿入し、魔法陣を展開する。

するとコスモスターの砲身に、黒い正方形のボックスが出現する。

「擬似リンカーコアシステム…増設魔力コンデンサー展開…!」

コスモスターに新たな装備を施し、リミットブレイクによる魔力の上昇を更に高めていく。

「そしてこれがリミットブレイクしたコスモスターの更なる能力…ディール博士が研究していた、擬似リンカーコア…

それによる更なるブーストを可能にした魔力コンデンサーシステム…!!」

説明と同時に、ユーノの周りとコスモスターに内蔵された魔力が更に上昇していく。

「イヤ…イヤッ…!!」

ユーノの膨大な力とプレッシャーに圧されてしまったドゥーエは先程までのサディスティックな雰囲気は完全に消え失せており

尻餅をついたまま後ろへと引き下がる、情けない格好となっていた。しかしユーノはそんな彼女に対し、情けをかけるつもりは全く無い。

「ディバイン…バスタアアアアアアッ!!」

先程以上の魔力数値で、デイベインバスターが発射される。

「イヤアアアア……!!」

目の前に迫り来る圧倒的な力にドゥーエは為す術なく飲まれていく。ドゥーエを飲み込んだデイベインバスターの一撃はそのままはこぶねの外層を突き破っていき。

その閃光が消滅した時には、ドゥーエの姿も無くなっていた。

「……………」

あまりに圧倒的な展開に、なのはは呆然としていた。

「終わったよ……なの……は……」

敵を倒した事によって緊張の糸が解け、ユーノはそのまま地面へと倒れこむ。

「ユーノ君ッ!!」

いても立ってもいられないなのはは、体の傷などお構いなしにユーノの下へと駆け寄る。

「バカ……自分で言ってたのに……どうしてこんな無茶を……!」

「君の事を……守る為なら……そんなの関係ないよ……」

ユーノの体を抱えながら、なのはは大粒の涙を零していた。

そんななのはに対し、グツタリとしながらも笑みを浮かべてユーノは答える。

「けど……まだ……最後の仕事が残ってる」

する唐突にユーノがそんな事を言って、ある場所へと視線を向ける。その先にはヴィヴィオの血液が満たされたポッドが置かれていた。

「そんなの後でもいいよ……!今はユーノ君の事を……」

「傷だらけなのは……君も一緒だろう……それに、今ここであれを破

壊れないと…

また別の敵が襲ってくる可能性だってある…！」

目の前の事よりもユーノの身の安全の方が優先だとなのはは訴え出るが

ユーノはその訴えを受け入れず、残った力を振り絞って立ち上がる。
「でも僕も君も…残った魔力であれを破壊するだけの力は1人では持っていない…」

そう呟きながらユーノは自身のコスモスターと
そしてなのはの持っていたレイジングハートを手取る。

「だから、最後に僕の力を全部君に託すよ…本来は少しでも…君の無茶を少しでも和らげる為に用意していた…この力を…！」

そう言ってユーノは一枚のカードをコスモスターへと挿入し、2つのデバイスを接触させる。

その瞬間、ユーノの周りが光に包まれていった。

＊

はこぶね駆動炉、メガソニックキャノンによる爆風が辺りに広がっている。

「…しぶといのだな、君も」

シャギアは安心する事無く、固い表情で爆風に向かって呟く。
そして爆風の晴れた先には、体中がボロボロになったはやてが、力

強い表情で立っていた。

「今の一撃を耐えたのか……まったく、本当に忌々しい奴だよ!!」隣に立っていたオルバが感情的な声ではやてに言葉を放つ。

「しぶとかるうが……忌々しかろうが……どうでもええ!!」

力強い口調ではやては言い、2人に向かって白い閃光を放つ。

「!!!!!!」

突然の反撃に、2人は驚きながらもその閃光を回避する。

「はあああああ!!!!!!」

するとなんと、はやてがシュベルトクロイツを構えたままシャギアに突撃してくる。

あまりに突拍子な行動にシャギアは反応が遅れ、

そのまま振り下ろされたシュベルトクロイツの一撃をその身に受ける。

「そんな下らない理由で!アンタらの事認めるわけないやろ!!」

吹っ飛ばしたシャギアに向かって、瞬時にはやては魔導書を開きシャギアに向かって大量の白い魔力弾を発射する。

その間にオルバが割って入り、魔力弾をすべて防御する。

「私個人を憎むのなら大いに結構や!けどその憎しみを世界に向けてええわけがないやろ!!」

苦しんでるのはアンタらだけやない!!辛い事や悲しい事を抱えてるのは誰でも一緒や!!」

感情的な声で叫びながら、はやては再び2人に向かって突撃する。

2人はそれぞれ別方向に回避するが

間髪いれずにはやてが魔法陣を展開し、小規模なデアボリック・エミッションを形成

それをすぐに発動させて、2人を攻撃する。

(発動までのタイムラグが大幅に減少しているだと……!?)

(しかも魔力数値まで増幅している……)

先程までとは格の違うはやての強さに2人は驚く。

はやては更に、怯んだ2人に対して杖を掲げ魔力を集中していく。

「そないな子供のワガママみたいな理由で！世界をどうこうする権利なんてあるわけない！！」

「ツツ！貴様などにわかるか！！僕らのこの苦しみが！！」

「わかりたくもあらへんわああ！！」

自分達の原動力を子供のワガママと一蹴され、激しい怒りを覚えたオルバが叫ぶ。

それに対してもはやては真っ向から反論し、兄弟に向かって再び白い閃光を放つ。

2人はそれぞれ閃光を掻い潜りながら、ストライククローとギガンティックシザースを伸ばす。

「あぐっ！！」

「世界が我らを滅ぼすから！我らは世界を滅ぼすのだ！！」

再び拘束されて呻くはやてに対し、シャギアも弟と同じように感情的な声で叫ぶ。

そして再び紅い閃光を展開し、メガソニックキャノンを放とうとする。

（マズい…もう一発は…！！）

その光景を見てはやては必死に拘束から逃れようとするも2人のクローと鋏はガッチリとはやてを掴んで離さなかった。

「！！……」

しかし突如として、はやてを拘束していたクローと鋏が切断される。

「はやてさん！」

「レントン……？」

はやての前に、レントンが立っていた。

「女の子をよってたかって2人で襲って…恥ずかしくないんですかあなたは!？」

そのレントンの隣にはゲイナーが、呆れた感じでフロスト兄弟に反論していた。

「チツ…ガロード・ランと一緒にいる子供達か…」

「けどいくら増援が来た所で…僕らの憎しみが止められるわけ…：…」

突然の反撃に驚いていたフロスト兄弟は、

今まで感情的になっていた頭が冷えたことによって、ある1つの違和感を感じ取る。

「この魔力反応…：…まさか…：…!!」

「?…：…なんや、このでっかい魔力は…」

それに気づいたシャギアが目を見開いて言う。

同様に冷静になっていたはやてもそれに気づいて疑問を浮かべる。

「魔力チャージ100%…フルエネルギーで発射できるぜ…：…!!」

駆動炉外の通路で、ガロードがサテライトキャノンを構えていた。

背部のウイングパーツが黄金色に輝いており、フルチャージである事を証明していた。

「フロスト兄弟…：…テメエらの勝手な理屈なんて…：…どの世界でも認めるわけにはいかねえ!!」

自分の視線の先にいるであろう宿命の敵に対し、強い口調でガロードは言い放った。

そう、はやてとの戦闘に集中していたシャギアとオルバは外にいたガロードに気づけずに

サテライトキャノンの充填時間を与えてしまっていたのだ。

そしてガロードを狙うガジェット達を粗方片付けたレントンとゲイナーが

はやてのピンチに丁度駆けつけた形になったのである。

「兄さん!!」

「おのれ!!」

相手の考えを察した2人は、すぐさま駆動炉の外に在るであろうガロードの下へと向かおうとする。

「行かせない!!」

しかし2人の前にレントンとゲイナーが立ち塞がる。

「オーバースキル!!」

ゲイナーはオーバースキルによる加速を発動。目にも映らぬ速度でチェーングンを振り上げ

シャギアとオルバ下へと吹き飛ばす。

「はやてさん! 高く飛んで、とにかく遠くへ離れてください!」

「わ、わかった!」

レントンは次に放たれるであろう攻撃に巻き込まれないように、はやてに避難を呼びかける。

はやては多少戸惑いながらもそれに従い、駆動炉の上層部へ飛び上がった。

それを見届けた後、レントンとゲイナーは吹っ飛ばされたフロスト兄弟を更に追撃する。

「守るって決めたんだ!! この世界とエウレカの事を!!」

上空から急降下し、ナイフによる一撃をシャギアに与える。

「僕だって…そうさ!!」

オーバースキルによる高速移動で、オルバの背後に移動し、彼を蹴り上げる。

それと同時にレントンとゲイナーは兄弟から離れていく。

「お前らには負けねえぜ!!」

その時に丁度、ガロードの声が響いてくる。

そして砲台を構えたままフロスト兄弟と一直線の位置にガロードが現れる。

「過ちは繰り返させない!! いっけええええええ!!」

ガロードの咆哮と同時に、2つの砲台から青白い魔力の閃光が発射される。

長距離砲撃を主体とする、はやての全力の一撃すら軽く上回る破壊力を持った

サテライトキャノンのフルチャージの一撃がフロスト兄弟へと迫る。

「ガロード・ラン!!」

「最後まで貴様は…僕らの邪魔を!!」

嘗ての宿敵にまたしても、自分達の野望を碎かれた事を悟ったフロスト兄弟が最後の言葉を発する。

「うおおおおお!!!!」

砲撃による反動に必死に耐えながら、ガロードはサテライトキャノンに更に魔力を込めていく。

そしてその閃光はフロスト兄弟を飲み込んだまま、更には駆動炉本体へと直撃する。

サテライトキャノンはしばらく拮抗した後、駆動炉を貫通し、そして外壁を突き破った後にその役目を終えて消滅していった。

＊

はこぶねAルーム

「素晴らしい…実に素晴らしい力だ…まさか機動六課の諸君がここまでとは…!!」

戦闘の様子をモニタリングしていたスカリエッティは興奮を抑えきれない様子で言う。

「ドクター…喜んでばかりもいられませんわ…」

そんなスカリエッティの側で、IS－フーレスセクレタリーを発動しているウーノが

凄まじいスピードでパネルを操作しながら呟いていた。

「E2も三箇所で停止し…メイン駆動炉も落ちて今は予備電源で作動中です…」

ましてブラッドルームにいたドウエとクアットロも戦闘不能…このままでは…」

「わかっているウーノ…確かにあまり喜んでばかりもいられないね…」

ウーノの報告を聞いて、ニヤケ顔のままではあるが、スカリエッティが動き始める。

「とりあえずポッドがかなりの硬度を誇っているとはいえ…聖王の血を失うのだけは致命的だ…」

すぐにブラッドルームへ追加のガジェットを送り込んで…?」

スカリエッティがそこまで言った瞬間、彼とウーノの体がバインドで拘束される。

「探しましたよ、御二方…」

そしてその場に、3体の獵犬の幻影を引き連れたアコースが姿を現す。

「何故…私のISで完全にジャミングアウトしたこの部屋をどうやって…」

「僕の能力を甘く見ないでもらいたいね…」

動揺を浮かべているウーノに対し、得意げな声でアコースは答える。

「スカリエッティのもう1つの頭脳…戦闘機人12体の指揮官…N O・1…ウーノ…」

そして今回の事件の黒幕の1人…アンリミテッド・デザイア…ジェイルスカリエッティ…」

そう言ってアコースは右手を掲げて続ける。

「君達の頭の中…ちよいと査察をさせてもらおうよ…？」

「ほう…流石は本局査察官…けど…」

スカリエッティは余裕の表情で右手に装着された黒い手袋型のデバイスを発動する。

すると、彼を捕らえていたアコースのバインドが消滅する。

「何もしないまま捕まるような趣味は持ち合わせていないのでね？」

そう言ってスカリエッティは再び右手を動かし、発生した赤い鎖によって

今度は逆にアコースを捕らえようとする。

「おっと…そうは行かないぜ？」

だが次の瞬間、スカリエッティが形成した赤い鎖は消滅する。

「悪あがきはよした方が身の為よ？」

「年貢の納め時ってやつだ、観念するんだな…」

そして、いつの間にか現れたチャールズとレイが

スカリエッティの背後から腕のスピアを彼の喉下に突き立てていた。「ククク……素晴らしい……やはり素晴らしいよ君達は………」

完全なる敗北を前にしても尚、スカリエッティは笑みを浮かべていた。

「だが……私1人を止めた所で……結局は更なる破滅を呼ぶだけさ……特に彼は……ジル・バルドナは私にすら内緒であのような怪物を作っていたのだからね……」

どんなに足掻いたところで……このミッドチルダの滅亡は変えられんよ……」

「……続きは、頭の中に直接聞いてみようか」

スカリエッティがそこまで言った後、アコースがレアスキル「思考捜査」を発動する。

その瞬間にスカリエッティとウーノの意識は途絶えた。

＊

ミッド地上、ガーディアンへの攻撃は未だに衰える事無く
アムロとその他大勢の魔導師達が形成するシールドを攻撃し続けていた。

そして魔力を限界まで注いでいた航空魔導師達が、段々と地面へ落

下していく。

「もういいんだ！みんなやめろ！！」

そのあまりにも悲痛な光景に胸を痛めたアムロが必死に叫ぶ。

そんな彼の思いも虚しく、再びシールドにひび割れが生じ始めていた。

「まだよ……！！」

ヴォルテールに乗って魔力を注ぐスバルが必死に呟く。

「だけど…これじゃあ…！」

「あきらめてはダメ……！！」

弱気な発言を見せるキャロに対し、ティアナが強い口調で言い放つ。しかし、残った魔導師達にも限界が迫っておりシールドが破られるのは時間の問題だった。

「やらせない！！」

するとその段階で、更なる増援が現れる。

「例えば私の知らぬ物だとしても…地上界はこれ以上焼かせんぞおとお！！」

背部に巨大な白い翼を展開したエイサップとサコミズが更なる魔力を送り込む。

「リイン！！」

（はいですっ！！）

シグナムの言葉に、ユニゾンしたリインが答え、彼女もシグナムの体内で魔力をこめる。

「わかっているなアギト！」

（おうよ！ゼストの旦那が守りたかったこの世界を…壊させてたまっかあああ！！）

そしてマイヨは、なんとアギトとのユニゾンを果たしており

濃紺色のバリアジャケットに、真紅のカラーが刻まれていた。
そしてマイヨの体内でアギトが、リインと同様に魔力を集中してい
く。

敵も味方も関係なく、大勢の人間の思いがシールドにこめられてい
た。

そしてもう1人、更なる増援が出現する。

「シャア!？」

現れた男―シャアの姿を捉えてアムロは声を上げる。

「あの程度の警備で：私が捕らえておける筈があるまい：」

搬送された先の魔導師を無理やり倒してここまで来たシャアは、先
の戦闘で傷ついた体ながらも

ゆっくりとアムロの隣へと移動し、そして同じように自分も魔力を
シールドへと送り始める。

「お前……!」

「貴様は言ったなアムロ：！強要されずとも：人は：いつか自分の
力で革新を迎えるのだと」

予想外の行動に驚くアムロに対し、静かにシャアは自分の胸の内を
明かしていく。

「：例え取るべき行動は違えど：人類の未来を憂う気持ちはお前と
変わらない：」

そして貴様は私を倒した男なのだ：ならば：」

そこまで言ってシャアは声を張り上げて更に叫んだ。

「貴様のやり方正しい物かどうか：私にも見届けさせてもらおうぞ！
！」

シャアの言葉と同時に、更なる魔力がシールドへと注がれる。

そして奇跡は起こった。

「何…この光は…!!」

その異変に真っ先に気づいたスバルが呟く。

アムロとシャアを中心に、グリーンフレア光が発生し始めていたからだ。

「暖かくて優しい感じがする…」

「何だろう…とても落ち着く…」

発生したフレア光に触れ、こんな状況だというのにティアナとエリオは穏やかな気持ちになる。

「これは…まさか…!」

そしてその正体を知りえていたアムロは驚愕の表情を浮かべていた。
「サイコフレームの共振が…人の心の光が再び広がっているというのか!？」

シャアも同様に驚きを浮かべて言う。そして次の瞬間
アムロとシャアを中心にフレア光は凄まじい勢いで広がっていき
その場にいた魔導師全てと、展開していたシールドを包みこんでいく。

そして…崩壊寸前だったシールドが力強い輝きを放ち
それと同時にガーディアンが魔力が消滅していくのであった…

＊

「バ、バカな…」

兵装制御室でその光景を見ていたライネンが信じられないといった
表情を浮かべる。

「わ、私の最高の発明が……ガーディアンが……ぐおっ!!」

言葉を発している途中でライネンは後頭部に激痛を感じ、一瞬で崩
れ落ちる。

「これくらいで済むだけマシだと思え……!!」

ライネンの背後でタックが、怒りに震えた表情で拳を握っていた。
側にいたマリナはそれを見届けた後、バインドを使ってライネンを
拘束した。

「管理局法に基づいて…あなたを逮捕するわ、アルバート・ライネ
ン…」

＊

少し時間が遡り、ブラッドルームにて

「この反応は…」

光に包まれたユーノとレイジングハートの事を、呆然となのはは見
つめている。

そして光が収まった後にあったのはユーノと、レイジングハートだ
けであった。

「ユーノ君…コスモスターは？」

消滅したユーノのデバイスについて、静かな声でなのはは尋ねる。

「……ここにあるさ」

ユーノは今にも倒れそうな自身の体を必死に保ったまま、レイジン
グハートをなのはに手渡す。

するとその瞬間、レイジングハートが謎の変形を遂げ、新たなパー
ツが出現する。

「これって……！」

「そう…これが僕が密かに研究していたもう1つの最強のデバイス…
従来のデバイスに、ホルダーデバイスの魔力カードのサポートを可
能にさせた…」

コスモスターとレイジングハートによるデバイスのユニゾン…」

「デバイスの…ユニゾン？」

「といっても…個人による魔力の波長を正確に合わせる必要とか…
デバイス同士の相性とかの問題や、何よりコストの面とかもあるから
とても実用的な機能じゃないんだけどね……」

困惑するのはを他所にユーノは説明を続け、そして自身が使って
いた

魔力カードの入ったケースを手取る。

「8年間：僕が君とレイジングハートの魔力波長を研究し続けてそして僕とコスモスターの波長と同調させる事によって：ようやく形になってくれたんだ：ッ：！」

説明を続けているうちに、ユーノはユラリと足をふらつかせ、膝をついてしまう。

「ユーノ君！」

「構わないで：どの道もう長くない：僕の説明通りに……」
心配そうに声をかけるなのはを制し、ユーノはカードを数枚取り出していく。

「まずはこれを……そうすれば：形成された魔力コンデンサーが：君のリンカコアと肉体に対する負担を軽減してくれる……」

そう言ってユーノは、レイジングハートに新たに現出したパーツの差込口にカードを挿入する。

すると先程コスモスターでやったのと同様に、レイジングハートに正方形のボックスパーツが2つ出現する。

「！……す、凄い……リミットブレイクと同じ程度の魔力が……」

追加のコンデンサーを装着したと同時に上昇した魔力を感じ取ってなのはが呟く。

「次にこれを……」

ユーノが差し出してきたカードを、今度はなのはが自分でレイジングハートに差し込む。

すると、レイジングハートが白い魔力光でコーティングされる。

「……発射の後の廃熱と反動を軽減するコールドシステムだ……」

あとはこれで……リミット解除して……も……ウプッ……！」

説明が続いている内に、再びユーノは血を吐いてしまう。

自身もコスモスターのリミットブレイクを決行した反動によるものだった。

魔力コンデンサーのカードは使用していたとはいえ、ユーノ自身のリンカコアは

なのはの物と比べたら遥かに小規模なのである。

それで、魔力数値の制限を無視したコスモスターのリミットブレイクを使ったので

如何に魔力カードのサポートによる魔法と言えど、

ユーノの肉体とリンカーコアに対する反動は計り知れない物であったのだ。

「ユーノ君ッ…！もういい…もういいから…！！」

「いいんだよ……なのは…僕は…君の助けになれたならそれで…結局最後は…君に任せきりなる事が…心…残りだけど…」

「ユーノ君…！！」

「だから…君は先に進んで…そして…ミッドを…救うん…だ…」

そこまで言い切った後、なのはの側でユーノは意識を手放した。

一瞬、なのははデバイスを放り出してユーノを抱きしめたい衝動に駆られるが

「……やらなきゃ…ユーノ君が私に託してくれた思いを…無駄にしない為にも！！」

ユーノの決意を無駄にしない為に、今は敢えて心を鬼にする。

そして生まれ変わったレイジングハートを、ヴィヴィオの血液で満たされたポッドに向ける。

「ブラスター…3…！！」

その状態でなのはは、レイジングハートの更なるリミット解除を行す。

自身も満身創痍であった筈なのに、不思議と体の痛みは気にならなかった。

それどころか、更なるリミット解除をしたというのに、寧ろ体に力が溢れていた。

（今の私には…ユーノ君の全てが私に託されている…）

その状態で更にブラスタービットを形成し、そして魔法陣を展開する。

（その全てが：ユーノ君の思いが私の心にあるなら……………）

本来の自身の限界であるブラスター3による魔法。

それが、ユーノがもたらしたデバイスユニゾンによる魔力コンデンサーと

白色の魔力光でコーティングされたコールドシステムによるサポートによって

なのはに対する負担は、通常時すら下回る非常に安定したものとなっていた。

だからこそなのはは、ユーノに対する気持ちを深く感じ取っていた。（いつだって：どんな時だって：私は戦える！！）

レイジングハートとブラスタービットに巨大な桃色の魔力光が収束していく。

「スターライト…………ブレイカアアアアアア！！！！」

なのはの持つ、最強の魔法がポッドに向かって放たれる。

それだけの攻撃を受けても尚、ヴィヴィオの血液を満たしたポッドはなのはの攻撃に耐える。

「ブレイク…………シューーーーッ！！！！」

更なる咆哮を上げて、なのはは魔力を更にこめていく。

それによってスターライトブレイカーの閃光がポッドにヒビを入れる。

そしてそのヒビが大きくなり、ポッドは粉々に碎け散っていった。

魔法を発射し終わった後、コンデンサーが消滅し

コーティングされたコールドシステムから大量の煙が噴出される。

「くっ……………うっ……………」

スターライトブレイカーによる反動は殆ど無かったが
元から蓄積されていたダメージがなのはにのしかかり、なのはは膝
をつく。

それでも尚、なのはは膝をついたままヨロヨロと移動し、そしてユ
ーノの側へとよる。

「ユー…ノ…く…ん…」

擦れた声を発しながら、意識が無く目を閉じているユーノに向かっ
てなのはは笑顔を向ける。

「あり……が……と……う……」

最後の一言を振り絞った直後、なのはにも限界がおとずれ、
ユーノの体に重なるようにしてうつ伏せに倒れこんで意識を失った。

＊

戦艦アースラ、そのブリッジで各地の異変が報告されていく。

「きよ、巨大船の砲撃…アムロ一尉を中心とした謎の光で消滅…」

「各地で活動していたガジェットや戦闘機械も活動停止…！」

「そ、それに…巨大船本体の船速も激減…」

「これなら…艦隊の到着の方が速いです！7分差が埋まります…！」

各地の報告を聞いて、局員達は希望を見出し始めていた。

圧倒的不利な状況が、遂に覆った瞬間であった。

「良かった…これなら…」

オペレーターの椅子の1つに座るシャーリーは安堵の表情を浮かべている。

「レントン……」

「みんな…頑張ってくれたのね…」

「アネモネ……君も無事だよな…」

特別にメインブリッジに待機していたエウレカ、サラ、ドミニクもようやく戦いの終わりの兆しが見え始めた気がして嬉しそうに呟く。
(……………これは……………)

しかし只1人、ティファだけが、まだ大きな悪意が残っているのを感じ取っており

不安げな表情を浮かべていた。

＊

「……………うつそ〜ん…」

はこぶね総司令室、多数に映るモニターの報告を見てセデイスは呆然としていた。

「E2はA〜Dルーム全てが停止…駆動炉も破壊されて今は予備エンジンで稼動中…」

で…肝心の死せる王の血も破壊されて…ガーディアンの一発目も防がれた…

兵装制御室にいたアルさんもやられて残った地上の機械戦力も活動

停止……」

いつもと同じ軽い表情で呟きながらも、顔が微かに震えていた。

「……しかもパパの私室も破壊されて…プラン変更のメールが届いてきている…」

そこまで言ってセデイスは天を見上げる。

「あっはっは…み…んなやられちゃったわけだ…はっはっ…ははは…」

味方の殆どが戦闘不能になっている状況だというのに

セデイスは天を見上げたまま乾いた笑いを発していた。

しかし、その笑いも段々と小さいものになっていき…

「……………」

やがてはその笑いが止まり、しばらく沈黙したまま突っ立っていたが…

ドゴオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!

何の前触れも無く、いきなりセデイスは部屋の壁に拳を叩きつける。そのたった一撃で壁は粉々に破壊され、衝撃で船体が大きく揺れ動いた。

「どいつもこいつも使えないわねえッ!!皆してパパの足を引っ張りやがってええッッ!!」

普段の姿から到底考えられない、激しい怒りのこもった口調でセデイスは怒鳴る。

その顔もまた怒りに満ちており、目が大きく見開かれて血走ってい

る。

顔の到る所にある血管が浮き上がっていた。

「…ああわかったわよ…結局パパの力になれるのは私とビーちゃんしかないのよ…」

静かな口調で呟きながら、セデイスはユーノの血が付着した銀色のナイフを振り上げる。

そして、自身のポニーテールの長髪を紐で止めた根元からバツサリと切り落とす。

セデイスの体が離れた大量の金色の髪が地面へヒラヒラと落下する。

「ビーちゃん…聞こえてっかしら？」

ショートヘアの状態でセデイスは、普段の軽い口調とは

真逆の威圧的な口調で、BBのいるマスタールームへと通信を繋げる。

『おうセデイスね……つてうわ…その格好は…』

「そうよ？弟のアンタならわかるわよね？私がこうなってる意味が？」

ショートヘアになったセデイスの姿を見て、BBは引き気味に声を洩らす：

（ここまでマジギレしたセデイス姉は久々だな…

かわいそうに…フェイト・テストロッサの奴…ぜってえ生きて帰れねえよコリャ…）

ミッドチルダで敵無しであろう実力を持つBBですら

今のセデイスの怒りには恐怖を覚えていた。

そんな彼の心境は全く気にせずに、セデイスは通信会話を始める。

「状況はわかってるわよね？」

『まあな…セデイス姉がキレるのも仕方ないかな？』

流石に俺も、みんなここまで不甲斐ないと思わなかったし…』

「じゃあパパからのメールは？」

『届いてるよ…まさか一つ目の世界でプランBを使うハメになるたあな…』

やれやれといった感じでBBは答える。

「そう：チャージは今どのくらいなのよ？」

『60ちよいってところだね：完全に開くにはもうちよいかかるな：本当は保険のつもりだったし：』

「わかったわ：じゃあアンタはベルクトのゴミ野郎と遊ぶ過程で残りをかき集めなさい：これ以上パパを失望させるわけにはいかない……わかってるわよね？」

『わかってるよセデイス姉……』

凄みの効いた：失敗は絶対に許さないといった感じの凄まじい表情でセデイスは言う。

BBはそれに対してやんわりと返事を返していた。

『一応確認しとくけどさあ：セデイス姉はどうすんのさ？』

そして今度はBBの方から質問を投げかける。

「言うまでも無いでしょ？まずば？型を動かして手負いのカスどもを全員殺して：」

セデイスは怒りに満ちた表情のままBBに返答し

次いでモニターの1つに映るフェイトを、血走った目で睨みながら続けて言った。

「私はあのオリジナルを潰して壊して殺して：消滅させるわ……

使う側の人間の自覚も無い：あのお人好しバカを：私達の全ての汚点であるアイツをねッッ……！！」

第34話（後書き）

いやあ…正に超展開！の連続でした…

コスモスターの機能を取り込んだレイジングハート…

25話で伏線は張ってあったそれです…

ただでさえチートな白い冥王なのはさんが

魔力カードによる負荷軽減によって更なるチートに進化したわけで…
いくらなんでもインチキすぎな気がします

何度も言うようにラスボスがそれ以上にインチキな予定ですから…

はやての危機に駆けつける三人組

やっぱり駆動炉を破壊する関係もありましたので

そして…再び起こるサイコフレームの奇跡…

これが今回の一番の超展開でしょうね…

ガーディアンを防ぐプランは他にもありましたが

サイコフレームの機能が組み込まれたデバイスを持つアムロを活かす為

シヤアも無理やり脱走させて駆けつける事に…

（サイコフレームの共振の為に仕方ないとはいえ
シャアの心変わりが早すぎる気がするのが一番悩ましい点ではあり
ます）

……そして敵が粗方いなくなり、ラストで遂にセデイスが動き出す…
今までその片鱗は何度か見せていましたが
この先のセデイスは本性剥き出しで大暴れする予定です。

というわけで次回から漸くフェイトVSセデイス
ベルクトVSBBの流れに入っていくことになると思います。

それではまた

第35話

その場にいる誰もが、目の前で起こったその現象を
未だに理解することが出来ずにいた。

たくさん魔導師達の魔力と想いを込めた、ガーディアン
の砲撃を防ぐ巨大シールド

それに、シャアの助力が加わった瞬間に生まれた現象…

アムロのH i ーVガンダム、シャアのナイチンゲール

2人のデバイスに擬似的に組み込まれたサイコフレーム、
その2つの共振…

それによって人の心の光が具現化した、二度目の奇跡
によるものだった。

砲撃が収まり、戦闘で傷ついたミッド地上の街中で、
魔力の大半を消費した魔導師達は

上空で沈黙を保つはこぶねが浮かぶ青い空を見上げながらも

誰1人として声を発する事無く、ただただその場に立っている
事しか出来なかった。

「…………嘘…こんな事って…あるの…？」

その沈黙を一番最初に破ったのは、フリードの上に跨り
周りの人々と同じように、信じられないといった表情を浮かべたキ
ャロの声であった。

「わかんないよ…………けど…」

それを聞き、彼女の後ろにいるエリオもまた、静かな口調で返答す
る。

「見ちゃった以上は…………信じるしかないよ…」

そう言ってエリオは、キャロに向かって苦笑いを浮かべる。

「は、はは…ははは…………」

そのすぐ近くで、ヴォルテールの肩に乗っているティアナが、乾い
た笑いを発する。

「つ、つまり…………私達、助かったって…ことでいいのよね…？」

先程起きた超現象を、頭で整理しきれていないようで

ティアナはエリオと同様に苦笑を浮かべながらたどたどしい口調で
尋ねる。

「そうだよ…助かったんだ…………！」

その問いに答えたのは、反対側の肩に乗っていたスバルであった。

「私達も…………この街も…………全部助かったんだよ…！」

今起きた現象が何なのかは全く以って理解できなかったが

少なくとも、自分達は助かった。その結果だけは理解出来る。

そう思ったスバルは、魔力が殆ど残ってないその体で立ち上がり

歓喜の表情を浮かべて大きな声でそう言った。

ワアアアアアアアア！！！！

次の瞬間、その場にいた全ての魔導師達が歓声を上げた。
全ての人達が笑い、泣き、仲間達と手を取り合い
はこぶねからの防ぎようも無かった一撃を防ぎきったその事実を喜び合っていた。

「あの輝き…一体何が…」

「リーンの翼とも違う…地上界にあのような力があつたとは…」
背部に翼を展開するエイサップとサコミズも、アムロが発した力に驚嘆しながらも

その心は敵の攻撃を守りきったという達成感があつた。

（す、凄いです…アムロ一尉の力が…奇跡を…）
シグナムとユニゾンしているリィンは、奇跡の体現者であるアムロに向けて

感嘆の眼差しを向けていた。

「いや…そうじゃないさ…リィン」

しかし、シグナム目を閉じた穏やかな表情で、リィンの言葉を否定する。

「私達全てが…このミッドを守りたいと思ったその気持ちが…
私達全員の想いが…奇跡を起こしたのだ…」

うつすらと笑みを浮かべてそう呟き、次いで目を開けてある人物の方に振り向く。

「そうだろう？ マイヨ…」

「……かもしれんな……あの奇跡の光……またも見る事になろうとは……」
そう答えてマイヨは空を仰いで、シグナムと同様に穏やかな笑みを
浮かべる。

（ううつ……マイヨの旦那あ……あだし……よぐわがんねえげど……ひぐつ……
なんか……すっげえ感動したよお……）

マイヨとユニゾンをしているアギトは、彼の体内の中で
涙と鼻水に塗れた顔で、その感動を語っていた。

「……………」

周りが歓喜のムードに包まれている中、アムロは自分の掌をじつと
見つめていた。

「アムロ……」

そして、そんなアムロにシャアは静かに声をかける。

「奇跡は……二度起きたという事か……」

「ああ……人の心の光……それをまた呼び起こすことが出来た……」

そして……それによって人を救えたのも……」

そこまで言ってアムロは、生涯のライバルでもあり天敵でもあった
男の手を取る。

「シャア……お前が協力してくれたからこそだ……」

「……フツ……わからんものだな……こうしてお前と笑い合うことが出
来るなどと……」

シャアもまた、アムロと固く手を取り合って純粋な笑みを浮かべる。
ついさっきまで、互いの心を探りあい、すれ違い、そして衝突しあ
っていたというのに

ほんの少しのきっかけで、こうも簡単に歩み寄ることが出来る
その事にシャアはこそばゆい思いがしながらも、それも悪いもので

はないとも感じていた。

「……私は……もう少し人を信じる事が出来るかもしれない……アムロ……」

「焦る必要は無い……人間にはいくらだって可能性はある……今日の事だ……ってそうさ」

人はいくらだってこうやって互いに協力し合う事が出来るんだ……いつかは……世界中の全ての人達とわかりあう事だって……絵空事じゃない」

「今のこの人間達を見れば……そんな気も起こるものだな……」
アムロとシャアそう言って互いに笑顔を向け合う。

嘗ての世界では遂に有り得なかった光景がそこにはあった。

＊

―セデイス姉……それはやりすぎなんじゃねえの……？

―やりすぎもクソも無いわよ……こんな自分の親を殺したカス以下の奴に……

―いやだって……もう頭と臓器しか残ってねえじゃん……生きてるのが

逆に不思議だわ…

— 寧ろまだ優しいくらいよ…親殺しっていうのはね…千度殺しても、尚足りない重罪なんだから…

— けど親父の任務は単に殺害で良かったんだぜ…

— いいから黙ってなさいよ…パパの命令は絶対…けど私はそれ以上に許せないのよ…

— はいはいそーですか…

— ええそうよ…食事を抜かれたから何よ…殴られたから何よ…その程度の事で…

— うわっエグい…本局の高官が見るも無残な姿だねえ…

— だから嫌なのよ…地位も金もその体も魂も、全ては…生んでくれた人間…親がいるからでしょ？

— …ああこりゃダメだわ…こうなったら俺でももう止められねえ…

一冥土の土産に教えておいてやるわ…子供が親に捧げる最も無価値な物…それは……

「……おっと…来たな」

戦艦はこぶねマスタールーム、自身と姉の過去を思い返していたBは

部屋の扉が開かれる機械音で我に返り、そちらの方へと顔を向ける。

「……漸く辿り着いた…」

「よっ！久しぶりだね兄貴、それにフェイトも」

Bはまるで親しい友人に対してのような声色で、現れた2人の人物―

ベルクトとフェイトに向かって声をかける。

対象的に2人の方は、好意的な感情は一切見られない、固い表情でBBへと視線を向けていた。

「この部屋は……あたなの管轄なの？」

次いでフェイトは、BBのいるその部屋を一通り眺めてそう尋ねる。いくつもの照明によって明るく照らされ、四方に四本の柱が立つ円形のその部屋は

今まで見てきたはこぶねのどの場所とも違う、独特の雰囲気であっ

ただ。

「そゆこと、ここはマスタールーム、親父の計画に最も重要な拠点の1つさ」

「そうか…そういうことなら尚更話が早いな…」

敵意など殆ど感じさせない軽い口調で言うBBに対して

ベルクトは右腕のライフルを前に振り上げ、魔力刃を展開してそれをBBへと向ける。

「今度こそ貴様を倒し…この船を破壊し…そして全てを終わらせるまでだ…!!」

「ヒュウッ♪やる気満々たあ嬉しいねえ！この時を待ってたんだぜ！！」

武器を向けられてBBが浮かべた感情は恐れではなく、喜びである。ベルクトに呼応するかのようにBBもデバイスーノアを起動させて、背部に白と黒の巨大な翼を1つずつ展開する。

(…とうとう始まる…ベルクトとあの男の戦いが…)

ベルクトの背後でその光景を見つめていたフェイトも固い表情のまま、自分が何をするべきかを考える。

(……悔しいけど…私がいてもきつと足手纏いにしかない…なら…)

「行きたいなら行っていいぜ？セディス姉はこの先の総司令室にいるよ？」

「!!……」

が、思考の途中でまたしてもBBに自分の考えを先に言い当てられ、フェイトは目を見開く。

「どういうつもり…?」

次いでフェイトはこう尋ねる。言わばBBは敵の1人を態々見過ごすと言っているようなものだからだ。

「べっつに、俺は今の兄貴と思いつきり遊べればそれでいいんだよ」

それに対してBBはやはり軽い口調のまま、両手を後頭部に当てて

答える。

「要はアンタの好きなようにしていいってことよ、逃げ帰るのもよしこの先に進むのもよし、兄貴と一緒に俺と遊ぶのもよし」

「犯罪者を前にして…逃げ帰るなんて選択肢を…！」

B Bの言葉にフェイトは多少の怒りを見せる。が、B Bは全く動じない。

「いやいや…逆に温情的なんだぜ？逃げ帰らない場合どの道最後は死ぬんだもの

というかね…セデイス姉の所に行くのが一番危険な選択だと思うわけよ」

すると、そこまで言ってB Bは多少表情を強張らせてこう続ける。

「俺と遊んだ場合はまあ…一瞬で消えることになるんだろうけど…今のセデイス姉、機嫌悪いからね…死ぬよりヒデエ事になりかねないと思うよ？」

裏の全く無い、そのままの意味でB Bはフェイトに警告する。

しかし、フェイトはその言葉に全く臆する事無く強い口調で反論する。

「私は死なない…ベルクトもこの世界の為に…私の為に本気であなたを止める…だから…」

そう言ってフェイトもバルディッシュをザンバーフォームに変形させ、魔力刃を形成する。

「私も全力であの女を止める…！ミッドの平和と、たくさんの仲間のために！」

「…そうかい…なら、これ以上は俺も何も言わねーよ」

フェイトの決意を聞いて、B Bはどこか達観したような感じでフェイトを見つめていた。

「フェイト……」

「うん…必ず全てにケリをつけてみせる…だからベルクトも…」
「わかっている……」

ベルクトとフェイトは、そこにB Bがいるのもお構いなしに

互いの顔を真っ直ぐに見つめあって、最低限の言葉で意思疎通をする。

多くは口に出さなくても、互いの言いたい事は既にわかっていたのだ。

2人は最後に、互いに笑顔を見せたまま頷きあう。

そしてフェイトはB Bを横切り、彼の背後にある扉を開いてその奥へと消えていった。

「ふーっ…相変わらず熱いんだねえお2人は…」

フェイトの姿を見届けた後、B Bはベルクトの方に向き直って茶化すように言う。

ベルクトはそれに対して何も答えないまま、ジッとB Bの方を睨んでいる。

「ほんじゃまあ…いよいよお楽しみだ……！」

B Bは満面の笑みを浮かべて両腕を大きく広げてゆっくりと宙へと浮かんでいく。

それを見てベルクトも気を引き締め、武器を構える。

「……っていききたいところなんだけど」

だが直後、B Bは広げていた腕をダランと落とし、表情をけだるげなものへと一変させる。

「っ…どうした？」

てっきり攻勢に出てくると思っていたベルクトは完全に肩透かしを喰らってしまい、

B Bに対して疑問を浮かべる。

「いやねえ…この部屋でドンパチ遊んでぶっ壊れたら親父に叱られるんだよね…だからさ…」

B Bはそう言いながら足下に漆黒のテンプレートを展開し、

マスタールーム全体を鈍く光る黒色の結界でコーティングしていく。

「ここをちよっと隔離するのと、ついでに世間話でもってね…?」

「世間話だと…何を…」

ベルクトは呆けに取られてしまう。自分と戦うのを何よりも楽しみにしていた筈の目の前の人物が

その楽しみを自ら焦らすような行動を取ったのが理解出来なかった。

「疑問の解消ってやつだよ、せっかくここまで来れた兄貴に対する敬意を表して

教えてやるよ、俺達の存在意義とか、親父の真の目的とかさ」

しかし、次いで放たれたB Bの言葉に、ベルクトは表情を一変させた。

＊

「……セデイス…」

総司令室へと辿り着いたフェイトは、視線の先にいる自分と同一の存在である相手の名を呼ぶ。

「あゝら? 遂にここまで来たのねオリジナル?」

「ッッ……」

セデイスは大きく目を見開き、ネットリとした笑みを浮かべてフェイトに言い放つ。

フェイトはこれまで以上の重圧をセデイスから感じ取っていた。

（恐らくはこれが…彼女の本気……）

その重圧に気後れしないように、心を強く保ってフェイトはそこに立っていた。

それに対してセデイスは、見開いた目を少しも閉じる事無く、フェイトに再び言葉をかける。

「こんな最奥までまあよく来たもんだと呆れ果てるわ」
態々自分で寿命を縮めに来なくてもいいんじゃないかと思うんだけど……？」

「私は、あなたに殺される為にここに来たわけじゃない」

セデイスの挑発に動じる事無く、強い口調でフェイトは言い返す。

「相変わらず現実を直視出来ないムカつく発言をかましてくれるわね……」

セデイスは表情を酷く歪めてフェイトに吐き捨て、そしてどういうわけか

フェイトから背を向けてモニター群の操作を開始する。

「何を……」

「前座のショーとして教えておいてやるわようアンタらの所為でこちらら計画が滅茶苦茶なのよ」

困惑するフェイトはお構い無しに、セデイスはモニターのいくつかを稼動させていった。

「マスター権限発動…制御システム、第二次モードへ移行…
ガジェットドローン？型…転送移動開始……」

＊

ブラッドルーム、ユーノと折り重なるようににして気を失っていた
なのはは

ふと、部屋内に何かの気配を感じて意識を覚醒させる。

「ッ……う………」

先の戦闘で全身到る所にダメージを受け、魔力も殆ど残っていない
状態で

そのぼやけた視界で、倒れたまま辺りを見回していく。

「……あ……」

そして彷徨っていた視線は、部屋の中のある一点に定められる。

「ふ……ふえい……と……ちや……ん」

体のダメージで朦朧とする意識の中、蚊の羽音のような擦れた声を
発する。

なのはの目の前には見知った金髪の黒い衣装の人物が立っていた。
フェイト思わしきその人物は、一言も喋る事無く、ゆっくりとなの
は達の方へと近づいていく。

ビュン……！！

「……！！……ッア……！！」

次の瞬間、フェイトの方から眩い閃光が放たれるのと同時に、なのはとユーノの近くで爆発が起きる。

なのはは悲鳴を上げる余力すら残っておらず、爆発の衝撃で壁に叩きつけられる。

(……こ、このタイミングで……また……あの人……が……)

仰向けに放り出された格好でなのはは、激痛に耐えつつ必死に頭を回転させる。

先程見た相手の姿は紛れもなくフェイトだ。そして自分達に対して攻撃を行った。

この2つの事象から導き出される答えは、なのはの中では1つだけだった。

「……殲滅対象二体、確認……両者ともダメージは甚大……現時点での危険度はレベルE以下と認定……」

しかし、なのはの考えはある意味では当たってはいたが、正確には外れであった。

「……………う……そ……あ、あれ……は……」

機械的な音声を発した、セデイスに瓜二つなその人物の表情を

ぼやけている視線でなのはは捉え、そして再び驚愕する事になる。

何故なら前髪に隠れた彼女の左目が露になった瞬間……

そこに埋め込まれていたのはよく見知っていた黄色いカメラアイとその周りを保護するかのよう露出した青い金属部品であったからだ。

「ガ……ガジェ……」

息も絶え絶えな声で、なのははその正体を口にしようとしたその時再びフェイトと瓜二つの……ガジェットドローンのカメラアイから閃光が放たれる。

そしてそれは一直線なのはとユーノに向かって飛来してくる。

「なのはさん！」

が、閃光は二人の体を貫く直前で、突如として現れたシールドによって防がれる。

「うおおおおお！！！！！」

更に次の瞬間、ガジェットはその体を大きく吹き飛ばされる。

その近くで、実体剣を両手で構えたバレルが、怒りに打ち震えた表情で立っていた。

「アイツ……こんな物まで持ち出して……！！！」

ベルクトを出来損ない呼ばわりし、フェイトや自身のコピーを作って道具扱いするばかりか

拳句、フェイト型のガジェットまで持ち出しているバルドナへ対しバレルは言いようの無い怒りを覚えていた。

「なのはさん！ユーノ君！！！」

「ふえ……い……さ……ん……」

フェイは倒れていたなのはとユーノの体を起こし、必死になって2人に呼びかける。

なのはは今度こそ、自分の仲間の姿を確認して、助かったと安堵の表情を浮かべていた。

「2人とも出血が酷いわ……！私じゃ応急処置しか出来そうに無い……一度救護班に見てもらわないと……」

2人の怪我の度合いを見てフェイは焦りを浮かべながらも足下に魔法陣を展開して、自分の出来る限りの範囲での治療を開始する。

「フェイ……君は2人の事を頼む……」

「ええ……でもバレル……」

「大丈夫だフェイ……今度こそ僕は迷わない……」

自分の背後で心配そうに声をかけてくるフェイに対し
バレルは振り向く事無く強い口調で返答し、目の前にいるガジェットと相対する。

「どの道自分の親を手にかけたような男だ僕は……
けど、悔やんでなんかいられない……それ以上に、この目の前の脅威を払わなきゃいけないんだから!!」

そう言ってバレルは実体剣を振りかざして、ガジェットに向かって突撃していく。

ガジェットはそれを見て自身の右腕にエネルギーを纏わせ、ブレードを展開する。

そして両者の刃が交わり、轟音と共に辺りに火花が散っていく。

「それからだ……悩むのも考えるのも……全部終わってからでいい!!」

＊

「コイツは……」

「本当……悪趣味なんてレベルを超えているわね……」

兵装制御室を後にし、気絶したライネンを抱えて廊下を進んでいた
タックとマリナも

新たな敵と相対していた。

「ターゲット2名……現時点での危険度はレベルAと推定……」

そこにいたのはブラッドルームに現れたのと同じ、フェイトの姿をしたガジェットであった。

フェイト型のガジェットは左腕を振じらせてそれを変形させていく。

「発射」

変形を遂げたそれはガトリングとなり、そこから大量の魔力弾を連射していく。

タックとマリナはそれぞれ逆方向に飛び退いてその弾丸を回避する。

「でやああああ!!」

タックは着地と同時に勢いをつけ、そのままガジェットに向かって突進する。

目の前まで迫ってきた所でライフルの魔力刃を展開し、ガジェットに向かって振り下ろす。

「……」

「なにっ!？」

が、ガジェットの右肩へと直撃したタックの一撃は衝撃と電流が迸るのみで

ガジェットの肉体にダメージは通っていなかった。

「!!!!」

直後、ガジェットはタックへと視線を移動させて、カメラアイから閃光を放つ。

ほぼゼロ距離から発射されたそれは、タックにまともに当たって爆発を起こす。

「タック!!!」

その光景を離れた位置で見ていたマリナが悲痛な叫びを上げる。

「ッ…大丈夫…ダメージは通ってない…」

それに答えるようにして爆風の中からタックが後退してくる。

攻撃の直前、タックは咄嗟に両肩のプレートを展開してツインシールドを張り、敵の攻撃を防いでいた。

タックの無事を確認したマリナはホッとするも、すぐに気持ちを切り替える。

「今までに無いタイプた…まさか、こんなものまで開発してたとは…」

「しかも見掛け倒しじゃないわ…これまでのガジェットとは桁外れ

よ…」

互いに固い表情を浮かべて敵の姿を観察する。

フェイトと殆ど同じ姿をしたその敵は、これまで倒してきたどの無人兵器をも凌駕する実力

恐らくはナンバーズや自分の世界の人間達にも匹敵すると2人は考えていた。

ドオオオン！！

と、ガジェットと相対していた2人の背後の壁がいきなり破壊される。

「こ、今度はなによ！？」

いきなりの事態にマリナは困惑を浮かべ、新たな敵の出現を予測して武器を構える。

しかし、その先にいたのは敵ではなく、2つの人影。

「ヴィータ！？それにリインフォースも…」

「タック！？おめーらここにいたのか？」

破壊された壁の先から現れたヴィータと、そしてリインフォースを見てタックは驚いて声を上げる。

タックとマリナの姿を確認したヴィータもまた同様の反応であった。

「ヴィータ…その体は…」

「…治療が万全ではないというのに…聞かなくてな…」

マリナは、頭部から右頬にかけて流れているヴィータの血を見て声を漏らす。

それを聞いて、後ろにいたリインフォースは呆れたように答えた。

「心配すんな、そんなヤワな体してるわけじゃねーさ、あたしは」
が、心配するマリナを他所にヴィータは、アイゼンを肩に担ぎながら軽い口調で言う。

「そんな事より…もっと厄介な事になってるみてーだからな…」

次いで、すぐに表情を真剣なものへと変え、ガジェットに視線を向ける。

「…ヴィータ、リインフォース、力を貸してくれるか？」

「言うまでも無い…！」

「ったりめーだ…！」

タツクの言葉にヴィータとリインフォースは真剣な口調で即答する。
そして少しの間も置く事無く、4人一斉にガジェットへと向けて攻撃を仕掛けた。

＊

「真の目的…だと？」

「そう、兄貴も気になってるっしょ？俺らがこうまでして何をしたのかをさ」

予想外の相手の言葉に、ベルクトは多少の動揺を見せている。

対してBBは、いつもの軽いノリを全く崩す事無く説明を続けていった。

「そもその親父とスカリエッティ、ライネンの3人の計画はこのはこぶねを指定ポイントに到達させ、月の魔力によって作動する主砲とガーディアン

加えて俺やセディス姉、その他諸々の力を使って本局艦隊を殲滅：そのまま勢いで管理局本局に乗り込んで全てを支配する：まあこんなところだったわけよ」

「しかしナンバーズの大半は捕縛され、はこぶねもその機能の殆どが停止している

貴様らの計画は続行不可能だ」

敵意を込めた冷徹な表情を浮かべたまま、ベルクトはBBに対して言い返す。

「：まあ、それくらい子供でもわかる簡単な事実だよな

これだけの戦力を失った以上、本局相手に喧嘩を売るなんて自殺行為は出来ないよ」

BBはそう言って右手を掲げてパチンと指を鳴らす。

「けどそれはあくまでプランAの話、今は親父主導のプランBが動いてるんだよ」

次の瞬間、BBの背後に巨大なモニターが表示される。

そこに映っていたのは巨大な円形の装置と一本のエネルギーグラフ

「……バカな：まさかお前達は：」

その映像を見てベルクトは目を見開く。モニターに映るその装置の図式は

自分が最も見覚えのあった物だったのだ。

「そう：これを見た上で聞くけどさ、この部屋の構造：兄貴は何か見覚えが無いかな？」

「何：？」

言われてベルクトは自分のいたマスタールームをもう一度よく見渡していく。

巨大な円形の部屋、四方に立つ四本の巨大な柱、足下にある銀色に鈍く光る機械。

そして全ての察しがついたベルクトは、逆に冷静な口調へと変わってBBにこう尋ねる。

「……バカな事を…また作ったというのかあの男は…」

それを聞いてBBは、満足げにニンマリと笑みを浮かべて更に言葉を返す。

「ご名答、親父は3つ目のバルドナ・ドライブを作った

それを使って今俺達がいるこの惑星をぶっ壊すつもりなんだよ」

＊

「この星を……!!」

「そうよ？役に立たないゴミどもを一掃する…とってもクリーンな計画なのよ？」

同時刻、総司令室でもセデイスがモニターを展開してプランBの概要を説明していた。

それを聞いたフェイトはあまりにも理解し難いその計画に怒りを露にする。

「何をふざけた事を…そんな事をしたらどれだけの命が失われるかわからないの!？」

「わかってたら何だって言うのよ？大体プランAを実行してさえい

れば

地上ち本局のゴミどもを飼い殺しに出来たのよ？それをアンタらが邪魔したおかげで

皆殺しモードに移行しなきゃいけないんだから！これはアンタらの所為なのよ！？」

「ツツツ！！」

他人の命を何とも思わない、そのあまりに無慈悲な発言にフェイトは遂にキレる。

「はああああ！！」

反射的にバルディッシュをセデイスに向かって振り下ろす。

セデイスはそれを上へと飛び上がって難なく回避し、

フェイトの一撃はセデイスの操作していたパネルへと直撃して爆破する。

「ちょっとおろ？あんまり暴れないでくれる？高いんだからその機械！」

激昂するフェイトとは反対に、セデイスは普段の軽い口調を崩さない。

が、今までとは違い、どこか静かな怒りを感じさせる息苦しさも発していた。

「それにさ！喜ばしいことなのよ！？接続先は9年前のあっち側の地球なんだからさ！」

「嘘っ！！？」

またしても放たれた驚愕の事実、再びフェイトは大きく目を見開き、体を震わせて反応する。

「そうよ？それもふたつつ。パパの本来の世界とベルクトのカスが生まれたもう1つの地球！」

その2つをパパの長年の研究によって時間すら跳躍可能にした新たなバルドナ・ドライブで繋ぎ

今私達のいる惑星と激突させる。私達はビーちゃんとパパの研究による空間転移で

はこぶねごと安全な世界へと移動する…それがプランBの全貌よ♪」
常識では到底考えられない、また考え付いたとしても誰もが実行しないであろう計画を

セデイスはさも楽しそうに語り聞かせていく。

「知っての通りバルドナ・ドライブは空間接合に巨大な通路を作る…
つ・ま・り…2つの惑星規模の物体が猛スピードでぶっ飛んでくるわけだから」

その通過途中にある次元世界にも甚大な被害が出る事になるわね」
「なっ…!!」

連続して言い放たれるセデイスの言葉に、フェイトは到底理解が追いつかなくなってしまう。

惑星が3つ、同時に激突する…それだけでも失われる命の数は計り知れないというのに

2つの地球が通過する世界にもまた、被害が及ぶというのだ。それによって更なる命が失われるのだ。

「何でそんな事を…たくさんの人の命をどうしてそんな簡単に弄ぶことが出来る!!」

怒りに打ち震えるフェイトは、セデイスに向かって心の底からの叫びを放って訴える。

数える事すら馬鹿馬鹿しくなるような人の命が失われるというのにそれに対する抵抗が全く見えないセデイスの事が許せなかったからだ。

「…同じ穴の貉で分際で…」

しかし、その言葉を聞いた瞬間、セデイスの表情が一変し、眉間に深い皺が刻まれる。

「小生意気な事ほざいてんじゃねーよカスがああ!!」

今までとは打って変わった禍々しい声でセデイスはそう言い放ち、手に巨大な戦闘斧デバイスーハルバートを現出させる。

「ライジングスフィア!!」

直後、ハルバートの先端に一瞬で巨大な黄色の雷球が形成され

途轍もないスピードでフェイトに向かって飛んでくる。

「ッッ！！」

突然の攻撃に驚きながらも、フェイトはバックステップでそれをかわし

フェイトの立っていた場所に着弾した雷球は、そのまま地面を貫通して下層へと消えていった。

「自覚も無いアンタの薄っぺらい言葉は聞き飽きたんだよカスがッ！！」

なーにをそんな自分が善人みたいに高尚な言い回ししてんだよッ！アンタも結局は私と同じ薄汚い人間だろーがよおお！！あアッ！？」
「違う：私はお前とは違う：姿形だけ似て：人の命を簡単に捨てれるようなお前とは：！！」

今までの挑発的なひょうひょうとした態度を完全になぐり捨て自分の中に溜め込んでいた全ての怒りをセデイスは投げかける。

それを聞いたフェイトも少しも動じる事無く、セデイスに対する怒りを見せて武器を構える。

「全ての世界で価値のある命はパパとビーちゃんと私だけ：それ以外は全てゴミよ：」

それをいくらぶつ壊したところで：文句を言われる筋合いは無えんだよッッ！！」

「人の命は：全ての人達に平等に価値あるべきもの：作られたものでも自然に生まれたものでも：」

それに優劣をつける権利なんて：どこの誰にも：あなた達にだってありはしない！！」

2人の意見は真っ向から対立し、両者とも少しも譲る気は無かった。

「ハッ：何を言ってるんだか：アンタも結局は私と同じ：他人の命を使う側だつてのにねえ：」

すると、歪んだ笑みを浮かべてセデイスは、フェイトに聞こえないように一言こう吐き捨てる。

「まあいいわ：オリジナル？アンタは死ぬよりも尚酷い目に遭わせ

てやんよ？」

「やってみろ：！！」

セデイスはハルバートをフェイトの方に向けて挑発する。

フェイトもそれを見てバルディツシュの切先をセデイスの方へと向けて、相対した。

＊

「と、まあ：それが親父の計画だったわけ：なんだけどね」

「？……」

一通りの説明を終えたBBは、突然モニターを操作する。

すると、ゆつくりと上昇を続けていたバルドナチャージが停止した。

「何のつもりだ？」

「だってそうだろう？こんな話を聞かせたら兄貴が動揺しておもしろいじゃないじゃん？」

本当はセデイス姉からは兄貴との戦いで残りのチャージを掻き集めろって言われてただけど：

とりあえずは兄貴との戦闘が終わるまではチャージは止めておくのさ」

「はあ…：？」

「部屋をコーティングしたのもドライブに被害が及ばないようにする為：

でないと兄貴は俺との戦いをほっぽり出してドライブの破壊に走りそうだし」

呆けに取られるベルクトの前に、BBは理由の説明を行っていく。

「その言葉を信用しろと？」

「信じる信じないは勝手さ。俺が勝てば世界が減んで、兄貴が勝てば世界は救われる…シンプルだろ？」

「そうか…」

そこまで聞いてベルクトは突然、目を閉じて俯く。

「うひょお!!」

次の瞬間、BBの背後に魔力刃を携えたベルクトが現れる。

すんでのところでBBは横へステップ移動をして攻撃を回避する。

「なら話は簡単だ。俺はお前を…排除する、BB!!」

「そう来なくちゃなあ!!」

自身の強い決意を込めたベルクトの言葉に、BBは満足げに高らかに答える。

ベルクトはそのまま猛スピードで一直線にBBに突っ込んでいく。

「甘いつての!!」

BBは空間支配を発動し、瞬時に遙か上空へと移動する。

「プレイスバレット!!」

続けさまにベルクトの周辺に黒いワームホールをいくつも展開しそこから一斉に魔力弾を放って攻撃する。

「はあっ!!」

キキキキン!!

ベルクトはそれらを、魔力刃を高速で何度も振るって叩き落す。

「ひゃいゝ…素の能力も格段に上がってやが……つとお!？」

BBはパワーアップしたベルクトの実力に関心していたが、

直後にベルクトは左腕のスケイルブルーメランをBBに向かって放つ。

BBはそれを見て、今度は魔法陣を展開し、背部の黒い翼を大きく羽ばたかせる。

「デモニックレイン!!」

瞬間、黒い翼から無数の針のような光が放たれ、ベルクトの放ったスケイルブルーメランを撃墜する。

残った光は全てベルクトに向かって降り注いでいく。

BBは敵に着弾するのを確認する前に、空間支配による瞬間移動を使う。

「ちょいさあ!!」

「グッ…!!」

ベルクトの背後から強烈な蹴りを放ち、それによってベルクトは大きく仰け反る。

体制の崩れたベルクトに向かって、先程放った針の光が一斉に襲い掛かり、無数の小爆発を起こした。

「くししし……さーてどんな安排かなあ？」

爆風を見つめるBBは楽しそうに笑いを浮かべる。

シュウ!!

「おっ……あ……？」

だがその楽しみも束の間、突如として横腹に違和感を感じる。

見ると、膨大な量の魔力を撒き散らしながらベルクトが魔力刃で自身の体を切り裂いていた。

「……らああああ！！！」

「！！……チツ……！」

しかしBBは目の前のベルクトには目もくれず本能的に何もいない背後に向かって裏拳を放つ。

次の瞬間、それを苦々しい顔で受け止めるベルクトの姿が現れた。

「……それが兄貴の本気ってえわけだな？」

自身の目の前のベルクトが消滅した後、BBは背後にいるベルクトに声をかける。

咄嗟の判断でE2を起動したベルクトは、黙ったまま答えない。

「驚いたぜ……傷をつけられるのは初めてだったかな……」

「悪いがそう時間が無いんでな……すぐに終わりにさせてもらおう！！」
心底楽しそうに話すBBに対し、ベルクトは武器を前に構えて、再び姿を消滅させる。

「おいおい……こんな楽しい遊びをすぐに終わらすなんて……勿体無い事言うなよなツツ……！」

それに対してBBもこの戦いを本気で楽しんでいる風に答え、空間跳躍を行う。

直後、何も無い筈の空間の到る所で、何かか激突する衝撃音が何度も響いていった。

＊

ミッド地上、一所歓喜のムードが落ち着いた後
残った局員達は各々でそれぞれの行動を開始していく。

「やれやれ…もうヘトヘトだぜ」

魔力の殆どをアムロのシールドに注ぎ込んでいたデュオは
崩落している道路にチョコンと腰を下ろす。

「だが喜んでばかりもいられない…上昇を止まったがまだ戦闘は続いている」

そのすぐ側でトロワが冷静に、現在の状況を分析していく。

するとその時、上空から一台のヘリが降下してきて、皆の近くに着陆する。

「あれは……」

その機体に見覚えがあったアムロが反応を示す。

「皆さん！無事でしたか？」

ヘリの中から真っ先にバルクホルツが降りてくる。

それに続いてシャマルと、他何名かの救護スタッフが姿を現す。

「今から応急手当を行います。消耗の激しい局員はこちらへ」

真剣な表情でシャマルが周りの局員にそう言って

背後にいた救護スタッフ達にテキパキと指示を出していく。

「皆さん…本当によくやってくれました…」

「い、いえそんな…」

「私達も…本当はもうダメだと思ってたくらいですし…」

バルクホルツが六課のメンバーに視線を向けて賞賛の言葉を贈る。それを聞いてスバルとティアナの2人が頬を染めて照れくさそうに反応する。

「まさか…ガーディアンが起動するとは私も想定外でした…」

「ああ…どうやら敵は想像以上に情け容赦ないらしい…」

次いで、バルクホルツが真剣な表情でそう言い、それに対してアムロが答える。

「ここまでされた以上大人しく引っ込んでもらえないでしょう…戦艦は確かに停止しましたが、突入部隊からの連絡も途絶えています…」

その言葉に六課のメンバーが反応を示す。

「インドアでの救助支援と救助任務…陸戦屋の仕事場だな」

「ヴァイス陸曹!?!」

ヘリの中から現れたヴァイスの姿を見て、ティアナが驚いて声を上げる。

そして更にヴァイスの後ろからもう1人姿を現す。

「ス…バル…」

「ギン姉!?!?!」

ギンガの姿を見て、スバルは悲痛な面持ちを浮かべてすぐに駆け寄っていく。

ギンガは全身到る所に包帯が巻かれ、立ち上がっているのやつとな状態だったからだ。

「ギンガ!?!まだ無茶よ!ちゃんと横になってないと…」

「はい…けど、1つだけ…スバルに…」

それを見てシャルも慌ててギンガの方に駆け寄っていくがギンガは痛む体に鞭を打って、声を振り絞る。

「ギン姉…どうしてそんな…」

「……まんまと敵の策略にはまっちゃってね…

勇君と比瑪ちゃんが咄嗟にチャクラシールドを張ってくれなかったら今頃…」

「あっ…!」

それを聞いてスバルはヘリの奥へと目を向ける。

そこにはギンガと同じように包帯に巻かれた勇と比瑪、そしてチンクが横になっていたのだ。

「勇……比瑪……」

スバルは身を挺して自身の大好きな姉を救ってくれた2人に対して感謝の気持ちでいっぱいになる。

その目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

「スバル…これを…」

ギンガはヨロヨロと震えるその体を必死に奮い立たせながら待機状態の自身のデバイスをスバルへと手渡す。

「これって…」

「どの道…私はもうこの戦闘には参加できない…だから…これはあなたが…」

そう言ってギンガはヘリの外壁に手を当てて支えにしながらもう片方の手でスバルの右頬に手を触れ、優しく微笑む。

「必ず助け出すのよ…なのはさん達の事…」

「…うんっ!!」

ギンガの想いと力を受け取り、力強くスバルは頷いて答える。

「それじゃあ…隊長達の救出…行くぜ!!」

「はいっ!!」

ヴァイスがストームレイダーを肩に抱えながら高らかに言い放ちそれに対してフォワード陣が一斉に答えた。

「…ではアムロ・レイ…引き続き地上の支援を頼みます…」

フォワード陣たちを見届けた後、バルクホルツがアムロに対してそう言う

「ああ…けど、あなたはどうするつもりだ?」

それを了承しつつも、アムロは更にバルクホルツに問いかける。
「…はこぶね内にも多くの負傷者がいるでしょう…私はそちらの救助へと向かいます」
真剣な表情を浮かべたまま、バルクホルツは静かに答えた。

＊

ドクン…

ドクン…

ドクン…

（……はこぶね内の予備体はバレルに殺されましたか…）

（けどまあ……想定の範囲内でしょう……）

（プランBの使用と……コレの力があればどうにでもなります…）

（では……見せてやるとしましょうか……管理局の者達に更なる絶望を…）

（この……混沌の龍の力で………）

(クククク……クキキキキキ……!!!!)

ドクン…

ドクン……ドクン……ドクンドクン……!!

スカリエッティのアジト、ガーディアンの一で撃跡形もなく崩壊したその地の更に奥深く
そこで…巨大な悪意が鳴動していた……

第35話（後書き）

戦闘に入るつもりが殆ど背景説明で終わってしまった感…
期待していた方には本当に申し訳ないです…

さて、いよいよ全貌が明らかになったバルドナの計画
無印の独自解釈も多少活かしての流れになりました。
BBが勝手な行動をしているとはいえ
果たしてこのトンデモ計画を阻止出来るのか？

とうとうセデイスがプツンしました。
もう何というか言いたい放題です。
色んな意味でフェイトと正反対な筈の彼女が
フェイトを同類呼ばわりする理由…

いやバレバレなんでしょうけど…
本当にこいつはスカリエッティやクアットロのお株を奪いすぎ…
この先更なる暴言を吐きまくる予定ですし…

互いに強敵に挑むベルクトとフェイト、救出を開始するフォワード
部隊
フェイトの姿をした謎のガジェットと戦いを繰り広げる突入部隊

そして崩壊したアジトの奥で蠢く物…

その辺りの行方も含めて次回の更新を楽しみにしてくれたら幸いです。

それではまた

第36話（前書き）

スーパーユートタイムならぬ、スーパーセデイスタイム？
今回の彼女は本当にヤバいです：色んな意味で

第36話

はこぶねに向かって一台の小型ヘリが、高速で近づいてゆく。

その中にいるのは機動六課フォワード部隊のメンバーと、フィーデル・バルクホルツ。

「船の中は、奥へ進むほど強力なAMFが充満しています。」

先程治療を受けた皆さんとはいえ…油断は禁物です。気をつけて進んでください」

「「「はい!」「」」」

モニターを展開しながら、真剣な表情で説明をするバルクホルツに
対し

フォワードの四人が力強く頷いて返答する。

自分の大切な人達…自分達に戦い方や戦う意味、生きる居場所を与えてくれた

隊長達を救う為なら、四人全員、どんな困難でも乗り越えられるという覚悟があった。

「それじゃ…」

その強い決意を感じ取ったヴァイスが、愛機であるストームレイダーを構える。

直後、ハッチが開き、ヴァイスはその銃口を、はこぶねの侵入口へと向ける。

「行くぜ…ストームレイダー…!」

言葉と同時に、ストームレイダーの銃口から魔力弾が発射され
周辺を飛行している、?型ガジェットを正確に撃ち落していく。

「俺は…エースでも達人でもないし、アムロさん達の世界の人間の
様な才能もねえ…」

銃を発射する手は休めず、ヴァイスは自分の思いを語り始める。

「身内が巻き込まれた事故にビビッて…取り返しのつかねえミスシ
ョットもした…」

死にてえくらい情けねー思いもした…！」

ストームレイダーのカートリッジを交換しつつ、声色を強めてさらに続けていく。

「それでもよ…無鉄砲でバカったれな後輩の道を…作ってやるくらいのは出来る…！」

言葉の終わりと共に、収束された魔力弾が、はこぶねの侵入口を守るように立ち塞がっていた

ガジェット？型を一撃で撃ち抜き、爆発させる。

その正確無比な射撃のコントロールに、ティアナは驚きを浮かべている。

「よし、行け！」

それを確認し、ヴァイスはフォワード陣の方に振り向いて合図を送る。

スバルとティアナはバイクへと跨り、背後のスバルが魔法陣を展開する。

「ウイングロード…！」

スバルとティアナの乗るバイクから。はこぶねの侵入口に向けて、一直線に道が形成される。

ティアナはバイクのアクセルを全開にし、猛スピードで突っ込んでいく。

「フリード…！」

次いで、フリードに跨ったエリオとキャロがその後を追って空を舞う。

「…はやてちゃん…皆さん…どうか無事でいてください」

更にその後、バルクホルツが己のデバイス、フェザーアークを起動させ

フォワード陣に続いて、はこぶねへと向かっていった。

＊

戦艦はこぶね、総司令室

「それそれそれえ！さっさと死ねやああ！！」

戦闘斧型デバイス、ハルバートを片手で構えたセデイスが、フェイトに向かって突撃していく。

両目は大きく見開かれて充血しており、見るもおぞましい表情へと変貌していた。

高速で振り下ろされる斧の一撃を、フェイトは飛び上がって回避する。

バゴオオオン！！

「クッ…何てパワーを…！」

総司令室の床へと直撃したその一撃は、部屋内全体へと衝撃を与え、激しい振動を起こす。

フェイトはそのあまりにも凄まじいパワーに驚愕を浮かべている。

「クワアッ！！」

「！！」

しかし驚いてい暇も無く、すぐにセデイスが斧を構えなおし、フェイトの横から急接近して、更なる一撃を加えてくる。

判断の遅れたフェイトは、咄嗟にザンバーモードのバルディッシュを構え

セデイスの放った攻撃を受け止める。

「グギギ……ヒヒッ！…なめんなよカスがああ！！」

「うあっ！！」

が、セデイスはそのまま斧を持つ手に力を込め、バルディッシュごとフェイトを吹き飛ばす。

力負けしたフェイトは、後方の壁に叩きつけられる前に踏みとどまる。

その反動を利用して飛び上がり、上空からザンバーを構えて思い切り振り下ろす。

「はああああ！！」

「…カッ！」

フェイトの全力の一撃を、セデイスは真っ向から受け止める姿勢を見せる。

ハルバートのカートリッジロードを行い、魔力を増幅させ、そして後ろへと構える。

「ドオオオルウアア！！」

「くう……ああああ！！」

そして後ろに構えた状態から、ハルバートを思い切り横へと振り下ろす。

落下の速度も加えたフェイトの一撃は、セデイスが片手で振るった力にすら押され

再び反対側へと吹っ飛ばされる。

「フヒヒ…！チョロチョロ動き回ってアンタはネズミか何かなの？ネズミさんが真っ向から私と撃ち合おうなんて…バカの極みってやつだね？」

「クッ…」

床に降り立ち、苦々しい表情を浮かべるフェイトに対し
気でも狂ってるような奇妙な口調で、セデイスは挑発をする。

フェイトもフェイトで、自分が今劣勢に立たされていることを実感
していた。

（まともにやりあってたら…力負けする…）

砲戦主体のなのはとは正反対に、フェイトは高速での近接格闘戦を
メインとしている。

しかし目の前の相手セデイスは、未だ本気を出していないとはいえ、
自分のスピードにはほぼ追従している。何よりの問題はパワーの差で
あり

セデイスの一撃一撃全てが致命傷とも言えるほどの、凄まじいもの
なのだ。

ましてこちらは、接近戦での威力をより高めたザンバーフォームで
戦っているのに

敵のセデイスはそれを、デバイスのハルバートと、片手だけの力で
安々と返り討ちにしてくる。

このまま戦えば、こちらがすぐに追い込まれるのは明白である。な
らば、迷ってなどいられない。

「ライオット!!」

フェイトは足元に魔法陣を展開し、バルディッシュを床へと向ける。
両刃のザンバーフォームが更なる変形を行い、片刃の、より収束率
の高まった魔力刃
バルディッシュのフルドライブ、ライオットブレードへと姿を変え
る。

「ふーん…それがアンタの切り札の一つかあ…」

その光景をセデイスは、モニターパネルの上に腰を下ろしながら、
冷めた目で見ている。

「はああ!!」

ブレードを構えたフェイトが、再びセデイスに向かって突撃し、そ
れを振るう。

セデイスはと言うと、ハルバートを構えるわけでも、防壁を展開するわけでもなく。

されるがままに、フェイトの一撃を浴び、後方のモニターへと突っ込んでいく。

「け・ど…所詮はガラクタ…その程度ね」

「ッ…！」

崩壊したモニターの先から、ケロツとした表情でセデイスが姿を現す。

それを見たフェイトは、悔しげに歯を噛み締める。

ザンバーフォームから更に破壊力を増した一撃でさえ、目の前の敵にはダメージにならない。

「それなら…！！」

「させると思ってたの…？」

フェイトは更なる切り札解放を行おうとするも、直後、セデイスが瞬時に眼前へと現れる。

「シッ…！」

「！！！！！！！！！！」

セデイスはハルバートを持たない方の手で握り拳を作り、フェイトへと鉄拳を叩き込む。

その一撃がフェイトの腹部へと直撃し、彼女の体を吹き飛ばして、地面へと沈ませる。

「グッ…ゴホッ！」

ヨロヨロと立ち上がるフェイトだが、腹部の激痛が耐えられずに大きく咳き込む。

バリアジャケットの上からでも、セデイスの破壊力は凄まじい威力を発揮していた。

「くしゃしゃしゃ…！無様なもんね…さっきまでの威勢はどうしたのかしら……つと…！！」

「あうっ…！！」

フェイトの姿を、セデイスは冷ややかな視線で見つめ、更に黄色い

鎖のバインドで拘束する。

「こ…のっ!!」

フェイトはすぐに気を引き締めなおし、手にしたライオットでバインドを切断する。

「ふーん？まだ足掻きますか死に損ないが…じゃあ…ちよつと面白いもん見せてやりますかね…」

セデイスは容赦なく次の行動を開始する。足元に魔法陣を展開し、ハルバートを前へと構えて魔力を収束。すると、一瞬にして巨大な魔力球が出現する。

その性質は、フェイトが一番見知っている、親友の最大級の攻撃と同質のものであった。

「これは…まさか…」

「スターライトブレイカー」

驚くフェイトに対し、抑揚の無いセデイスの言葉と同時に、極大の黄色い閃光が発射される。

ダメージの蓄積がかなり高まっていたフェイトは、加速魔法を唱えてスピードを底上げし

広いとは言えない総司令室の、横端へと移動して、それを回避する。が、すぐさまセデイスの方へと視線を向けたフェイトは、更なる驚愕の光景を目の当たりにする。

「!!…そんな…!!…こんな一瞬で!？」

「ただ単に魔力を収束させて撃つだけなら、どこの馬鹿でも出来るのよ」

問題はそれをどう使うかが、馬鹿と天才の壁なのよ」

スターライトブレイカーを撃った直後だというのに、セデイスは再び魔力球を形成していた。

セデイスはいつもの楽しい口調とは違う、どこか冷め切った口調で、更に呟く。

「スターダストブレイカー」

次の魔力球は、無数の小型の魔力弾へと分裂し、部屋全体を覆うよ

うにして発射される。
フェイトは避けられないと判断し、目の前にシールドを展開するも、
「くっ…う…ああああ!!」
一発一発の収束率が非常に高く、3、4発当たただけで、フェイトのシールドは破壊される。
そして、そのまま魔力弾の雨に晒されていった。

＊

はこぶね通路の一つ、そこでフェイトを模したガジェット?型との戦いが続いていた。

「たああ!!」

ライフルに魔力刃を形成したタックが、ガジェットに向けてそれを振り下ろす。

?型ガジェットはそれを高速で横にステップ移動して回避する。

「穿て…!」

間髪いれずにリインフォースが、ブラッティダガーを形成し、ガジェットに向けて発射する。

それを見たガジェットはAMFを発動、刃が渡る前にそれを消滅させる。

「攻撃が思うように通らないわね…!」

それを見ていたマリナが悔しげに呟く。ガジェットに共通する能力

であるAMFだが

セデイスの制作した？型はその能力が大幅に上がっており、こちらの攻撃の殆どを軽減しているのだ。

結果、こっちは4人がかりだというのに、未だにガジェット相手に致命傷を与えられていない。

「んな事関係ねー…だったら、それ以上の力で叩き潰せばいい…！」
ヴィータがそう言って、アイゼンを構え直すも

「ウツ…！！！」

「ヴィータ！」

突如として膝を突いてしまう。それを見たタックが慌てて駆け寄る。

「ヴィータ、やっぱりそのケガじゃ無茶だ、ここは俺達で…」

「うるせえ……！」

心配するタックを振り払い、ヴィータは立ち上がる。

それを見たガジェットがカメラアイを光らせ、行動を再開する。

4人も武器を構え直し、応戦しようとするが

「…待て、何かが近づいている」

リインフォースが異変に気づき、ポツリと呟く。と、次の瞬間

ドオオオオン！！

通路の壁の一部が破壊され、そこから一台のバイクと一匹の竜が出現する。

「……もうちょいまともな登場をしろよな」

「いやヴィータ…お前が言うなって」

苦笑しながら呟くヴィータに、タックがすかさずツツコミを入れる。

「ヴィータ副隊長！！」

バイクに乗っていたスバルが、ヴィータに駆け寄る。

「エリオ君…これって…！！」

「スカリエツティの奴…こんな物まで…！！」

フリードに乗っていたエリオとキャロが、ヴィータ達が戦っていた？型ガジェットの姿を見つけ

それぞれ反応を示す。

「…みんな、立ち止まってる暇は無いわ、他の隊長達や97-2番世界の人達も戦っている！」

残ったティアナは頭を高速回転させ、何が必要かを考える。

「ここは私が加勢する！スバルはなのさん達の所、エリオはフェイトさんの所へ救援に向かって！」

キャロはフリードと一緒に、後続部隊のサポートを！！」

「「はい！！」」

ティアナの指示に、他の三人が力強く答える。

「キャロ、フォローお願い！」

「うん…ケリュケイオン…エリオ君にスピードブースト…フルドライブ！！」

エリオの意志に応え、キャロは腕に装着したケリュケイオンを構える。

放たれた魔力光がエリオを包み、能力を向上させる。

「じゃあみんな…絶対なのはさん達を助け出そうね！！」

スバルの言葉に、他三人が無言のまま頷いて答える。

そしてティアナを残して、それぞれの目的地へと進んでいった。

「ティアナ…ちっとはそれっぽくなってきたみたいだな」

ヴィータはティアナに対して、称賛の言葉を述べる。

「ありがとうございますヴィータ副隊長…でもその前に」

それを聞いたティアナは真剣な表情のまま答え、

次いでクロスミラージュを、目の前の敵へと向ける。

「こいつを先に片付けてからです!!」

「ああ!!」

ヴィータも力強く答え、アイゼンを振り上げる。

タツク、マリナ、リインフォースの三人も、それぞれ行動を開始した。

＊

マスタールーム、バルドナドライブのあるその部屋で

ベルクトもまた、BBと激闘を繰り広げていた。

「ふっ!はっ!」

「遅い遅い遅い遅い!!」

ベルクトは手にしたライフルに魔力刃を形成し、BBに向かって斬り掛かっていく。

その一撃毎のスピードは並ではなく、一回ごとに残像が出現するほどである。

だが、BBもそれら全てを、超短距離の空間支配による空間跳躍でかわしていく。

「チィッ…それなら!」

埒が明かないと感じたベルクトは、一旦急停止し、カートリッジロードを行い魔力を高める。

それに、E2による魔力を上乗せし、魔力刃のサイズを何倍にも

高めていく。

その状態でベルクトは、魔力刃の形成されたライフルを構えなおす。

「甘い！時間支配！！」

それを見たBBは咄嗟にもう一つのISを発動、すると、ベルクトは突如体の自由が効かなくなる。

「消費が激しいからやりたくなかったんだが…今回は本気だしなああ！！」

終始ハイテンションな口調で、BBは動きの止まったベルクトの周辺に

大量の魔力弾を出現させる。

「！！…はあああ！！」

ベルクトが気づいた時には、自分を取り囲む魔力弾が一斉に自分に向けて襲い掛かってきていた。

だが躊躇うことなくベルクトは魔力刃を振り上げ

残像による分身が何体も出現するほどの速度で、全ての魔力弾を切り払う。

「オイオイオイ…これでも動じな…つつああ！？」

「隙を見せたな…！」

時間を止めてまで相手を封じたのに、それすら跳ね除ける相手の判断力に

BBは驚きを浮かべるが、その一瞬の隙が命取りとなる。

ベルクトは残像を残したまま瞬時にBBの懐へと移動し、彼の顎を思い切り殴り上げる。

その衝撃でBBは上空へと吹っ飛んでいくが、ベルクトはそれを上回る速度で

BBの上空へと瞬時に移動し、魔力刃を振り下ろしてBBを叩き落とす。

「うあっ…やば…」

「消えろっ…！！」

苦痛の表情を浮かべながら、BBは仰向けに落下していく。

これを好機と見たベルクトは魔力刃を下に垂直へと向け、急降下する。

「……なーんつつて♪」

「!!?」

しかしBBは地面に激突する寸前に体勢を変えて降り立ち、足元に魔法陣を展開する。

「ガーディアン！」

笑みを浮かべながらBBは右手を翳し、そこから漆黒の閃光を発射する。

急降下中だったベルクトの眼前にそれは迫っていくが

「くう……!!」

咄嗟の判断でベルクトは体を横へとそらし、ガーディアンの閃光を回避する。

そして地面に降り立った様子を見て、BBは益々楽しそうに笑う。

「くししし……まさかここまで強くなってくれているとはなあ……」

「……………」

対象的にベルクトは固い表情のまま何も喋らない。

呼吸もそれなりに荒くなってきており、額には汗も浮かんでいる。

（……限界時間まで……あと4分弱か……）

何より、体に内蔵したE2の発動時間のリミットも迫っていた。

それを超えてしまったら、どうなるかはわからない。残された時間は少なかった。

「……でやあ!!」

何かに弾かれるように、再びベルクトは行動を開始する。

BBと一直線の距離にいたベルクトは、瞬時にBBの背後へと移動していた。

「ハイッ!!」

それに気づいたBBは、体を大きく捻らせて裏拳を放つ。

「って……アレ……?」

が、その一撃は虚しく空を切り、BBは呆けに取られてしまう。

「つて…うおっ!!」

次の瞬間、B Bの横側からベルクトの魔力刃の一撃が叩き込まれ、B Bは大きく吹っ飛ぶ。

そのまま部屋の壁へと叩きつけられ、凄まじい衝撃が彼の体を襲う。

「グッ…フフ…まさか…俺の予想速度さえ凌駕するたあな…」

決して無視できないダメージではあったが、それでもB Bは楽しい笑みをやめない。

そんな彼の姿を見てベルクトは、怒りを通り越して、ある種の感心さえ生まれ始めていた。

「全く…貴様はとんだ化け物だな…それほどの力があるなら…」

あんな男の言いなりに等ならなくてもいいものを…」

「……まあ…そう思うのも無理無いかもしれないかな？」

B Bとベルクトはそうやり取りし、再び超高速での打ち合いを始める。

「でもさ、お前と戦えて俺は嬉しいんだぜ？この数年間で

兄貴みたいな強敵となんて、全然戦ってなかったんだからさ？」

「俺は不快なだけだ、貴様個人の楽しみの為に、愛する人間を泣かせてしまったんだからな」

打ち合いの最中、2人の会話が続く。B Bの口調は相変わらずの軽いものであり

対するベルクトは、静かながらも怒りを込めた口調で敵に言葉を投げかける。

「まあ…それを見たかったってのも一つの目的だけど…そんな事はどうでもいいんだよ」

「どうでもいいで片付けるな、俺にとってはフェイトも、この世界も守るべきに値する、掛け替えの無い物なんだからな…」

「…そうやって真っ直ぐに言える、それが俺にとっては羨ましかったりもするんだよな」

「何…？」

B Bの意外な言葉に、ベルクトは一瞬武器を振るう手が止まってし

まう。

すかさずその隙についてBBは、追撃を加える。

「ガッ：！」

BBの打撃がベルクトの横腹に直撃し、小さく呻きながらベルクトは吹き飛ばされる。

「：同じ作られた人間でも、兄貴はよっぽど立派さ。

フェイトって女を愛したのも、世界を破滅に導こうとしたのも、その他全部の事も

みーんな自分で考えた末に決めた、自分の行動だったんだからな」
今までの楽しい口調と違い、どこか黄昏た感じでBBは言う。

その間にも攻撃の手は緩めず、吹き飛んだベルクトの背後に空間支配で移動する。

「俺は違う：セデイス姉とすら違った：セデイス姉はZB—Hの試作シリーズ：

必要最低限以外の感情は、全部自分の中で育んできたから：：：なつと！！！」

「！！！！：！」

言葉の途中で、再びベルクトの背部めがけて拳を放つ。

それをすんでの所でベルクトは回避し、一瞬だけ地面に足について後方へと飛び上がる。

その回転の途中でカートリッジをロードし、ライフルに魔力を集中する。

「グレイブキャノン！！！」

ファントムモードながらも、収束率の高い紫の閃光が、BBに向けて発射される。

「でも俺は：最初からE2を内臓した兵器という前提の為に：：
見た目：性格：親父にある程度従順な事：食べ物や女の好み：
他人の不幸を見て楽しむ悪趣味な部分：何もかもが最初から作られていた」

静かに語りながらもBBは、背部の白と黒の翼を前面へと展開し、

ベルクトの放った閃光をそれを盾代わりにして防ぐ。

「親父の命令を最低限聞くといい性格で、E2の力が最も引き出せるという最終目標……」

その二つの前提の為にDNAや、その他の情報を調整して生まれた人間……それが俺なんだ」

「何だと……？」

「そうさ、俺に自己なんて無かった、生まれた時は全てが最初から刷り込まれた情報だったからな」

止まることの無かった攻防が停止し、両者とも動きを止めて話を続けていく。

ベルクトは一旦E2の稼動を解除させ、BBの話に聞き入る。

「でもさ……そんな俺にとって唯一、自分の意志で楽しいと思える事を見つけられたんだ」

「……それがこれか」

「そう……強い玩具と遊んで叩き壊す……それが俺が自分で見つけた唯一の楽しみなのさ……！」

ベルクトが固い口調で先に答えを言い当て、BBはそれを聞いて再び楽しげな口調へと戻る。

「だからこの最高の戦いを楽しむのさ……！世界の崩壊や親父の目的とは関係無い……！」

俺が俺自身の手で見つけた！親父に刷り込まれた情報じゃない楽しみなのにな……！」

大げさに手を振りかざし、部屋全体に響き渡る声でBBは高らかに言う。

それを聞いたベルクトも、ほんの僅かに感情に変化が生じていた。

（この男も結局は……ヤツの野望の道具に過ぎなかったのか……）

目の前にいるBBという男もまた、自分が最も憎むジル・バルドナの道具に過ぎない。

しかも、偶発的に生まれて道具として利用された自分とは違い

目の前の男は、何もかもが作られた存在であつたのだ。
そんな彼が何故、戦いに執着するのか：それが唯一の、自分で見つけた物だったからだ。

その為に自分を9年前の世界から連れ出し、そしてその結果に満足した。

だから今、親の命令に一部背いてまで、自分との戦いを優先しているのだろう：

「：とはいえ：俺は貴様を許すつもりは無いがな」

ベルクトはそう言って、再びライフルを前へと構える。

「例えそれが貴様の楽しみだとしても：その為に：フェイトを悲しませ

この世界を滅亡へと導く：貴様たった一人の為に、俺の守りたい物が失われていく：

そんな事はさらさらゴメンだからな：」

ベルクトは解除していたE2を発動し、再び膨大な魔力を纏っている。

「貴様の身勝手にこれ以上、好き勝手はさせん：だからBB：

俺はここで、貴様を完全に消滅させる！！」

「くししし：そうさ、それでいい：兄貴はそうやって全力で俺を壊しにればいい：

それこそが俺の望む：唯一絶対の楽しみなんだからなあああ！！」

ベルクトの言葉に呼応するかのように、BBも魔法陣を展開して魔力を高めていく。

そして自身のデバイス、ノアのさらなる力を解放する。

「ノア！！俺の楽しみみの為に：更なる力を解放しやがれええ！！」

高らかに叫ぶBBの言葉と同時に、BBの背部に更に4枚の白と黒の翼が出現した。

＊

「はあ…はあ…はあ…!!」

スターダストブレイカーの弾丸が消滅した後、フェイトは肩で呼吸を始めていた。

蓄積されたダメージに加え、ライオットは非常に魔力消費の激しい形態であり、

今のフェイトは、かなり危険な状態にあった。

「ふーっ…流石に二連射はきつい…」

対してセデイスは、収束魔法を二連打で使ったにも関わらず

額にうっすらと汗をかいている程度で、それほど大きな疲労は見られない。

「そもそもさあオリジナル？アンタはこんな場所に来てて良かったわけ？」

今頃別の場所では、私の作った？型ガジェットが、アンタの仲間をなぶり殺しにしているわよ？」

「ッッ!!」

仲間を見下す発言にフェイトは反応し、ライオットを構えなおすも

「…そういう単純な態度がムカつくんだよ」

「ああっ!!」

それを見たセデイスが一瞬で表情を怒りのこもった陰湿な物へと変

え、

再びフェイトをバインドで拘束する。

「アンタ言ってたわよねえ…私とアンタは違うって…」

拘束され、苦悶の表情を浮かべるフェイトに

セデイスはゆっくりと歩み寄っていき、彼女の目の前で静かな口調で語り始める。

「そもそもよ…人間って何だと思う？ どうしてやたらと人は人を分けたがるのかしら？」

「何を……」

「力の強い奴…足の速い奴…魔力がある奴…カッコいい…ブサイク…肌が白い…

髪が長い…目が青い…素直…短気…従順…いっぱい、いいいっぱい人の分け方があるわ…

けどね…結局煮詰めていけば、人は二種類にしか分類出来ないの…」
困惑するフェイトを前に、淡々とセデイスは語っていき、そして結論を口にする。

「使うか使われるか、それだけよ」

「使…う…？」

その言葉の意味が掴めず、フェイトは更に混乱する。

そのくらい想定内といった感じに、セデイスは説明を続けていく。

「私も…そしてアンタも…生まれは人の手によるもの…アンタは自分の母親…

そして私はパパの手によって生み出された…でも結局は…その根幹は同じ…」

「アリシア…」

「そうね…アンタの母親は、実の娘であるアリシア・テストロッサの蘇生の為

アンタを生み出した…でも結局アンタはアリシアではないただの粗悪品…

生みの親に従えないただのゴミだったわけね」

「……!!」

ゴミ、と呼ばれたことにフェイトは拘束されながらも、怒りを見せるが

それを見たセデイスの表情も更に歪む。

「なんでアンタが怒ってんのよ…当然じゃない…アンタは親を信じられなかった…」

その事だけで、私はアンタを殺す意味があるのよ…」

すると、セデイスの手がフェイトの右頬をゆっくりと撫でる。

「!!!!」

その冷たい感触に、フェイトは背筋にゾクリとしたものを感じた。

「ホント言うとなねオリジナル…いや、フェイト…私は最初の頃、アンタを敬ってたのよ?」

すると突然、セデイスはウツトリとした表情へと変わり、口調も柔らかいものになる。

「人造人間の製造の先駆けとも言える…プロジェクトFの最初の成
功体…」

言うなればアンタは、私達人造生命体全ての、誇り高い始祖と言え
る存在なのよ?…なのに…」

すると、そこまで言ってセデイスの表情が再び豹変し

今度は怒りのこもったぶっきらぼうな口調で話し始める。

「そしたらアンタの経歴を見てまー驚いたわ…実の母親であるプレ
シア・テストロッサを見殺しにし

今ではハラオウンとかいうどこぞのカスともわからん人間を親と呼
んでいる…」

最悪ね、本当に最悪ね。私達人造生命に対する、最高の裏切りだわ」
「何が…何が言いたい!!」

次々と発せられるセデイスの罵声にフェイトは耐えられず、声を荒
げて反論する。

セデイスはそれにも全く動じずに更に続けていく。

「当然よ? 子供にとって親の命令は絶対なのよ?

なのにアンタは親の言うことに背き、管理局の味方をし、挙句親を見殺しにした…

それでよくもまあこのうのと、この世界で生きていられるかと思うと感心するわ」

「ッ…!!…それは…!!」

「それは何よ？子供が親を親と呼ぶのは生んでくれたからでしょう？だから親子と言うのよ？

赤の他人を親と呼んでいいのなら、人間誰だって親や子供になるじゃない？

そんな無価値な妄想に浸っているアンタを私は許せないつつつてんのよ？」

段々と口調が強まっていくセデイスに対し、フェイトは心のバランスが崩れ始める。

未だに根強く残っている自分の出生の事…そして実の母親の事…それらをセデイスに指摘されたことによって、そのトラウマが思い起こされていた。

「し・か・も・さあ…アンタは自分の母親のような行為は見過ごせないと思ってるみたいだけど…それって大きな勘違いなのよね」

「どういう事…？」

「これだけ言ってもわからない？アンタと私は根本的には同じ使う側の人間…ようはジェイルの奴やパパと変わらないって言うてんのよ」

「!!!!!!」

その言葉にフェイトは大きく目を見開く。同時に心のバランスの不安定さも広がっていく。

そんなフェイトに対し、セデイスは更なる追い討ちをかける。

「そうでしょう？パパは私やビーちゃん、私はビーちゃんとパパ以外の全ての人間…

ジェイルは自分の戦闘機人…そしてアンタは、自分の小隊のガキど

も…」

言いながらセデイスはモニターを操作し、エリオとキャロの写真を映し出す。

「…年端もいかない10歳前後の子供を、生きるか死ぬかの戦場に送り出し

まともな常識感覚も育ってない内に戦闘技術を教え込み…

これが正しいことなのだと…自分を救ってくれた人は、親切な良い人だと思ひ込ませる…

やがてはそれが自分の常識となり…恩人の為に力を振るう事に躊躇いが無くなる…」

そこまで言ってセデイスは、床に唾を吐き捨てる。

対するフェイトは体が小さく震え始めていた。

「本当によく出来た洗脳教育なこと…これは確かに能率いいわねえ…自分の目的の為に子供すら奴隷にしますか…それでいてその本人は自覚が無く

自分は身寄りの無い子供に救いの手を差し伸べているヒーローだと勘違いしてるわけだ…

プツ…アハハハハハ！！本当に傑作だわ！！あまりに滑稽すぎて反吐が出るわ！！」

「黙れツツ！！！！」

ついにはフェイトが怒りを爆発させ、残った魔力を振り絞って魔力弾を発射する。

だが、その程度の攻撃では、セデイスに対してダメージにならない。

「反論できないって事は…肯定と見なすわよく？」

「ツツ…！！」

小馬鹿にするようなセデイスの言葉に、フェイトの心の震えは強まるばかりであった。

自分は確かに、エリオやキャロが戦うことを望んではいなかった。けど、彼らは自分の為に戦いたいと言ってくれて

そして自分もまた、出来る限り2人に対して力になる為に、戦い方を教えてきたのだ。

けど、それは本当に正しかったのだろうか？無理を押し通してでも、2人の思いを否定し

どこか安全な場所で静かに暮らさせたほうが、正しかったのではないか？

これでは……自分のしてきた事は彼女の言うように……母さんと何も変わらない……

そのような迷いが生じていたのだ。

「そんなカッコしないの…自分が間違ってたと気づけただけでも儲けものじゃない」

アンタも結局は、人を自分の為に利用する事に躊躇いが無い、汚い人間だったのよ

ま、実の母親がそうだったんだから、それも必然なのかもね」

「違う……わ、私は……！」

「その癖、生んでもらった母親の道具にはなれなかったのに、自分は他人を道具にする…」

よくもまあ、そんな厚顔無恥で冷酷無比で非常識な事が出来ますよね？

その神経の図太さだけは尊敬するわ？ 彼の全ては嫌いだけど」

「私……私は……！」

「うるせええええええ！！！！！」

うわ言の様に口を震わせるフェイトに対し、突如としてセデイスが蹴りを放つ。

フェイトは拘束されたまま、大きく跳ね飛ばされうつ伏せ床へと倒れこむ。

「ガホツ…ゴホツ…!!」

セデイスの一撃を二度も喰らい、フェイトは先程よりも更に激しく咳き込む。

セデイスは冷ややかな視線でフェイトを見下し、冷たい口調で更に続けていく。

「ねえ…いい加減現実から目を背けるのはやめなさいよ…？」

私はそういう矛盾に満ちたアンタの全てがね…知ったその日から気に入らなかつたのよ…

自分の間違いには目を瞑り…その癖他人は間違っていると指摘する…そんな阿呆についてきたあのガキンチョどもも…本当に不幸だったと言えるわね…」

そう言ってセデイスはハルバートを振り上げる。

「ベルクトも可愛そうにねえ…今頃ビーちゃんと死闘を繰り広げてるってのに…

付き合ってる女がこんな最低最悪のクズなんだからねえ…」

「ッ…ウウ…」

床に倒れたフェイトは体のダメージと、そして何より心に生じた迷いの所為で

まともに動くことが出来なかった。本来なら、自分の大切な人であるベルクトを

馬鹿にされた怒りで、今すぐにでも飛び掛って生きたいくらいなのに先程から生じていた迷いが、フェイトの体の自由を効かなくしていた。

「一つ言っておくわよフェイト…実の親すら愛し切れなかったアンタが…

他人を愛する権利なんて…あっちゃいけなかつたのよ…」

「!!!!!!」

「絶望したような表情向けないでくれる？それが事実なんだから…」フェイトは更に心を抉られ、体の震えが益々大きくなっていく。

セデイスはハルバートを高く振り上げたまま、半ばウンザリしたような表情になっていた。

「子供が初めて接する他人って…要は親でしょ？親は子供を愛し、子供は親に愛を示す…

人間誰しもが最初に親を愛するのよ、そこから他の人に対する愛を知っていく…

それすらも出来なかったアンタがしているのは愛じゃないわ…ただの戯言よ」

（嘘だ…そんな…だって私は…：ベルクトの事を本当に…！！）

まともな思考が出来ない状態にいるフェイトは、ベルクトに対する自分の気持ちすら疑い始めていた。

もしかしたらベルクトにも…エリオやキャロと同じ様に戦いを強要していたのではないか？

自分が愛しているという気持ちは…単に彼の力を使う為の方便に過ぎないのか？

そのような気持ちさえ生まれ始めていたのだ。

「ま、小難しく考えなくていいわよ、どうせもう死ぬんだからね」
フェイトの心をズタズタにした事に満足したセデイスは

そのまま震えるフェイトに向かって、ハルバートを勢いよく振り下ろした。

ガキーン！！

が。その一撃はフェイトには当たらず、直前に割り込んだ何かによって遮られる。

「フェイトさん…！！」

「あゝら？ナイスタイミングで奴隷人形君が来たわけだ？」

セデイスの一撃を、ストラダーを構えたエリオが、苦しげな表情で受け止めていた。

それを目にしたセデイスは、ニンマリと笑みを浮かべる。

「エリオ……！！」

精神の均衡が崩壊寸前だったフェイトは、自分を庇うエリオの姿を見て、現実を引き戻される。

「フェイトさん……迷わないで下さい……！！」

フェイトに対して背を向けたまま、エリオはフェイトに対して自分の言葉を贈る。

「僕もキャラも……自分で自分の道を選んだんです！」

フェイトさんは行き場の無かった僕達に、沢山の優しさや……大切なものを守る幸せを教えてくださいました！」

「奴隷がぴーぴー喚かないでくれる？」

そんなエリオに対し、セデイスはハルバートを握る手に、更に力を込める。

同時にエリオの手にしたストラダーがミシミシと音を立て、エリオが更なる苦痛に表情を歪ませる。

それでもエリオは、フェイトに訴え続ける。

「フェイトさんは何も間違っていない……！不安なら僕やキャラや……それに何より……

ベルクトさんがいます……！！」

「……！！！！」

「フェイトさんが愛を知らないなんて……そんなこと無い！僕やキャラは知っています！」

ベルクトさんの事を話していたフェイトさんの悲しそうな顔を！

そして……ベルクトさんと再会してからのフェイトさんの笑顔のこと……！！

それが全部偽りなんて……そんな筈は無い……！！フェイトさんの愛は本物なんです！」

「喚くなっつってんのよ？」

エリオの言葉に、苛立ちを隠せなくなってきたセデイスはハルバートのカートリッジをロードし、魔力を上昇させていく。

「く……うわああああ……!!」

耐え切れなくなったエリオは、自分も同様にストラーダのカートリッジを連続ロードし

一時的に高まった爆発的な魔力で、セデイスを跳ね飛ばす。

すぐに体制を整えなおしたセデイスは、離れた位置で硬直している。その光景を見て、フェイトは苦しげに声を発する。

「ダメ……エリオ逃げて!! 私……!!」

「逃げません!! こんな状態のフェイトさんをほっぽって逃げられません!!」

そんな事したら……ベルクトさんだって悲しむ!!」

「あ……!!」

エリオの真っ直ぐな言葉に、フェイトは心の落ち着きを取り戻していく。

そんなフェイトに対し、尚もエリオは自分の気持ちを語っていく。

「不安なら僕達がついてます! 困った時は助けに行きます!」

道を間違えたなら、僕達がフェイトさんを叱って、ちゃんと連れ戻します!!」

それはベルクトさんだって同じ筈です!! 今だってフェイトさんを信じて必死で……」

「黙ってろよガキが……」

エリオの言葉の途中で、セデイスが巨大な魔力球、ライジングスフィアを放つ。

高速発射されたそれは、一直線にエリオにぶつかって直撃する。

「エリオ!!」

フェイトが叫ぶ。煙の晴れた先にいたのは、額から血を流し、それでも尚

戦う意志を失っていないエリオの姿であった。

「だから…フェイトさん…迷わないで…怖がらないで…戦ってくだ
さい!!!」

フェイトさんはもう1人じゃない…一緒に戦ってくれるたくさんの
仲間や…

そして何より…互いに愛し合っている人がいます!!」

「はい、さーようーならー」

フェイトを庇うようにして立つエリオに対し、セデイスが更なる追
撃として

今度は自身が急接近し、強烈な鉄拳を叩き込む。

その一撃でエリオは意識を刈り取られ、何も喋れなくなって床へと
沈む。

そんなエリオをセデイスは、何度も何度も踏みつけにして楽しげに
言う。

「ほんつとにかわいそうね〜こんな女に関わったばかりに…
まあ、こいつも結局は死ぬから変わらないっか…無様よね〜
自分が騙されてるとも知らずに…馬鹿みたいに戦ってたゴミ人形は
ね〜」

血の流れるエリオの頭を、げしげしと踏みつけにする。

その表情は、その行為を心底楽しんでる、残忍な笑みを浮かべて
いた。

その瞬間、フェイトの中で何かが弾けた。

「……バルディッシュ・アサルト…オーバードライブ…真・ソニッ
クフォーム…」

フェイトの眩きと同時に、彼女を縛っていたバインドが消滅。

同時にフェイトは黄色い魔力光に包まれ、身に纏うバリアジャケット

より高速戦闘に特化させた、自身の最後の切り札、真・ソニックフォームへと形を変えていく。

「…あーららら？」

エリオを踏みつけるのに夢中になっていたセデイスが、その異変に気づく。

顔を俯かせたまま立ち上がったフェイトは、手にしたライオットブレードを二つに分離、

更なる力を持った真正銘最後の切り札、ライオットザンバーへと変形させた。

「やーれやれ…あれだけ言ってもまだ偽善者を貫きますかテメエは…本当に救えない…女だなああ!!」

セデイスはハルバートを構え、一直線にフェイトへと突っ込んでそれを振るう。

「……え…?」

だが、ここで初めてセデイスの表情が、驚愕したものへと姿を変える。

セデイスの放ったハルバートの一撃は、フェイトのライオットの片方で容易く止められていた。

「あれ…うそ…何で…?」

予想外の出来事に、セデイスは体を硬直させてしまう。

直後、手にしていたハルバートがかたかたと震え始める。

「ごめんね…ありがとうね…エリオ…私が弱いばかりに…こんな苦しい思いをさせて…」

俯くフェイトの目からは涙が流れている。そして、セデイスのハルバートを受け止めている

ライオットを握る手に力を込め、それを振り上げる。

「なっ…ああアアア!!?」

わけのわからぬままセデイスは、ハルバートごと大きく宙を舞って、

壁に叩きつけられる。

「疑うことなんて…無かったんだよね…あなた達への思いや…何より…ベルクトへの…」

エリオの必死の訴えにより、フェイトは見失っていた自分を完全に取り戻していた。

「私は弱いから…迷ったり…悩んだりを…きつとずっと繰り返す…」
ライオットのカートリッジロードを行い、魔力の更なる増幅を行う。

「何が正しくて、何が間違っているかなんて…それに対する絶対の答えなんて…」

きつと…私には一生わからない…そうやってまた…立ち止まってしまいかもしれない…」

二刀へと分離したライオットを両腕で大きく振りかざし、その切っ先を、壁に激突して座り込んでいるセデイスへと向ける。

「だけど…いいんだ…そんな事よりも一つだけわかってる事がある…」

言葉と同時に、決意のこもった表情で、セデイスの方へと視線を向ける。

その瞬間、またしてもセデイスは、今まで感じていなかった感情を生じさせる。

(何……どういうことよ…あいつさっきまで虫の息だったじゃない…それが…何で…)

今まで圧倒していた筈の相手からの思わぬ反撃…それに対する恐怖を覚えていた。

そしてフェイトは恐怖するセデイスを前にして、決意のこもった表情で真っ直ぐに言い放った。

「私の大切な人達をたくさん傷つけたアイツは…アイツだけは…
今ここで…私の手で…確実に倒さないとけないという事だ!!」

第36話（後書き）

BBが楽しく戦っている最中、セデイスは陰湿に攻めまくりでした…
原作のスカリエッティもげんなりしそう…

ファザコンを天元突破して、新興宗教への信仰みたいな語り方です…
しかも狙ったようなタイミングでやってきたエリオまでボコボコに…

セデイスが色々言っている裏では、BBもまた己の事を暴露。

彼にとって戦うのが唯一の楽しみでした…って

どっかで見るような設定の典型ですよ。

でもいいんです。陰湿なセデイスとは反対に

あくまで戦いを楽しむ純粹キャラとして作ったキャラでしたから。

（とはいえ、彼も結構黒い部分があります…）

やりたい放題やった末に、今度はフェイトをプツンさせてしま
いました

ここから立場が逆転し、ずっとフェイトのターンへ移行…

まあ外道には必ず罰があるのが常ですからね…

次のスーパーフェイトタイムをお楽しみに…

と言っても次の話は他のメンバーの現状や
バルドナ操る切り札の「アレ」の登場がメインになりそうですけど…

それではまた

第37話（前書き）

遂にバルドナの切り札が姿を現す…

あと、何の事だと思われるかもしれませんが
バルドナ最初の攻撃のイメージ映像は
ナ○シカの巨○兵のプロ○ンビームな感じです

第37話

スカリエッティのアジト、その跡地。

瓦礫の山と化したその場所の地下深くにて。

「本局の艦隊が到着するまであと数分足らずですか…」

辺り一面が闇に閉ざされたその空間で、一人の男がモニターの前で動いていた。

「加えてはこぶね内部のドライブのチャージももうすぐ…」

このミッドチルダの終焉も近いということですねえ…」

男はモニターを前にして、不敵な笑みを浮かべている。

そしてモニターを消失させ、部屋の隅へと移動していく。

「この場合はB Bとセデイスに任せていても十分でしょうが…」

どうせなら…最後に面白いものを見せてやるとしましょうか…」

そう言って壁に備え付けられていた巨大なレバーを下へと降ろす。

その瞬間、部屋中の照明が一斉に点灯する。

そして一枚の金網を挟んで、男の眼前に巨大なシルエットが露になった。

毒々しい紫色のボディ、先端に突き出た3つの巨大な首

そして、上部には巨大な漆黒の翼を生やした人型の上半身が装着されている。

その人型の胸部には、不自然なくぼみが出来ている。

「ゲッター線というのは素晴らしいエネルギーですねえ…」

管理局が扱う魔力などとは…それこそ比べ物にならないくらいの強力なエネルギー…

故に…それに敵と見なされれば最後…滅びを待つしか無くなるのです…」

男は金網の側にあった鋼鉄の扉を開き、その巨体へと近づいていく。

「それと同質の物を…この私ですら完全には再現出来ないというのですから恐ろしいものです…」

まあ…少なくとも出来損ないが扱っていた時よりは強力でしょうが…」

不敵な笑みを崩さぬまま、巨体の周りを囲むようにして設置された通路を歩いていく。

「バレルも甘いですねえ…私を模したアンドロイドに本気で怒るなど…」

私自身はこの地下で何食わぬ顔をして生きているというのに…ククク…」

そして男は通路の先端、巨体の人型上半身の胸部のくぼみの前へと立つ。

「では最後に…この世界の愚か者達に見せてやりましょう…」

この私…ジル・バルドナの最終兵器…カオス・ドラゴンをツツ！！！！」

男—ジル・バルドナが感情を高ぶらせて叫ぶ。

「……ウウウウアアアアアッ……！！」

それに呼応するかのように、目の前の巨体—カオス・ドラゴンが先端の3つの首と、人型上半身の目に光を宿す。

地の底から搾り出したかのような、おぞましい呻き声が地下空間に広がる。

「アアアアウウウ……！！」

カオス・ドラゴンは何かを求めるようにして、バルドナに向けて手を伸ばす。

次の瞬間、上半身のくぼみから無数の触手が発生し、バルドナを包み込んでいった。

*

「うおりゃあああ!!」

はこぶね艦内でまだ生き残っている防衛システムを破壊しながらスバルはマツハキャリバーを全開で吹かし、なのは達の下へと向かっていく。

その胸中には、ただひたすらに、自分の大切な人を救いたいという思いがこもっていた。

（あの日のなのはさんに憧れて…選んだこの道…）

スバルは幼い頃、なのはに助けてもらったあの日の事を思い返す。燃え盛る炎に囲まれ、逃げ道も無く泣き崩れていた自分の前に突如として助けに現れたあの時のなのはの姿を、今でもスバルは色濃く覚えている。

そして、あの日のなのはのように、自分もなりたいたと誓ったのだ。

（だからなのはさんを助ける為にも…母さん…ギン姉点ちよつとだけ力を貸して…!）

自分の左手に託された、ギンガのデバイスを見つめ、そしてそれを発動させる。

スバルの左手が光に包まれ、白色のリボルバーナックルが装着される。

「はあっ!!」

両腕に装着されたりボルバーナックルで拳を突き合わせる。

すると、左腕のリボルバーナックルがスバルの物と同じ、黒色へと姿を変えた。

そしてスバルは、なのは達がいるブラッドルームへと近づいていた。

「はあああああ!!」

スバルはまず、左腕のギンガのナックルで魔力球を形成し
すぐさま拳を前へと突き出してそれを発射する。

放たれた魔力球は眼前の障壁へと激突し、巨大な穴を開ける。
更にスバルは、右腕の自分のナックルを振り上げ、魔力を集中して
いく

「うおおおおお！！！！」

先程の野魔力球の爆発で発生した爆風の中へとスバルは突っ込んで
いく。

そして、振り上げた右腕を目の前の壁へと真っ直ぐ叩きつけた。

ドゴオオオオオン！！！！

「ううっ！！」

部屋の側面がいきなり破壊され、その衝撃でフェイはよろける。

「な、何だ！？」

破壊されたガジェット？型の残骸のすぐ側で、
バレルもその衝撃を確認し、そちらの方へと目を向ける。

「なのはさん！皆さん！！」

破壊された壁の奥から、スバルが飛び降りてくる。

皆が無事であることを確認したスバルはまず真っ先になのはの下へと

駆け寄っていった。

「ス……バ……ル……」

「なのはさん……!!」

満身創痍で、喋ることすら難しいのが、焦点の定まらない視線でスバルを見つめる。

そんなボロボロになったなのはの前で、スバルは涙を流しながら答え、

そしてなのはの手を、自分の両手で優しく包み込んだ。

「……よく……頑張ったね……」

「ツツ……!!!!」

うつすらと微笑むのはは、自分の教え子の成長に喜んでいた。

目の前にいるスバルは嗚咽を上げながらその場で膝を着いて泣き崩れる。

自分の成長を誉めてもらえた嬉しさや、なのはがこんな状態になる前に

どうしてもっと早く来れなかった事の後悔等、様々な思いが浮かんでいた。

「応急処置は施したんだけど……危険であるのに変わりはないわ

スバルさん、とにかく今はあなたが来てくれて本当に良かった……」

泣き崩れるスバルの前で、フェイが穏やかな表情ながらも、固い口調でこう言う。

「グスッ……はい……とにかく今は脱出を……」

それを聞いてスバルは涙を拭い、立ち上がって真剣な表情でフェイの方に向き直る。

そして、部屋の中にいたみんなと一緒に、自分が通ってきた通路で脱出しようと考えてるが……

「その前に皆さんの治療が先決でしょうね……」

直後、ブラッドルームの入り口が開き、新たな人物が姿を見せる。

「バルクホルツさん!」

現れた人物ーフィードル・バルクホルツの姿を見て、バレルが声を

上げる。

バルクホルツはそれに答える事無く、腰のケースから魔力カードを数枚取り出す。

「…こんなになるまで戦って…本当にあなた達は立派ですよ…私などより遥かに…」

静かな口調でバルクホルツは呟き、両手で治療用の魔力を蓄えたカードを構える。

二枚のカードから光が溢れ、それぞれなのはとユーノを包み込んでいく。

「あなた達の様な若い命を…こんな場所で散らすわけにはいかないでしょう…」

魔力カードの制御に専念しながら、バルクホルツは更にこう続ける。

「お2人の治療は私が何とかします…それまでの間に脱出経路の確保をお願いしたかったのですが…」

そこまで言ってバルクホルツは、スバルの方へと顔を向ける。

「…あなたのおかげでのその手間も省けました、ありがとうございます…」

「い、いえ…そんな…」

突然現れたバルクホルツへの戸惑いを隠せないままであったが、スバルはバルクホルツに対して返礼した。

*

「ごめんなあ：折角助けてもらった上に運んでもらう形になってもうて：」

ゲイナーに抱えられながら、はやては申し訳なさそうに言う。

駆動炉でのフロスト兄弟との戦いで、はやては殆ど魔力を使い切っていたため

まともに飛行するのも難しい状態になっていたのだ。

それならばと、まだ余裕のあったゲイナーがはやてを抱えながら移動をする事になったのだ。

「気にすんなって！はやてには今まで散々助けられてばっかだったんだからな」

その隣をを移動しているガロードが、朗らかな笑みを浮かべて返答する。

「いやガロード、今の君が言うのはちよっと：」

「ああ：やっぱしそう：？」

が、即座にガロードの頭上からレントンのツツコミが入る。

ガロードの方も、最後に放ったフルチャージのツインサテライトキヤノンの影響で

はやてと同様、あるいはそれ以上に魔力を消耗していた。

それで残ったレントンの方が、ガロードを抱えて飛行することにしたのである。

4人は今、長い長いほぶね内の通路をひたすら一直線に突き進んでいた。

「他のみんなは無事だろうか：」

「通信が入らないのは：やっぱり厄介だからね」

心配そうに呟くはやてに対し、ゲイナーが答える。

戦闘終了後、仲間と位置確認をしようとしたのだが

どういうわけか全ての場所に対して、通信が全く繋がらない状態になっていたのだ。

ともかくにも、駆動炉にとどまっていたも仕方ないので他の仲間を探してこうして移動しているというわけである。

「誰でもいいから：無事を確認出来ればいいんだけど…」

「とにかくグチグチ言ってもしょうがねえ、手当たり次第に動いてみるしかねえだろ」

レントンとガロードが、それぞれ真剣な表情を浮かべて会話を交わす。

「はやて!!」

すると、通路の反対側からアコース達が姿を現す。

後ろにはスカリエッティとウーノを抱えたチャールズとレイも一緒だ。

「ロッサ!!」

はやてはアコースの姿を見て、嬉しそうに声を上げる。

「チャールズ! ? い、いつの間に艦の中に…」

「よう、無事で何よりだレントン」

「みんな一緒に良かったわ…」

そのアコースの背後にいたチャールズとレイを見て、レントンが驚きを浮かべる。

チャールズは軽く手を挙げて答え、レイは安堵の表情を浮かべていた。

「が、再会を喜んでいる暇は無さそうなんだがな…」

すると、チャールズがすぐに真剣な表情へと変わってこう呟く。

「そ、そうだ! はやて、ここで時間を潰している暇は無い!」

「ロ、ロツサ？」

チャールズの言葉に答えるかのように、アコースが慌てふためいた様子でまくし立てていく。

その急な変貌に、はやては戸惑いを見せる。

「とにかくどんな手段を使ってもいい！すぐにこの艦から全員を脱出させないと！」

そして一秒でも早く本局艦隊の応援に到着するように指示しないと――

「ロツサ、ちょ……そんなに慌ててどうしたん？」

状況を把握しきれないはやては、つい疑問の声を上げる。

このはこぶねが如何に危険とはいえ、既にその大部分の機能が停止している状態である。

アコースがここまで異常な焦りを見せる理由がはやてにはわからなかった。

そんなはやてに対し、落ち着きの無い口調でアコースが続けていく。

「はこぶねなんかよりもっと危険な物がここにはまだあるんだ！！

もし、さっきスカリエッティから搾り出した情報どおりなら……！」

『その先の説明は私の口からしてあげましょうか？』

アコースが本題に入る直前、突如としてその場の誰でも無い声が響く。

すると、7人の前に巨大なモニターが表示された。

「この声……アンタは……ジル・バルドナか？」

自分の記憶の中の人物と、該当する物を引き出し、はやてはモニターに向かって喋る。

『ええそうですとも八神はやてさん……稀代の天才科学者ジル・バルドナですよ……』

＊

そのモニターははやて達の下だけではなく、他の全員の場所にも映し出されていた。

「この男が：今回の元凶の1人か：」

加勢に來たティアナ達と協力して、ガジェット？型を破壊し終えたリインフォースが

モニターに映るバルドナを見つめて静かに呟く。

『おやおや：セデイスの作った玩具も破壊されましたか：』

流石は初代夜天の書の主人格：紛い物とはいえ素晴らしいものです
：』

「あんなガラクタにやられるほど：あたしらはヤワじゃないってことさ」

不適に笑うバルドナに向かって、険しい表情をしたヴィータがそう吐き捨てる。

「けど：今更こんな時に何を言いに来たんだよ？はこぶねは殆ど壊滅状態だ

直にアンタだって捕まっちまうぞ？」

ヴィータの隣にいたタックもまた、険しい表情でバルドナに向かって言う。

今の状況でここまで余裕たっぷりの態度を見せるバルドナがどうにも気に食わなかった。

『おやおや：何を暢気な事を仰っているのやら：』

「何ですって？」

しかし、対するバルドナは呆れ返ったかのように返答し
その小馬鹿にしたような態度にティアナが表情を歪める。

すると、バルドナが映されているのとは別のモニターが新たに表示
される。

「ベルクト…！？それにアイツは…」

それを見て、マリナが驚いて声を上げる。

モニターに映された2人の男…今正に壮絶な戦いを繰り広げている
ベルクトとBBであった。

そして2人の足下に展開されている円形の装置、それを囲むように
して立つ4本の柱。

「これって…まさか…」

7人の中で、それに一番見覚えのあったマリナが真っ先に声を上げ
る。

そしてその疑問を解消する答えが、バルドナの口から語られた。

『そう…：あれは私が作り出した新たなバルドナドライブ…』

接続先は私ともう一つの…時間軸が9年前の地球…

それら計3つの世界をぶつけ、この世界と私の世界を破壊する…

ちょうど今出来損ないと戦っているBBを…3つ目の鍵とすること
によって…』

「！！？」

皆が一斉に驚きを浮かべる。あまりにも予想だにしていない内容で
あった。

バルドナドライブの本来の仕様用途については、この場にいる全員
が熟知している。

実物を目にしたことの無いヴィータやティアナ達ミッドチルダの人
間も

ベルクトやフェイが残したデータや、なのは達の話で聞いていた。

2つの世界を無理矢理繋げ、星と星とを衝突させて、世界を破滅へ
と導く装置…

それと全く同じものが今、この艦で発動しようとしているのだ。

『そうです：他のゴミ達が役に立たなくなった以上：こんな世界に何の未練もありませんからねえ：

だったら：いっそ全部を無に帰してやろうと思ったまですよ…』

「ふざけないで！！」

尚も余裕の笑みを崩さないバルドナに対し、ティアナが怒りを露にする。

「そんな無茶苦茶な事やろうとするなんて何考えてんのよアンタは！！」

それでどれだけの人間が死ぬことになるのかわかってるのっ！！」

『知ったことではありませんねえ：私にとっては私以外の人間など全て道具に過ぎません：

その道具にも満たないゴミをいくら壊そうが、どうでもよいことなのです…』

「コイツ……！！」

しれっと答えるバルドナに対し、ティアナは怒りが一気に臨界点に達していた。

人を人とも思わない、あまりにもその傲慢な態度は、既に理解の域を超えていた。

＊

タック達と同じように、別の場所にいるはやて達も、バルドナの語る計画を聞いている。

「そうさ…それこそが彼の研究…私ですら理解し得なかった最高のショーだよ…」

と、その段になってチャールズに抱えられていたスカリエッティが目を覚ましていた。

『情けないですねえ…仮にも私の同士でありながら何ですかそのザマは…』

そんなスカリエッティの様子を見て、呆れたようにバルドナが言う。しかしスカリエッティは笑ったままだ。バルドナの言葉には何の不快感も示していない。

「仕方ないさ…所詮私は管理局最高評議会によって生み出された模造品…

アンリミテッド・デザイアと名づけられた人形に過ぎなかったのだからね…

生まれつきの純粋な天才である…君やアルバートとは違ったというわけさ…」

『でしょうね…もっとも、アルバートも今となってはあのザマなんですから…』

そう言っただけでバルドナは、それこそ道端のゴミでも見るような視線で別のモニターに映る、タックの側の壁で座り込んで意識の無いライネンを見下していた。

『しかし…内密に進めていた私の計画を看破するくらいの知識はあったと…』

「ああ…発見した時は正直驚いたよ…きっかけを与えたのは私といえ…

君がそこまでの器になるとは思っても見なかったからね…」

こんな状況だというのに、バルドナとスカリエッティは楽しげに会話をしている。

ふと、それを聞いていたはやてが新たな疑問を口にした。

「看破って…スカリエッティ、アンタはアイツの計画知ってたんか!?!」

「ああ知ってたさ：私やアルバートに内緒ではこぶねを改良し：バルドナドライブを取り付けたり、新たな怪物を生んでいたこともね：」

はやての言葉に、何でもない風にスカリエッティは答えた。

すると、それを聞いたアコースが激昂し、スカリエッティの胸倉を掴んだ。

「それを知っていながら：何故お前はあの男を止めなかった！？

あんな研究を野放しにしていたら、それこそお前だって無事じゃすまないだろう！！」

「知ったところで、彼を止めることなど出来なかったさ：私と彼とは器が違う：

ただ単に無限に流れ出るだけの欲望如きじゃ：

彼の渴望と怨恨によって生み出される狂気の欲望：

マッドネス・デザイアを止めることなど：叶わなかったのだよ！！」

突如としてスカリエッティは更に歪んだ笑みを浮かべて口調を強める。

「さあ！！私が果てる前に見せてくれたまえよジルツツ！！

この無限の欲望をも超えた！！世界で最高の知能を持った研究者の力をツツ！！」

『いいでしょうジェイル……もはや何の価値も無くなったあなたにも見せてあげます……』

バルドナの口調が段々と強まっていき、様々な音程の混じった不気味な声へと変わっていく。

それと同時に、バルドナの背後で何かが怪しく蠢いていた。

「ジル・バルドナ……この期に及んで何を……！！」

その不気味な光景を見てはやてが声を漏らす。

「そ、そうだ……はやてとにかく急いで艦隊を召集させるんだ！！一秒でも早く……！！」

「ロツサ！？」

急にまた声を張り上げたアコースに対し、はやては驚いて反応する。

「バルドナドライブもそうだけど、あの男はもう一つ切り札を……！」
と、アコースがそこまで言ったその時、はこぶねの船体が大きく揺れ始めた。

＊

いや、揺れていたのははこぶねだけではなかった。

「せ、船体が大きく揺れています……！」

「原因は何だ！？急いで確認しろ……！」

戦艦アースラでもまた、異様な船体の揺れを確認していた。

それは、船というよりも、世界全体が振動しているかのようなであった。

「……！！……ああ……あああ……！！……！」

そして、その異変の原因が何であるか、真っ先に感知したものがいた。

「ティファ……！」

「どうしたのティファ……！」

ティファが大きく震えながら、頭を抱えてしゃがみこんだのを見て側にいたサラとエウレカが慌てて声をかける。

「来ます……憎悪が……とても大きくて激しい憎悪が……！」

ガタガタと体を揺らしながら、震える声でティファは叫ぶ。

「こ、これは…」

ティファの叫びに続いて、アースラのオペレーターも「ソレ」を確認していた。

スカリエッティのアジトの跡地、その場所から発せられる強大な力を…

「エネルギー反応…何これ…ランクSS…いや、SSS…それ以上です…！」

察知した「ソレ」の力の大きさがあつという間に既存の測定値を超えていき、

その様子を見たシャーリーが信じられないといった感じに声を上げた。

「高エネルギー体、物凄い勢いでこちらへと向かっています…！！」別のオペレーターが、「ソレ」の動きについて更なる報告を行った。

＊

そして「ソレ」はすぐに皆の前へと姿を現した。

「な、何よアレ…」

「うっわ…あのオッサンこんなもんまで作ってたの？」

はこぶねの周辺に残ったガジェットと戦っていたアネモネと途中から合流したシンシアが、「ソレ」の姿を見上げて呟く。

「これは…何なのだ一体……!!」

「何だ…あれは…!!」

別の場所で「ソレ」を見上げるシグナムやサコミズも、呆然とした表情をしていた。

(マ、マイヨの旦那…!!)

「バカな…何故あの竜がここにいるのだ…!」

マイヨとユニゾンしているアギトは、彼の体を通して「ソレ」を確認していた。

マイヨはアギトの呟きに答える事無く、嘗て相対した最後の敵と「ソレ」を重ねていた。

「ジル・バルドナ…まさかこんなものまで作れる力があつたのか…」
シャアはソレを見て、他の者とは違い冷静な口調で呟いていた。

「感心してる場合じゃないシャア…あれは…」

シャアの声を聞いて、隣にいたアムロは目を見開き、「ソレ」を見つめながら答えていた。

マイヨと同様に自分の記憶の中には「ソレ」ととてもよく似た物があつたからだ

「アムロさん!あれはまさか…!!」

そしてサコミズの側にいたエイサップが、アムロの方に近寄って声をかける。

「ウウウウウルアアアア!!!!」

「ソレ」の先端についた3つの竜頭が、一斉に咆哮を上げる。

鼓膜が破れそうな程のおぞましい咆哮が、その場にいた者達の耳へと響き渡る。

その咆哮に耳を塞ぎながら、アムロが「ソレ」の正体を言った。

「真・ドラゴンが…何故この世界に…!!」

そう叫ぶアムロの遙か上空で真・ドラゴン…

いや、バルドナの研究によって大幅な改造を施された悪夢の塊…混沌の竜一カオス・ドラゴンが蠢いていた。

そして、カオス・ドラゴンの上部に付いた人型の上半身、

その胸部には、下半身がドラゴンと一体化したジル・バルドナの上半身が伸びていた。

「そうです…あの出来損ないが最後に使った最強の兵器…

それを…私なりに再現し、そして改良したのがこの最高傑作…カオス・ドラゴンなのです」

ドラゴンの人間部分から上半身だけ乗り出したバルドナは

眼下に映る魔導師達を見下ろしながら、両手を広げて感極まったように語っていく。

「もつとも…本物のゲッター線からすれば赤子も同然な代物なのでしょうが…

それでも…あなた達のようなゴミを掃除するには十分すぎる力ですよ…!!」

口調をさらに強めたバルドナの言葉と同時に、先端についた3頭の竜が

その口内に一斉に光を収束させていく。

「ほら…早速見せてやるとしましょう…私の最高傑作の力を…!」

バルドナの言葉と同時に、3頭の竜が一斉に溜まった光を吐き出していく。

「危ない…!!」

アムロが叫ぶと同時に、いやその前にその場にいた者達が一斉に離れていく。

瞬間、竜の放った閃光が地上の一部を横一線になぎ払っていく。

ポオオオオオン…!!!!

一瞬の間を置いた後の大爆発。それと同時に立ち上る爆炎。耳を劈くような爆音。

それは正に地獄と言うのすら可愛く思えてくる、壮絶な光景であった。

「こ、これは……何て力なんだ……」

「あんな化け物が……そんな……」

その場にいた一般局員達が、放心状態で眩く。

あまりにも現実からかけ離れた光景を、彼らの頭では理解出来なかったのだ。

「ククク……絶望しましたか……?」

その様子を楽しげな笑みを浮かべて、バルドナは見つめている。

「どの道……BBがもうすぐドライブのチャージを終えて扉を開きます……」

ですのでこの世界でコイツを使う必要は本来無かったんですがねえ……私達の計画をここまで破壊してくれた皆さんに対する敬意というものです……」

（そうか……それはいらないお節介だったな、ジル・バルドナ）

「!……むう……?」

と、その時バルドナの脳内に突如、念話での声が響く。

バルドナはドラゴンの人間部分から伸びた上半身を動かして辺りを見回す。

すると、自分に向かつて一直線の離れた位置に、3つの人影が浮かんでいた。

「……本局の提督如きが、何を生意気なことを……」

笑みを崩さぬままバルドナは、相対する人物ークロノ・ハラオウンに向かつてこう言う。

「こんなもんまで持ち出してくるとは……おっどろきだよ」

「ええ……正直馬鹿にならなかつたけど……何とか間に合ったみたいね……」

クロノの両サイドにいるロッテとアリアが、それぞれに感想を述べる。

それと同時に、クロノに対して通信が繋がった。

『ハラオウン提督、本局艦隊、全てミッドチルダに到着しました！
すぐにでもその化け物の退治を開始出来ます』

「ああ…」

簡単に返事を返した後、クロノはバルドナの方へと向き直ってこう言った。

「ここまでだジル・バルドナ、大人しくその兵器を廃棄して投降するんだ

さもないと、本局の応援艦隊全てを使って、お前とその兵器を破壊する準備がこちらにはある」

クロノが全てを告げる。如何に敵の兵器が強力であろうとそれは単独戦力である。

今、すぐ側にいる管理局の本局艦隊全てで一斉に攻撃すれば、それで全てが終わる。

また、万一取り逃がしたとしても、無傷で逃亡させることはまず無いし

今のバルドナには自分で動かせる手駒はもうBBとセデイス以外に残ってはいない。

あのような巨大な兵器を隠し通せる訳も無く、すぐに本局の応援が彼を追い詰めるだろう。

はこぶね内部にあるバルドナドライブも、応援艦隊ではこぶねごと破壊すればいい。

つまり応援が間に合った時点で、こちらの勝利は確定したとクロノは考えていたのだ。

「クククク……成程よくわかりました…」

すると、少しの間を置いてバルドナは、笑みを浮かべたままクロノの言葉に返答する。

「…なにがおかしい？」

クロノの脳裏に悪寒が生まれる、こちらが追い詰めている筈なのに目の前にいるバルドナは全く余裕の表情を崩していない。その事に一抹の不安を抱かせていた。

「あなた達管理局のゴミどもが……」

バルドナと一体化したドラゴンの人型部分が大きく両腕を広げる。それと同時に辺りが一瞬にして暗闇に包まれ、黒い霧のようなものが広がっていった。

「通信が……!？」

直後、クロノと繋がっていた応援艦隊との通信が途絶えてしまう。

「その程度の小細工で私を追い詰めたなどと……」

構わずバルドナは言葉を紡いでいく。ドラゴンの右腕に漆黒の光が現れ

その中から両端の先端に刃のついた、巨大なトマホークが姿を現す。

「非常に見当違いな愚考をしているのがよくわかりました……!!」

言葉の終わりと同時に、ドラゴンが手にしたトマホークを勢いよく振り下ろす。

「!……クロスヶええええ!!」

それを見たロッテとアリアが反射的にクロノの前へと立ち、防壁を展開する。

直後、振り下ろされたトマホークによって発生した暴風が、3人を吹き飛ばした。

「うわああああ!!!!」

成す術も無くクロノ達は、その暴風によって遠くへと飛ばされていた。

*

「クロノ!!!」

モニター越しに吹き飛ばされるクロノを見て、はやてが悲痛な声を上げる。

「どうなってるんだ…それにあの黒い霧は…」

一瞬にして辺りを包んだ黒い霧を見ながらゲイナーが呟く。

『このミッドチルダ全域を結界で覆わせて頂きました。本局の艦隊も当然来れないでしょうねえ…』

「そんな…!!!」

ゲイナーの疑問に答えるようにして放たれたバルドナの言葉を聴いて、アコースは項垂れる。

目の前の怪物を倒す為の最後の切り札を、一瞬にして奪われてしまったのだ。

「なんともまあ…これは流石にピンチだな…」

「ええ…悪いけど割に合わないわね…」

アコースの側でチャールズとレイも、険しい表情を浮かべて現状を見つめていた。

つまりはこの場にいる自分達で、目の前にいるあの悪魔を止める必要があるのだ。

『クククク…いい気味です……それこそが私の見たかったものだ…私の研究に全ての人類が跪き…私という天才が…唯一絶対の存在として世界の全てを支配する…』

やがては私の全てを受け継いだ子供達が私の立場を継承し…永遠の支配が続いていく…

それこそが私の望んだ…私の存在を全世界に知らしめる最高の方法なのです…!!!』

今まで以上に感情を高ぶらせ、バルドナは周りの全てに聞こえるように語っていく。

『クハハハハ！！！どうです？あなた方も私に許しを請い、私の知識を求めてみますか！？』

所詮、世界はより優秀な力と知識を持つ者による支配によって生み出されるツツ：！！！！

私こそがこの世に生ける者全ての頂点に立つ絶対者：万物の王なのです！！

結局のところあなた方弱者は：私という強者に支配されるだけなのです！！！！』

絶頂に浸りながらバルドナは、自身の力を誇示するかの如くに高らかに宣言している。

『そんなことない：！！！！』

するとその時、バルドナの演説に割り込むように別の声が響き渡る。それと同時にこぶねの外壁を突き破りながら、一筋の桃色の閃光が現れ

バルドナが駆るカオス・ドラゴンに直撃した。

「ぐう：まだ生きていましたか：」

閃光が放たれた方向へと顔を向け、バルドナは苦々しげな表情を浮かべる。

その視線の先に立つのは、強い意志のこもった表情で

ユーノのコスモスターと融合し、新たな姿に生まれ変わったレイジングハートを構えるのはがいた。

「確かに私達は…あなたから見れば、ちっぽけで弱い存在なのかもしれない…」

バルクホルツの治療を受け、完全に復活したなのはの瞳には相対する強大な敵に対し、少しも臆した様子を窺わせない、真っ直ぐな気持ちが見て取れる。

「だけど…私達はお互いにわかり合うことで…互いの気持ちを伝え合うことで…

互いに協力して、手を取り合っていくことで…辛い中でも生きていくことが出来る!!」

そのなのはの背後で、スバルもまた、彼女と同じ強い意志のこもった瞳で

バルドナの言葉に対して真っ向から反論する。

「バルドナ博士…いいえ、ジル・バルドナ…あなたは誰も信じず…誰とも関わらず…

周りの人間全てが自分の道具であるとしか考えていない…」

「だから…最期に見せてやるよ…お前の言う弱者の底力ってやつを!!」

スバルに続くようにして、フェイとバレルもまた、自分の決意を語っていく。

それを聞いてバルドナは表情を更に歪め、静かな口調で言い捨てる。

「何を生意気な…無駄な努力と言うのを知らないのですかねえ…

あなた方ゴミどもいくら束になったところで…」

「私達は絶対にあきらめない!! もうこれ以上世界を滅ぼさせない為に!!」

そして…大切な人達を傷つけさせない為に!!」

バルドナの言葉に、なのはは絶対に屈しないという姿勢を見せる。

すると、それに応えるかのように、はこぶね更に別の場所で爆発が起きる。

「そうや…私達があきらめたらアカン…」

爆煙の晴れた先に、シュベルトクロイツを構えたはやてが立っている。

「あんな奴の勝手な理屈で、この世界を滅ぼさせるのはゴメンだからな！」

「そうさ…俺達がここであきらめるわけにはいかない…」

「ああ…サラやみんなや…もっと多くの人達の為にもね！」

ガロード、レントン、ゲイナーの3人もそれぞれの決意を語る。

その側で、チャールズ、レイ、そしてアコースも戦闘態勢を取っていた。

「アイツをぶっ潰さねーと、本当に世界が終わっちまうからな!!」
また別の場所では、圧倒的不利な状況にも関わらず

ヴィータがアイゼンを真っ直ぐに構え、ニカッと笑いながら言う。

「私達は時空管理局機動六課！最後の最後まで全力で戦い抜く！」
真剣な表情を浮かべ、両手でクロスミラージュを構えながらティアナが言う。

一緒にいるタック、マリナ、リインフォースもそれぞれの武器を手に身構えていた。

「例え敵わぬとしても…貴様のような怪物を…

見て見ぬフリして逃げるようなベルカの騎士ではない!!」

（そのとおりですっ!!）

「奇遇だな剣の騎士よ…私もそれには同意権だな!!」

（おうよっマイヨの旦那! あたしらさえいれば、あんなトカゲ野郎なんてどうってことないぜ!!）

カオス・ドラゴンの側面、それぞれの剣を手にしたシグナムとマイヨが

その切っ先を目の前の敵へと向けて堂々と言い放つ。

「真のラストバトル…スタートってやつだね…!」

「悪いけどシンシア…遊び感覚では済まなそうよ…!」

その反対側からは、シンシアとアネモネが姿を現す。

「聖戦士として…そしてこの世界に生きる1人の人間として…

貴様のような奴を生かしておくわけにはいかない!!」

「その通りだ鈴木君! 我らが黄泉への引導を貴様に渡してやる!!」

「はやてちゃんや皆の為にも…絶対に負けられない…!」

「盾の守護獣として…最後まで仲間を守り抜くだけだ!」

「君には世話になったがね…だがこんな過激な作戦なら見過ごせないな…

まあ…昔の私も似たようなものだったが…」

エイサップが、サコミズが、シャマルが、ザフィーラが、そしてシヤアが

その他にも生き残った大勢の魔導師達が、全員でバルドナを取り囲んでいた。

「わかるかジル・バルドナ：こうやって人間は互いに協力し合うことが出来る：」

その人々の意思の力は：お前のような醜いエゴの塊にはわるかまい！！」

集結した魔導師たちの先頭に立つようにして、アムロがバルドナに向かって言い放つ。

その光景を見たバルドナは少しも引く事無く、真っ向から言い返した。

「：いいでしょう、そんなにお望みなら直に教えて差し上げます：あなた達ゴミどもがいくら束になろうと：この天才の私は決して倒せぬということをツツ！！」

「ヴウウウルウウアアアアツツ！！！！」

バルドナの言葉と同時に、彼と一体化したカオス・ドラゴンも再び咆哮を上げる。

それを皮切りにして、周りの魔導師達も一斉に動き始めた。

＊

「じゃあ：僕達も行くぞ！！」

「はいっ！！」

その様子を見ていたバレルの言葉にスバルが応える。

バレルとフェイは同時に飛び上がり、それに続いてスバルがウイングロードを展開して後に続いていった。

更にそれを追うようにしてなのはが飛び立とうとしたが

「なのはっ!!」

その背後で彼女を呼び止める声があった。

なのはは咄嗟に背後へと振り向き、声の主であるユーノの方へと歩み寄っていく。

バルクホルツの治療を受けて、彼もまた意識を回復していた。

すると、なのははニコリと笑みを浮かべて彼の体にギュウっと抱きついた。

「ちょっ…なの…は」

「…大丈夫、私は絶対負けないよ。だって、ユーノ君が私の為に作ってくれた

大切な力と思いが…今の私には宿ってるから…」

ユーノは若干赤らんだ顔をしながら抱擁を受け、なのはの思いを聞いていたが

やがて落ち着きのある表情へと変わり、自分も思いを語っていく。

「こんな時まで…最後の最後まで結局君に頼りきりになるのが本当は悔しい…」

だけど、僕は六課に来てから今日まで、自分のやれることは全てやってきた…」

だから最後に1つだけ言わせて欲しい…」

そう言ってユーノは自分から抱擁を解き、腰につけていた魔力カードのケースを手に取り

真剣な眼差しでなのはを見つめながらそれを手渡し、更に続けてこう言う。

「…必ず、無事に生きて帰ってきてくれ、なのは…」

「勿論だよ、ユーノ君…」

ユーノの願いに迷う事無くなのはは即答し、彼の頭の後ろに手を回す。

2人は互いの顔を急速に接近させ口付けをする。

しばらくした後に唇を離し、互いに笑顔のまま見つめあう。

そしてなのははクルリと後ろへと振り向き、新たなデバイスの名前

を呼ぶ。

「行くよ！レイジングハート・コスモエクセリオン！！」

自身のインテリジェントデバイス、レイジングハート・エクセリオン
それと合体したユーノのホルダーデバイス、コスモスター

ユーノの献身的な研究によってホルダーデバイスの魔力カードの付
加効果を得た

彼の思いが重ねられた最強のデバイスを手にして

なのはは怪物が蠢く暗い空へと飛び立っていった…

第37話（後書き）

というわけで、いよいよ最終決戦です…

あと2、3話戦いを挟んでエピソードに1、2話ですかね…

1年以上ダラダラと続いていますますが漸く終わりが見えてきました…

でもカオスだのコスモエクセリオンだの…

中二病全開でちょっとこっぴड़かしい…

強大な敵を前に仲間達が集結するって流れも

王道というかベタというか…

何人が足りない感じもしますが

それは次回以降で見せ場あるから…です。

フェイト覚醒の犠牲になったエリオはもう無理臭いですが（泣）

ともあれ対戦カードは出揃いました。

ベルクトVSBB、フェイトVSセデイス

そして管理局チームVSバルドナ+カオス・ドラゴン

次回以降の決着編にもまた時間がかかるかもしれませんが
楽しみに待っていていたら幸いです…

それではまた

第38話（前書き）

約5ヵ月ぶりの投稿…ペースが遅くなる一方です…

終盤に向けて少し駆け足気味かもしれせん

第38話

「四枚の翼か……」

BBの姿を見て、ベルクトは冷静な口調で呟く。

左右一対になってBBの背中に一枚ずつ生えていた白と黒の翼。その上部に更に同じ物が現出したのだ。

合計四枚の巨大な翼を携えたその姿は見る者を圧巻する。

「だが……見てくれただけ派手ならいいという問題ではあるまい……」

しかし、その程度のことではベルクトは少しも臆することなく手に持ったライフルをBBに向けて構え直す。

「くしししし……そりゃ、変わったのが見た目だけなわけないさ」

対するBBは口に手を当てながら実に楽しそうな笑みを浮かべる。

自身の切り札の解禁にまで至ったこの戦いを心底楽しんでる様子である。

「本当に兄貴には驚かされるよ…俺がこの力を実戦で使うのは初めてなんだからさ…」

「くだらん能書きはいらん」

ベルクトはBBの会話を遮り、デバイスをノーマルモードへと変える。

そして足元に魔法陣を出現させ、長身砲の先端に魔力を集中させていく。

「どの道もう時間はない：これで終わりにさせてもらう」

「……いいぜ、この最高の戦いの幕引きに相応しい、最強の攻撃を見せてやるよ！」

ベルクトの言葉を聞いて、BBは高らかにそう言い放ち、

足元に漆黒のテンプレートを展開させる。

そして右手の人差し指を立て、そこに力を集中していく。

「コオオオオオオオ……！！」

BBの表情が強張り、その行為に全神経を集中しているのがベルク

トにも見て取れた。

そしてしばらくの後、B Bの指の先端に豆粒程の大きさの白い光球が出現する。

「！！……これは……！」

瞬間、その力の大きさにベルクトは驚嘆する。

その光球には、大きさとは不釣り合いな莫大なエネルギーが込められているのを感じたからだ。

下手をすれば、E 2の魔力を上乗せした自分の砲撃すらも上回るのではないかと思う程に。

「さあ……これが俺の全力全開の最終兵器……食らいやがれ……！」
笑顔を崩さぬままB Bは言い放ち、それを発射した。

「ッ……！グレイブキャノン、マキシマム……！」

ベルクトもそれを見て、収束された魔力を解き放ち、
B Bの放った光球へ向けて砲撃を放つ。

「グウッ……！！！！！」

ベルクトが放った砲撃魔法による光の奔流は、B Bの放った光球へと激突。

互いにぶつかり合った二つの力は両者動くことなく拮抗しあっていたが

（押されているだ……！！？）

砲撃を放つのに全力を込めながらも、ベルクトは焦りを見せ始める。
E 2によって莫大な魔力が上乗せされたグレイブキャノンの一撃が
少しずつとはいえ競り負けているのだ。このまま行けば確実に自分
は押し負ける。

「くししし……切り札ってのは文字通り最終兵器なんだぜ？
それが簡単に破れると思うなよ？……なあ兄貴……！！！！！」

両腕を前に翳し、BBは狂喜の笑みを浮かべて光球に更に力を込める。

それによってベルクトは更なる重圧を受け、押しつぶされそうになる。

「ヌ…グッ…!!」

必死に踏ん張り、歯を食いしばってベルクトはそれに耐える。

自分とフェイトを引き離し、全てを狂わしてきた張本人

そんな相手に二度も負けるわけにはいかなかった。

「グウ…オオオオオオオオ!!!」

咆哮を挙げると同時に、ベルクトは体内のE2の出力を更に上昇させていく。

暴走する魔力の奔流が、体中を駆け巡っていく。

同時にグレイブキャノンの威力が高まり、BBの光球を逆に押し返し始める。

「オイオイ…マジかよ…」

額に汗を浮かべながらBBが呟いたのと同時に

グレイブキャノンによる砲撃が、光球を飲み込んで完全に消失させた。

「アッ…カハッ…!!」

砲撃の終わった後、ベルクトはその場で膝を突き、口から血を吐いてしまう。

バルクホルツの言ったE2の発動限界時間を過ぎたしまったばかりか、

砲撃の最中に更に出力を高めた結果、身体に相当のダメージを与え

ていた。

今のベルクトは完全に満身創痍であった。

（だが…まだ終わりではない…）

心の中でそう呟き、痛む体に鞭打ってベルクトは立ちあがる。

敵の全力を打ち破ったとはいえ、敵そのものはまだ倒していないのだ。

「は…はあ…はあ…フツ…まさかあれを打ち破るとはな…」

ベルクトの目の前に立つBBも、呼吸がかなり荒くなっていた。

切り札というだけあって、彼も相応に力を消費していたのだ。

「けど…これで終わりじゃねえ…真骨頂はこっからだぜ…」

「な…に？」

荒い呼吸で言うBBに対し、息も絶え絶えな様子でベルクトは答える。

すると、BBは自身の周辺を黒い結界で覆い始める。

「見ろよ…あれを…」

BBがそう言って上を見上げる、それにつられてベルクトも上を見る。

すると、部屋の上部に先程BBが放ったのと同じ位の大きさの黒い光球が浮かんでいた。

「なん…だ…あれは……ツツツ!!!!!!」

言いかけている途中で、ベルクトの視界は大きく回転していく。

それと同時に体の制御が効かなくなり、大きく吹き飛ばされていく。

「!?!?!?………」

その膨大な力の奔流にベルクトは叫び声すら挙げることができず。

全身を大きく揺さぶられながら回転していく。

まるで洗濯機の中にでも放り込まれたかのごとく、体が吹き飛ばされやがてそれがおさまり、ベルクトは地面へ仰向けに叩きつけられた。

（な…にが……なにが…おきた…!!）

瀕死の状態から更なるダメージを受け、ベルクトは完全に虫の息になる。

体の激痛と朦朧とする視界の中で、BBが自分の顔を覗き込んでいるのが見えた。

「：俺が放ったさっきの砲撃な：あれはただの砲撃じゃあないんだよ」

にんまりと笑みを浮かべながら、楽しげにBBは語っていく。

「俺のIS－空間支配の最終奥義：それによって空間そのものを切り離して飛ばしたのさ」

「空間：を：だと：！」

指一本動かせない状態ながら、ベルクトは掠れた声を発する。

それを聞いてBBは更なる説明を続ける。

「そうさ、あんな豆粒程度の大きさでも、ギチギチに圧縮された一つの空間に押し込める力は

想像を絶する物となる：今のでも山一つくらいの質量だったんだぜ？

それを押し返しちまう兄貴の魔力にも脱帽モンだけどな」

そうやってBBは、視線を上に向けながらさらに続ける。

「だが本当に恐ろしいのはその後だ：故意に捻じ曲げられた空間ってのは

その振れを正そうと周りの空間を振って大きく揺れ動く

本来ならそこまで大きな被害はでねえんだけど」

BBは言いながら部屋を覆っている、戦闘前に自分が張った黒い結界を見つめる。

「今、この部屋は俺の結界で隔離されている。故に振れた空間も

この結界内という限定された空間で振りを戻すことになる：

その時の修正力が兄貴を飲み込んで、そんな風にしたってわけよ」

一通りの解説を終えて、BBは満足げな表情を浮かべる。

対してベルクトは、今にも飛びそうな意識を必死な支えながら、BBを睨んでいた。

「ホント：この技は俺の溜まった力の大半を消費して放つ切り札だ：

それを最初の段階とはいえ破ったんだ……すげえなんてもんじゃないさ、兄貴は」

そう言いながらベルクトの前で片膝を付き、右手を大きく掲げる。

「楽しかった……本当に楽しかったよ兄貴……ここまで派手に遊べてさ……けど……その様子じゃ兄貴も限界だろうし……そろそろ親父の命令も果たさなきゃいけない……」

だから……残念だけどこれで終わりだ」

どこか暗い感情を込めながらBBは言い放ち、ベルクトの心臓に向けて一直線に手刀を振り下ろした。

（俺は……死ぬのか……？）

その瞬間、スローモーションのような世界でベルクトは思考を働かせていた。

目の前にはBBの手刀が迫っている。このまま何もしなければ、自分は心臓を貫かれて息絶えるだろう。

（俺は……何を……している……）

体を動かそうにも、E2の副作用と戦闘のダメージで体中がボロボロであり、魔力も底を付いている。

よしんば動けたとしても、こんな状態でBBとどう戦えというのだろうか？

敵も消耗しているとはいえ、自分よりは全然余裕があった。

（なにもしないまま……このまま死ぬと……？）

じゃあこのまま黙って目の前に迫る死を受け入れろというのだろうか？

自分の運命を狂わせた敵に一矢報いることすら出来ないまま死ぬと

いうのか？

生きて戻ると…この戦いを無事に終わらせると、フェイトとの約束も果たせぬままに…？

(……たまるか…！)

誰がそんな結末を望むというのだ、このまま惨めに終わってなるものか。

フェイトも…自分の最愛のパートナーも必死で戦っているのに、自分があきらめてどうする？

魔力は尽き掛け体はボロボロ、E2の活動限界時間すら超えてしまっている。

なら取るべき道は一つだけだ。

「そんな結末にしてたまるかあああああ！！！！」

最後の気力を振り絞ってベルクトは叫ぶ、そして同時に体内のE2を再び起動させた。

「……へえ…！」

手刀を振り下ろす直前だったBBはその予想外の光景に驚き、そして笑みを浮かべた。

*

戦艦はこぶね総司令室

激しい戦闘で至る部分が破壊されたその部屋で
両腕にライオットザンバーを携えたフェイトは、強い意思の籠った
瞳で

目の前の敵、セデイスを睨みつけていた。

(…何を…怯える必要があるのよ…!)

対するセデイスも倒れた体を起こし、ハルバートを構え直してフェイトを睨みつける。

(あのカスはわざわざ薄い装甲を更に薄くして紙ペラ同然にしたんじゃない…)

一撃当てればぶち殺せる…!何を怯えて…)

「お前なんかでは無理だ」

「ッ!？」

心内で算段を立ててる途中で、それを見透かすかのようにフェイトが言葉を発する。

それによってセデイスは言いようのないプレッシャーに駆られ始める。

「私は…私は絶対にお前を許さない…お前だけは私がこの手で…!」
そう言ってフェイトはザンバーを前方へと向ける。

彼女の言葉通り、その瞳には目の前の敵を確実に潰すという明確な意思が見て取れた。

その瞳と言葉から発せられる重圧が、追い込まれていたセデイスの心を更に圧迫するが

「調子に…乗るなよゴミがああああ!!!!!!」

それを跳ね除けるかのようにセデイスは凄まじい勢いでフェイトに突っ込む。

フェイトは少しも引く事無く、真っ向からセデイスを迎撃する。

「はああああ!!」

「んなあ……!!?」

両者が激突、その瞬間にフェイトは両腕を大きく上へと振り上げる。同時にセデイスの体がハルバートごと上空へと持ち上がり吹き飛ばされる。

セデイスは天井にぶつかる直前で踏み止まるが、その心には更なる焦りが生じていた。

（どうしてよ…何で私が力負けするのよ…!!…死に損ないの一撃程度で…!!）

今までスピードもパワーも確実にこちらが圧倒していた筈なのだ。なのに、フェイトが真・ソニックフォームを発動しただけでこの有様だ。

飛躍的に上昇したフェイトのスピード、それを上乘せした攻撃がセデイスの能力すら上回り始めているということなのだろう。

（ありえない…ありえない…!!）

しかし、それを素直に認められるほど、セデイスは冷静な性格はしていない。

最愛の父と、唯一の上位存在であるBB、それ以外の人間に優位に立たれるというのは

自分の経験上、決してあってはならないことなのだ。

「ありえないんだよおお!!!!」

目の前の現実を振り払うべく、獣の如くセデイスは敵に突っ込む。

「……………!!」

対するフェイトは、非常に冷め切った感情で、冷静に敵の攻撃を対処する。

今はただ、自分達を苦しめた現況の一人である目の前の敵を、倒すことのみを意識が向けられていた。

「ふっ…!!」

「!!?」

一直線に突っ込んでくるセデイスを、フェイトは両腕のザンバーで軽く振り払う。

セデイスは体の制御をたやすく失い、横へと吹き飛ばされる。

「てやあああ!!」

すかさずフェイトは体制の崩れたセデイスに追撃を行う。

セデイスはそれをハルバートを構えて防御する。が、

「!?!?…そ…んな…?」

なんとフェイトの一撃を受けたハルバートにヒビが入り始めていた。その光景を目の当たりにしたセデイスは、更に冷静さを失っていく。

「アア…アアアアアアッ…!!」

聞くもおぞましい叫びを挙げ、フェイトのザンバーを振り払う。

「パパの…パパのデバイスをよくもおおお!!!!」

一心不乱にハルバートを何度も振るい、フェイトに攻撃を行うがフェイトはその一つ一つの攻撃を軽く切り払っていた。

それでも尚、セデイスはハルバートを振るい続ける。

両目からは涙が溢れ始めており、心の中は一つの感情で埋め尽くされていた。

自分がオリジナルに負ける…自分はオリジナル以下の存在になる…
自分がゴミと呼んだ敵に負ける…自分がゴミ以下になる…

ゴミになる…親の道具じゃなくなる…親にゴミとして捨てられる…
親の娘じゃなくなる…

娘じゃなくなる娘じゃなくなる娘じゃなくなる娘じゃなくなる娘じ
ゃなくなる

娘じゃなくなる娘じゃなくなる娘じゃなくなる娘じゃなくなる娘じ

やなくなる

娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる

娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる

娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる娘じやなくなる

捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる

捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる

捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる

捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる

捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる捨てられる

「アアアア!!! なんでよ!!! なんでやられないのよ!!! どうして抵抗すんのよ!!!」

「私はあんたを殺さなきゃ!!! そうしなきゃ私はああああ!!!」
一心不乱に放つ斬撃全てを、フェイトは全て受け止めていた。

「はあっ!!!」

「ゴフッ!!!」

そして単調なセデイスの攻撃の隙を付き、懐に潜り込んでフェイトはザンバーを振るう。

まともにそれを食らったセデイスは体をよろめかせ、怯んでしまう。その隙を付いてフェイトは上空へと飛び上がり、両手のザンバーを合体させ

一本の巨大な剣へと変化させた。

「これで終わりだああ!!!!!!」

両手で構えたその剣を大きく振り上げ、凄まじい急降下と共に振り下ろす。

その一撃がセデイスへとまともにヒットし、司令室の壁へと彼女を叩きつけた。

「……………」

フェイトは冷静な表情を崩す事無く、壁へと叩きつけられたセデイスの方へと近寄っていく。

「あ…………ぐあ…………」

セデイスは額から血が流れており、両腕を震わせている。

虫の息になっても尚抵抗しようとしていたが、最早体が言う事を聞かないようであった。

「ど…………うし…………て…………よ…………」

自分を見下ろすフェイトを前にして、掠れた声でセデイスは呟く。

「わた…………し…………は…………パ…………パ…………に…………捨…………て…………ら…………れ…………：…………た…………く…………な…………い…………：…………だ…………け…………な…………：…………の…………に…………：…………
パ…………パ…………の…………：…………役…………に…………立…………ち…………たい…………：…………だ…………け…………な…………：…………の…………に…………：…………なん…………：…………で…………邪…………魔…………する…………の…………：…………
ね…………え…………ど…………う…………し…………て…………：…………この…………ま…………ま…………じゃ…………：…………わ…………た…………し…………捨…………て…………ら…………れる…………：…………ゴ…………ミ…………に…………さ…………：…………れる…………
…………」

両目から涙をこぼしながら、必死の思いでセデイスは語っていく。

「…………お…………ね…………：…………が…………：…………い…………：…………夢…………な…………：…………ら…………：…………さ…………：…………め…………：…………」

そこまで言ってセデイスは震わせていた腕をだらりと下げて事切れる。

「………………………」

その光景を見ていたフェイトは、例え憎むべき敵だったとはいえいまの彼女の姿に思うところがあった。

そして両腕に構えていたザンバーを持つ手の力が緩み…

「甘えんだよカスが！！！！！」

ザンツ！！

…突如としてセデイスが起き上がってハルバートを振るうより
フェイトがザンバーを構え直して迎撃する方が僅かに早かった。
セデイスは今度こそ完全にその体を停止させ、全く動かなくなった。

「あなたはやっぱり…最後まで…」
冷静な表情のままフェイトは、背後で倒れているセデイスを見つめてそう呟いた。

そして真・ソニックフォームを解除し、倒れているエリオとセデイスを抱えて総司令室を後にする。

「行かなきゃ…約束を果たすためにも…」

＊

「はっはーん…こりやおったまげたなあ…」

目の前に立つ男の姿を見て、冷や汗を垂らしながらBBは言う。

目の前の…ベルクトは今まで以上に膨大な魔力をその身に纏って立っていた。

E2の限界時間が当に過ぎているのは自分でもわかるというのに。

それを承知した上で、彼は再び立ちあがったのだ。

これには流石のBB予想外であった。

「流石にそれは無理しすぎな気がするぜ？俺が手を下すまでもなく死んじまうよ兄貴？」

敵とは言えその無謀な行動にBBは本心も混じった疑問を投げかける。

「死なん」

が、ベルクトは固い表情を浮かべたまま、BBの言葉を真っ向から切り捨てた。

「…その根拠はどこから来るのさ？いくらなんでも理解に苦しむ」

BBはその態度に多少呆れ気味に返答し、再び質問する。

対するベルクトは再び長身砲を構え

「愛する人間が俺の無事を待っている」

足元に魔法陣を展開し、魔力を集中させ、BBの姿をまっすぐ捉えながら言い放った。

「それ以上の理由など無い」

そう、自分はフェイトと誓った。目の前の敵を倒し、必ず生きて帰ると。

ならばその約束を果たすまでは死ぬわけにはいかない。どんな手段を使っても。

今のベルクトの体を支えているのは、その感情ただ一つであった。

先程以上の魔力が集まっていき、長身砲の先端に魔力光が発生する。その段階でベルクトを中心に暴風が巻き起こり、空間がカタカタと揺れ始める。

（愛ねえ…俺には少しもわかんねえや…けど…）

生まれた時より、父親の道具として命付けられていたBBにとっては今のベルクトが戦う理由というのを理解できない、しかし

「…兄貴がまだ力を発揮するってんなら…まだ遊べるってえわけだ
！！」

目の前の獲物はまだあきらめていない、それどころか更なる力を自分にうぶつけようとしている。

それこそが自分が唯一自分の意思で見つけた楽しみ

強敵と楽しく遊び、真っ向から叩き潰すということに他ならない。

「いいぜ…だったら俺も死ぬ気の一撃ってのをお見舞いしてやらあ
！！」

BBは上空へと飛び上がり、両腕を再び前方へと突き出す。

すると、先程よりも更に大きいサッカーボール程の大きさの光球…切り取られた空間が出現した。

「どうだい兄貴ィ！こいつはさっきの一撃の比じゃないぜえ！？」

その莫大な力を持てる力全てを使って制御しながらBBは叫ぶ。

「…オーバーブースト」

それを見てベルクトが何の躊躇いもなく、E2の出力を更に上げて魔力を高めていく。

全身が悲鳴を上げて、今にも破裂しそうな激痛が付きまとうが

それでもベルクトは少しもE2の魔力を止めるつもりは無かった。

「食らえ兄貴イイイイイ！！！」

「！！………」

そして両者の全力の一撃が再び激突する。

「クッ………！！！」

が、先程以上の魔力を込めたにも関わらず、ベルクトの砲撃はBBの光球に押されていた。

ジリジリとBBの光球がベルクトの眼前へと迫ってくる。

「どうしたよ兄貴！！威勢がいいのは最初だけかあ！！」

楽しませてくれよ…もっと俺を楽しませてくれよおお！！」

吹き荒れ力の奔流に身を任せながら、BBは狂人のように叫ぶ。

突き出す両腕に力を込め、光球を更に前へと押しやる。

「グウウウ………！！！」

必死に耐えるベルクトの眼前には、BBの操作する光球が迫る。

限界時間を更に超えたE2の使用に体中が甚大なダメージを受け。

高まりつづけた魔力の暴走で体が内側が粉々になりそうである。

それでも尚、目の前の敵を倒す力が足りない…ならば躊躇わない。

「ブースト…ツツツ！！！」

ベルクトは尚も魔力を高めようと、体内のE2に意識を込めたが、その瞬間、長身砲を手にした右腕の至る所から血が噴出し始めた。恐らくは魔力の暴走によって、自分の肉体が耐えられなくなっているのだ。

(このままいけば恐らくは…)

ただでさえ限界だというのに、これ以上暴走させたらどうなるか…、結果は見えている。

しかし、それでもベルクトはあきらめるわけにはいかなかった。あきらめたらそれで最後、目の前の男に惨めに殺されるだけだ。ならば

「腕の一本など…構うものか!!」

ベルクトはE2の出力上昇と同時に、体内の魔力全てを右腕と長身砲へと集中させていく。

右腕の出血はさらに強まっていき、赤い液体が滝のように流れていく。

それでも尚、ベルクトは長身砲へ魔力を込めるのをやめない。

「ウオオオオオオオ!!!!!!」

最後の気力を振り絞ってベルクトは咆哮する。

それと同時に長身砲から放たれる閃光は一段と強まり、そして

「……ハッ…」

BBが自嘲気味に笑うのと同時に、ベルクトの砲撃が光球を飲み込んでいく。

そしてそのままBB自身もその砲撃の中へと消えていった。

「……………」

砲撃の終わりと共に、ベルクトは両腕ダラリと下げる。

同時に、マスタールーム全体を覆っていた黒い結界も解除された。

「…参ったねこりゃ…兄貴の砲撃が…歪みを相殺する程とはな…」

その側ではうつ伏せに倒れて顔だけあげたBBが、僅かな力を振り

絞って喋っていた。

今のベルクトの一撃が自分の空間切り取りの一撃すら大きく上回り本来発生する筈の修復による歪みすら、砲撃の力で相殺して元に戻してしまったのだ。

そして砲撃に飲み込まれたBBは体内に支障をきたし、自動回復すら出来ない状態になっていた。

「けど…楽しかった…最後に…いいもん…見せて…もらった…しな…」

しかし敗れたBBの表情には、少しも悲壮感は漂っていなかった。それどころか、自分すら上回る巨大な力を見て満足しているといった感じだった。

「親父には悪いけど…やっぱり俺はこっちの方が…楽しいらしいしな…」

息も絶え絶えなBBは、最後の力を振り絞って右手の親指を立てる。

「最高の遊びだった…お前の…勝ちだ…兄貴…」

そこまで言ってBBは意識を手放し、床に顔を突っ伏した。

（俺は……）

朦朧とする意識の中、ベルクトは立っていた。

今の彼の頭ではまともにも思考を働かせることが出来なかった。

全身に蓄積されたダメージで意識が朦朧とし、今にも崩れ落ちそうだった。

それでも尚、たった一つ、自分が求めていた結果を導き出していた。

（俺は…あの男に勝った…!!）

ズクッ…！

瞬間、体の右側から鈍い音が響き、何かが軽くなったような感触を覚える。

だが今の自分にはどうでもいい、自分はB Bに勝利した、後はフェイトの無事を確認するだけ。

そのことだけを頭に浮かべたまま、ベルクトの体は前にゆっくりと倒れていき…

パサッ…

「ベルクト…」

地面へと沈む直前、彼の最愛の人物の手によって抱きとめられた。

「勝ったんだね…やっとな…全部終わったんだね…」

フェイトは全身傷だらけになり、体の一部を代償にしてまで全ての元凶の一人を倒した

ベルクトの体をその両腕できつく抱きしめ、彼の体に顔を埋めて大粒の涙を流していた…

第38話（後書き）

というわけで中の方はこれで決着

ベルクトの体に何が起きたかは：察して下さい。

セデイスはまあ最後の最後まで外道だったということ。

BB、セデイスの両名が敗れ、残るはバルドナの切り札のみ：

こちらの決着は更なる超展開とカオスになることを御了承下さい：

とにかく夏の暇な間に仕上げられるよう頑張ります：

それではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1249j/>

ACE+リリカルなのはpart 3 the final ～3つの欲望と3人目の鍵～

2011年8月12日15時39分発行